

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘報告第211集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第39集

Amabiki Kitsunezaki Site vol.Ⅱ

天引狐崎遺跡Ⅱ

Kanra, Kanra, Gunma

群馬県甘楽郡甘楽町

A 本文編

1 9 9 6

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日 本 道 路 公 団

Gunma Archaeological Research Foundation

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘報告第211集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第39集

Amabiki Kitsunezaki Site vol.Ⅱ
天引狐崎遺跡Ⅱ

Kanra, Kanra, Gunma
群馬県甘楽郡甘楽町

A 本文編

1 9 9 6

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日 本 道 路 公 団

Gunma Archaeological Research Foundation

序

関越自動車道の藤岡ジャンクションから分かれた上信越自動車道は、鐺川がつくる鐺の谷を西に走り、長野県佐久市へと向かいます。平成5年3月には藤岡インターから佐久インターが開通し、地域の発展に大きく貢献しています。

この上信越自動車道の建設工事にかかわり、数多くの埋蔵文化財が発掘調査されましたが、地域の歴史を解明する上で大きな成果を得ることができました。その一つである甘楽郡甘楽町の鐺川右岸段丘上に所在する天引狐崎遺跡では、旧石器時代から近世にわたる複合遺跡として多くの遺構・遺物を発見しました。その中で、旧石器時代については、平成4年から整理事業を進め、平成6年3月に天引狐崎遺跡Ⅰ（旧石器時代編）として刊行いたしました。

本書は天引狐崎遺跡Ⅰに続いて、縄文時代以降の遺構・遺物について報告するものですが、縄文時代の陥し穴、弥生時代の集落跡、方形周溝墓・古墳、中世の道路遺構、近世の地震跡などのめずらしい遺構や弥生時代の銅釧・鉄鏃などの遺物が多数発見され、貴重な資料として高く評価されています。

ここに、本遺跡の発掘調査報告書が刊行の運びとなりましたが、発掘調査からその刊行に至るまで、日本道路公団東京第二建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、甘楽町教育委員会をはじめとする関係諸機関、並びに発掘調査・整理事業にかかわられた多くの皆様のご協力とご支援に厚くお礼を申し上げます。そして、本書が地域の歴史を解明する上で、多くの方々に広く活用されますことを願い序といたします。

平成8年12月25日

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

例 言

- 1 本書は、天引狐崎遺跡(群馬県甘楽郡甘楽町大字天引所在)の上信越自動車道建設に伴う発掘調査報告書の内、旧石器時代部分を除いた調査成果の報告書である。
- 2 本遺跡の発掘調査は、当事業団が平成2(1990)年3月1日より同3(1991)年3月31日まで行った。旧石器時代の調査成果については、『天引狐崎遺跡I』として平成6(1994)年に刊行済みである。
- 3 発掘調査は、次の体制で行った。

調査担当 坂井 隆・原 雅信・山口良寛・木村 収

事務担当 関越道上越線調査事務所

所長 高橋一夫 総括次長 大澤友治 次長 徳江 紀 調査第二課長 鬼形芳夫
庶務 笠原秀樹・町田康子 運転 神戸市四郎・松井留男

発掘作業員

浅香春造・新井種次・新井ミツ・安藤 博・飯塚君子・飯塚敬太郎・飯塚静江・飯塚リキ・
飯間 操・井田昌作・井野口和美・今井ゆり子・今井クニ・今井光治・岩井光子・上原きみ子・
大河原智明・岡田茂子・岡野乙二・荻原けさみ・落合トシ・加藤富子・金田敏一・桐生喜代子・
久保順子・黒沢 治・高間まき・小林イチ・小林君江・小林たか・斉藤きん子・斉藤幸子・
斉藤丈信・斉藤はつ江・佐藤よし子・佐藤サキ・佐藤トキ・佐藤ふじ江・茂原たつ子・設楽好雄・
清水きよ子・清水道雄・下山弥生・神宮永次郎・神宮政江・神宮百代・須賀いる子・曾我 功・
曾我みつ子・高橋愛子・高橋カン・高橋千代子・竹内久子・田中米一・田村梅之助・田村カメ・
田村ふみ・富岡さだ・長井政紀・中條好子・中野セツ・中野初次郎・中野利一・野口利子・
橋本メ雄・原田 寛・松井みき子・三宅良哉・宮下 勇・宮下浜子・矢島衣根・矢島君代・
安河内恵子・柳沢久美子・矢野 清・山崎米子・山田タケ・山田正好・吉田新一郎・渡辺武江・
渡部みつ江・綿貫章洋

- 4 整理作業は、次の体制で1995年4月1日～97年3月31日(平成7・8年度)に行った。

事務担当 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団事務局

事務局長 原田恒弘 調査研究部担当部長 神保侑史(7年度)・赤山容造(8年度)
調査研究部担当課長 岸田治男(7年度)・平野進一(8年度)

整理担当 坂井 隆

整理作業員 新井加寿江・飯野幸子・串渕すみ江・佐藤信子・須田はつ江・南雲繁子・丸橋富美子・
吉原清乃

保存処理 関 邦一 遺物撮影 佐藤元彦

- 5 本書の多くは、署名した当事業団内の専門研究員と整理編集担当の坂井(第I章1以外の無署名部分)が執筆した。またヤナ状遺構と植生景観の推定復元図は新井加寿江が描いた。なお設楽博巳氏(国立歴史民俗博物館)より、弥生時代前期土器について執筆頂くと同時に中期土器についてご指導を賜った。後期土器については、当事業団の大木紳一郎の助言によるところが大きい。弥生時代銅釧片についての分析・考察は平尾良光先生(東京国立文化財研究所)にお願いした。
- 6 本遺跡の調査・整理にあたって、執筆頂いた以外にご指導ご協力頂いた次の方々へ感謝したい(敬称略)。
小安和順 白石太一郎

凡 例

1 整理報告の基本方針

調査にあたって、鎚川流域一帯では初めて本格的な低湿地の調査を行い、木器と共に大量の植物サンプルを取得した。その資料を使つての弥生時代を中心とする景観復元を、本報告の中心とした。その他については、近隣で内容がやや似た中高瀬観音山遺跡の整理報告に準拠した。

2 本報告書の構成

A本文編(本書)・B写真編(別分冊)・C資料編(別分冊)の3部よりなる。

3 遺構について

- ア 掲載対象 : 検出した遺構全てを掲載した。
- イ 遺構番号 : 種別に関わらず通し番号を付した。調査時に遺構として認識しなかったものも、必要に応じて連番を続け、逆に内容の乏しいものは削除した。
- ウ 報告の焦点 : 可能な限り立地条件を現すことを優先した。本文編の図だけではなく、原則として本文に従つて掲載した写真編の遺構景観写真を併用されることが望まれる。
- エ グリッド : 調査時には国土座標に基づく5×5mの小グリッドを用いたが、呼称が煩雑なため25×25mの大グリッドに統合した。大グリッドは各全体図に記してある。
- オ 掲載順序 : 台地部と低地部に分け、立地に基づいた大グリッドごとに掲載した。時代・遺構番号による検索は、巻末の遺構索引(p.278)を利用されたい。
- カ 実測方法 : 各遺構の平面図(遺物出土状態含む)とエレベーション図そして全体図は、調査時に(株)シン技術コンサルに委託し空中写真測量で実測した。遺憾ながら、整理時にこの委託図に少なくない問題点があることが判明した。極力誤りは修正したが、資料不足のため一部遺物の出土レベルには絶対的な数値が確認できない部分が残った。
- キ 図表現 : 平面図の一点破線は焼土範囲を示す。

4 遺物について

- ア 掲載対象 : 取り上げた遺物の中で、遺構出土のものは特徴のあるもの全て、遺構外の出土のものは石器を中心に報告した。
- イ 遺物番号 : 4桁の通番を付け、第1桁を次のように分けた。
0 : 土器・陶磁器 2 : 石斧類(大型石器) 3 : 石鏃類(小型石器)
4 : 金属器 5 : 木器類生材 7 : 炭化有機物 8 : ガラス器
- ウ 報告の焦点 : 遺構と出土した遺物の関係、特に遺構自体の時代と石器の時代認識を重要な課題とした。だが上記実測ミスにより遺憾ながら出土レベルが確認できない遺物が残った。
- エ 出土状態認識 : 出土位置層位より上層(二次埋没以後)・下層(初期崩落埋没以前)に大別した。遺構の時代認定は、下層遺物の組み合わせより判断した。図・写真の遺物番号の前には遺構番号と層位を付けた。
- オ 実測目的 : 土器類は使用痕表現を最優先した。ただし廃棄後の焼成痕は記さない(番号に下線)。
- カ 石斧類名称 : 石斧類の分類名称は麻生敏隆によるが、磨り石については()内に編者の観点を記した。

5 その他

- 略 称 : 群埋文 : (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- ア 石材認定 : 飯島静男氏(群馬地質研究会)
- イ トレース : 石器類 (株)アルカ 土器類・遺構図 技研測量設計(株)
- ウ コンピュータグラフィック : (株)四門

抄 録

1 遺構の概要

本遺跡は甘楽郡甘楽町大字天引字 狐崎と西谷に所在する。鏑川右岸に注ぐ支流天引川と三途川の形成する狭い沖積地に突出する台地先端部上と三途川河谷低地に立地する。

発掘調査は、平成2(1990)年3月1日より3(1991)年3月31日まで行った。現在は、上信越自動車道の甘楽パーキングエリア東側部分とその東に接する高速道本線となった。

本遺跡調査成果の中で旧石器時代については、『天引狐崎遺跡Ⅰ』として平成6(1994)年に刊行してある。

2 遺構数量

種別	時代	主な種類	数量	特記事項
生産 災害	近世近代	溝	13	近世中期以降の畠地開発跡。近世後期の地震による大規模な地滑り跡が台地部西裾に残る。
		地震跡	1	
交通	中世	道路	1	13世紀頃を上限とする切り通し直線路。小幡氏との関係。
居住	古代	土坑	1	10世紀頃の屋外炉。
墳墓 居住	古墳	方形周溝墓	4	前期は竪穴住居と方形周溝墓(10~15m級)が並ぶ。その墓域横穴式石室円墳 意識を残しながら、後期に2基の古墳が築かれる。1基は埴輪があり、1基は多角形状。
		横穴式石室円墳	2	
		竪穴住居	1	
居住 墳墓 生産	弥生	竪穴住居	34	台地上は後期中葉の竪穴集落。銅釧や鉄鎌5本出土。すでに前期後葉から北部九州のものを含む土器片があり、中期中葉まで続く。集落廃絶後は、墳墓地になる。低地部は、ヤナ状施設の 上流から木製ヤスが出土し、漁労の痕跡が明瞭。流木多く、照葉樹・落葉広葉樹・常緑針葉樹が混在。
		土坑	13	
		壺棺墓	1	
		円形周溝墓	2	
ヤナ状施設	1			
生産	縄文	土坑	2	陥穴状。前期~後期の土器片と石器散る。

3 まとめ

1 古代以降 13世紀後半頃には存在していた道路は、切り通し状になされた造成で、古墳築造以上の土量を動かしている。中世に甘楽郡一帯で勢威を誇った小幡氏によってなされた可能性が高い。台地部の畠地開墾が近世中期に始まり、その痕跡がいくつか残っていた。天明以後に大規模な地震に見舞われ、西斜面末端では大きな地山崩壊が起こった。居住関係では、古代の焼土土坑が見られるのみである。

2 古墳時代 埋葬関係では、4基の前期方形周溝墓と2基の後期円墳がある。両者には重複がなく、後期まで方形周溝墓の存在は意識されていた。1基の古墳は、埴輪列を回していたが、別の1基は埴輪がなく多角形墳的な平面形を示す葺石構造が見られた。居住痕跡は、僅かに前期の竪穴が1軒見られただけである。

3 弥生時代 竪穴住居集落は、後期中葉に少しまとまって存在した(調査範囲内での同時存在、5~10軒程度)。韓半島産の原料を加工した銅釧片及び5本の鉄鎌は、関東での金属器文化の先進地を物語っている。石器は、石包丁・敲き石・打製石鎌・石剣などが竪穴より出土。竪穴集落の出現以前にも、北部九州のものを含む前期後葉~中期中葉までの土器片分布がある。甘楽回廊を東進する前期・中期の弥生文化の動きの中で、重要な役割を果たしていた。後期後葉の埋葬遺構として、壺棺墓と円形周溝墓が見られる。生産関係では、内水面漁業の痕跡が低地部で見られた。ヤナ状遺構とその上流で出土した木製ヤスである。川魚捕獲活動についての証拠は、弥生後期とすれば関東内陸では希有の例となる。低地部の流木資料からは、アカガシ亜属を中心とする照葉樹とカエデなどの落葉広葉樹そしてモミなどの常緑針葉樹の混在林が復元できた。

4 縄文時代 前期から後期までの土器片が出土しており、特に低地部で比較的良好な中期加曽利E4期の深鉢が見られた。同期の居住が近くに存在した可能性がある。陥穴状の土坑2基が、台地部西斜面上位で見られた。低地部では後期旧石器時代の植生を示すものとして針葉樹トウヒの存在を確認した。

目次

A 本文編

序 例言凡例 抄録 目次

一 発掘調査

I 序章

- 1 調査に至る経過 平野進一 P.9
 - 2 立地 P.10
 - 3 調査 P.18

II 検出遺構と遺物

- 1 台地部の遺構と遺物 P.25
 - A 東斜面 P.25
 - B 台地上 P.44
 - C 西斜面 P.104
 - D グリッド出土遺物 P.134
- 2 低地部の遺構と遺物 P.138
 - ヤナ状遺構 P.140
 - 低地部出土遺物 P.145
 - A区 P.145
 - B区 P.156
 - C1区 P.160
 - C2区 P.163
 - D区 P.166
 - EF区 P.169
 - H区 P.170

二 調査成果

III 遺物の特徴

- 1 縄文土器 原 雅信 P.173
- 2 石器・石製品 麻生敏隆 P.176
 - 3 弥生中後期土器 P.182
 - A 後期 P.182
 - B 中期 P.184
 - 4 弥生時代金属器 P.186
 - 5 埴輪 P.187
 - 6 木製ヤスと木杭 P.189
 - 7 陶磁器 P.191

IV 遺構の特徴

- 1 弥生時代の集落変遷 P.194
- 2 弥生から古墳の墓制 P.196
- 3 ヤナ状構造物 P.198
- 4 中世の道路遺構 P.200
- 5 黒曜石類と遺物埋没課程 P.202

V 分析成果

- 1 黒曜石分析 鈴木正男・戸村健児 P.204
- 2 群馬県から出土した弥生時代青銅器の自然科学的研究 平尾良光・榎本淳子 P.209
- 3 天引狐崎遺跡出土材の樹種同定 藤根 久 P.225
- 4 天引狐崎より出土した大型植物化石出土 吉川 純子 P.233

VI 特論

- 1 弥生前期土器 設楽博巳 P.256
- 2 方形周溝墓 友廣哲也 P.266
- 3 遺跡立地と景観復元 P.268

VII 調査成果まとめ

- 1 古代以降 P.272
- 2 古墳時代 P.272
- 3 弥生時代 P.272
- 4 縄文時代以前 P.274

三 資料

VIII 索引

- 遺構索引・遺物索引 P.278
summary 報告書抄録 P.287

B 写真編

- 遺跡の立地・重要遺構と遺物(原色) PL.1
景観・環境・作業見学風景・関連遺跡(単色) PL.9
台地地区遺構と遺物(単色) PL.19
低地地区遺構と遺物(単色) PL.108

C 資料編

- 目次・利用法 P.1
遺構一覧 P.3
土器類一覧 P.10
石斧類一覧 P.31
石鏃類一覧 P.36
木器・参考樹種一覧 P.42
金属器・ガラス器・炭化有機物一覧 P.52

一 発掘調査

第I章 序章

1 調査に至る経過

関越自動車道上越線（上信越自動車道）は首都圏と上信越地方を結ぶ高速自動車国道である。路線は東京都練馬～群馬県藤岡市まで関越自動車道新潟線と併用し、群馬西部の藤岡J Cから藤岡市・吉井町・甘楽町・富岡市・妙義町・松井田町・下仁田町を経て長野県佐久市に至り、長野県内を通過して新潟県上越市までの約280kmに及ぶ。平成5年3月に藤岡インターから佐久インター間約69kmが開通している。

昭和47年、関越自動車道上越線（群馬県藤岡市～長野県佐久市間）の基本計画が策定され、同54年に建設大臣から日本道路公団へ施行命令を行われている。昭和56年、藤岡市・吉井町・甘楽町・富岡市・下仁田町・松井田町（東部）の路線が発表され、同57年に松井田町・下仁田町（西部）・長野県佐久市までの路線が発表された。この上越線建設事業にかかわり多くの遺跡が発掘調査されたが、調査に至る経過を要約すると次のとおりである。

(1) 発掘調査に至る経過

昭和49年度

群馬県教育委員会（以下県教委）は県企画部幹線交通対策課に対して、上越線建設事業にかかわる文化財保護のため、文化財保護法の遵守、指定文化財をさける等、文化財に関する事項は文化財保護課と協議するものとした。

昭和55年度

県教委文化財保護課は路線及びその周辺の埋蔵文化財包蔵地の調査を実施した。その結果は同年3月藤岡市～松井田町間、同年11月に松井田町～下仁田町間の包蔵地としてまとめ、群馬県（企画部交通対策課）から「関越自動車道上越線関連公共事業調査報告書」として報告した。

昭和59年度

建設事業の具体化に伴い、日本道路公団から埋蔵文化財の取り扱いについて依頼を受けた県教委文化財保護課は路線にかかわる包蔵地の詳細な分布調査を行った。

昭和60年度

県教委文化財保護課は分布調査の結果に基づき、包蔵地を濃い分布地、淡い分布地、試掘調査を必要とする地域に区分し、発掘調査想定面積を約100万㎡、55遺跡とする回答を日本道路公団に行った。また、調査の基本方針を次のように策定した。

①発掘調査は昭和61～66年の6年間とする。後に昭和65年度（平成2年）の5年間に変更した。

②発掘調査の中核機関となる財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）が藤岡市～富岡市の約76万㎡を担当し、他の22万㎡は関係市町村で調査会を組織し対応するものとする。

③埋文事業団は上越線調査事務所を開設し、整理事業も合わせて行うものとする。

なお、調査の実施にあたり、日本道路公団と県教委は年度毎に委託契約を締結する。県教育委員会はそれを受けて埋文事業団、関係市町村の遺跡調査会に対して再委託契約を締結するものとした。

(2) 発掘調査の実施と旧石器時代編の整理

天引狐崎遺跡の発掘調査は事業名原東遺跡として、平成2年3月1日から平成3年3月31日までの13ヶ月間に渡って実施した。その中で旧石器時代の調査は縄文時代以降の調査が終了した後の平成3年2～3月の2ヶ月間で調査を行った。その整理は平成4～6年度にかけて実施し、平成6年3月に天引狐崎遺跡Ⅰ（旧石器時代編）として刊行した。

2 立地

(1) 地理的環境 【PL.9~13】

A 本州中部山地の要衝——甘楽回廊

本遺跡北の利根川支流^{かぶら}鍋川は、水源の上信国境^{あらふね}荒船山(海拔1422m)から約50キロ東流して、関東平野に入ってから、他の大きな支流と共に利根川本流に合流している。

鍋川の流域は、北の^{うすい}碓氷川との間に^{みよかげ}奇峰妙義山(海拔1104m)から続く比高100m弱の^{いわのや}岩野谷丘陵が連なり、南は^{かんな}神流川との間に^{あかぐな}赤久縄山(海拔1522m)と^{みかほ}西御荷鉾山(海拔1286m)をピークとする急峻な山脈が走り、その裾には河岸段丘が発達している。両側の山地に挟まれた現在水田となっている平地は南北の幅が1~3キロ程度と狭いが、鍋川の流れる平地が形成される富岡市^{なんじや}南蛇井付近から東は大きな蛇行がないため、東西方向は眺望が良く開放的な景観を示している。そのため、鍋川流域(古代名は^{かんら}甘楽)全体は、東西走向の回廊地形として認識できる。

荒船山は頂上が長く平坦で、航空母艦のような特異な形状をしているため、頂上北側の内山峠への断崖を含めて、背後の活火山^{あさま}浅間山(海拔2542m)と共に、広く関東平野北部全体から識別できる。碓氷峠などその他のいくつかの関東山地の峠を越えると、^{ちくま}千曲川上流の長野県^{さく}佐久地方に達する。千曲川は下流では信濃川と呼ばれて新潟で日本海に注いでおり、荒船山周辺は本州の分水嶺にあたるが、前後には通行がそれほど難しくなく峠が多い。

また佐久地方から南西には^{たてしな}蓼科山塊が広がるが、いくつかの峠を経て遠州灘に流れる天竜川源流の諏訪湖に達することは容易である。甘楽回廊は中部山地へ深く入り込んだ関東平野の最西端であると同時に、本州中部山地の末端としても見る事ができる。

B 段丘面の内懐——「サギ山」

甘楽回廊の中で富岡市街地南部の高瀬丘陵東半より東では、右岸(南側)に2段の段丘が発達しているが、この段丘面は南の赤久縄・御荷鉾山系から北流する小河川により分けられている。本遺跡は、そのような河川^{さんず}天引川と^{さんず}三途川の両川が、上位段丘面(南北2~3km)を開析してできた低地の合流点に位置している。

この地域では、南側の山は赤久縄・御荷鉾山系の前衛である熊倉山(896m)山系が屹立し、天引川はそこを源流としている。さらにその前面北側には、大きく開析を受けて独立峰状に連なる牛伏山(490m)山系が、段丘面の直接背後の山として並んでいる。上位段丘自体も南側ほど起伏が大きくなるが、三途川の源流はそのようなところにある。

本遺跡地は、三途川西の^{にや}仁井屋段丘と天引川東の^{じんぼ}神保段丘に挟まれている。両川の形成する谷によって挟まれた段丘面の先端が、谷の合流地まで舌状に伸びている。この北北東・南南西方向に走る段丘面先端は南を除いた方向から眺めると独立の小丘のように見え、通称「サギ山」(低地との比高20m)と呼ばれている。また、「サギ山」の西は、三途川上流の谷(幅約200m弱)で、源流までは1kmほどの距離しかない。

「サギ山」上から北を眺めると、両川の形成した低地が合流しているが、東西両側の台地がそれぞれ扇形状をしているため低地は三角形に狭まっており、700mほど離れた鍋川本流低地との合流部分は幅500mほどしかなく、視野はやや遮られた感じがある。

その「サギ山」先端付近と三途川の谷が、今回の調査範囲である。

C 気象状況

南西の赤久縄山系の支峰^{いなふくみ}稲含山は、夏季の激烈な雷の発生地として知られており、本遺跡地もその初期段階の通過地点にあたる。地形的な条件より、冬季の激烈な西北西方向季節風からは少し遮られている。

(2) 歴史的環境

本遺跡地をとりまく歴史的に重要な要素は、次の三点に集約できる。

A 伝鎌倉街道と小幡氏

近世に甘楽回廊には、^{しもにた}下仁田道と通称する中山道の脇往還が走っていた。中世以前においては、この甘楽回廊ルートが北の碓氷川ルートより主体的な役割を担っていた。本遺跡の北側も含めた上位段丘の裾を鎌倉街道の名が残る古道が走り、その周辺には多くの中世遺跡が展開している。

最も直接的な資料は、この道の橋桁として長く転用されていた13世紀中葉の紀年銘を持つ甘楽町小川の大日碑（長3.5m 西北西2km）である。残念ながら、発掘調査により路面が検出された例は、この地域ではまだないが、周辺に残存する石造物はかなり多い。

また別城一郭を構成した仁井屋城・^{あさぼ}麻場城（北西1km）など、上位段丘の崖線を利用した中世城郭の数は、かなり多い。

中世に甘楽回廊一体を支配したのは、甘楽町^{おぼた}小幡（西南西3km）に本拠を持っていた小幡氏である。すでに13世紀には文献に登場しており、この地域の石造物の増築にも大きく関与していた。少なくとも16世紀には小幡氏は本拠を山城である^{くにみね}国峰城（428m 南西5km）に移しており、その後甘楽回廊を直接押さえる地として富岡市一宮の宮崎城（西9km）に重要な支城を築いた。文献上は、甲斐武田氏の被官としての16世紀中葉以後の活躍が著名であるが、小幡氏の勢威は鎌倉と信濃・畿内を結ぶ幹線道の管理者として、それよりはるか以前に形成されていたと思われる。14世紀の『神道集』に登場する白倉大明神（南南西5km）と小幡氏の物語など、交通路に直接関わる山岳信仰との関係も示唆的な姿である。

B 牛伏砂岩の動き

南部の山地は古生代の三波川系変成岩帯に属しており、さまざまな石材の供給源であった。代表的なものは、武蔵荒川水系上流と共に中世の板碑材料としてあまりにも有名な緑色などの片岩そしてその近縁の蛇紋岩・滑石があるが、それと同程度以上に歴史的に広く利用されたものは、^{うしぶせ}牛伏層から供給される牛伏砂岩（天引石・^{たご}多胡石）である。

脆さのため板状用途にほぼ限定される片岩や小型品が大部分の滑石に対して、牛伏砂岩は加工がしやすいものの比較的頑健で、大型の石材として古くから多用されてきた。その初源的な例は、古墳の石室石材としての利用である。甘楽回廊周辺の後期古墳では、知られているだけで42基が石材として使用している。また甘楽回廊を離れた地に位置する、高崎市の綿貫観音山古墳や前橋市の総社蛇穴山古墳など上野を代表する大古墳でも一部の石材に使われている。

碑石としての最も著名な例は、吉井町池に残る8世紀初頭の多胡碑である。日本三大古碑として、また上野三碑としても数えられるこの碑の石材と形態は後生にも受け継がれ、本遺跡の南に接する14世紀初頭前後の天引笠塔婆群はその代表的なものである。その他にも五輪塔や大型板碑などにも多用されている。

15世紀後半から16世紀前半にかけては、藤岡市平井城（東北東8km）に本拠を置いた関東管領山内上杉氏の勢力下に、五輪塔石材として広く利用され、また近世では18世紀代に鳥居石材としての利用がある。

牛伏層の分布は、上位段丘南面に屹立する牛伏山系と一致しており、東から牛伏山(490m)・城山(453m)・旭岳(448m)と並んでいる。そして天引石の別称でも知られるように、旭岳から流れる天引川上流がその供給地の有力な一つであった。

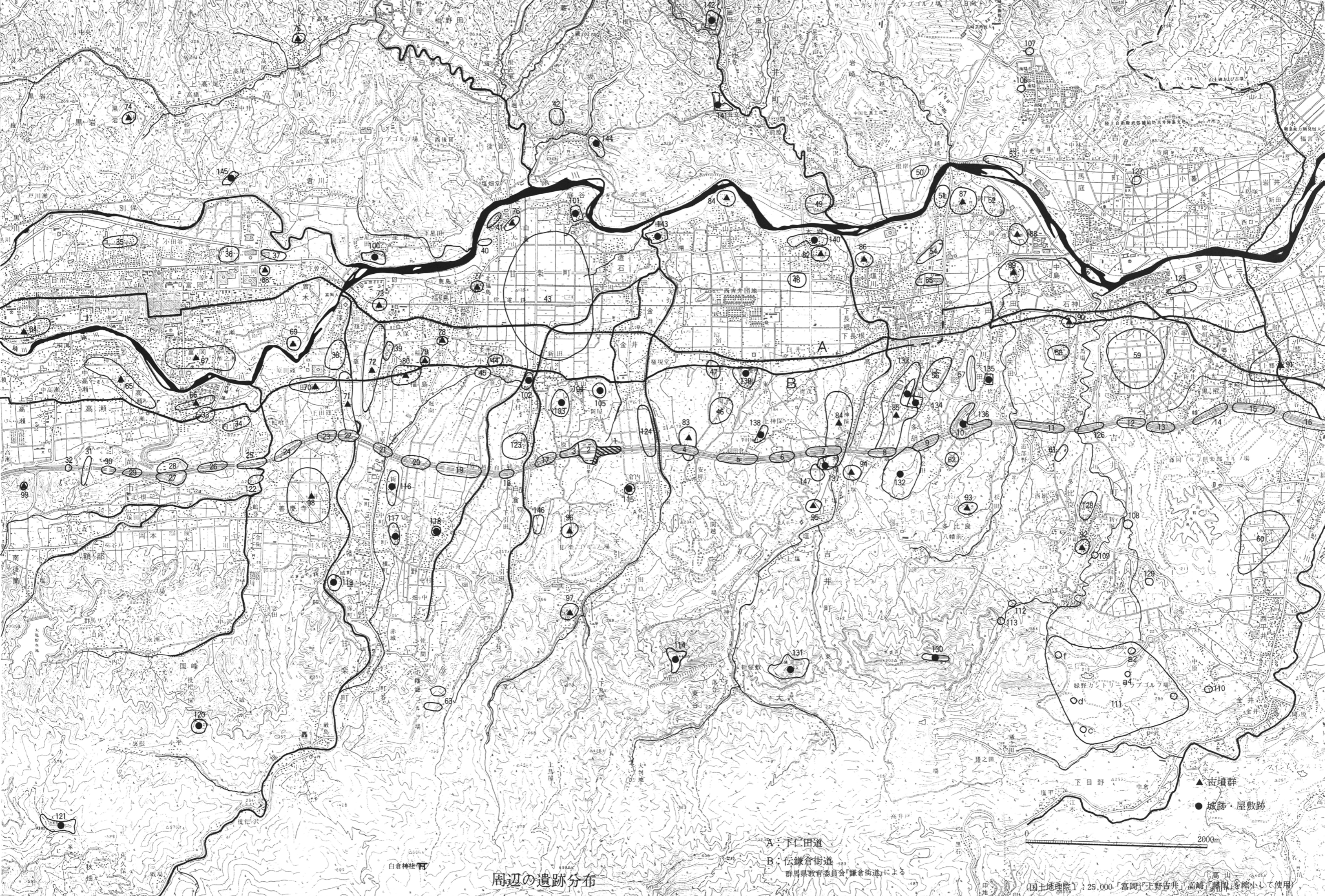
第I章 序章

周辺の遺跡

番号	遺跡名	P	J	Y	F	D	C	文 献
1	天引狐崎	○	○	○	○	○	○	本書.埋1994A
2	天引向原	○					○	埋.1994ACD
3	白倉下原	○	○	○	○	○	○	埋.1995ACD
4	長根安坪		○	○	○	○		埋.1997
5	長根羽田倉							埋.1990B
6	神保富士塚							埋.1993B
7	神保植松						○	
8	神保下条				○			埋.1992B
9	多胡蛇黒							埋.1993C
10	矢田				○	○	○	埋.1990/96
11	多比良追部野			○				
12	黒熊中西							埋.1992/96
13	黒熊八幡							
14	黒熊栗崎							埋.1995C
15	白石根岸							埋.1993D
16	白石大御堂						○	埋.1991
17	天神I		○		○			甘.1994
18	天神II		○		○	○		甘.1994
19	松葉慈学寺							甘.1994
20	西原		○	○	○	○	○	甘.1994
21	上野寺場							
22	田篠上平				○	○	○	埋.1989
23	田篠中原		○		○	○		埋.1990A
24	善慶寺早道場		○		○	○	○	埋.1994E
25	内匠上之宿		○	○	○	○	○	埋.1993A
26	内匠諏訪前		○	○	○	○	○	埋.1992A
27	内匠日影周地	○	○	○	○	○	○	埋.1992A
28	内匠日向周地		○		○	○	○	埋.1995A
29	下高瀬上之原		○	○	○	○	○	埋.1994B
30	下高瀬寺山	○	○	○				埋.1995A
31	中高瀬観音山	○	○	○	○	○	○	埋.95B 富.93B
32	同庚申山地区		○	○	○	○	○	埋.95B 富.93B
33	前田							富.1993A
34	内匠				○	○		富.1982
35	小沢西							富.1989
36	小舟							富.
37	曾木森裏							富.1996
38	原田篠				○	○		富.1984
39	坂詰							富.1990
40	西大山							甘.1996
41	久保儘下							
42	坂口							
43	甘楽条里		○	○	○	○		甘.1983/87
44	笹			○	○	○		博.1963/66
45	北原							
46	西場脇							吉.1987A
47	長根宿							吉.1987A
48	道六神							吉.1986A
49	東吹上							博.1973
50	富岡							吉.1989B
51	竹腰							吉.1987C
52	御門							吉.1994
53	川福							吉.1986B
54	雑木味							川.1992
55	腰巻							
56	川内							吉.1982
57	榎谷戸							吉.1989A
58	入野					○		吉.1985.86
59	黒熊							吉.1981/85
60	竹沼				○			藤.1978
61	東沢							吉.1987B
62	柳田							吉.1989C
63	佐久間		○		○	○	○	甘.1988
64	七日市古墳群				○			
65	桐瀬古墳群				○			
66	長久保古墳群				○			
67	芝宮古墳群				○			富.1992
68	妙部塚古墳群				○			
69	久保				○			
70	原田篠古墳				○			
71	上田篠古墳群				○			富.1984
72	下田篠古墳群				○			
73	塚原古墳群				○			
74	桐谷古墳群				○			

番号	遺跡名	P	J	Y	F	D	C	文 献
75	清水入古墳群						○	
76	大山古墳群						○	
77	鹿島古墳群						○	
78	天王塚古墳群						○	
79	笹の森稲荷古墳						○	
80	二日市古墳群						○	
81	片山古墳群						○	
82	本郷古墳群						○	
83	安坪古墳群						○	
84	神保古墳群						○	
85	多胡古墳群						○	
86	北原古墳群						○	
87	下池古墳群						○	
88	高木古墳群						○	
89	塚原古墳群						○	
90	祝神古墳群						○	
91	白石古墳群						○	
92	中ノ原古墳群						○	
93	山の神古墳群						○	
94	塩I古墳						○	
95	塩II古墳						○	
96	中原古墳						○	
97	天引古墳群						○	
98	善慶寺古墳群						○	
99	北山茶白山古墳						○	
100	星田城							○ 群.1988
101	庭谷城							○ 群.1988
102	大類屋敷							○ 群.1988
103	麻場城							○ 群.1988
104	白倉城							○ 群.1988
105	仁井屋城							○ 群.1988
106	彦田谷窯跡						○	吉.1995
107	ヌカリ沢A窯跡						○	吉.1995
108	下五反田窯跡						○	国.1984
109	滝の前窯跡						○	須.1989
110	金山瓦窯跡						○	坂.1966
111	下日野金井窯跡						○	
112	末沢II窯跡						○	国.1984
113	末沢I窯跡						○	
114	天引城							○ 群.1988
115	倉内城							○ 群.1988
116	下城							○ 群.1988
117	中城							○ 群.1988
118	上野城							○ 群.1988
119	熊井戸屋敷							○ 群.1988
120	国峰城							○ 群.1988
121	峰城							○ 群.1988
122	内匠城							○ 群.1988
123	下小塚・南小塚・三保						○	
124	天引口明塚						○	埋.1992B
125	塚原							吉.1983
126	多比良平野							埋.1993D
127	下山							吉.1990
128	新堀							吉.1991
129	中ノ原城							吉.1989D
130	一郷山城						○	群.1988
131	八東城						○	群.1988
132	多胡下の城						○	群.1988
133	多胡城						○	群.1988
134	多胡館						○	群.1988
135	矢田城						○	群.1988
136	天王原屋敷						○	群.1988
137	神保城						○	群.1988
138	神保館						○	群.1988
139	長根城						○	群.1988
140	本郷城						○	群.1988
141	奥平城						○	群.1988
142	馬場城						○	群.1988
143	小棚城						○	群.1988
144	諸戸城						○	群.1988
145	富岡城						○	群.1988
146	白倉						○	談.1983
147	稲荷山						○	談.1983

P 旧石器 J 縄文 Y 弥生 F 古墳 D 古代 C 中近世



周辺の遺跡分布

A: 下仁田道
 B: 伝鎌倉街道
 群馬県教育委員会「鎌倉街道」による

▲古墳群
 ●城跡・屋敷跡

0 2000m

(国土地理院) 25,000 「富岡」「野吉井」「高崎」「碓氷」を縮小して使用

C 弥生の道

甘楽回廊は、弥生文化東流の道である。関東で最も早い弥生文化の流れは、前期後葉のものが回廊の東端である藤岡市立石の沖Ⅱ遺跡（鑄川旧河道の烏川との合流点付近）で発見されている。そこから広がる関東平野の大部分が縄文晩期文化にあった時、西からの流れは、一気に回廊の東出口にまで達していたのである。さらに沖Ⅱ遺跡から本遺跡までの距離（約12km）とはほぼ同距離を関東山地の末端の裾に沿って東南東に向かった埼玉県児玉郡美里町の如来堂C遺跡でも似た前期末の土器の動きが見られる。

この早い流れは、続く中期前半にも及んでいる。再葬墓の可能性が高い富岡市七日市の七日市観音前遺跡や同様の吉井町の神保植松遺跡などは、その代表的なものである。本遺跡から見れば、前者は西に6km、後者は東に3kmの距離にすぎない。なお、この時期には、回廊最西端とも言える下仁田町藤井の関所裏遺跡（西約20km）そして三途川源流部近くの甘楽町白倉遺跡（南西1km強）でも土器の単独出土が早くから報告されている。

後期での甘楽回廊の弥生文化は、最盛期を迎える。その代表的なものが、低地部最西端つまり信濃から山を越えてきた回廊の西入り口にある南蛇井増光寺遺跡（西12km）であり、回廊に突出した戦略要衝に位置する高地性集落中高瀬観音山遺跡（西6km）である。いづれも、膨大な数の竪穴住居で構成される巨大集落であり、狭い居住可能地や農耕適地の面積に比べ、極端に多い人口が存在した。その現象は、この時代における汎東日本的な大規模流通拠点として甘楽回廊があったと考えざるをえない。

それを端的に示すのが、東日本としては先進的な金属器文物の流入である。中高瀬観音山を中心に上野地方での鉄鏃は、この地域に圧倒的に偏っている。そして甘楽町白倉の三ツ俣遺跡（西1km）では、東日本で唯一の銅戈片が見られる。この銅戈そのものは、後期にもたらされた可能性が高いが、すでに中期後半には銅戈を模した石戈が複数、妙義町の古立東山遺跡（西北西15km）と周辺で出ている。今後も新たな金属器出土の可能性は高く、メタルロードとしての甘楽回廊の意味は十分に注視する必要がある。

なお、天引川の対岸に位置する長根安坪遺跡（東1km）は、本遺跡とかなり似て弥生後期集落と古墳前期方形周溝墓群が重なっており、同時期の共通するあり方を示している。

参考文献

秋池 武.1988「関東管領山上杉氏と牛伏砂岩・多孔質角閃石安山岩について」『群馬の考古学』群埋文

群馬県考古学談話会編.1983『東日本における黎明期の弥生土器』

群馬県教委.1983『歴史の道調査報告書 鎌倉街道』

.1988『群馬県の中世城館』

群埋文.1997『長根安坪遺跡』

右島和夫他.1990.91「牛伏砂岩使用古墳の研究」『研究紀要』7.8、群埋文

【周辺の遺跡文献】

甘：甘楽町教育委員会.1983/87『甘楽条里遺跡1/5』1988『佐久間遺跡』1994『天神Ⅰ・天神Ⅱ・西原・松葉慈学寺遺跡』1996『西大山遺跡』吉：吉井町教育委員会.1981/85『黒熊遺跡群1/5』1982『川内遺跡図版編』1983『塚原遺跡』1985.86『入野遺跡』1986A『道六神遺跡』B『川福遺跡』1987A『西場脇・長根宿遺跡』B『東沢・折茂東遺跡』C『竹脇遺跡』1989A『椿谷戸遺跡』B『富岡遺跡』C『柳田遺跡』D『中ノ原城跡』1990『下山遺跡』1991『新堀城跡』1994『御門遺跡』1995『ヌカリ沢A窯跡』群：群馬県教育委員会.1988『群馬の中世城館跡』国：国士館大学考古学研究室.1984『考古学研究室発掘調査報告書』須：須田茂.1989「吉井町滝の前窯跡の採集遺物とその性格」『群馬文化』川：川原嘉久治.1992「西上野における古瓦散布地の様相」『研究紀要10』群埋文 談：群馬県考古学談話会.1983『東日本における黎明期の弥生土器』藤：藤岡市教育委員会.1978『F1竹沼遺跡』博：群馬県立歴史博物館.1963/66『笹遺跡』1973『東吹上遺跡』坂：坂詰秀一.1966『上野金山瓦窯跡』富：富岡市教育委員会.1982『内匠遺跡』.1984『上田篠古墳群・原田篠遺跡』1989『小沢西遺跡』1990『新井・坂詰遺跡』1992『芝宮古墳群』1993A『前田遺跡』B『中高瀬観音山範圍確認調査』1996『曾木森裏』埋：群埋文 1989『田篠上平遺跡』1990A『田篠中原遺跡』B『長根羽田倉遺跡』1990/96『矢田遺跡1/6』1991『白石大御堂遺跡』1992A『内匠諏訪前・内匠日影周地遺跡』B『神保下條・天引口明塚遺跡』1992/94『黒熊中西1,2』1993A『内匠上之宿遺跡』B『神保富士塚遺跡』C『多胡蛇尾遺跡』D『白石根岸・多比良平野遺跡』1994A『天引狐崎Ⅰ・白倉下原・天引向原遺跡Ⅰ』B『下高瀬上之原遺跡』C『白倉下原・天引向原遺跡Ⅱ』D『白倉下原・天引向原遺跡Ⅲ』E『善慶寺早道場遺跡』1995A『内匠日向周地・下高瀬寺山・下高瀬前田遺跡』B『中高瀬観音山遺跡』C『黒熊栗崎遺跡』1997『長根安坪遺跡』その他各市町村誌

3 調査 【PL.14~16】

【調査地点】 大きく台地部（字狐崎・西谷）と三途川低地部（字西谷）に分かれる（次頁図）。

台地部は北北東・南南西方向に延びる舌状台地（平地との比高17m）の先端部周辺を、東西方向に平均70mほどの幅で、東斜面下位の急傾斜部分を除いてほぼ対象地全面を発掘した（面積12,981m²）。西斜面傾斜は東斜面に比べ緩やかである。調査開始前は、全て桑畠であった。

低地部は、台地部の西側に接する三途川の谷の調査で、発掘箇所は図に示したように部分的に行った（調査面積6,749m² 調査対象の38%）。8カ所の調査区は、調査時点での三途川流路と道路に規制された中で任意設定し、アルファベット順に調査を行った。F区とH区の間にG区を設定したが、狭い範囲の試掘のみとなった。調査開始前は、草地と桑畠であった。左岸の台地上が天引向原遺跡になる。

【調査経過】 本来的に全面調査であった台地部の調査を先行し、低地部は当初埋没水田の確認の試掘のみを行った。その結果、杭の存在が見られたため、順次調査区を設定して発掘を行った。結果的には台地部と低地部の調査は、ほぼ全期間を通じて並行した。両部分ともに調査範囲北端の工事用道路相当範囲の調査を先行した。

90.3.23低地部試掘開始 4.13低地部本格調査開始 5.11ヤナ状遺構を木器検討委視察 6.11工事用道路部分引き渡し 8.6猛暑のため作業員日射病 10.1台風により低地部水没 11.9台地部調査中断 12.1台風により低地部水没 91.1.16台地部調査再開 1.21低地部調査終了 2.27旧石器試掘開始 3.9/10地元対象見学会 3.11旧石器本調査開始 3.13古墳075号石室移築

【標準土層】 台地部はローム層上面までは、基本的には耕作土と浅間B軽石混在褐色砂質土・浅間C軽石混在暗褐色粘質土の順である。だが、ほとんどの場所で耕作土が直接ローム上面まで達しており、ローム上面までの深さは、20~40cm程度しかない。

低地部は、浅間B軽石の純層堆積があり、その上面は比較的安定しているが、それより下位は調査区ごとに大きく異なっていた。

【調査方法】 表土除去は重機によって行い、グリッドは国土座標に併せて5mごとに設定（本報告では25mごとに統合）した。低地部は、地表からの深さが2~3m以上あり、含水層のため崩壊しやすいので、いづれも法面に大きく傾斜を持たせて掘った。人力による発掘もポンプ排水とベルトコンベア排土を常時並行させた。

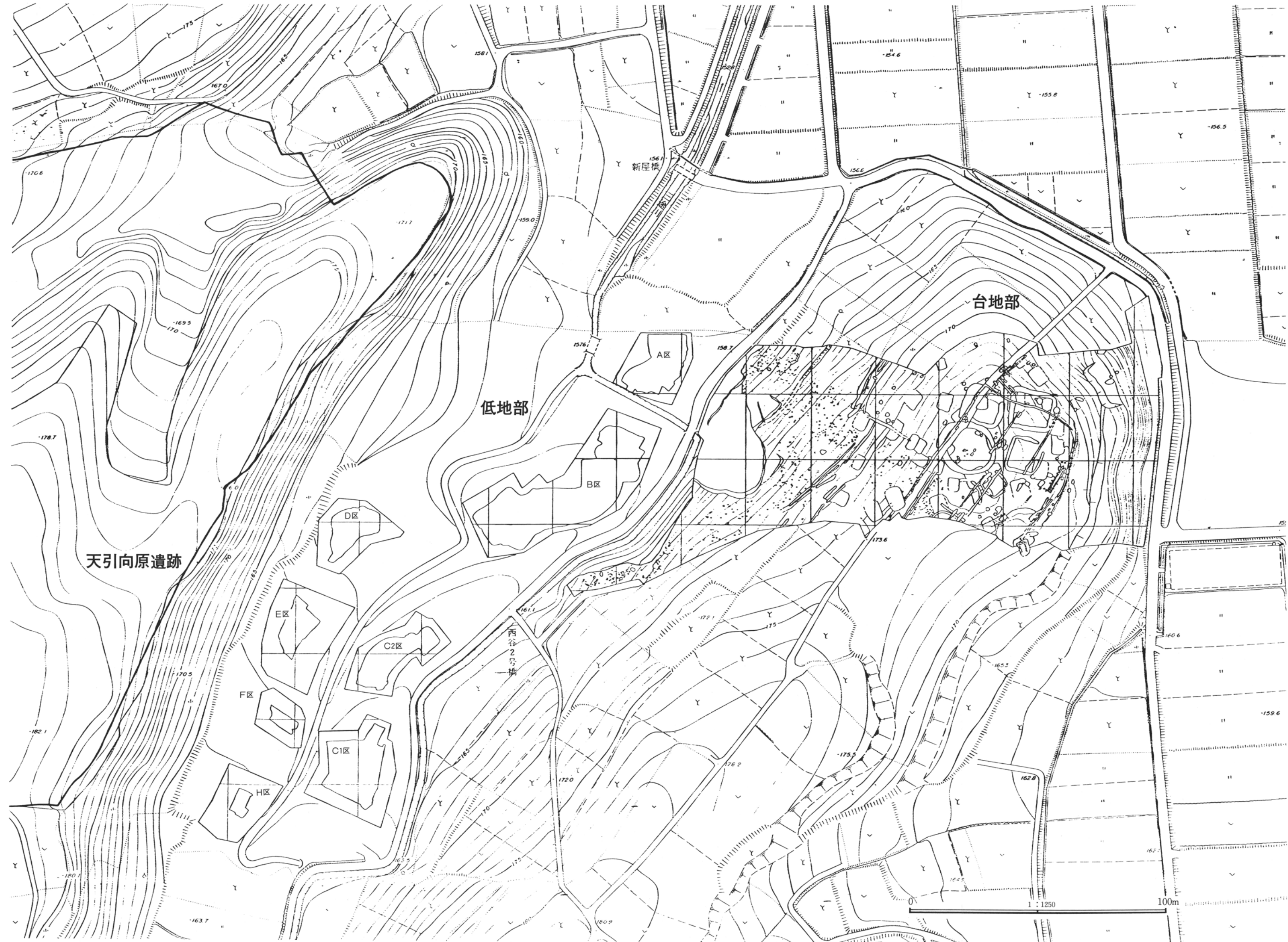
実測は、平面図を写真実測委託した（整理時にかなり図化の誤りがあることが判明）。

出土木器については、保存処理室の北爪健二嘱託員（当時）の指導で、取り上げ後すぐにメモ撮影してからパック保存を行った。流木はサンプル必要部分を抽出した後に廃棄した。

【その他】 低地部の調査は、上流のゴルフ場排水の人体への影響の危惧が当初あり、また湿潤な環境での粘土質土の発掘で、さらに風化しやすい木器類の出土が多く、作業進捗はなかなか見られなかった。台地部では落雷を避けるための避雷針設置、低地部では崩壊防止措置や安全通路の設置など、安全措置を講じた。

雷雨は10月まで続き、そのたびに台地部の調査は中断された。台風などによる低地部調査区の水没はしばしばあり、復旧には3日ほどを要した。幸いに労災事故は発生しなかった。

見学会は、地元大字天引の住民を対象に旧石器本格調査直前に行った。古墳の石室は、復元構想のため甘楽町教育委員会に移築した（大字白倉の甘楽町古代館で復元）。



天引向原遺跡

低地部

台地部

新屋橋

西谷2号棟

1 : 1250

100m

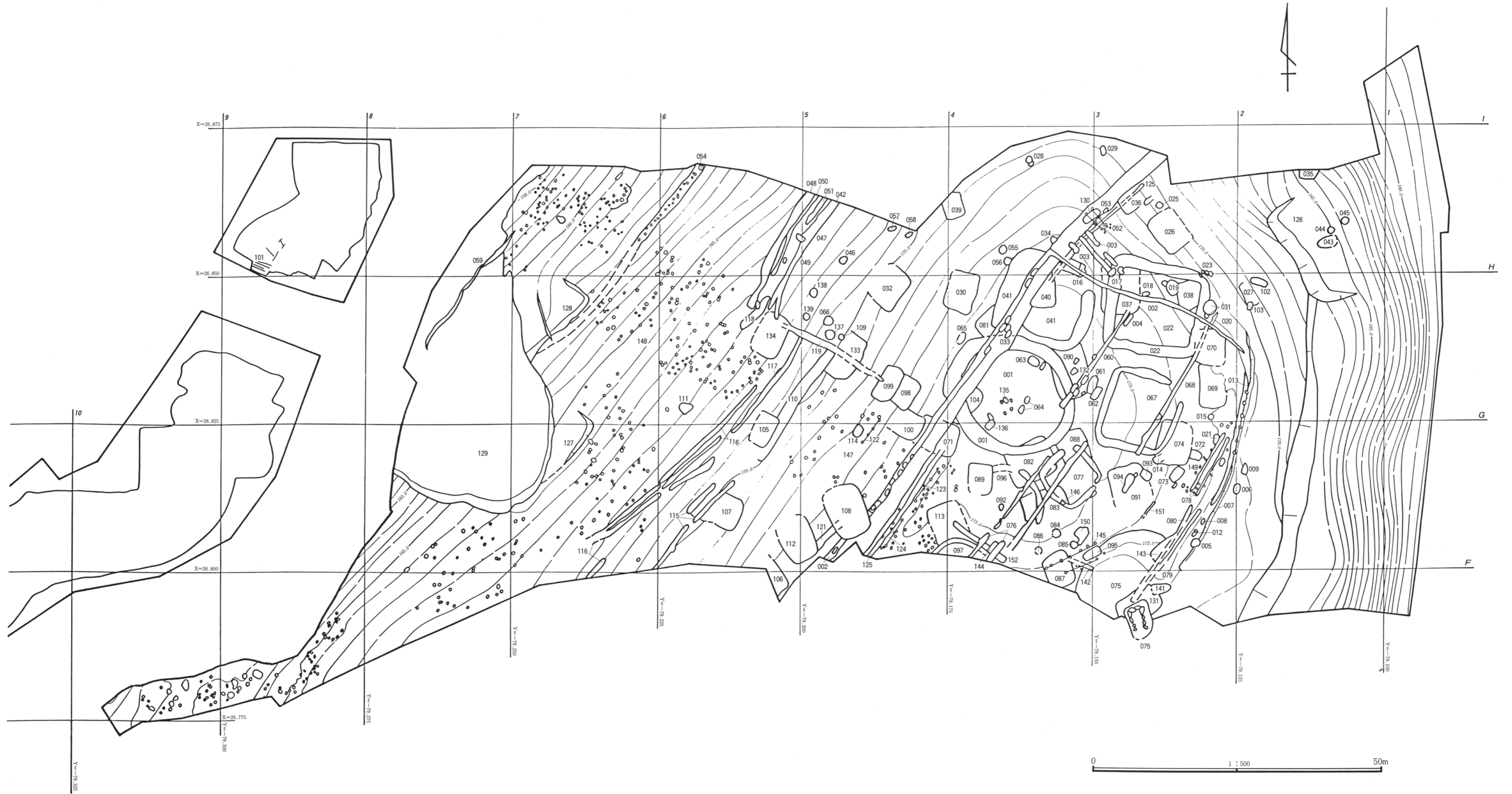
第Ⅱ章 検出遺構と遺物

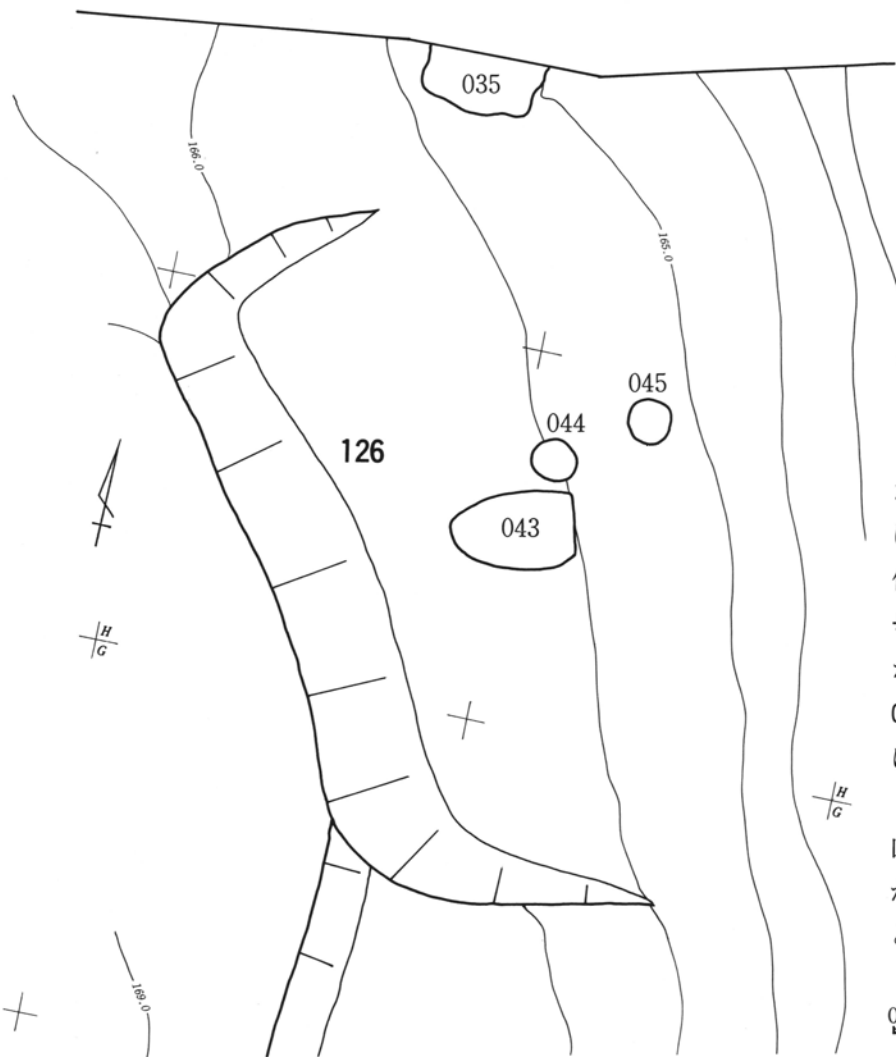
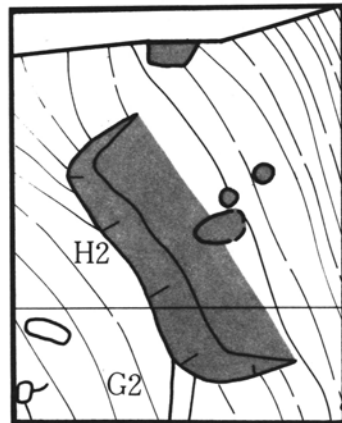
1 台地部の遺構と遺物

台地部で検出した遺構の総数は、次の通りである（時代認定は可能性のあるものも含む）。

	西斜面	台地上	東斜面
近代	溝	1	開墾跡
		集石土坑	3
		溝	1
近世			集石土坑
			土坑
			開墾跡
			地震跡
中世	溝	10	開墾跡
	土坑	2	土坑
	開墾跡	2	
	地震跡	1	
古代			ピット群
			ピット
			土坑
古墳			土坑
			古墳
			周溝墓
			土坑
弥生			ピット
			古墳
			周溝墓
			壺棺墓
縄文			壺棺墓
			壺棺墓
			壺棺墓
			壺棺墓
時期不明			壺棺墓
			壺棺墓
			壺棺墓

以上のように、時代と種類は多岐にわたるが、以下報告は、時代にこだわらず東斜面・台地上・西斜面の順に地域ごとに重複関係を重視しながら行う。なお台地上と両斜面の境界は、概ね172.00mの等高線付近とした。



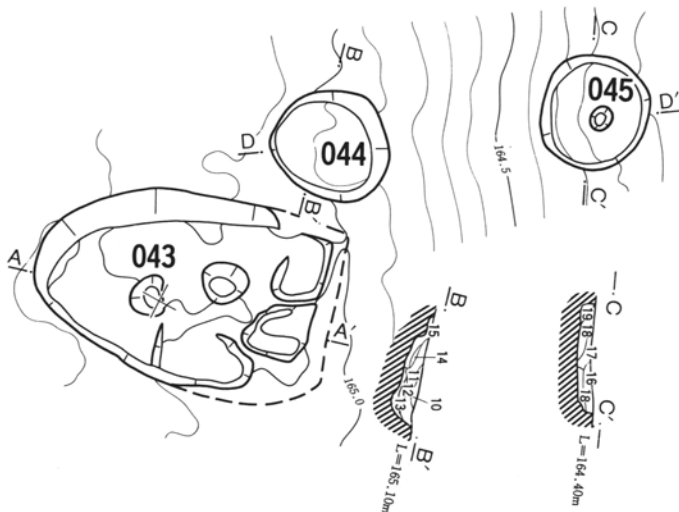
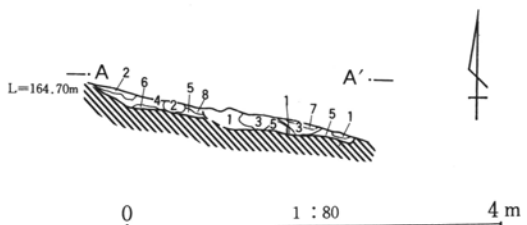
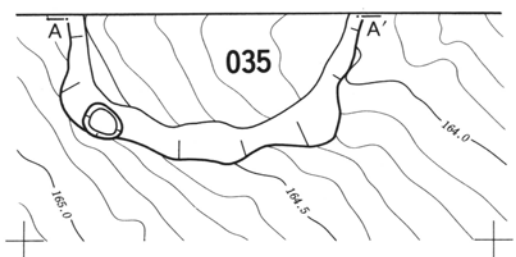


035, 043~045, 126号遺構
【図p.25 PL.19】

東斜面中位北東側で検出した遺構群。126号は、高さ2.5mほどの斜面を削って平坦面を作った開墾跡。土坑043・044号はその平坦面で検出。そこからややはずれる土坑035・045号も含めて、顕著な遺物は見られなかった。

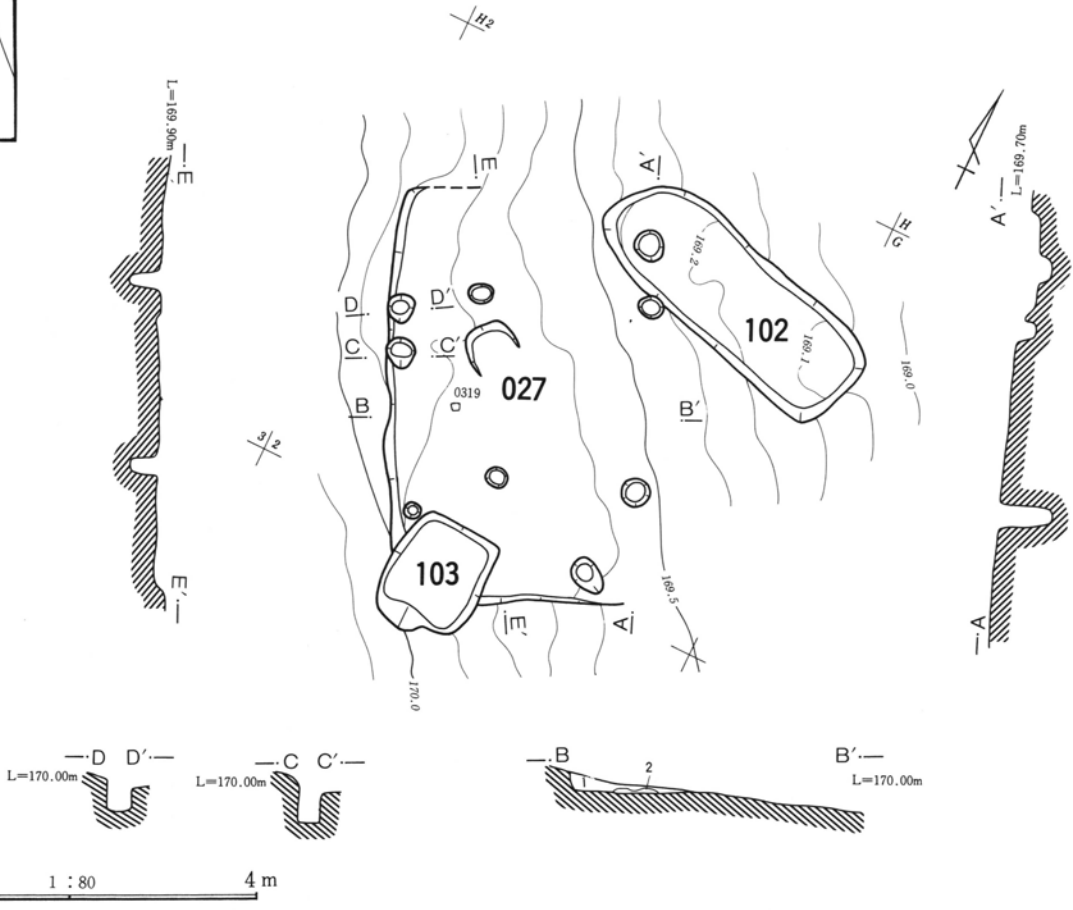
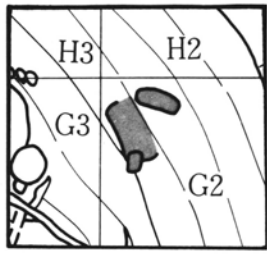
035号と045号は天明の浅間山軽石を埋土に含んでいたが、その他は近代以降のものとする。

0 1 : 200 10m



035号(1A軽石 2ロームA軽石混 3ローム塊A軽石混 4オリブ褐土 5ローム塊多 6黄橙土 7耕作土 8A軽石混)043号(1オリブ褐土 2ローム漸移土 3同左 4ローム塊 5黒褐土塊 6黄黒褐土混 7ローム塊黒褐土塊混 8ローム漸移土 9ローム塊)044号(10ローム漸移土 11ローム塊 12鈍い黄褐土 13ローム塊 14オリブ褐土 15ローム混)045号(16,18,19ローム塊17A軽石多)





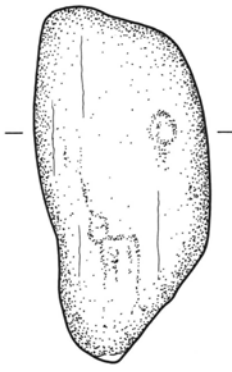
027・102・103号遺構 【図p.26 PL.20】

東斜面北東側上位で確認した遺構群。

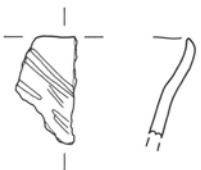
102・103号は時期不明の土坑。いずれも027号より新しい。長方形ぎみの前者と正方形ぎみの後者は共に等高線の走行とは関係なく掘られている。遺物はなく、正確不明。

027号は弥生後期の竪穴。【重複】土坑102・103号より古い。【埋土】残存部分(1褐粘質土 2炭化粒少含)は僅か。【壁床面】床は1/3程度しか検出できなかった。

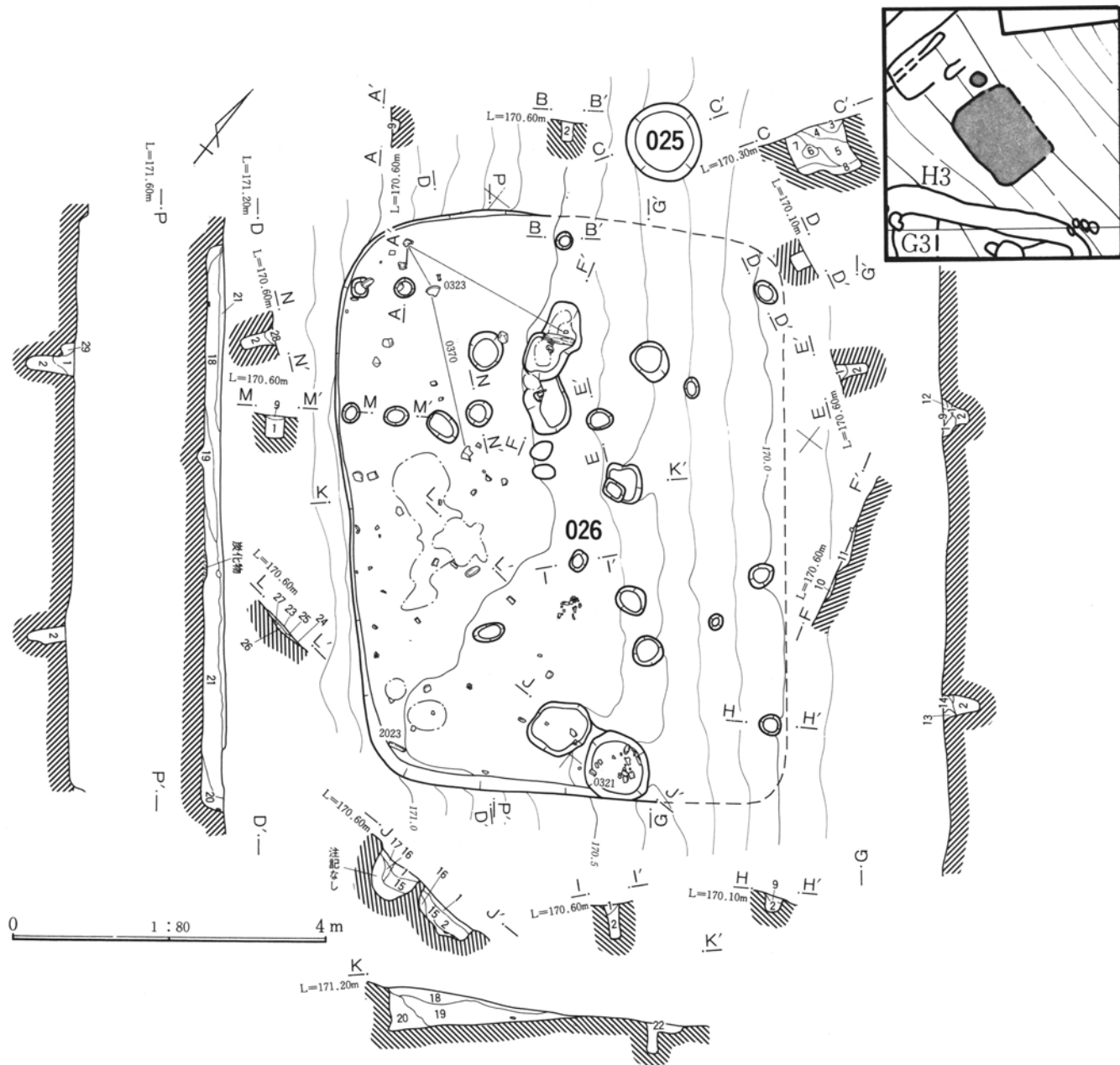
【炉など】不明。【柱穴】やや逆台形ぎみに広がる位置で支柱穴4本を検出。壁際に5個のピットを確認したが、配列は規則的ではない。【遺物】絶対量は多くなく、顕著なものは、上層より雲母石英片岩敲き石(2024)、下層より弥生壺口縁(0319)が見られただけである。【備考】東斜面最下位の弥生竪穴。



027上-2024 (1/4)



027下-0319 (1/4)



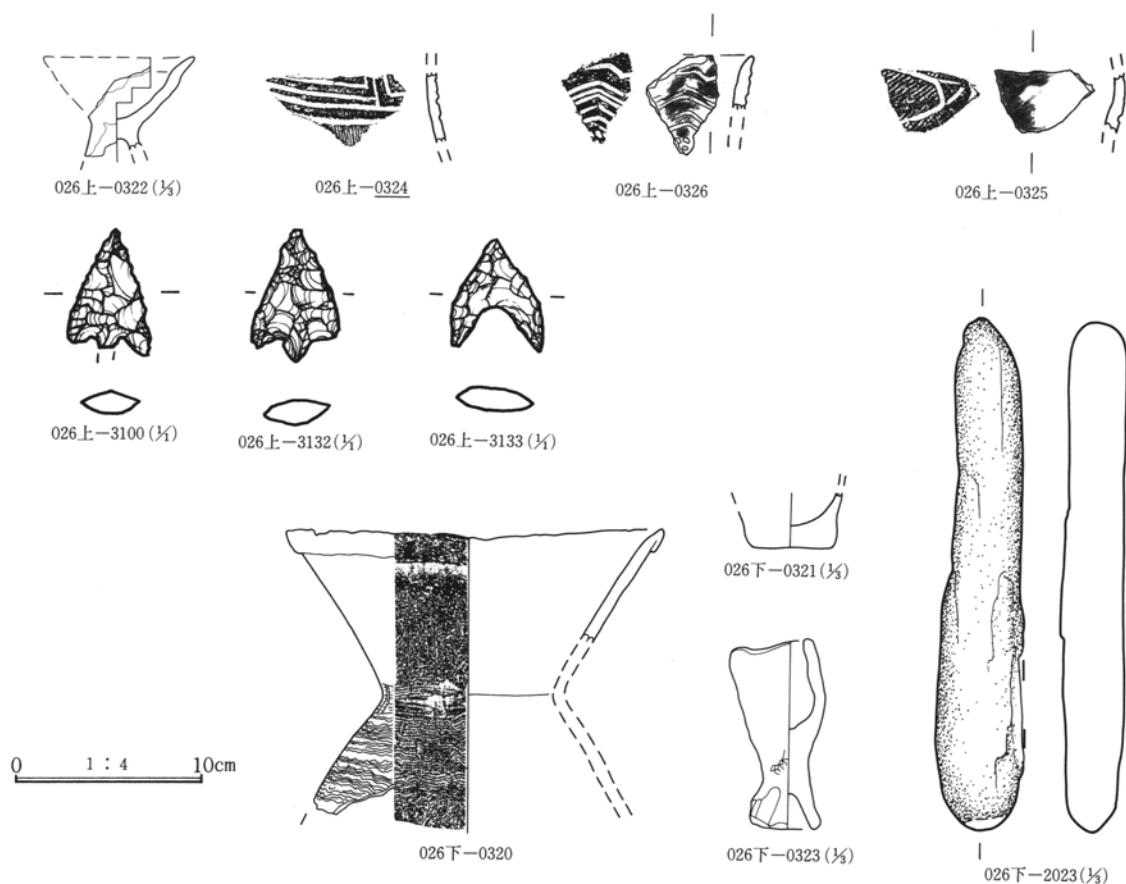
025・026号遺構 【図p.27,28 PL.19~21】

東斜面北側上位で確認した遺構群。

025号は、時期不明の円形土坑。【埋土】3黒褐締弱 4,5オリブ褐ローム塊混締弱 6明黄褐 7,8オリブ褐

026号は、弥生後期の竪穴。【重複】なし。【埋土】1オリブ褐締強砂粒多 2暗オリブ褐粘性弱 9黄褐締強砂粒多 10暗褐締弱焼土少含 11黒褐炭化粒少含 12黄褐 13暗オリブ褐 14オリブ褐粘性弱 15オリブ褐粘性強 16黄褐粒子粗ローム含 17オリブ褐 18黄褐締強A軽石含 19暗灰黄締強 20暗灰黄 21オリブ褐締弱 22暗褐粒子粗締弱 23褐灰締弱炭化物多 24褐灰 25黒褐 26灰オリブローム塊混 27明黄褐ローム塊混 28黄褐粒子粗汚ローム混 29黒褐粘性弱ローム塊少混 30黄褐 【壁床面】山側1/2ほどのみ残存。山側壁は、やや状態良い。床面山側に焼土・炭化物が散り、焼失した可能性がある。【炉など】炉は長軸方向に2基重なっており、外側のもののみ炉石残る。反対壁近くに楕円形の貯蔵穴2基が接する。【柱穴】外側炉を短辺に通る位置で主柱穴4個があり、炉側内側に間隔狭めて2が見られる。現壁と推定線に沿って少なくとも5個の側柱穴を確認したが、北西側では内側に2個があった。【遺物】上層(18,19,30層)からは、弥生ミニチュア高坏(0322)・弥生中期壺片(0324~26)、黒曜石石鏃(3100,32,33)が出土した。下層(20,21,22層)からは、弥生後期壺(0320)・同ミニチュア(0321,23)と雲母石英片岩棒状磨り石(2023)が見られた。【備考】炉や貯蔵穴などの状態から、明らかに拡張がなされている。上層のミニチュア高坏は下層出土のミニチュアと一群のものかもしれない。

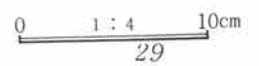
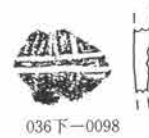
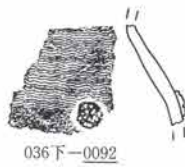
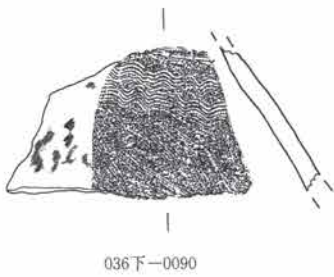
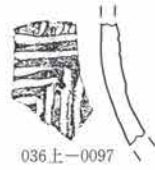
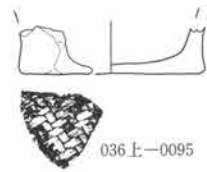
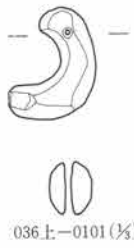
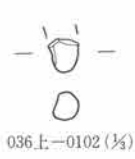
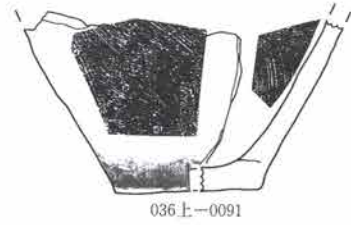
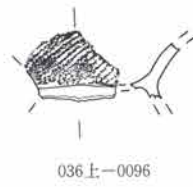
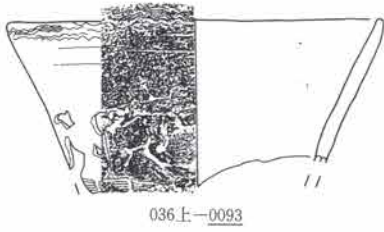
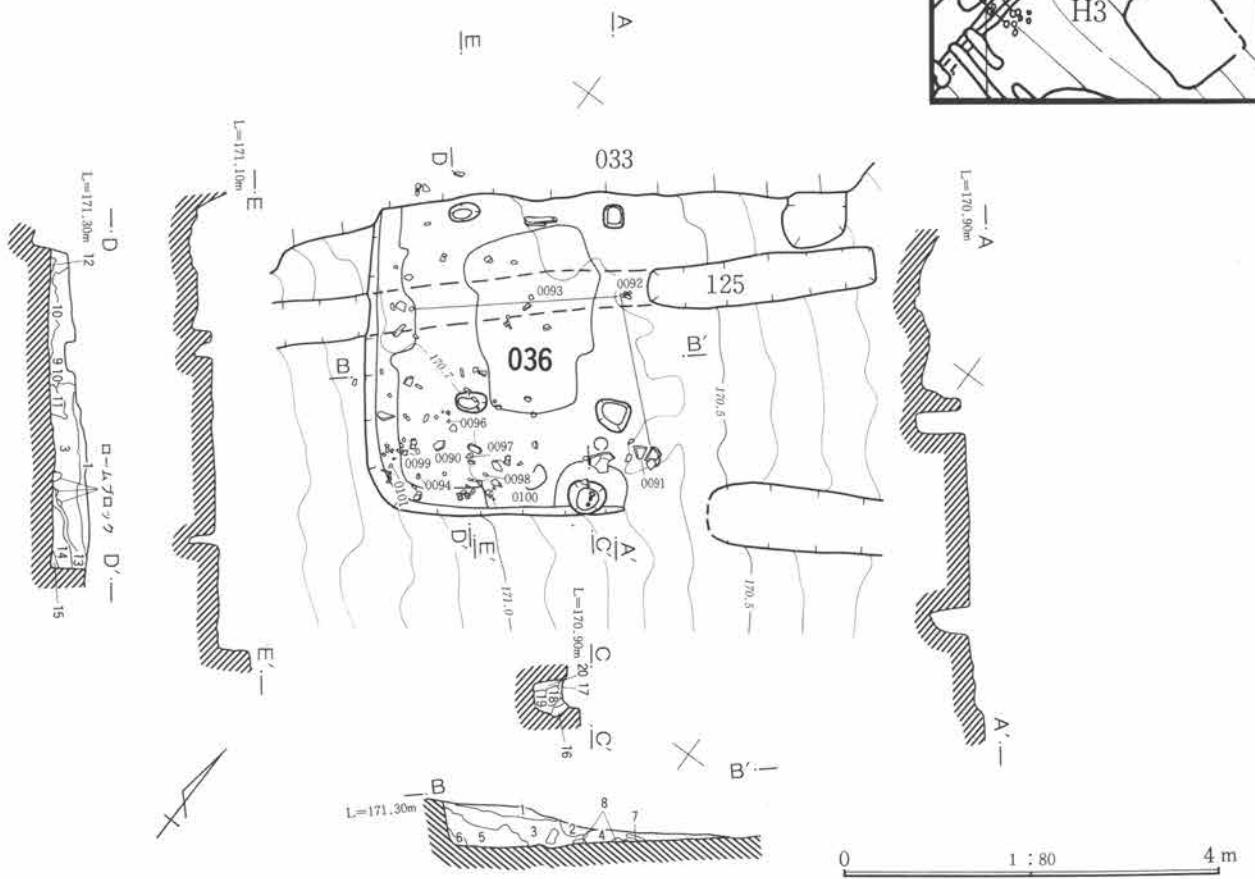
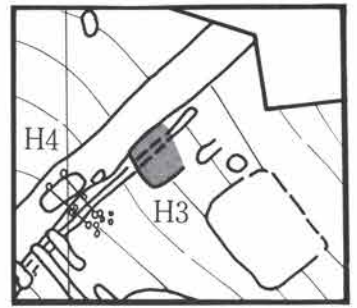
第II章 検出遺構と遺物

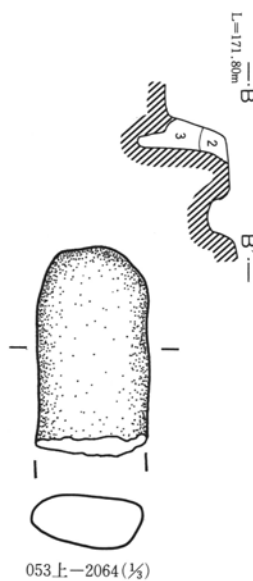
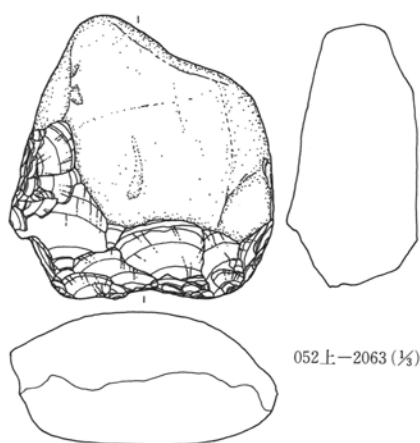
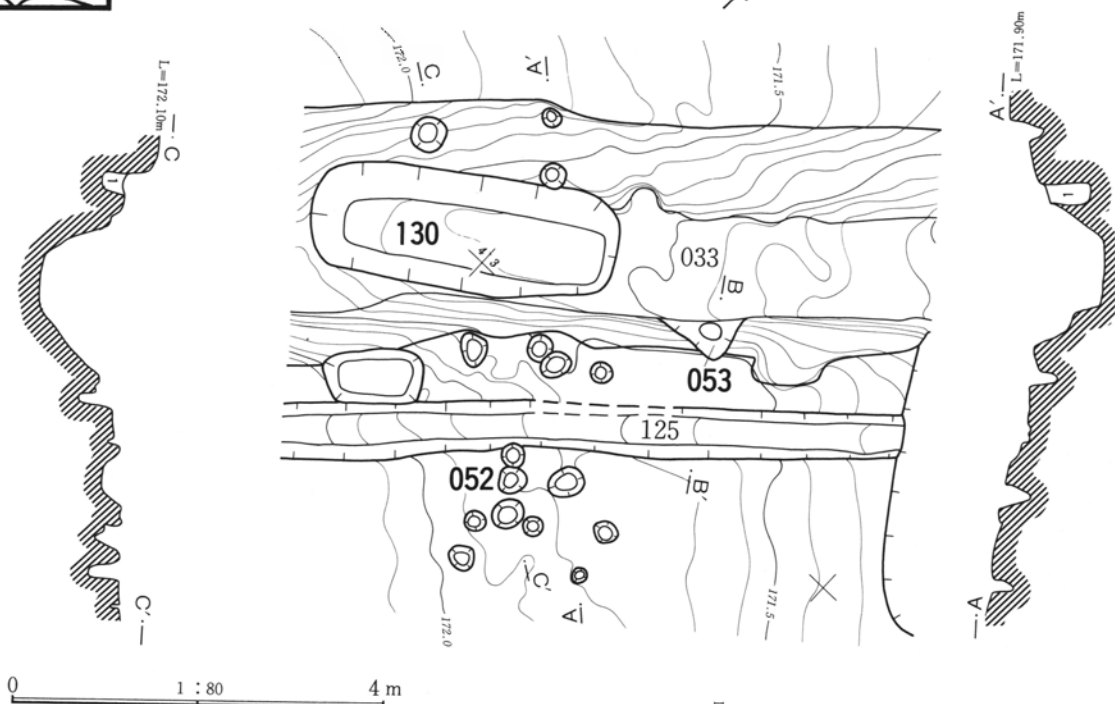
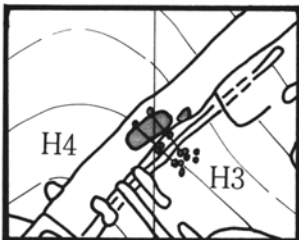


036号遺構 【図p.28,29 PL.21】

東斜面北側上位で確認した弥生後期の竪穴。

【重複】北東側で道路033号と溝125号に壊される。【埋土】1褐ローム含 2黄褐ローム多 3暗褐砂質 4オリーブ褐 5黒砂質 6明黄褐ローム含 7オリーブ褐砂質ローム塊 8黒褐砂質 9黒褐砂質 10にぶい黄褐砂質 11黒砂質 12黄褐砂質ローム少含 13黒褐砂質 14にぶい黄褐砂質ローム塊 15明黄褐砂質 16暗褐砂質 17黄褐砂質 18黒砂質 19黒褐粘性無 20暗褐粘性無 【壁床面】北西側及び谷側1/4は削られる。中央部分は硬化。【炉など】北西側柱穴間に炉石残る。反対側壁際には貯蔵穴が見られる。【柱穴】長方形配列で4個の主柱穴を確認。山側のものは、やや板状の掘り方を見せる。【遺物】上層(1~4,7~9層)では、弥生後期甕(0093,0096)・同壺(0091)・同高坏(0094)・土製勾玉(0101,02)・中期甕類片(0095,0097)が出土し、下層(5,6,10~15層)では弥生後期甕(0090,92)・中期壺鉢片(0098~0100)が見られた。【備考】026号とはほぼ同一の高度の斜面に位置しており、立地上は併存した可能性が考えられる。





052・053・130号遺構

【図p.30 PL.22】

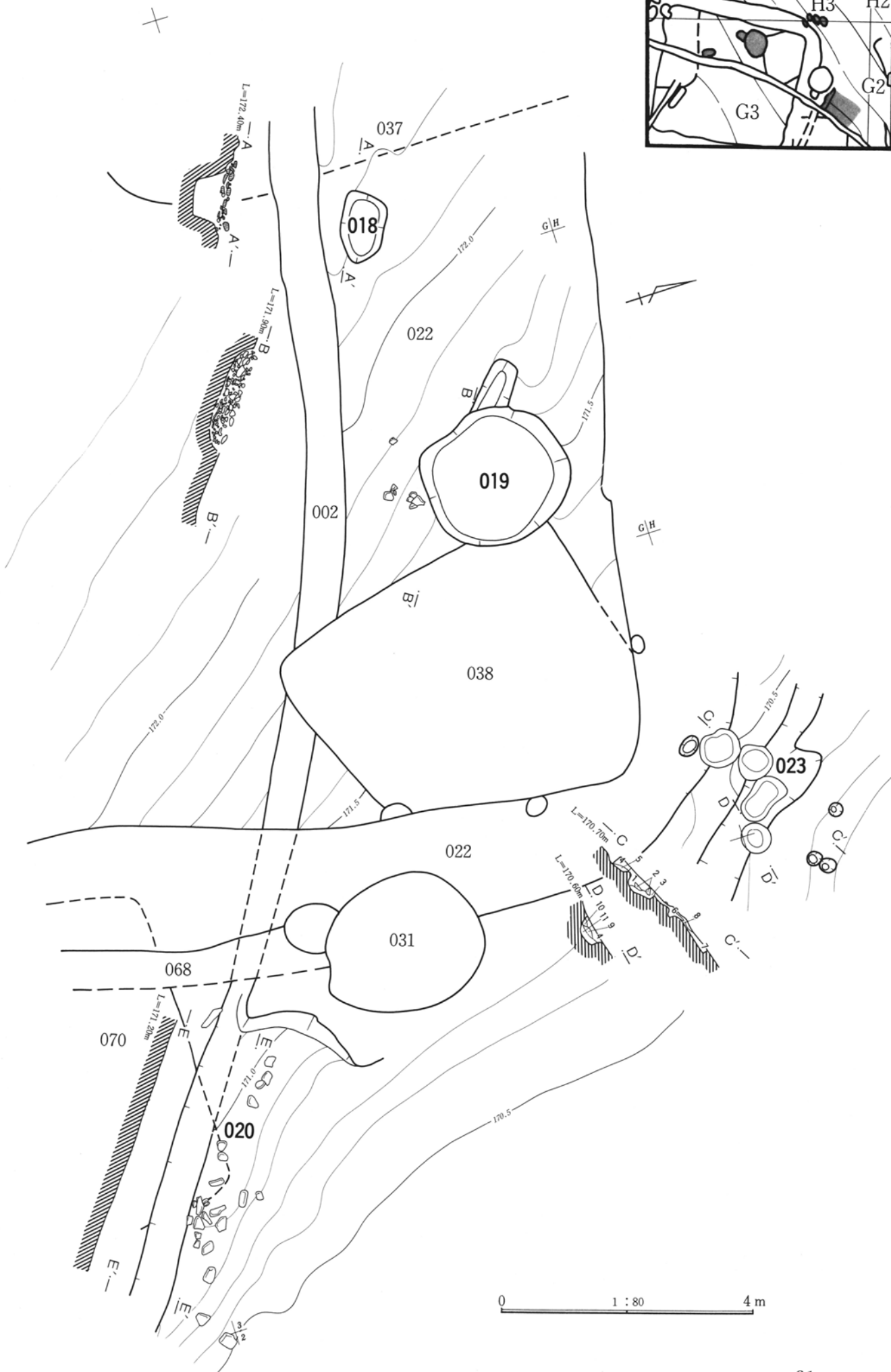
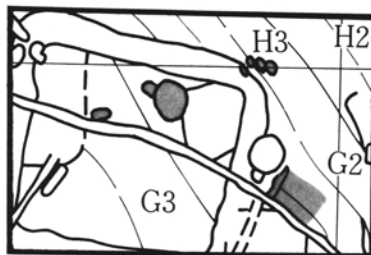
東斜面北側上位で確認した遺構群。
052号は、中世の可能性のあるピット群。**【重複】**033号・125号・130号と重なるが新旧関係不明。

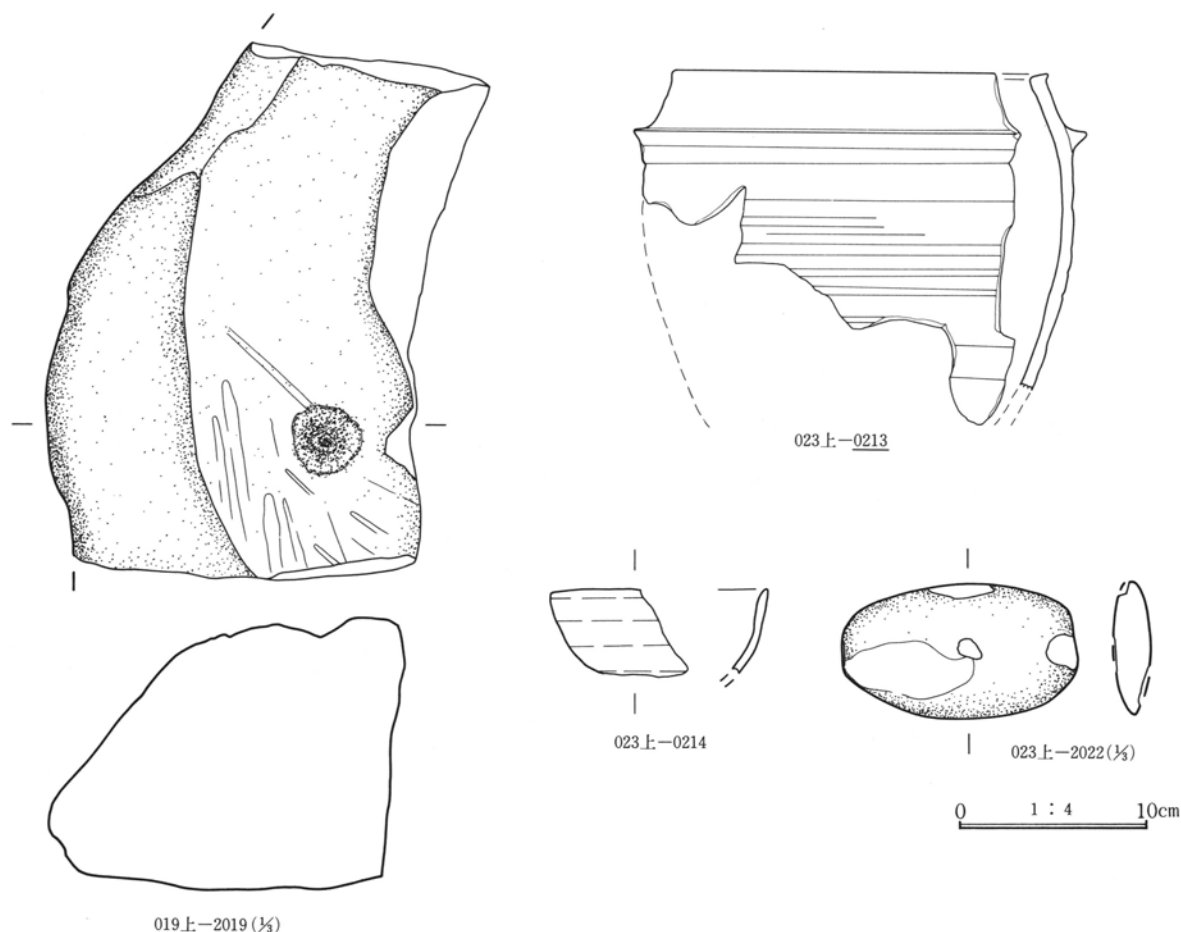
【埋土】1黒褐粘質締弱白軽石小混 **【形態】**道路跡033号を横断する位置の約6×2mの範囲で大小16個のピットを検出。

【遺物】埋土上層より硬質泥岩石核(2063)出土。**【備考】**切り通し状に窪んでいる033号にかかる橋脚の柱穴と想定して調査したが、配列は規則的ではなく断定しがたい。

053号は、中世の可能性のあるピット。**【重複】**033号に壊される。**【埋土】**2暗褐粘質粒粗締弱 3黒褐粘質 **【形態】**下部はピット状だが、上部はやや大きく方形ぎみに広がる。**【遺物】**上層より変質安山岩磨り石(2064)出土。**【備考】**性格不明。052号と埋土は似ており、その一部をなすかもしれない。

130号は、近世の可能性のある土坑。**【重複】**033号との関係不明。**【埋土】**033号下層埋土に似る **【形態】**平面長方形で底は平坦。**【遺物】**なし。**【備考】**033号完掘調査時に検出したが、形態は近世の002号の一部をなす土坑群に似ている。





018・019・020・023号遺構 【図p.31,32 PL.31,32】

東斜面北東側上位で検出した遺構群。

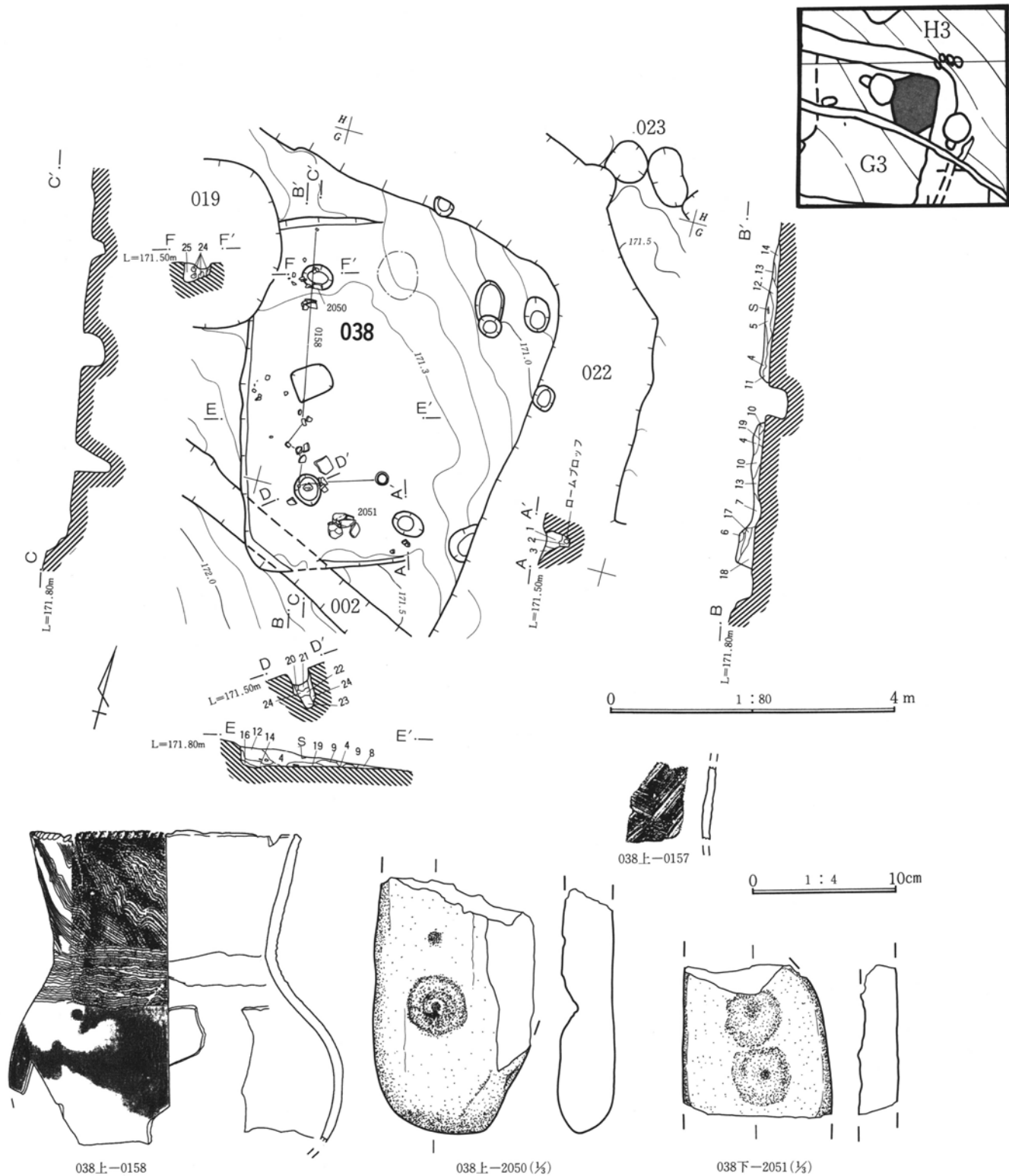
018～020号は、近代の集石。【重複】019号は弥生堅穴038号を壊し、020号は近世溝002号を壊す。【埋土】3基とも礫が少なくとも上層に充満していた。018号下層は締無砂質土。020号はほとんど埋土が流出していたが同様の可能性が高い。【形態】大きさ・形状はそれぞれ異なり、特定の形を意識した感じは弱い。【遺物】019号の礫中には砂岩凹石(2019)が含まれていた。【備考】これらは畝地整備に伴う整理坑で、002号より新しいことから近代の遺構と考える。

023号は、古代の土坑。【重複】方形周溝墓022号を壊す。【埋土】1暗褐締弱ローム塊少含 2暗褐締弱 3明黄褐締弱汚ローム含 4オリブ褐締弱焼土炭化粒含 5黄褐粘質締強ローム含 6オリブ褐ローム塊少含 7オリブ褐締固軽石小含 8オリブ褐締弱須恵器片含 9暗オリブ褐締無焼土少含 10暗オリブ褐炭化材少含 11黄褐締弱粘性強焼土少含 【形態】大小6個の土坑ピットが隣接。規則性はない。【遺物】上層より須恵器羽釜片(0213)・同坏片(0214)・牛伏砂岩石包丁(2022)が出土。【備考】当初、堅穴住居のカマドと想定して掘ったが、焼土・炭化材があった以外には、積極的な住居の証拠は検出できなかった。ただし、羽釜を使った燃焼遺構である可能性は間違いない。台地部では、本遺構のみが古代のものである。

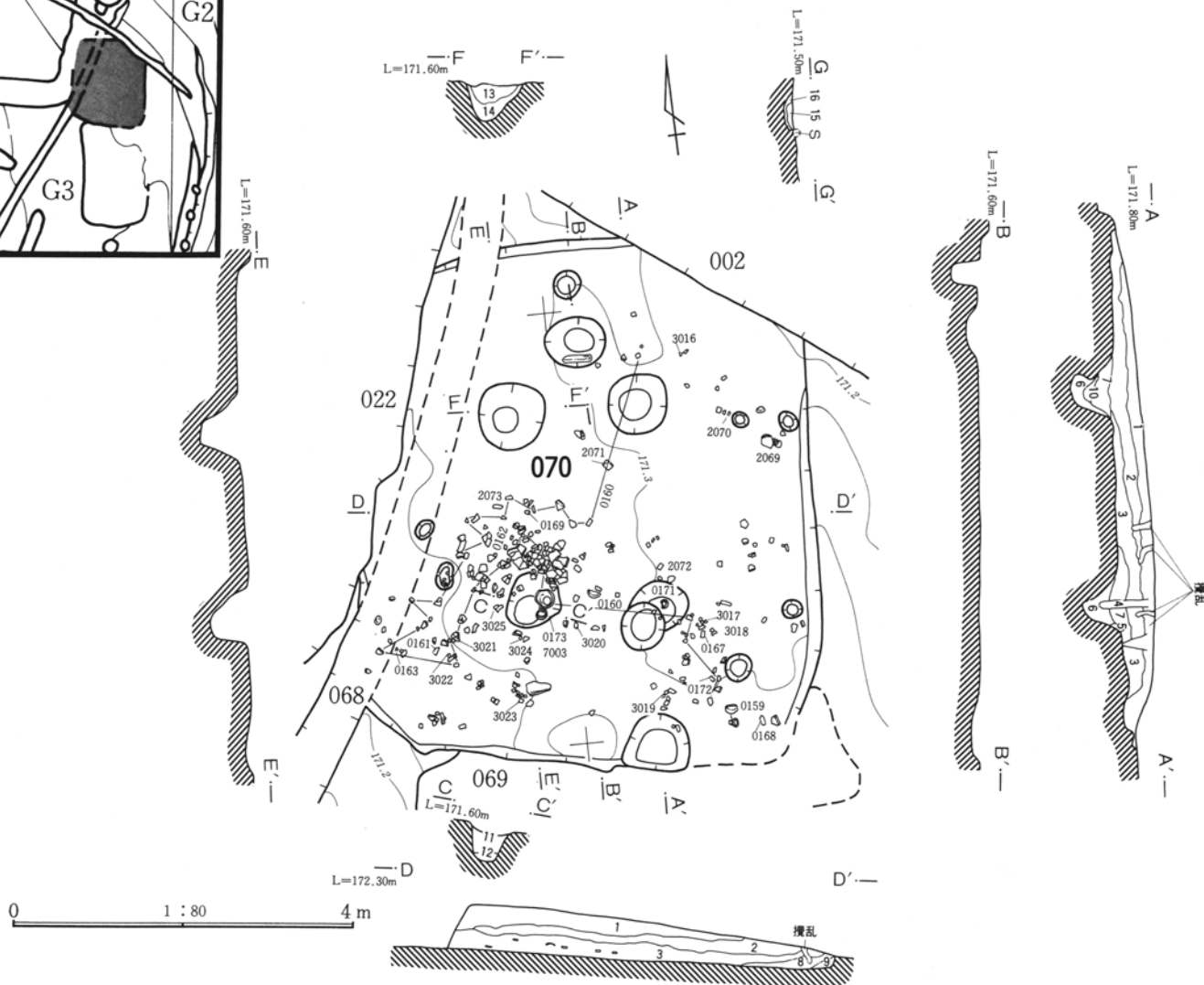
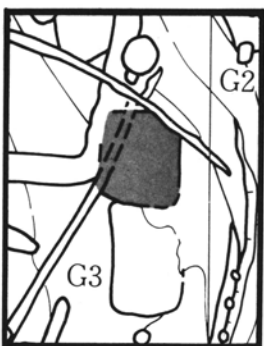
038号遺構 【図p.32,33 PL.24】

東斜面北東側上位で検出した弥生後期の堅穴。

【重複】集石019号と溝002号及び未命名ピットに一部を壊される。また方形周溝墓022号の溝内に位置しているが、直接の層位的関係は不明。【埋土】1黒褐砂質 2黒褐砂質 3黄褐砂質ローム多 4黄褐ローム塊 5明黄ローム塊 6黄褐ローム塊A軽石多 7黄褐ローム塊 8褐ローム漸移 9黄褐ローム塊 10明黄褐ローム塊 11オリブローム漸移 12オリブ褐ローム塊 13明黄褐ローム塊 14暗オリブ褐ローム漸移 15黄褐12,13混 16黄褐ローム塊 17浅黄ローム塊 18オリブ褐 19オリブ褐ローム塊 20暗褐砂



質 21褐砂質 22黄褐砂質ローム多 23黄褐砂質ローム多 24黄褐砂質ローム塊 25褐砂質白黄粒含【壁床面】谷側半分ほどは削られて残存しない。【炉など】北側の焼土散布部分が炉跡の可能性。【柱穴】山側の壁に沿って2個の主柱穴と考えられるものがあるが、対応する2個は削られた谷側では痕跡も検出できなかった。【遺物】上層(4~12,17層)からは弥生後期甕(0158)・同中期甕片(0157)・雲母石英片岩凹石(2050)、下層(13,14,16,19層)からは緑色片岩多孔石(2051)が出土した。【備考】壁柱穴から考えられる主軸方向が調査時の等高線走向と少しずれている。谷側半分の状況も全く不明であり、かなり大きく廃棄後の地形変化が起きたと思われる。そのため、方形周溝墓より古い遺構とするのが妥当だろう。

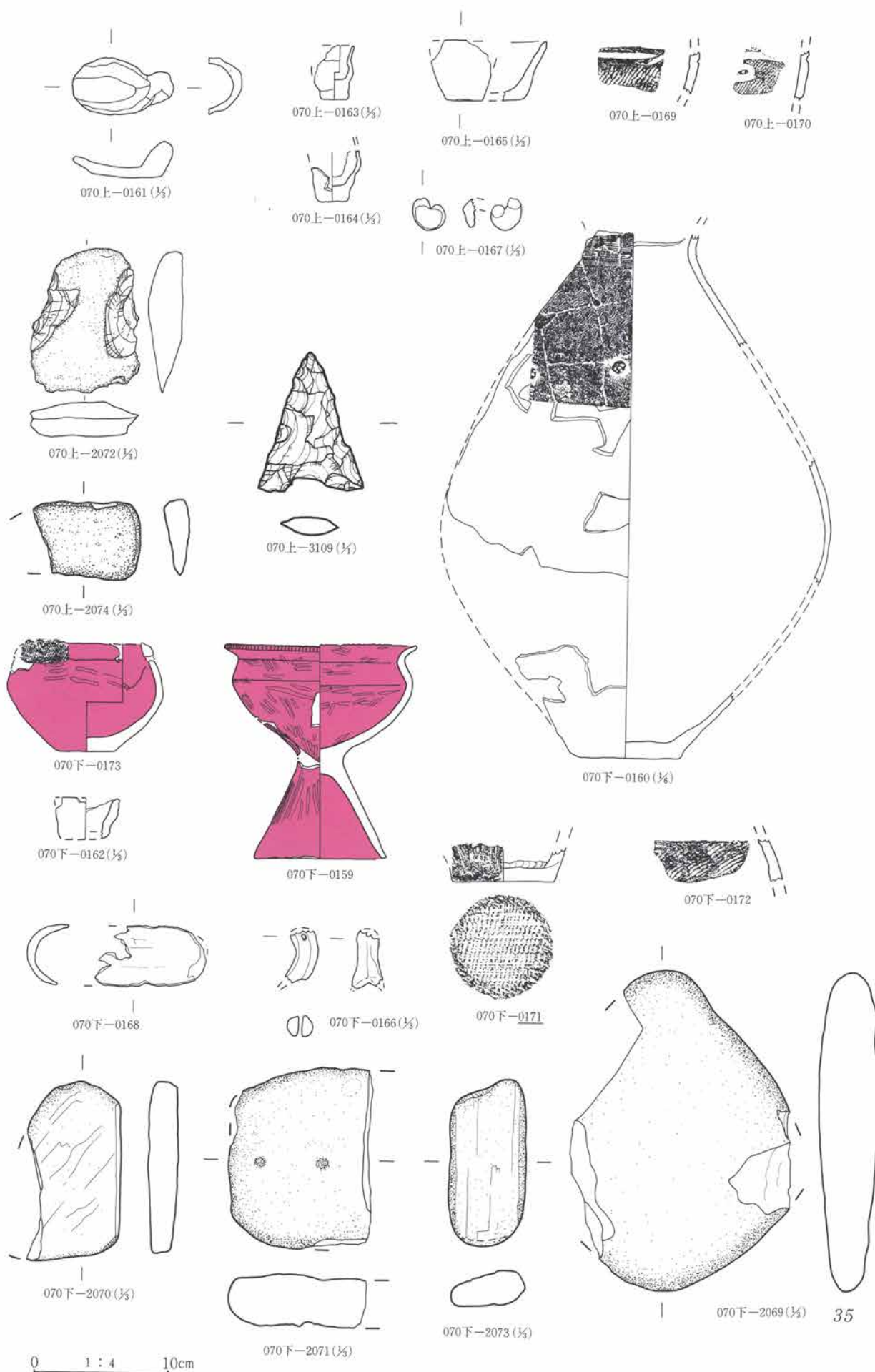


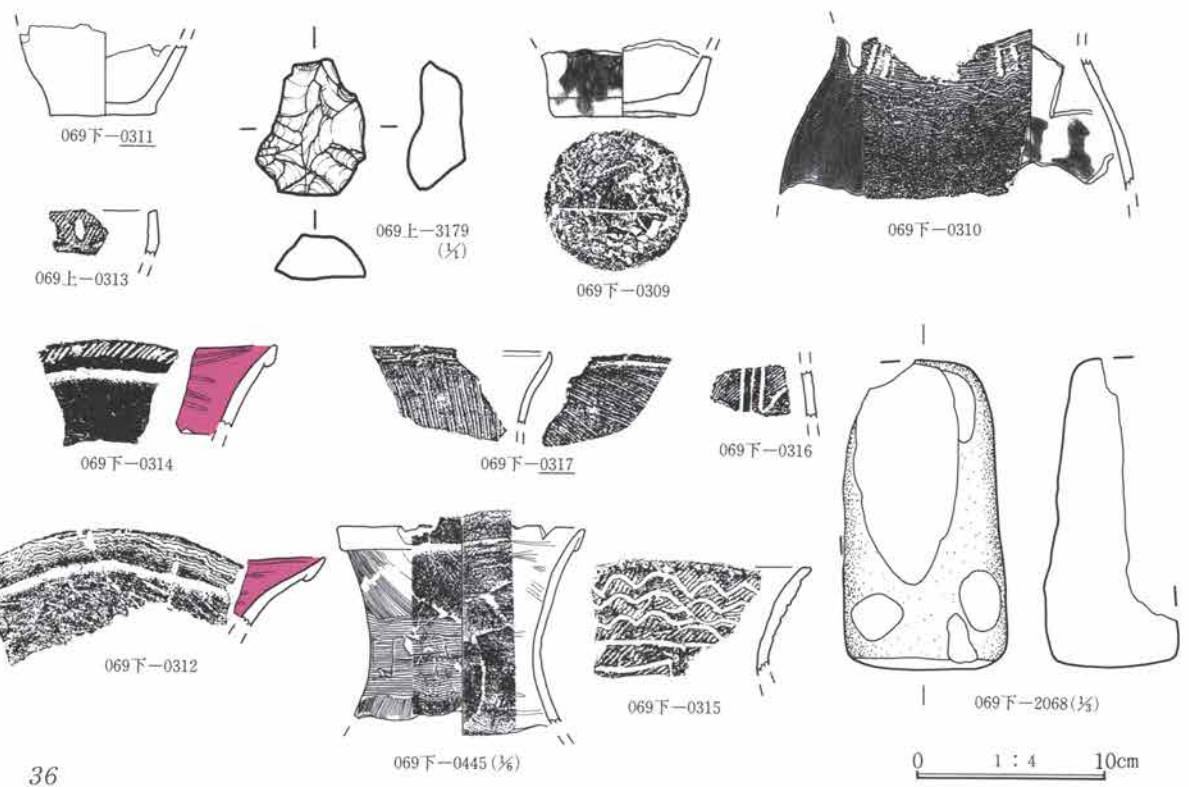
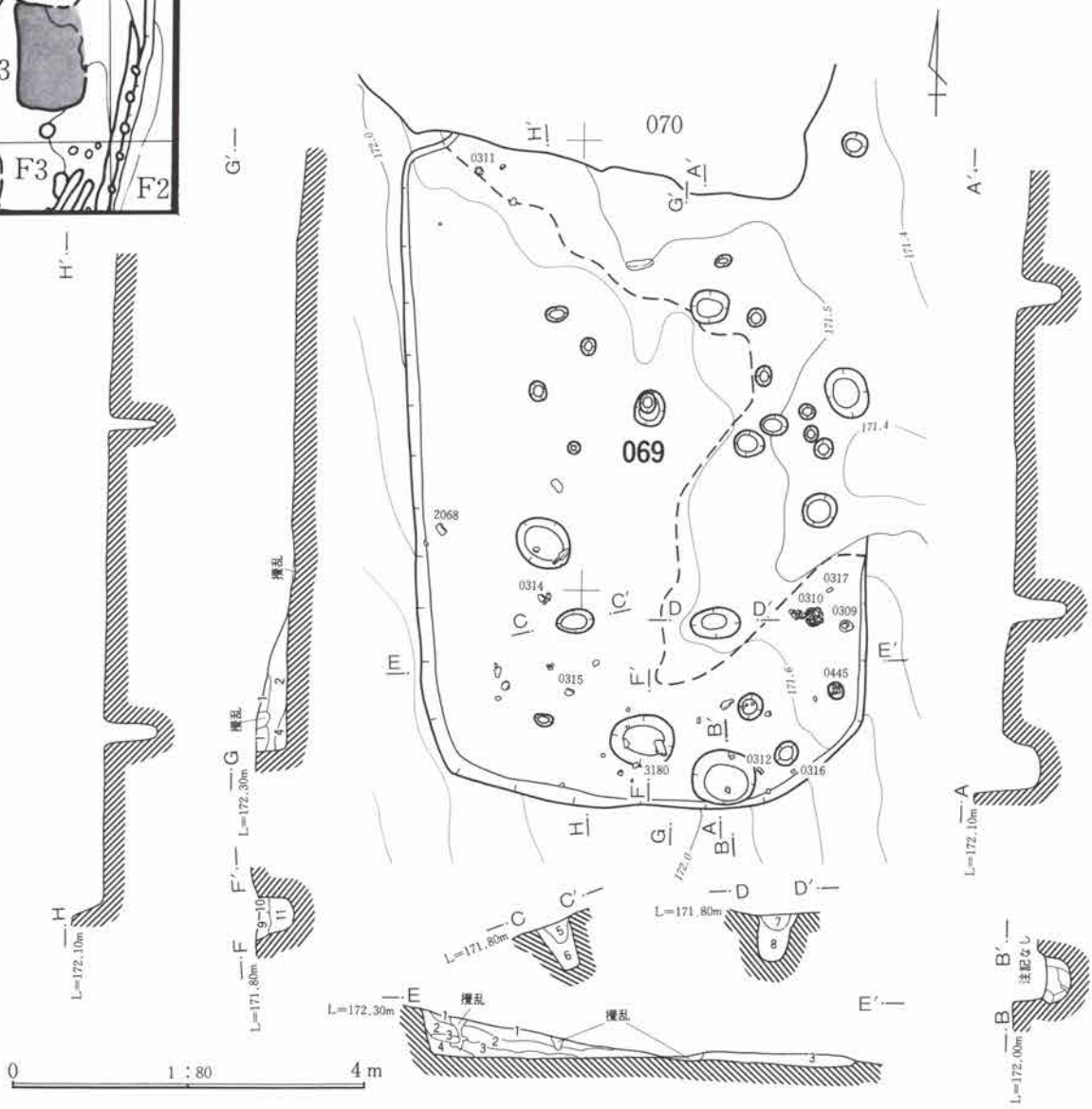
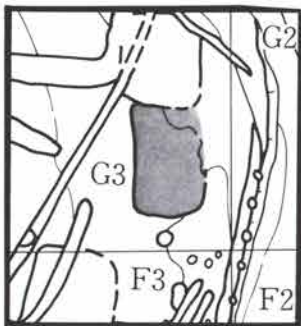
070号遺構 【図p.34,35 PL.24,25】

東斜面東側上位で検出した弥生後期の竪穴。

【重複】西側を溝068号と方形周溝墓022号に壊され、北西側を溝002号に切られる。南側では同じ弥生後期竪穴の069号と重なるが、層位的には新旧関係を確認できなかった。【埋土】1暗褐白粒含炭化物少含 2黒褐砂質炭化物焼土少含 3暗褐炭化物焼土混 4黒褐砂質棒状痕 5褐ローム塊 6褐ローム多 7黒褐ローム多炭化物焼土粒少含 8黒白粒ローム塊少含 9褐ローム塊多 10暗褐粘質塊多 11暗褐粘弱ローム焼土少含 12黄褐粘質弱ローム主 13暗褐砂質ローム粒少含 14鈍い黄褐粘質弱ローム主 15褐粘質弱ローム白粒多 16暗褐粘質弱ローム塊焼土少含 【壁床面】西側を除いて壁を検出したが残存部分は極めて低い。床面は比較的良好に検出した。【炉など】北側柱穴間外側にあり、炉石が残る。南壁際に浅い掘り込みが見られた。【柱穴】プランに相似形の長方形配列で4個の主柱穴を確認。また東壁際で2個の側柱穴を検出した。【遺物】上層(1,2層)から土製匙(0161)・弥生ミニチュア(0163~65)・不明土製品(0167)・弥生中期壺片(0169)・前期鉢片(0170)・硬質泥岩打製石斧(2072)・牛伏砂岩磨り石(2074)・チャート製石鏃(3109)が見られた。下層(3~10層)では土製匙(0168)・同勾玉(0166)・弥生ミニチュア(0162)・弥生後期小型鉢(0173)・同高坏(0159)・同大型壺(0160)・中期甕壺片(0171,72)・雲母石英片岩円盤状磨り石(2069)・同板状磨り石?(2070)・牛伏砂岩板状磨り石(2071)・黒色片岩棒状磨り石(2073)が出土した。【備考】埋土の状況より、火災を受けた可能性がある。比較的稀少な匙とミニチュアが上下両層で見られるが、一応本来上層のものとしてほしい。

1 台地部の遺構と遺物





069号遺構 【図p.36,37 PL.24,26】

東斜面中央上位で確認した弥生後期の竪穴。

【重複】北側で弥生竪穴070号と重なるが、層位的には関係不明。【埋土】1褐締弱ローム粒含 2褐締弱ローム粒多 3暗褐締強ローム粒混 4褐ローム塊多 5褐粘弱ローム粒少含 6黄褐ローム塊多 7暗褐締弱ローム少含 8褐粘強ローム塊少含 9暗褐締弱焼土粒少含 10黒褐締弱焼土粒少含 11褐粘弱ローム粒炭化物少含 (BB'断面不明) 【壁床面】北東側1/3以上がすでに削られていた。西壁と南壁西側以外には基本的に残っていない。【炉など】炉は、床が飛んでいた推定北壁側に炉石状の石が見られたのみである。南壁際には2基の貯蔵穴ピットがあった。【柱穴】南側に2個の板状柱穴(CD断面)を検出し、対応する位置で北側にも2個の柱穴がある。その他にも多数のピットが見られたが、貯蔵穴状ピットが2基あることから、別の支柱穴の配列が存在した可能性もある。【遺物】上層(1層)からは、弥生後期壺片(0311)・中期壺片(0313)・黒曜石加工痕ある剥片(3179)が見られた。下層(2~4層)では弥生後期甕(0309, 10, 0445)・同壺(0312, 14, 17)・同中期甕鉢片(0315, 16)・変質安山岩敲き石(2068)が出土した。【備考】070号とはほとんど平行の位置にあるため、それほど大きな時期差はないと考えられる。

075号遺構 【図p.37~39 PL.27~30】

東斜面南東端上位で確認した古墳。

【重複】南東側でテラス007号、北東側で溝079・080号、竪穴143号、北西側で土坑142号・柱穴群145号に切られる。また北西側で竪穴087号・土坑095号、中央で竪穴131号・土坑141号を壊す。なお、南側半分は調査範囲外になる。

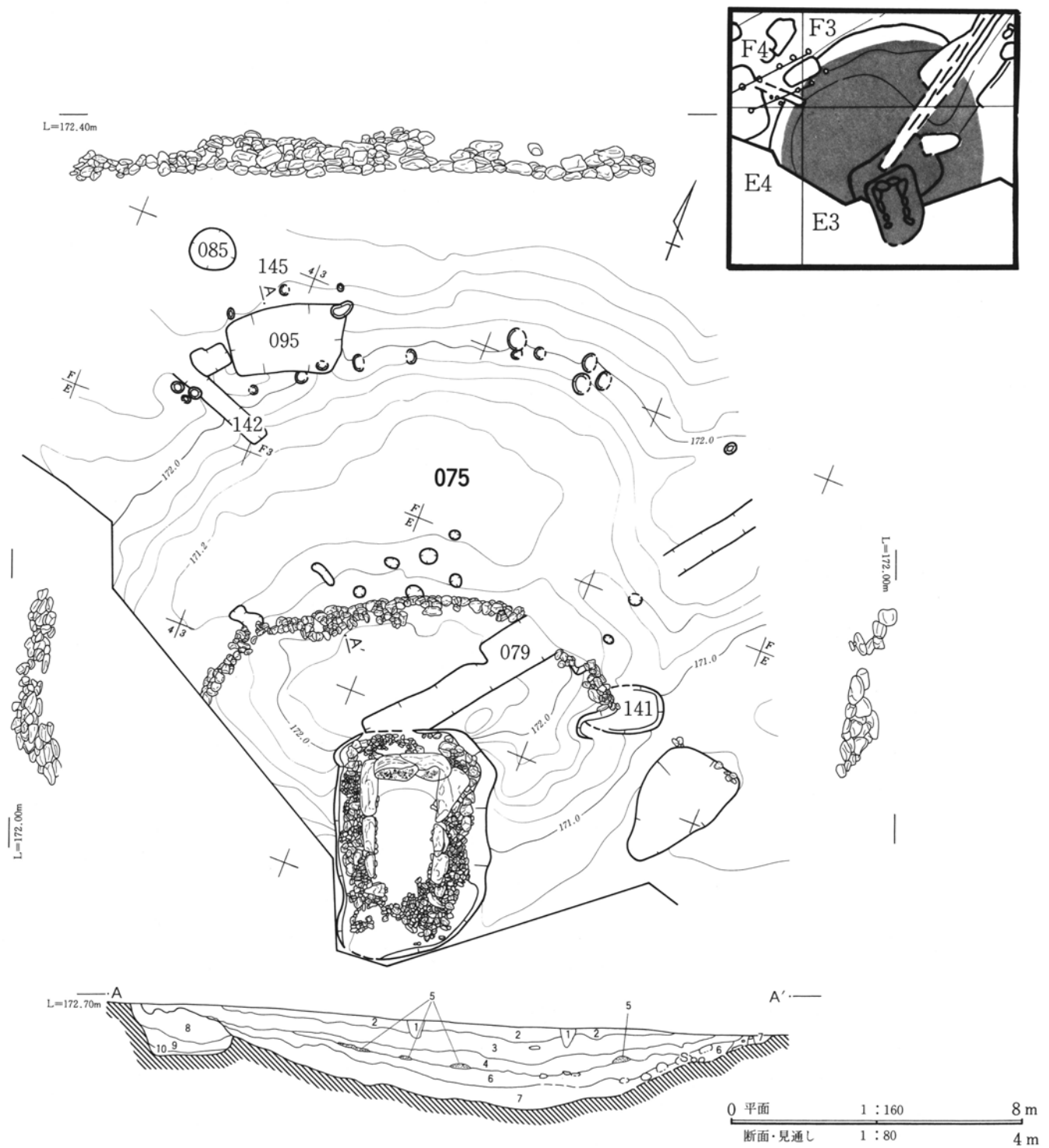
【外部埋土】1褐砂質浅間A軽石多 2黒褐砂質浅間B軽石少含 3黒褐砂質浅間B軽石多 4黒褐砂質浅間B軽石多 5鈍い黄褐軽石(浅間B) 6黒褐粘質葦石多混 7暗褐粘質締弱ローム粒多 8暗褐粘質締弱ローム粒混 9褐粘質締弱 10暗褐粘質締弱炭化粒少黄褐粒混 ※8~10は土坑095号埋土

【外部構造】少なくとも山側に堀(上幅最大9m最小5m確認面からの深さ0.6m)がめぐっているが、幅は一樣ではない。007号に切られた南東側では堀の存在は不明。墳丘はほとんど残存していなかったが、裾部に小児頭大の礫による葦石下部が見られた。この葦石列は、平面的には直線を基準にした多角形的(不等辺十角形か)であり、残存部分は主体部真後ろに稜を持つ1辺5mほどの4本の直線で構成されている。ただし稜をなす部分も、特別の石があるわけではない。葦石下の残存マウンドは完全な盛り土である。

【主体部埋土】1攪乱 2暗褐砂質締弱礫混 3暗褐粘質締弱大型礫混 4褐粘質締弱ローム粒炭化焼土粒混 5暗褐粘質ローム粒炭化焼土粒混 6黄褐ローム塊混 ※東西断面は131号図に記す

【主体部構造】平面両袖型の横穴式石室(玄室内法2.6×1.5m)。地山に浅い掘り込み(5.7×3.5mほど)を設け、そこに長辺3個短辺1個の牛伏砂岩巨石を配して玄室を作る。奥壁を中心に室内面と一部上面を平坦に整えているが、小礫を充填した裏側は自然のままである。床面は炭化・焼土粒を含む粘質土を敷いた後に小礫を敷き詰めて形成された痕跡が見られる。羨道部分はすでに削られており不明だが、掘り方の状態より長さは2m程度だろう。

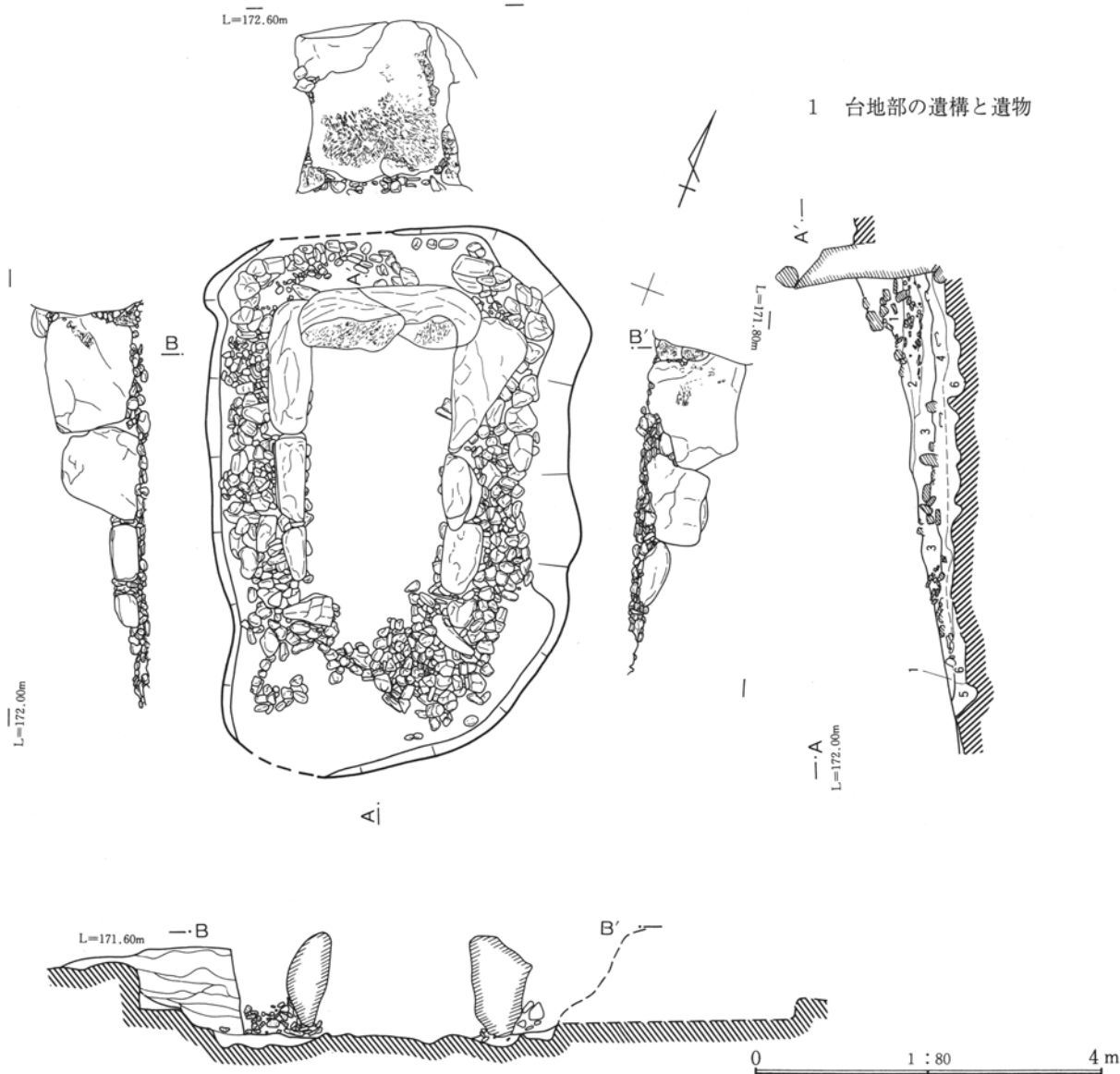
【遺物】上層(堀1~6層・石室内1,2層)から出土したものは比較的多く、中近世の染付碗(0242)・同猪口(0243)・灰釉小皿(0244)、古代の須恵器羽釜(0238)、推定古代の轆片(0240)・窯体片(0241)、古墳時代須恵器甕(0239)・同壺(0233)・同土師器甕(0235, 36)、弥生後期壺片(0215, 19)、同中期甕壺鉢片(0216, 17, 20, 21, 23)、同前期鉢片(0225)、縄文鉢片(0226, 27, 29, 30)、黒色安山岩(2092)と黒色片岩(2093)の打製石斧、砥沢石(2091)と砂岩(2094)の砥石、黒色片岩の棒状磨り石(2095)、黒曜石(3111)とチャート(3112)の石鏃、



銅キセル吸口片(4013)と鏃(4018)・刀子(4026)・不明品(4025)の鉄製品があった。一方、下層(堀7層・石室内3~6層)からは、主体部で古墳土師器埴(0257)、金銅耳環(4002)そして154個以上のガラス小玉(8003 紺・青・緑・黄各色と透明)を検出し、堀で古代須恵器坏(0237)、古墳土師器壺(0232)、弥生中期壺鉢片(0218, 22)・同前期甕片(0224)、黒曜石石核(3187)、鉄角釘片(4024)が出土した。

【時期】直接被葬者に関わる遺物は耳環とガラス小玉だけであり、その他は時期決定とは関係しない。横穴式石室の形態より古墳時代後期と考える。

【備考】主体部南半は甘楽町教育委員会の委託により調査を行い、調査終了後に主要な石は移築のため同教委に移管した。本墳の所在地(天引2484-2, 2477番)には、『上毛古墳総覧』での古墳記載はない。なお古代推定の輪と窯体片の出土は、近くに金属器生産遺構が存在した可能性を伺わせる。ただし、今回の調査では関連する遺構は見られなかった。また昭和初年の地籍図には、東斜面下から本墳石室に至る小道が記されて

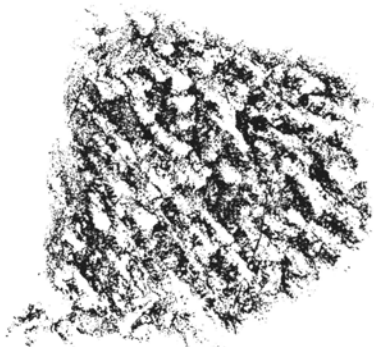


1 台地部の遺構と遺物

おり、また染付猪口は石室上層から出土したため、18世紀後半には石室は開口していた可能性が考えられる。



奥壁加工痕(1/6)



奥壁加工痕(1/6)

131・141号遺構 【図p.39,42,43 PL.31,32】

東斜面南側上位の古墳075号の下で確認した遺構群。

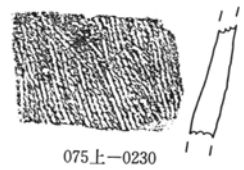
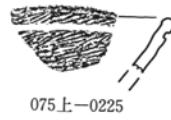
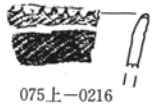
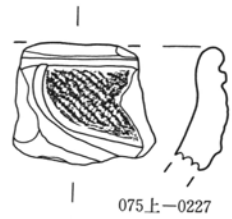
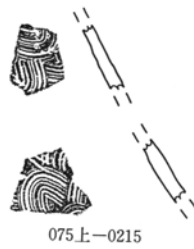
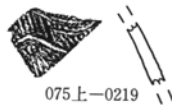
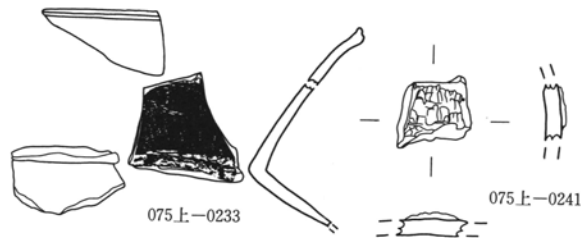
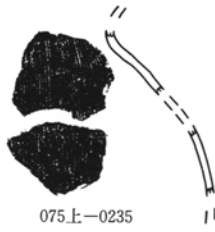
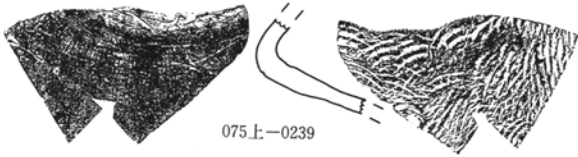
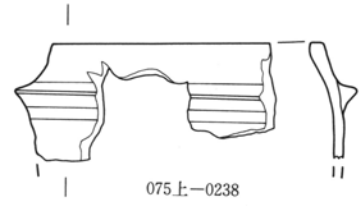
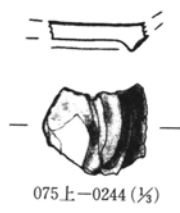
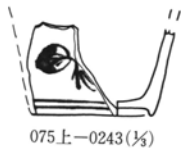
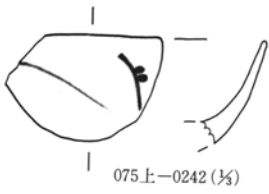
141号は、古墳時代前中期の土坑。【重複】131号より新しい。

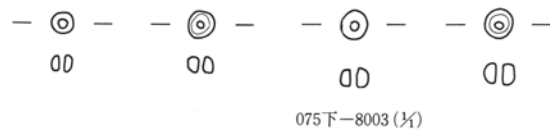
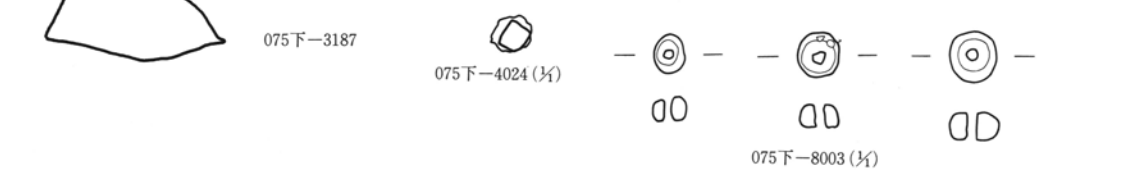
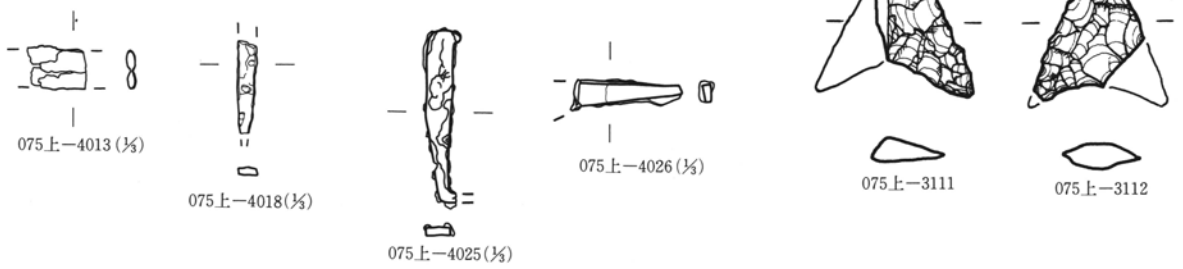
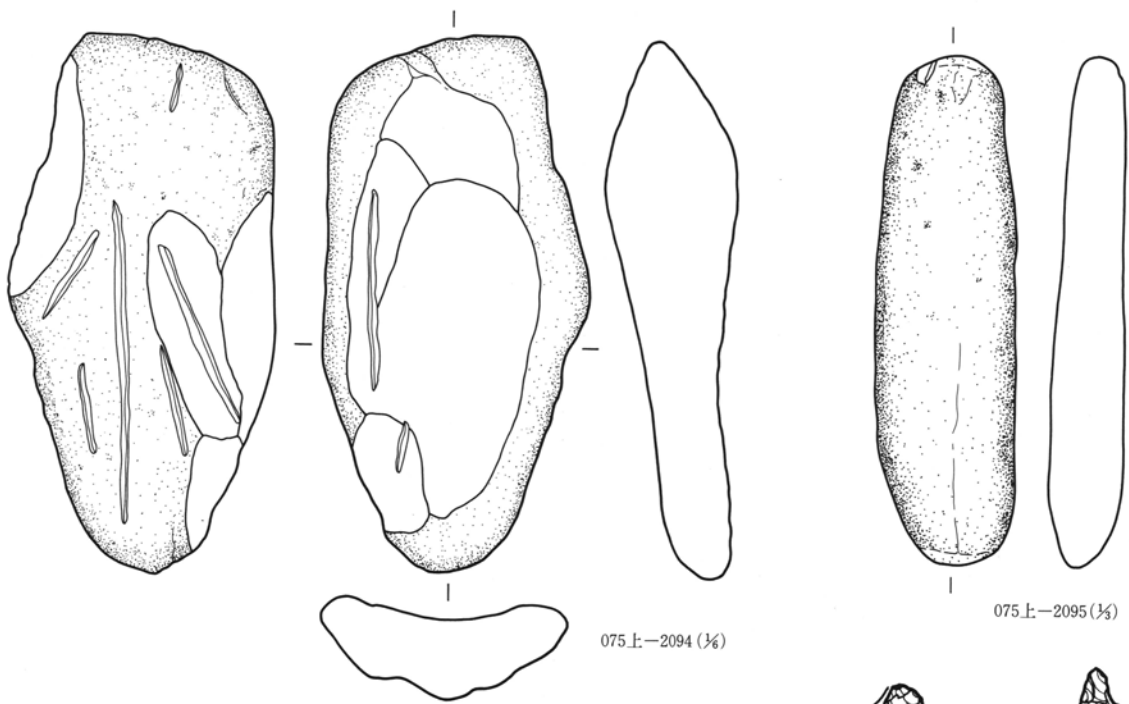
【埋土】1黄褐ローム塊多 40褐ローム粒小含 41暗褐ローム粒中含 42暗褐ローム粒小含 43暗褐浅間C軽石含 6,44暗褐炭化粒少含 7,45褐締弱ローム粒少多含

【形態】底が平らな平面長方形。【遺物】なし。【備考】時期は重複関係より考えたが、性格不明。

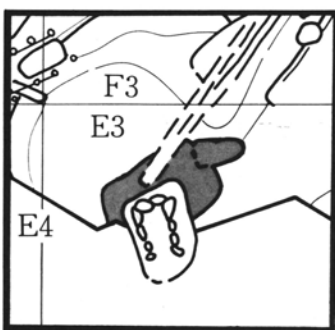
131号は、弥生後期の竪穴。【重複】東側で土坑141号に切られる。【埋土】2黒褐締弱 3暗褐ローム粒少含 4黒褐ローム粒少含 5褐ローム塊炭化粒混 8,37褐ローム粒多 9,38暗褐炭化粒白軽石含 10,39黄褐ローム粒主 11暗褐ローム粒多 12暗褐ローム粒小礫混 13黒褐小礫混 14暗褐ローム粒炭化粒含 15褐締良ローム粒多 16暗褐ローム粒混 17暗褐小礫炭化粒(p.43へ)

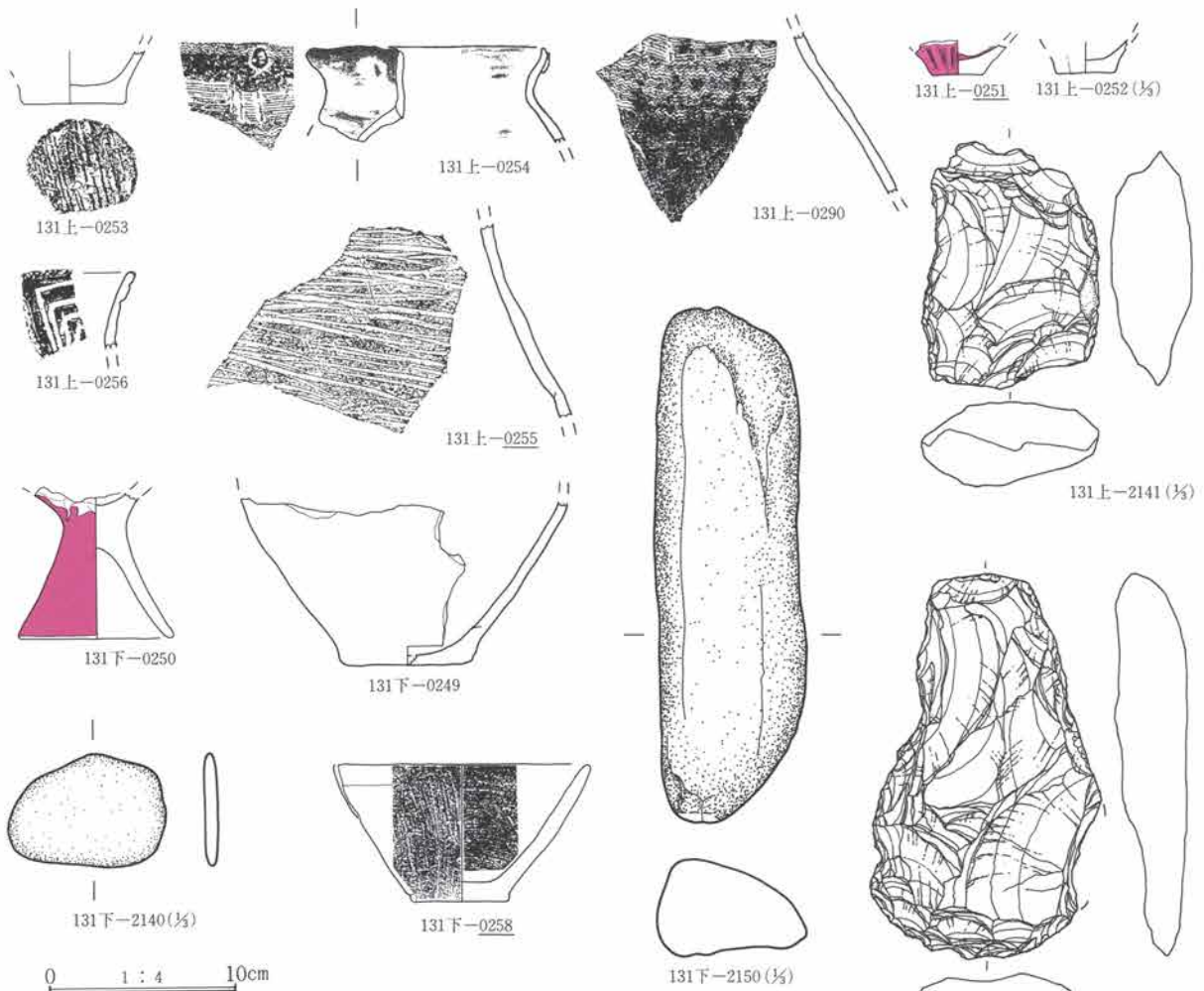
第II章 検出遺構と遺物





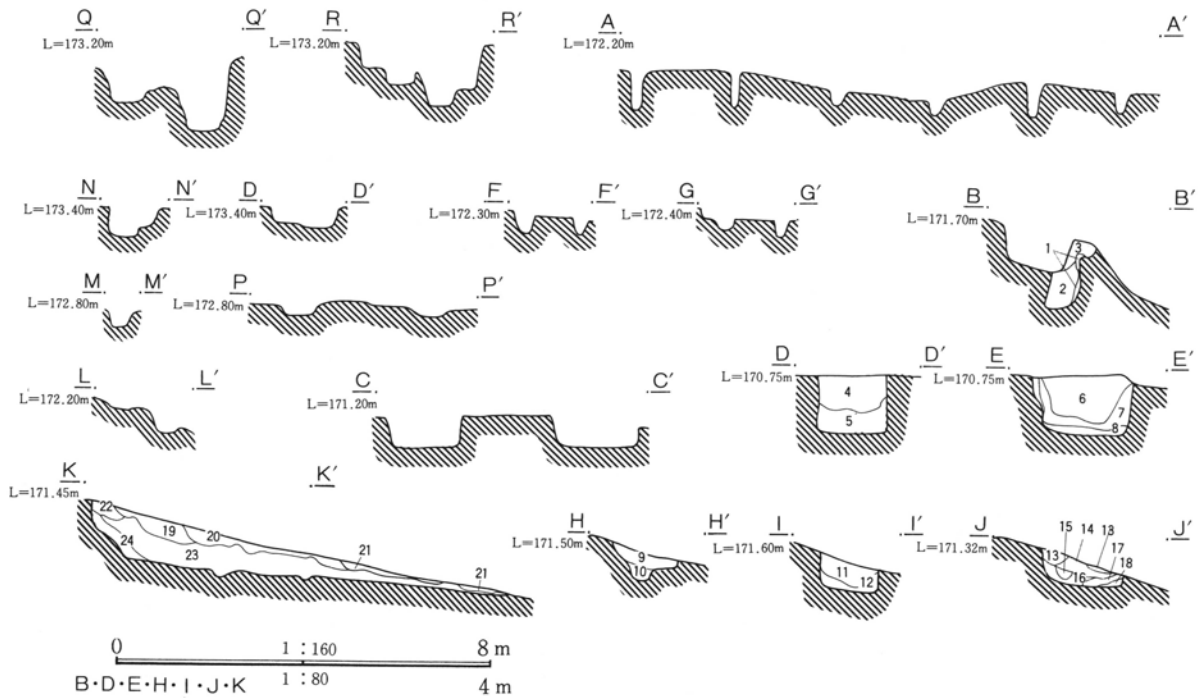
0 1 : 4 10cm





(p.39から) 混 18黄褐ローム粒多 19暗褐ローム炭化焼土粒多 20黄褐締強ローム塊炭化粒混 21褐ローム炭化粒混 22暗褐ローム粒含 23黄褐ローム主 24褐ローム塊混 25黒ローム粒少含 26褐ローム粒小多 27暗褐ローム粒混 28暗褐ローム粒中含 29黒褐 30暗褐ローム粒中含 31黒褐 32黒ローム粒小多 33黒褐 34暗褐ローム塊大混 35暗褐 白軽石含 36暗褐ローム粒小含 【壁床面】 古墳075号の主体部に壊された南東側を除いて、比較的良好に検出。明瞭な床面を示す131号の西端は10cmほどの浅い立ち上がりを示し、平面形も突出傾向になる。

【炉など】 東側柱穴間で、焼土と炉石を検出。【柱穴】 ほぼ長方形配置で4個の主柱穴があり、その他にもいくつか性格不明の柱穴を確認。【遺物】 上層(12,13,35,36)からは弥生後期甕(0253,54)・壺(0290)・小型鉢(0251)・ミニチュア(0252)・同中期細頭壺(0256)・壺甕?(0255)・珪質頁岩(2141)と変質安山岩(2151)及び雲母石英片岩(2152)の打製石斧が見られた。下層(9,10,13~22,37,38,39)では、弥生後期壺(0249)・高坏(0250)・小型鉢(0258)と流紋岩の石包丁状磨り石(2140)と雲母石英片岩の棒状磨り石(2150)が出土した。【備考】 調査時には平面形態と床面の相違から重複した竪穴と考えたが、層位的にはむしろ一つの遺構とした方が妥当であり、075号の主体部に壊されているため不明瞭ではあるが、南西側のやや高い部分は入り口側の高まり部分と見たい。



002,004~009,012,013,060,068,076,078~080,125,144,151,152号遺構

【図p.44~46 PL.23,33~39,70,80】

台地上で確認した近世・近代を中心とする遺構群。

002,060,068,076,078~080,125,151,152号は、近世の溝。【重複】002号は近代の集石016~018号より古く、中世の道路033号より新しい。東側では開墾跡007号と重なり、柵列013号を壊す。002号と125号も重なるが関係不明。060号は近世の土坑群132号と重なる。076号と152号及び土坑144号も重なる。

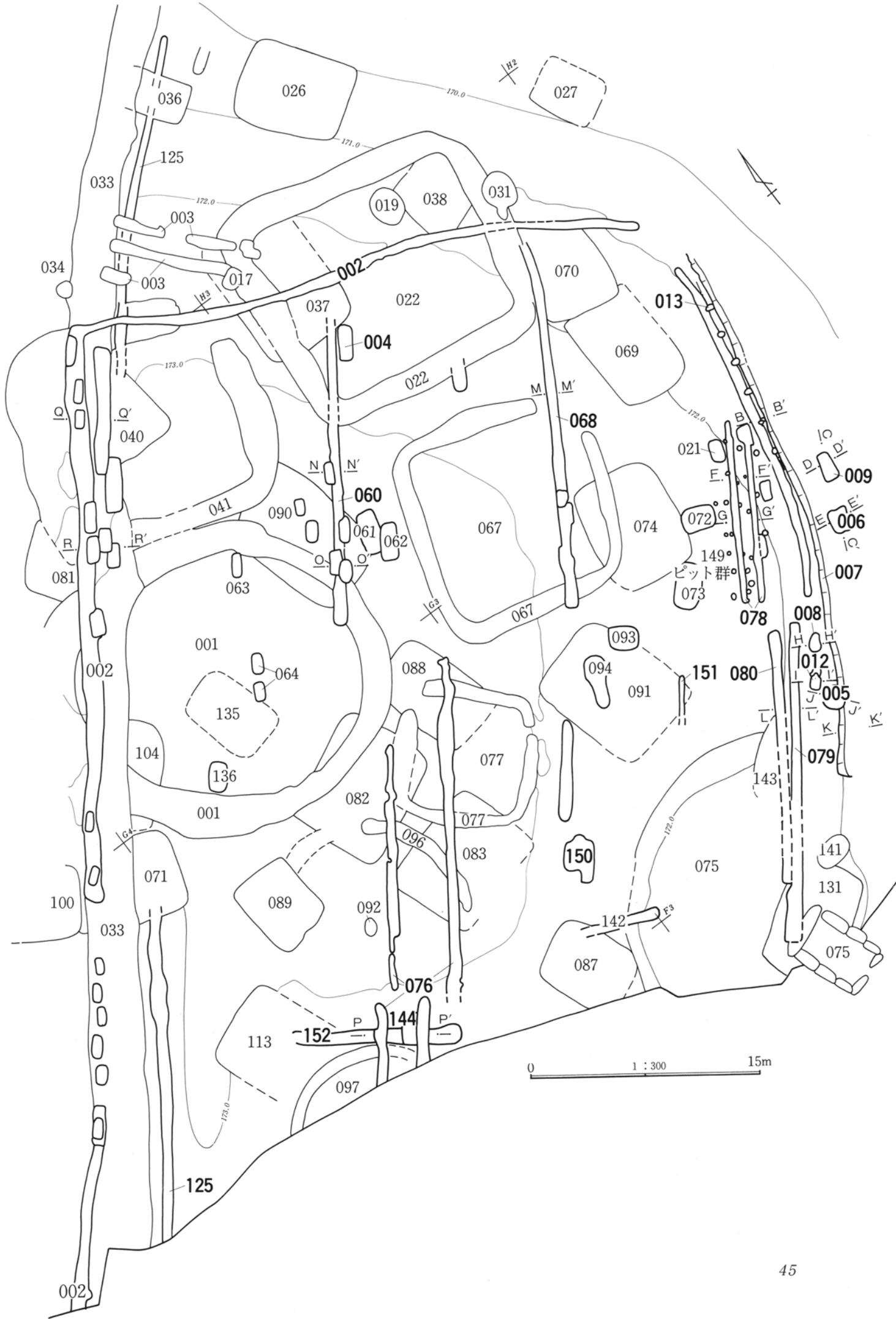
【埋土】記録はとれなかったが、大半が浅間B軽石の混じる褐色砂質土。【形態】002号は調査範囲内ではほぼ台地上の平坦部の形状に併せて（幅40m長さ60m以上）、長方形の広い区画を形成している。北東隅は切れて、東側はやや弧状に20m強走る。全体の走向は決して直線的ではなく、また内部も西側が東側より1m以上高い。西側は、箱形土坑が同じ走向で重なっている。その他の溝は、033号にほぼ完全に平行する125号と東西方向に走る152号を除いて、いずれも同じ少し東に偏した直線的な南北走向。【遺物】002号上層から弥生中期壺片(0070)・打製石斧(硬質泥岩2015変質安山岩2016)・L字形鉄金具(4027)、060号から弥生前期甕片(0071)、076号から近世泥面子(0180,81)と弥生中期甕壺片(0178,79)が出土した。【備考】002号は土地範囲を示す区画溝と考えられるが、昭和初期頃の地割りととは一致していない。125号は、033号の後進で調査開始前まで残っていた道路の側溝だろう。その他の溝は、畠地のサクの可能性が高い。

007号は、近世の開墾跡。【重複】柵列013号と近接し、土坑006・009号と重なる。【埋土】19浅間A軽石 20オリブ褐A軽石多 21オリブ褐A軽石更多 22オリブ褐A軽石少 23オリブ褐ローム混 24西壁崩落土 【形態】平坦部の幅は南側が広い(5~10m)。【遺物】上層より銅キセル雁首片(4010)と磨製石斧状磨り石(緑色片岩2018)が出土。【備考】浅間A軽石降下より古く、出土キセルより18世紀中頃の造成と考えられる。

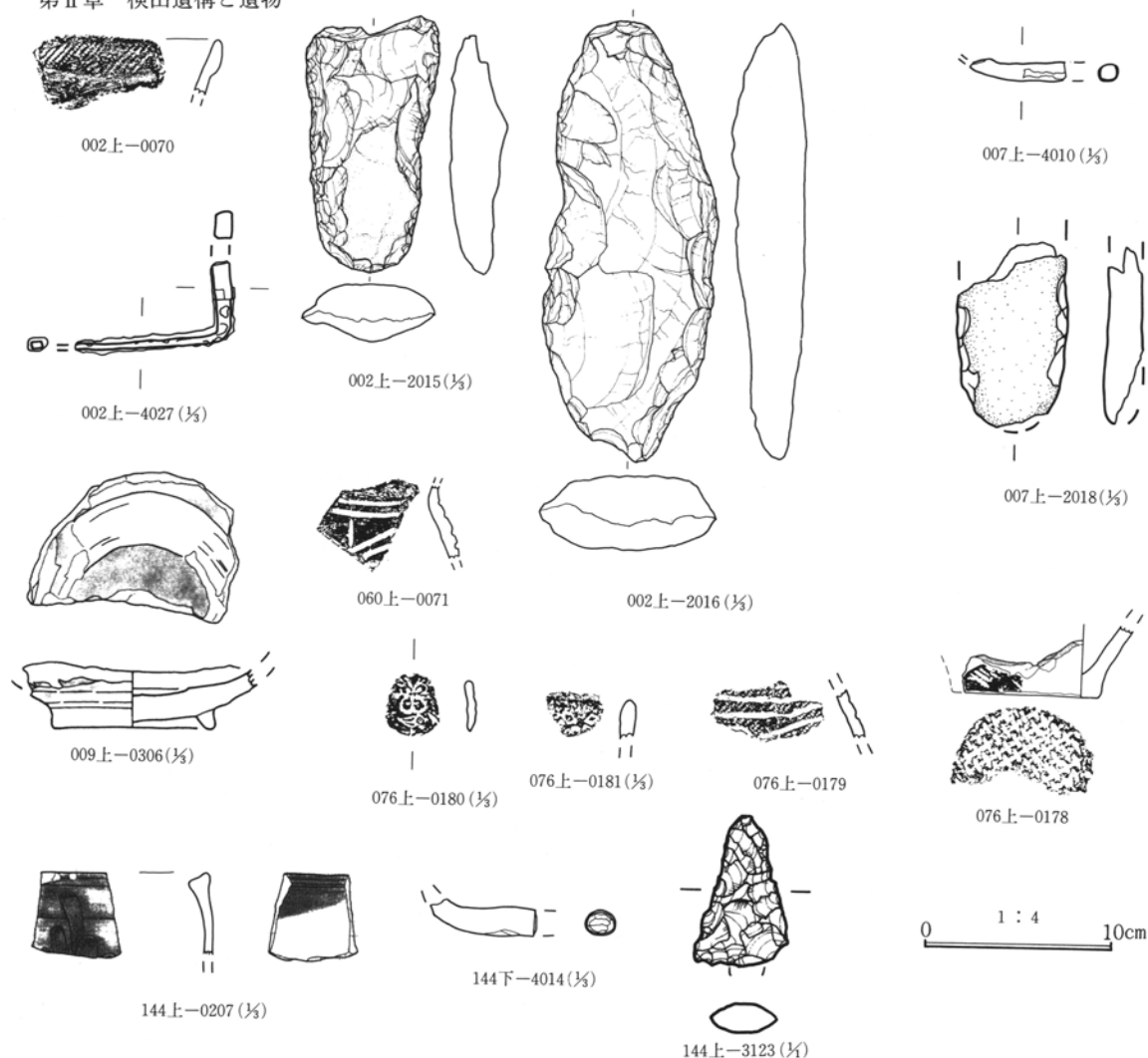
013号は、近世の柵列。【重複】002号東側の溝に壊され、開墾跡007号に近接。【埋土】1オリブ褐織強ローム含 2灰黄褐粘質ローム含 3黄褐締良 【形態】直線状(10m)に等間隔で6個の柱穴(径0.3m最大深さ0.6m)が並ぶ。

【遺物】なし【備考】東斜面に向かう地境の木柵跡で、位置から見て007号より古く18世紀前半頃の築造か。

004,006,008,009,012,144号は、近世の土坑。【重複】006・009号は開墾跡007号と重なる。144号は溝076・152号と重なる。【埋土】4暗オリブ褐黒土塊混 5暗オリブ褐締無 6オリブ褐浅間A軽石混 7汚ローム粘性無 8地山 9オリブ褐A軽石混 10オリブ褐黒土多 11オリブ褐A軽石混 12明黄褐汚ローム 【形態】004・006・009・144各号は箱形。008・012両号は不定形。(p.46へ)



第II章 検出遺構と遺物



(p.44から)【遺物】009号上層より瀬戸美濃志野釉皿(0306)、144号上層より瀬戸美濃飴釉香炉(0207)・キセル雁首(4014)・黒曜石有茎石鏃(3123)が出土。【備考】009・144号は遺物より18世紀前半頃の時期である。006号も同様の可能性があるが、他は18世紀末以降と考えられる。

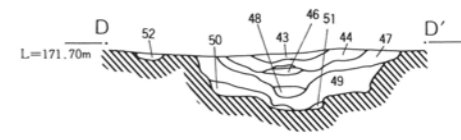
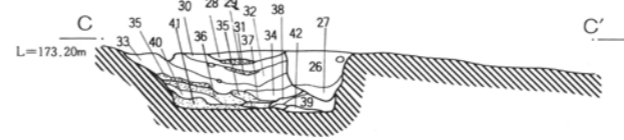
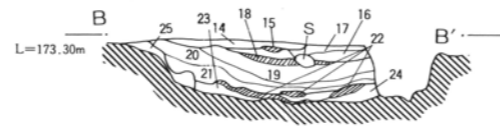
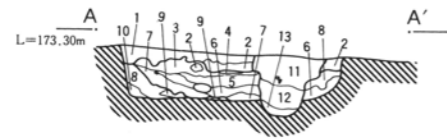
005号は時期不明の土坑。【重複】開墾跡007号と重なる。【埋土】13暗灰黄締弱 14黒褐軽石少含 15暗オリーブ褐 16暗オリーブ褐 17暗灰黄汚ローム塊 18地山ローム 【形態】楕円形 【遺物】なし 【備考】顕著な特徴なし。

033号遺構 【図p.46~51 PL.38~41,58,59】

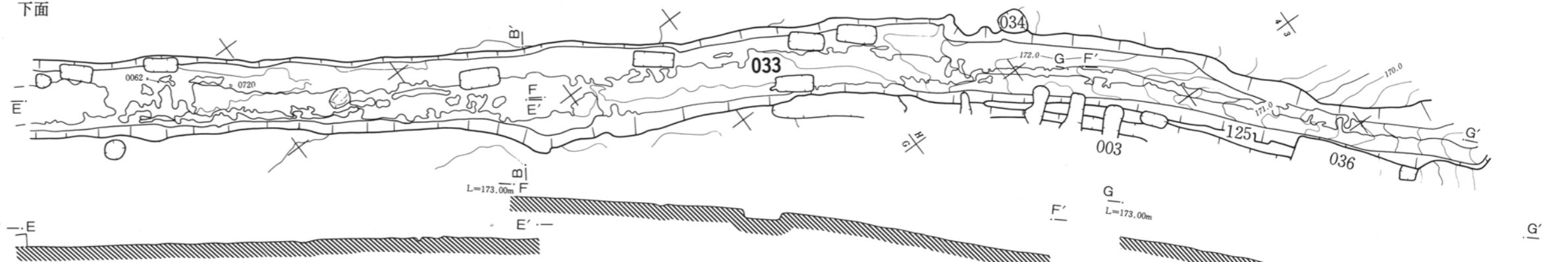
台地上西側で検出した道路。

【重複】南側3/5以上で近世の溝002号に切られ、古墳001号・方形周溝墓041号及び6基の弥生後期堅穴・土坑034号を壊す。ピット群052・053号また土坑003・130号との関係は不明。ほぼ真上には調査開始前に使われていた農道が走る。

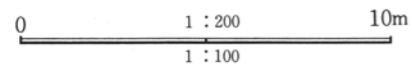
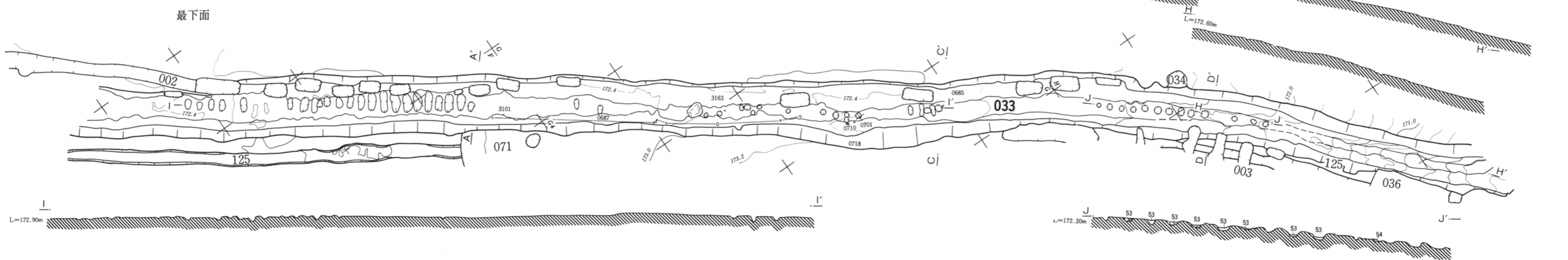
【埋土】1オリーブ褐ローム塊大多浅間A軽石多 2オリーブ褐 3黄褐ローム塊多 4暗灰黄締強 5オリーブ褐締無 6オリーブ黒褐締無 7暗オリーブ褐B軽石少 8暗オリーブ褐締無小石粒多 9暗オリーブ褐締強 10黒褐ローム塊 11黄褐締強A軽石ローム塊多 12暗オリーブ褐締強ローム塊多 13暗オリーブ褐締無A軽石ローム塊多 14オリーブ褐B軽石小多 15黒褐締強 16オリーブ褐B軽石小多 17暗灰黄締無B軽石小多 18暗灰黄締強 19オリーブ褐締強小石多 20オリーブ褐粘性強 21オリーブ褐締強小石多 22黒褐締強上下鉄分 (p.50へ)



下面

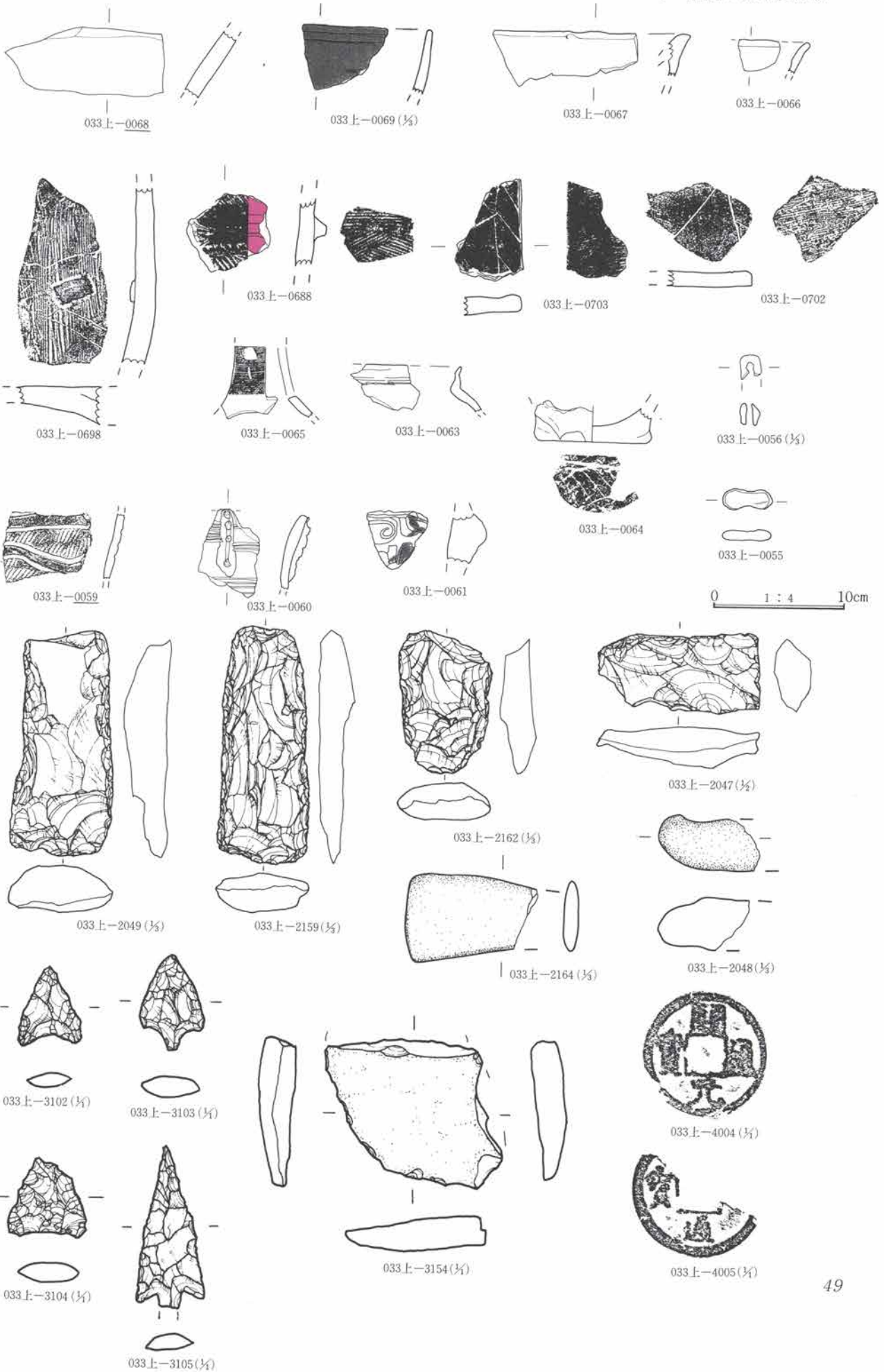


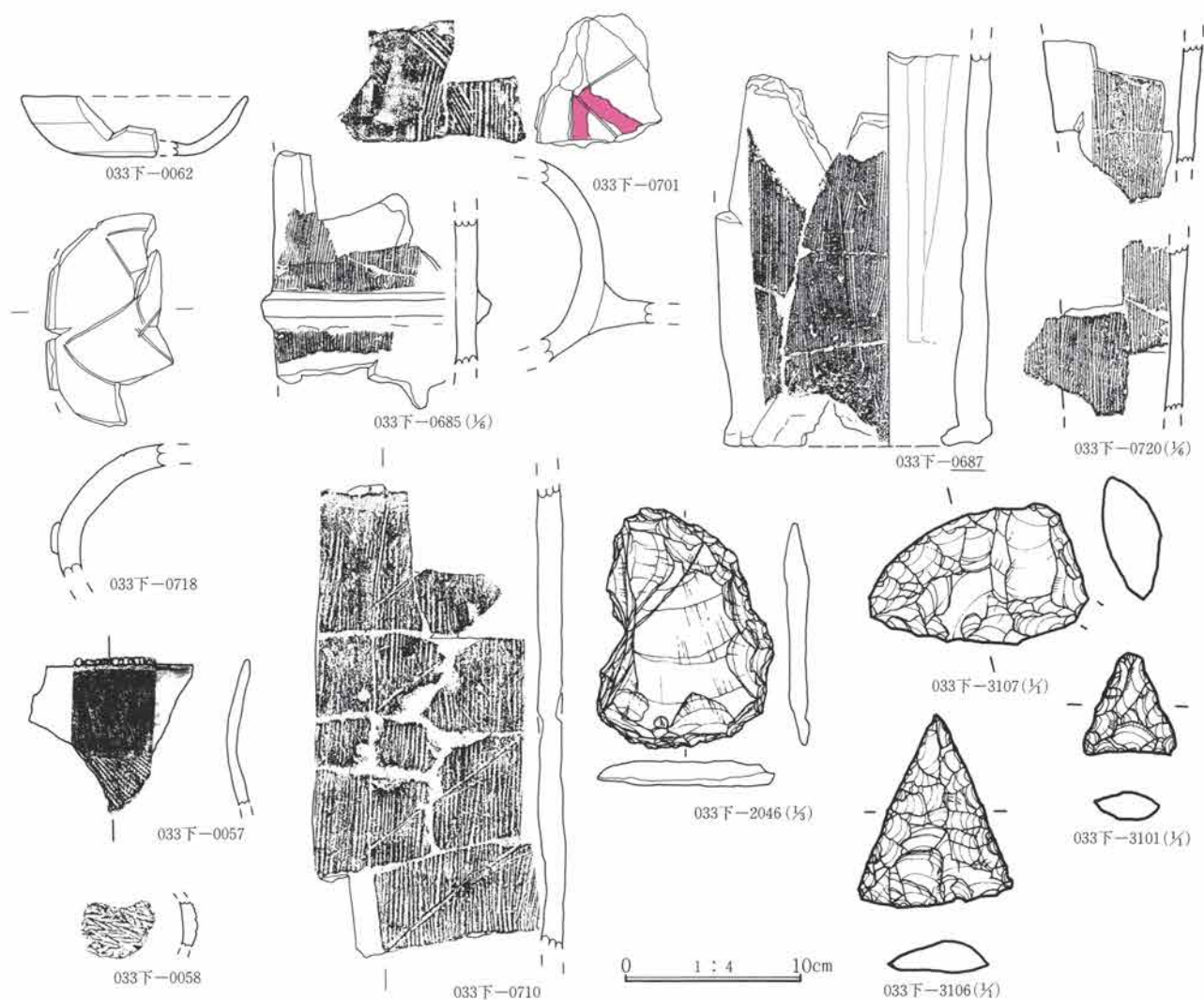
最下面



A·B·C·D

1 台地部の遺構と遺物





(p.46から)23オリーブ褐締強ローム塊大多 24黒褐締強砂粒小多 25明黄褐締強ローム塊含 26暗褐締無A軽石小混 27暗褐 28褐B軽石少 29暗褐締強砂ローム粒凝固 30暗褐炭化粒微小 31褐締強 32褐締弱 33褐締無 34暗褐 35暗褐混灰黄褐 36褐締強ローム粒混 37黒褐締強鉄分混 38暗褐締強 39暗褐締弱 40褐締弱ローム粒主 41褐締強ローム粒混 42暗褐締弱 43褐締弱A軽石混 44褐締弱 45暗褐炭化粒小混 46暗褐締強 47暗褐粘性弱B軽石小混 48鈍い黄褐締強小礫混 49褐締弱 50黄褐ローム粒混 51灰黄褐締強 52暗褐締弱B軽石小混 53褐締良砂ローム塊混 54鈍い黄褐締強砂鉄分含

【形態】調査範囲内では、北東・南西方向にはほぼ直線状で90mほど走る。少なくとも上面(4,19,31,46各層)と下面(9,22,36,48各層)そして最下面の三つの路面がある。基本的に底の平坦な堀状(上幅3m底幅2m深さ0.8m)に台地を削って造成している。最下面は並ぶ窪み部分を補修して使用している。最下面と下面間の間層は比較的薄い、下面と上面の間はやや厚い。上面の埋没の後に溝002号に伴う土坑が掘られており、さらにその上に調査直前の農道面がある。

【遺物】上層(下面埋土以上)からは、肥前陶胎染付碗(0069)・常滑系焼締コネ鉢(0068)・中世土師器埴(0067)・古代須恵器碗(0066)・形象埴輪(靱0698器材0688楯0702,03)・古墳須恵器高坏(0065)・同土師器台付甕(0063)・弥生後期甕類等(0055,56,64)・同中期甕壺片(0059,60)・縄文鉢片(0061)・打製石斧(硬質泥岩2049,2162珪質頁岩2159)・削器(硬質泥岩2047)・石包丁状磨り石(牛伏砂岩2048)・石包丁状磨り石(牛伏砂岩2164)・打製石鎌(黒曜石3102,04)・有茎石鎌(チャート3103黒色頁岩3105)・加工痕ある剥片(黒曜石3154)・開元通宝(4004)・不明銅銭(4005)が出土した。また下層(最下面埋土・下面構成層)では、古代土師器坏(0062)・形象埴輪(楯0701靱0718器材0685,87,0710,20)・弥生後期甕(0057)・縄文鉢(0058)・打製石斧(硬質泥岩2046)・打製石鎌(黒曜石3101チャート3106)・石匙(チャート3107)が見られた。

【備考】遺物の出土状況からは直接各路面の築造年代を決定する資料には乏しいが、層位的に検出した3面は中世から近世中期（18世紀）の間に入ることは間違いないだろう。残念ながら掘状の大規模な工事による最下面の時期は、これらの遺物のみからは特定できない。古墳001号を壊しているために、埴輪の出土が多くなっている。

022・031号遺構 【図p.51～53 PL.23,41～43】

台地上北東端で検出した遺構群。

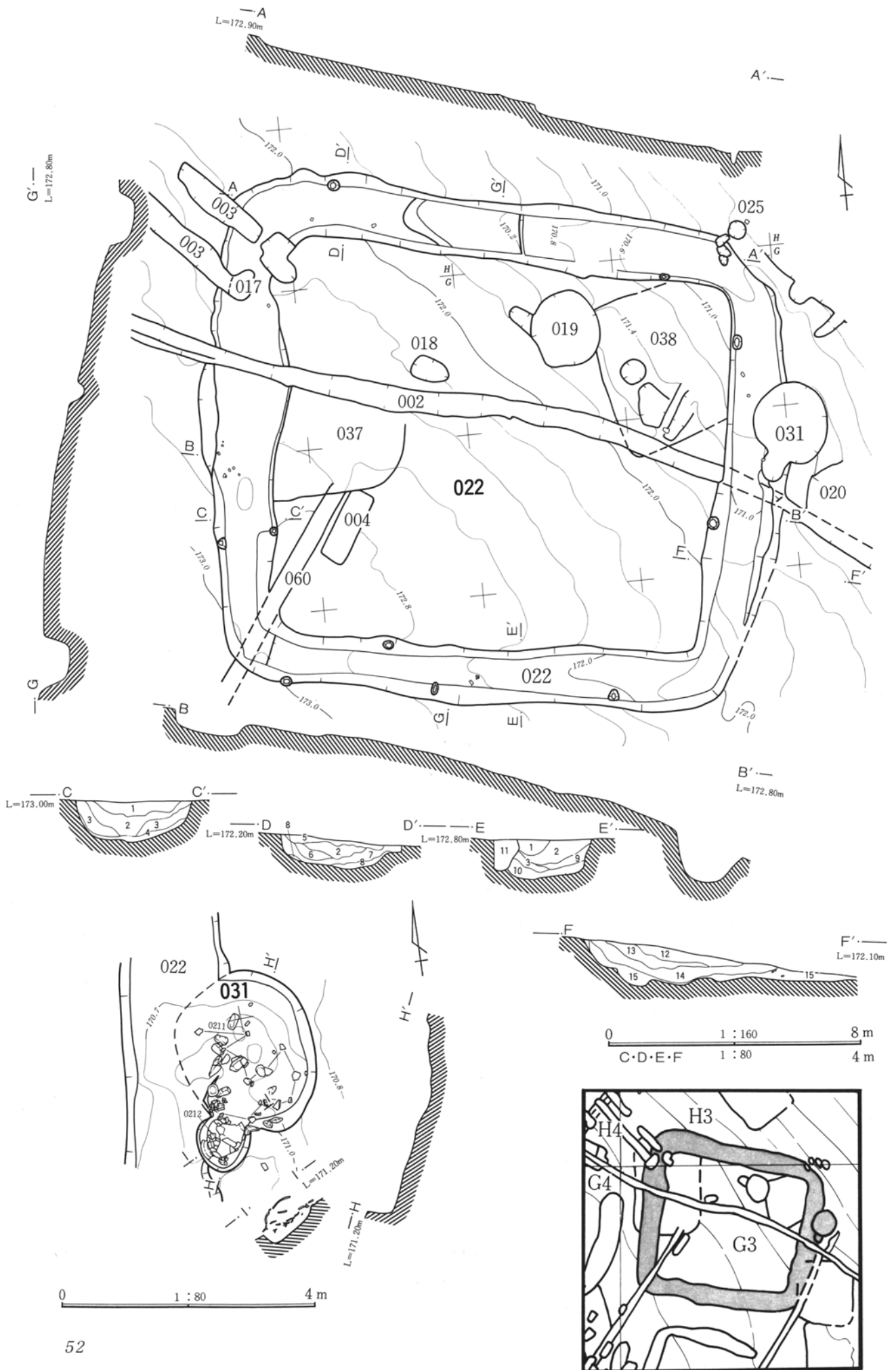
022号は、古墳時代前期の方形周溝墓。【重複】近代・近世の溝と土坑に部分的に切られている以外に、北東側では古代の土坑023号が重なる。内部では弥生後期の堅穴037・038号を検出した。031号とは東辺の溝で重複するが、層位的には新旧関係を確認していない。【埋土】1暗オリーブ褐締弱 2黄褐締弱ローム粒含 3黄褐粘性弱 4オリーブ褐粘性弱 5黒褐締弱浅間A軽石少含 6鈍い黄褐締良 7褐締弱 8黄褐粒子粗汚ローム含 9黄褐ローム粒小多 10暗オリーブ褐締良 11オリーブ褐粘性無ローム粒含 12暗オリーブ褐締弱 13オリーブ褐締弱 14黄褐締弱 15オリーブ黒締弱 【形態】やや台形ぎみの長方形平面（周溝内約14×12m）で、断面U字形が全周する。等高線に対し溝の走向は一致せず、最高所の南西隅と最低所の北東隅の溝底では高低差が大きい（1.7m）。【主体部】確認できなかった。【遺物】上層（1,2,5,6,11～14層）より弥生中期細頭壺片(0148)・縄文鉢片(0131,50)・磨り石(緑色片岩2021)・打製石斧(硬質泥岩2168)・石錐(珪質頁岩3135)・石核(チャート3147)が出土した。下層（3,4,7,8,9,10,15層）よりは、縄文鉢片(0149)・磨り石(砂岩2020)・打製石鏃(黒曜石3099)が見られた。【備考】時代を想定する遺物に乏しいが、031号より新しく、溝が全周することから、古墳時代前期と考える。位置からは、隣接する周溝墓の041号及び067号より後出すると思われる。

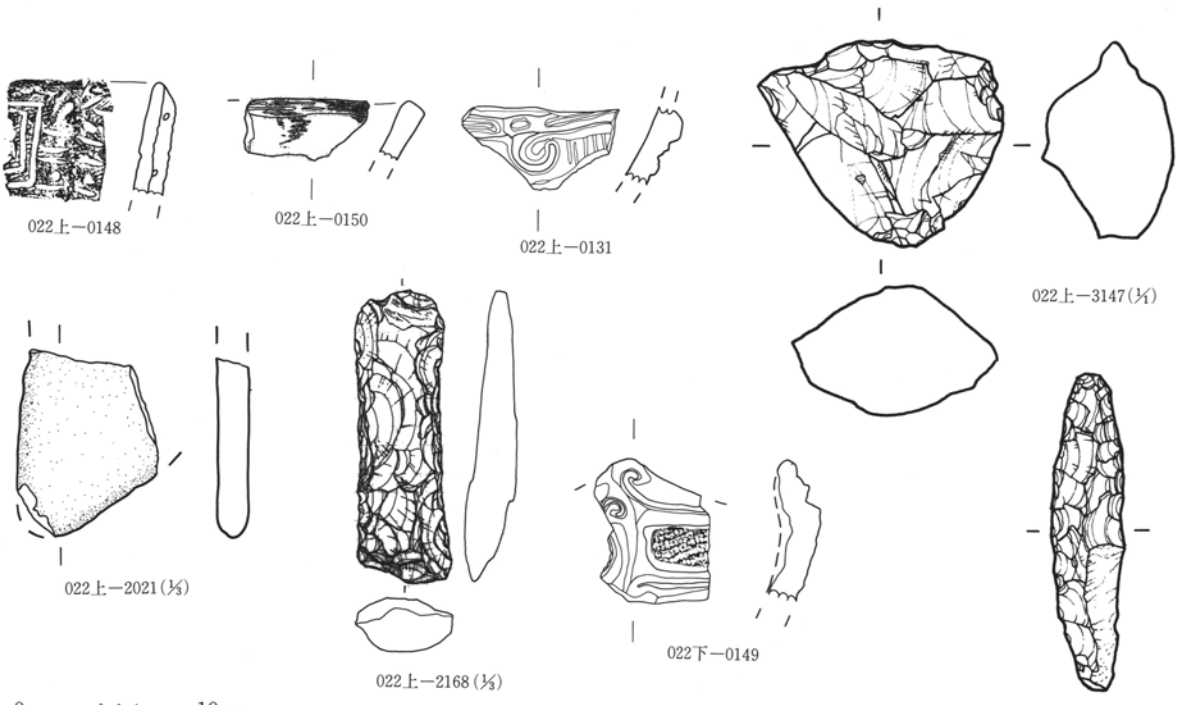
031号は、東斜面側に位置する弥生時代後期の壺棺墓。【重複】方形周溝墓022号の東溝と重なるが、層位的新旧関係は不明。【埋土】記録を取れなかったが、方形周溝墓の埋土と大差はない。【形態】南北に連なる2基の円形土坑よりなる。両者は直径で3倍以上の差があるが、底は同じ高さである。【遺物】北側の大きい掘り込み部分から壺棺(0211)が、南側の小さい掘り込み部分から大型壺(0212)が出土した。両者の破片が重なっていた部分もあり、また022号側には飛んでいない。【備考】当初、022号の延長として掘り進み、また南北の両部分を異なった遺構とも考えたが、破片出土状況より022号より古く、また両部分を同一遺構とした方が妥当と考えるに至った。北側が埋葬坑であるのに対し、南側は副葬坑と見ることができる。

037号遺構 【図p.51,54 PL.43,44】

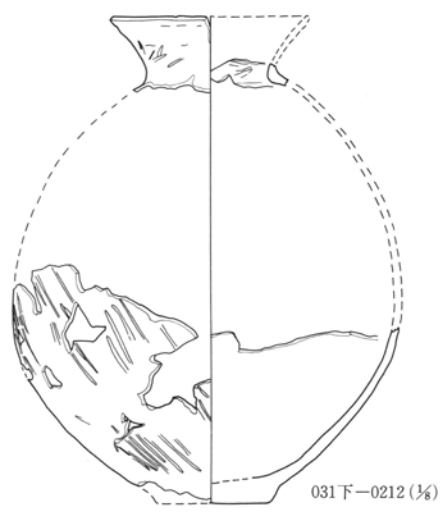
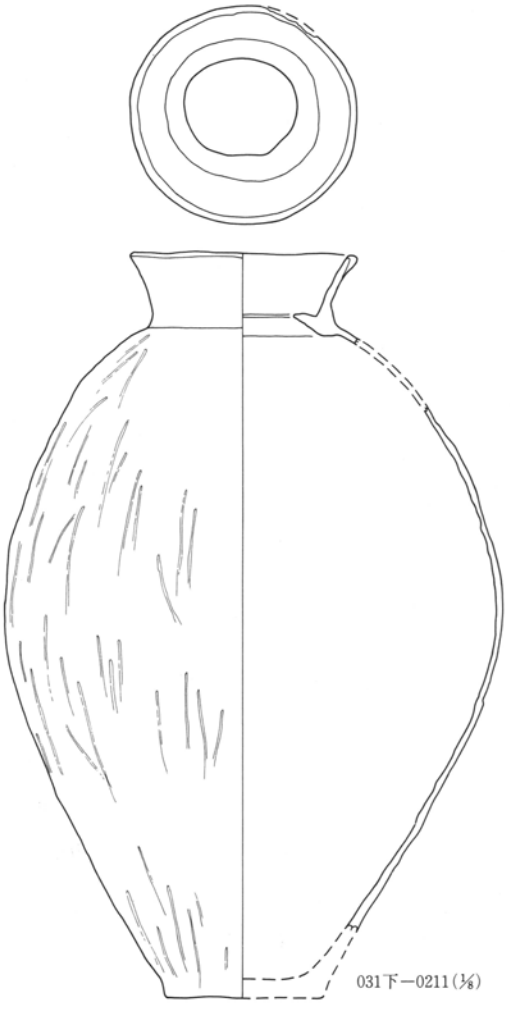
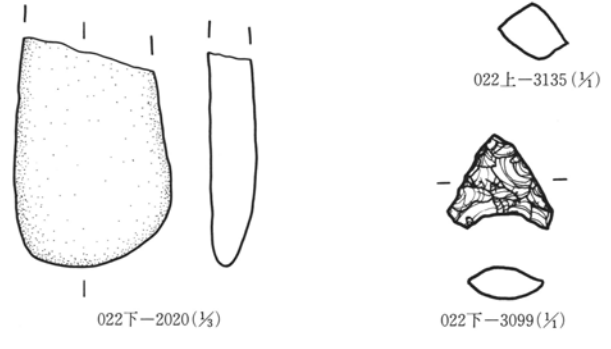
台地上北側で検出した弥生後期の堅穴。

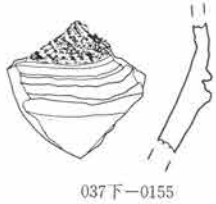
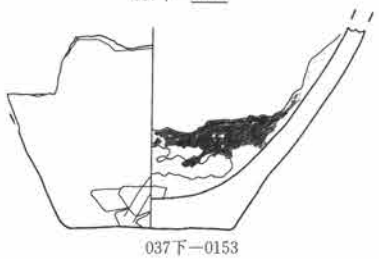
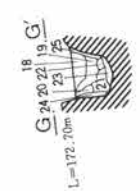
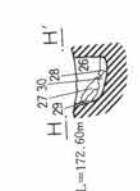
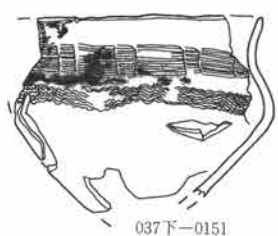
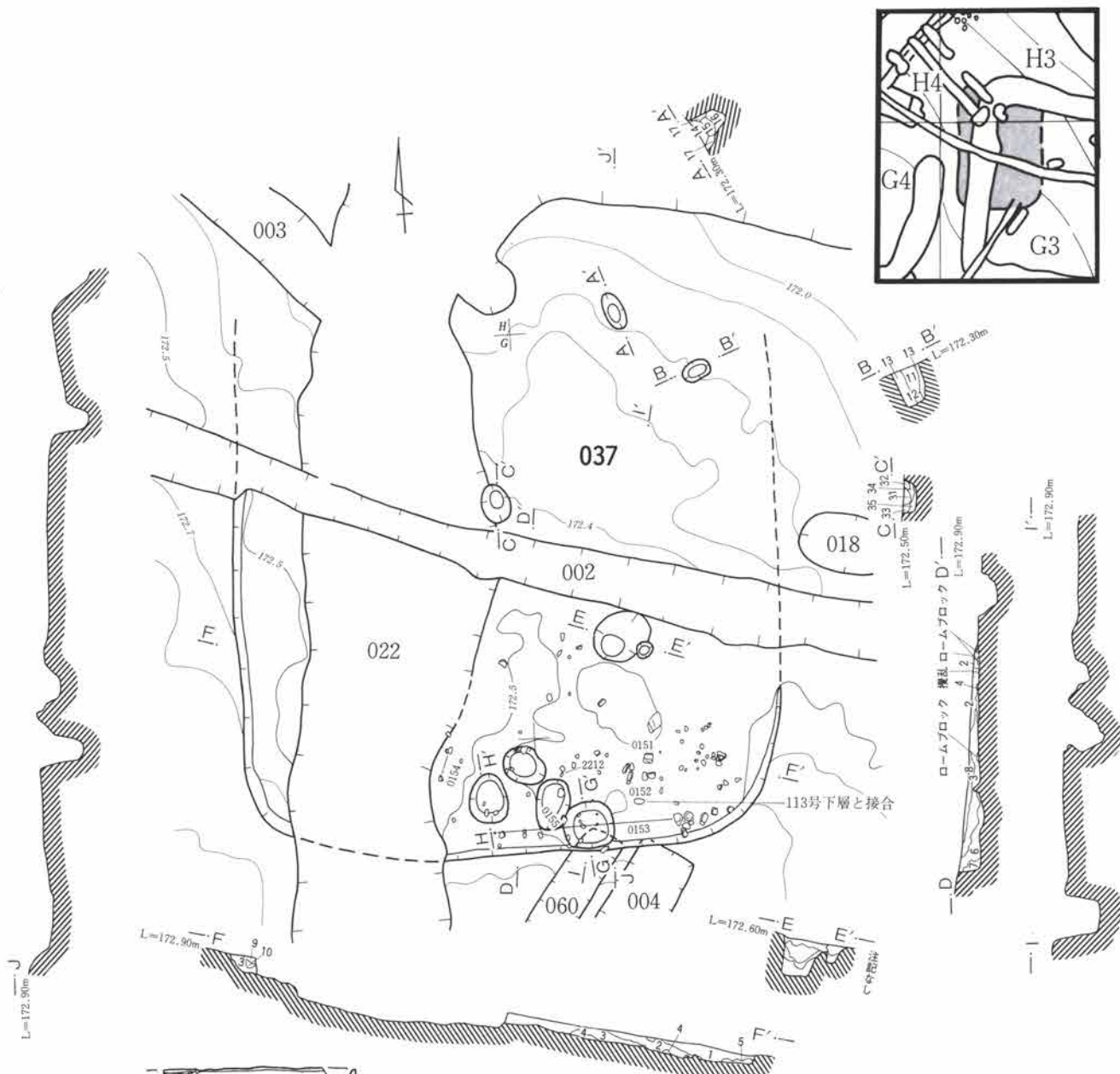
【重複】近代・近世の溝と土坑に切られる他に、方形周溝墓022号に大きく壊され、また同041号が近接する。【埋土】1黄褐粘性無ローム主 2褐粘性無ローム含 3暗褐締無ローム少含 4黒褐粘性無 5黒褐粘性無 6黒褐粘性無 7黒締弱 8褐締弱白黄軽石多 9黒締弱 10暗褐締弱 11暗褐締無小礫含 12褐締無小礫含 13黄褐粘性無地山 14暗褐粘性無 15褐粘性無ローム多 16黒褐粘性無 17黄褐粘性無地山 18黄褐粒子粗白黄軽石少含 19褐土粘性無 20褐粒子粗 21暗褐粘性無 22黒褐粘性無 23暗褐粘性無炭化物混 24褐粘性無ローム粒含 25褐粘性無 26褐粘性無 27暗褐粘性無 28褐粘性無 29黄褐粘性無ローム多 30黄褐粘性無ローム主 31暗褐粘性無炭化物少含 32鈍い黄褐粘性無ローム多 33褐粘性無ローム多 34黒褐粘性無 35黄褐粘性無ローム主 CE断面の土層記録取れず。【壁床】重複と削平が激しいため、南東側のみが比較的残存していた。【炉など】炉は検出できない。南壁に沿って4個のピットを確認したが、西側3基が入り口施設で、東端のものが貯蔵穴と考えられる。【柱穴】東壁側の主柱穴と想定できる2個の柱穴が見られるが、北側が板状であるのに対し、南側は丸材状の柱痕で(p.54へ)



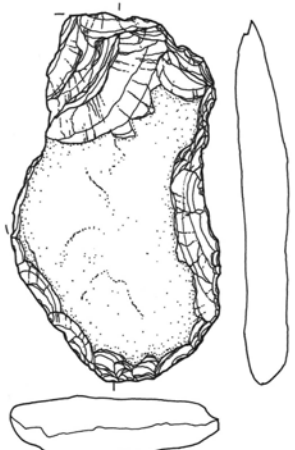
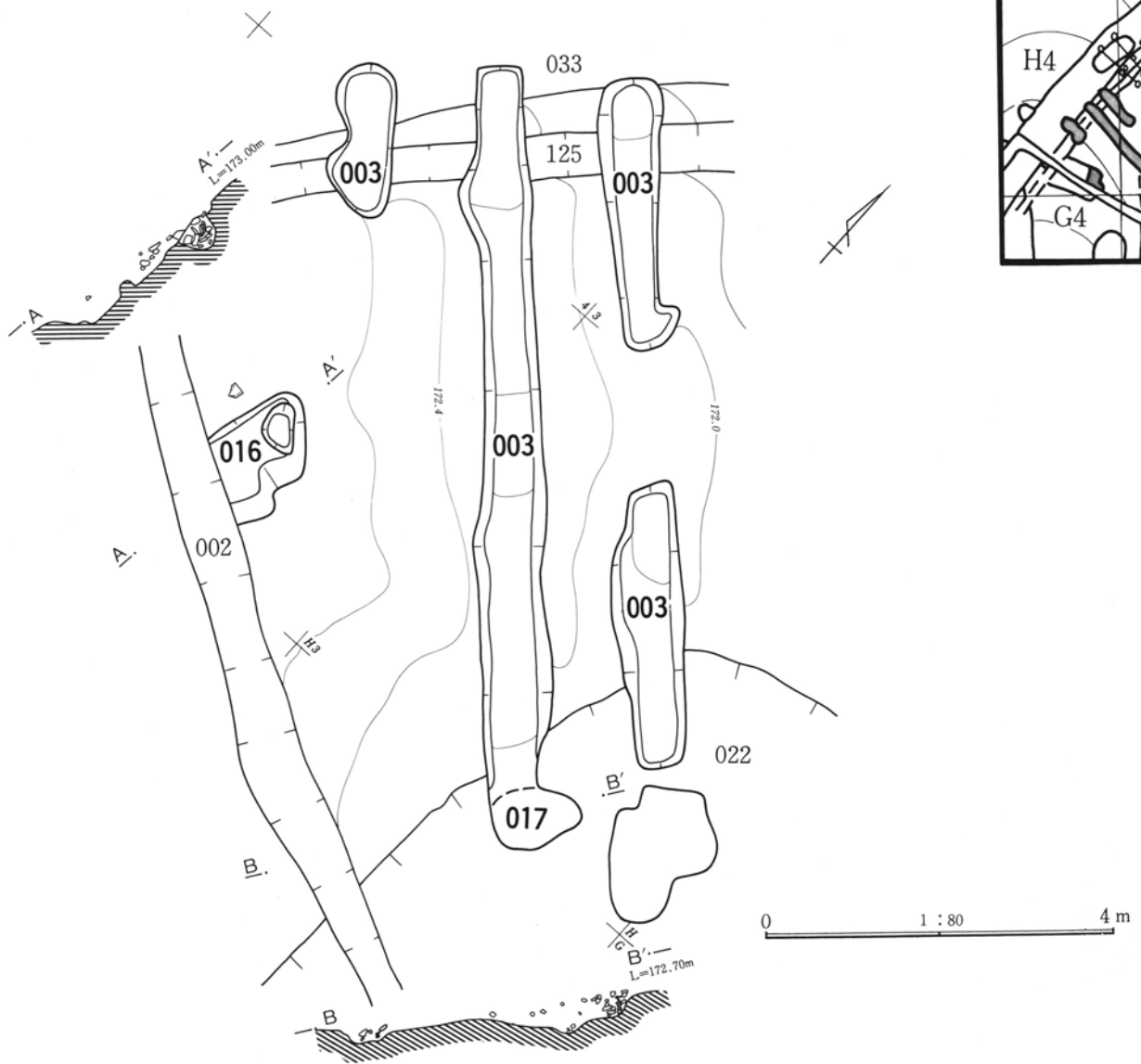


0 1 : 4 10cm





(p.51から)ある。【遺物】顕著な遺物は下層(3~7層)から、弥生後期台付甕(0151)・同高坏(0152,54)・同壺(0153)・縄文深鉢(0155)・管玉(珪質頁岩2212)が見られた。【備考】位置は北西側下の026号などと異なり、等高線の走向に合わず、南北走向になっている。



003上-2017(片)



003下-4003(片)

003・016・017号遺構 【図p.55 PL.44】

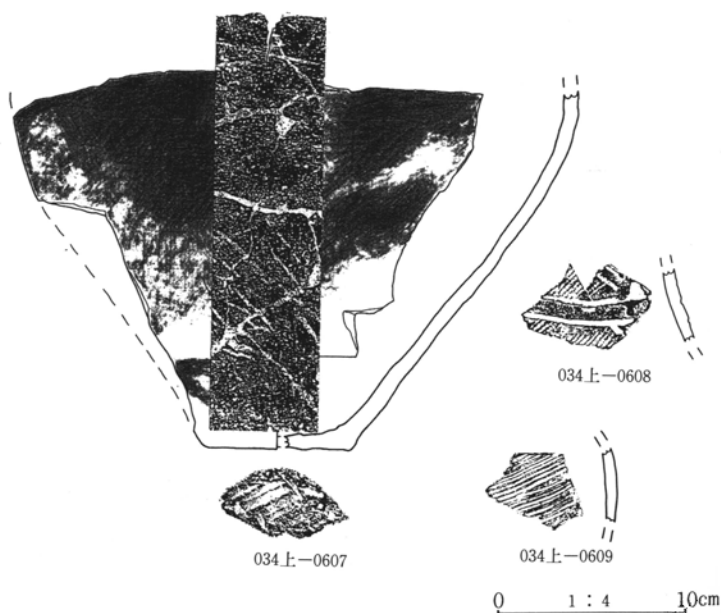
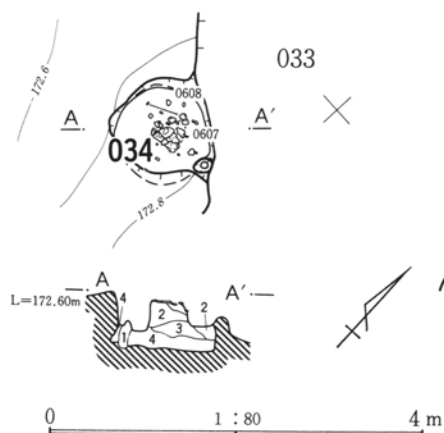
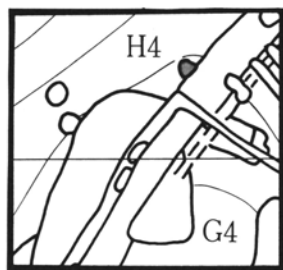
台地上北端で検出した近代・近世の遺構。

003号は、近世の短冊形土坑。【重複】北西側で道路033号を壊すが、溝125号との関係は不明。南東側では017号に切られる。

【埋土】意図的に埋めた混土だが、記録取れず。【形態】底の平らな同一規模(底幅0.4m)のものが等間隔(約1m)で3列並ぶ。

【遺物】上層より打製石斧(緑色片岩2017)、下層より新寛永通宝(4003)が出土。【備考】近世中後期の時期と考えられる。

016・017号は、近代の集石遺構。【重複】016号は近世の溝002号を、017号は003号を壊す。【埋土】いずれも拳大の各礫が充填されていた。【形態】不定形。【遺物】遺物なし。【備考】東側の018~020号と同様であり、ほぼ同一線上に並ぶ。地割り境界石積み of 廃棄坑か。



034号遺構 【図p.56 PL.44】

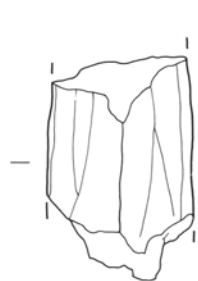
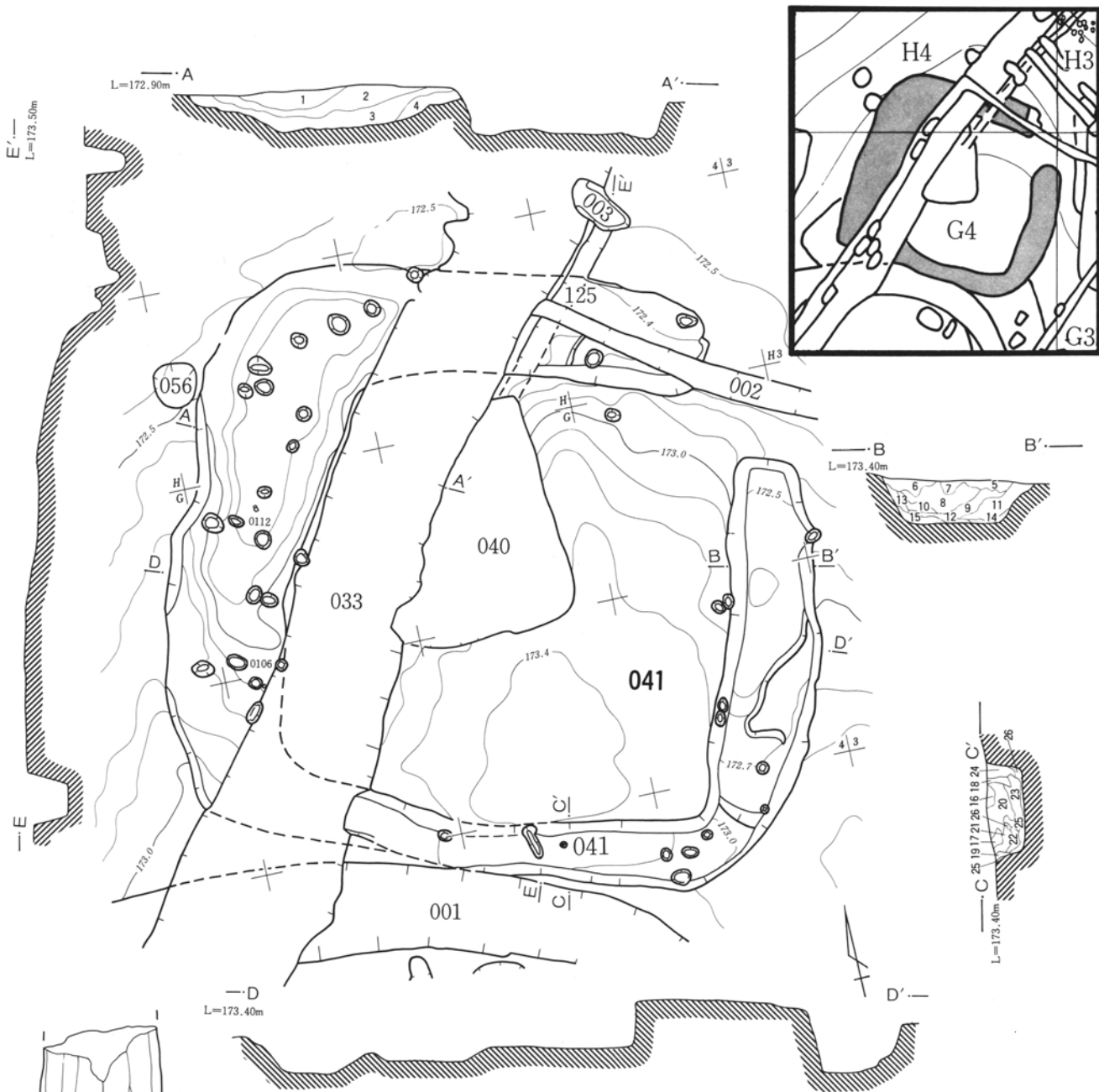
台地上北端で確認した弥生中期の土坑。

【重複】 中世の道路033号に南東側上部を僅か切られる。【埋土】 1暗褐締弱ローム粒中含 2褐締良ローム粒中含 3暗褐締炭化粒ローム粒少含 4褐締良ローム粒中含 【形態】 平面円形だが、断面はオーバーハングしており、埋土中にローム粒の含有が多いため、フラスコ状の形態が想定できる。【遺物】 上層（1～3層）より弥生中期の壺片（0607, 08）・同壺片（0609）が出土。【備考】 上記遺物は使用時点のもの残存ではないが、大きく異なった時期ではないと推定する。約10m西に同様の土坑055号と056号がある。

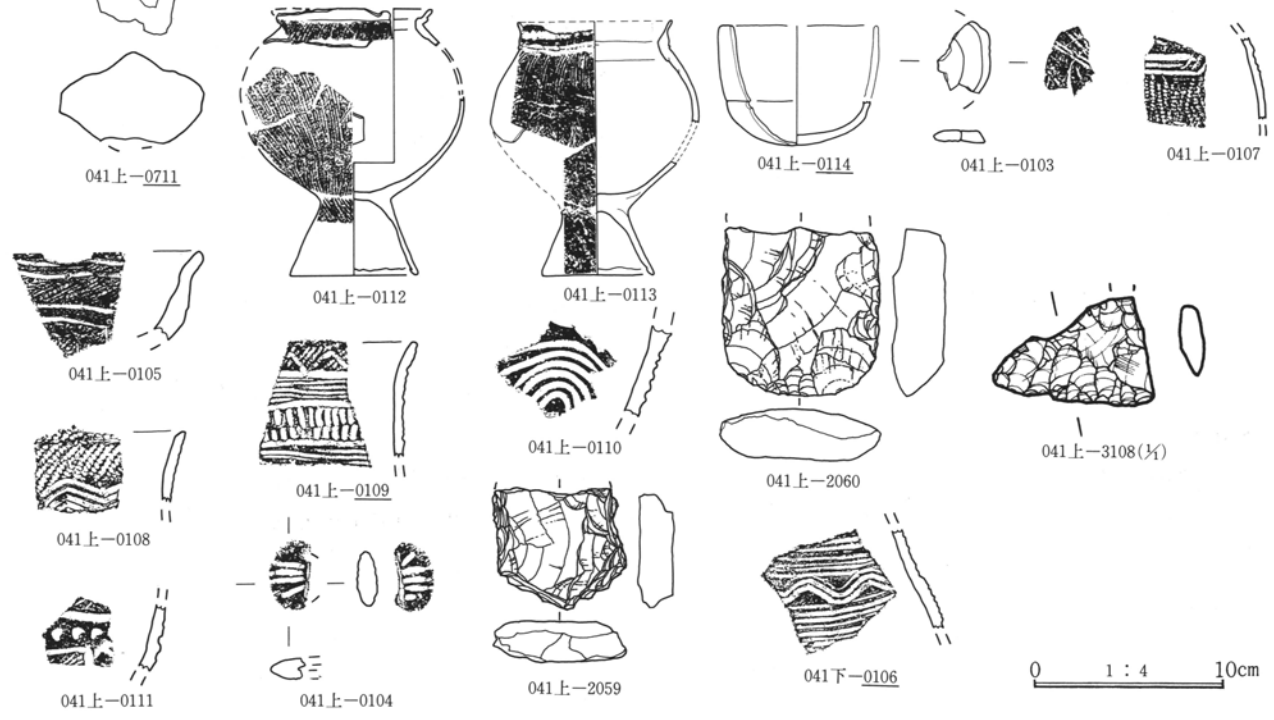
041号遺構 【図p.56,57 PL.45】

台地上北端で検出した古墳時代前期の方形周溝墓。

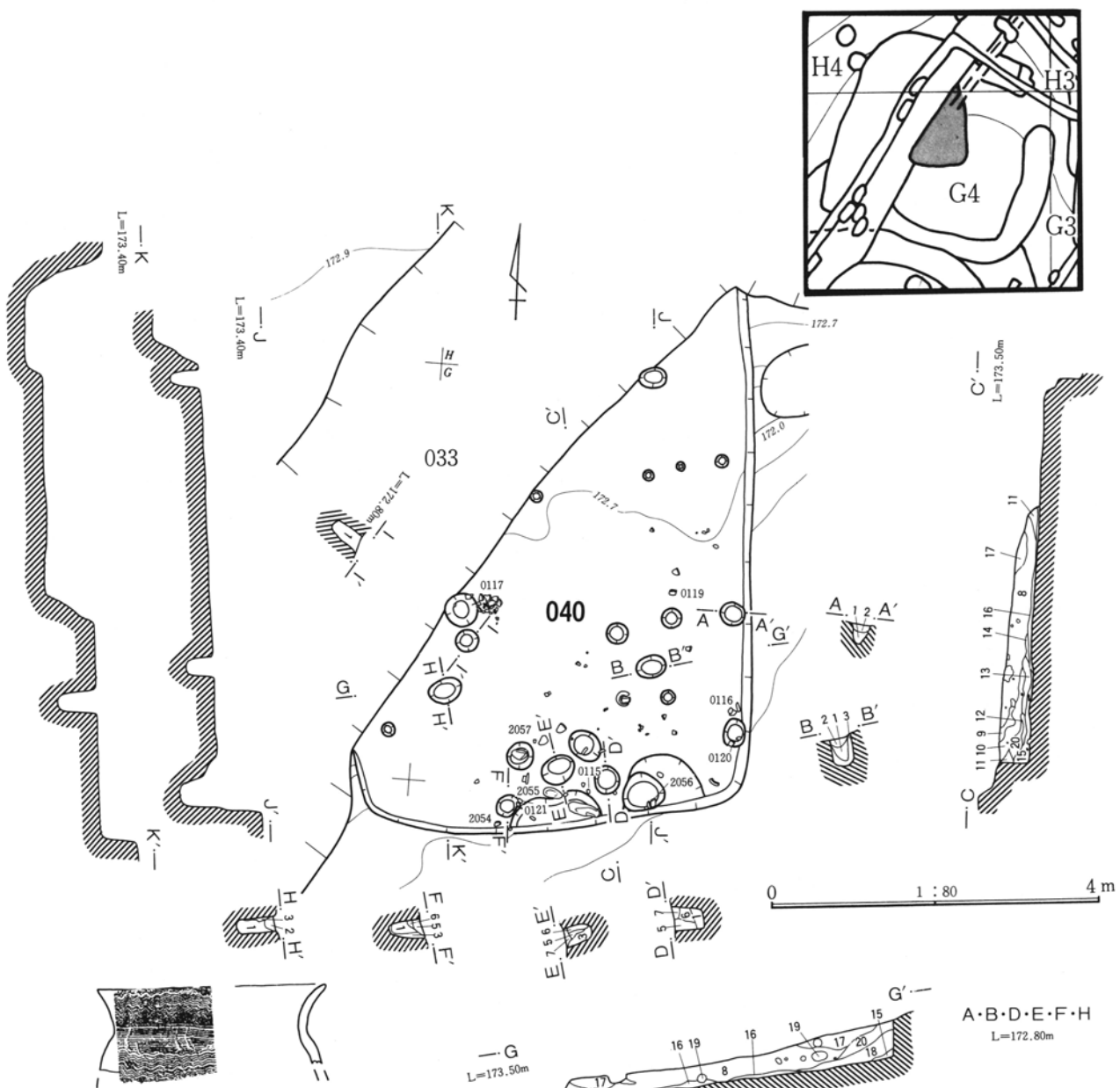
【重複】 西辺の溝に平行して走る溝002・125号と道路033号に大きく切られる。南辺は古墳001号に僅かに壊される。弥生後期の竪穴040・091号と中期の土坑056号を壊し、また同後期竪穴037号と近接する。東側の方形周溝墓022号との間隔は2mほどである。【埋土】 1黒褐締弱 2暗褐粘質 3褐締弱砂粒小含 4暗褐締良砂粒小含 5黒褐粘性無白黄軽石少 6褐粘性無ローム粒含 7褐粘性無ローム粒含 8オリーブ褐粘性無ローム多 9黒褐粘性無ローム多 10黄褐粘性無ローム多 11黄褐粘性無ローム多 12黄褐粘性無ローム主 13名黄褐粘性無ローム主 14暗灰黄粘性無ローム主 15黄褐粒子粗締弱ローム主 16名黄褐粘性無ローム多小礫少 17暗褐粘性無ローム少 18褐粘性無白黄粒少 19暗褐粘性無ローム少 20褐粘性無ローム少 21褐粘性無ローム主 22明黄褐粘性無ローム多 23オリーブ褐粘性無ローム塊多 24黄褐粘性無ローム少 25明黄褐粘性無ローム多 26暗褐粘性無 【形態】 ほぼ等高線に沿った正方形（一辺約12m）に近い形状。新しい遺構に切られているためやや曖昧だが、西側の溝は他の三辺に比べ幅広い感じがある。北東側隅は溝が途切れている。西側溝を中心にピットが多く見られるが、この遺構に伴うかは分からない。【主体部】 不明。【遺物】 上層（1, 2, 5～10, 16～24, 26層）から形象埴輪（剣0711）・土師器小型台付甕（0112, 13）・同埴（0114）・弥生後期のラセン状土製品（0103）・同土版（0104）・弥生中期土器片（0105, 07～09, 11）・縄文土器片（0110）そして打製石斧（硬質泥岩2059 砂岩2060）・石匙（黒曜石3108）が出土した。下層（3, 4, 11～15, 25層）では弥生中期壺片（0106）が見られただけである。【備考】 重複状況より考えて、本遺構の時期は、土師器小型台付甕と埴が近いだろう。埋土にはロームの混入が多いが、マウンドの崩落したものと思われる。また、南側の後期古墳001号が僅かに溝を切っているだけで接している点から、この古墳が築造された時点でも墓域として意識されていた可能性がある。



0 1 : 160 8 m
A·B·C 1 : 80 4 m



0 1 : 4 10cm

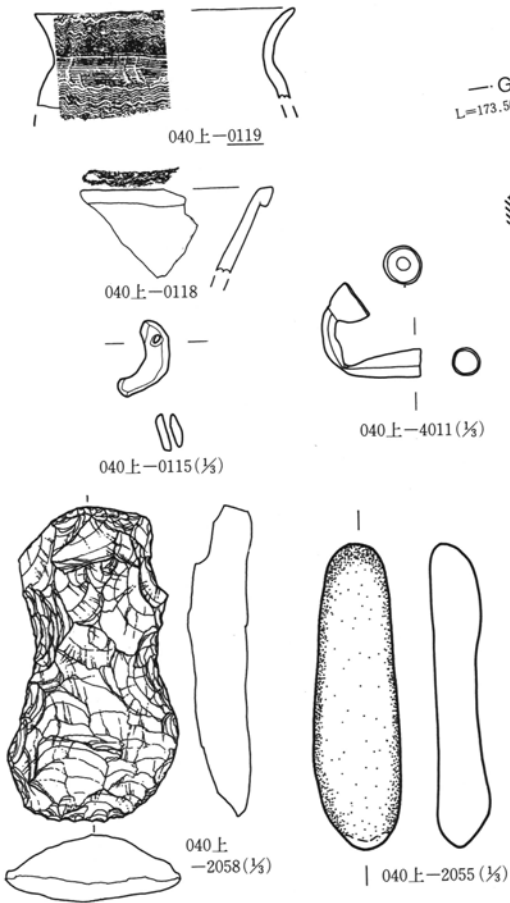


040号遺構 【図p.58,59 PL.45】

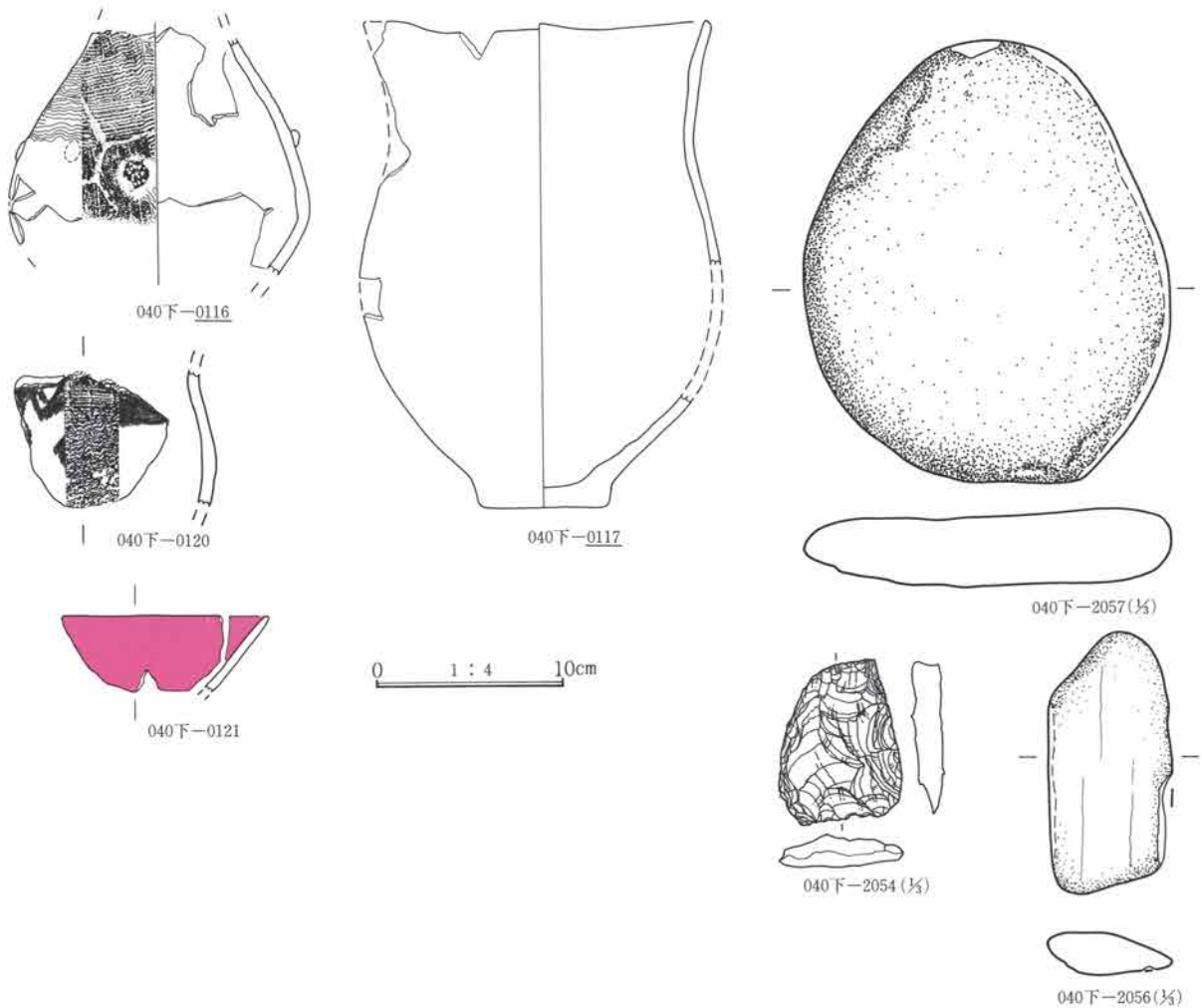
台地上の北端で検出した弥生後期の竪穴。

【重複】北西側1/3ほどを道路033号に壊される。全体は方形周溝墓041号が重なるが、比較的残存状態は良い。

【埋土】1暗オリーブ褐粘性無白色軽石多 2オリーブ褐粘性弱白色軽石少 3黄褐粘性無崩落土 4暗灰黄締強ローム炭化粒少 5暗オリーブ褐粒子粗ローム粒多 6暗オリーブ褐 7暗オリーブ褐粒子粗白色軽石多 8オリーブ褐粘性強ローム塊大多 9オリーブ褐粘性強ローム塊少 10暗オリーブ褐締強炭化粒少 11明灰黄粘性強 12オリーブ褐締弱汚ローム含 13オリーブ褐締強 14オリーブ褐締強汚ローム含 15黒褐粘性弱炭化粒土器片少 16黒締強炭化粒多 17オリーブ褐粒子粗砂粒小多 18暗オリーブ褐締強粘性強汚ローム含 19暗オリーブ褐粘性強ローム塊中多 20明灰黄弱 【壁床】北西側以外は残りが良い。【炉など】炉は不明。南辺東側で貯蔵穴が見られる。【柱穴】やや板状に近い支柱穴3個を確認。また東壁際南側では側柱穴状のもの2個を検出。南壁中央で入り口施設の柱穴5個が見られた。



0 1:4 10cm



【遺物】上層（8～10,17,19層）よりキセル雁首(4011)・弥生後期壺甕(0118,19)・同土製勾玉(0115)・打製石斧(硬質泥岩2058)・磨り石(棒状=硬質泥岩2055)が出土、また下層（11～16,18,20層）からは弥生後期甕(0117,20)・同壺(0116)・同小型鉢(0121)・削器(硬質泥岩2054)・磨り石(円盤状=雲母石英片岩2057 板状=黒色片岩2056)が見られた。【備考】台地上北端部に位置し、東に約10m離れた037号と同様に等高線とは一致しない状態で作られている。炭化粒含有層が床面直上にあり、焼失した可能性がある。

055・056号遺構 【図p.59,60 PL.47】

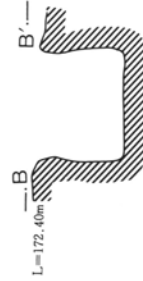
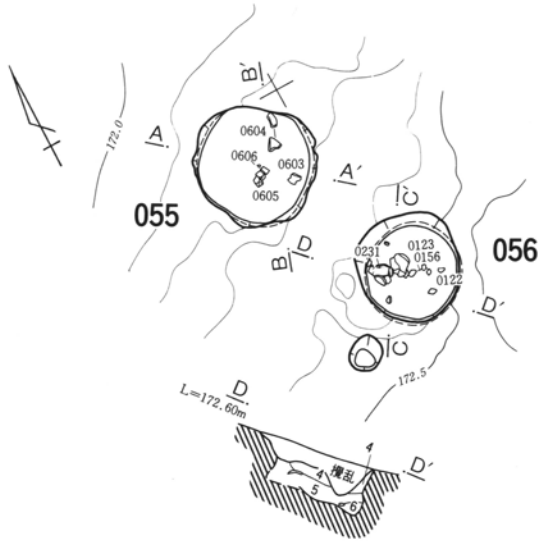
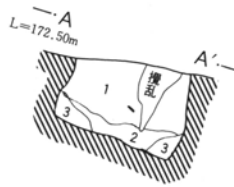
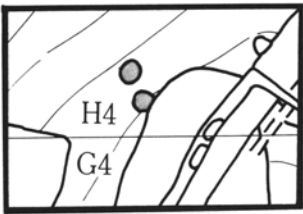
台地上北端で検出した弥生中期の土坑群。

【埋土】1暗褐締良ローム塊中少 2褐粒子粗 3褐粒子粗ローム粒小多 4暗褐締良ローム粒小多 5黄褐締良ローム粒小多 6褐締弱ローム粒小含

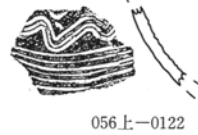
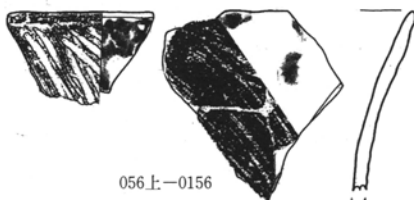
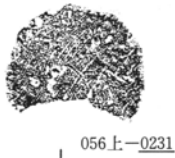
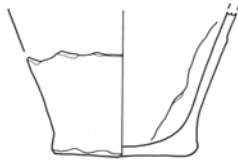
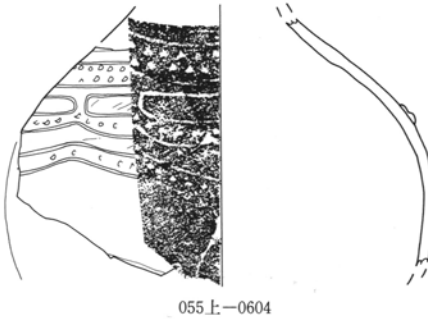
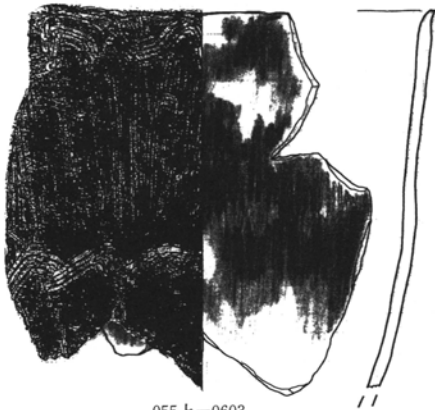
055号【重複】なし。【形態】平面円形だが、断面オーバーハング。【遺物】上層（1,2層）より弥生中期壺(0604)・同甕(0603,05)・同前期壺片(0606)が出土した。

056号【重複】僅かに方形周溝墓041号に東上部を壊される。【形態】平面円形。上部は攪乱を受けるが、下位断面はオーバーハングきみ。【遺物】上層（4,5層）より弥生後期甕(0231)・同中期甕片(0123,25,56)・同壺片(0122,26)そして打製石斧(粗粒安山岩2066)が出土した。

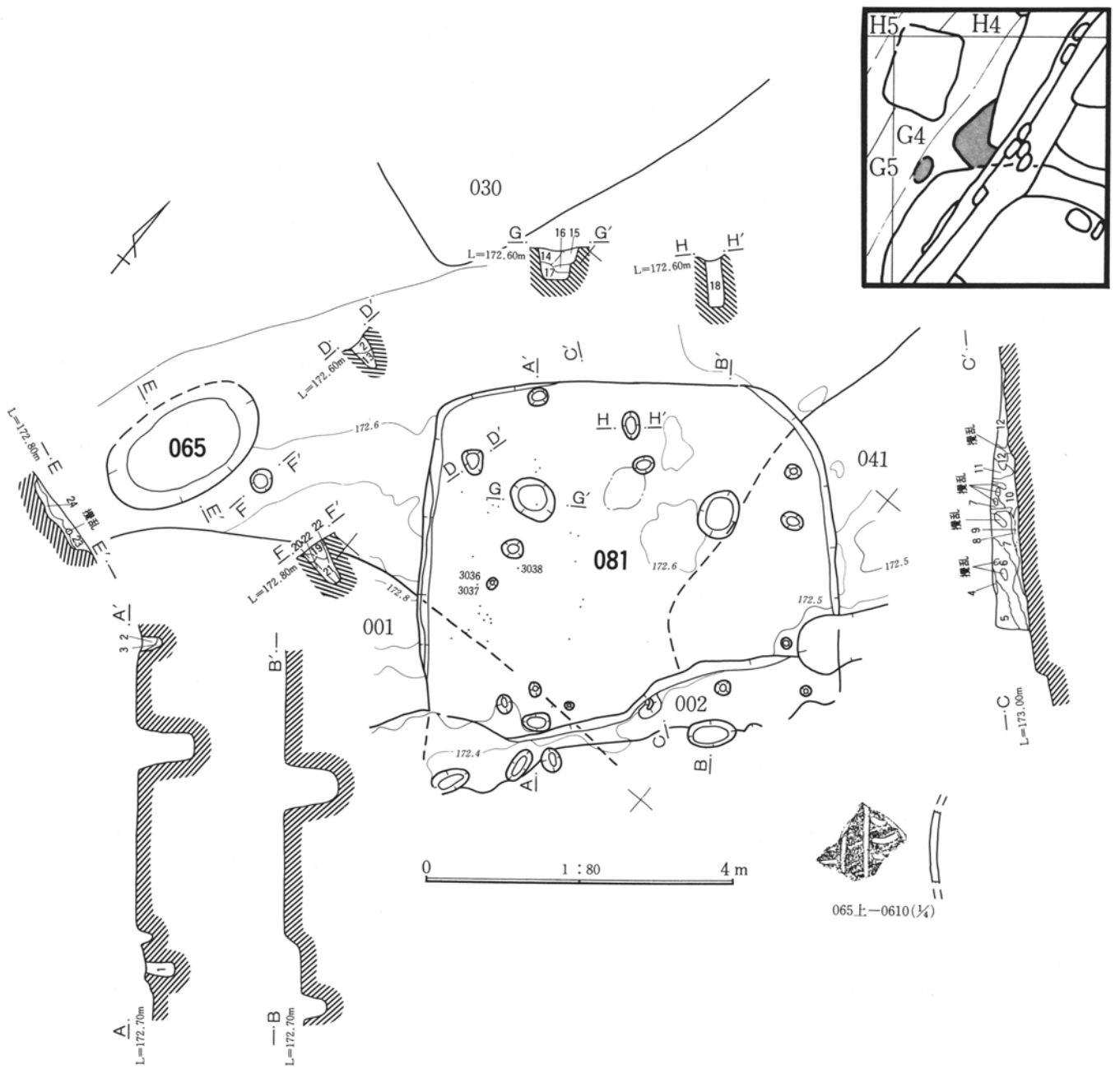
【備考】本来の形は、開口部の小さなフラスコ状だろう。遺物はいずれも使用時のものではないが、全体の量から弥生中期の築造と考えられる。



0 1 : 80 4 m



0 1 : 4 10cm

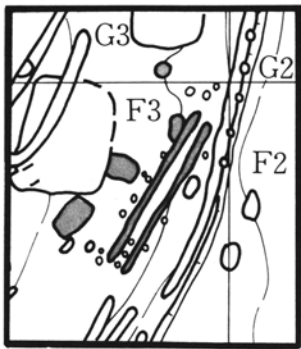


065・081号遺構 【図p.61 PL.48】

台地上北西端で検出した遺構群。

081号は弥生時代後期と考えられる竪穴。【重複】溝002号・道路033号・古墳001号・方形周溝墓041号に壊される。【埋土】1オリブ褐粘性弱ローム粒小多 2褐粒子粗粘性弱 3オリブ褐粘性無汚ローム含 4黒褐粒子粗粘良 5黒褐粘性弱ローム塊大多 6暗オリブ褐粘性弱白色軽石小多 7オリブ褐粘強褐色粒多 8オリブ褐粒子粗粘性強 9オリブ褐粘性強黒褐土混 10オリブ褐粒子粗軽石小石多 11暗オリブ褐粒子粗軽石小石多 12オリブ褐粒子粗粘性弱 13黄褐粘弱 14褐粒子粗白色粒子小多 15褐色軽石小 16褐粘強汚ローム含 17褐粒子細 18暗褐粒子粗白色粒子小少 19攪乱 20黒褐粒子粗 21黒褐粘性弱ローム塊含 22黄粘強粘性強黒土塊含 【壁床】長辺（北東側と南西側）の北西側1/2程度のみ残存。北西壁もすでに削られてほとんど残っていない。【炉など】北西側柱穴間に、炉跡焼土が残る。【柱穴】北西側の2個の支柱穴とそれに対応する南東側のもの1個を確認。南東側のものは板状の柱痕であるが、これに対応する位置でのもう1個は不明。【遺物】顕著なものは見られず。壁際に側柱穴状のピットも数個見られるが、規則的な配置にはならない。【備考】西斜面に向かって、炉を谷側に置き長辺を傾斜と直行させる位置で築く。同様の向きの竪穴は、南西側に約15m離れた071・100号がある。遺物はないが、弥生後期の可能性は極めて高い。

065号は時期不明の土坑。【重複】古墳001号が近接。【埋土】23オリブ褐粒子粗砂礫小多 24明黄褐粘強粘性弱汚ローム含 【形態】平面楕円形で、浅い。【遺物】上層（23層）より弥生中期甕片(0610)が出土。【備考】性格不明。



015・021・072・073・149号遺構

【図p.62 PL.48】

台地上東端で検出した遺構群。

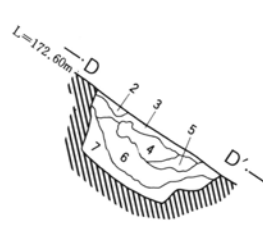
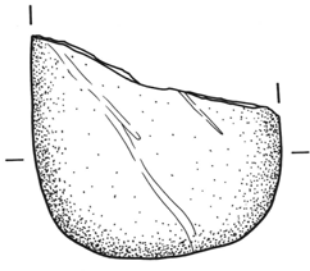
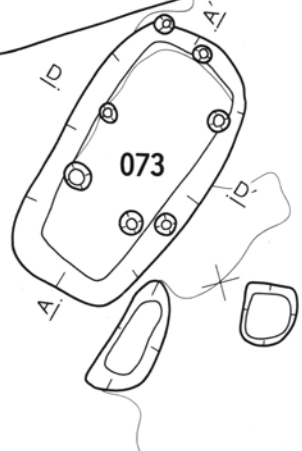
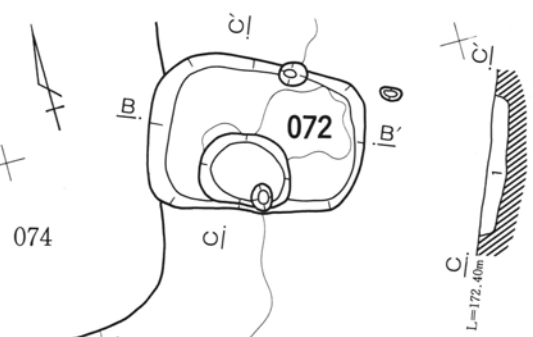
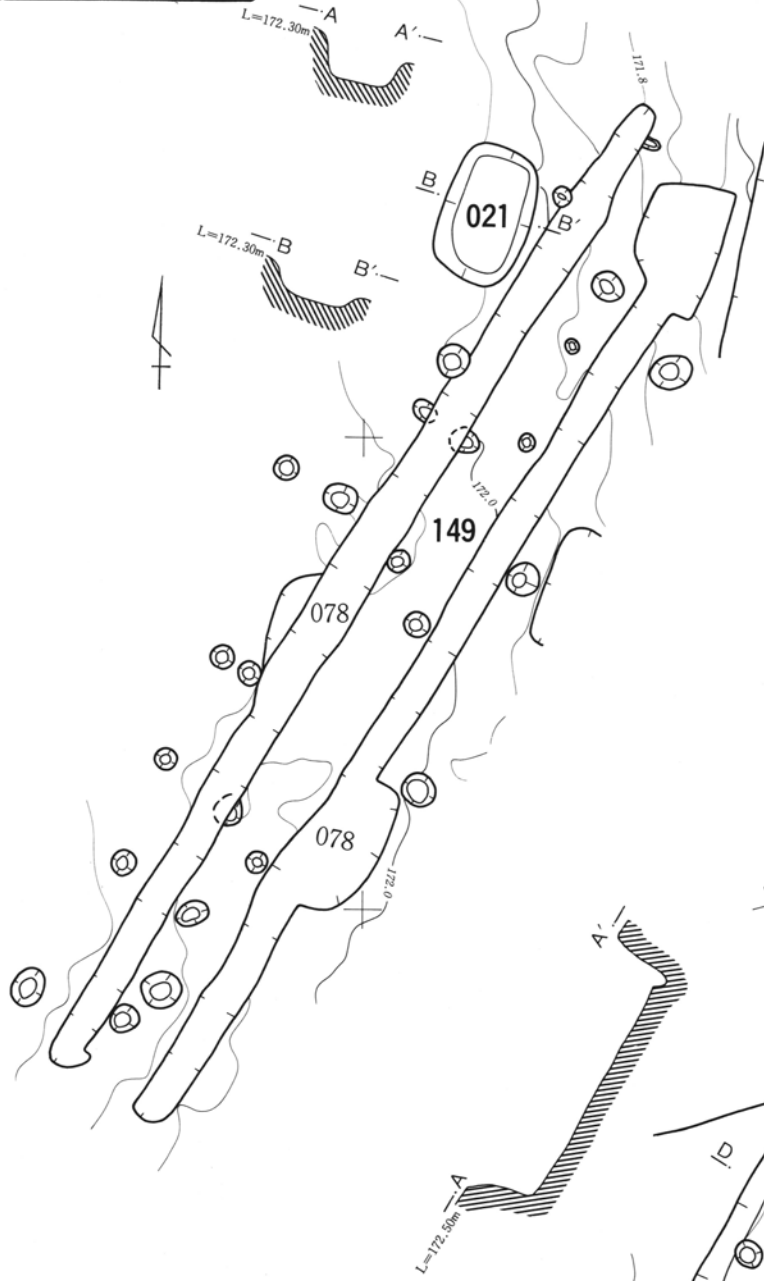
015号・021号は近世の土坑。【重複】021号は近世の溝078号と重なるが関係不明。【埋土】不明。【形態】楕円形と長方形で非定形的。

【遺物】なし。【備考】性格不明。

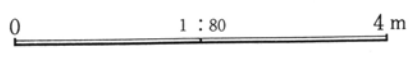
149号は時期不明の柱穴群。【重複】溝078号と重なる。【埋土】不明。【形態】溝078号に沿うが、明確な列をなさない。【遺物】なし。【備考】東側の近世柵列013号と関係があるかもしれない。

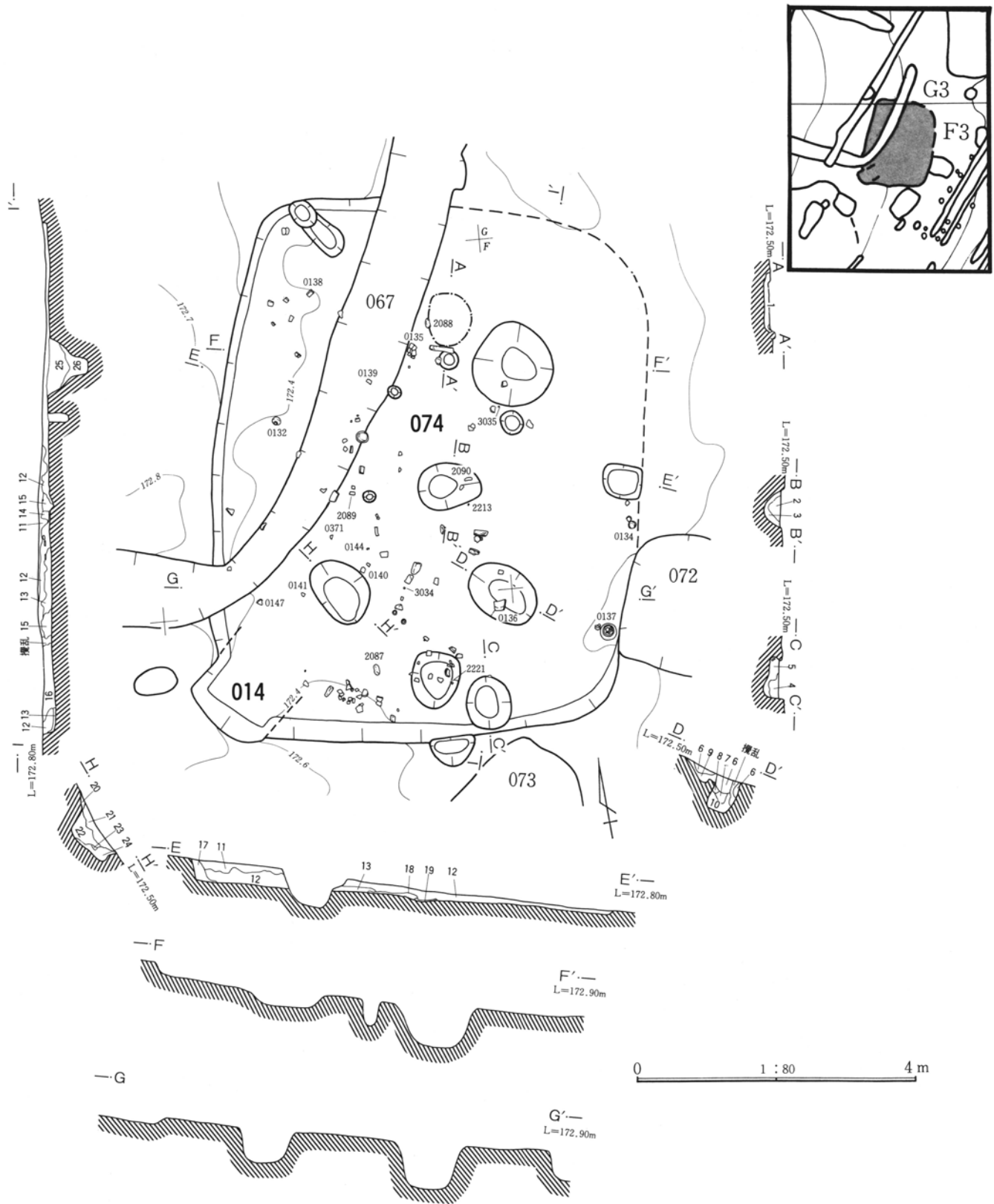
072号・073号は弥生の可能性ある方形土坑。

【重複】いずれも弥生後期竪穴074号と重複接続するが関係不明。【埋土】1黒褐締弱焼土炭化物少含 2暗褐締弱ローム粒少含 3暗褐ローム粒多焼土少混 4黒褐焼土粒多 5黒褐 6暗褐ローム多白色粒焼土粒少 7褐締弱ローム崩落土 【形態】確認面からの深さは異なる



が平面長方形で共に底に複数のピットがある。【遺物】072号の確認面より砥石(牛伏砂岩2086)が出土。【備考】他にも同様形態の061・095号等の土坑があり、性格不明だが弥生のもものと推定する。

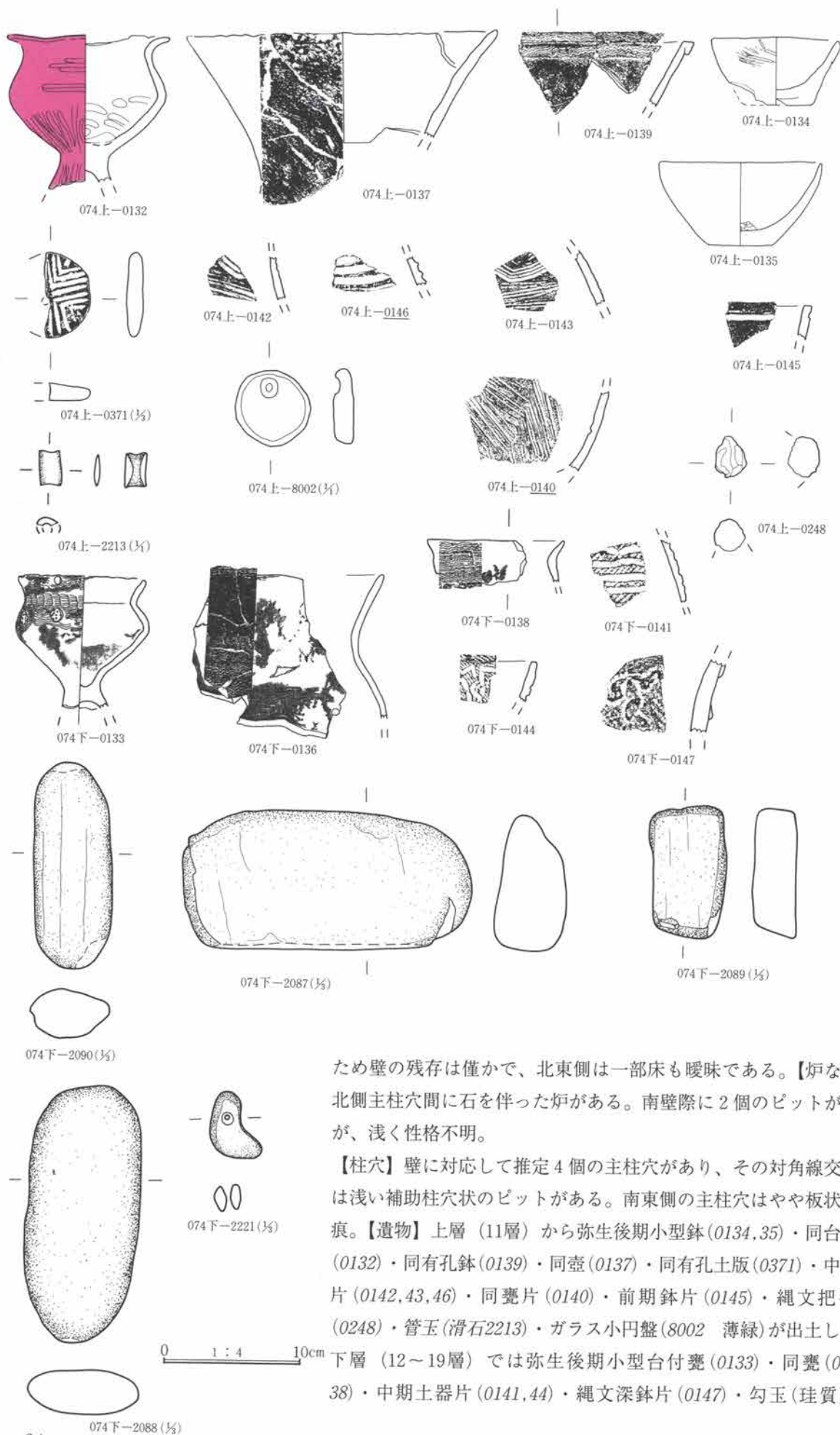




014・074号遺構 【図p.63~65 PL.49,50】

台地上東側で検出した弥生後期の竪穴と時期不明の土坑。

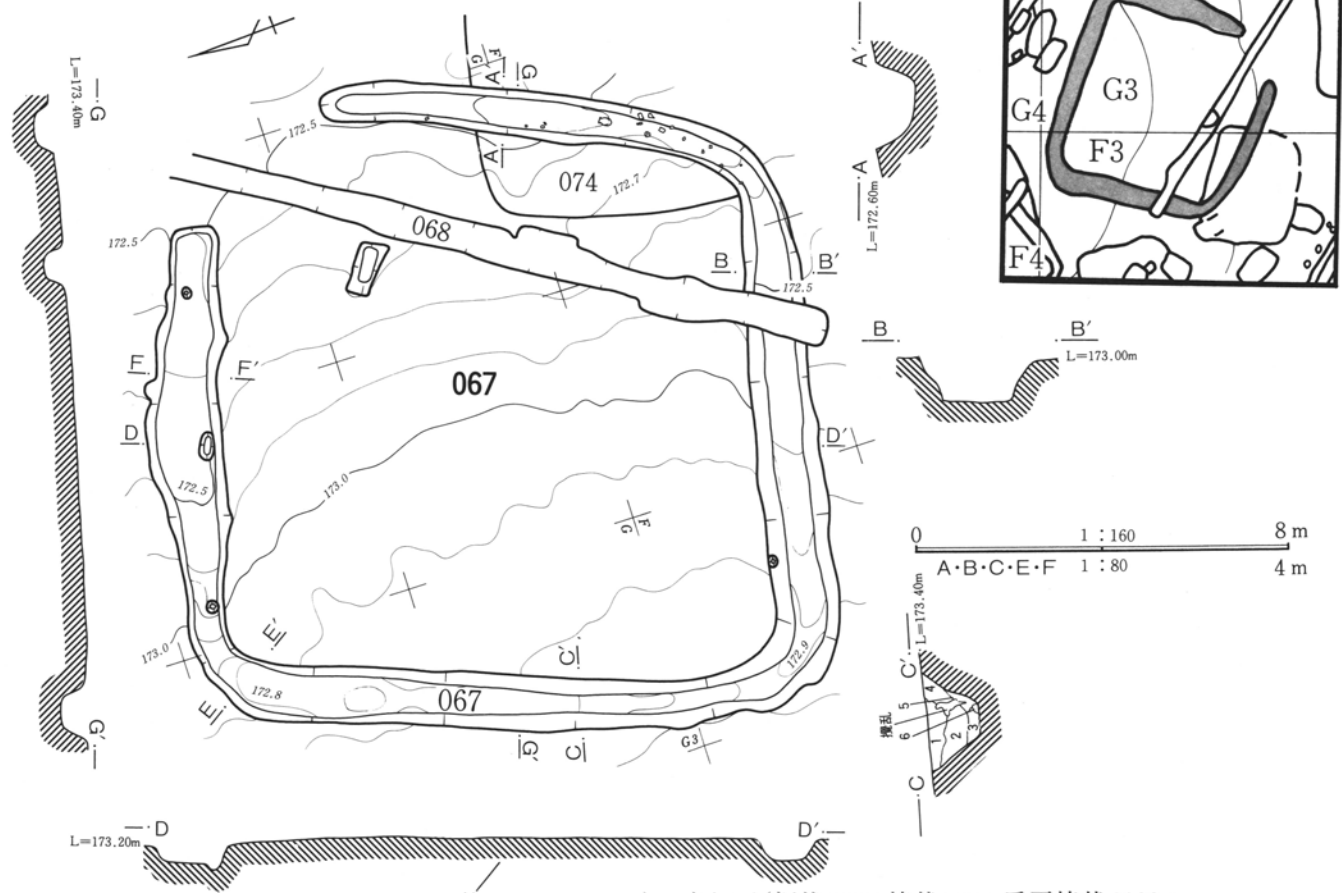
074号は、弥生後期竪穴。【重複】南東側で014号に、西側で方形周溝墓067号に壊される。また南東側では推定弥生土坑の072・073号と重なる。【埋土】1暗褐焼土炭化粒含 2暗褐ローム焼土少混 3黄褐ローム少含 4暗褐ローム焼土少混 5褐ローム焼土少含 6暗褐ローム焼土少含 7褐焼土少含 8ローム塊 9黄褐ローム粒少含 10黄褐ローム粒多含 11暗褐白色軽石炭化物焼土少含 12褐ローム粒少含 13褐ローム塊多焼土炭化物少含 14黄褐ローム塊 15暗褐ローム塊炭化物少含 16黒褐焼土炭化物少含 17褐ローム塊少含 18黒褐ローム粒少含 19褐ローム粒少焼土多含 20黄褐ローム主崩落土 21暗褐ローム粒少焼土含 22暗褐ローム粒少含 23暗褐ローム粒少含 24黄褐ローム主 25暗褐ローム塊焼土少含 26褐ローム多焼土少含 【壁床】上面が大きく削られている



ため壁の残存は僅かで、北東側は一部床も曖昧である。【炉など】北側支柱穴間に石を伴った炉がある。南壁際に2個のピットがあるが、浅く性格不明。

【柱穴】壁に対応して推定4個の支柱穴があり、その対角線交点には浅い補助柱穴状のピットがある。南東側の支柱穴はやや板状の柱痕。【遺物】上層(11層)から弥生後期小型鉢(0134, 35)・同台付甕(0132)・同有孔鉢(0139)・同壺(0137)・同有孔土版(0371)・中期壺片(0142, 43, 46)・同甕片(0140)・前期鉢片(0145)・縄文把手片(0248)・管玉(滑石2213)・ガラス小円盤(8002 薄緑)が出土した。

下層(12~19層)では弥生後期小型台付甕(0133)・同甕(0136, 38)・中期土器片(0141, 44)・縄文深鉢片(0147)・勾玉(珪質頁岩



2221)・磨り石(板状2087 棒状2090 扁平棒状2088) どれも雲母石英片岩 小型方形2089=黒色片岩)が見られた。【備考】埋土中に焼土炭化物の含有が多く、火災の可能性ある。長辺が等高線に沿っており、北東に5m離れた069号と同一である。埋土は薄いため下層出土遺物も流入の可能性ある。

014号は性格不明で、方形と推定されるが、走向は近世の溝とは異なる。

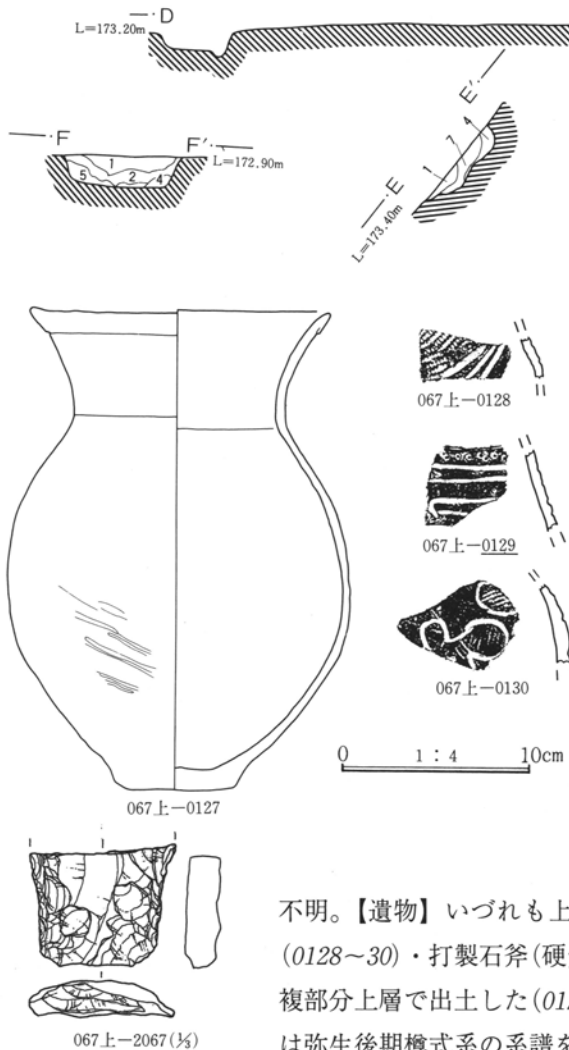
067号遺構 【図p.65 PL.51】

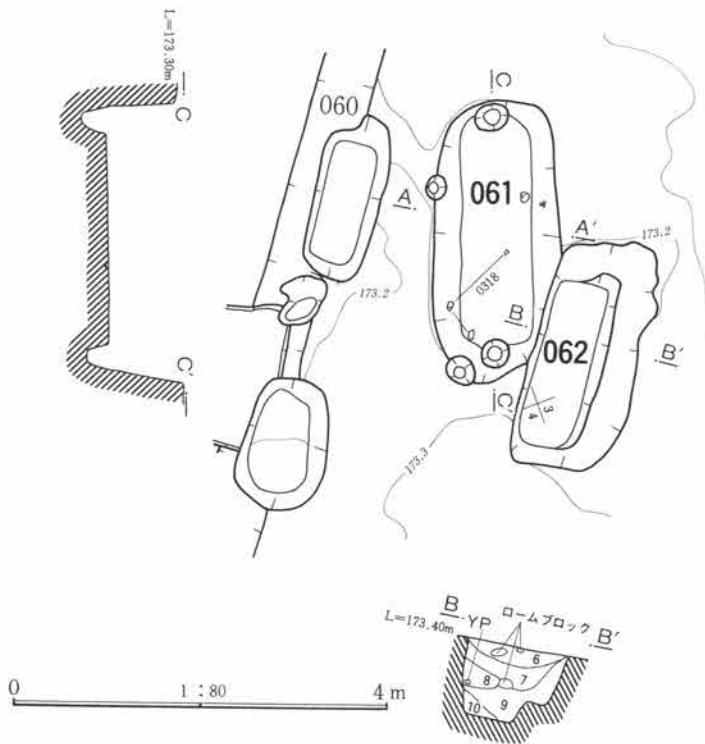
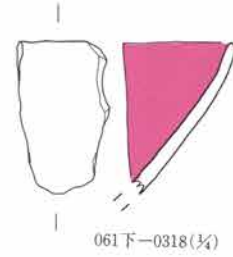
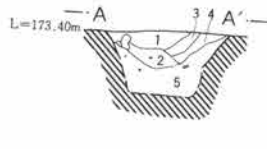
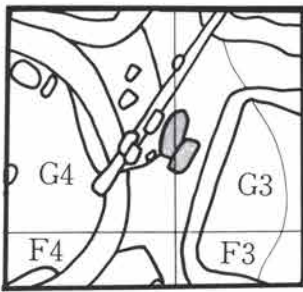
台地上東側で検出した古墳前期の方形周溝墓。

【重複】近世の溝068号で切られる他に、南東側で弥生後期の竪穴074号を壊す。【埋土】1暗褐ローム炭化物少含 2黄褐ローム多含 3褐ローム少含 4黄褐ローム崩落土 5明黄褐ローム多含 6明黄褐ローム崩落土 7鈍い黄褐粘性弱ローム斑状混

【形態】はば等高線に沿った形で溝が掘られ、長い長方形(12×10m)を区画。北西側隅が途切れる。傾斜はあまり大きくない(溝底の差は0.7m)。【主体部】

不明。【遺物】 どれも上層(1,2層)から樽式系無文甕(0127)・弥生中期土器片(0128~30)・打製石斧(硬質泥岩2067)が出土した。【備考】南東側溝の竪穴074号重複部分上層で出土した(0127)は、同竪穴の遺物の流入とは考えにくい。この無文甕は弥生後期樽式系の系譜を引きながら、古墳時代に入った時期のものとするため、本遺構の時期は古墳時代前期とする(第VI章参照)。





061・062号遺構 【図p.66 PL.51】

台地上中央で検出した土坑群。

061号は、弥生時代後期の土坑。【重複】弥生後期の竪穴090号を壊す。南東側で062号に上部を切られる。

【埋土】1暗オリーブ褐粘性弱白軽石小多含 2オリーブ炭化粒混 3黄褐粒子粗 4黄褐粘性弱白軽石多含 5オリーブ褐締強ローム炭化粒含 【形態】底が平らな長方形で、両端にピットがある。【遺物】下層（5層）より弥生後期高坏(0318)出土。

【備考】埋土に炭化粒が含まれている点は、同様の土坑073号などと同様である。

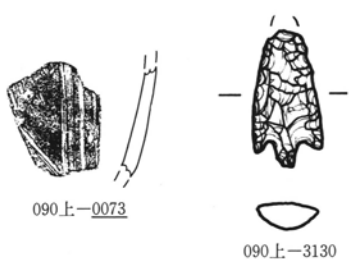
062号は、近世の土坑。【重複】北西側で061号を壊す。【埋土】6オリーブ褐ローム塊小白軽石多含 7上層より黄 8オリーブ褐締弱ローム塊小多含 9オリーブ褐締弱ローム塊小含 10黄褐粘性弱ローム塊中堆積 【形態】底の平らな短冊形土坑。南東側中位には段がある。【遺物】なし。【備考】人為的に短時間に埋めたもので、北西側の溝060号と重なる短冊形土坑群132号と同一の時期のものである。

090号遺構 【図p.66,67 PL.66,67】

台地上中央で検出した弥生後期と推定される竪穴。

【重複】近世の溝060号と土坑群132号に壊される他に、北側を方形周溝墓041号、西側を古墳001号、南東側を弥生後期土坑061号に切られる。

【埋土】1褐締弱ローム粒小含 2暗褐ローム塊中少含 3黄褐ローム崩落土 4黒褐粒子粗ローム粒多含 5上層よりローム粒多含 6黄灰白粘土黒褐土混 7オリーブ褐粒子粗粘性弱 8オリーブ褐粘性弱白軽石小多含



0 1 : 4 10cm

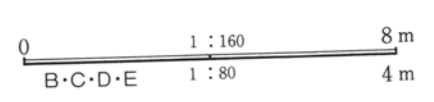
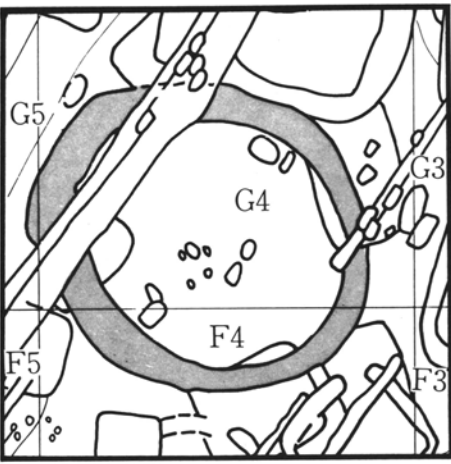
【壁床】 残存部分も激しく削られており、壁床の残りは極めて僅かである。

【炉など】 不明。

【柱穴】 北側の2個の主柱穴は明瞭だが、対応する位置の柱穴は重複のため不明。東壁には3個の側柱穴が等間隔で並ぶ。しかし、西壁側ははっきりしない。

【遺物】 本竪穴に確実に伴うかは不明だが（上層扱い）、弥生中期甕片(0073)・打製石斧(硬質泥岩2001)・有茎石鏃(黒曜石3130)が出土。

【備考】 本竪穴は、土坑061号との重複より、弥生後期以前であることは確かだが、上記土器片より中期とすることは根拠が弱い。全体形状より、他の後期竪穴と基本的に形態的差が大きいとは見えないため、後期のものと推定する。



001号遺構 【図p.68～72 PL.52～56】

台地上中央で検出した古墳時代後期の古墳。

【重複】近世の溝・土坑に切られる他に、北西側では中世の道路033号に壊される。北側では僅かに方形周溝墓041号の溝を切る。また081・082・088・090・104・135号の計6軒の弥生後期竪穴及び古墳前期土坑136号を壊す。北東側の090号との重複部分の堀外側には、本遺構より古い底の平坦な掘り込みがあったが、性格は不明。

【外部埋土】1黒褐締強砂粒小多含 2明灰黄締強ローム塊砂粒小多含 3黄褐粘性強ローム黒土崩落土 4黄褐粘性強汚ローム砂粒少含 5黄褐粘性弱軽石小少含 6鈍い黄粒子粗粘性弱 7オリーブ褐粒子粗締強 8暗灰黄粒子粗粘性弱ローム塊少含 9黒褐粒子粗粘性弱白軽石小多含 10黄褐粒子粗粘性強ローム塊多含 11黄褐粘性強汚ローム塊堆積 12黒褐粘性強 13攪乱 14黄褐粒子粗粘性弱石粒中多含 15黄褐締強1・6混 16オリーブ褐締弱 17明灰黄粘性弱軽石小小石多含 18明灰黄1同 19オリーブ褐粘性弱汚ローム崩落土 20オリーブ褐粘性弱ローム粒多含 21黄褐粘性強汚ローム含 22暗褐粘性強軽石小ローム塊含 23暗オリーブ褐粘性弱16似 24暗オリーブ褐締弱1似 25明黄褐締強汚ローム崩落土黒土混 26オリーブ褐締強粘性強汚ローム塊中多混

【外部構造】南東・北西方向に主軸を持つ楕円形（18×16m）で、平面的には北西側に開く形状だろう。堀は北西側（底幅3m）が南東側（底幅1m）よりはるかに広い。調査開始時にはマウンドは全く残っていなかった。

【主体部埋土】不明。

【主体部構造】石室を構成していたと推定される非加工の自然石が、中央部に2個と033号の埋土中に見られた。だが、石室構造を考える資料としては極めて乏しい。

【遺物】上層（1,2,4～10,13～16,18,22～23層）から出土した遺物が多い。新しいものとしては竜泉窯系青磁碗片(0052)と古代土師器小型壺(0045)がある。

古墳時代土師器ではミニチュア(0054)・小型壺?(0008)・坏(0046,47)・壺(0042)があった。埴輪は比較的多く、形象埴輪では家(0700,13)・楯(0704)・太刀(0708,09,12)・靱(0696,97)・柄(0716)・巫女(0691)・男子(0694,95)・人物(0693,99,0715)・馬(0705,07,17)があり、朝顔形も含めた円筒埴輪(0689,0714)も残っていた。

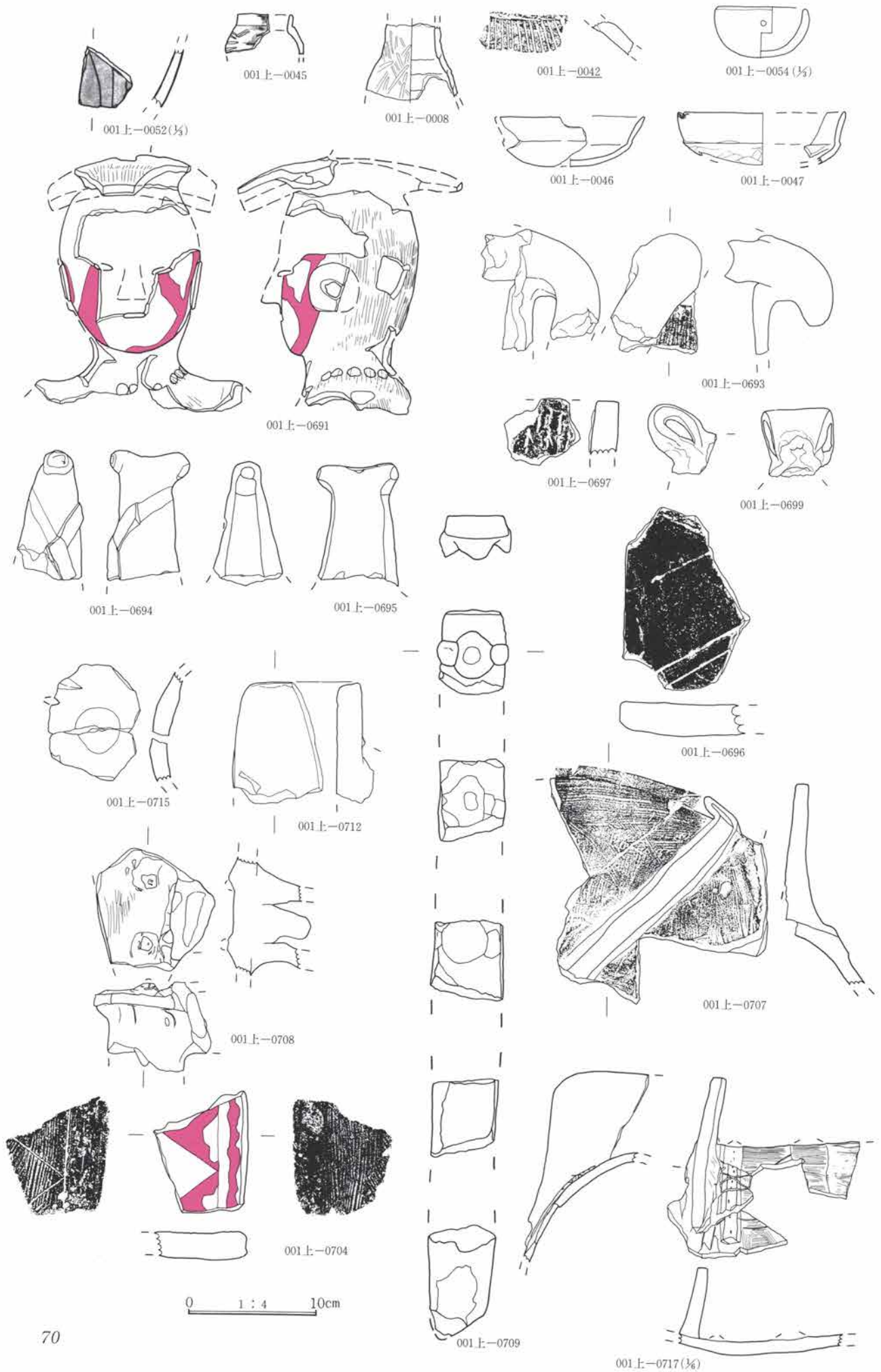
古い遺物では、弥生後期土器片は匙(0053)・小型甕(0009)・鉢(0013,48)・壺(0011,22,33,37)・甕(0012,23)があり、中期土器片は壺(0025,27,28,29,30,31,34,35,36,38)・甕(0007,16,18,50,0307)・鉢(0024,26)、前期土器片は壺(0021,49)・甕(0017,19,20)・鉢(0043)、そして縄文土器片鉢(0032,39,40,41,44)があった。

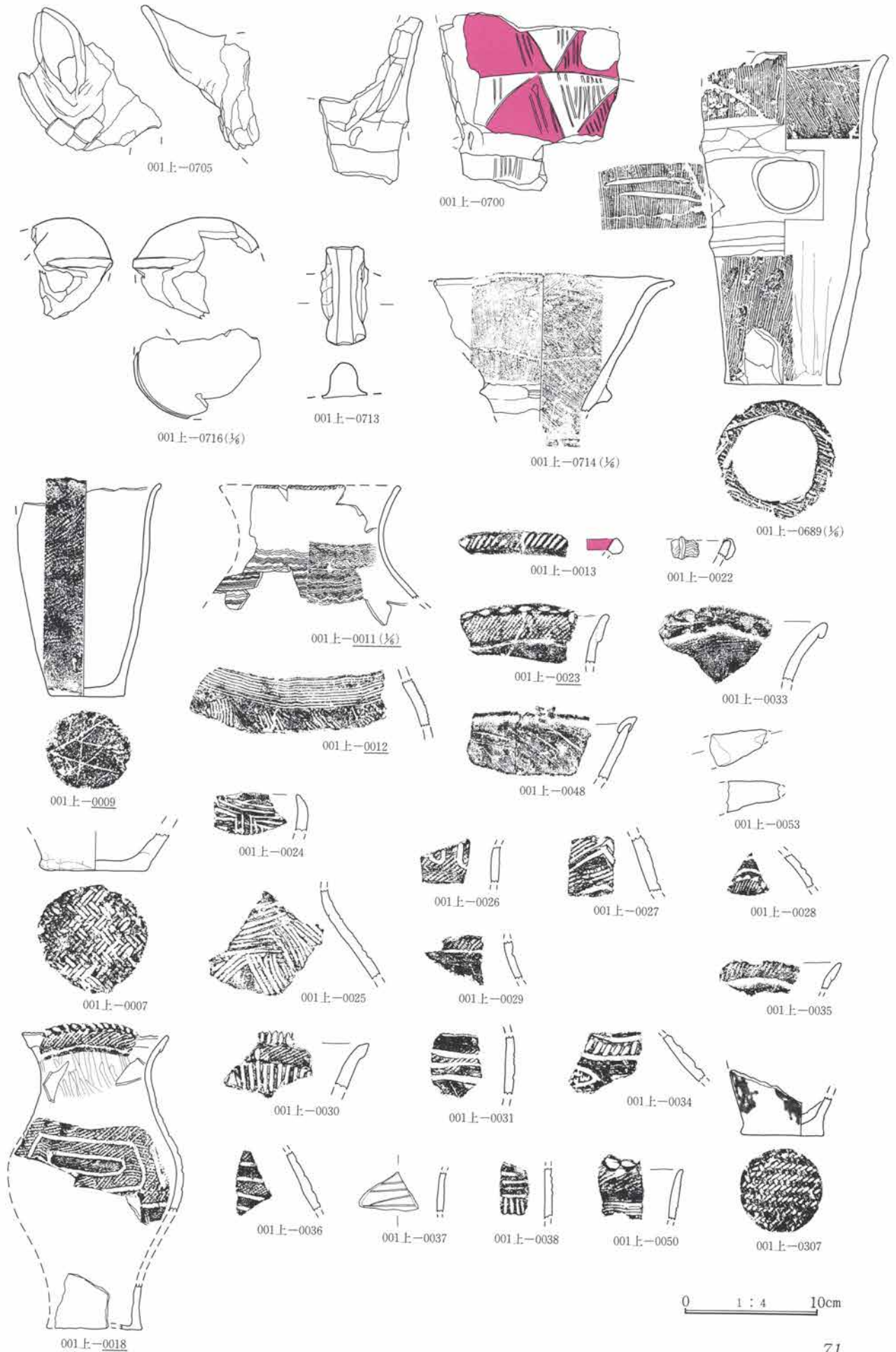
石器類では、管玉(珪質頁岩2211)・垂飾(変質蛇紋岩2210)・紡錘車(砂岩2012)・磨り石(石包丁状=牛伏砂岩2206 板状=砂岩2014)・打製石斧(硬質泥岩2009,13)・凹石(牛伏砂岩2160)・削器(硬質泥岩2010)・有茎打製石鏃(黒曜石3098)があった。他に図示していない黒曜石・チャート類の剥片も多い。

下層（3,11,12,19,20,24～26層）では、弥生後期壺片(0006)、打製石包丁(輝緑凝灰岩2011)が出ている。

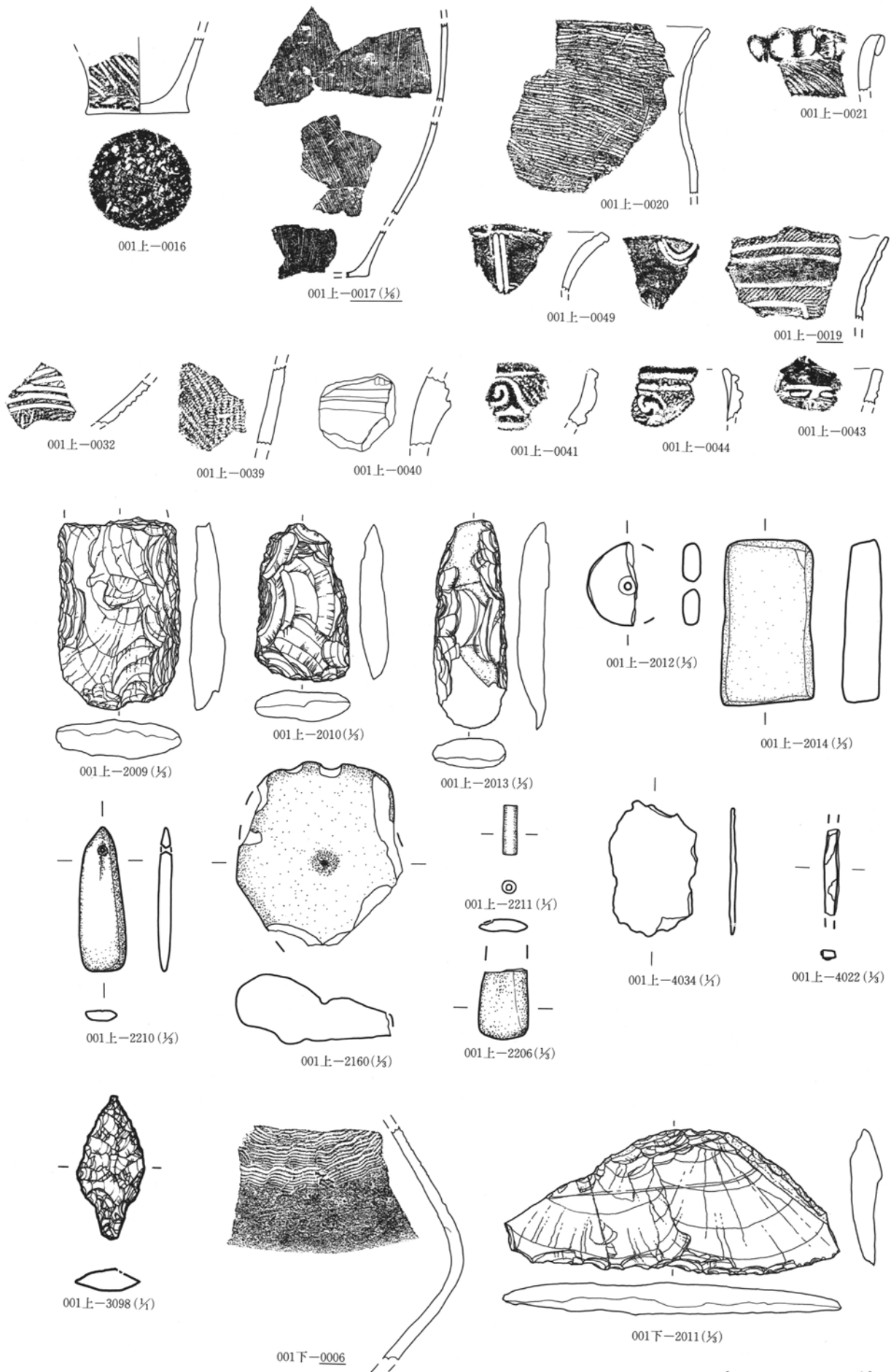
【時期】埴輪類及び土師器坏より、古墳時代後期の古墳と考えられる。

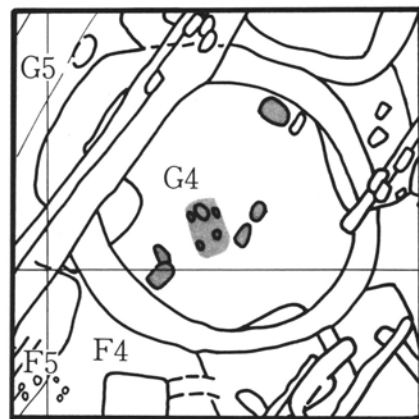
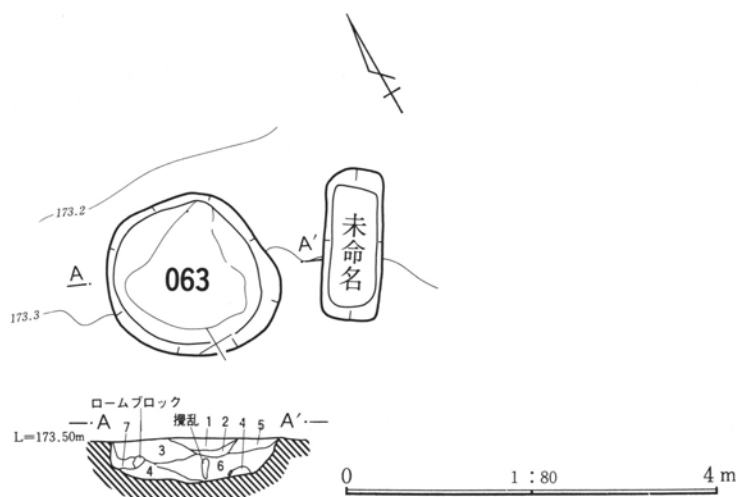
【備考】本墳は楕円形形状で、主軸を台地の走向とは直交する方向に取っている。方形周溝墓群とは、僅かに重なる041号を含めても、基本的に重複を避ける状態で築かれている。その点は、同じ後期古墳075号も同様であり、古い方形周溝墓群の存在を意識しながら造営されたと考えられる。この立地状況から見れば、本墳の方が075号より先行するだろう。





0 1 : 4 10cm





063号遺構 【図p.73 PL.52】

台地上中央で確認した時期不明の土坑。

【重複】古墳001号のマウンド跡内で確認したが、同古墳との関係不明。東側に近世の短冊形土坑群132号を構成する土坑1基が近接する。【埋土】1黒褐締弱軽石砂粒小含 2黒褐締強ローム粒含 3黒褐粘性弱砂粒小多含 4黒褐締強軽石小多ローム塊少含 5暗オリーブ褐締弱粘性弱 6オリーブ褐粘性弱白粒小多含 7黄褐粘性弱汚ローム壁崩落土 【形態】平面楕円形の皿形。【遺物】なし。【備考】埋土の状態より近世のものとは考えにくいだが、時代性格を想定する積極的資料に乏しい。

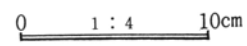
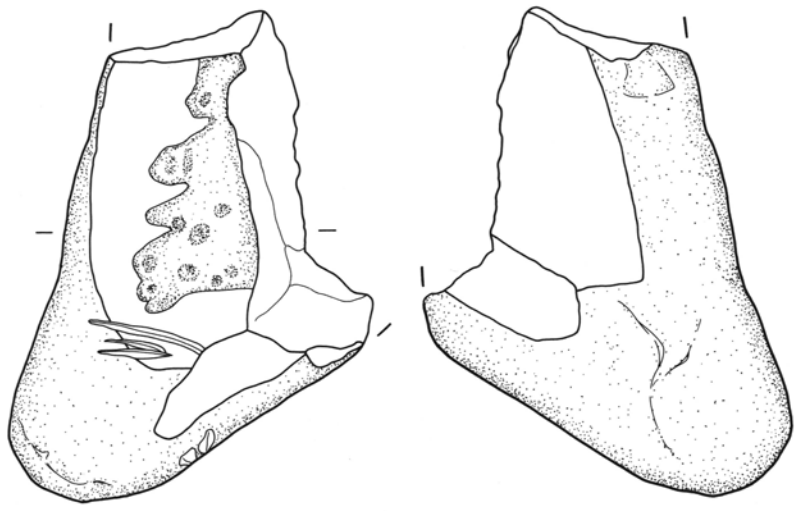
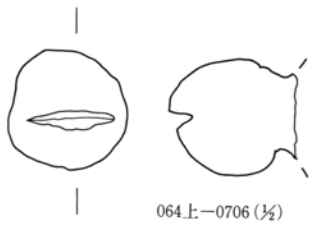
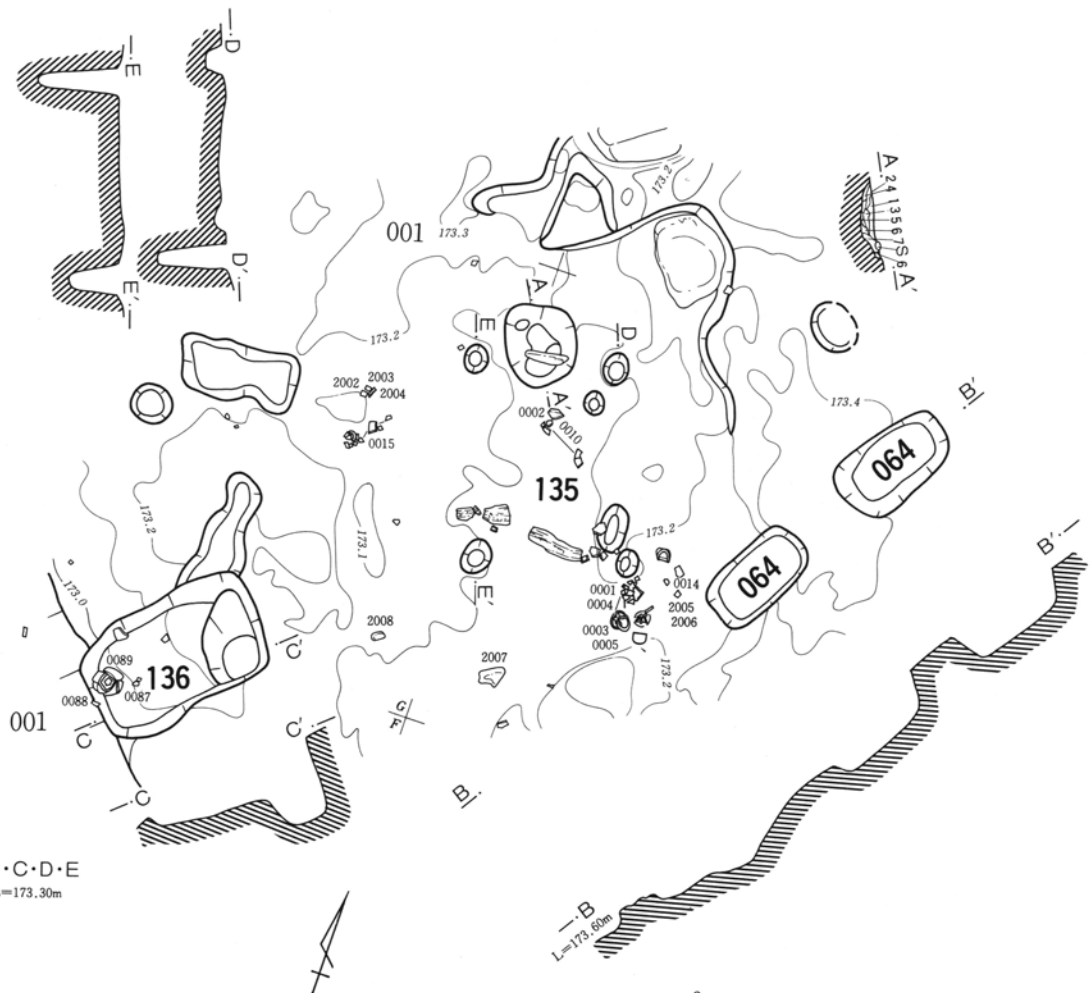
064・135・136号遺構 【図p.73~75 PL.52,56~58】

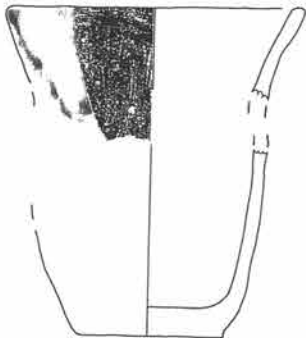
台地上中央の古墳001号マウンド跡内で検出した遺構群。

064号は近世の集石土坑群。【重複】001号及び135号想定範囲と重なる。【埋土】いずれも小礫が充填されていた。【形態】同一線上に長軸をそろえた2基の短冊形。【遺物】形象埴輪鈴形片(0706)が礫中に混じる。【備考】形態と走向は北東側の短冊形土坑群132号とはほぼ同一である。近くに古墳001号石室の残存石があり、近世の開墾時に石室を崩した際の裏込め礫廃棄坑と考えられる。

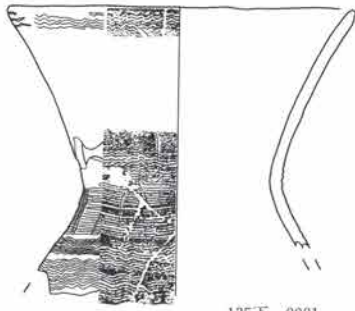
135号は弥生後期の堅穴。【重複】001号と064号に壊される。【埋土】1鈍い黄褐締強酸化全 2黄橙締強酸化半 3橙締強煉瓦状酸化全 4黄褐締強ローム混 5明黄褐締強ローム 6明黄褐5比黒 7黄褐粒子粗白軽石小多含 【壁床】壁は全く残っていなかったが、中央部分の床面は検出できた。【炉など】北側支柱穴間にあり、炉石が残る。【柱穴】長方形プランの4本組柱穴を確認。ただし北東側のものは何故かかなり浅い。【遺物】弥生後期のミニチュア(0014)・高坏(0002,05)・甕(0010)・小型甕(0003)・鉢?(0004)・壺(0001)・土偶(0051)、中期鉢(0015)そして打製石斧(粗粒安山岩2008)・磨り石(円錐状=粗粒安山岩2005 凹石状=黒色片岩2006 小判状=砂岩2002 戈状=砂岩2003,04)そして多孔石(砂岩2007)が出土した。土偶(0051)は、破片出土地点が本堅穴柱穴内下層と古墳001号堀上層・弥生堅穴030号埋土上層に分かれるが、最も遺構との関係が深いため、本遺構のものとする。多孔石は大型であり、本遺構との関係はやや曖昧のため、上層出土とした。南側柱穴間には、炭化材が残っていた。【備考】本堅穴は、埋土がほとんど削られていたにも関わらず、火災を受けたためか、遺物の残存は良好であった。土偶は、出土状態から見れば、建築にあたって壊して使われた可能性が考えられる。

136号は古墳前期の土坑。【重複】001号に上面を壊される。【埋土】不明。【形態】平面形はやや歪む長方形だが、底は不均一で北東側はピット状に深い。【遺物】形象埴輪片(0088)・土師器台付甕(0089)・樽式系大型壺底部(0087)が出土。台付甕と大型壺底部は、南西側端で重なった状態で検出。【備考】土師器と弥生系土器の共存例だが、遺構の性格は不明。

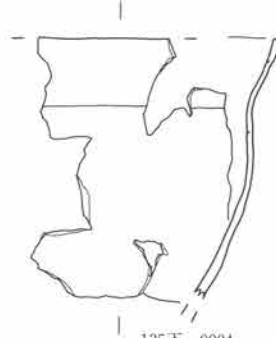




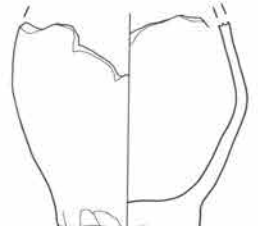
135下-0010



135下-0001



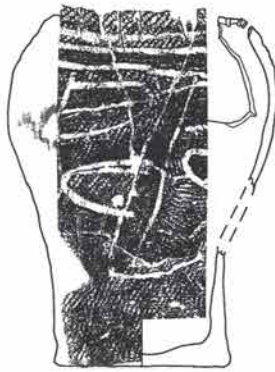
135下-0004



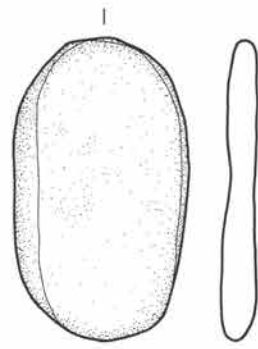
135下-0003



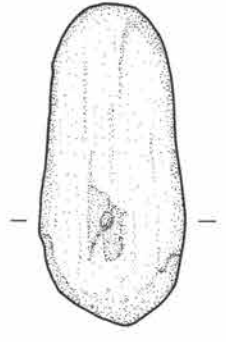
135下-0002



135下-0015



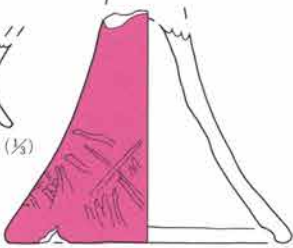
135下-2002 (1/2)



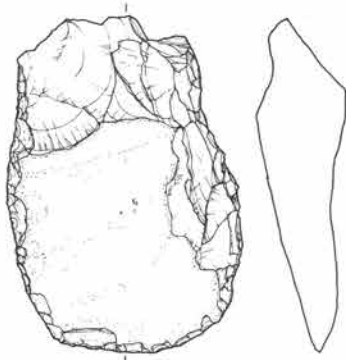
135下-2006 (1/2)



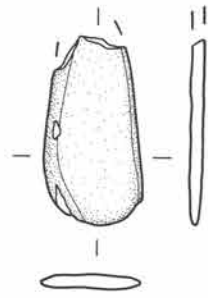
135下-0014 (1/2)



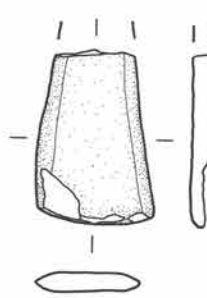
135下-0005



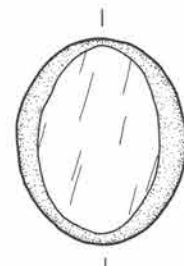
135下-2008 (1/2)



135下-2003 (1/2)

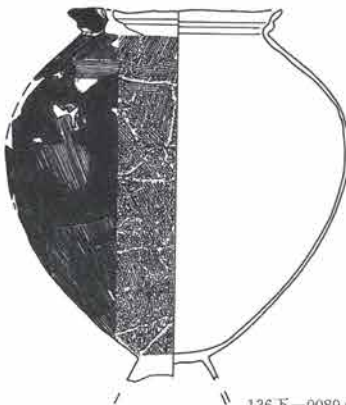


135下-2004 (1/2)

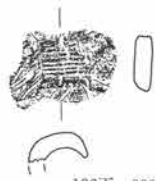


135下-2005 (1/2)

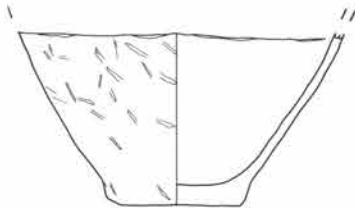
0 1 : 4 10cm



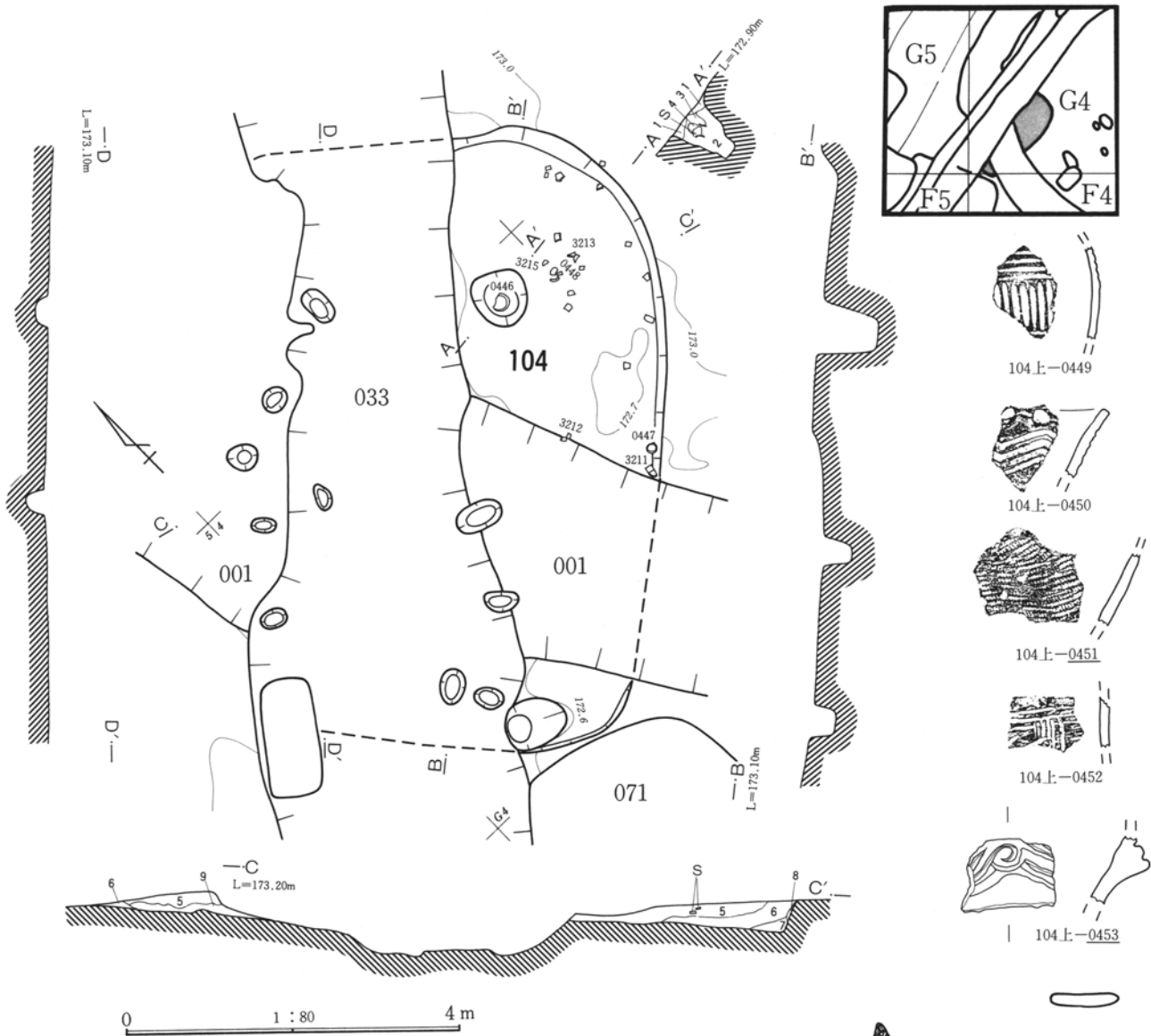
136下-0089 (1/2)



136下-0088



136下-0087 (1/2)



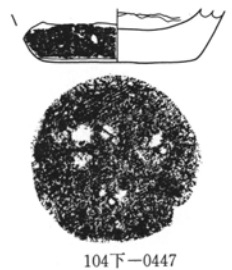
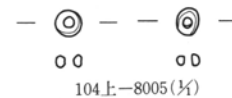
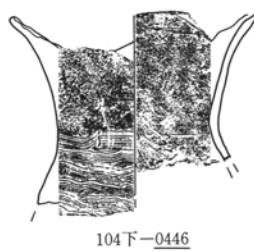
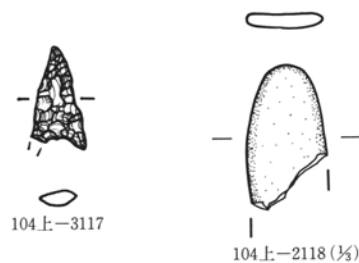
104号遺構 【図p.76 PL.58,59】

台地上西側で検出した弥生後期の竪穴。

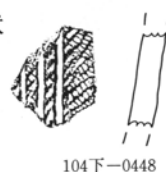
【重複】道路033号・古墳001号に大きく壊され、南側で弥生竪穴071号と近接する。【埋土】1オリーブ褐締弱 2黄褐締弱ローム塊中多含 3暗オリーブ褐締弱軽石小少含 4暗オリーブ褐締弱 5攪乱 6黄褐締強軽石小多含 7オリーブ褐粒子粗ローム塊少含 8黄褐汚ローム崩落土 9黄褐汚ローム白軽石中少含

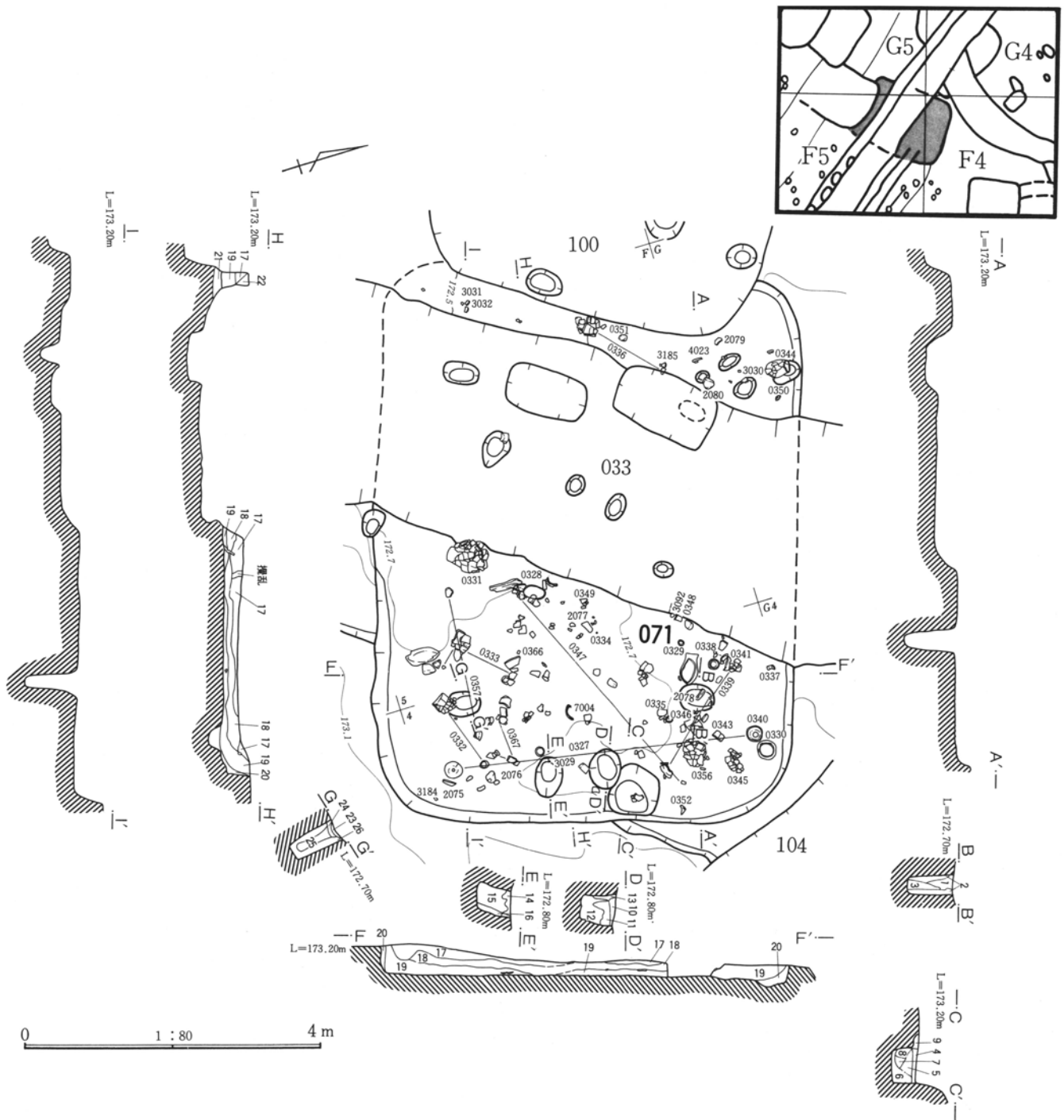
【壁床】残存していたのは北東と南東隅のみ。西側は掘り方が僅かに残る。【炉など】不明。【柱穴】北東隅に深い主柱穴を検出したが、対応する位置の柱穴の深さはやや異なっている。【遺物】上層（5層）からは弥生中期土器片(0449～52)・縄文鉢片(0453)・磨り石(石包丁状=牛伏砂岩2118)・打製石鏃(黒曜石3117)と黒曜石剝片1点・ガラス小玉(青緑色8005)が出土し、下層（6～8層）

では弥生後期壺(0446,47)と縄文鉢片(0448)そして黒曜石剝片が4点見られた。【備考】残存状態は悪いが、長軸を等高線と平行にしており、近接する071号とは同じでない。



0 1 : 4 10cm





071号遺構 【図p.77~80 PL.59~62】

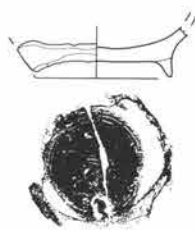
台地上西端で検出した弥生後期の竪穴。

【重複】中央を道路033号に壊され、西壁側を弥生後期竪穴100号に切られる。北東側では同104号と近接する。

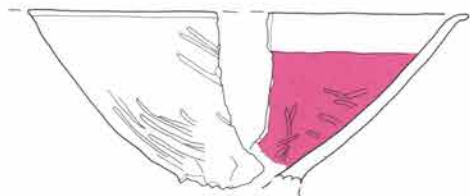
【埋土】1暗オリーブ褐ローム小多含 2オリーブ褐粒子粗ローム小多含 3暗オリーブ褐粒子粗粘性強 4褐粒子粗ローム塊少含 5褐粒子粗粘性弱 6黒褐粒子粗ローム小多含 7オリーブ褐粘性強ローム塊中少含 8オリーブ褐粒子粗粘性強ローム小多含 9黄褐締強汚ローム 10オリーブ褐粘性強ローム塊中多含 11黄褐粒子粗粘性強ローム塊中多含 12オリーブ褐粒子粗締強白軽石中少含 13ローム地山 14オリーブ褐粘性弱 15オリーブ褐粘性強ローム塊中多含 16黄褐粒子粗粘性強ローム塊多含 17暗褐砂質粒子粗軽石小混 18鈍い黄褐粘質黄橙粘土混 19暗粘質黄褐土塊中炭化粒小混 20褐粘質締弱ローム塊中少含3似 21褐粘質粒子粗ローム塊大混 22暗褐砂質粒子粗B軽石小混 23暗オリーブ褐締弱ローム小少含 24黄褐締弱ローム塊中多含 25オリーブ褐粘性強ローム多含 26オリーブ褐粒子粗ローム小多含

【壁床】東側半分近くは比較的残りが良い。僅かな面積だが西端部分も床面は検出できた。【炉など】床の残る部分では炉は見られなかった。東壁際で入り口状ピットと貯蔵穴を確認。【柱穴】東側で2個の板状ぎみの主柱穴を検出し、033号内の対応する位置に浅い2個のピットを確認した。

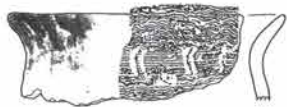
【遺物】残存遺物量はかなり多い。上層(17,18層)では、古代須恵器碗(0355)・弥生後期高坏(p.80へ)



071上-0355



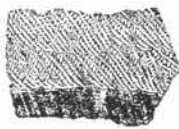
071上-0335



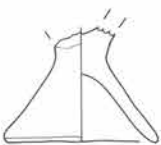
071上-0358



071上-0359



071上-0348



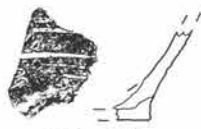
071上-0334



071上-0353 (1/2)



071上-0354 (1/2)



071上-0361



071上-0362



071上-0363



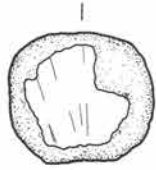
071上-0364



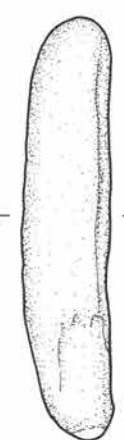
071上-0349



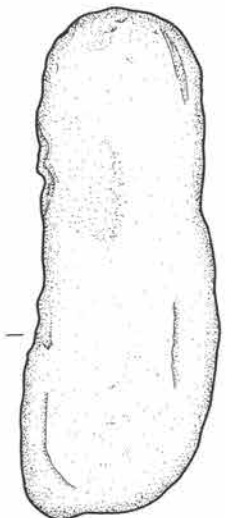
071上-0360



071上-2082 (1/2)



071上-2081 (1/2)



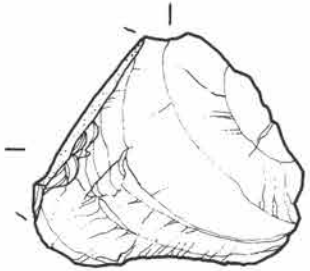
071上-2083 (1/2)



071上-2084 (1/2)



071上-2085 (1/2)



071上-3183 (1/2)

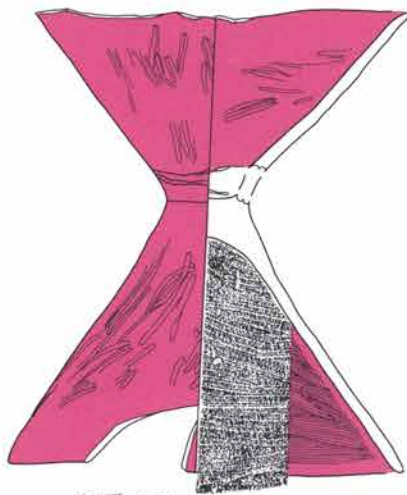
0 1 : 4 10cm



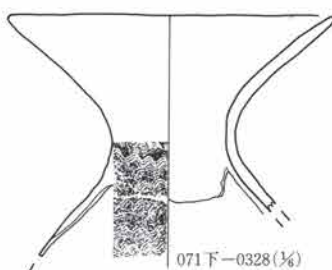
071上-4017 (1/2)



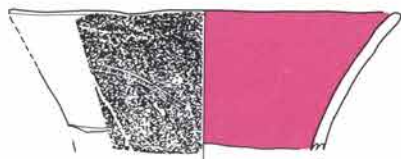
071上-3110 (1/2)



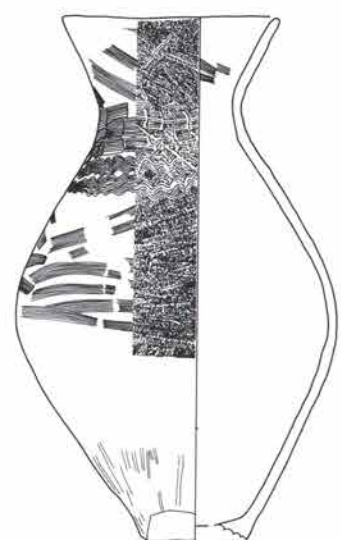
071下-0327



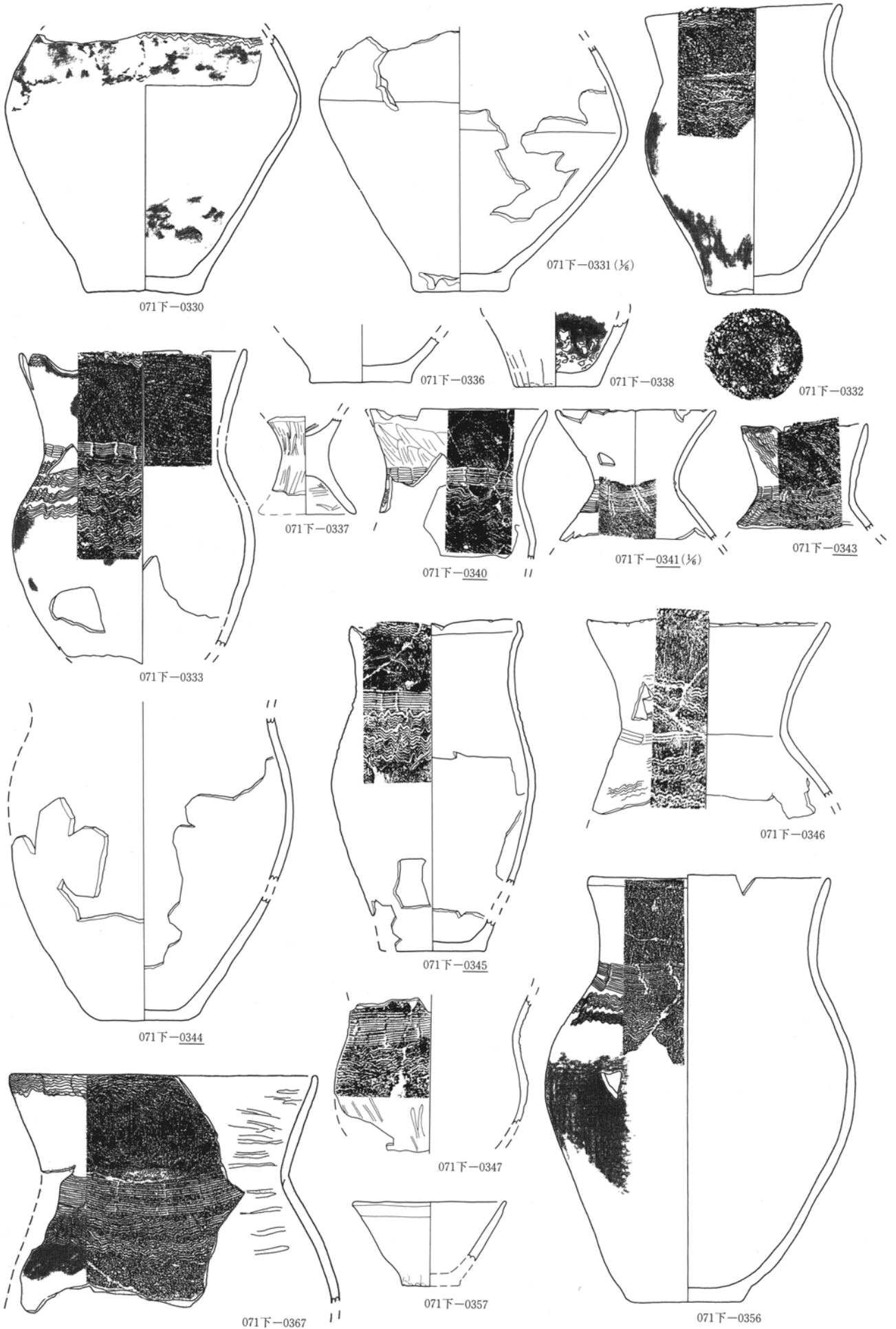
071下-0328 (1/2)



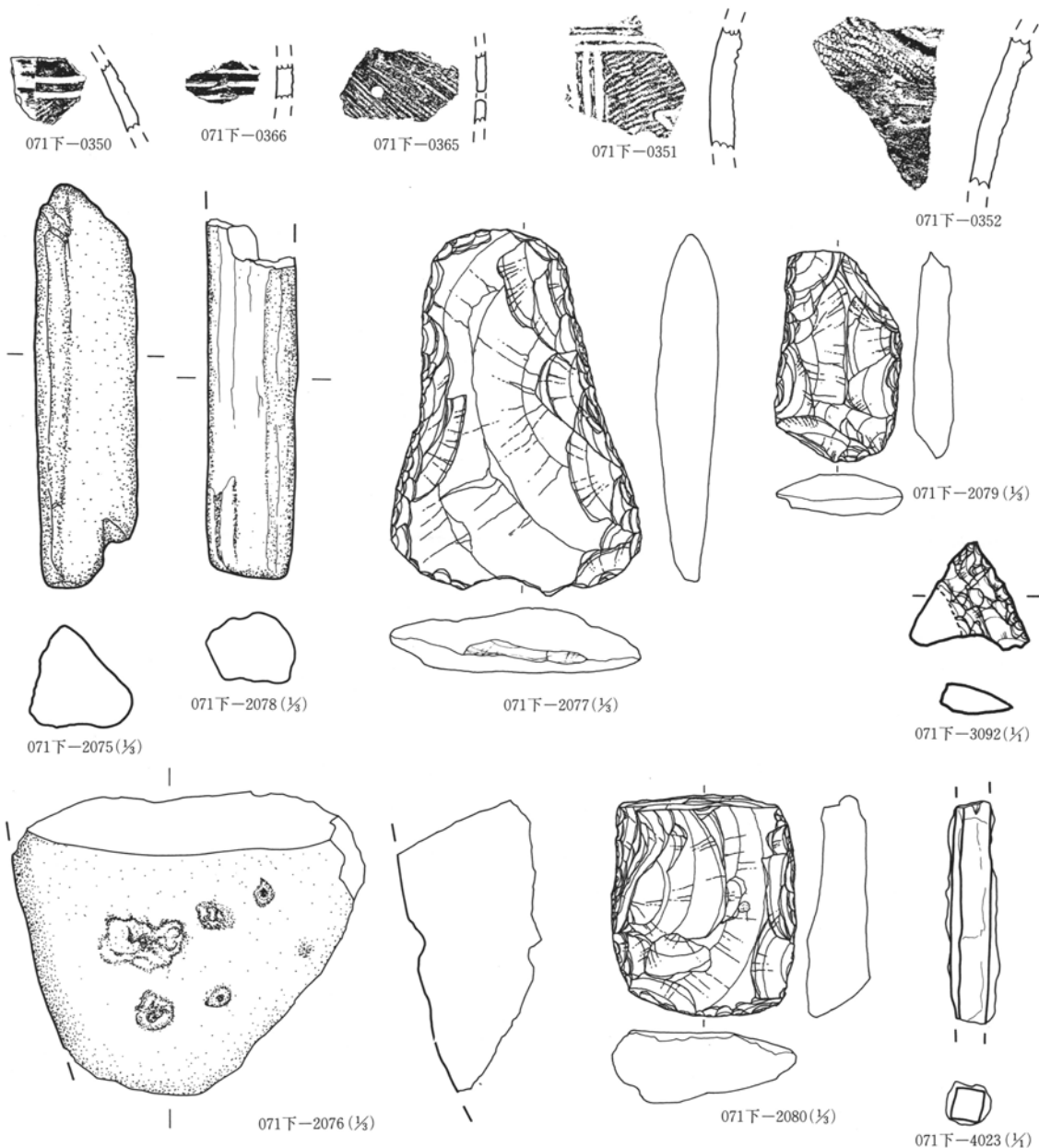
071下-0339



071下-0329 (1/2)

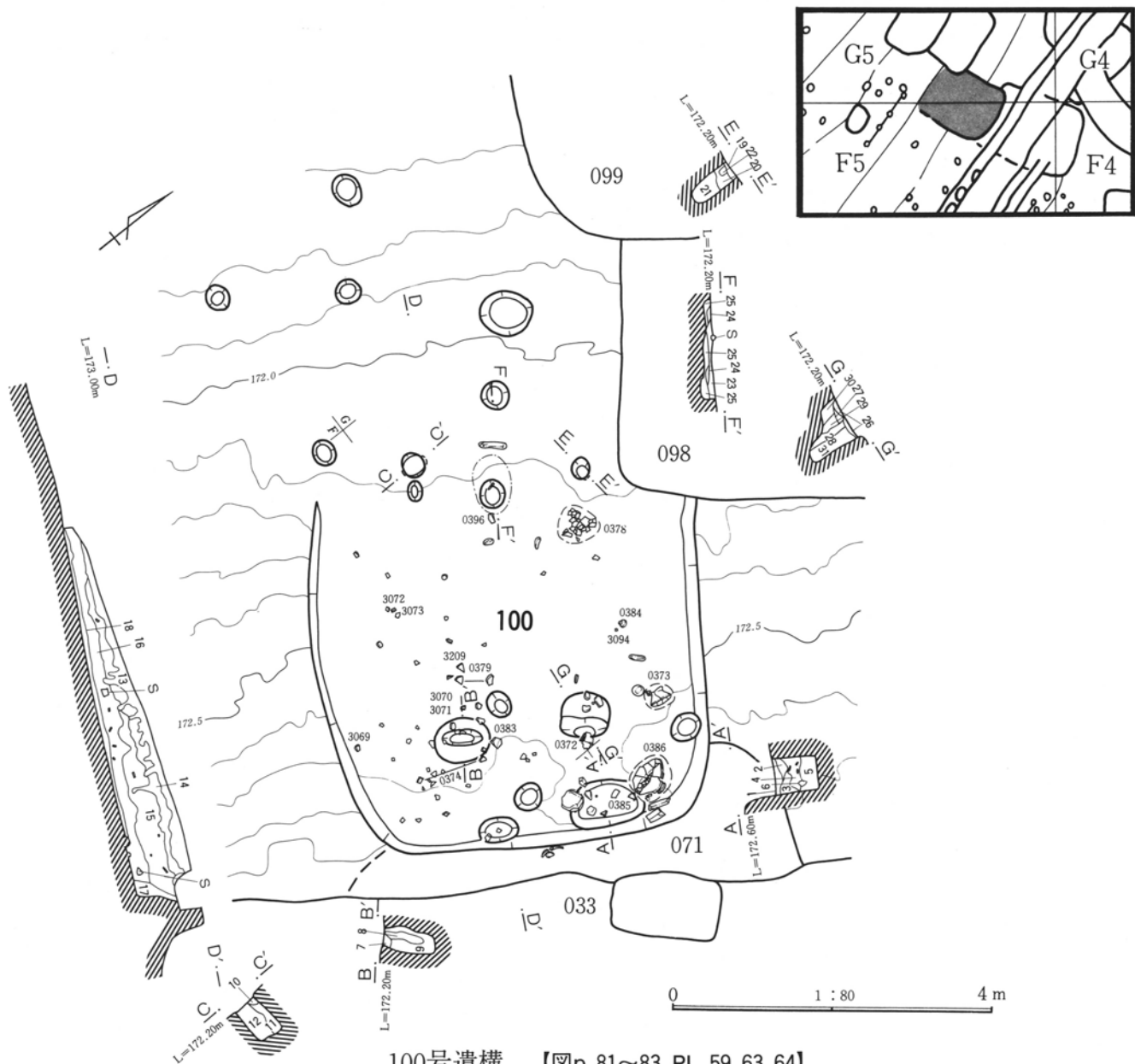


0 1 : 4 10cm



(p.77から) (0334, 35)・同甕 (0348, 58)・同有孔鉢 (0359)・土製勾玉 (0353, 54)・中期土器片 (0361, 62, 64)・縄文土器片 (0349, 60, 63)そして磨り石 (棒状=黒色片岩2081, 85 雲母石英片岩2083, 84 小判状=変輝緑岩2082)・磨製石鎌 (珪質準片岩3110)・剝片 (チャート3183)・2枚溶着した鉄鎌 (4017)が出土した。下層 (19, 20層) では、弥生後期高坏 (0327, 37)・同小型鉢 (0357)・同大型壺 (0328, 29, 31, 41) 同壺 (0336, 39)・同甕 (0330, 32, 33, 38, 44~46, 56, 67)・同小型甕 (0340, 43, 47)・中期壺片 (0350, 66)・縄文深鉢片 (0351, 52)・打製石斧 (変質安山岩2077, 粗粒安山岩2080)・削器 (硬質泥岩2079)・多孔石 (緑色片岩2076)・磨り石 (棒状=雲母石英片岩2075, 78)・打製石鎌 (黒曜石3092)・角釘状鉄製品 (4023)が見られた。

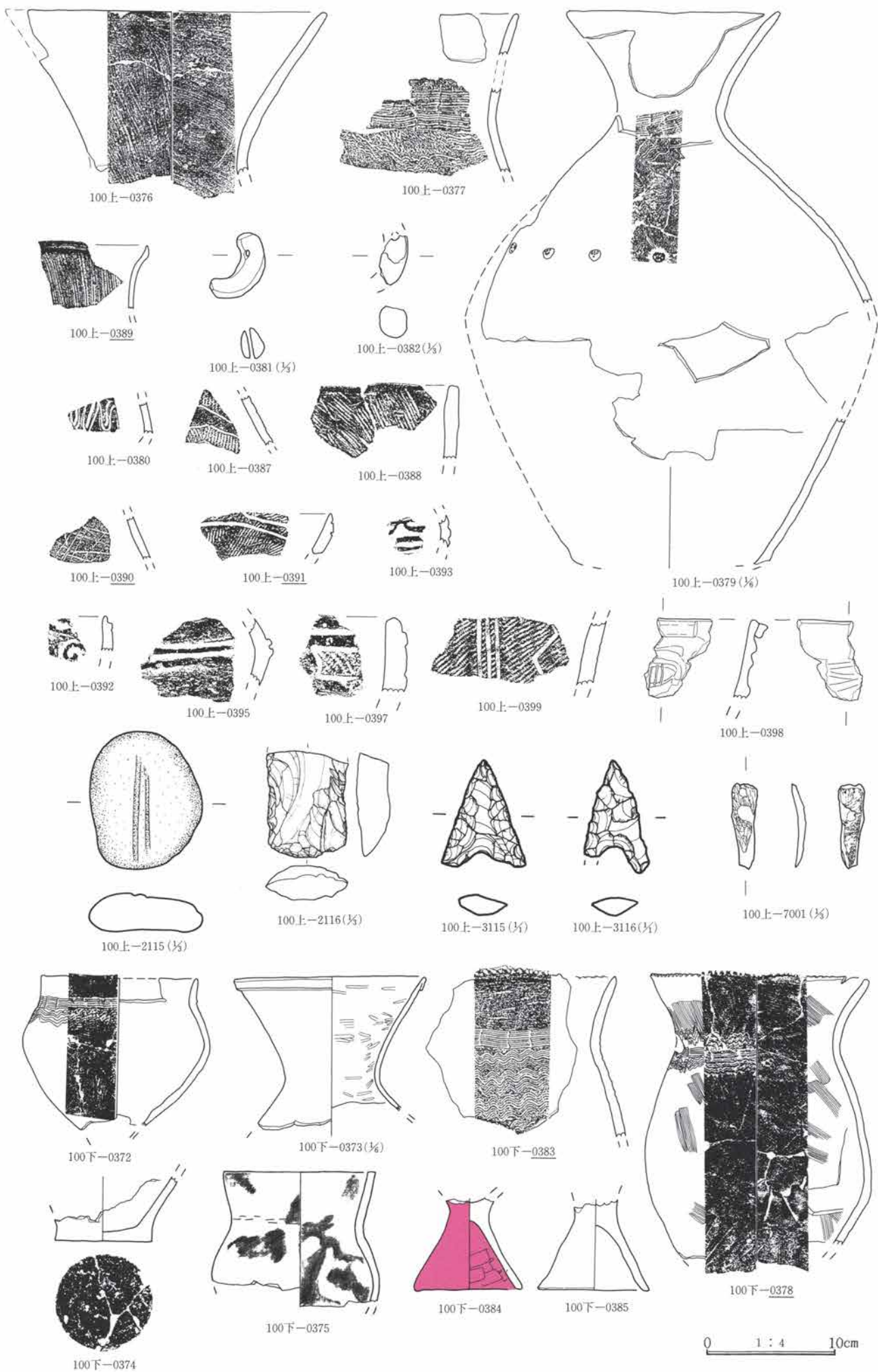
【備考】本竖穴は、全面積の2/5ほどが壊されているにも関わらず、土器を中心とする残存遺物の量は極めて多い。しかも大型壺や甕など同一器種の個体数も尋常ではない。少なくとも廃絶した時点では、この竖穴が貯蔵用途を持っていたことは確かである。上層出土ではあるが、鉄鎌と石鎌もその貯蔵に加わっていた可能性も高い。なお、上記打製石鎌も含めて、計9点の黒曜石分析を行ったが、結果は8,200BP 1点 (打製石鎌)・5,300BP 1点・3,900BP 4点・2,400BP 3点である (第V章参照)。

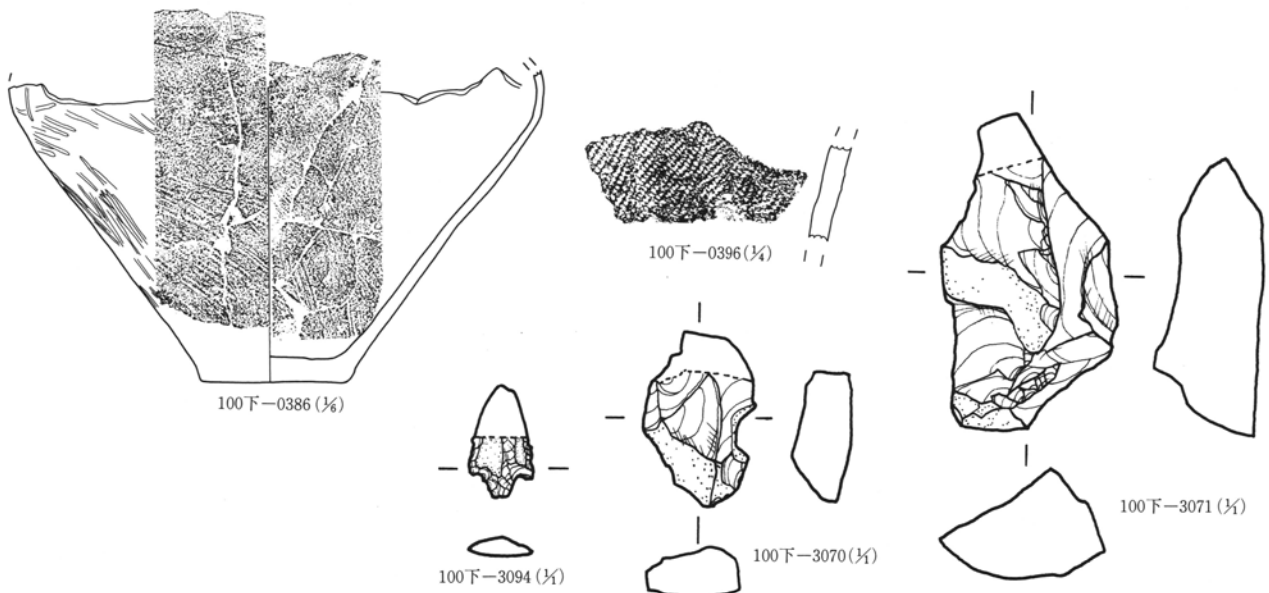


100号遺構 【図p.81~83 PL.59,63,64】

台地上西端で確認した弥生後期の竪穴。

【重複】 東側で弥生後期竪穴071号を壊す。北側で同098号と重なるが、層的には関係不明。また北西側で同099号と近接。【埋土】 1暗オリーブ褐粒子粗軽石小石少含 2オリーブ褐粒子粗締強 3暗オリーブ褐 4暗オリーブ褐締強炭化粒中少含 5オリーブ褐粒子粗粘質土混 6黄褐粘性強粘質土混 7明黄褐粒子粗ローム褐土混 8暗褐粒子粗粘性強 9明黄褐粘性強ローム塊多含 10オリーブ褐粒子粗締強 11黄褐粘性強 12オリーブ褐軽石小少含 13褐粘性無軽石多含 14黄褐粘性弱炭化粒少含 15暗褐ローム炭化焼土粒少含 16暗褐ローム炭化粒少含 17黄褐ローム塊中多崩落土 18黒褐締強ローム炭化物少床面覆 19黒褐粘性強 20暗オリーブ褐粒子粗 21暗オリーブ褐締弱 22暗オリーブ褐締強 23暗灰黄粒子粗ローム塊中多含 24明褐締強焼土多煉瓦状 25黄褐締強ローム塊中白軽石小多含 26オリーブ褐白軽石ローム粒少含 27オリーブ褐締強ローム塊多含 28オリーブ褐粘性強2同 29オリーブ褐粒子粗ローム中多含 30オリーブ褐粘性弱ローム塊中多含 31暗オリーブ褐粒子粗ローム塊中少含 【壁床】 谷側の1/3ほどは削られて、壁床は残っていない。【炉など】 西側柱穴間に炉石と焼土残るが、炉穴は炉石より内側になる。山側の東壁際に入り口ピットと貯蔵穴がある。【柱穴】 4個の支柱穴が長方形配置で並ぶが、山側の2個が板状なのに対し、谷側の2個は小丸材の柱痕である。【遺物】 上層（13~15層）からは弥生後期の土製勾玉(0381,82)・同甕(0377)・同壺類(0376,79,89)・中期土器片(0387,90)・前期土器片(0380,88,91,93)・縄文土器片(0392,95,97~99)、打製石斧(硬質泥岩2116)・砥石(牛伏砂岩2115)、打製石鏃(チャート3115 赤色珪質岩3116)そしてシカもしくはヒトの焼骨片(7001)が出土した。下層（16~18層）からは弥生後期高坏(0384,85)・同大型壺(0373,86)・同甕(0374,75,78,83)・同台付甕(0372)・縄文深鉢片(0396)、石核(黒曜石3071)・打製有茎石鏃(黒曜石3094)・他黒曜石剥片(3070)が見られた。





【備考】上記石核・打製有茎石鏃を含めて下層出土の6点の黒曜石分析による年代は、いずれも3,900BPである（第V章参照）。埋土各層に炭化物が含まれていることから、本竪穴は焼失している。上記焼骨は、その際に焼けた可能性もある。東側で切っている竪穴071号と同様に、等高線と直交する方向に主軸を持っている。

098・099号遺構 【図p.83~85 PL.65~67】

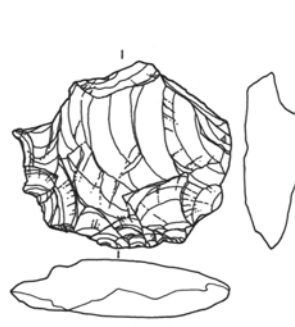
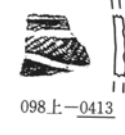
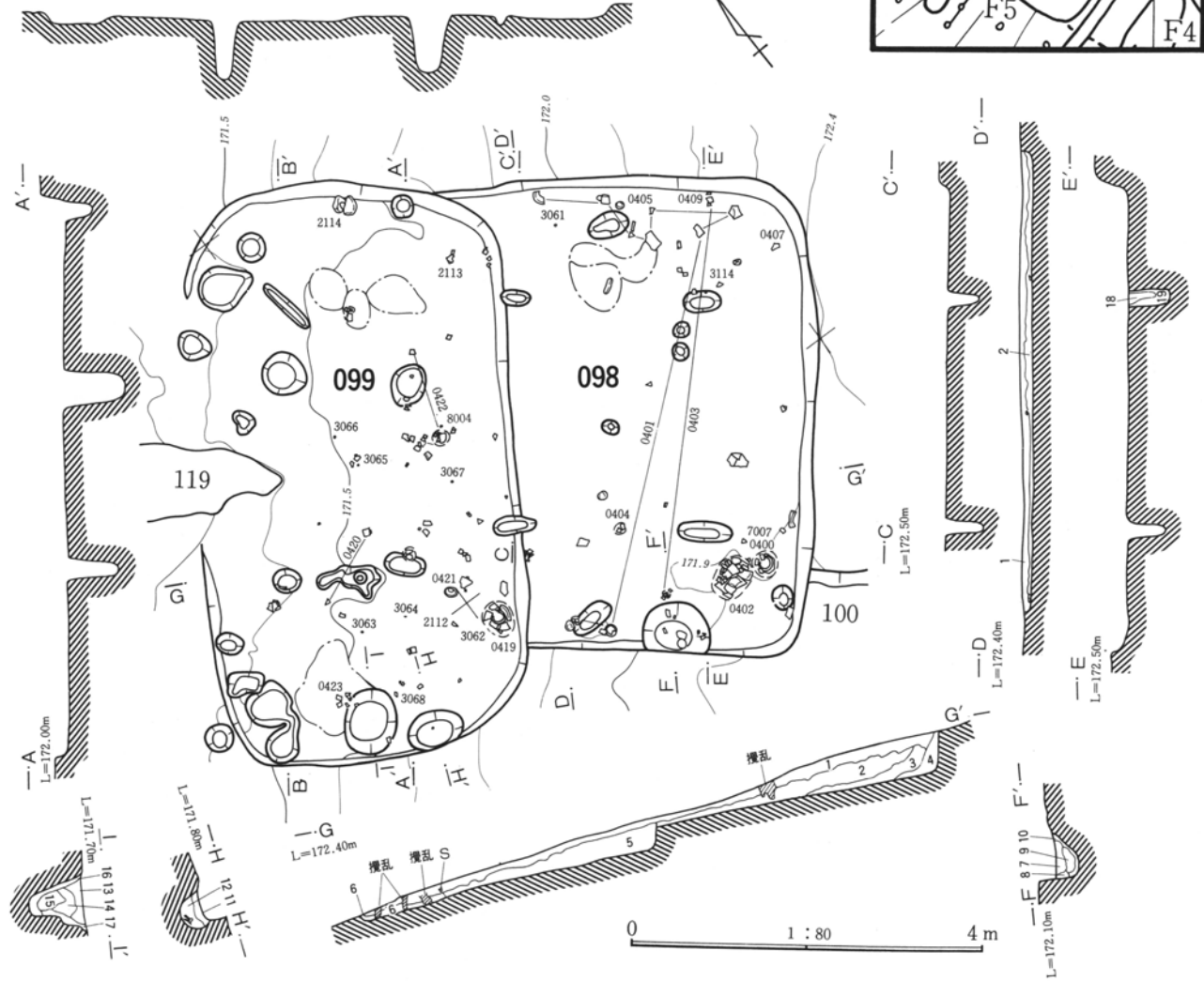
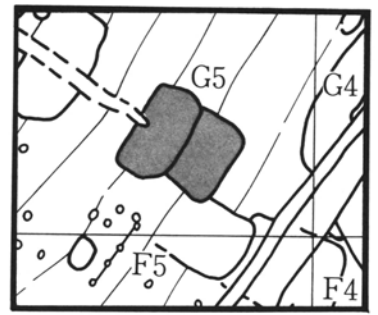
西斜面上部中央で検出した、共に等高線と平行して主軸を持つ弥生後期の竪穴群。【重複】両者の関係は僅かに残る層位状況より099号が新しい。098号は南側で弥生竪穴100号と重なるが、関係不明。099号は北西側で近世の溝119号に切られる。【埋土】1褐締無ローム少含 2暗褐ローム白粒子少含 3暗褐締強固ローム塊中焼土少含 4暗褐締弱ローム塊大少含 5暗褐粘性固白粒子炭化物焼土少含 6黄褐ローム塊主崩落土? 7褐粘性弱白粒子少含 8暗褐締弱ローム粒少含 9褐締弱ローム炭化物少含 10褐粘性固ローム多含 11暗褐粘性無ローム白粒子少含 12暗褐粘性無ローム塊少含 13暗褐粘性弱ローム白粒子少含 14暗褐粘性無白粒子炭化物少含 15黒褐締弱粘性無ローム塊中少含 16褐粘性弱ローム多含 17黄褐粘性弱ローム塊多含 18暗褐締弱ローム塊中少含 19黄褐締弱ローム主

098号【壁床】西側を099号に削られた他は、良好に床面が残っている。【炉など】北東側の支柱穴間で炉跡焼土が残る。また南西側壁際には貯蔵穴がある。【柱穴】板状の支柱穴4個を長方形配置で検出。【遺物】上層（1,2層）からは弥生後期甕(0406)・中期土器片(0408,13)・前期土器片(0410,11)・縄文鉢片(0412,14~18)、打製石斧(硬質泥岩2110 粗粒安山岩2111)、打製有茎石鏃(黒曜石3060)・黒曜石類剥片が出土した。下層（3,4層）からは弥生後期高坏?(0404)・同壺(0401)・同甕(0400,03,05)・中期甕(0409)・縄文深鉢片(0407)、打製有茎石鏃(珪質凝灰岩3114)・黒曜石剥片そしてモミ属炭化材が見られた。【備考】打製有茎石鏃を含める5点の黒曜石資料を分析したが、その結果は剥片1点が2,400BPで、他は3,900BPとなった（第V章参照）。炭化材出土により、焼失したと考えられる。

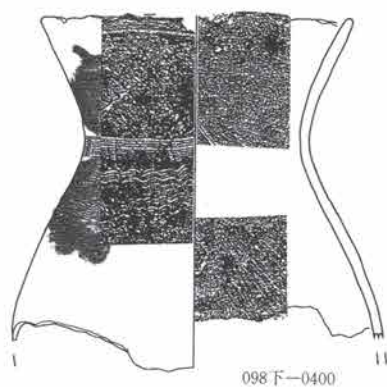
099号【壁床】上面が大きく削平されており、北側を中心に谷側での床壁の残りはあまり良くない。【炉など】北東側支柱穴間外側で炉跡の焼土がある。他に南西壁側の床に焼土が散る。南東壁際東寄りには貯蔵穴がある。【柱穴】中央部分に4個の丸材を中心とする支柱穴が並ぶが、全体の大きさから比べて主軸方向がかなり短い。そのため南西壁際中央の柱穴も構造的に支柱穴に匹敵する役割があったと考えられる。【遺物】上層（1層）からは弥生中期土器片(0423)・前期土器片(0426,27)・縄文鉢片(0424)、石匙(チャート3275)・黒曜石類剥片が出土した。下層（5,6層）からは弥生後期小型鉢(0421)・同壺類(0419,22)・同甕(0420)・中期壺(0425)、打製石斧(硬質泥岩2113)・磨り石(棒状=黒色片岩2114 石包丁状=牛伏砂岩2112)、黒曜石剥片、ガラス小玉(8004 青緑)が出土した。

—B
L=172.00m

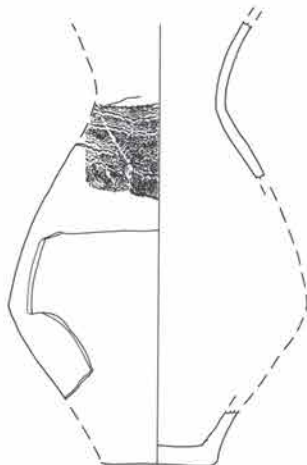
B'—



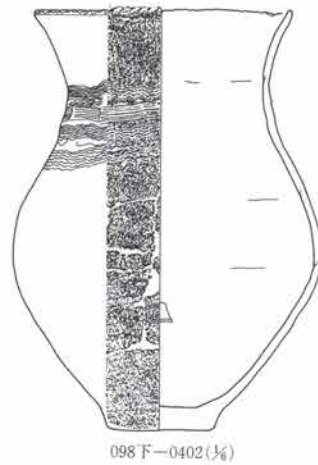
0 1 : 4 10cm



098下-0400



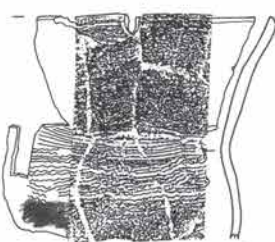
098下-0401 (1/2)



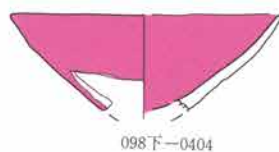
098下-0402 (1/2)



098下-0405



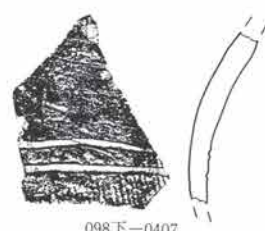
098下-0403



098下-0404



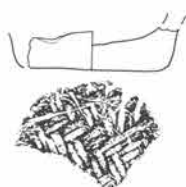
098下-0409



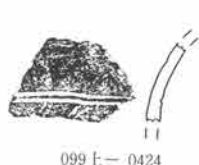
098下-0407



098下-3114 (1/2)



099上-0423



099上-0424



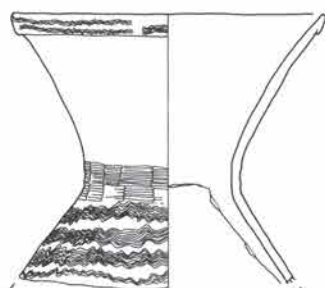
099上-0426



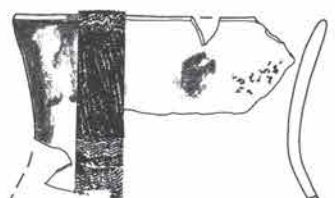
099上-0427



099上-3275 (1/2)



099下-0419 (1/2)



099下-0420



099下-0421



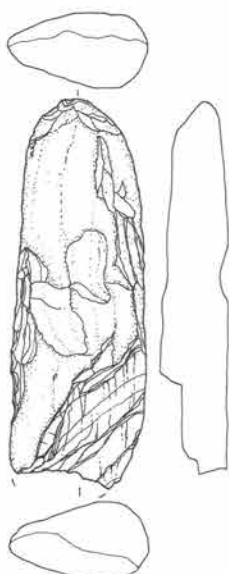
099下-0422



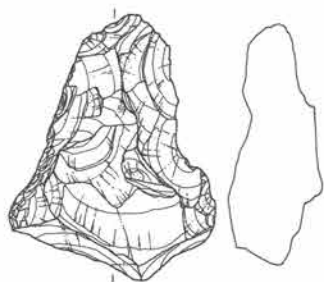
099下-0425



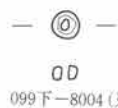
099下-2112 (1/2)



099下-2114 (1/2)

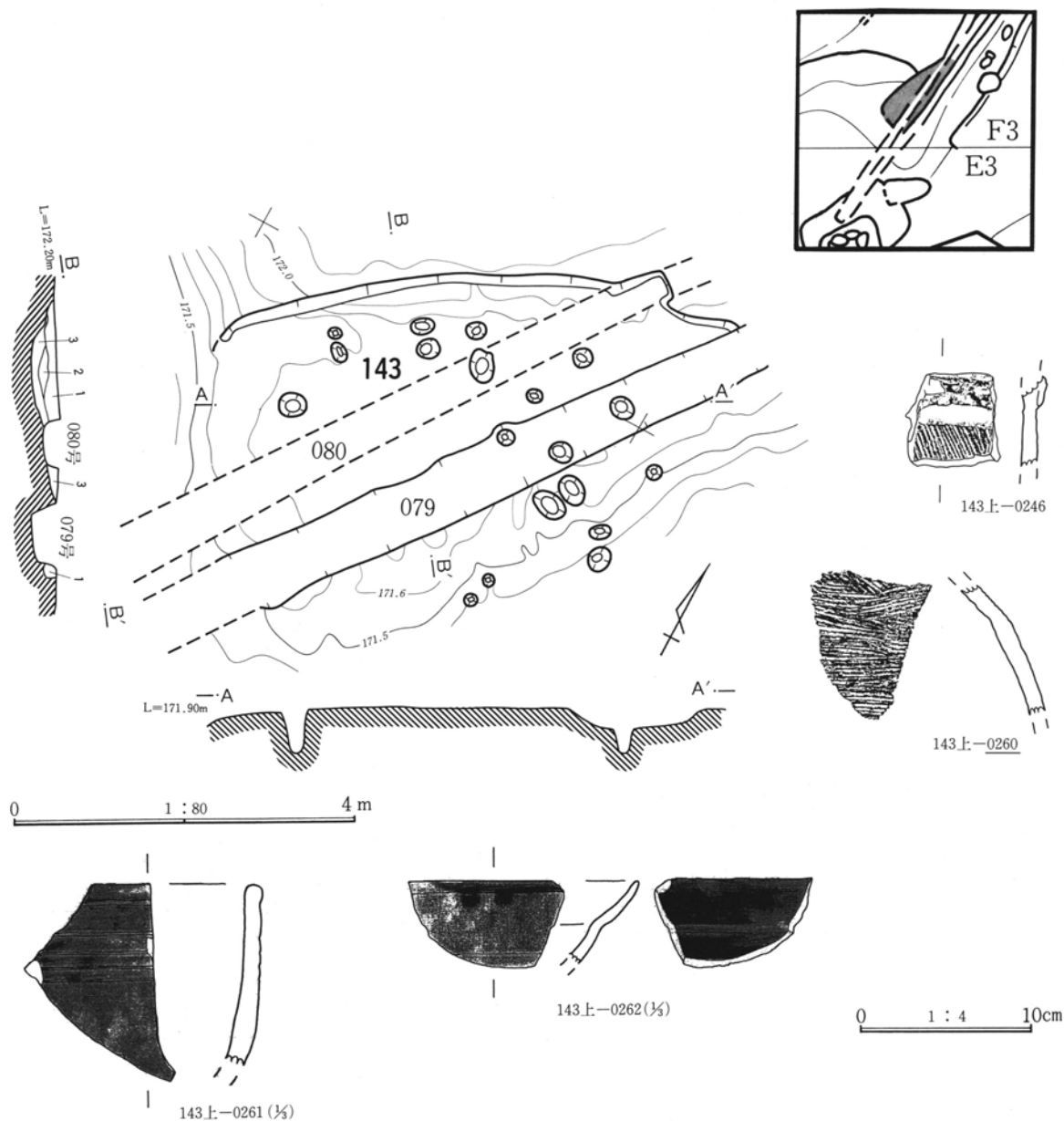


099下-2113 (1/2)



099下-8004 (1/2)

【備考】下層出土黒曜石剥片7点の分析結果は、2,400BP 1点・3,900BP 5点・5,300BP 1点である(第V章参照)。灰以外の焼土の分布から、焼失した可能性がある。



143号遺構 【図p.86 PL.68】

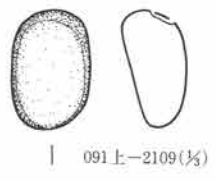
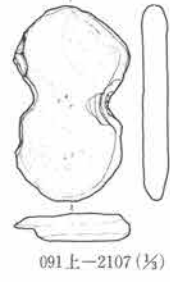
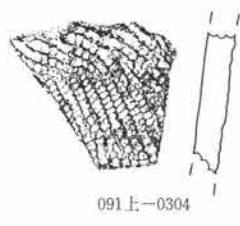
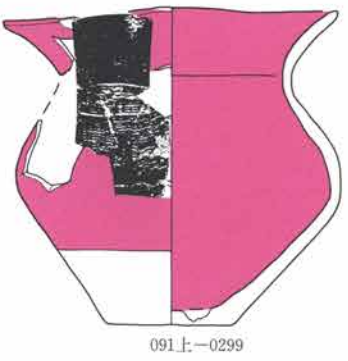
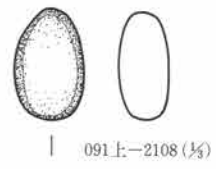
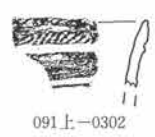
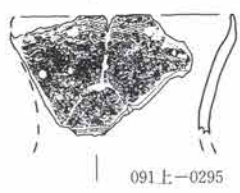
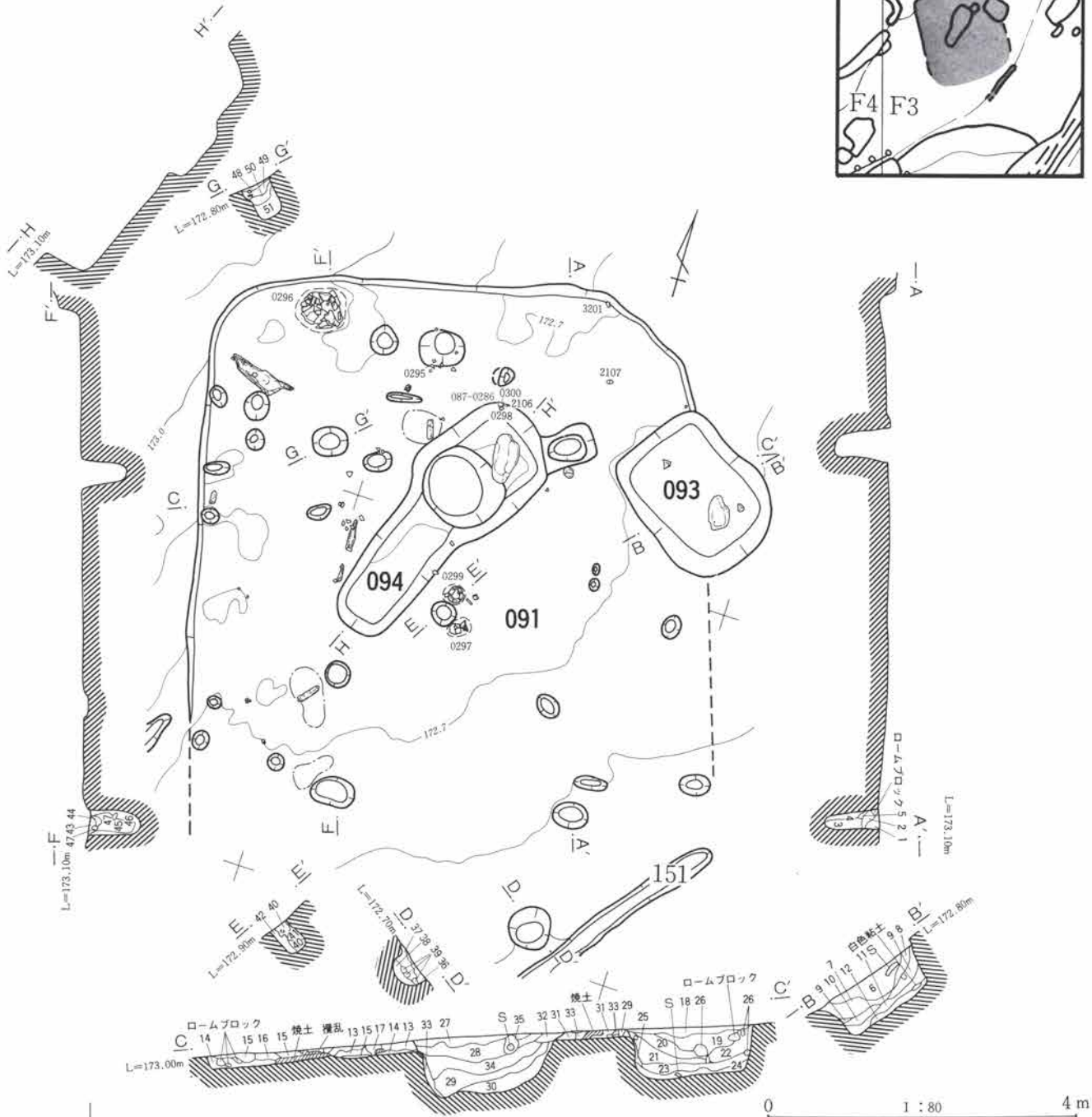
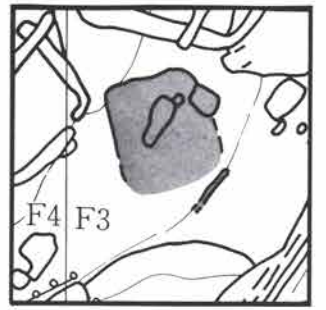
台地上南東端で検出した中世と推定される竪穴。

【重複】近世の溝079号2条に切られる。また南東側は近世の開墾跡007号に伴う造成により削られている。南西側では古墳075号の堀埋土にかかるが、同古墳の調査を先行してしまったため、範囲は明確に検出できなかった。【埋土】1褐砂質粒子粗細礫浅間B軽石小混 2鈍い黄褐砂質B軽石小混 3黄褐粘質締弱ローム小多含 【壁床】唯一検出できた北西側壁は、なだらかな立ち上がりになっている。残存する西側部分の床には、あまり顕著な硬化面は見られない。【炉など】不明。【柱穴】やや多くピットを検出したが、壁と似た走向の組み合わせで柱穴として深さのあるものを1組見られる。南東側が削られているため、4本組であったかは不明。【遺物】上層(1,2層)より近世飴釉段皿(0262)・天目釉鉢(0261)・円筒埴輪片(0246)・弥生前期壺片(0260)が出土。【備考】時期決定に確実な遺物はないが、重複状況と埋土状態より天目釉鉢に近いと考えられる。地床炉は本来ない可能性が高い。

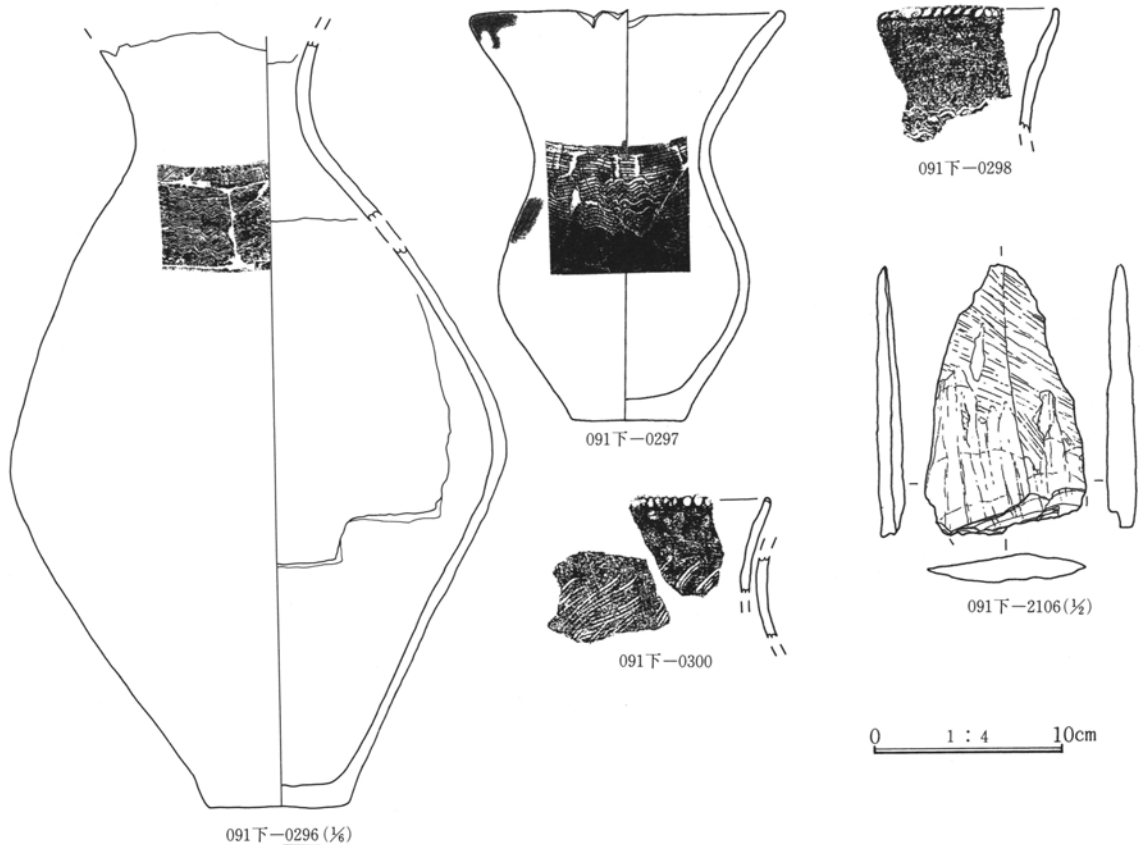
091・093・094号遺構 【図p.86~88 PL.69,70】

台地上南東側で検出した遺構群。093号と094号は、091号より新しい。

093号は近世の土坑。【埋土】6暗褐締強軽石小小石多炭化少含 7黒褐粘性強白軽石中少含 8オリーブ褐粒子粗ローム塊大多含 9オリーブ褐8同比ローム塊半分 10暗オリーブ褐粘性強炭化小多含 11暗オリーブ褐10同炭化無 12オリーブ褐粘性弱 18オリーブ褐粒子粗軽石小小石多含 19オリーブ褐締強ローム小炭化少含 (p.88へ)



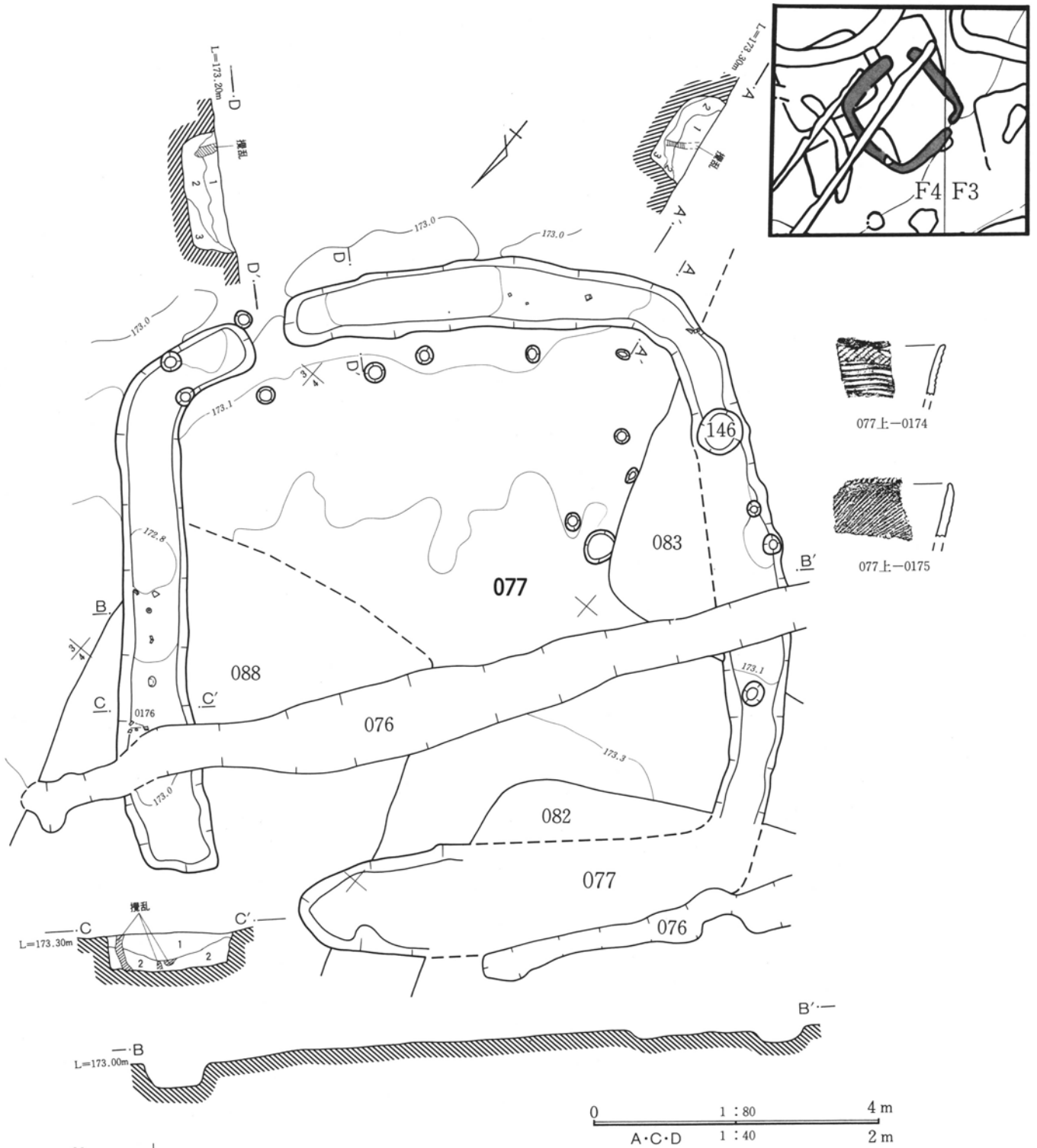
0 1 : 4 10cm



(p.86より) 20オリーブ褐締強ローム小白軽石小石多含 21オリーブ褐締弱炭化少含 22黄褐粒子粗締強粘性弱 23オリーブ褐粒子粗締強ローム少含 24オリーブ褐締強ローム中少含 25オリーブ褐締強ローム塊少崩落土 26明黄褐ローム塊 【形態】箱形で、底は平坦。【遺物】なし。【備考】091号の埋土で人為的に埋めた感じである。

094号は近世の土坑。【重複】2基の土坑が重なっているが新旧関係は不明。【埋土】27黒褐粒子粗締弱軽石小石多含 28明灰黄締弱軽石小石少含 29黒褐粒子粗締弱 30黒褐締強ローム塊大ローム中炭化中多含 31黒褐締弱軽石中多含 32黒褐31同比軽石倍 33黒褐締弱ローム塊大多含崩落土 34暗オリーブ褐締弱 35攪乱 【形態】箱形と短冊形の重複で、箱形の底半分は段がある。【遺物】なし。【備考】093号と同様に091号埋土で人為的に埋めたと思われる。軽石は浅間A軽石と考えられ、近世中期のものだろう。

091号は弥生後期の竪穴。【重複】西側で近世の溝068号の延長部分に近接し、南東側では同151号が重なっている。【埋土】1暗オリーブ褐締強ローム中多含 2暗オリーブ褐粘性強白軽石小炭化少含 3オリーブ褐粒子粗白軽石中少含 4オリーブ褐粒子粗粘性強ローム塊多 5オリーブ褐4同ローム塊無 13オリーブ褐粒子粗粘性弱ローム大炭化少含 14黒褐締強炭化多含 15黒褐粘性弱炭化多含 16黄褐粒子粗ローム塊炭化少含 17黄褐粒子粗締強炭化少含 36黒褐粒子粗締強ローム中多含 37黒褐締強ローム小白軽石多炭化少含 38黄褐粘性強汚ローム含 39黄褐ローム塊 40暗オリーブ褐ローム塊少含 41同40比ローム塊多含 42黄褐粘性強汚ローム白軽石小少含 43オリーブ褐ローム少含 44オリーブ褐炭化少含 45オリーブ褐粘性弱ローム全体含 46黄褐粒子粗締強汚ローム含 47黄褐ローム塊 48オリーブ褐粘性強炭化ローム少含 49暗オリーブ褐粒子粗ローム炭化少含 50暗オリーブ褐2同炭化ローム多含 51暗オリーブ褐粒子粗ローム多含 【壁床】上面は大きく削られ、特に南東側1/2は床も残っていない。【炉など】北側支柱穴間に炉石と焼土が残る。南西側床にも焼土散布部分がある。ただ094号に接し、炉石は動いた可能性もある。151号に接して貯蔵穴状のピットを確認した。【柱穴】板材状の柱痕を持つ支柱穴を4個検出。また対角線交点にも丸材柱痕柱穴がある。西壁際には、側柱穴状のものもいくつか見られるが、他の部分は不明。【遺物】上層(13層)では、弥生後期壺(0295)・同広口壺(0299)・中期土器片(0301~03)・縄文土器片(0304)、打製石斧(黒色片岩2107)・磨り石(卵型=黒色安山岩2108 珪質頁岩2109)が出土した。下層(14~16層)では弥生後期大型壺(0296)・同小型甕(0297)・同甕(0298)・中期甕片(0300)、石剣(珪質準片岩2106)と炭化カヤ材が見られた。【備考】炭化材と焼土散布より焼失遺構である。主軸走向は、北西側の088号とほぼ同一。上層出土黒曜石剥片の分析成果は、2,400BPである(第V章参照)。

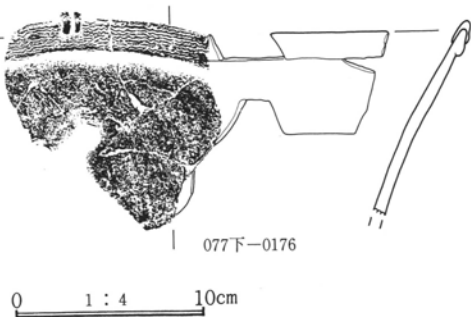


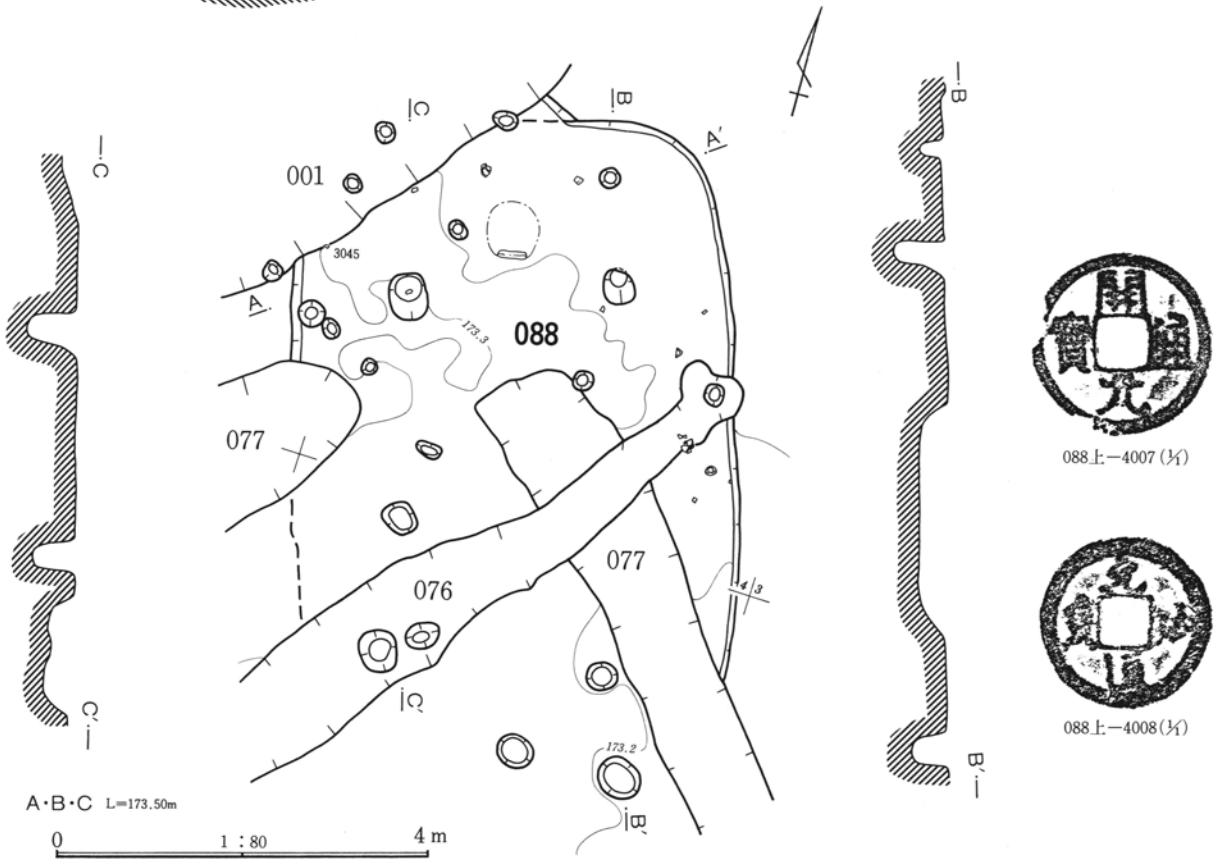
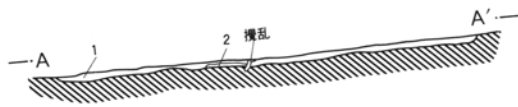
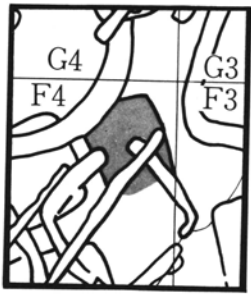
077号遺構 【図p.89 PL.71】

台地上南東側で検出した古墳時代前期推定の方形周溝墓。

【重複】近世の溝076号で切られ、弥生後期の竪穴082・083・088号を壊す。また南西側溝にちょうど重なって弥生後期の土坑146号がある。全体に上面は大きく削られている。【埋土】1暗褐粘性弱黄褐粒多白粒少含 2褐締弱ローム多炭化少含 3黄褐ローム多崩落土 【形態】

溝内はほぼ正方形(8×8m)。溝は北西辺が他辺に比べ幅広く、北側隅と南東側が途切れている。【主体部】不明。【遺物】上層(1層)より弥生中期土器片(0174, 75)、下層(2, 3層)より弥生後期大型壺片(0176)が出土している。【備考】下層遺物は重複する竪穴のものが流入した可能性がある。4基の方形周溝墓の中では最も小さい。北東側の方形周溝墓067号とは、主軸が異なる。また南西側では円形周溝墓が続く。

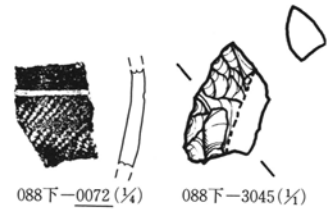




088上-4007 (1/1)



088上-4008 (1/1)



088下-0072 (1/1)

088下-3045 (1/1)

088号遺構 【図p.90 PL.71】

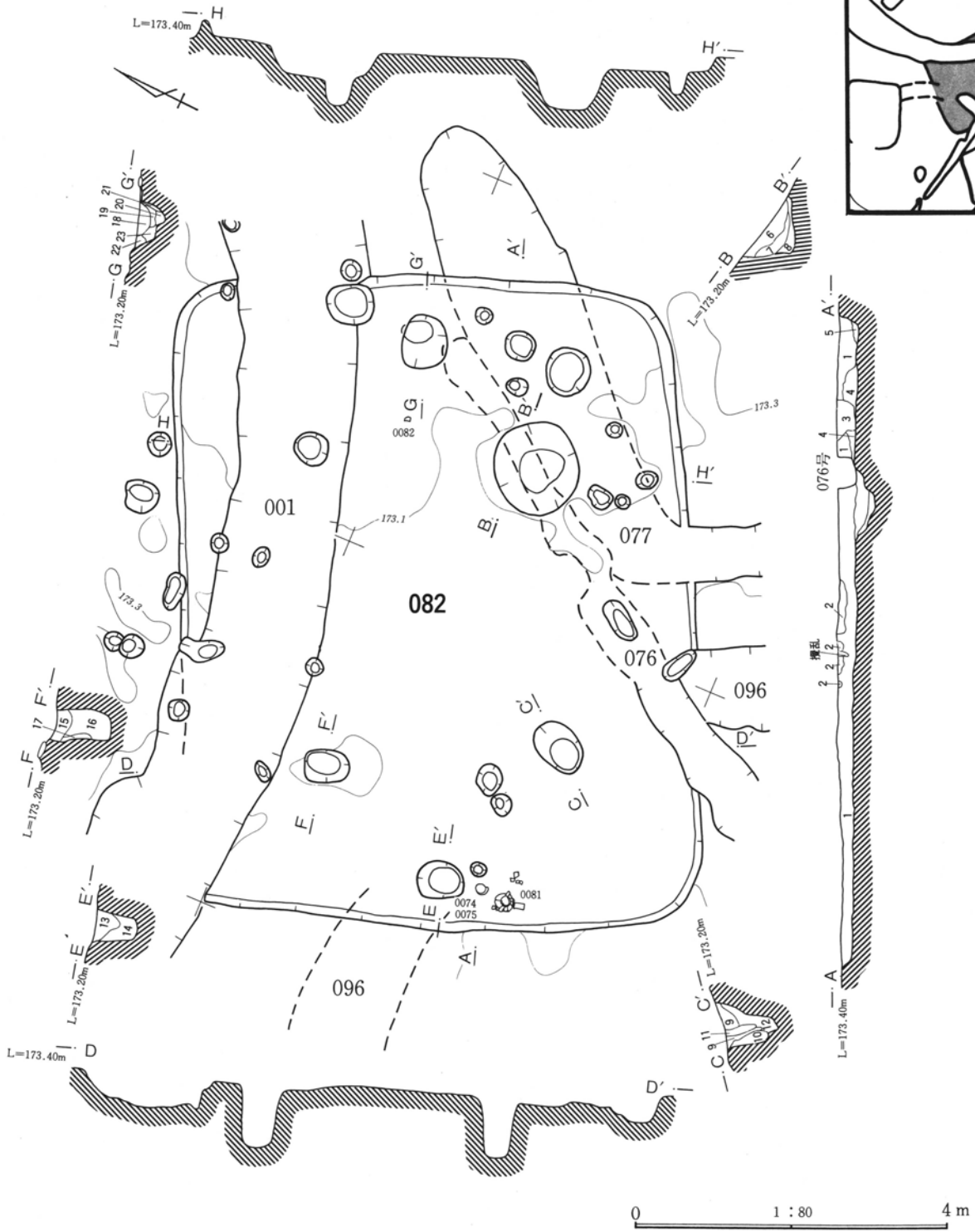
台地上南東側で検出した推定弥生後期の竪穴。

【重複】近世の溝076号・古墳001号・方形周溝墓077号に切られる。

【埋土】1オリーブ褐粘性強ローム塊大多含 2黒褐締強粘性強ローム塊中少含 【壁床】

上面は大きく削られ、壁の残存は極めて悪い。床も北側1/2程度が残るだけである。

【炉など】北側主柱穴間外側に、炉石と焼土が残る。【柱穴】4個の丸材柱痕の主柱穴が長方形配置で並ぶ（南側2個は上図には断面が表されていない）。【遺物】銅銭（開元通宝4007 元祐通宝4008）・弥生中期甕片（0072）・打製石鏃（黒曜石3045）・黒曜石剥片が出土した。【備考】南東側の後期竪穴091号と同じ主軸だが、規模は小さい。上記遺物が確実に伴うかは断定しがたく、周辺の遺構との配置関係や形態より弥生後期と推定する。打製石鏃を含む6点の黒曜石分析の成果は、8,200BP 1点・5,300BP 3点・3,900BP 2点である（第V章参照）。



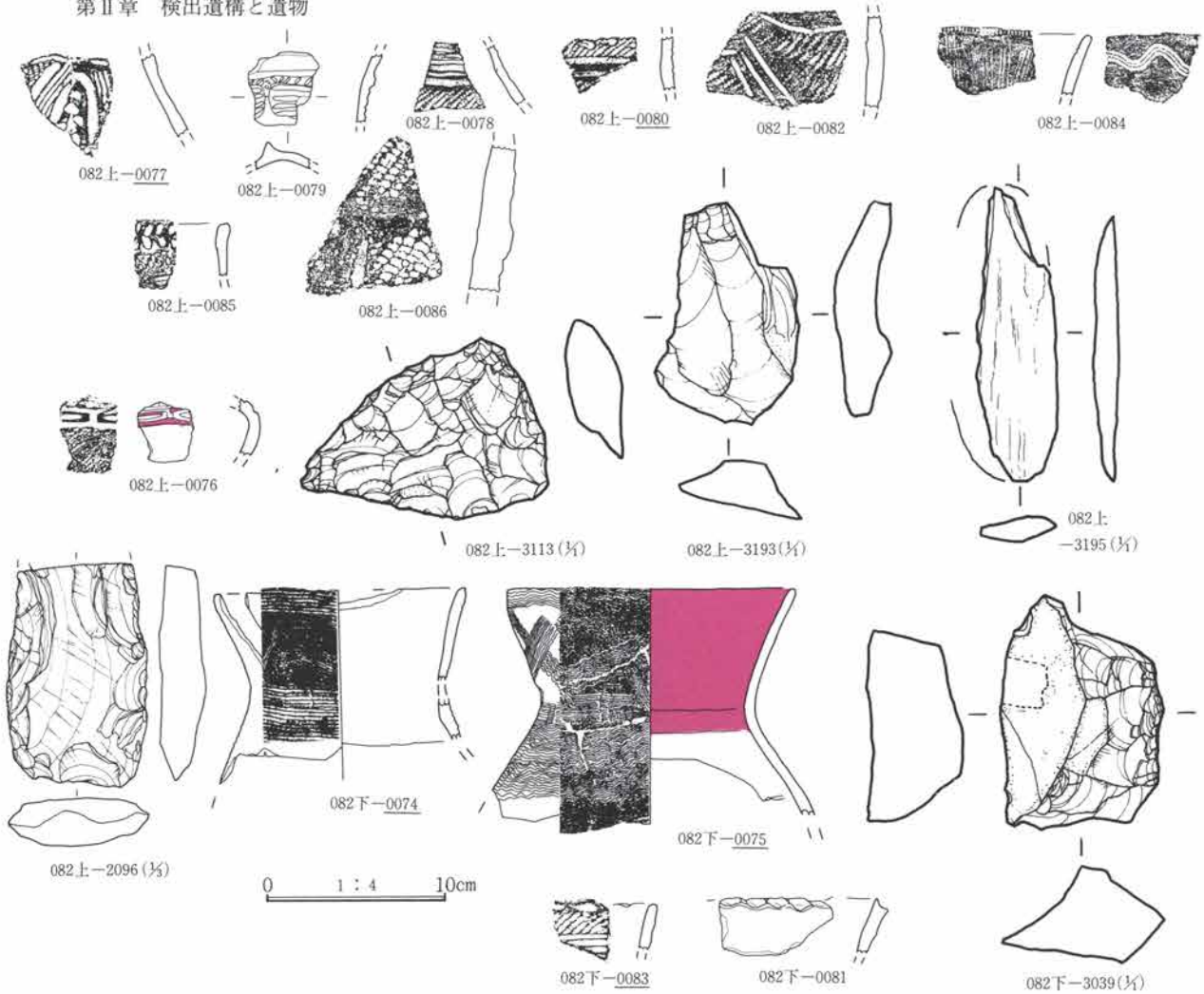
082号遺構 【図p.91,92 PL.72】

台地上南側で検出した弥生後期の竪穴。

【重複】近世の溝076号に壊される他に、古墳001号・方形周溝墓077号・円形周溝墓096号にも切られている。

【埋土】1暗褐締弱ローム白粒多炭化物含 2黄褐ローム塊 3暗褐締弱軽石多076号埋土 4暗褐締弱ローム多含 5黄褐ローム崩落土 6暗褐ローム白粒多炭化物少含 7黒褐ローム粒多含 8黄褐ローム多崩落土 9暗褐締弱ローム少含 10褐ローム多崩落土 11黒褐締無 12暗褐締弱ローム塊中少含 13暗褐締弱焼土ローム少含 14褐ローム少含 15暗褐締弱ローム白粒少含 16暗褐締弱ローム塊中少含 17黄褐ローム主崩落土 18暗褐締弱ローム多炭化物少含 19黒褐ローム多含 20褐締弱ローム全体焼土少含 21黄褐ローム崩落土 22暗褐締弱ローム少含 23黄褐ローム多含 【壁床】全体に上面が大きく削られており、壁の残りは僅かだが、床は古墳001号に切られた部分を除いて基本的に確認できた。【炉など】不明。【柱穴】北西側を除いて丸材柱痕を持つ支柱穴4個が長方形に並び、東壁と西壁中央際にそれぞれ棟持部分の柱穴があり、計6本の支柱構造になっている。【遺物】

第II章 検出遺構と遺物

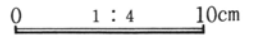
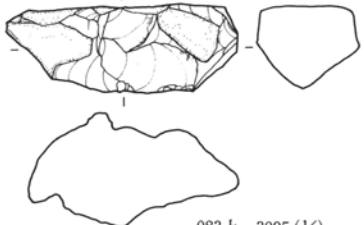
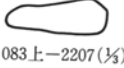
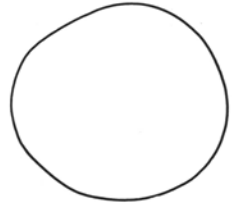
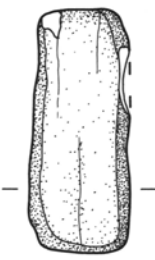
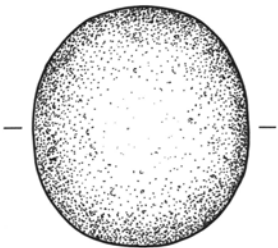
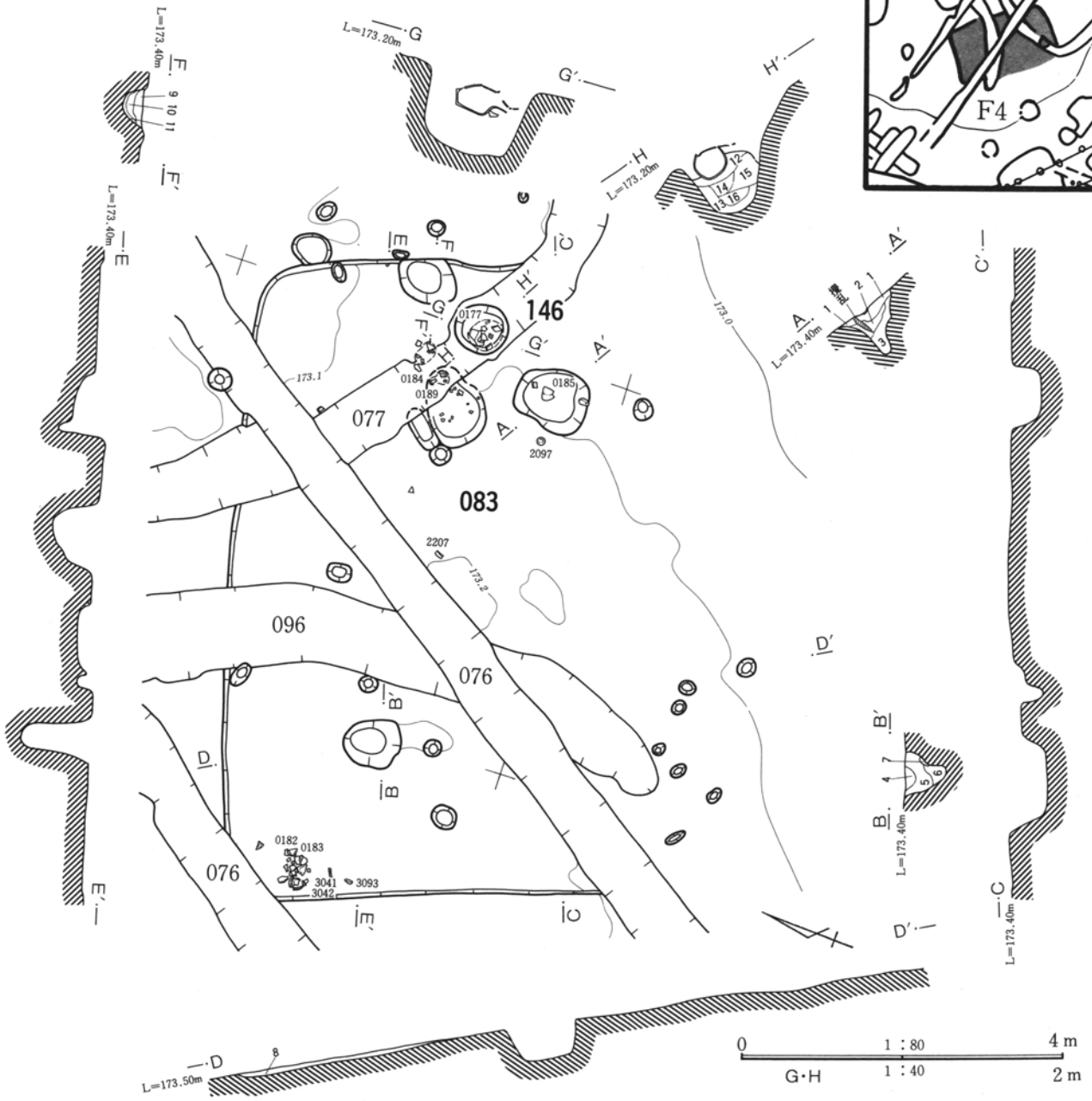


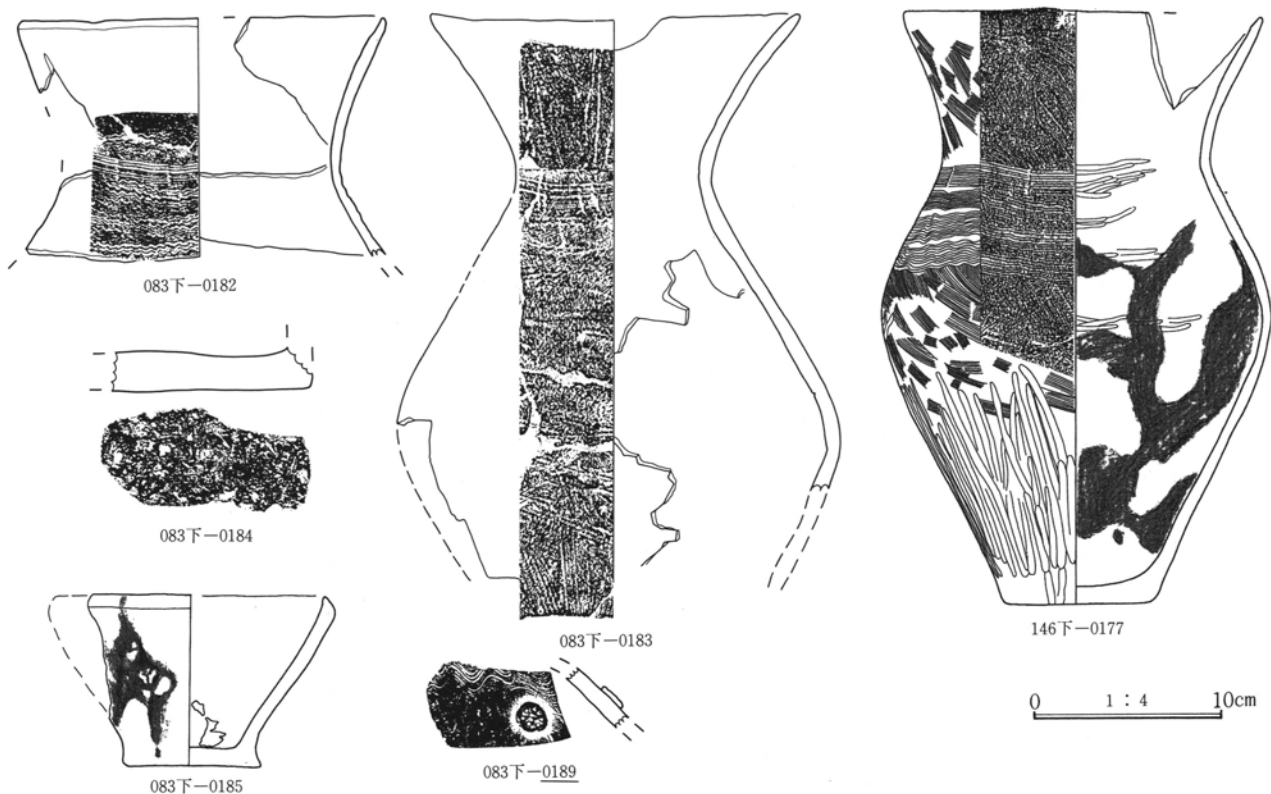
上層（確認面）からは弥生中期土器片(0077~80,82,84,85)・前期土器片(0076)・縄文深鉢片(0086)、打製石斧(粗粒安山岩2096)・石匙(チャート3113)・磨製石斧(蛇紋岩3195)・剥片(黒曜石3193他)が出土し、下層(1,4,5層)では弥生後期甕類(0074,75)・中期土器片(0083)・前期土器片(0081)・加工痕ある剥片(黒曜石3039)が見られた。【備考】本竪穴は、東側に隣接する088号などと比べると、長軸を東西方向に取っている点、6本支柱構造など、特異な点が指摘できる。黒曜石分析では、(3039)が2,400BP、上層出土の剥片が3,900BPの結果が出た(第V章参照)。

083・146号遺構 【図p.93,94 PL.72,73】

台地上南側で検出した弥生後期の遺構群。両者の関係は不明。

083号は、弥生後期の竪穴。【重複】近世の溝076号及び方形周溝墓077号・円形周溝墓096号に壊される。北西側で弥生後期竪穴082号が近接。【埋土】1褐締弱ローム焼土少含 2黒褐締無ローム塊中焼土少含 3黄褐ローム多崩落土 4暗褐締弱ローム少含 5暗褐締弱ローム塊中少含 6黒褐締弱ローム少含 7黄褐崩落土 8暗褐締弱ローム塊中少含 9褐締弱ローム少含 10黒褐締弱ローム炭化粒少含 11黄褐ローム主崩落土 【壁床】上面は大きく削られ壁は範囲を示す程度しか残っていない、特に南側は床も飛んでいる。【炉など】東壁側の支柱穴間の位置に077号に壊された状態で浅い炉穴が見られる。【支柱穴】南東側と北西側に板状ぎみの支柱穴2個があり(南東側のものはC断面段階では柱痕未掘)、また東壁際にもピットがある。





【遺物】上層（確認面）より弥生中期土器片(0186,87)・縄文土器片(0188)、磨り石（小型板状＝雲母石英片岩2207 球形＝粗粒安山岩2097）、黒曜石加工痕ある剥片(3043)・同石核(3095)・同打製有茎石鏃(3093)及び同剥片が出土した。下層（8層）では弥生後期甕(0182)・同壺(0183,84,89)・同小型鉢(0185)が見られた。

【備考】北側の082号とほとんど同じ主軸方向を示しており、東壁際のピットも082号と同様の棟持構造の柱穴の可能性もある。黒曜石類5資料の分析成果は、いずれも3,900BPである（第V章参照）。

146号は、弥生後期の土坑。【重複】方形周溝墓077号に上面を切られる。【埋土】12暗褐白軽石中少含 13褐粒子粗ローム多崩落土 14暗褐粒子粗締強白軽石中少含 15オリーブ褐粒子粗粘性强白軽石粒多含 16オリーブ褐粒子粗ローム中白軽石多含

【形態】底がなだらかで平面楕円形。【遺物】上層（12,14層）に弥生後期甕(0177)が見られた。【備考】本土坑は位置から見て、性格不明の単独の遺構であるが、埋没時に083号の遺物である甕が入り込んだと思われる。

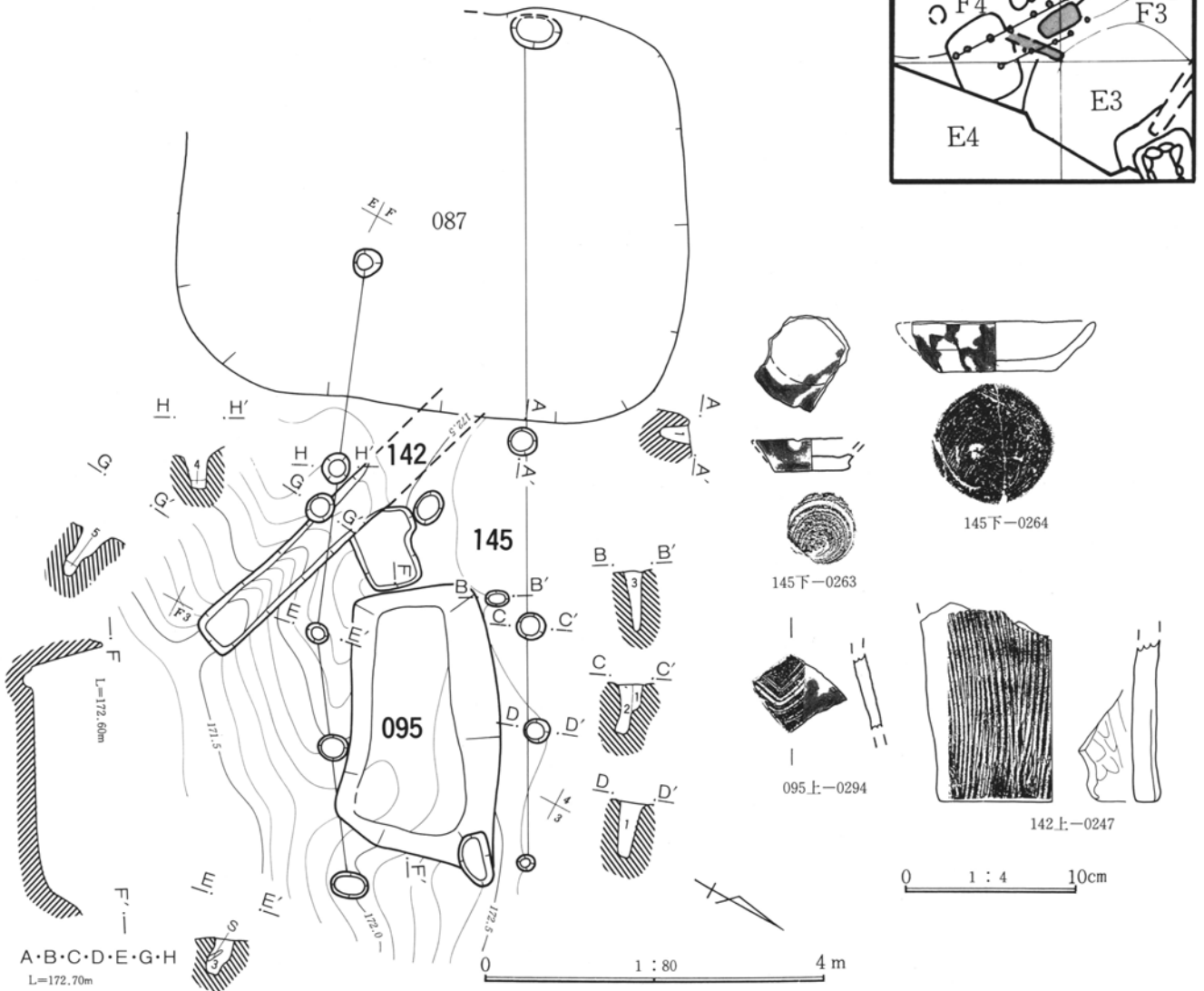
095・142・145号遺構 【図p.95 PL.73】

台地上南側で検出した遺構群。

142号は、近世の短冊形土坑。【重複】古墳075号と弥生堅穴087号を壊す。【埋土】087号19,20層。【形態】典型的な短冊形。【遺物】上層より円筒埴輪片(0247)が出土。【備考】近世の主な溝と直交する方向をとる。

145号は、中世の柱穴群。【重複】古墳075号と弥生堅穴087号を壊す。【埋土】1鈍い黄褐砂質粒子粗浅間B軽石小混 2褐砂質粒子粗締弱B軽石小炭化粒混 3鈍い黄褐砂質ローム塊小混 4黒褐粘質ローム塊少混 5褐粘質締弱 【形態】10個以上の柱穴が、東北東・西南西方向に2列並ぶが、明確な建物としての組み合わせは不明。【遺物】異なった柱穴内より土師器皿(0264)と小皿(0263)が出土。【備考】東側にやや離れて似た走向をとる中世堅穴143号と関係があるだろう。

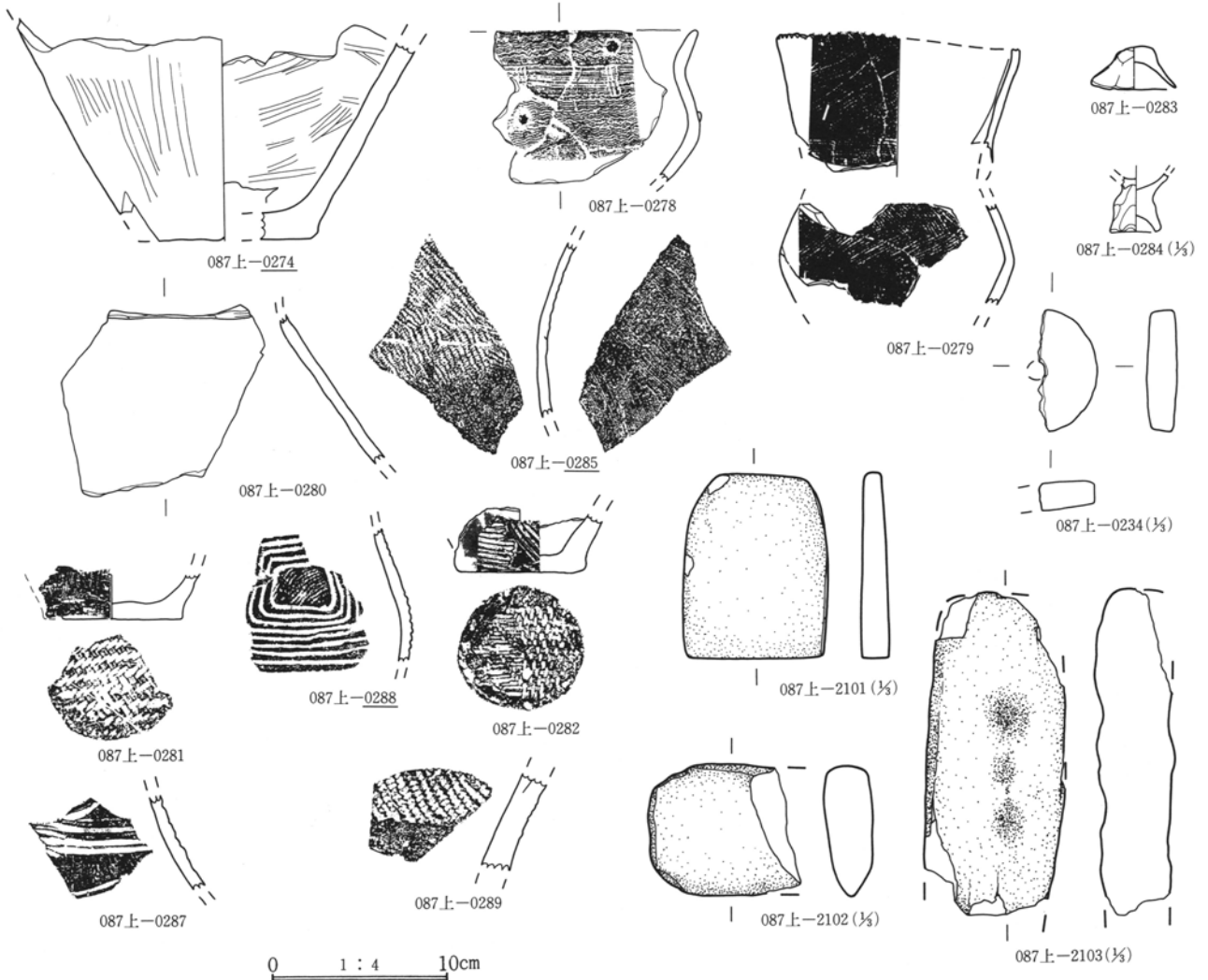
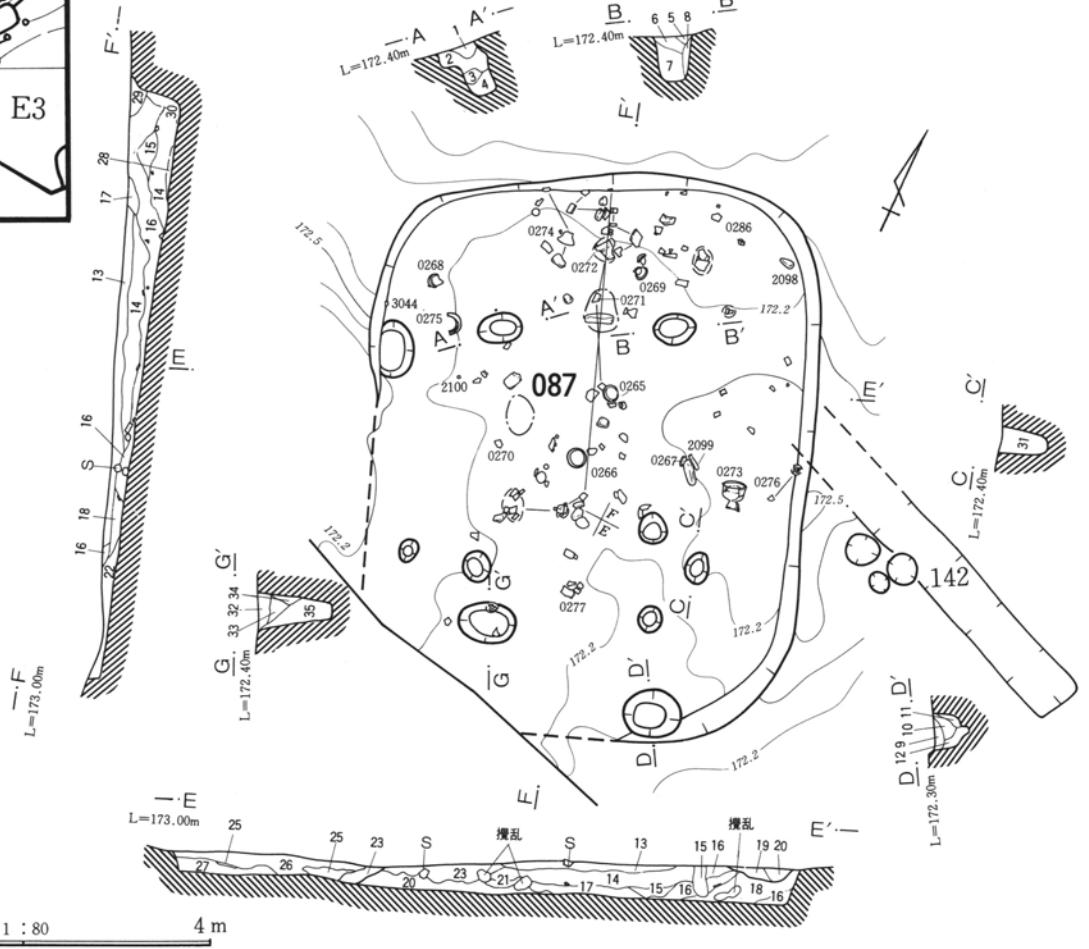
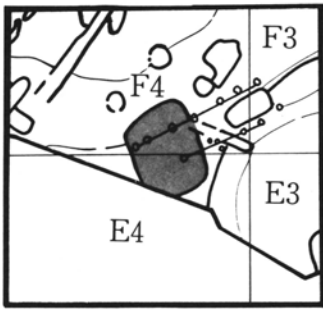
095号は、弥生土坑。【重複】古墳075号に壊される。【埋土】(p.38記述) 【形態】底が平ら（片側小ピット状－平面不明）な深い長方形。【遺物】上層で弥生後期甕片(0294)出土。【備考】061号・073号と同類か。

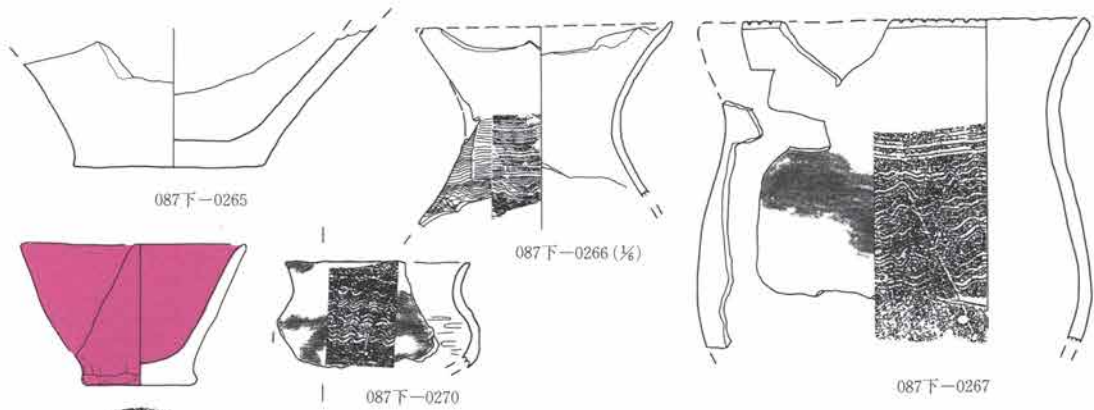


087号遺構 【図p.96,97 PL.74,75】

台地上南端で検出した弥生後期の竪穴。

【重複】土坑142号・柱穴群145号・古墳075号に壊され、南西側は近世に削られる。【埋土】重複で土層認識が混乱。1暗オリーブ褐粘性弱 2オリーブ褐粒子粗 3褐粒子粗ローム粒少含 4褐3比黒強 5オリーブ褐粒子粗白軽石少含 6オリーブ褐ローム粒中多含 7オリーブ褐6比黒強 8黄褐粒子粗ローム中多含 9黄褐粒子粗ローム白軽石少少含 10暗オリーブ褐粒子粗白軽石小ローム塊少含 11暗オリーブ褐粘性強 12黒褐締弱ローム塊少含 13褐粘性弱 14暗オリーブ褐締強白軽石小小石多含 15比14軽石小石無 16オリーブ褐粘性弱ローム塊中多炭化少含 17オリーブ褐16同黒強炭化粒少含 18黄褐粒子粗黒土塊少含 19暗オリーブ褐粒子粗ローム塊大多含 20暗オリーブ褐19同黄強 21黄褐粒子粗ローム塊混 22攪乱 23黒褐粘性弱白軽石小多含 24暗オリーブ褐締強ローム浅間A軽石混 25黄褐粒子粗粘性無ローム主 26オリーブ褐締強A軽石混 27オリーブ褐締強ローム塊A軽石多 28黒褐粘性強炭化粒少含 29黒褐 30崩落土 31黒褐締弱ローム塊中多含 32オリーブ褐締強ローム白軽石少含 33ローム塊 34オリーブ褐ローム塊少含 35オリーブ褐粒子粗 【壁床】南西側は重複遺構で壁床は検出できず。北西側床に焼土が残る。【炉など】北側主柱穴間に炉石と焼土が残る。南壁際に貯蔵穴状のピット。【柱穴】南東側を除いて板材状主柱穴4個が方形に並ぶ。その他ピットは145号の可能性。【遺物】上層（13～15, 19～23, 25～27層）から弥生後期紡錘車(0234)・同壺(0274, 80)・同甕類(0278, 79, 85)・同ミニチュア(0283, 84)・中期土器片(0281, 87, 88)・前期壺片(0282)・縄文鉢片(0289)、多孔石(黒色片岩2103)・磨り石(石包丁状=牛伏砂岩2102 方形板状=牛伏砂岩2101)、黒曜石・チャート剥片が出土。下層（16～18層）からは、弥生後期壺類(0265, 66, 71)・同甕類(0267, 70, 72, 73, 75, 76, 86)・同高坏鉢類(0277, 69)・中期土器片(0268)、敲き石(粗粒安山岩2098)・磨り石(小円盤=牛伏砂岩2100 棒状=黒色片岩2099)を検出。【備考】火災の可能性。黒曜石分析成果は、3,900BP（第V章参照）。

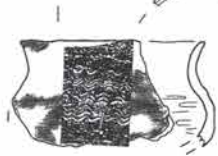




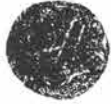
087下-0265

087下-0266 (1/4)

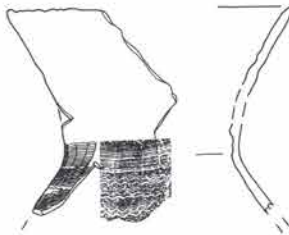
087下-0267



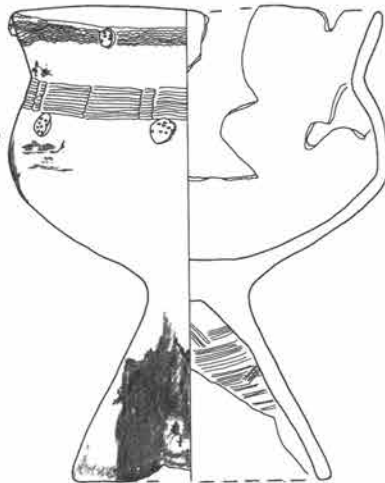
087下-0270



087下-0269



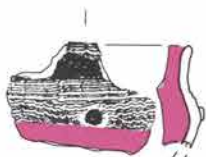
087下-0271 (1/4)



087下-0273



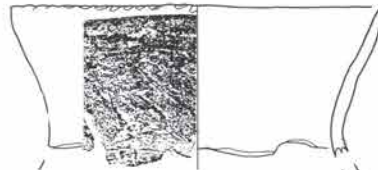
087下-0272



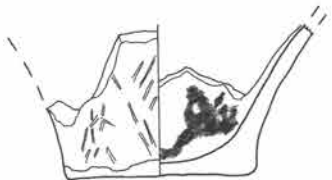
087下-0276



087下-0277



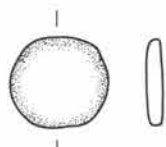
087下-0275



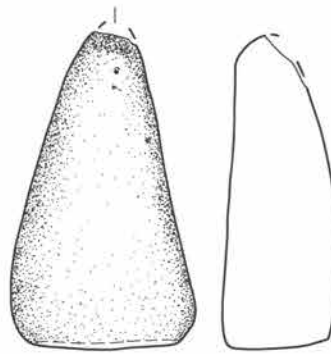
087下-0286



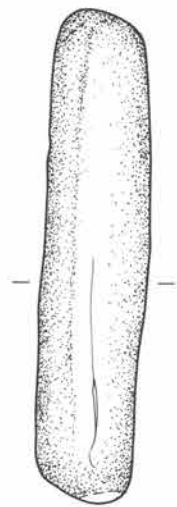
087下-0268



087下-2100 (1/4)

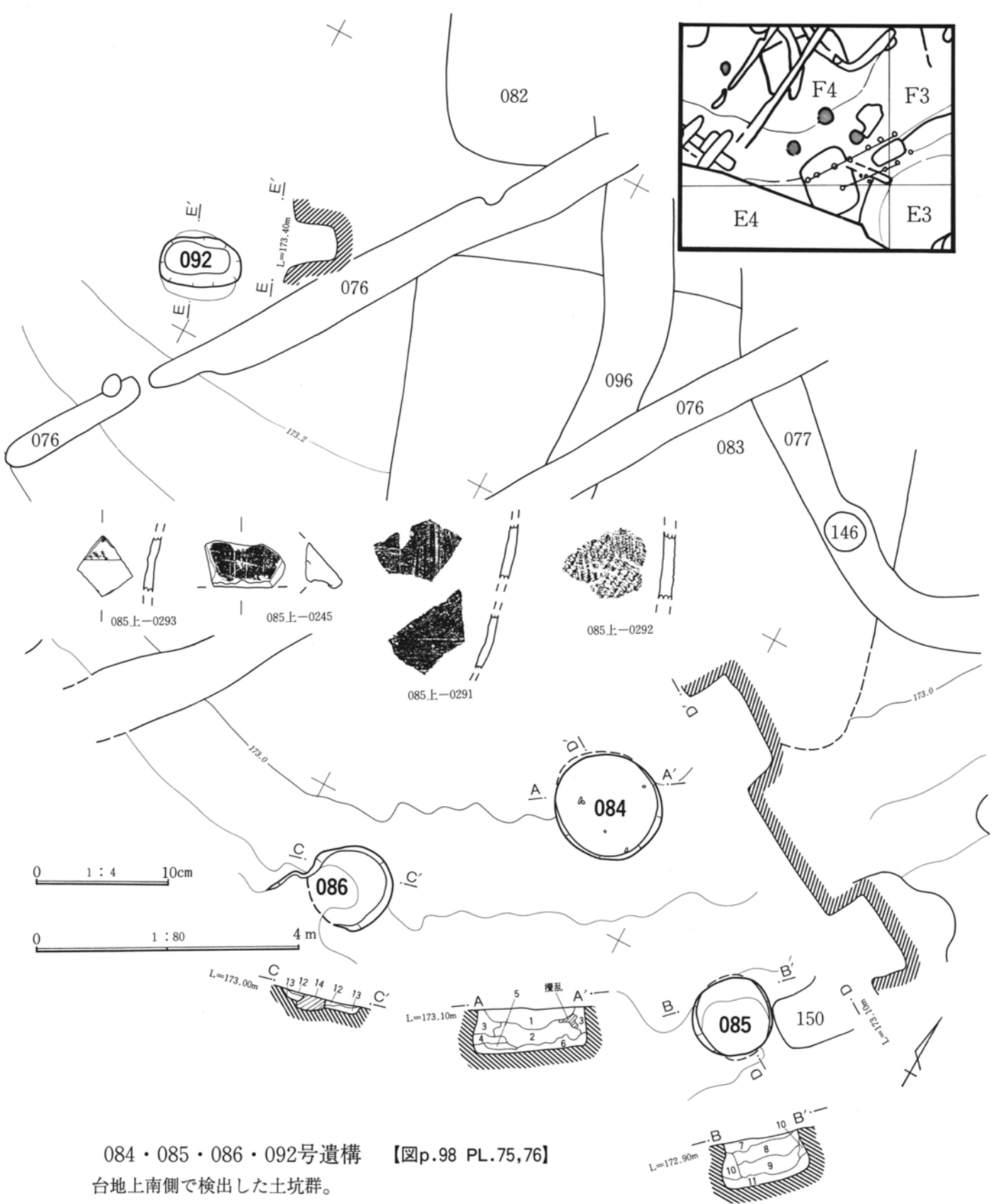


087下-2098 (1/4)



087下-2099 (1/4)

0 1 : 4 10cm



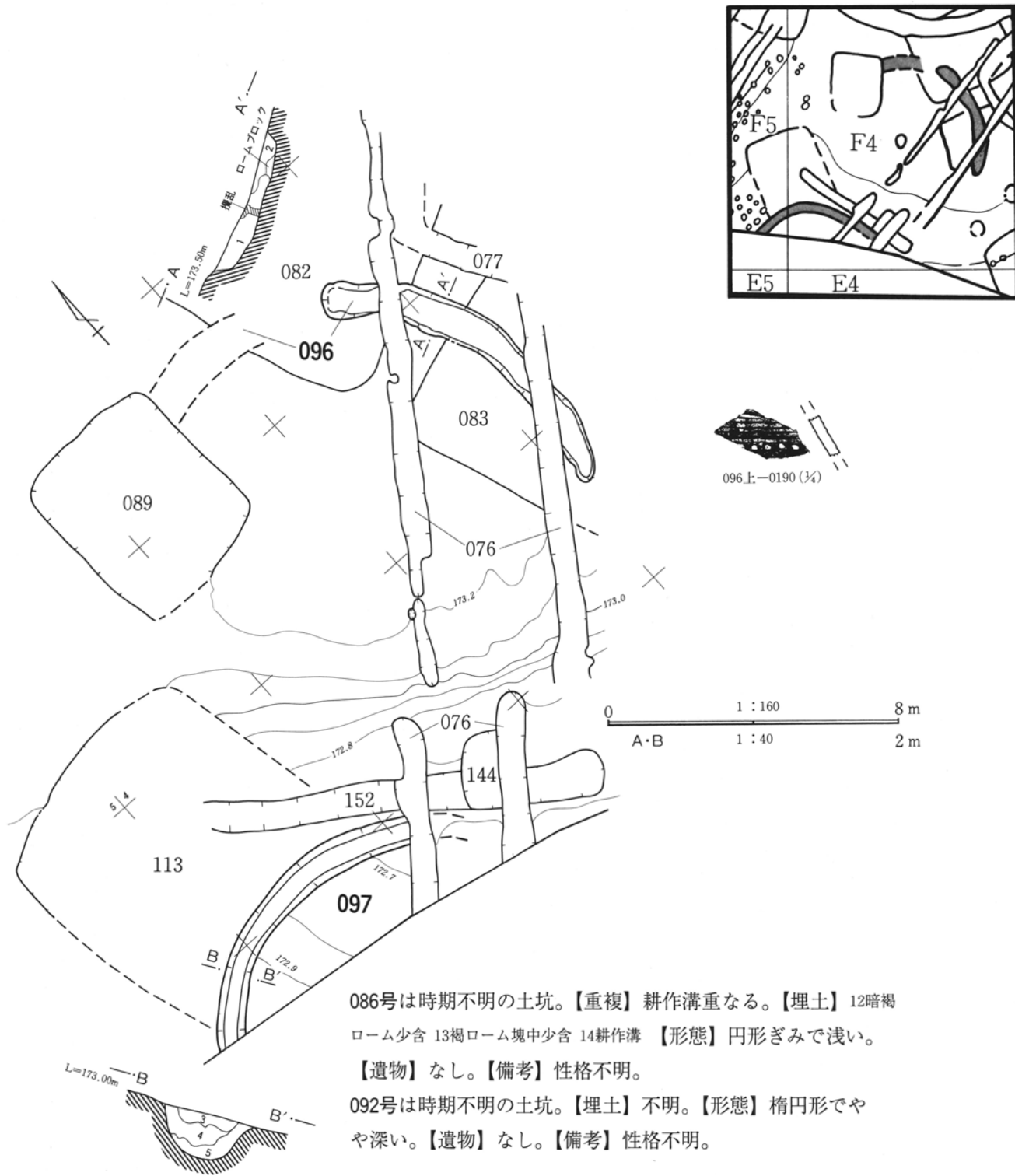
084・085・086・092号遺構 【図p.98 PL.75,76】

台地上南側で検出した土坑群。

084号は時期不明の土坑。【重複】なし。【埋土】1黒褐粘性強ローム多含 2褐1比軟弱 3褐ローム多含 4黄褐ローム塊主 5黒褐締弱ローム少含 6黄褐締強ローム塊中少含 【形態】平面円形で底平坦。【遺物】なし。【備考】性格不明。

085号は弥生中期の土坑。【重複】近世土坑150号と重複。【埋土】

7黒褐締弱ローム多含 8褐1比軟弱 9暗褐焼土炭化物少含 10褐ローム多含 11褐締弱ローム少含 【形態】平面楕円形でフラスコ状断面。【遺物】上層（7～9層）より中世土師器埴（0293）・形象埴輪片（0245）・弥生中期甕片（0291）・縄文鉢片（0292）が出土。【備考】055,056号などに似る。



086号は時期不明の土坑。【重複】耕作溝重なる。【埋土】12暗褐ローム少含 13褐ローム塊中少含 14耕作溝 【形態】円形ぎみで浅い。

【遺物】なし。【備考】性格不明。

092号は時期不明の土坑。【埋土】不明。【形態】楕円形でやや深い。【遺物】なし。【備考】性格不明。

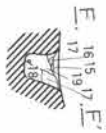
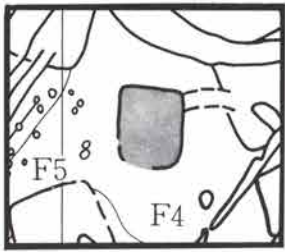
096・097号遺構 【図p.99 PL.77】

台地上南端で検出した推定弥生時代後期の円形周溝墓群。

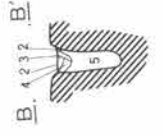
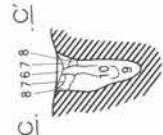
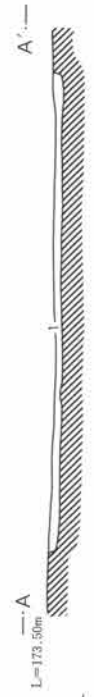
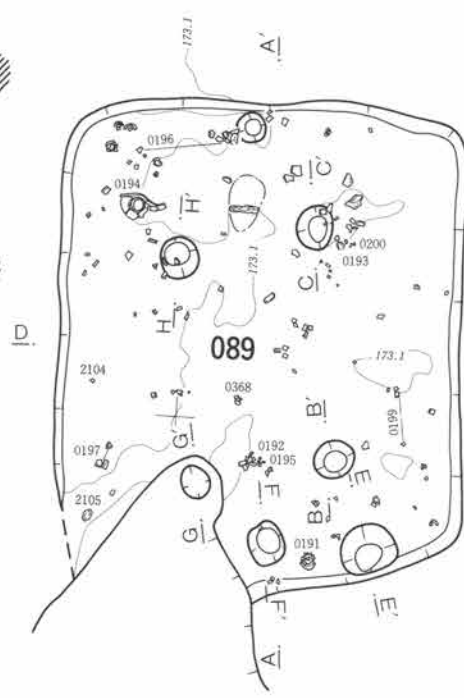
096号【重複】近世溝076号に切られ、弥生堅穴082・083号を壊し、089号とも重なる。【埋土】1褐締弱ローム塊中少含2暗褐締弱ローム多含 【形態】上面が大きく削られており、僅かに北東側溝の一部のみを検出(推定径12m)。

【主体部】不明。【遺物】上層(確認面)より弥生中期壺片(0190)出土。【備考】東に方形周溝墓077号が接する。

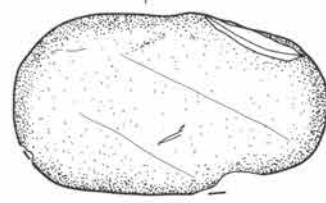
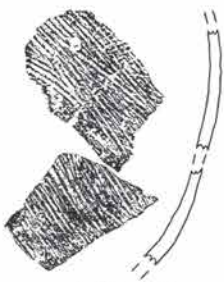
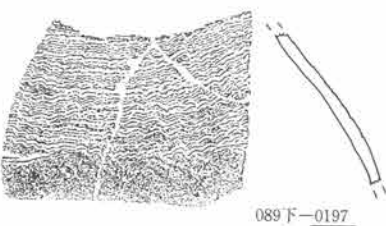
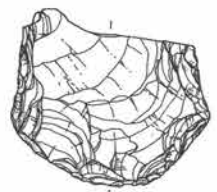
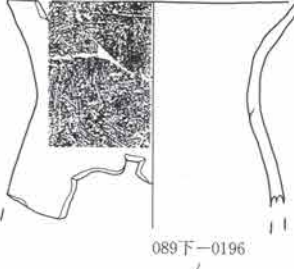
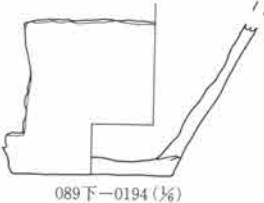
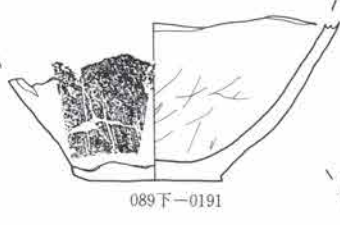
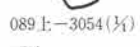
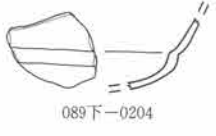
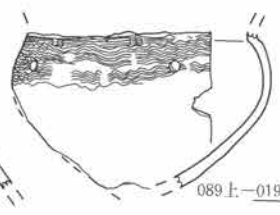
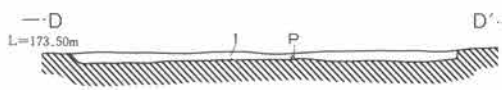
097号は【重複】近世溝076・152号に切られ、弥生堅穴113号と重なる。【埋土】3暗褐締良白粒少含 4褐ローム塊小白粒少含 5褐ローム主 【形態】調査範囲内で北側溝一部を検出。径不明。【主体部】不明。【遺物】なし。【備考】東側の096号の推定範囲とちょうど接する位置にあたる。



B·C·E·F·G·H
L=173.30m



0 1 : 80 4 m



0 1 : 4 10cm

089号遺構 【図p.100 PL.77,78】

台地上南側で検出した古墳前期の竪穴。

【重複】円形周溝墓097号が重複しているはずだが、全体に上面を大きく削られており、097号の溝は本竪穴の壁外も含め全く残っていなかった。南西側は浅い攪乱に壊される。

【埋土】1オリーブ褐粘性弱ローム塊浅間A軽石混 2オリーブ褐粒子粗締強 3オリーブ黄褐粒子粗締強 4オリーブ褐1同ローム塊多含 5黄褐締強汚ローム白軽石小少含 6黄褐粒子粗締強 7オリーブ褐1同黒強 8黄褐粒子粗汚ローム 9明黄褐粘性強汚ローム 10オリーブ褐締弱粘性強 11オリーブ褐粘性弱白軽石小多含 12暗オリーブ褐締弱粘性弱ローム少含 13暗オリーブ褐粒子粗締強粘性弱 14暗オリーブ褐締強 15オリーブ褐締強白軽石多含 16黄褐ローム塊多含 17黄褐締強粘性強汚ローム 18暗オリーブ褐粒子細締強粘性強汚ローム 19暗オリーブ褐締弱粘性弱汚ローム 20オリーブ褐粘性弱白軽石少含 21オリーブ褐締強粘性強汚ローム

【壁床】壁の残りは極めて僅かだが、床は南西側を除いて残存。

【炉など】北側支柱穴中間に炉石と焼土が残る。南壁際で貯蔵穴がある。

【柱穴】丸材柱穴が4個方形に配置される他に南北壁際中央に各1個の棟持状の柱穴がある。

【遺物】上層（確認面）から弥生後期甕類(0192,95)・同壺(0193)・同ミニチュア(0368)・中期土器片(0198,0200,02)・前期鉢片(0201)、打製石鏃(黒曜石3055)・加工痕ある剝片(黒曜石3054)などが出土した。下層（床面）では、貯蔵穴内から土師器埴(0204)・同台付甕(0206)・弥生中期土器片(0203)、柱穴内より土師器台付甕(0205)、そして弥生後期壺類(0191,94,97)・同甕(0196)・中期甕片(0199)、打製石斧(変質安山岩2104)・磨り石(石包丁状=黒色片岩2105)が見られた。

【備考】主軸方向と大きさは異なるが、6本柱穴のあり方は東隣の082号と同一である。出土土師器は円形周溝墓のものとは考えにくく、その出土状態から見れば、本竪穴は古墳時代前期のもので、弥生樽式系の土器も併存していたことになる。上記2点を含む上層出土の黒曜石分析5点の成果は、5,300BP 1点・3,900BP 3点(3054,55)、2,400BP 1点となった（第V章参照）。

113号遺構 【図p.102 PL.79】

台地上南端で検出した弥生後期の竪穴。

【重複】近世の溝152号に壊され、また円形周溝墓097号と重なる。全体に北側部分を除いて大きく削られている。

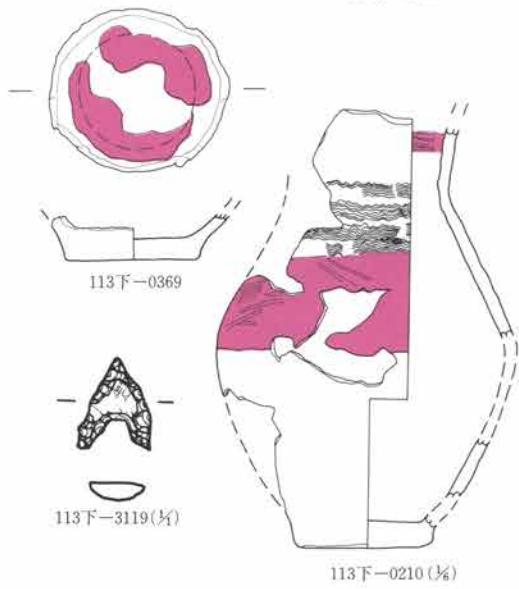
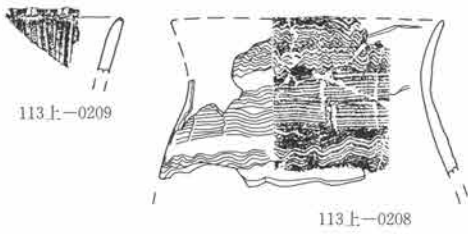
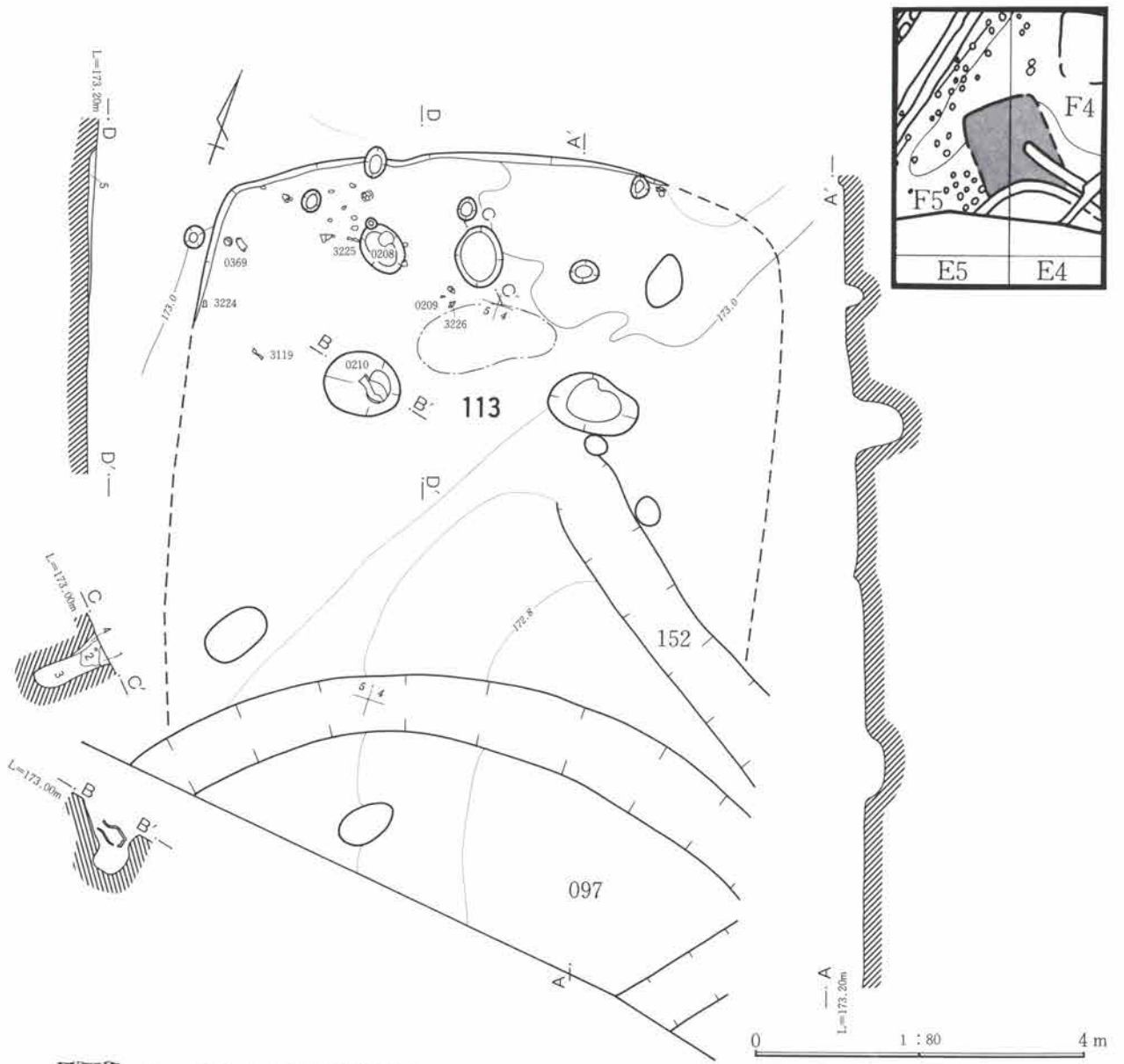
【埋土】1黄褐粒子粗軽石小多含 2黄褐粒子粗締弱軽石小少ローム塊大少含 3オリーブ褐粒子粗ローム小少含 4オリーブ褐粒子粗ローム中少含 5褐締強ローム塊多白軽石混 【壁床】北壁とその際以外はほとんど残っていない。

【炉など】支柱穴中間北側に焼土が残る。

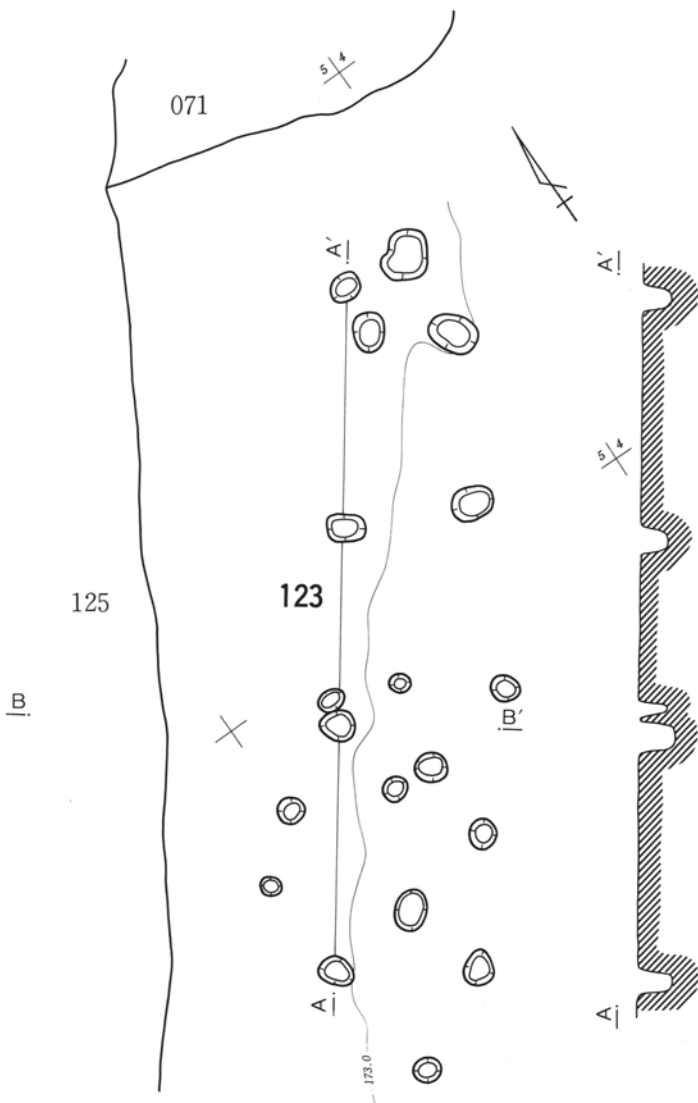
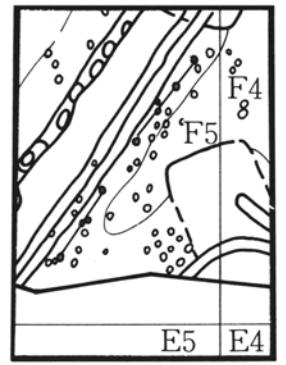
【柱穴】板材ぎみの支柱穴2個が並ぶが、南側のものは不明。また北壁際中間にも棟持状の柱穴がある。

【遺物】上層（確認面）より弥生後期甕(0208)・中期甕片(0209)、黒曜石剝片が出土。下層では北西支柱穴内で弥生後期大型壺(0210)そして床面より内面にベンガラが残る同壺片(0369)、打製石鏃(黒曜石3119)と剝片が見られた。

【備考】北東側の082号・089号と同様に棟持柱穴を持つ竪穴である。



0 1 : 4 10cm



123・124号遺構

【図p.103 PL.80】

台地上南西側で検出した推定近世の柵列群。いずれも道路033号及び近世溝125号と平行して南東側に見られる。

重複遺構はない。

123号【埋土】不明。【形態】4個の柱穴（全長7.5m）並ぶが、中央の2個の間隔がやや短い。【遺物】なし。

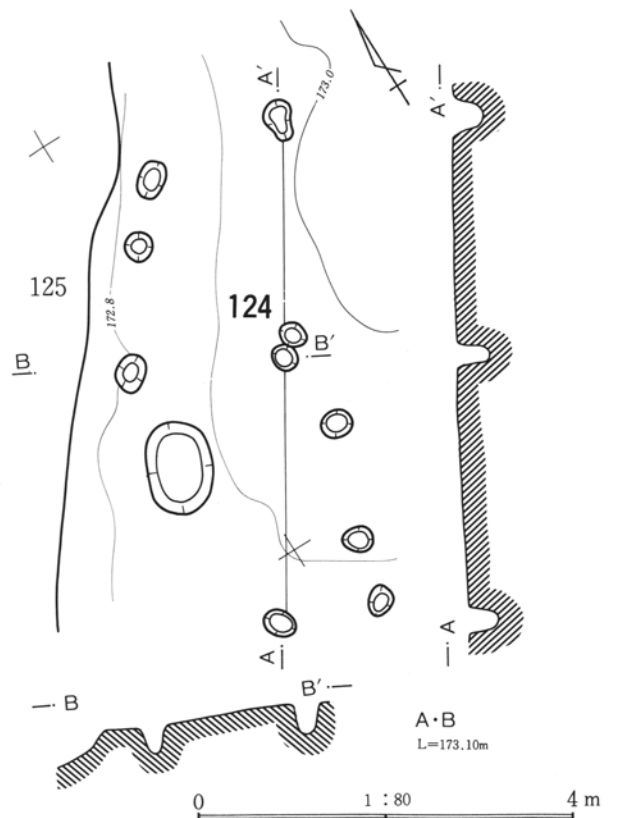
A・B
L=173.20m



124号【埋土】不明。【形態】2個の柱穴（全長5.7m）並ぶ。中央及び北側のものは掘り変えがなされている。

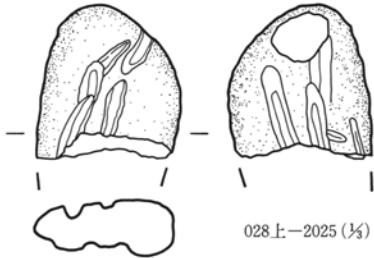
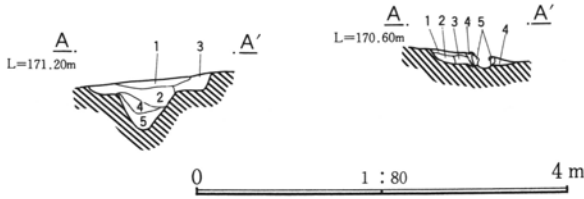
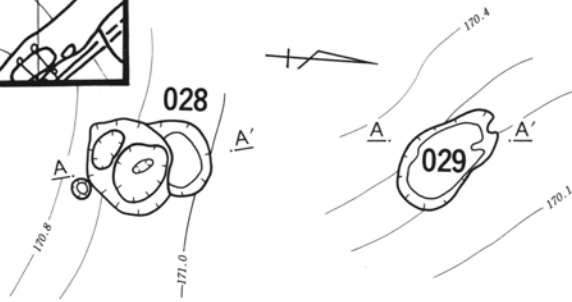
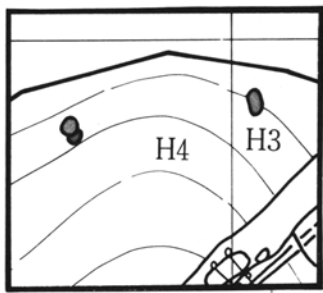
【遺物】なし。

【備考】125号と平行であることから、東斜面上部013号と似た近世の地境柵と考えるのが自然だろう。



A・B
L=173.10m

0 1 : 80 4 m



028・029号遺構

【図p.104 PL.81】

西斜面北東端で検出した土坑。

028号【重複】なし。【埋土】1オリブ褐粒子粗締強 2暗オリブ褐粒子粗締強ローム塊少含 3黄褐締強 4黄褐ローム塊中含 5明灰黄締強

【形態】底が3部分に分かれる不整形。

【遺物】上層（1～3層）より砥石（牛伏砂岩2025）出土。【備考】遺物より弥生の遺構と考えられるが、性格不明。

029号【重複】なし。【埋土】1オリブ褐粒子粗粘性無 2暗灰黄締弱 3暗灰黄2同黒味強 4黄灰締弱 5黒褐締弱【形態】浅い楕円形。

【遺物】確認面に弥生土器片が見られた（図非掲載）。【備考】弥生の遺構だが、性格不明。

039号遺構 【図p.105 PL.81,82】

西斜面北端で検出した弥生後期の竪穴。

【重複】なし。

【埋土】1明黄褐粘性無ローム多白黄粒少含 2黒粘性無白黄粒少ローム塊大少含 3暗褐締弱粘性無ローム白黄粒少含 4黄褐粘性無ローム多白黄粒少含 5褐締弱粘性無ローム多含 6暗褐締弱粘性無ローム白黄粒少含 7暗褐締弱粘性無 8黒褐締弱粘性無ローム少含 9黒褐粘性無 10黒褐締弱粘性無ローム少含 11黒締弱粘性無ローム少含 12黄褐粘性無ローム少白黄粒多含 13黒褐締弱粘性無ローム白黄粒少含 14黒褐粘性無ローム白黄粒少含 15黄褐粒子粗締弱粘性無ローム多含 16明黄褐締弱粘性無ローム主 17鈍い黄褐締弱粘性無ローム白黄粒少含 18黒褐締弱粘性無 19暗褐粘性無ローム白黄粒少含 20褐粘性無ローム白黄粒少焼土含 21明褐粘性無ローム白黄粒少焼土含 22黄褐粘性無ローム主 23暗褐粘性弱

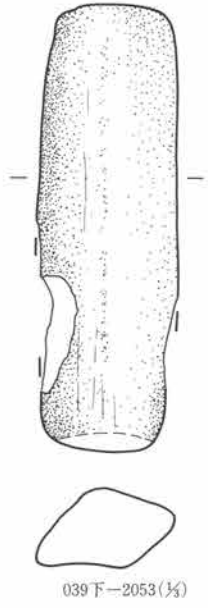
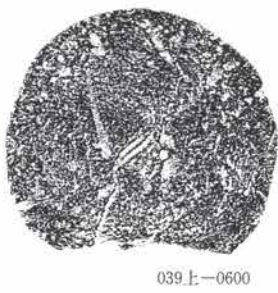
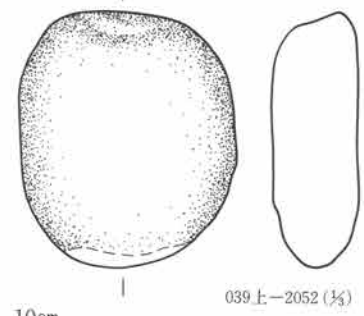
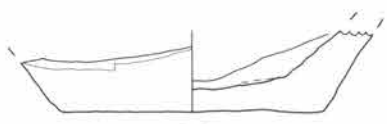
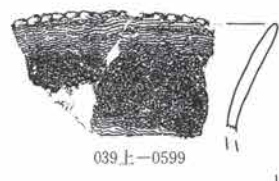
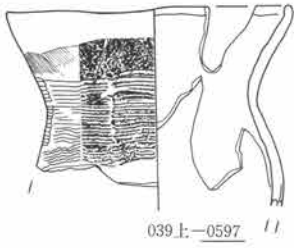
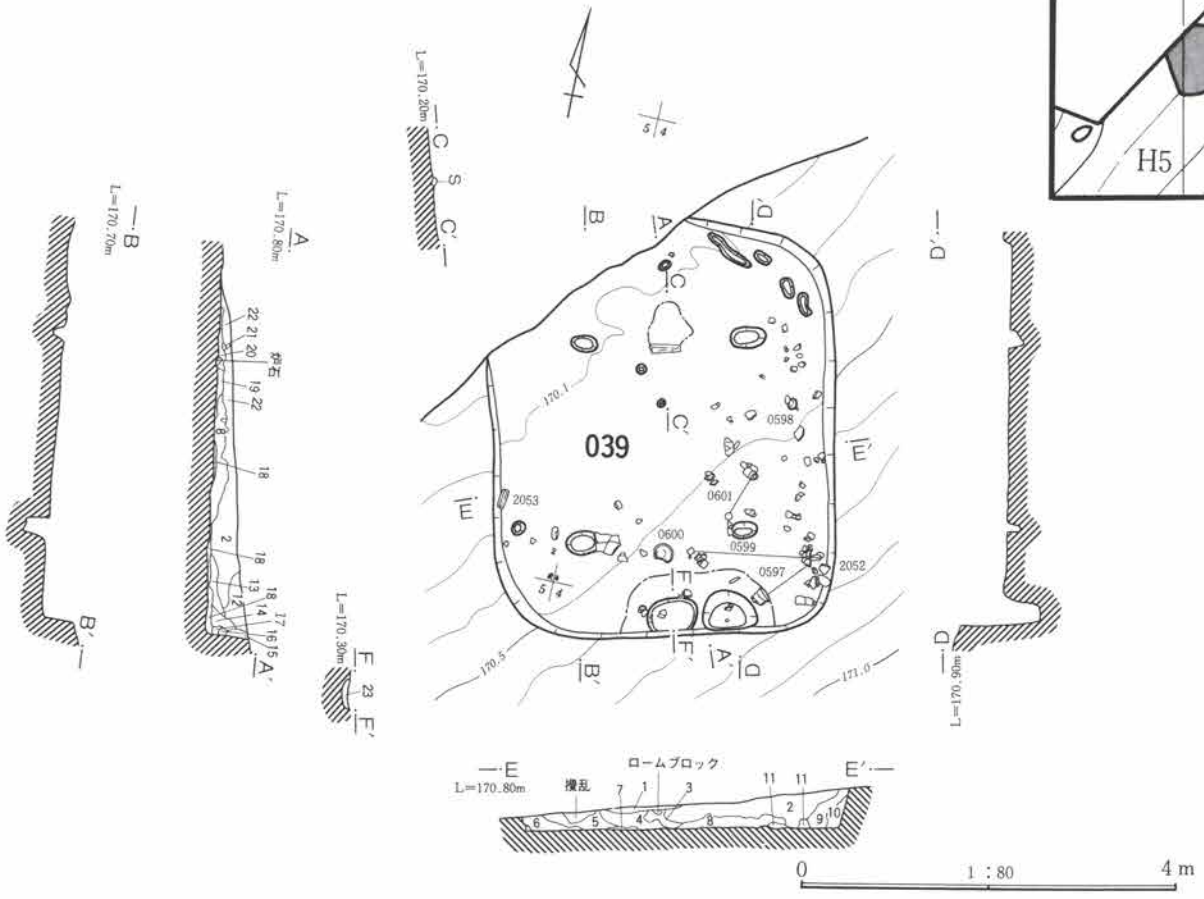
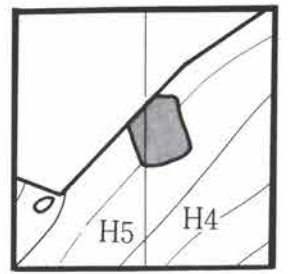
【壁床】境界外の北西側を除いて残っているが、北西側に向かうに連れ削平が強くなる。

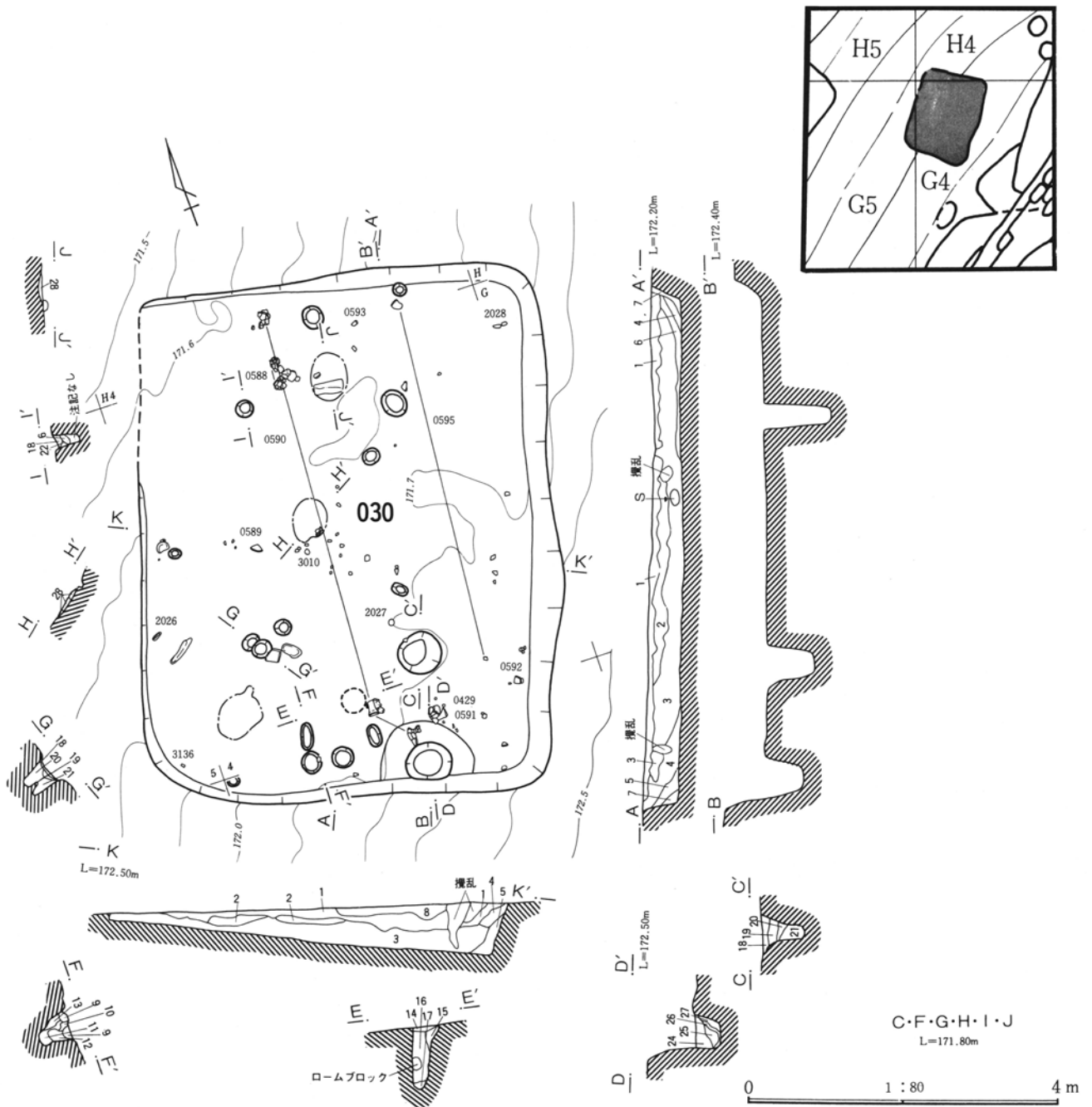
【炉など】北側主柱穴中間に焼土と炉石が残る。南壁際東側にやや深い貯蔵穴がある。

【柱穴】板材柱痕の主柱穴4個が方形に並ぶ。南壁中央の浅いピットは入り口施設か。

【遺物】上層（15,12,21,22層）より弥生後期甕類(0597,98,99)・同壺(0600)・中期壺片(0602)、磨り石（敲き石＝雲母石英片岩2052）、黒曜石とチャート剥片が出土した。下層（6～11,13～18層）では弥生後期高坏(0601)、磨り石（棒状＝雲母石英片岩2053）が見られた。

【備考】主軸走向は、等高線とは異なって南北方向をとっている。

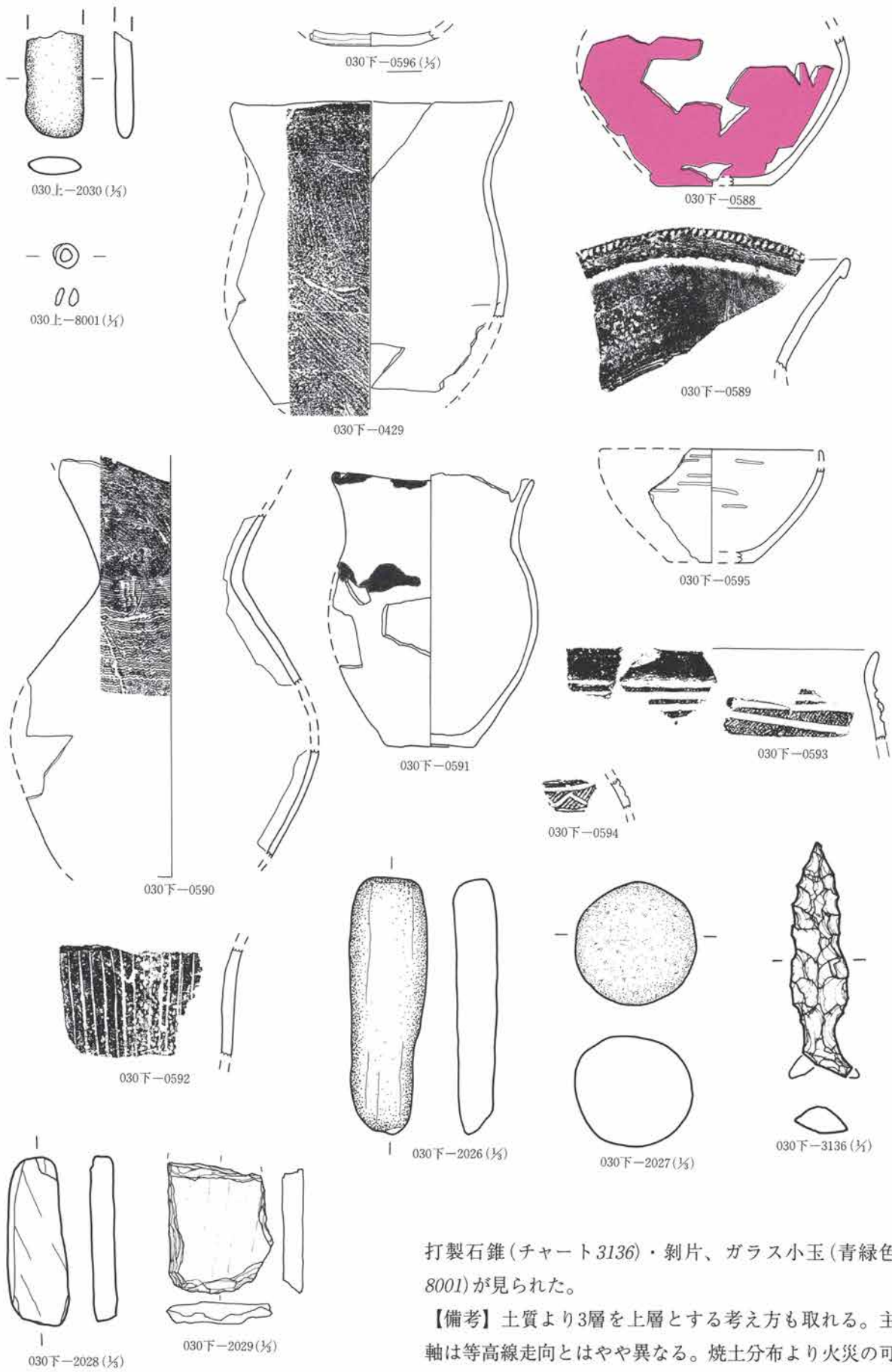




030号遺構 【図p.106,107 PL.82,83】

西斜面上位北側で検出した弥生後期の竪穴。

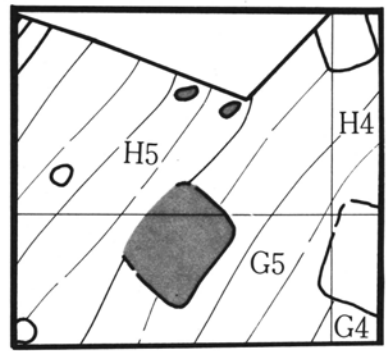
【重複】なし。南東側で弥生竪穴091号が近接する。【埋土】1暗オリーブ浅間A軽石小多含 2暗オリーブA軽石小少含 3暗オリーブ軽石小多ローム塊大少含 4オリーブ褐ローム中少含 5オリーブ褐締強4似 6暗オリーブ褐黒 7オリーブ褐締強汚ローム 8オリーブ褐締無A軽石小多含 9オリーブ褐粘性弱白軽石中混 10黄褐粒子粗締強黒土塊混 11オリーブ褐粘性強黒土塊白軽石混 12オリーブ褐粒子粗粘性強汚ローム 13黄褐締強ローム砂粒小多含 14明黄褐締強粘性無白軽石黒土塊少含 15黄褐粒子粗粘性強ローム中炭化粒含 16オリーブ褐粒子粗粘性弱ローム塊中多含 17オリーブ褐締強粘性弱白軽石含 18褐粒子粗粘性弱砂粒小多ローム塊中含 19褐粒子粗締弱粘性弱砂粒小多含 20褐1,2同 21暗褐粒子粗粘性強 22黄褐粒子粗粘性無ローム 23オリーブ褐締強粘性無6同 24暗灰黄粒子粗締強砂粒小多含 25黒褐粒子粗粘性弱 26黒褐2同 27オリーブ褐粒子粗締強 28橙焼土黒土塊少含 【壁床】北西隅を除いて比較的良好に残存。床中央と南西側に焼土が散る。【炉など】北側主柱穴中央に炉石と焼土が残る。南壁際東側に貯蔵穴がある。【柱穴】丸材柱痕の主柱穴4個が並び、南北壁際中央には棟持柱穴がある。【遺物】上層(1,2,8層)からは磨り石(剣状=牛伏砂岩2030)、黒曜石剥片が出土し、下層(3~7層)では近世錆釉油皿(0596)・弥生後期壺(0588~90)・同甕(0429,0591,0594)・同小型鉢(0595)・前期甕片(0593)・縄文鉢片(0592)、打製石斧(雲母石英片岩2029)・磨り石(棒状=雲母石英片岩2026 球状=粗粒安山岩2027 板状=雲母石英片岩2028)、



打製石錐(チャート3136)・剥片、ガラス小玉(青緑色8001)が見られた。

【備考】土質より3層を上層とする考え方も取れる。主軸は等高線走向とはやや異なる。焼土分布より火災の可能性もある。黒曜石分析3点の成果は、10,900BP 1点(上層)・3,900BP 2点(下層)である(第V章参照)。

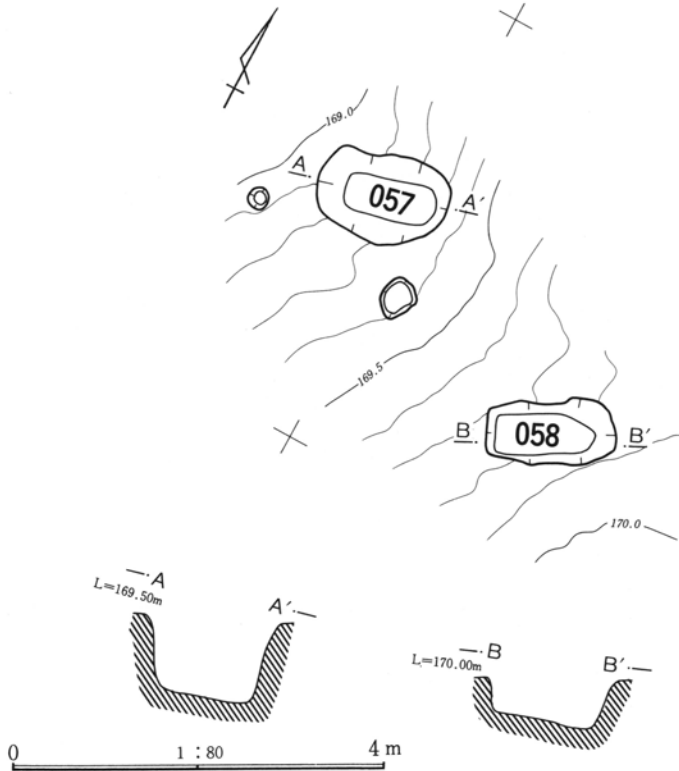
0 1 : 4 10cm



057・058号遺構

【図p.108 PL.84】

西斜面上位で確認した推定縄文の土坑群。
両者共に似ている。【重複】なし。【埋土】不明。
【形態】底が平坦な楕円形。【遺物】なし。
【備考】主軸は等高線に対し斜行する。陥穴か。



032号遺構 【図p.109~111 PL.84,85】

西斜面上位で確認した弥生後期の竪穴。

【重複】なし。南西側5m強の位置に弥生後期竪穴133号がある。

【埋土】1オリーブ褐粘性弱ローム塊少含 2オリーブ褐1同炭化粒含 3オリーブ褐粘性強汚ローム 4暗灰黄締強粘性弱砂粒小炭化粒含 5暗灰黄締強粘性弱砂粒小含 6オリーブ褐締強砂粒小含 7オリーブ褐粘性強 8オリーブ褐締強砂粒小少含 9オリーブ褐粒子粗粘性弱砂粒小少含 10オリーブ褐締弱粘性強汚ローム攪乱 11オリーブ褐1似 12灰オリーブ締弱砂粒小多含 13オリーブ締強ローム黒土斑状 14オリーブ13同締強黄味強 15灰オリーブローム塊含 16明黄褐地山似ローム 17灰オリーブ締強 18暗灰黄粒子粗粘性無 19暗灰黄18同黒味強 20黒褐締強粘性弱砂粒小含 21オリーブ褐締強粘性強ローム塊炭化粒少含 22オリーブ褐21比締粘性強 23オリーブ褐粘性強白軽石小少含 24暗オリーブ褐締強粘性弱ローム塊小少含

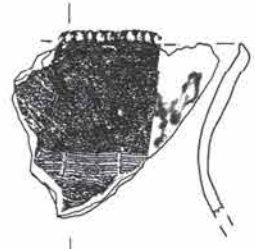
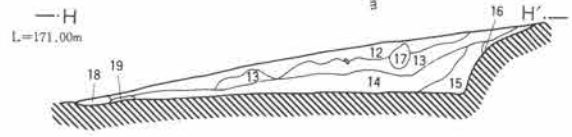
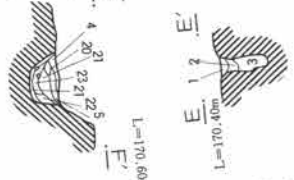
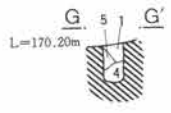
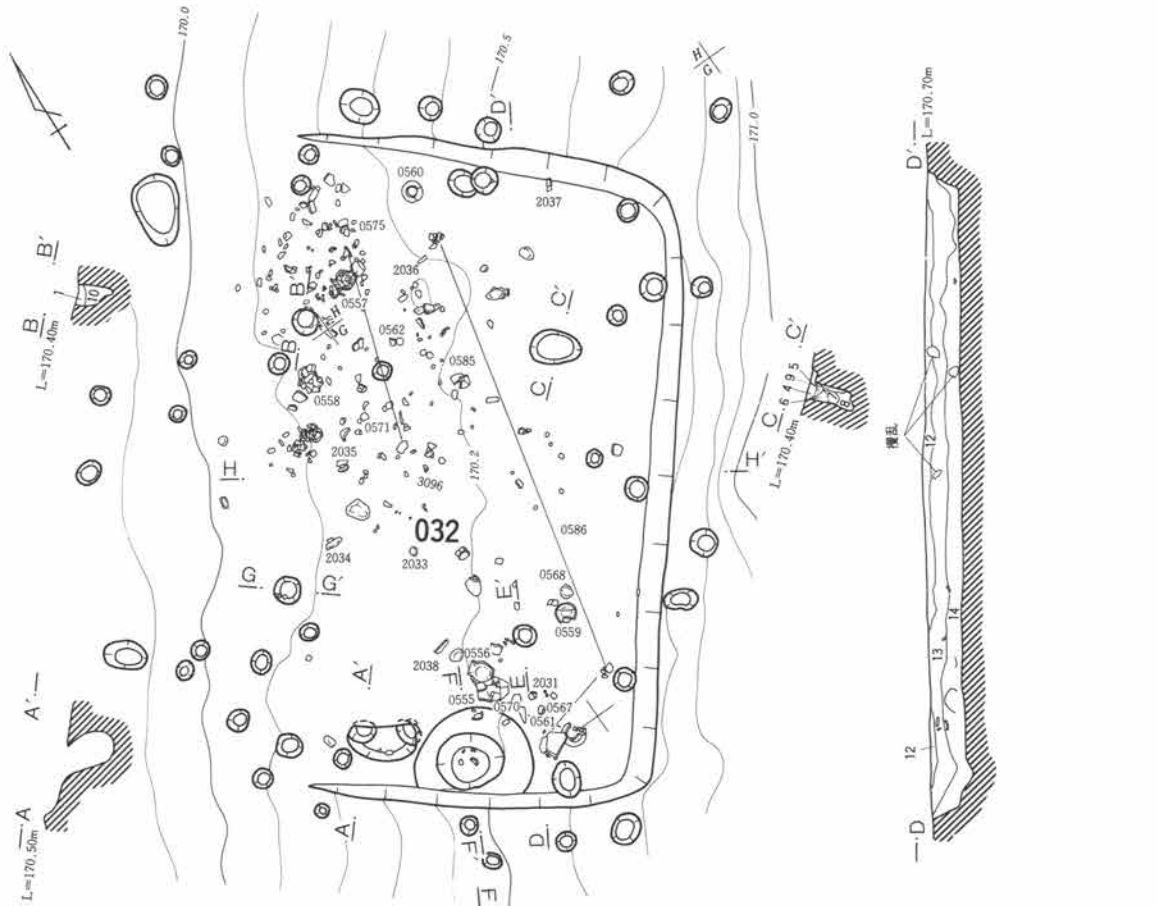
【壁床】谷側方向の北西壁と床は削られているが、その他は良好に残存。

【炉など】北東側主柱穴中間に焼土・炉石が残る。南西壁際山側には貯蔵穴がある。

【柱穴】丸材柱痕主柱穴が4個方形に並ぶ。北側主柱穴内より炭化材(コナラ節7002)が見られた。山側及び北東南西壁際には、ほぼ等間隔で側柱穴が見られる。壁外にも不等間隔で柱穴が多く見られる。貯蔵穴隣には入り口ピットも確認。

【遺物】上層(12,13,17,18層)からは、弥生後期壺類(0564,69,74,84)・同甕類(0566,72,73,87)・同高坏(0563)・中期土器片(0565,76,79,80,82,83)・前期甕片(0581)、五輪塔空風輪(緑色片岩2032)・石鎌(珪質準片岩2037)・打製石斧(硬質泥岩2039,42~45)・磨り石(磨製石斧状=緑色片岩2040 小判状=牛伏砂岩2041)が出土した。下層(14~16,19層)では、弥生後期甕類(0555~58,85,86)・壺類(0560~62,68,70,71,78)・同鉢類(0559,67)・同ミニチュア(0575)・同土製勾玉(0577)、石核(硬質泥岩2033)・打製石斧(硬質泥岩2031,35 雲母石英片岩2034)・磨り石(小板状=黒色片岩2036 円盤状=黒色片岩2038)、石核(黒曜石3096)・剝片が見られた。

【備考】本竪穴は火災を受けているが、流入遺物も多い。等高線に平行して主軸を設ける。黒曜石分析4点の成果は、3,900BP3点(上記石核含む)・5,300BP1点である(第V章参照)。



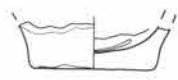
032上-0573



032上-0563



032上-0566



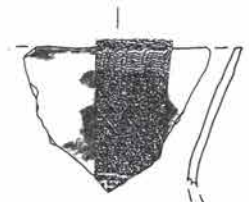
032上-0564



032上-0569



032上-0576



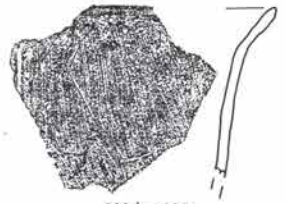
032上-0572



032上-0579



032上-0582



032上-0574



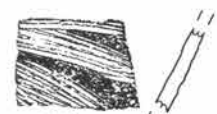
032上-0583



032上-0587



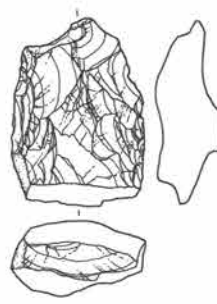
032上-0565



032上-0580



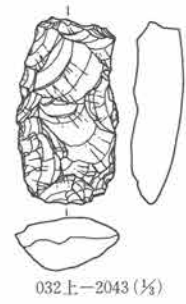
032上-0581



032上-2039 (1/2)

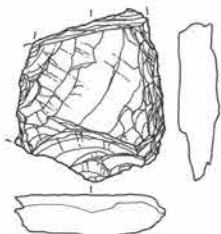


032上-2042 (1/2)

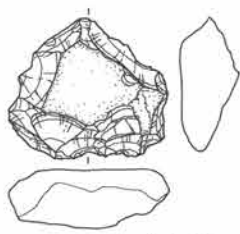


032上-2043 (1/2)

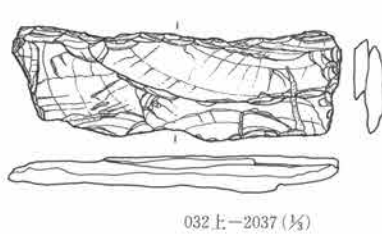




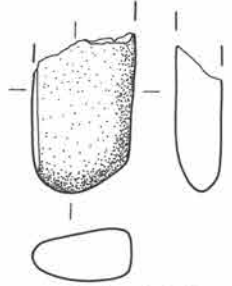
032上-2044 (1/4)



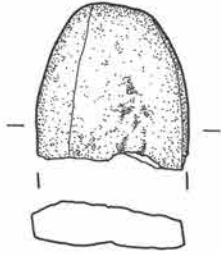
032上-2045 (1/4)



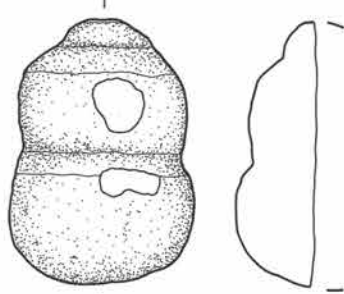
032上-2037 (1/4)



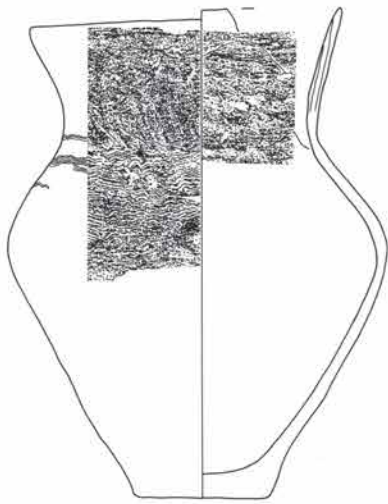
032上-2040 (1/4)



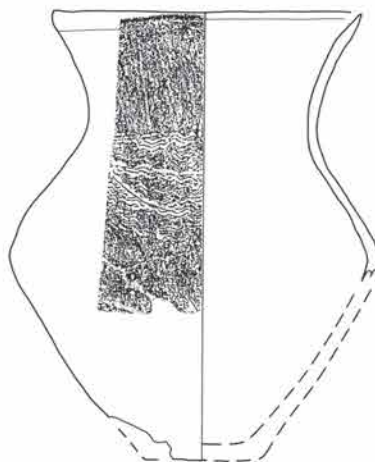
032上-2041 (1/4)



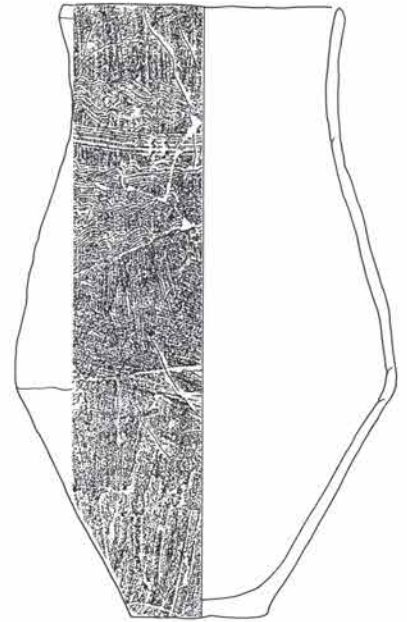
032上-2032 (1/4)



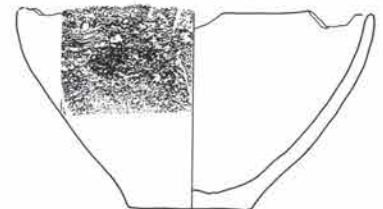
032下-0556



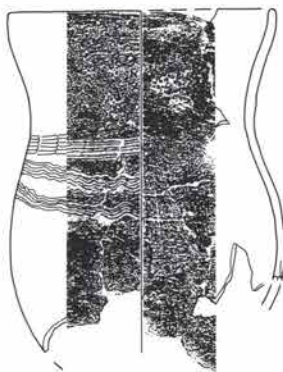
032下-0557



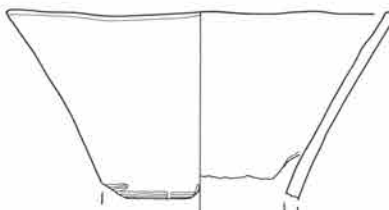
032下-0555



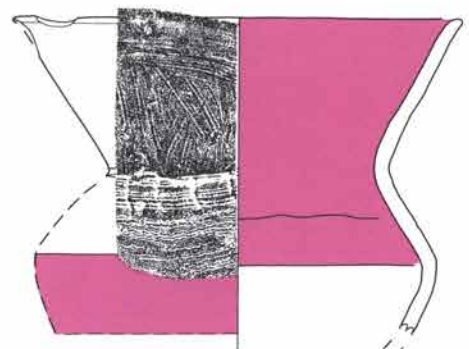
032下-0559



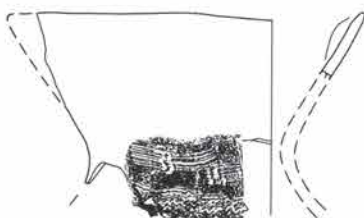
032下-0558



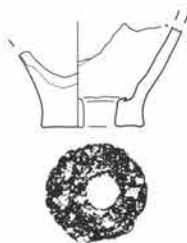
032下-0560



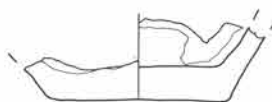
032下-0561



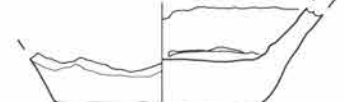
032下-0562



032下-0567



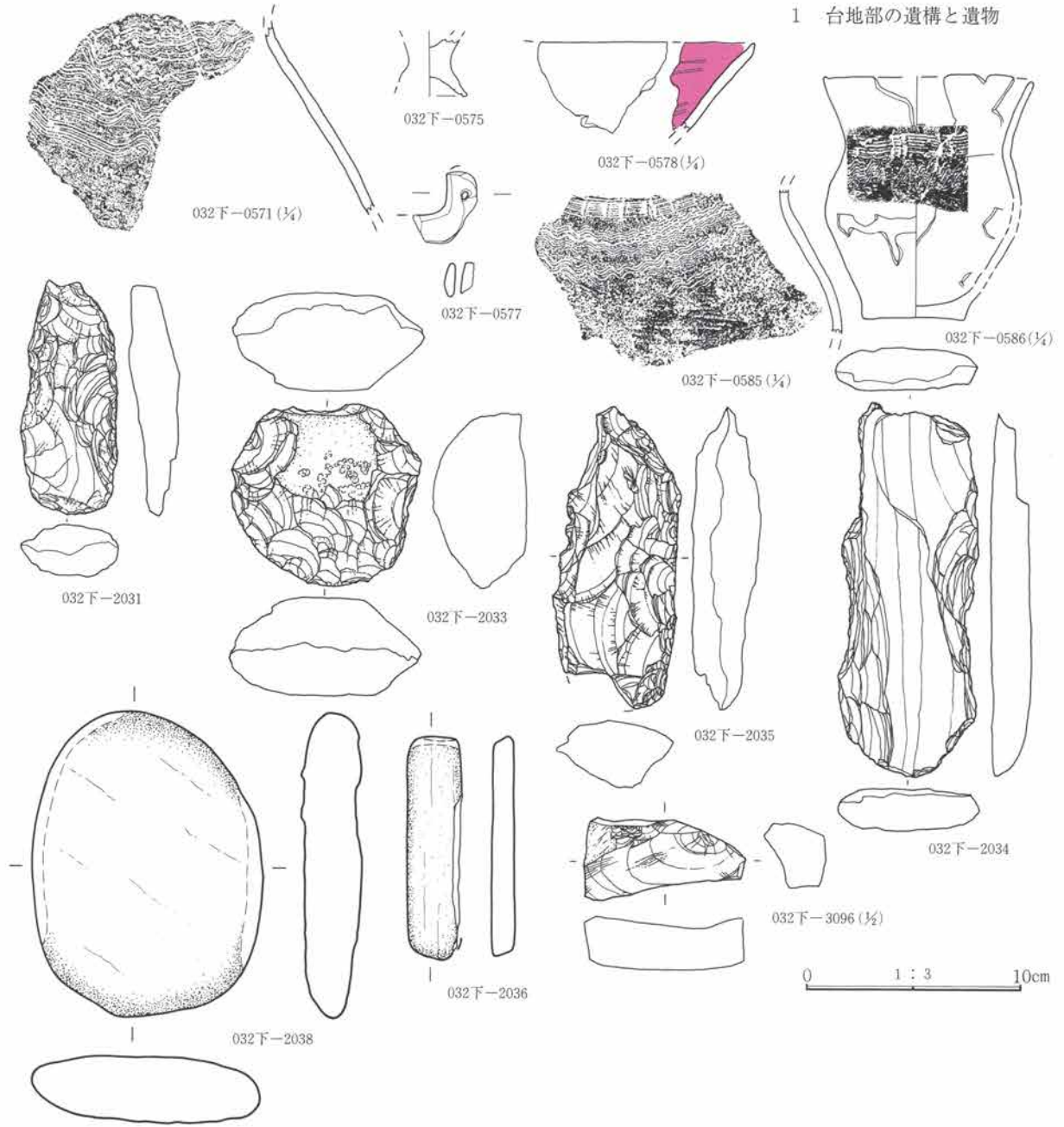
032下-0568

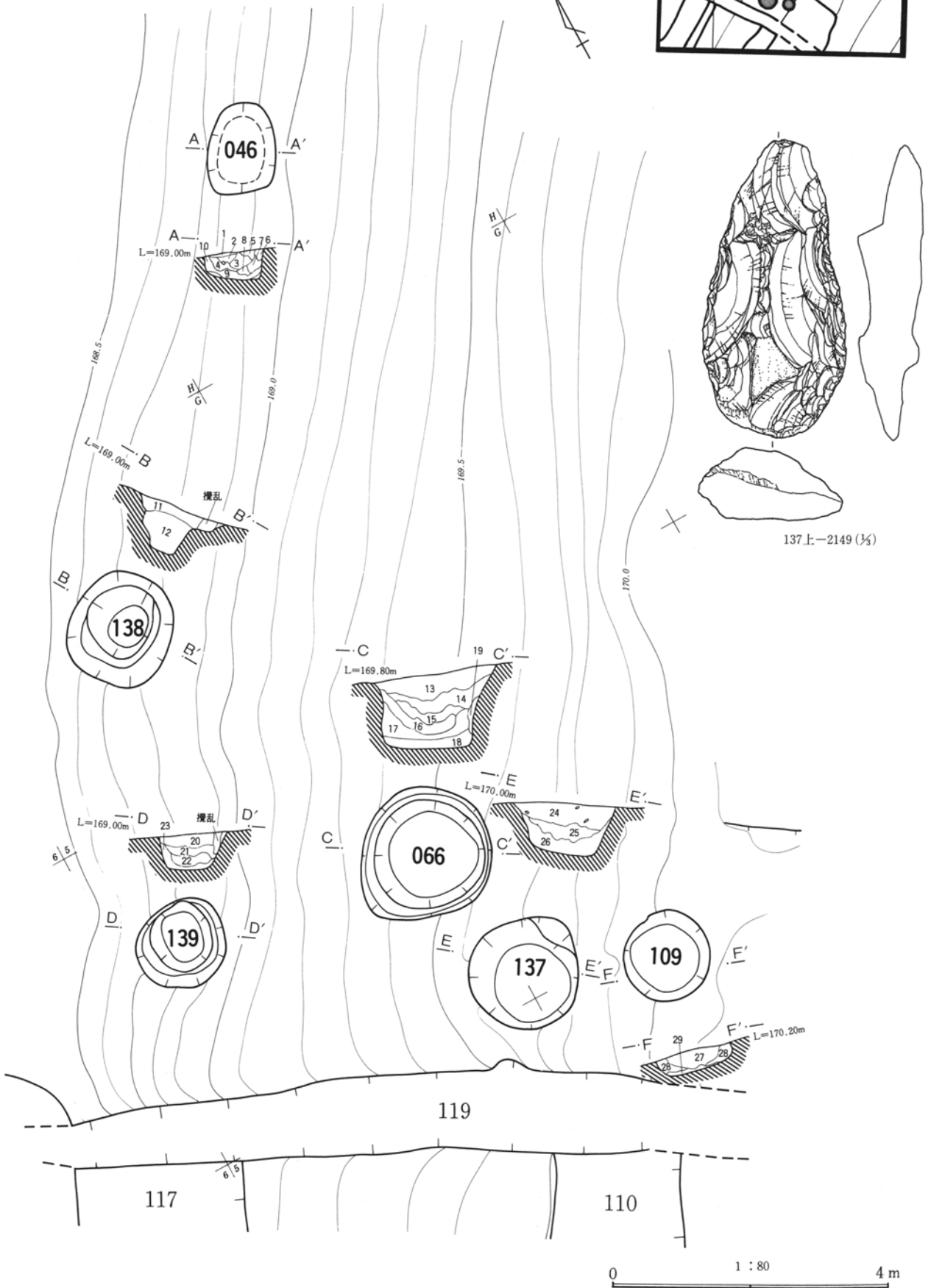
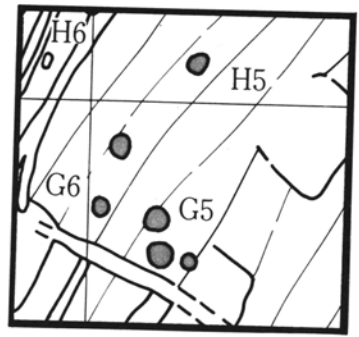


032下-0570

0 1 : 4 10cm

1 台地部の遺構と遺物





046・066・109・137～139号遺構 【図p.112 PL.87,88】

西斜面中位で検出した推定弥生時代の土坑群。

046号は【重複】なし。【埋土】1オリブ褐締無浅間A軽石多耕作土 2黒褐・オリブ褐混 3オリブ褐・黒褐混 4黄褐3同ローム混 5オリブ褐ローム塊混 6黄褐ローム塊 7黄褐5,6混 8オリブ褐ローム混 9明黄褐ローム塊 10明黄褐ローム塊9比明 【形態】平面楕円形。【遺物】なし。【備考】人為的に埋められたと思われる。性格・時期不明。

066号は【重複】なし。【埋土】13黒褐締強白粒多炭化粒少含 14黒褐締弱白ローム炭化粒少含 15黒褐締弱白炭化粒少含 16暗褐締弱白ローム炭化粒含 17褐締弱ローム少含 18黒褐締弱ローム炭化粒少含 19黄褐壁崩落土 【形態】底平坦で平面円形に近い。

【遺物】なし。【備考】埋土より弥生と推定される。性格不明。

109号は【重複】 堅穴133号より新しい。【埋土】27オリブ褐締強軽石小多ローム少含 28黄褐締強軽石中混ローム多黄味強 29明黄褐粒子粗締粘性強黒土塊少含 【形態】平面円形に近い。【遺物】なし。【備考】性格・時期不明。

137号は【重複】 溝119号が近接。【埋土】24暗褐締弱白粒少含 25暗褐粘性弱白粒少含 26褐粘性弱ローム塊少含 【形態】平面円形に近く底平坦。【遺物】上層(24,25層)より打製石斧(硬質泥岩2149)出土。【備考】埋土より弥生か。性格不明。

138号は【重複】なし。【埋土】11暗褐締強白粒少含 12暗褐締強ローム少含 【形態】底小さく大型ピット状。【遺物】なし。【備考】埋土より弥生か。性格不明。

139号は【重複】なし。【埋土】20暗褐締強白粒ローム少含 21褐締強ローム白粒少含 22黒褐締強ローム白粒焼土少含 23褐粘性強ローム少含 【形態】底が少し小さい隅丸方形。【遺物】なし。【備考】埋土より弥生か。性格不明。

133号遺構 【図p.114,115 PL.89～91】

西斜面中位で検出した弥生後期の堅穴。

【重複】 南西側を溝110号に、中央を弥生テラス119号に切られている。北側では土坑109号が新しい。全体に北西の谷側は削られている。

【埋土】 記録紛失のため不明。

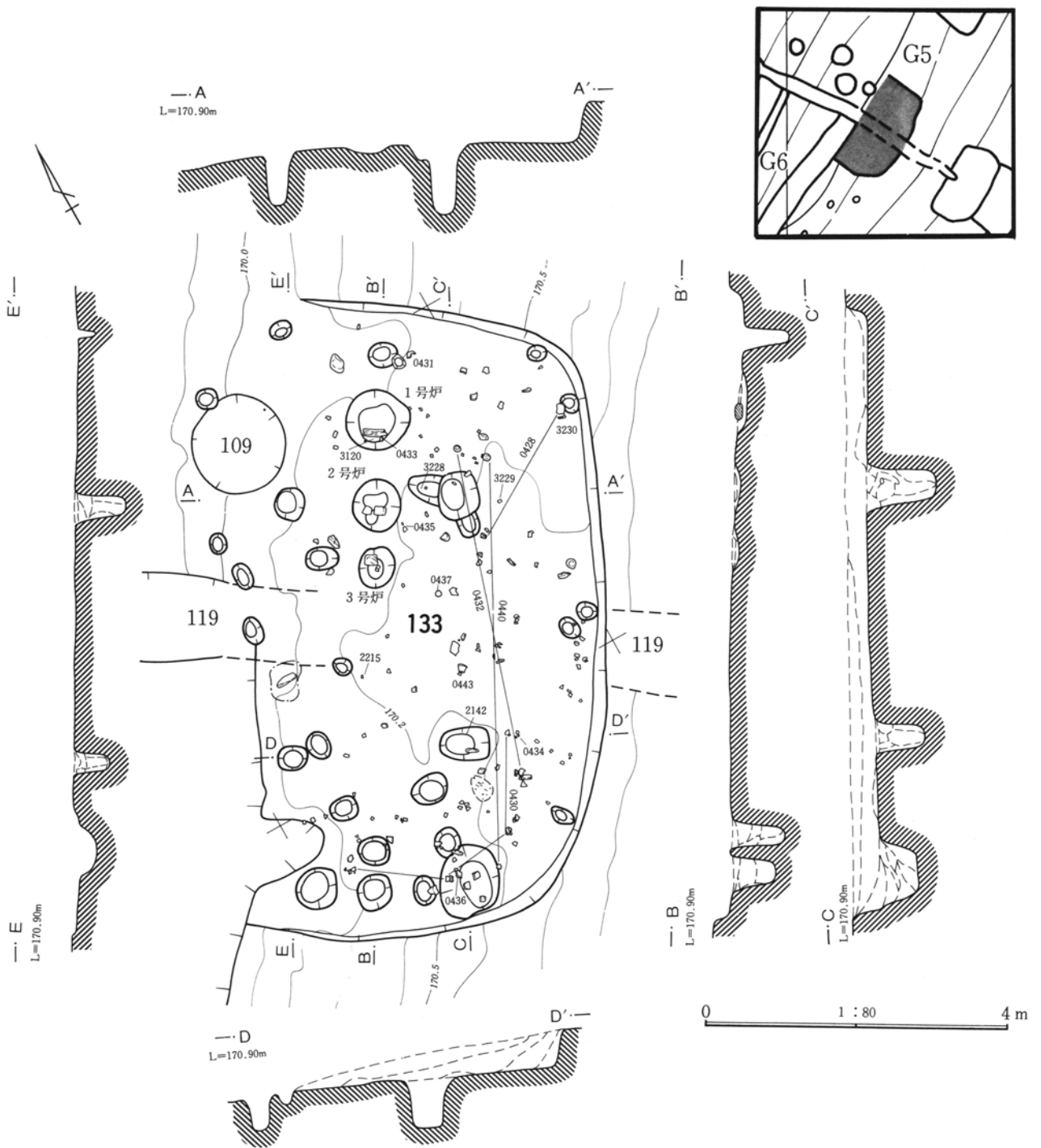
【壁床】 谷側を除いて比較的残存状態は良い。南西側床面に2カ所焼土の散布部分がある。

【炉など】 北東側主柱穴中間の主軸位置に3個の焼土の残る炉を検出。炉石を残すものは最も外側のみ。南西壁際の山側に貯蔵穴がある。

【柱穴】 丸材傾向柱痕の主柱穴4個が並ぶ他に、北東壁と南西壁中央に棟持柱穴がある。また南東壁と北東壁には側柱穴も見られる。南西壁際には入り口施設柱穴も複数検出。谷側の主柱穴と南西側の棟持柱穴は、それぞれ内側に同一機能と考えられる柱穴が見られる。

【遺物】 上層(第1,2層)からは弥生後期高坏(0428)・同甕(0439)・中期土器片(0438,42)、削器(硬質泥岩2147)・砥石(牛伏砂岩2144)・紡錘車(硬質泥岩2215)・磨り石(剣形状=牛伏砂岩2146 方形板状=牛伏砂岩2145)、打製有茎石鏃(黒曜石3090)・ピエスエスキュー(チャート3122)・加工痕ある剥片(チャート3121)・剥片類が出土した。

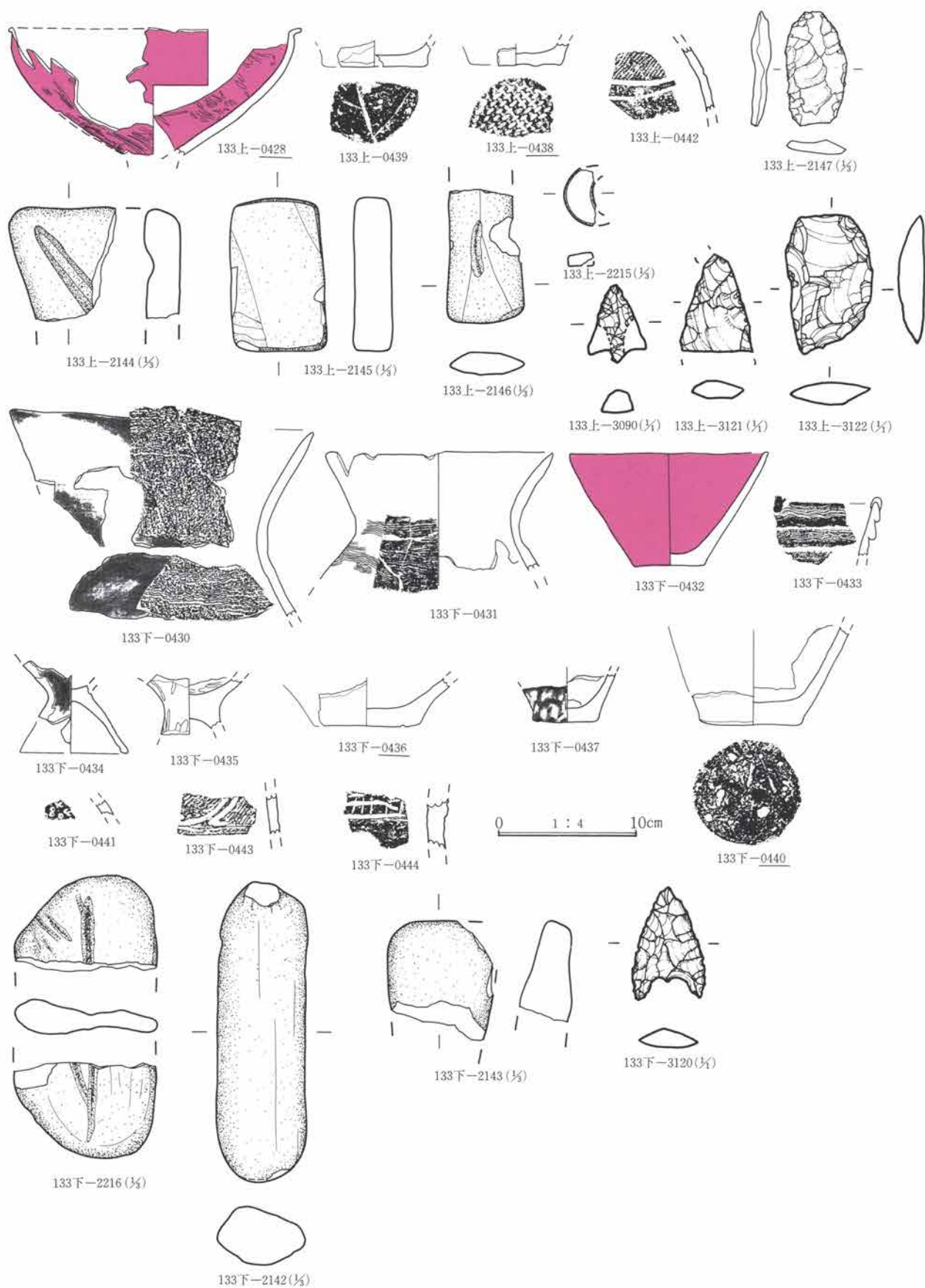
下層(第3層以下)では弥生後期甕(0430,31,34,37,40)・同壺(0433,36)・同高坏(0435)・同小型鉢(0432)・中期壺片(0441,43)・縄文鉢片(0444)、砥石(牛伏砂岩2216)・磨り石(砥石状=牛伏砂岩2143 棒状=雲母石英片岩2142)、打製有茎石鏃(チャート3120)・剥片類が見られた。

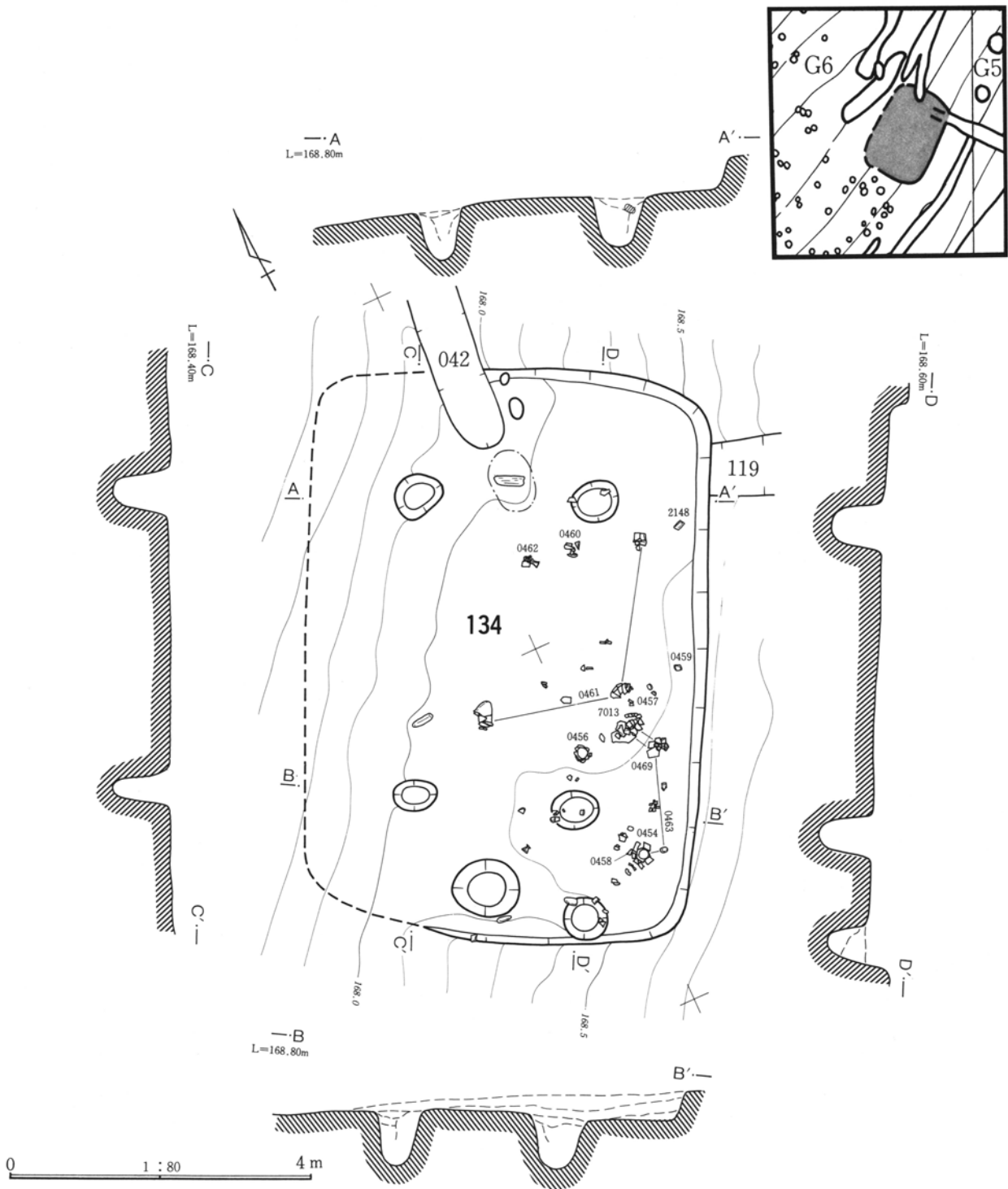


【備考】3個の炉は当然併用とは考えにくい。柱穴群は完全に複数の組み合わせがあるわけではなく、貯蔵穴も1基であることから、炉の方向を中心とする拡張かもしれない。床面焼土の存在より、火災の可能性が考えられる。主軸は等高線走向と一致している。

黒曜石分析16点（上層12点・下層4点）成果は、3,900BP13点（3090含む上層9点・下層4点）・5,300BP2点（上層）・6,700BP1点（上層）である（第V章参照）。

1 台地部の遺構と遺物





134号遺構 【図p.116,117 PL.91,92】

西斜面中位最下部で検出した弥生後期の竪穴。

【重複】 近世の溝042号・119号に切られる。

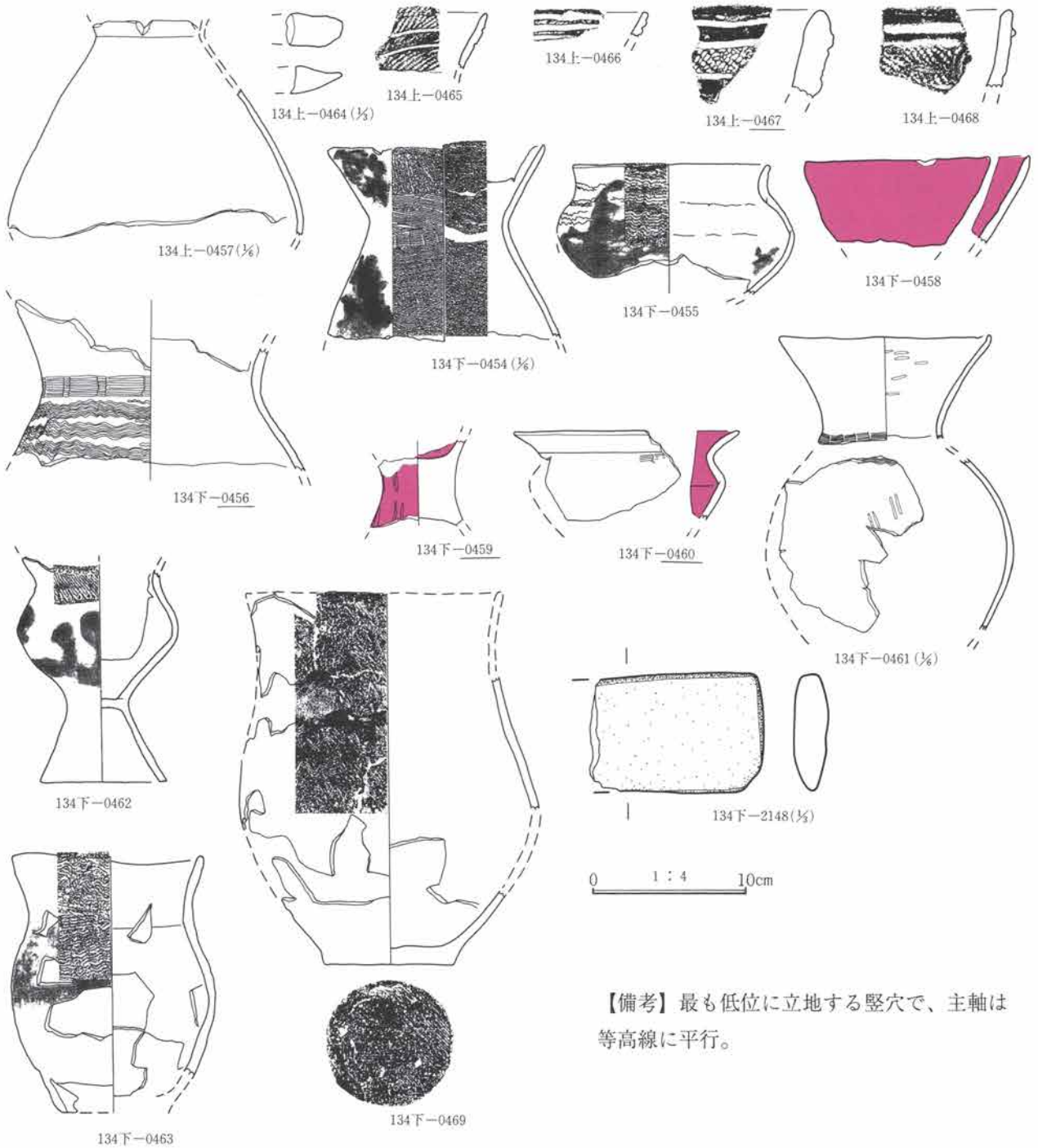
【埋土】 記録紛失のため不明。

【壁床】 谷側1/3ほどは削られて壁床共に残らず。

【炉など】 北東側主柱穴中間に焼土と炉石が残る。南西壁山側に貯蔵穴がある。

【柱穴】 板材状の柱痕の主柱穴4個が方形に並ぶ。南壁中央のピットは入り口施設だろう。

【遺物】 上層（第1層）からは、弥生後期壺(0457)・同匙(0464)・中期甕片(0465)・前期鉢片(0466)・縄文鉢片(0467,68)が出土した。下層（第2層以下）では弥生後期甕類(0455,56,60,62,63,69)・同壺類(0454,61)・同鉢類(0458,59)、磨り石(石包丁状=牛伏砂岩2148)が見られた。



【備考】最も低位に立地する竪穴で、主軸は等高線に平行。

114・122号遺構 【図p.118 PL.93】

西斜面上位中央で検出した遺構群。

114号は弥生後期の土坑。

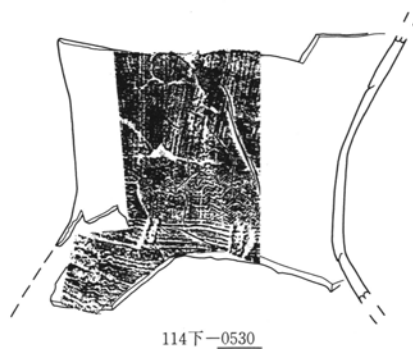
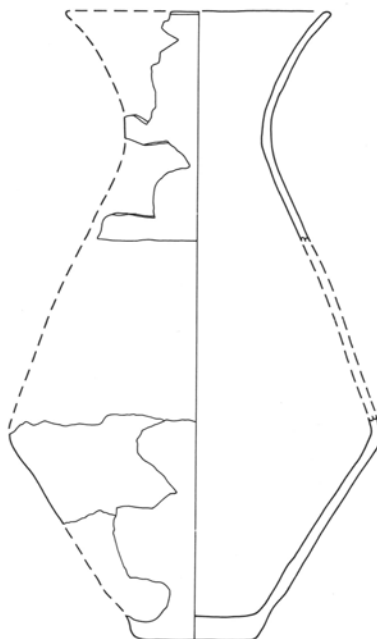
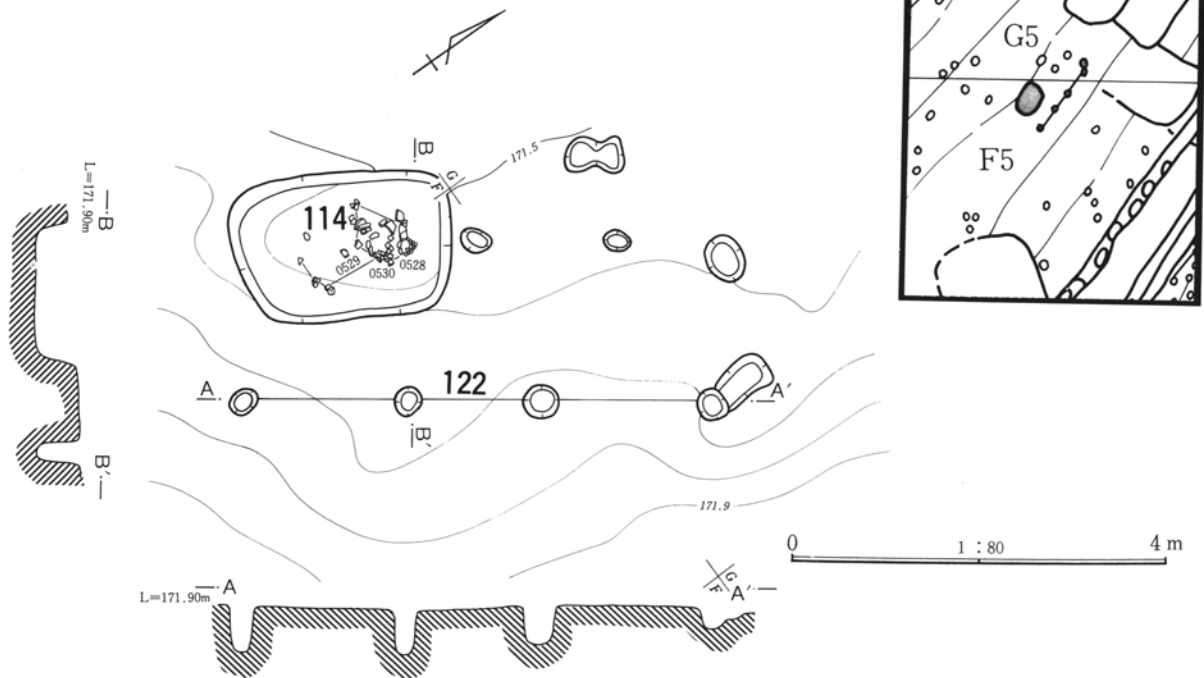
【重複】なし。

【埋土】記録取れず。

【形態】平面長方形ぎみ。上面が削られていることもあり浅い。

【遺物】下層より弥生後期甕(0528,30)・同大型壺(0529)が出土。

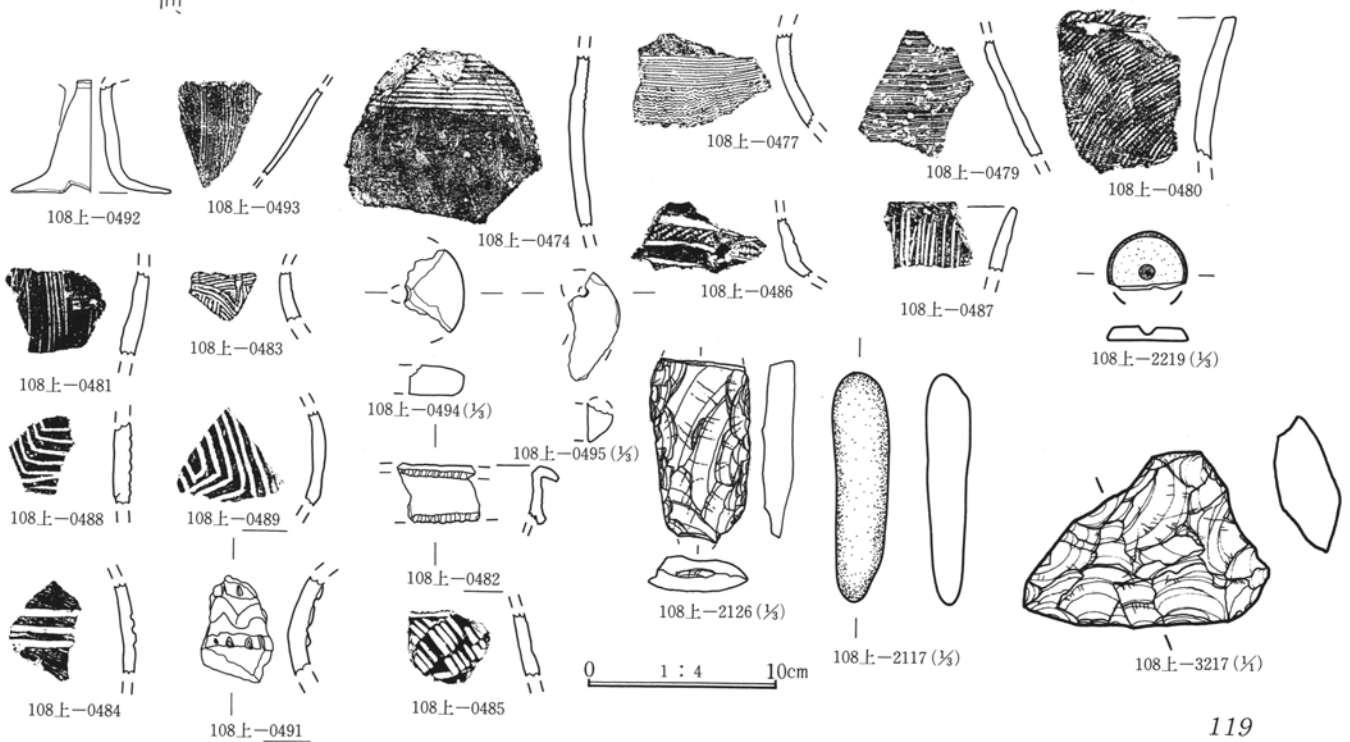
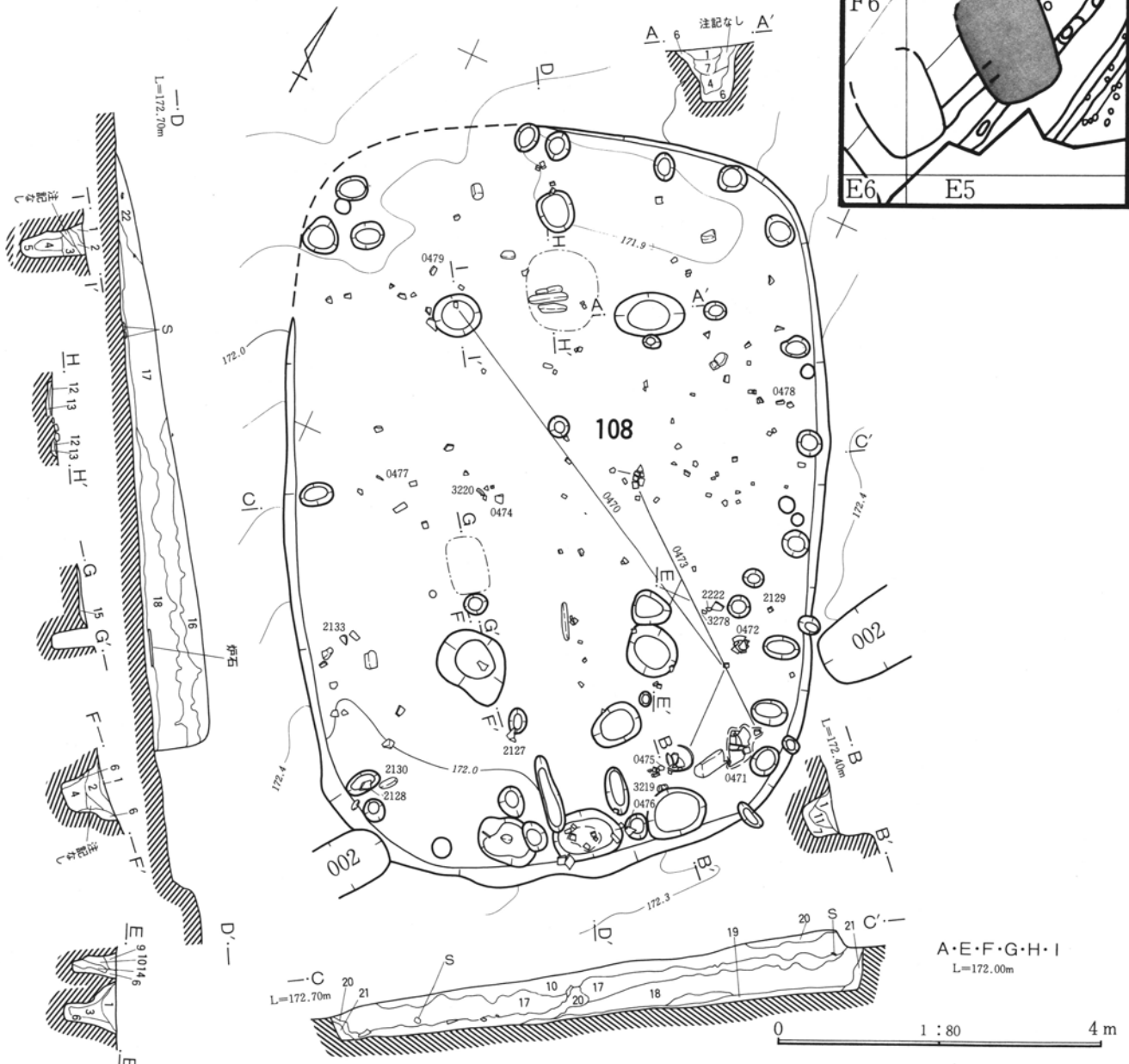
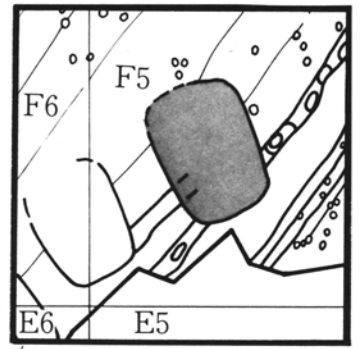
【備考】性格不明。北東側5mに弥生後期竪穴099号と100号が位置する。

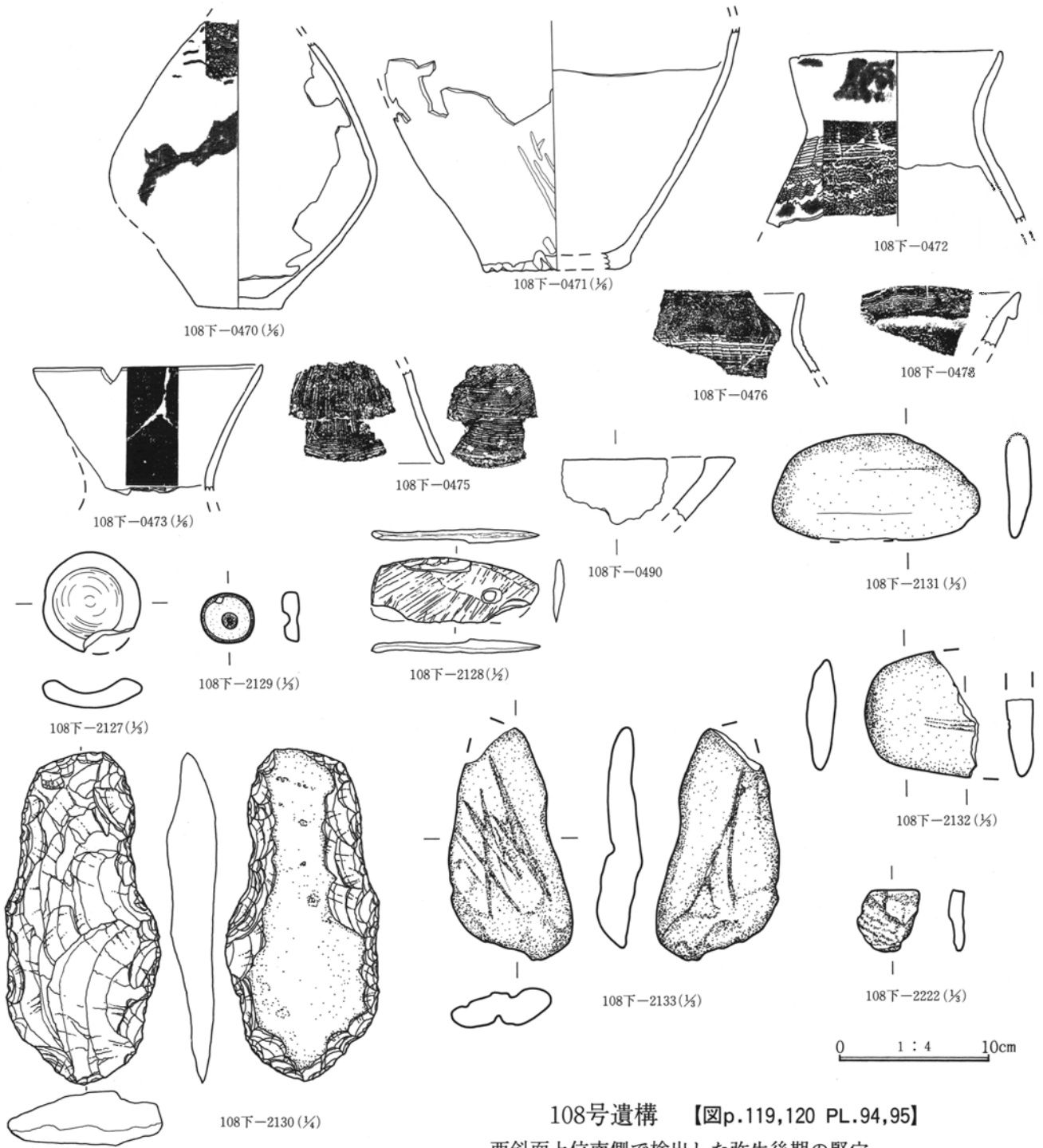


0 1 : 4 10cm

122号は推定弥生の柵列。【重複】なし。【埋土】記録取れず。

【形態】4個の柱穴が並ぶ(長4.4m)が、各柱穴の深さは少し差がある。間隔も中央2個がやや狭い。【遺物】なし。【備考】台地上の近世の柵列123・124号と似た走向だが、それらと異なり道路033号との距離はやや離れている。基本的に等高線と平行に設置されたためでもあるが、むしろ走向は114号と同一と考えた方が妥当である。





108号遺構 【図p.119,120 PL.94,95】

西斜面上位南側で検出した弥生後期の竪穴。

【重複】南東側を近世の溝002号に壊される。また南西側では時期不明の溝121号と重なる。【埋土】

1オリブ褐粒子粗締強

軽石小石少少含 2オリブ褐締強軽石小石小多含 3オリブ褐締強 4暗オ

リーブ褐締良 5オリブ褐締弱 6黄褐締強汚ローム 7黄褐6同黒強 8オリブ褐粒子粗締弱炭化粒小多含 9暗灰黄粒子粗締強ローム塊大

多軽石小少含 10オリブ褐粒子粗ローム塊多含 11オリブ褐粒子粗締強 12オリブ褐粒子粗締強 13地山 14不明 15暗オリブ褐粘

性弱ローム塊焼土塊少含 16暗オリブ褐締強軽石小汚ローム塊少含 17暗オリブ褐16同比汚ローム塊倍含 18オリブ褐17同比汚ローム

塊倍黄強 19黒褐締強ローム塊小少含 20暗オリブ褐粒子粗締強 21黄褐粒子粗粘性強ローム塊多崩落土 22オリブ褐粒子粗締強軽

石小多含

【壁床】北西隅を除いて壁床は比較的良好に残る。中央南側床面に焼土散布部分（G断面）がある。

【炉など】北西側主柱穴中間に炉石と焼土が薄く残る。前述の南側焼土散布部分は炉ではないだろう。南東辺側には、入り口施設と貯蔵穴がある。

【柱穴】一部板材柱痕を持つものを含む4個の支柱穴が方形配列で検出。南東側のものの内側にはそれぞれ1組の柱穴が接している。側柱穴もやや多く検出したが、長辺各3個と短辺1個の配列が最終と考えられる。古い段階では北東辺3個・北西辺3個が確認できる。

【遺物】上層(16,17,20,22層)からは古墳時代土師器片(0492,93)・弥生後期甕類(0477,80,81)・同壺類(0474,79,83)・土製紡錘車(0494)・土製勾玉(0495)・中期土器片(0485,87~89)・前期土器片(0482,84)・縄文土器片(0486,91)、打製石斧(硬質泥岩2126)・石製紡錘車未製品(牛伏砂岩2219)・磨り石(小型棒状=緑色片岩2117)、石匙(チャート3217)が出土した。下層(18,19,21層)では弥生後期壺類(0470,71,73,78)・同甕類(0472,75,76)・縄文鉢片(0490)、磨製石包丁(珪質準片岩2128)・砥石(牛伏砂岩2132,33)・紡錘車未製品(砂岩2129)・磨り石(石包丁状=緑色片岩2131)・打製石斧(変質安山岩2130)・自然剥片(珪質頁岩2222)・不明アテ具(石膏?2127)、黒曜石チャート剥片類が見られた。

【備考】明らかに南東側方向への拡張がなされている。炉の位置は変わらず、南側の焼土は火災の可能性と考える。下層遺物では大型壺が多い。主軸は、等高線とは無関係に北北西・南南東に取っている。

112・121号遺構 【図p.122,123 PL.93,96,97,98】

西斜面上位南側で検出した遺構群。両者の関係は不明。

112号は弥生後期の竪穴。【重複】121号以外はなし。

【埋土】1褐粘性弱暗褐土ローム少含 2黄褐締弱ローム多含 3明黄褐ローム主崩落土 4暗褐粒子粗ローム塊中含 5明赤褐粒子粗焼土塊 6暗褐粘性弱ローム少含 7褐締弱粘性弱ローム少含 8黄褐締弱粘性弱ローム多含 9黄褐粘性強ローム多含 10褐粘性弱ローム少含 11明黄褐ローム主崩落土 12褐締弱粘性弱ローム少含 13暗褐粘性弱白軽石多炭化物ローム少含 14暗褐炭化物ローム白軽石少含 15黒褐締弱炭化物ローム多含 16褐締弱粘性弱ローム多崩落土。

【壁床】北西側は削られて床壁共に不明。中央南側の床下柱穴(I断面)の周囲に焼土散布部分がある。

【炉など】北西側支柱穴中間外側に炉石と焼土分布部分があるが、すでに削られている。南東壁際には入り口施設とそれに接続する貯蔵穴が見られる。

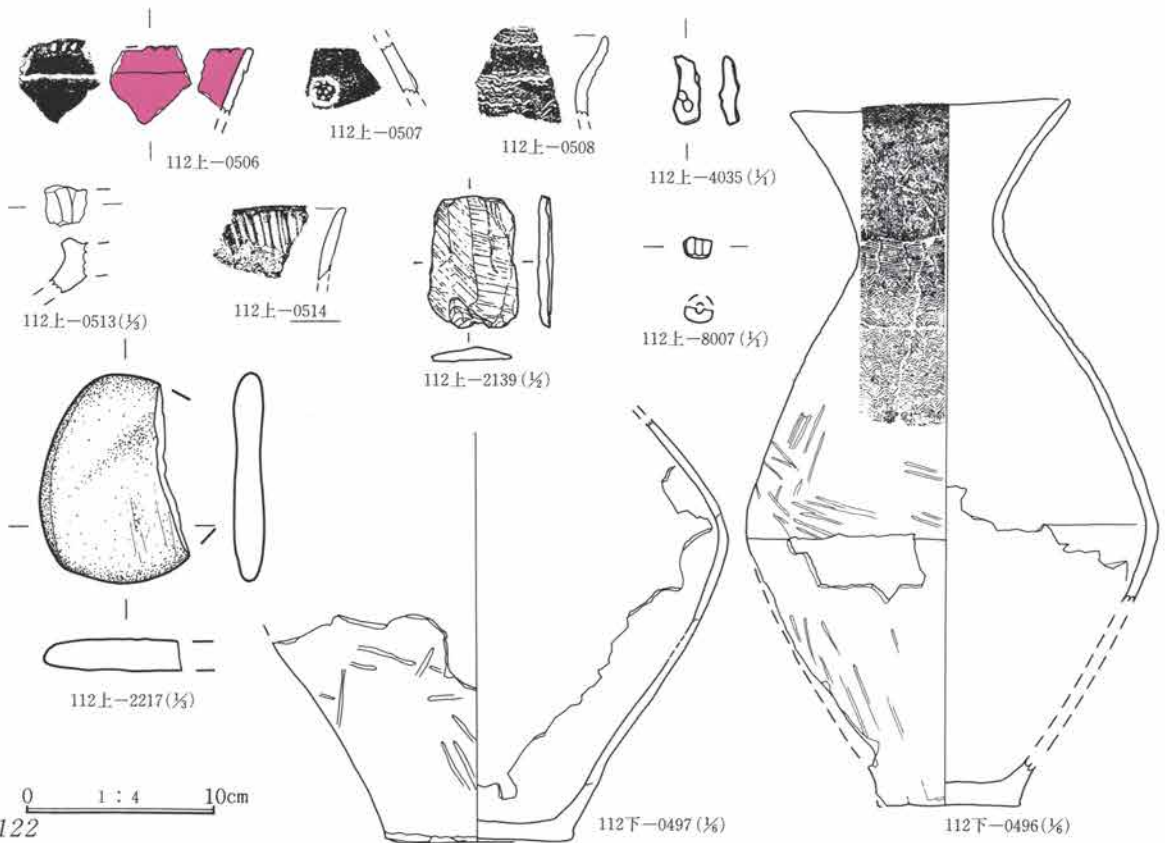
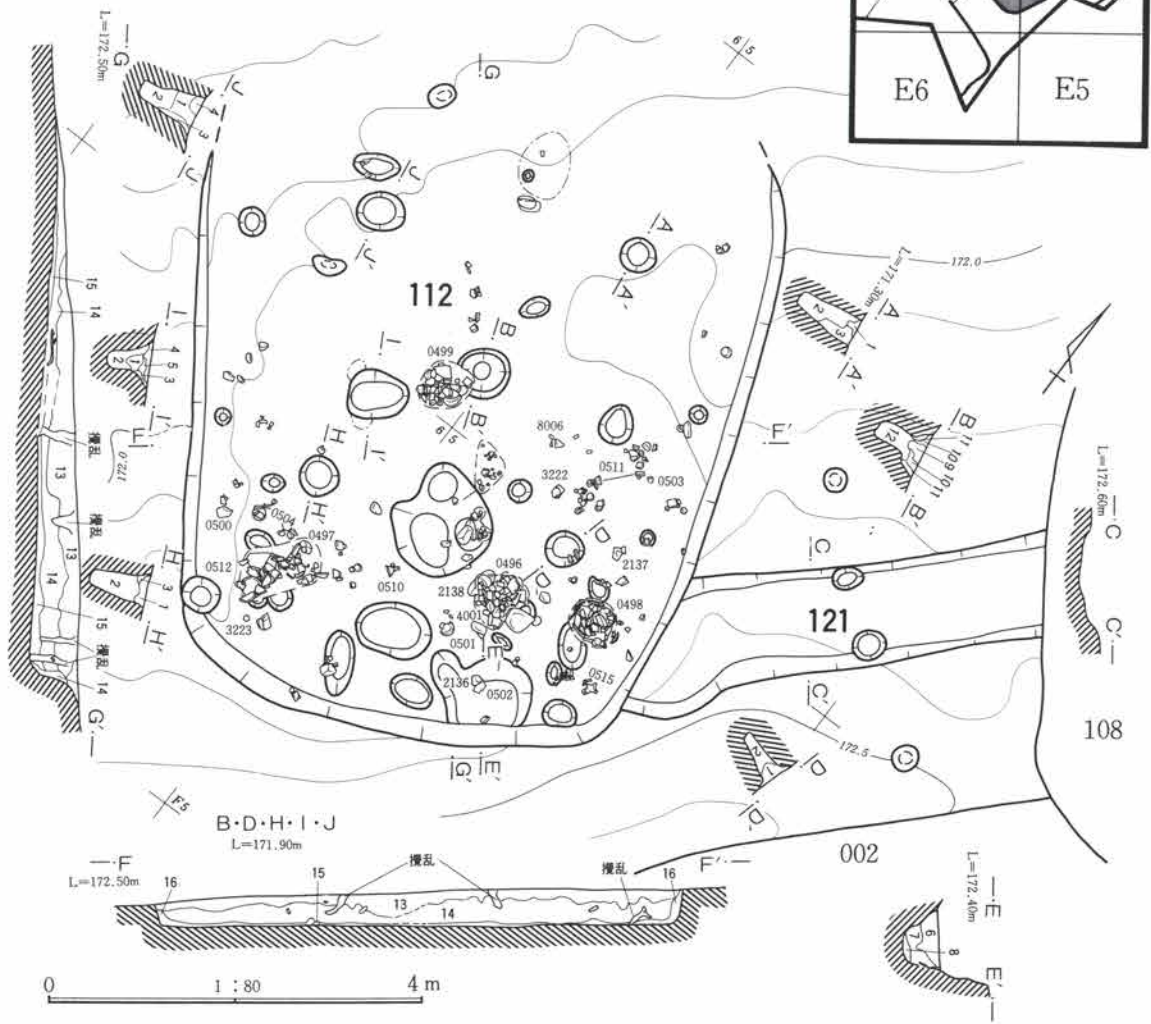
【柱穴】丸材柱痕支柱穴4個が方形に並び、その対角線交点にも深い柱穴がある5本構造。南西壁に沿い側柱穴が3個見られる。前述の床下柱穴と南東側の遺物下にいくつかのピットがあるが、拡張の確実な痕跡は不明。

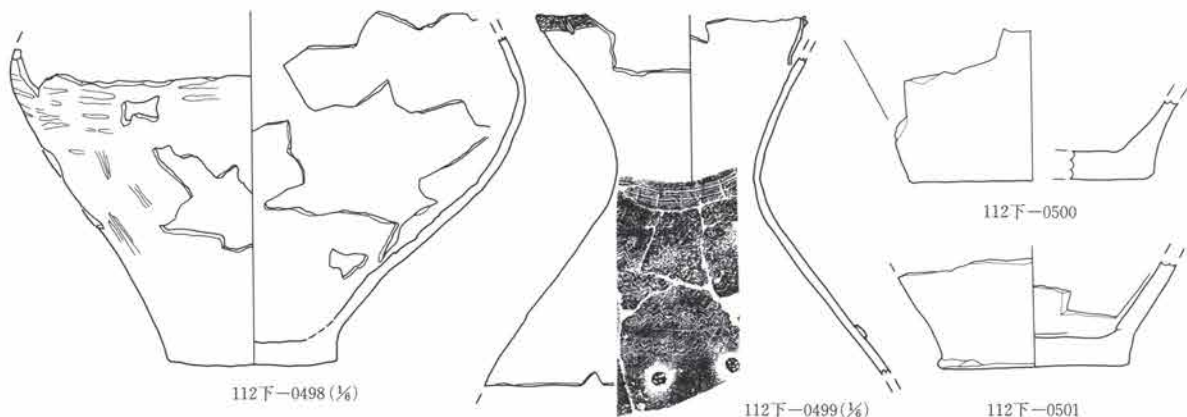
【遺物】上層(13層)からは弥生後期壺(0506,07)・同甕(0508)・同匙?(0513)・中期甕片(0514)、石剣?(珪質準片岩2139)・磨り石(板状=牛伏砂岩2217)、チャート剥片、不明鉄製品(4035)、ガラス小玉(青緑色8007)、炭化材(7012)・炭化種子(7011)が出土した。下層(14~16層)では弥生後期壺類(0496~0501,03,10,12)・同甕類(0502,04,05,11)・同高坏(0509)・縄文鉢片(0515)、打製石斧(硬質泥岩2137)・砥石(流紋岩2138 重量8.4kg)・磨り石(円筒状=粗粒安山岩2136)、黒曜石剥片、銅釧片(4001)、ガラス小玉(青緑色8006)が見られた。

【備考】本竪穴は埋土状態と炭化材などの出土より焼失したと考えられる。残存遺物に大型壺が多い点に特徴がある。主軸を等高線とは関係なく北北西・南南東方向にとっており、北東側の108号とはほぼ同一である。銅釧及び炭化種子の分析成果については第V章参照。

121号は時期不明の溝。【重複】北東側で108号と重なる。【埋土】不明。

【形態】幅広(約1.0m)で浅い。【遺物】なし。【備考】等高線に平行して延びるが、108号と112号の間には見られない。性格時期不明。



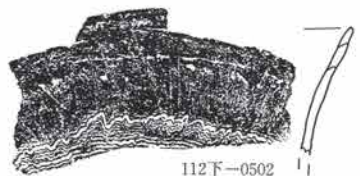


112下-0498 (1/4)

112下-0499 (1/4)

112下-0500

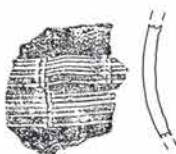
112下-0501



112下-0502



112下-0503



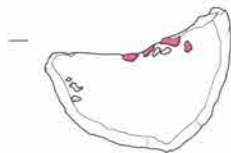
112下-0504



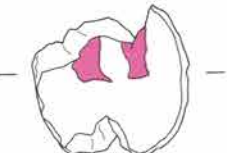
112下-0505



112下-0509



112下-0510



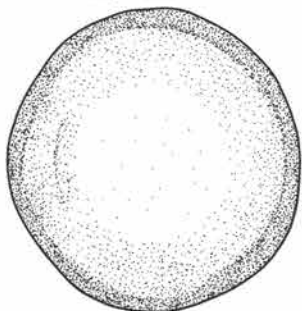
112下-0511



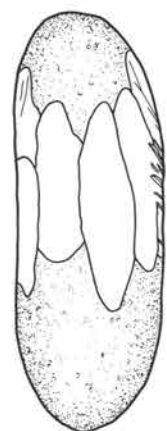
112下-0512



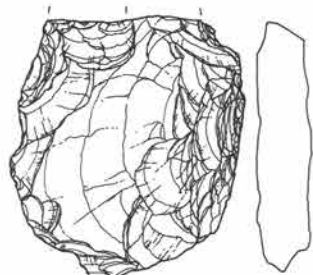
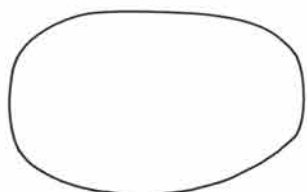
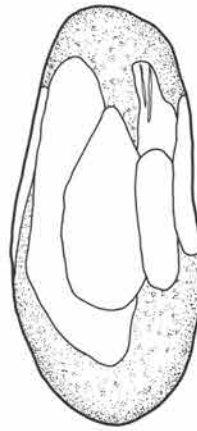
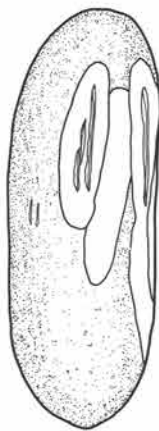
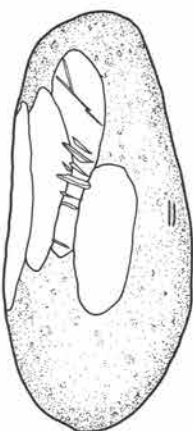
112下-0515



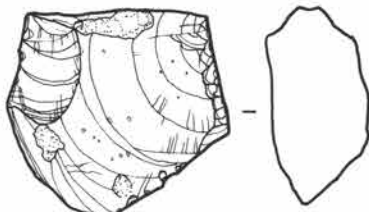
112下-2136 (1/4)



112下-2138 (1/4)



112下-2137 (1/4)



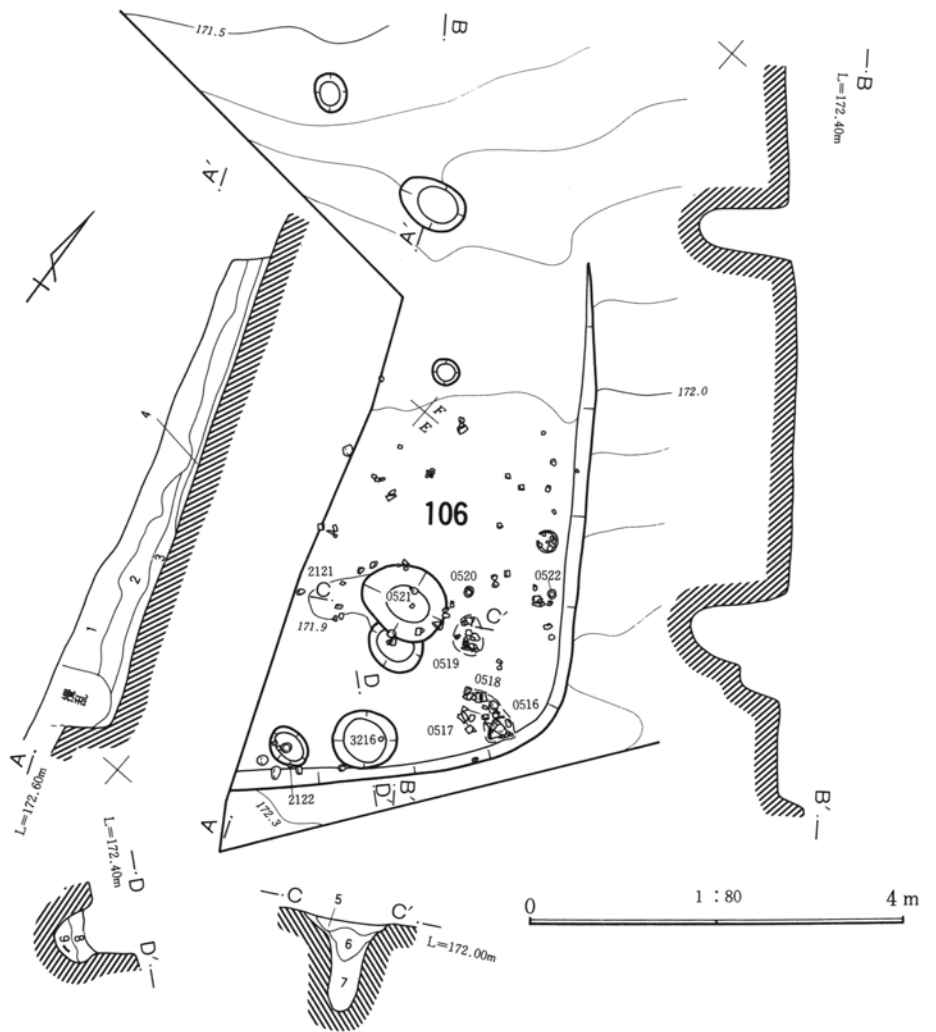
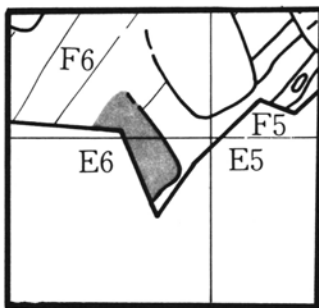
112下-3222 (1/4)



112下-8006 (1/4)

112下-4001 (1/4)

0 1 : 4 10cm



106号遺構 【図p.124,125 PL.98】

西斜面上位南端で検出した弥生後期の竪穴。

【重複】なし。北西側は削られ、南西側2/3は調査範囲外。

【埋土】1褐耕作土締粘性弱ローム白粒子少含 2褐ローム白粒子少含 3暗褐ローム炭化物少含 4暗褐粘性弱ローム炭化物少含 5暗褐締弱ローム白粒子少含 6褐締粘性弱ローム多炭化物少含 7褐締弱ローム塊中ローム赤粒子少含 8暗褐締弱ローム粒少含 9黒褐粘性強ローム焼土粒少含

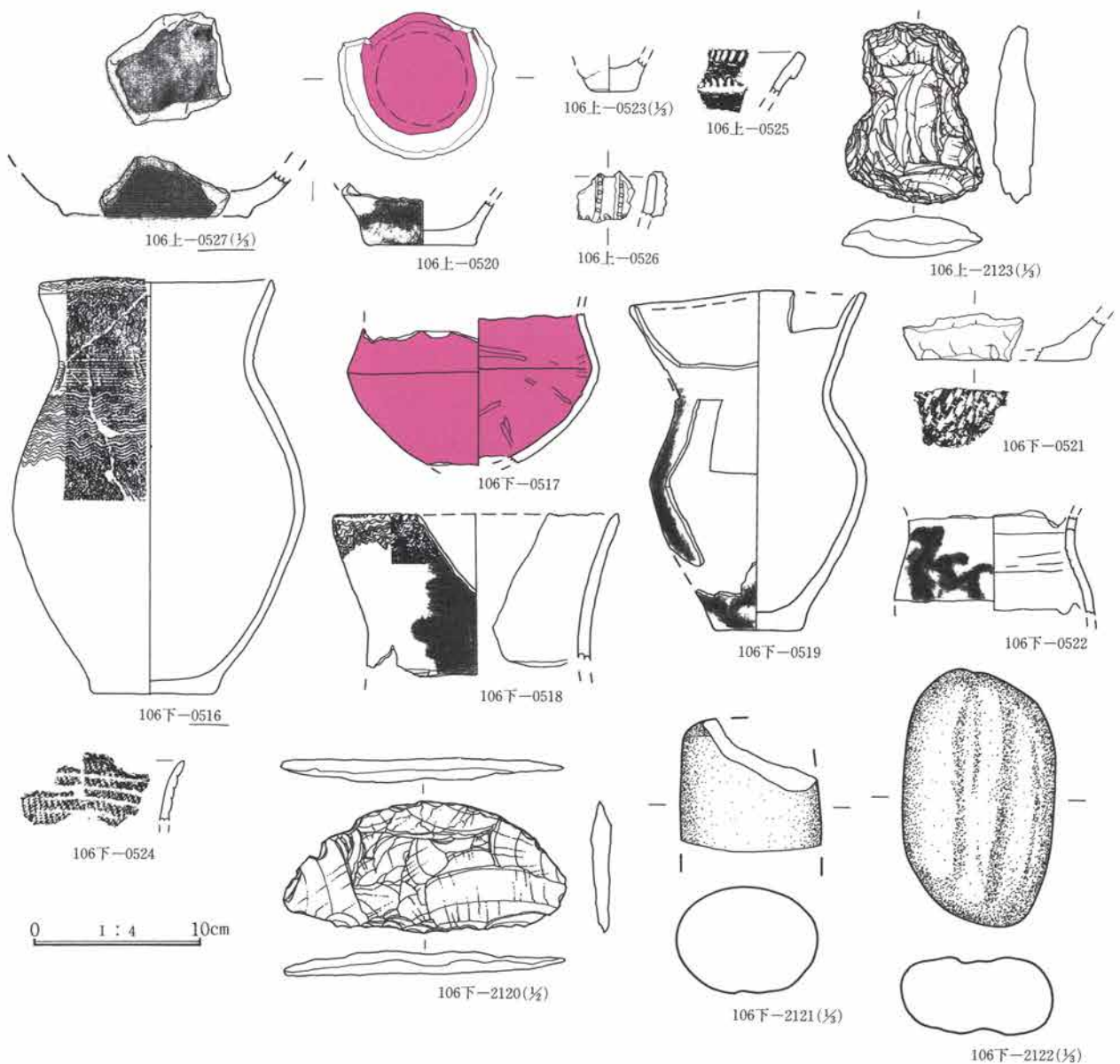
【壁床】北東辺と南東辺の残存状態は良い。

【炉など】炉は不明。南東壁際に貯蔵穴がある。

【柱穴】丸材状柱痕の北東側主柱穴2個を確認した。南東壁際及び北西側推定壁付近に柱穴があり、棟持柱穴の可能性もある。

【遺物】上層(1,2層)からは近世志野皿(0527)・弥生後期甕(0520)・同壺(0525)・同ミニチュア(0523)・中期壺片(0526)、打製石斧(珪質頁岩2123)が出土した。0520の内部には赤色顔料が付着している。下層(3,4層)では弥生後期甕類(0516,18,19,22,24)・同高坏(0517)・中期土器片(0521)、磨製石斧(蛤刃形=変輝緑岩2121)・砥石(牛伏砂岩2122)・打製石包丁(珪質準片岩2120)、黒曜石剝片が見られた。

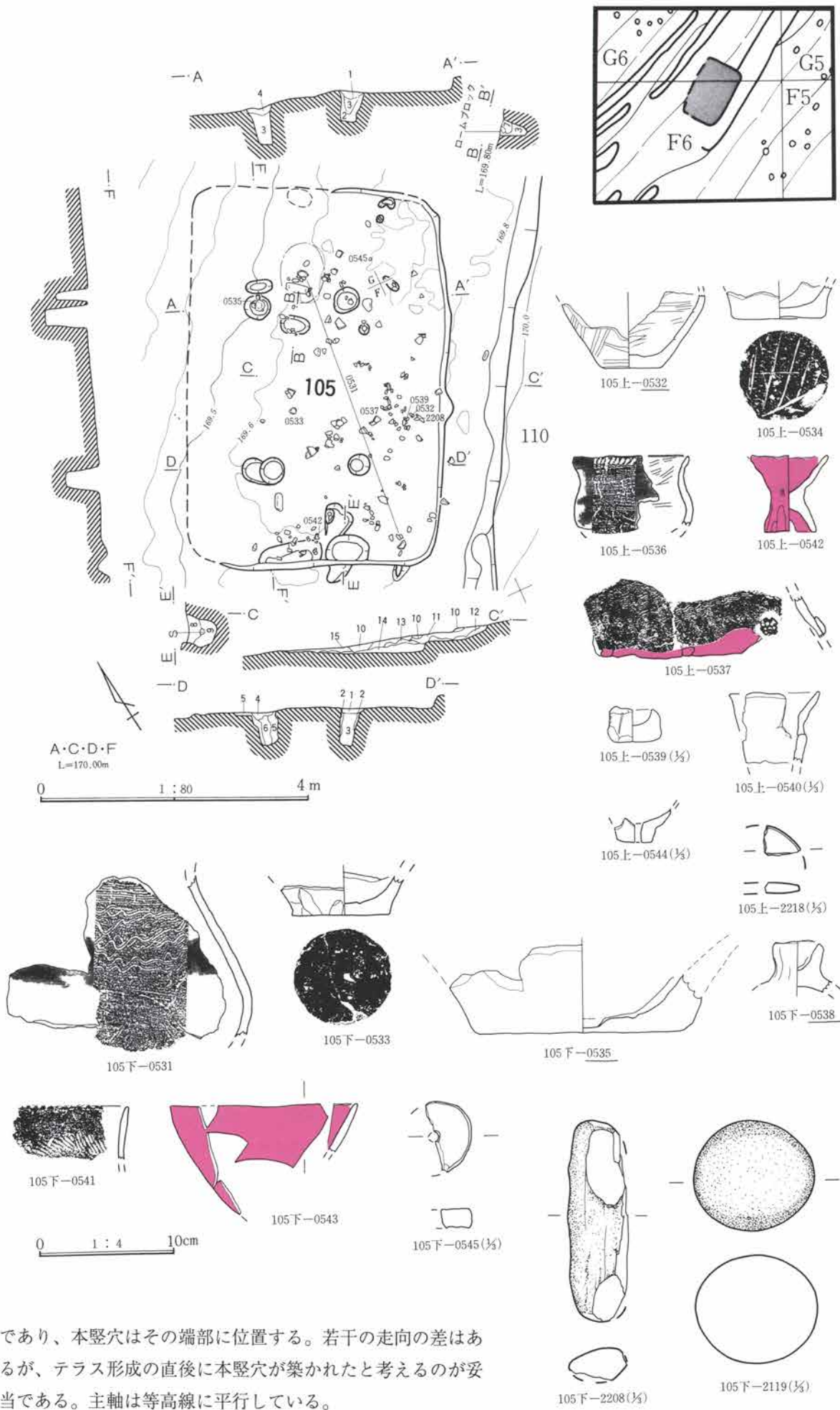
【備考】主軸を等高線と直交する方向に持ち、北東側の108・112号とほぼ似た走向である。6本柱穴構造と思われる。埋土下層に炭化物の含有があり、火災の可能性もある。



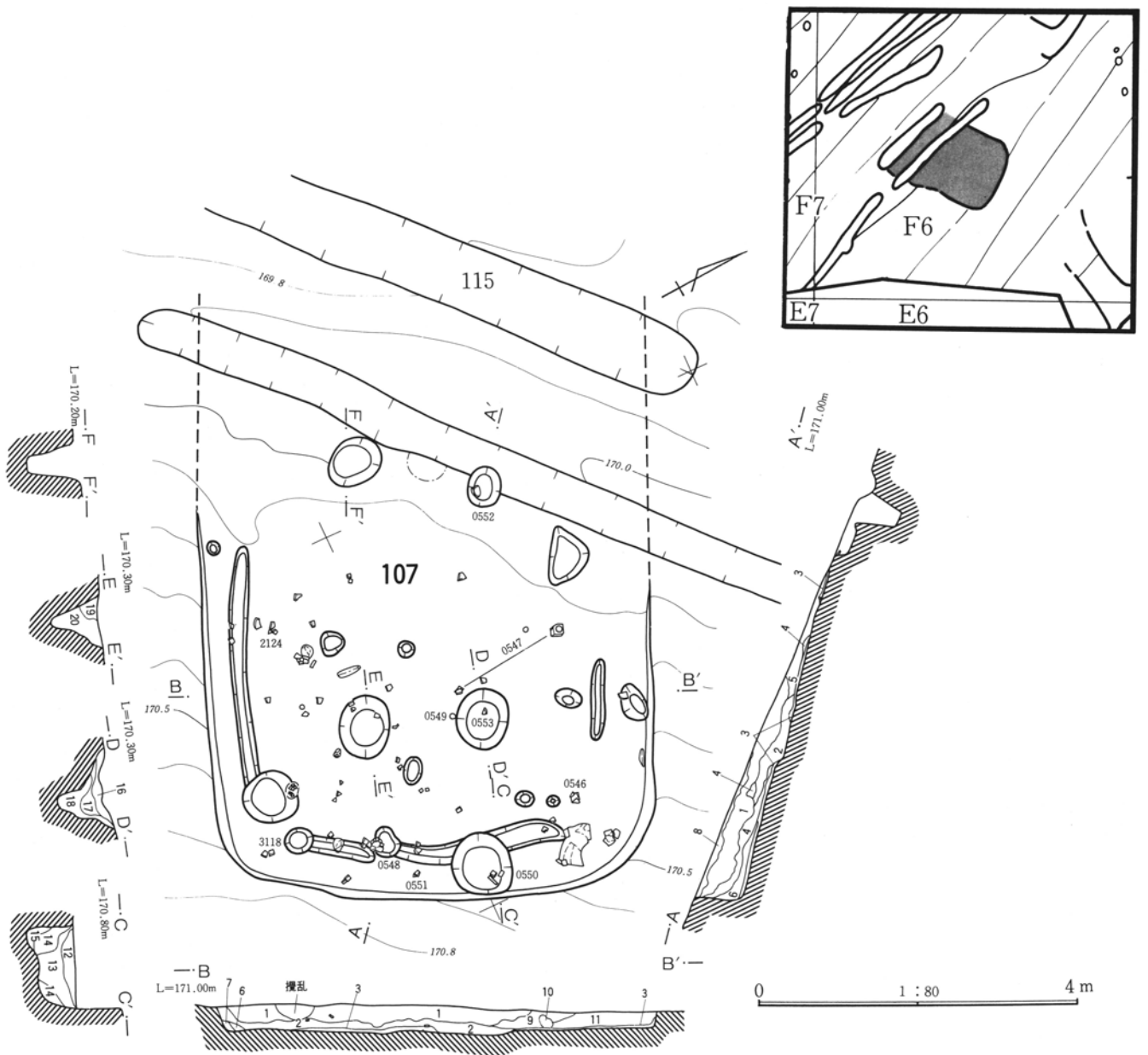
105号遺構 【図p.126 PL.99】

西斜面中位中央で検出した弥生後期の竪穴。

【重複】山側の南東側にテラス110号があるが、重複ではなく同一時期の遺構と考える。【埋土】1暗灰黄植物根攪乱 2オリブ褐汚ローム塊少含 3オリブ褐2同ローム無 4暗オリブ褐粒子粗締強軽石小石少含 5黄褐粘性弱汚ローム 6黄褐粒子粗締強汚ローム 7暗オリブ褐粒子粗締強ローム小軽石少含 8暗オリブ褐7同軽石小少含 9暗オリブ褐粒子粗粘性弱 10黄褐粒子粗締強 11黄褐粒子粗締強軽石小ローム塊大少含 12オリブ褐粒子粗締強全体ローム塊大少含 13オリブ褐粒子粗粘性弱 14オリブ褐粒子粗粘性弱軽石小少含 15暗オリブ褐ローム塊少含 【壁床】北西側はかなり削られ、床も1/3程度は残っていない。山側はテラス110号がある。【炉など】北東側支柱穴中間に炉石と焼土が残る。南西壁際には貯蔵穴がある。【柱穴】丸材柱痕の支柱穴4個が方形に並ぶ。北東壁中央に側柱もしくは棟持柱状の痕跡があったが明瞭でない。【遺物】上層(10,11,13,15層)からは弥生後期壺(0534,37)・同甕類(0536)・同鉢類(0532)・同ミニチュア(0539,40,42,44)、石製紡錘車(流紋岩質凝灰岩2218)が出土した。下層(12,14層)では弥生後期壺類(0531,33,35)・同蓋(0538)・同甕(0541)・同鉢類(0543)・同土製紡錘車(0545)、磨り石(球状=粗粒安山岩2119 棒状=雲母石英片岩2208)また貯蔵穴内より炭化材(アカガシ亜属7010)が見られた。【備考】前記炭化材が建物構造材の一部かは不明で、火災の可能性があるとのみ記録する。テラス110号は後述のように長大



であり、本竪穴はその端部に位置する。若干の走向の差はあるが、テラス形成の直後に本竪穴が築かれたと考えるのが妥当である。主軸は等高線に平行している。



107号遺構 【図p.127,128 PL.100】

西斜面中位南側で検出した弥生後期の堅穴。

【重複】北西側は近世の溝115号に切られると共に、かなり削られる。

【埋土】1オリブ褐粒子粗締強軽石小石小多含 2オリブ褐粒子粗小石小多ローム中少含 3暗オリブ褐締強ローム中少含 4オリブ褐粒子粗締強全体ローム塊小少含 5黄褐汚ローム小石小少含 6オリブ褐粒子粗 7黄褐粒子粗汚ローム崩落土 8オリブ褐粒子粗締強軽石小石小多含 9オリブ褐粒子粗締強汚ローム 10不明 11オリブ褐粒子粗締強9同 12暗褐ローム炭化物少含 13褐締弱ローム多炭化物少含 14黄褐締粘性弱ローム多含 15明黄褐軟ローム崩落土 16褐締粘性弱白粒子ローム少含 17黄褐粘性弱ローム多含 18黄褐締粘性弱ローム多含 19暗褐締粘性弱白粒子ローム多含 20褐締粘性弱ローム少含

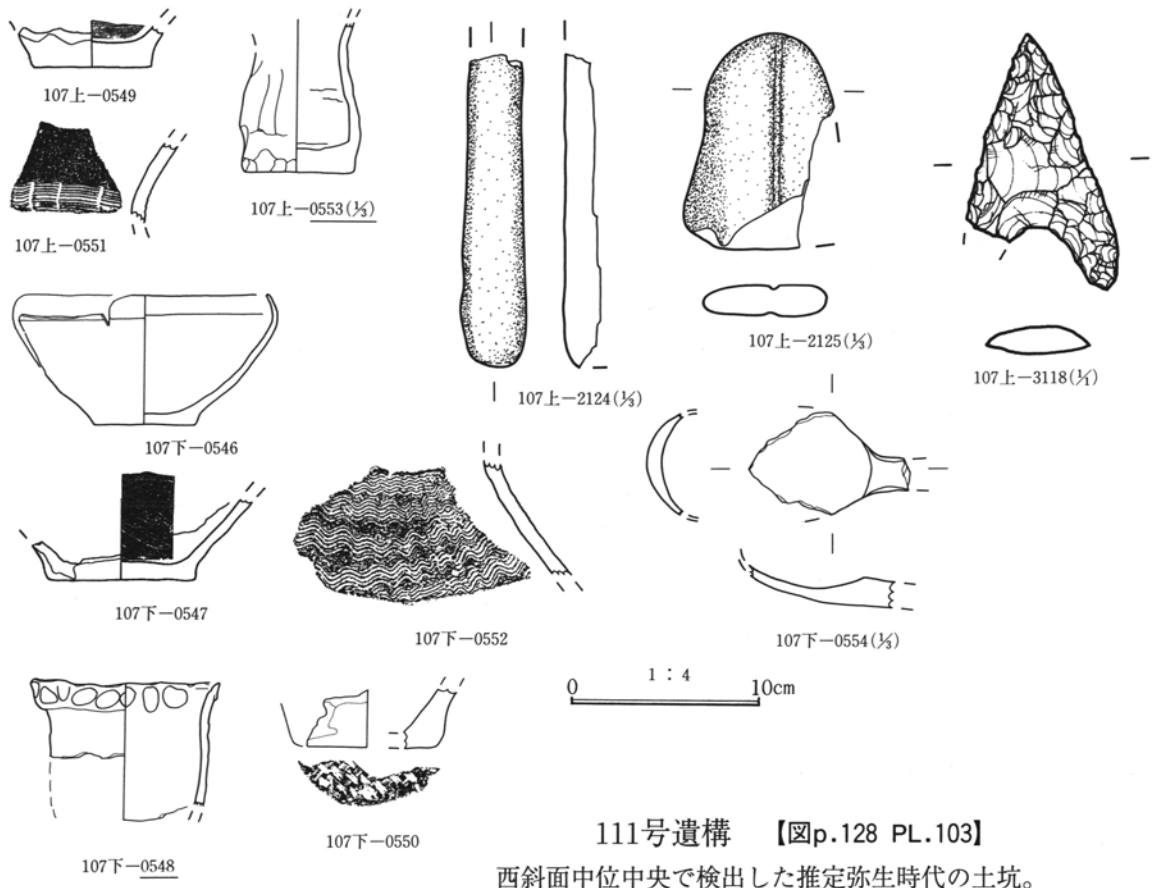
【壁床】谷側の西1/3ほどは残存していない。残った壁から少し間隔をあけて周溝状の浅い溝が廻る。

【炉など】西側支柱穴中間の溝115号にかかる部分に焼土が残る。東壁際に貯蔵穴がある。

【柱穴】丸材柱痕の支柱穴4個が方形に並ぶ。

【遺物】上層(1,5,8~10層)から弥生後期甕(0549)・同壺(0551)・同ミニチュア(0553)、砥石(牛伏砂岩2125)・磨り石(棒状=緑色片岩2124)、打製石鏃(チャート3118)・チャート剥片が出土した。下層(2~4,6,7,11層)では弥生後期壺(0547,52)・同鉢類(0546)・同匙(0554)・中期土器片(0548,50)が見られた。

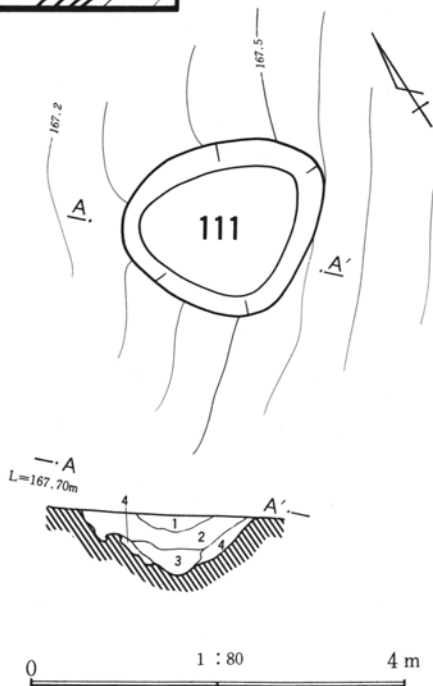
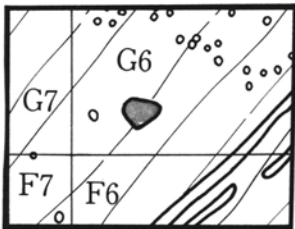
【備考】主軸は等高線に直交傾向である。周溝の存在は、他の堅穴には見られない。



111号遺構 【図p.128 PL.103】

西斜面中位中央で検出した推定弥生時代の土坑。

【重複】なし。【埋土】1暗褐粘質軽石小混 2暗褐粘質ローム小混 3 黒褐粘質炭化粒小混 4暗褐粘質ローム塊中混 【形態】平面不整形で、断面漏斗型。【遺物】なし。【備考】埋土の特徴より時期推定。

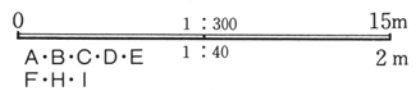
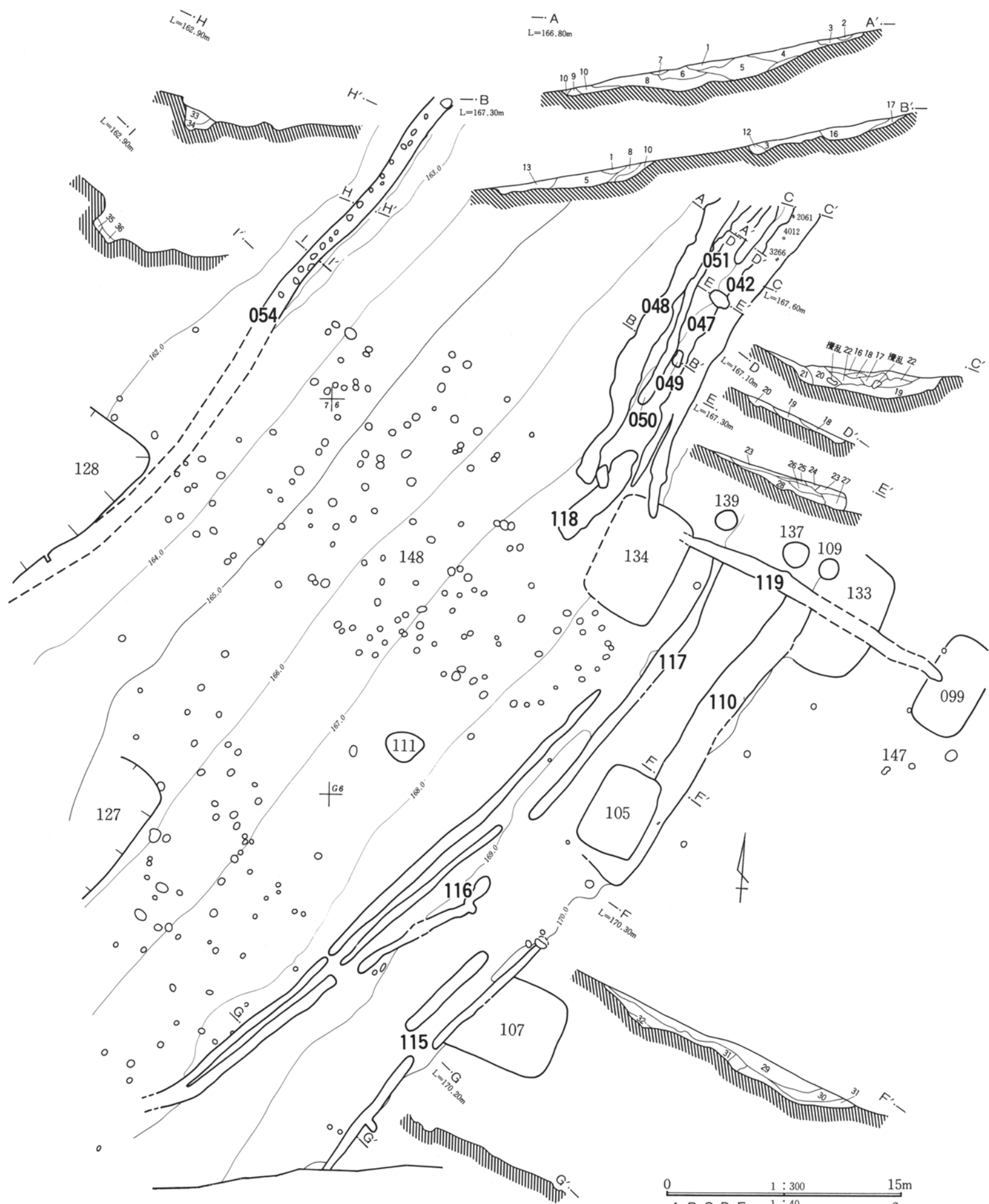


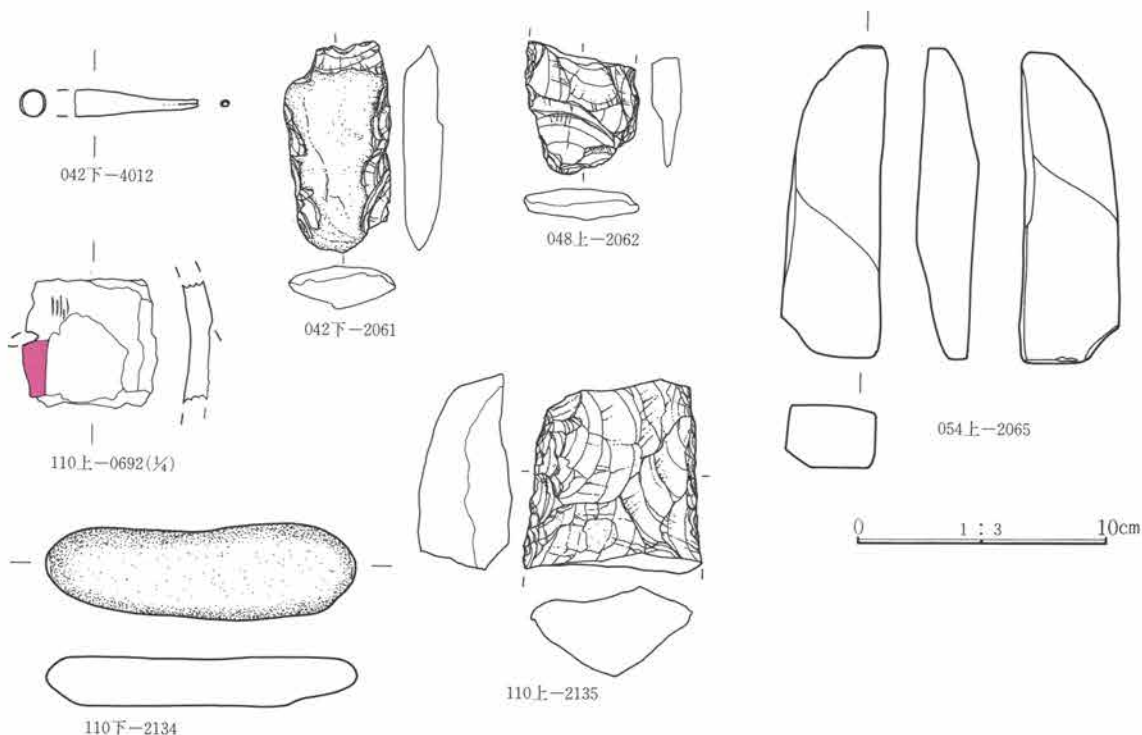
042・047～051・054・110・115～119号遺構

【図p.129～131 PL.101,103】

西斜面中下位で検出した溝・土坑群。

042号は、近世中期の溝。【重複】土坑047号より古く、弥生竪穴134号より新しい。【埋土】16オリーブ褐ローム漸移土 17明黄褐ローム塊A軽石混 18灰白A軽石純層 19オリーブ褐ローム漸移土 20黄ローム塊 21明黄褐ローム塊20似 22明横褐ローム塊 17A軽石少含 【形態】断面U字形に近く、南西端は二股に分かれる。【遺物】下層（19～21層）より銅製キセル吸い口（4012）、打製石斧（硬質泥岩2061）出土。【備考】048号とはほぼ平行して南西から北東に走る。





047号は、近世後期の土坑。【重複】溝042号より新。【埋土】23暗灰黄締無ロームA軽石少含 24鈍い黄ローム塊A軽石混 25黒褐ロームA軽石少含 26鈍い黄ローム塊A軽石混 27明黄褐26混 28明黄褐ローム塊小含 【形態】楕円形。【遺物】なし。

【備考】性格不明。

048号は、近世後期の溝。【重複】050号より古い。【埋土】1黄褐ローム混A軽石混 4明黄褐ローム塊A軽石少含 5オリブ褐締無ローム塊A軽石少含 6オリブ褐締弱A軽石少含 7黄橙2似シルト粒混 8黒褐締無ローム塊A軽石少含 9黄褐締無A軽石少含 10黄ローム塊 13明黄褐A軽石混 【形態】断面皿状。【遺物】上層（4～7層）より打製石斧（硬質泥岩2062）が出土。

【備考】042号とほぼ平行し、南西から北東へ走る。

049号は、近世後期の土坑。【重複】050号より新。【埋土】16オリブ褐ローム漸移土A軽石混 17明黄褐ローム塊A軽石混 【形態】平面不整形。【遺物】なし。【備考】性格不明。

050号は、近世中期の溝。【重複】049号より古い。048号より新。【埋土】2黄橙ローム少混 3暗オリブ褐ローム漸移土A軽石混 12明黄褐ローム塊3混 【形態】浅い。【遺物】なし。【備考】南西から北東へ走る。

051号は、近世中期の溝。【重複】なし。【埋土】18灰白A軽石純層 19オリブ褐ローム漸移土 20黄ローム塊 【形態】断面皿状。【遺物】なし。【備考】南西から北東へ走る。

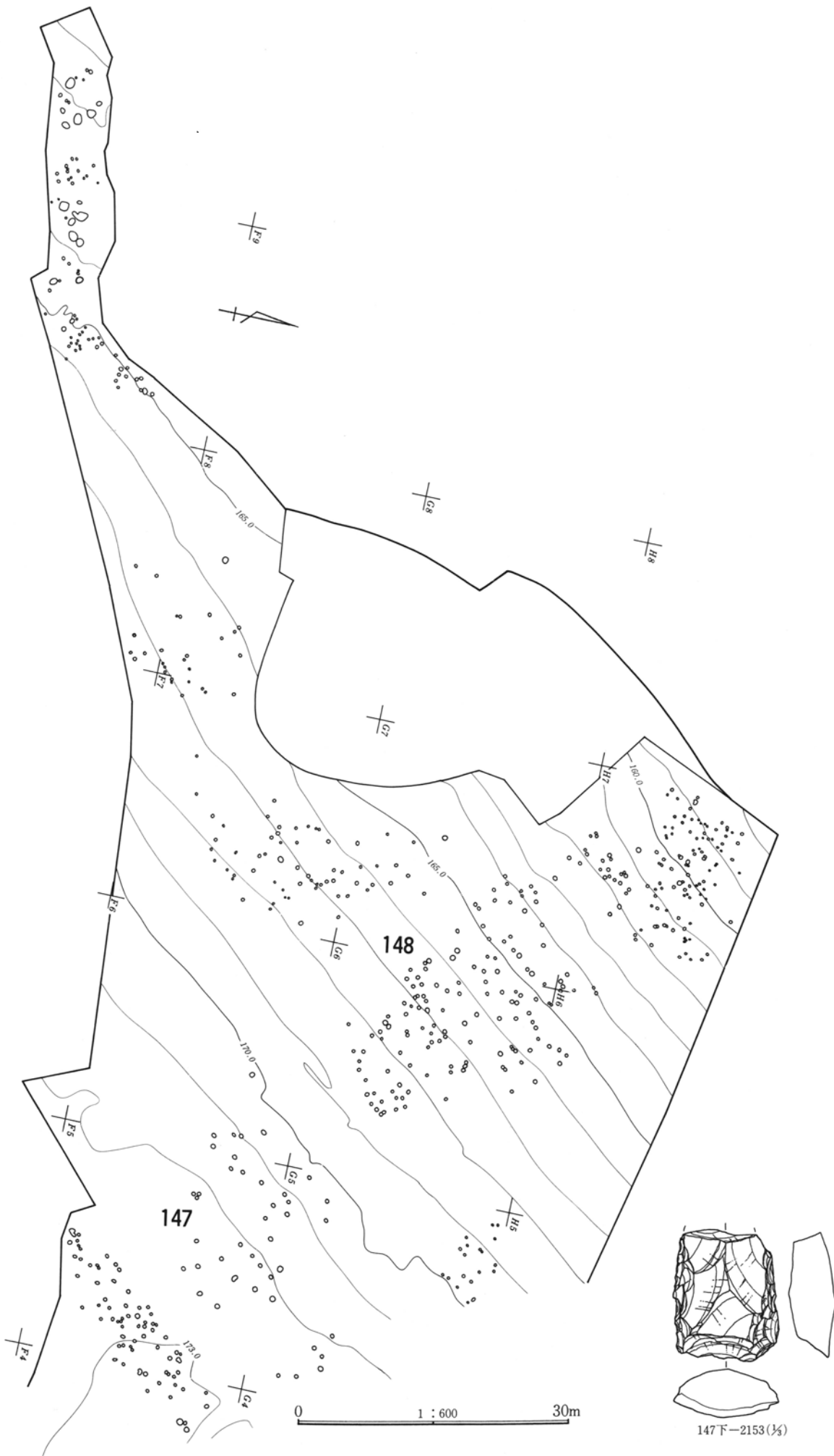
054号は、近世後期の溝。【重複】なし。【埋土】33黄褐締無ロームA軽石混 34オリブ褐ローム混 35オリブ褐ローム黒褐粒少含 36黒褐ローム多含 【形態】断面U字形で底に小ピットが見られる。【遺物】上層（確認面）より砥石（砥沢石2065）出土。【備考】南西から北東へ走る。

110号は、弥生後期のテラス。【重複】近世溝119号に切られ、弥生後期堅穴133号を壊す。【埋土】29暗オリブ褐粒子粗締強 30暗オリブ褐29同ローム多黄味炭灰粒少含 31黄褐粒子粗締強ローム塊中多含 32明黄褐粒子粗締強ローム多含 【形態】長く幅広く（21.3×2.1m）断面L字形に斜面を切る。南西端部に明瞭な隅部がある。【遺物】上層（29,30層）より形象埴輪片（人物0692）、打製石斧（硬質泥岩2135）、下層（31,32層）より磨り石（棒状＝緑色片岩2134）が出土。【備考】本テラス形成直後に105号が築かれたが、北西側に本来同規模の堅穴が2軒は建てられる予定だったと思われる。

115～117号は、推定近世の溝。【重複】115号は弥生堅穴107号より新。【埋土】不明。【形態】耕作痕状の浅い溝。【遺物】なし。【備考】ほぼ同一時点で掘られたもので、畝跡の可能性もある。

118号は、推定近世の溝。【重複】未命名小ピットに切られる。【埋土】不明。【形態】不整形の浅い土坑状。【遺物】なし。【備考】042・048号とほぼ同一の時期性格と思われる。

119号は、推定近世の溝。【重複】弥生堅穴099・133・134号及び弥生テラス110号より新。溝107号と重なる。【埋土】不明。【形態】浅い皿状。【遺物】なし。【備考】等高線に直交して掘られる。

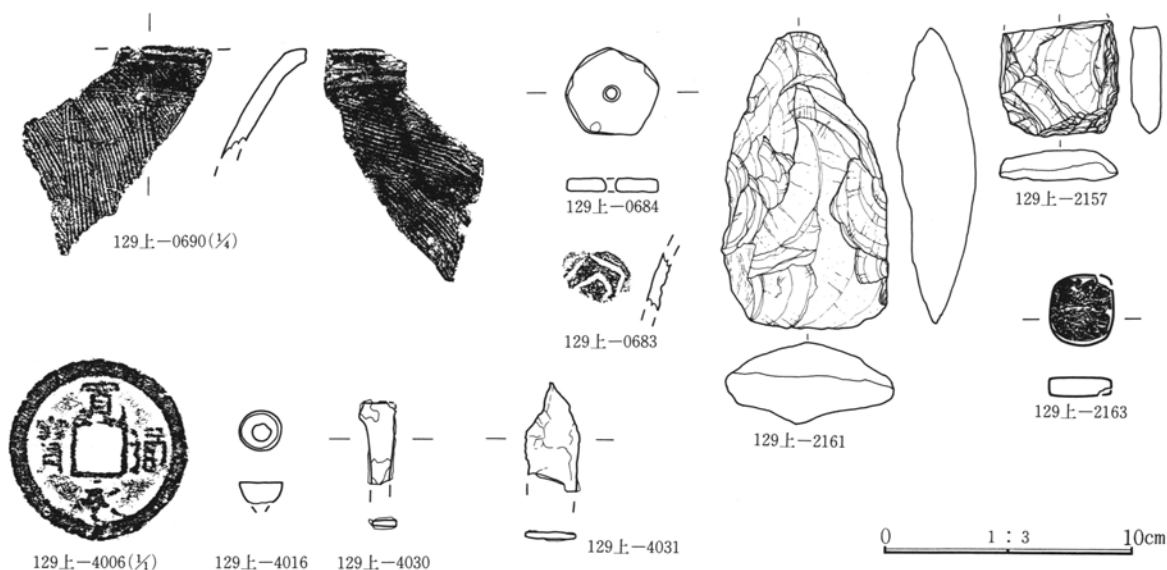


B
L=166.30m



1 台地部の遺構と遺物

第II章 検出遺構と遺物



059・127～129・147・148号遺構 【図p.132～134 PL.19,104/106】

147・148号は西斜面全体から台地上西側に広がる時期不明のピット群。前者が台地上から斜面上位のもの
の総称で、後者は中位から下位のもの総称である。

【重複】近世溝群との関係不明。【埋土】暗褐色粘質土及び褐色砂質土など数種類がある。【形態】全体に小
さいものが多い（口径深さ共15～20cm程度）。【遺物】打製石斧（細粒安山岩2153）が出土。【備考】広範囲に
展開しており、时期的にも複数存在が重なっている可能性がある。

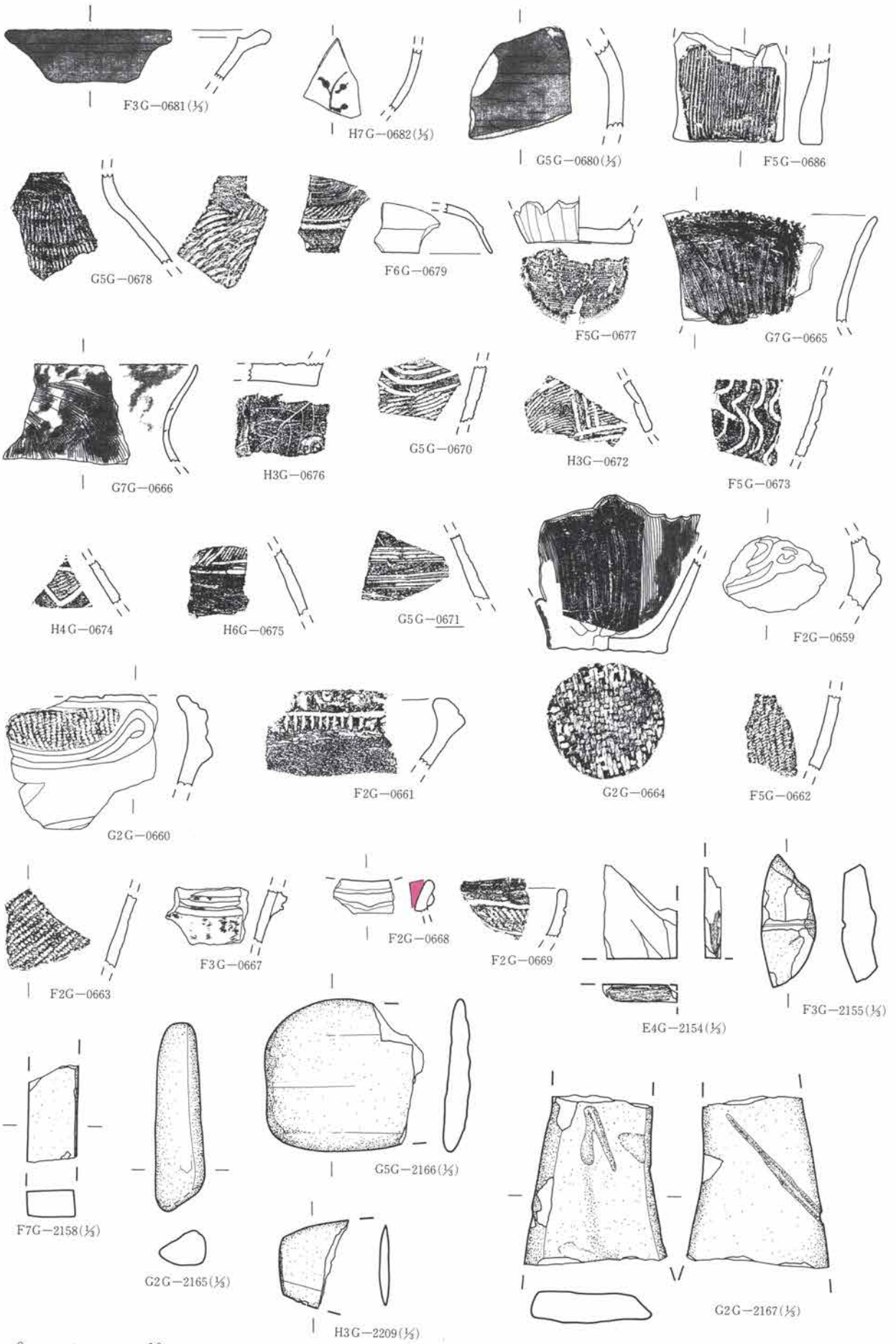
127・128号は近世の開墾跡。【重複】共に地震跡129号に切られる。【埋土】不明。【形態】斜面の山側を削っ
て平坦面を造成している。【遺物】なし。【備考】畠地造成跡か。

129号は近世の地震跡。【重複】開墾跡127・128号を壊す。溝059号よりは古い可能性が高い。【埋土】分層
するも記録取れず。浅間A軽石は存在せず。【形態】平面U字形（最大45×27m）での陥没（比高7m）部
分で、土層逆転や断絶部分が多く見られる。関連する地割れは128号内にも続く。【遺物】上層（確認面）で
円筒埴輪片（0690）・弥生後期転用土製紡錘車？（0684）・中期土器片（0683）、小円盤形石製品（流紋岩2163）・
打製石斧（細粒安山岩2157,61）、黒曜石剥片、銅製キセル雁首（4016）・新寛永通宝（4006）・不明鉄製品
（4030,31）が出土。【備考】かなり大規模な崩落痕で、上記遺物及び浅間A軽石（1783年降下）が見られない
ことから、近世後期のものと考えられる。

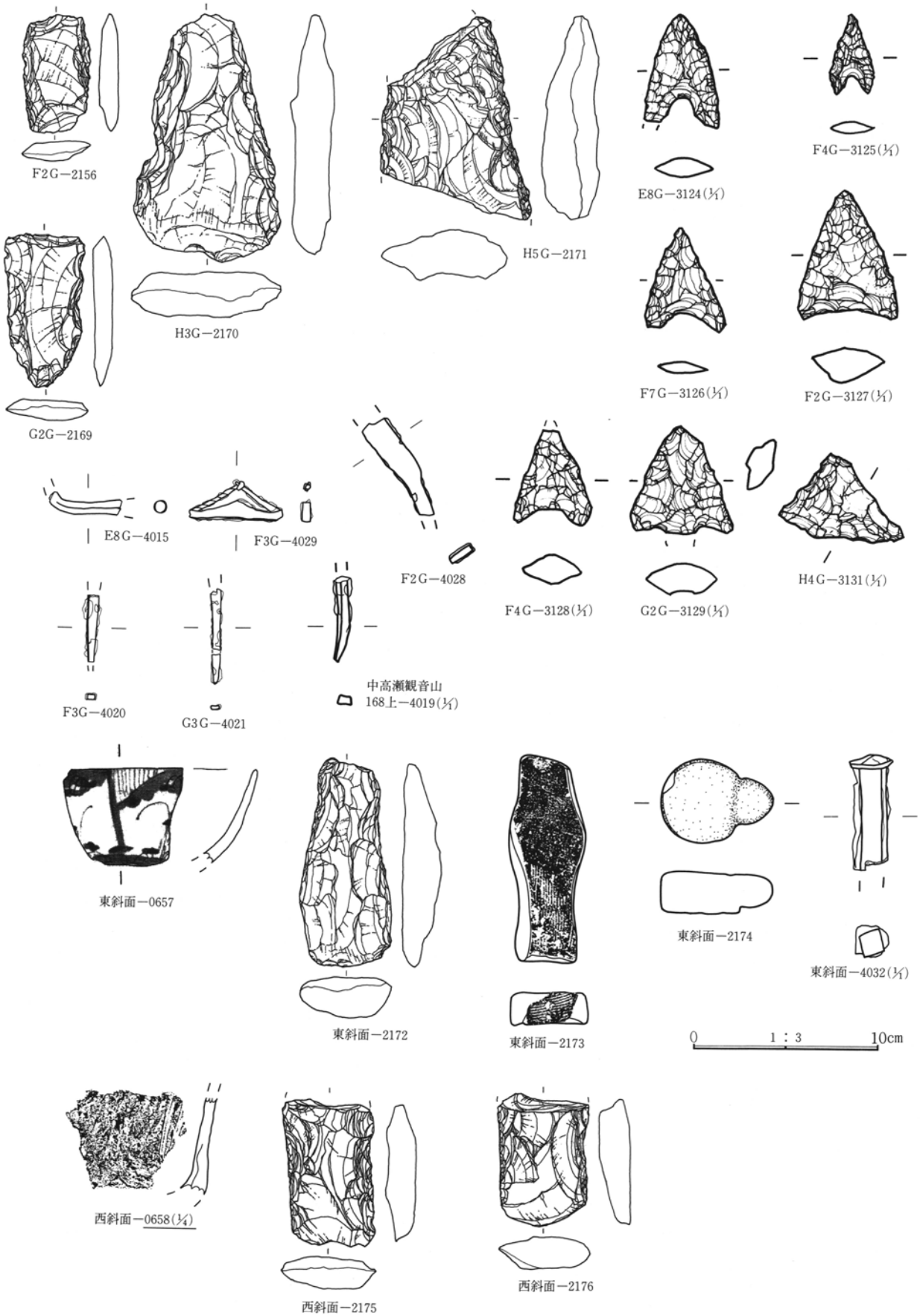
059号は推定近代の溝。【重複】地震跡129号より新しい可能性が高い。【埋土】1鈍い黄褐色粒子粗締弱粘性無ロー
ム 2褐色粒子粗粘性無ローム塊少含 3黒褐色粒子粗粘性無 4黒褐色粒子細締粘性弱ローム小多含 5オリーブ褐色粒子粗粘性弱黒土ローム塊混 6
明黄褐色粒子粗締強黒土塊混 7暗灰黄褐色粒子粗締強ローム中含 8黄褐色粒子粗締強ローム大含 9鈍い黄締強ローム中多含 10明黄締強粘性弱
ローム純層 11黒褐色粒子粗締無ローム塊少含 12オリーブ褐締粘性強ローム黒土塊混 13明黄褐色粒子粗締粘性強ローム多含 14明灰黄締強8
同 【形態】山側を縁切りしたV字形を意図した形態だが、平面的には不整形。【遺物】なし。【備考】人為
的に埋めている。浅間A軽石が埋土に全く見られないため、近代のものと推定した。斜面下端の形状に沿う。

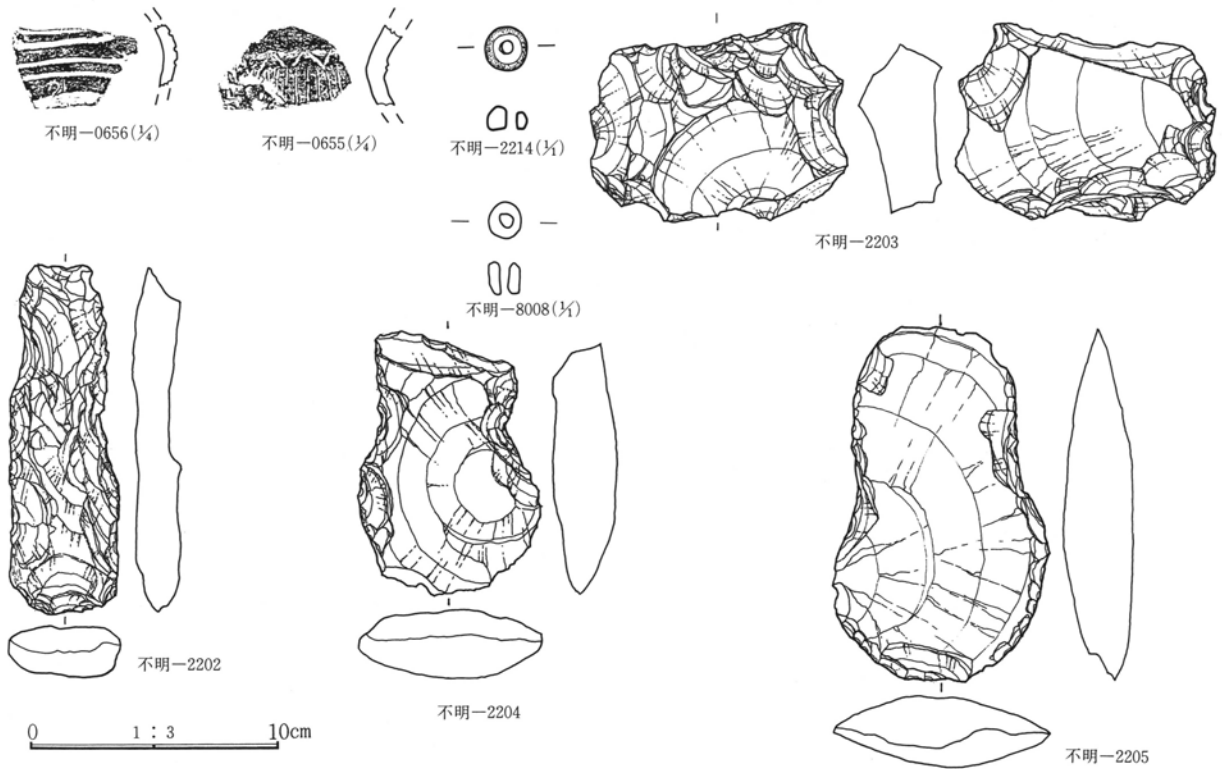
台地部出土の遺構外遺物 【PL.107,108】

台地部全体から出土した遺構に伴わない遺物の中で、顕著なものを種類・時代別に次に紹介する（出土位
置確認分については、C分冊中の表に出土グリッドを明記した）。



第II章 検出遺構と遺物





出土位置確認分

【土器類】近世陶磁では肥前染付碗(0682)・瀬戸美濃灰釉鉢(0681)、古代陶器では猿投灰釉瓶(0680)がある。古墳時代では形象埴輪片(0686)・須恵器甕片(0678)・同坏蓋(0679)・土師器甕(0677)がある。弥生後期では壺(0665,76)・甕(0666)があり、中期では壺片(0672,74,75)・同甕片(0670,71)・同鉢片(0673)が見られ、前期では鉢片(0664)が出土した。縄文鉢片(0659~63,67~69)も比較的多い。

【石斧類】近世の硯片(珪質頁岩2154)があり、打製石斧(硬質泥岩2156,71 変玄武岩2170)・砥石(戈状=牛伏砂岩2167 砂岩2155 粗粒安山岩2158 黒色片岩2166)・磨り石(棒状=緑色片岩2165 石包丁状=牛伏砂岩2209)、そして削器?(硬質泥岩2169)があった。

【石鏃類】打製石鏃では無茎のものは、チャート製(3124,26,27)と黒曜石製(3125,28)があり、有茎では黒曜石製(3129)が見られた。石匙(3131)はチャート製。

【金属器】銅製品は、キセル雁首(4015)がある。鉄製品は、火打金(4029)・鎌?(4028)と鉄鏃茎部(4019~21)が出土した。なお鉄鏃茎部(4019)は中高瀬観音山遺跡168号遺構上層出土のものである(同報告書記載漏れ)。

出土位置不明分

【土器類】東斜面で肥前染付碗(0657)、西斜面で縄文鉢片(0658)があり、弥生前期鉢片(0656)と縄文鉢片(0655)は地区不明。

【石斧類】東斜面で栓(牛伏砂岩2174)・砥石(砥沢石2173)と打製石斧(変玄武岩2172)、西斜面で打製石斧(硬質泥岩2175,76)が出土。白玉(蛇紋岩2214)と打製石斧(硬質泥岩2203,04 変玄武岩2202 粗粒安山岩2205)は地区不明。

【金属器他】東斜面上段で鉄角釘(4032)が出土。青緑色ガラス小玉(8008)は地区不明。

2 低地部の遺構と遺物

三途川の形成する低地部の調査は、水田跡の存在を確認するための北端部分での試掘で木器が出土したことに端を発する。この時に、浅間B軽石（推定1108年降下）の堆積を認めたが、水田跡の有無は判別できなかった。

そのため、木器の出土した部分を中心に面的に調査範囲を拡大して、発掘を行った。その結果、杭を中心とする大量の木器及び植物遺存体の存在が明らかになった。またヤナ状の101号遺構も検出した。

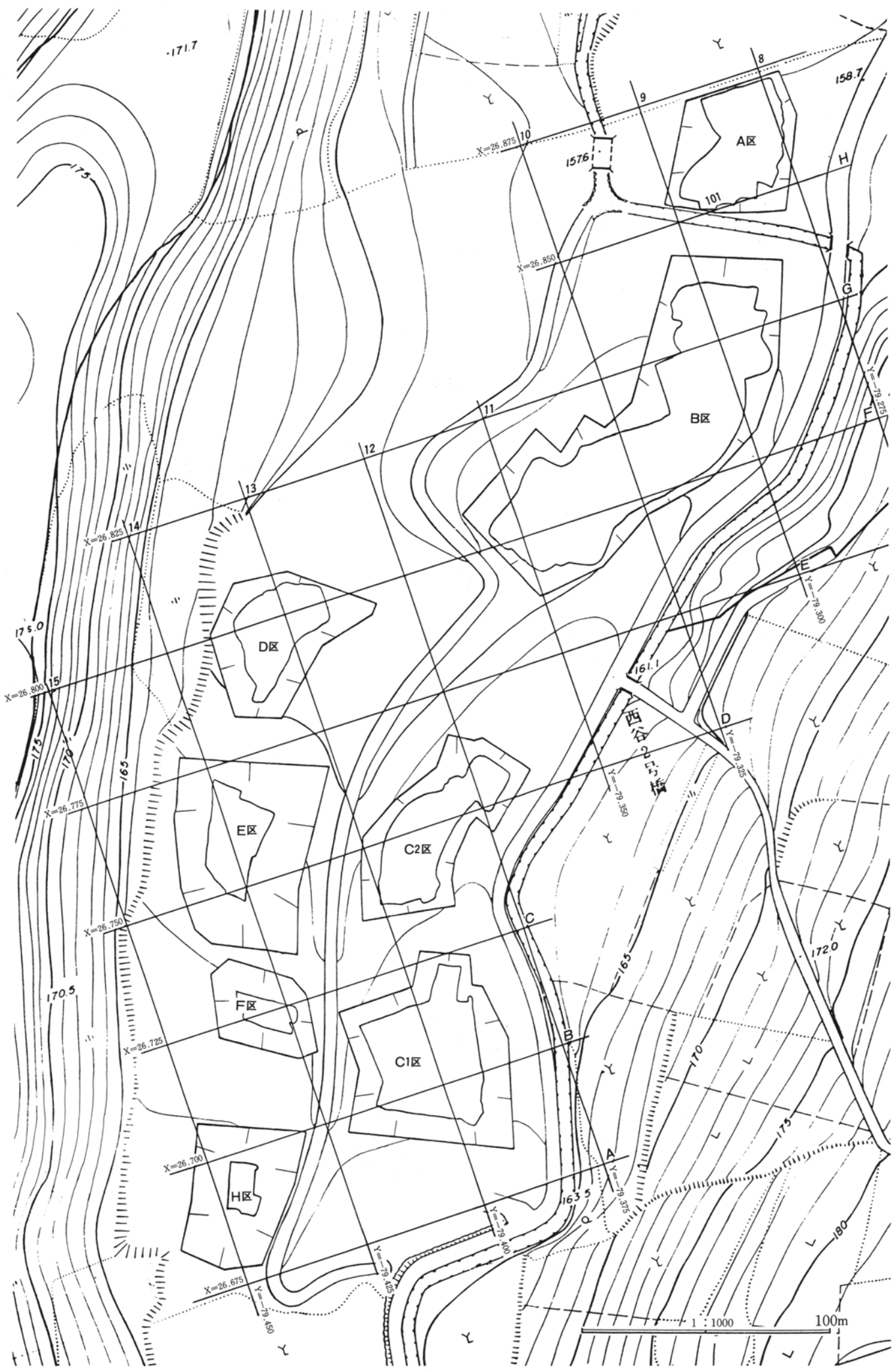
そこで、基本的に調査範囲全域に対し、発掘を行う必要が出てきたため、現存流路・道路の存在に規制されながら、次のような任意の調査区ごとに調査を行った（次頁図参照）。河川堆積物内の調査のため崩壊しやすく、各調査区は上場と下場で大きく面積が異なっている。

調査区	検出遺構	主な出土遺物	加工木	参考樹種
A区	ヤナ状遺構(101号)	杭・建具類 弥生土器・土師器・石斧・銅銭	114点	1,238点
B区	なし	杭 土師器・縄文土器・石斧	10点	71点
C1区	なし	木製ヤス 石斧・石鎌・石匙	3点	11点
C2区	なし	加工自然木 土師器・弥生土器・石斧	27点	21点
D区	なし	杭 弥生土器・縄文土器・石斧	9点	53点
E区	なし	なし	0点	5点
F区	なし	須恵器	0点	0点
H区	なし	なし	0点	0点

F区とH区の間にはG区として試掘をしたが、全く遺物がなかった。

木器は、加工木については全点実測を行い写真を掲載し、自然木は参考資料として樹種同定サンプルのみを製作した。ただし、調査時において「丸杭」として加工木の範囲で認識したモミ属については、後述のように自然木であることが判明したため、実測図を掲載したものの上記数値では参考樹種の中に入っている（第V章参照）。

以下、101号遺構の報告を最初に行い、次に各区ごとに出土遺物を示す。



-171.7

158.7

X=26.875

1576.1

X=26.850

12

X=26.825

D区

175.0

X=26.800

X=26.775

E区

C2区

161.1

X=26.350

X=26.380

170.5

X=26.750

F区

C1区

165

172.0

X=26.725

X=26.700

H区

163.5

X=26.675

1 : 1000

100m

101号遺構 【図p.140~144 PL.108~111】

A区南西端で検出した。さらに南西側に続いていたはずだが、調査時の三途川の流路にかかるため、調査はできなかった。またB区北東端の対応する位置では延長部分は確認していない。

【埋土】 1暗褐粘質粘性強 2灰黄褐粘土鉄少礫中多含 3黒褐粘質木質砂少含 4黒褐粘質木質多含 5黒褐シルト質 6暗褐ノロ状 7暗緑灰シルト質木質含 8黄褐砂・黒褐粘質 9暗緑灰粘質黄褐粒鉄分少含 10暗緑灰砂 11砂礫中多含 12黒褐粘質木質砂ノロ状 13砂

樹種

	アカマツ	ケヤキ	アカガシ 亜属	クリ	ムクロジ	ヤブ ツバキ	ヤマグワ	トチノキ	ニワトコ	マツ属	カエデ属	カヤ	合計
杭	7		2 5089 5095	1 5104	1 5096	1 5090	1 5092						13
杭未製品	1 5011		3	1 5103				2 5008 5052	2 5004 5006	1 5010			10
角材											1 5091		1
構造材				2 5005 5013								1 5012	3
棒材			2 5015 5088	1 5002			1 5003						4
加工木	1 5099												1

先端部を尖らせたものを杭とし、尖らせ方が完全でないものを未製品とした。構造材とはホゾ状の組み合わせ加工部分があるもので、加工木とは何らかの形で人為的な切断痕などが見られるものである。使用材は上記のように、大きく杭類（アカマツ5007,09,97,5100,05,06,07とアカガシ5093,98,5101中心）とその他に分けられる。

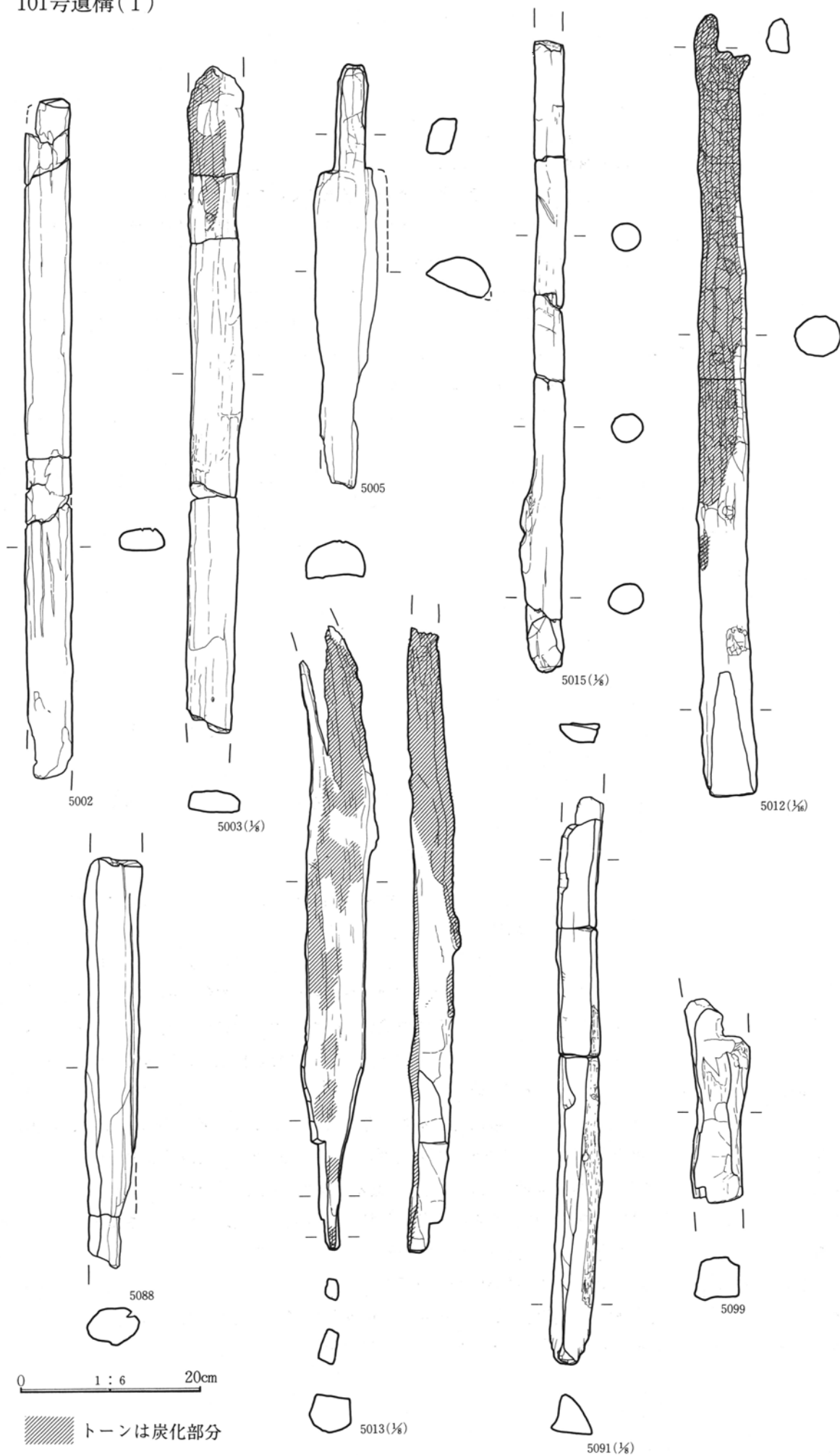
【構造】全体としては、上流側（図下側）に底辺を持ち、下流側（図上側）に頂点を持つ長い三角形（約3×8m）に加工材が集中して現れた。出土状態より上流と下流の各部分に分かれる。

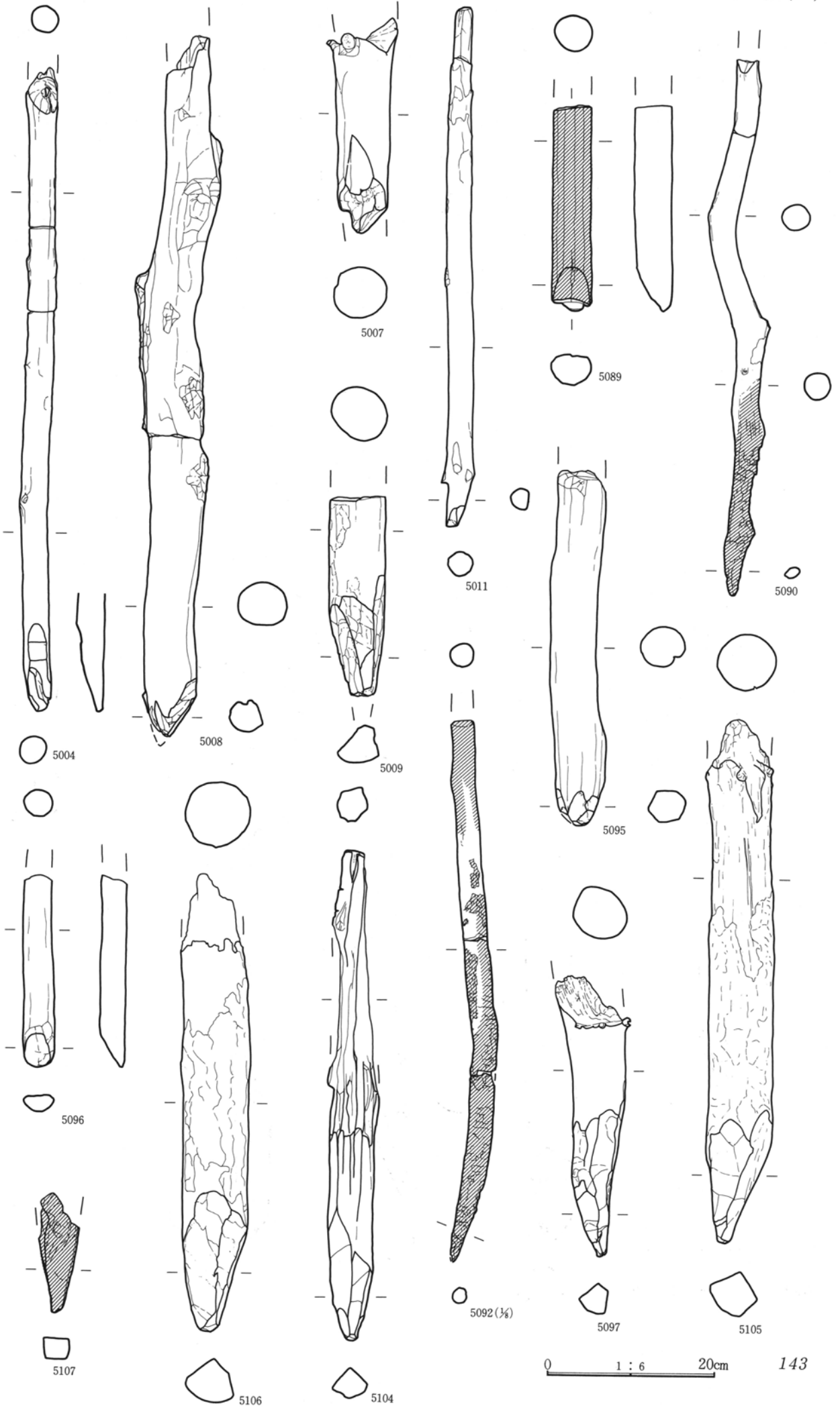
上流部分では、カヤ材（5012長228cm）のような長い構造材4本を、流路に直交する方向で40cmほどの間隔で検出した。そしてそれらを支えていた杭（5011は長61cm）が構造材1本に対し10本程度の割合で、上流から下流方向に倒れた状態で出ている。それらの杭と同一方法で検出されたものの中には、明らかに杭ではない構造材（5013クリ長91cm以上）や角材（5091カエデ長83cm以上）も少し見られた。杭類は、構造材の両脇だけでなく、右岸岸部分まで7mほど列を持って延びている。

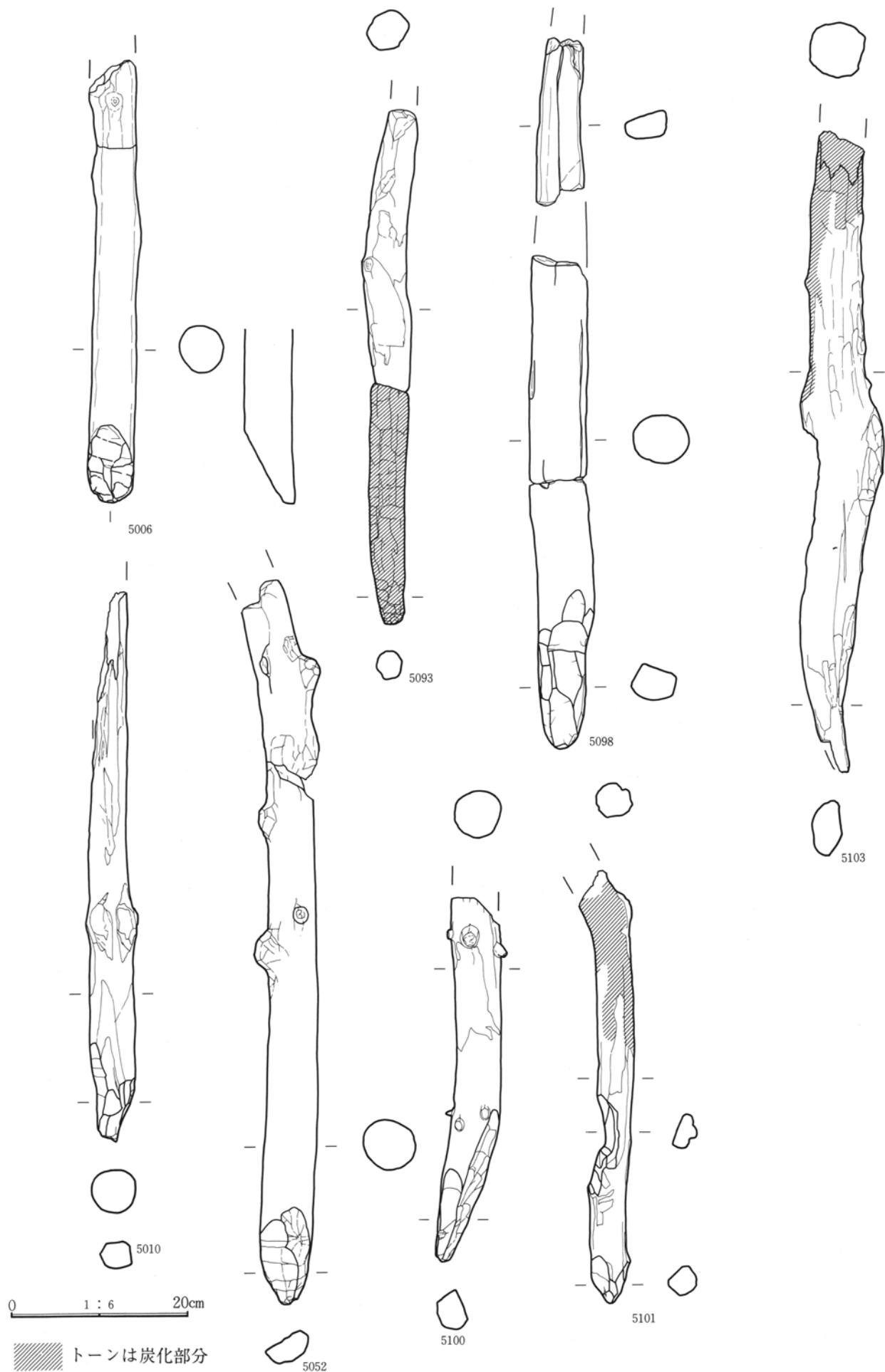
一方、下流部分では、上流部分とは2m以上離れて2本の流路に直交する棒材（5003ヤマグワ長98cm以上）が見られた。それぞれ上流の場合と似た状態で杭類が重なる他に、棒材（5002クリ長74cm以上・5015アカガシ92cm以上）も出ている。この下流部分の北西側では、自然の流木が多数、流路に平行して見られた。

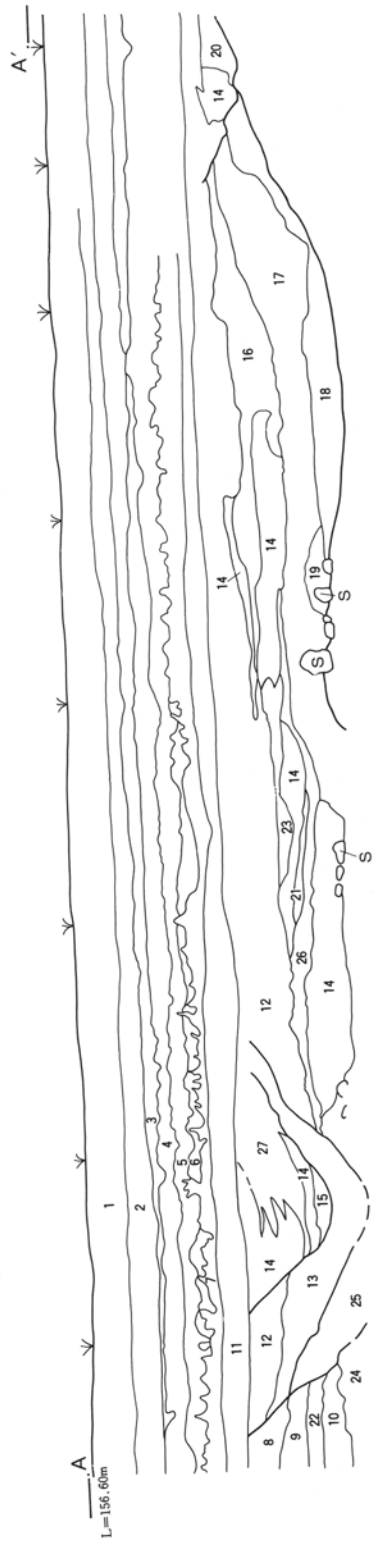
杭類の打ち込みは、断面で明らかのように、2層の灰黄褐色粘土層（上面は現地表から深さ1m以上）中からである。なお、北西側には本遺構以前に流された長い自然木が残っている。

【備考】上流部分は、流路に直交する4本の長い構造材（長2m以上）を杭で支え、それらの間をやや短めな棒材（長約1m）を渡した状態で、下流では似たものを2カ所間隔を開けて設置している。直接時期を示す遺物は出土していないが、A区の遺物の状態より弥生時代と推定する。









- 杭状木瘤
- 角杭
- ▲ その他木器
- 土器
- △ 石器・黒曜石
- ▨ 断面杭痕



A区出土遺物 【図p.145,146,148~156 PL.112~116】

【概要】低地部調査範囲の最北端で、既述のように最初に試掘で木器を検出した。南西端部分には、ヤナ状の101号遺構及びそれに続く杭列があり、その他にも北東側の右岸部分に短い杭列が見られる。全体に木類の残存が多い。

【土層】1鈍い黄褐 2黒褐粘性弱鉄分多黄褐粒混 3不明 4黒褐粘質粘性強鉄分黄褐粒少含 5浅間B軽石起伏多西側良好 6黒粘質起伏多7似 7褐灰粘質粘性固鉄分黒粒少含 8暗褐粘性固鉄分小砂礫少含 9褐灰粘性固黄褐少含 10褐灰粘質暗緑灰粒少含 11暗褐粘質粘性固黄橙粒鉄分混 12黒褐シルト砂木片多含 13黒褐粘質ノロ状砂木片多含 14明黄褐砂 15黒褐シルト木片種実多含 16灰黄褐粘質砂木片多含 17黒褐粘質上面ノロ状砂木片鉄分含下面礫 18黒褐粘質砂礫鉄分含 19砂礫 20暗褐粘質砂木片多含 21黒褐粘質砂木片含 22黒褐粘質鉄分黄褐粒少含 23黒褐粘質ノロ状堆積砂木片多含 24暗緑灰粘質砂礫混 25大砂礫 26黒褐粘質ノロ状堆積砂木片多含 27黒褐シルト木片種実砂多含

この部分を主として浅間B軽石堆積以前に少なくとも3回の流路変化があり、いづれも木器類を伴っている。

【土器類】中世瓦質土器コネ鉢片(0639)・古代須恵器瓶(0654)・古墳時代土師器甕(0615)・同壺(0626)・弥生後期壺類(0611,12,13,16,18,20,22)・同甕(0621)・中期甕(0719)・縄文鉢類(0627,42,47,53)・同管状土製品(0649)が見られた。

以上の中で、須恵器瓶類0654は試掘上層、縄文鉢0653は最下面出土である。また、101号の部分内で検出したものは、土師器甕0615・弥生土器0611,20・縄文土器0627となる。

【その他】石斧類では、削器(硬質泥岩2183)・打製石斧(硬質泥岩2177,78,80~82)・磨り石(棒状=緑色片岩2179)、石鏃類ではピエスエスキュー(黒曜石3097)・加工痕ある剝片(珪質頁岩3262)、熙寧元宝(4009)が出土した。

他に槍先形尖頭器(黒曜石9999『天引狐崎遺跡I』p.45で報告済み)が北東側底より出土した。黒曜石ピエスエスキューの黒曜石分析成果は、9,200BPである(第V章参照)。なお、101号の近傍で出土したのは、削器(硬質泥岩2183)である。

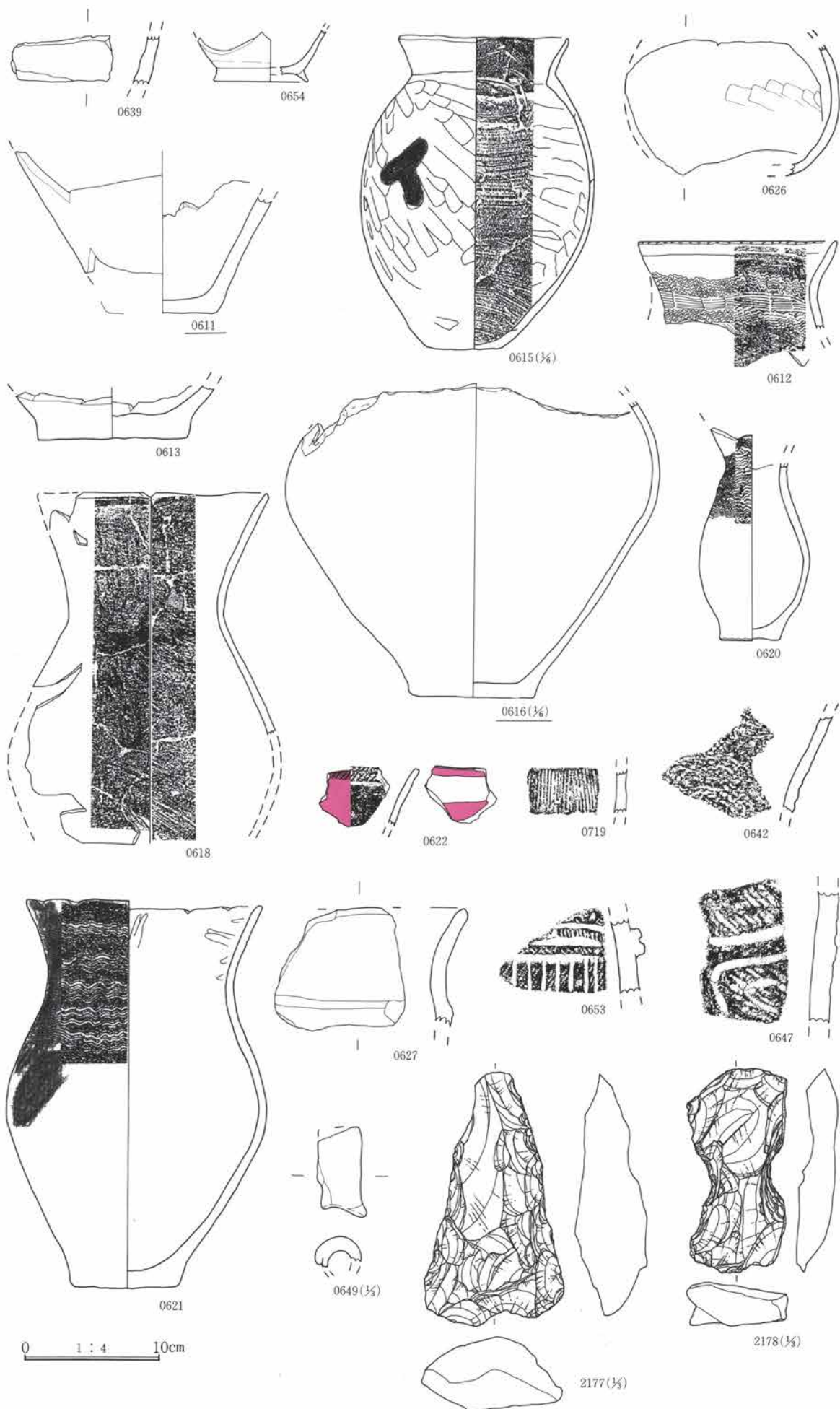
【木器類】杭(アカガシ亜属5033,5109 アカマツ5001,58,150,156,157,159~168,170,171,173~178 アサダ5108,139 クロモジ属5017 ケンボナシ属5130,131 サクラ属5129 マツ属5172 ヤブツバキ5016,18,34)・杭未製品(アカガシ亜属5050 アカマツ5056,57,147~149,151~153,158,169 カエデ属5046 マツ属5154)・棒材(エノキ属5049 カエデ属5051,22,26 コクサギ5102 ヤブツバキ5021)・クサビ(アオキ5014 アカガシ亜属5180)・加工木(アカマツ5155 ケヤキ5076,110,128 ムクロジ5094)が出ている。

杭とその未製品は、圧倒的にアカマツ産のものが多い。加工木としたものも、自然の枝の先端を杭状に加工しており、杭の中にも含めることができる。また棒材としたものの中には、杭の先端が欠けた可能性のあるものも含まれる。それらを併せると、60本弱の杭をここで発見したことになる。

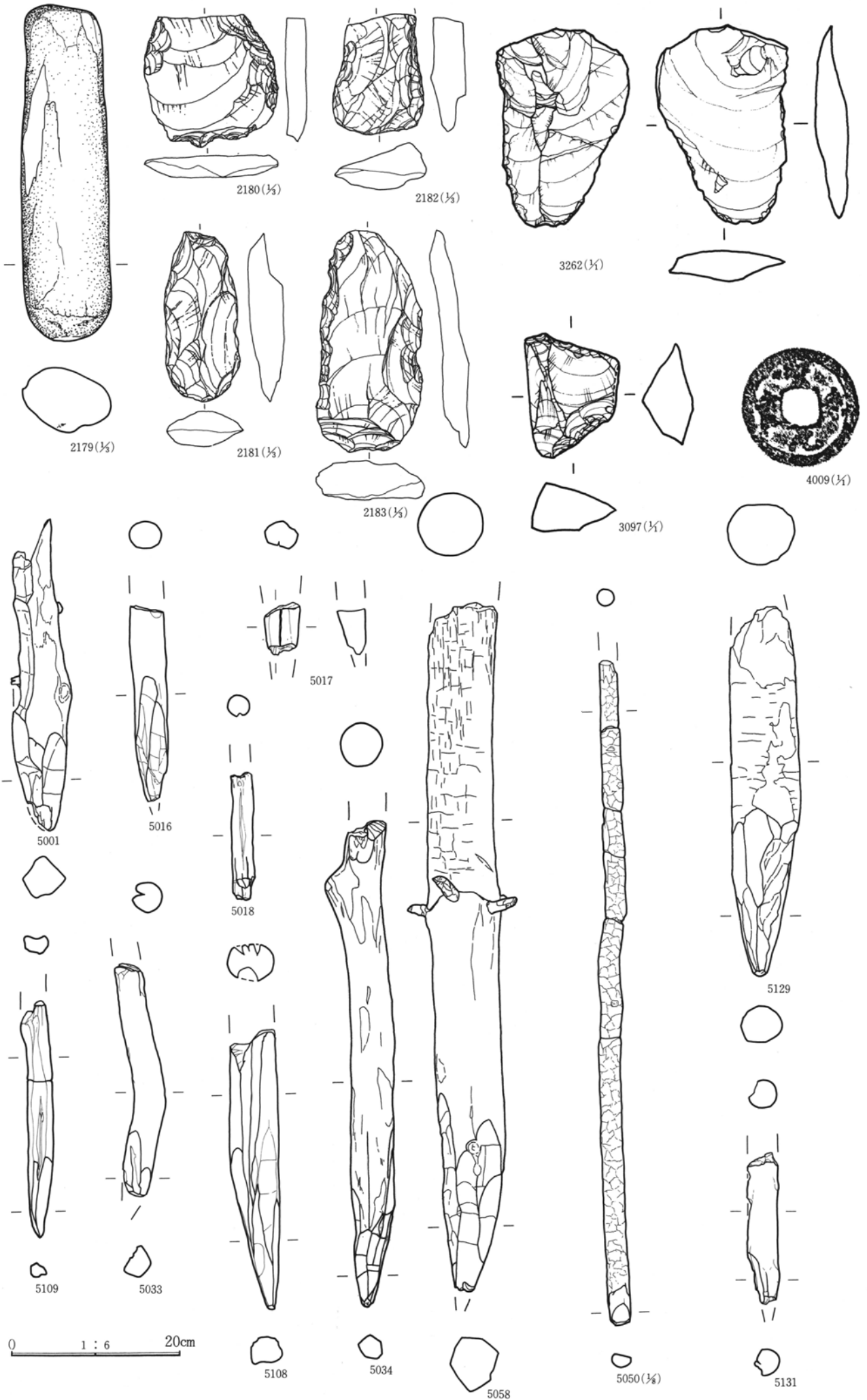
他に自然木としては杭状木瘤(アカガシ亜属5070 アカマツ5060 カエデ属5125 モミ属5019,20,22~32,36~45,47,48,53~55,59,61~69,71~75,77~87,5111~21,23,24,27,32~38,40~46,79)が多数見られた。

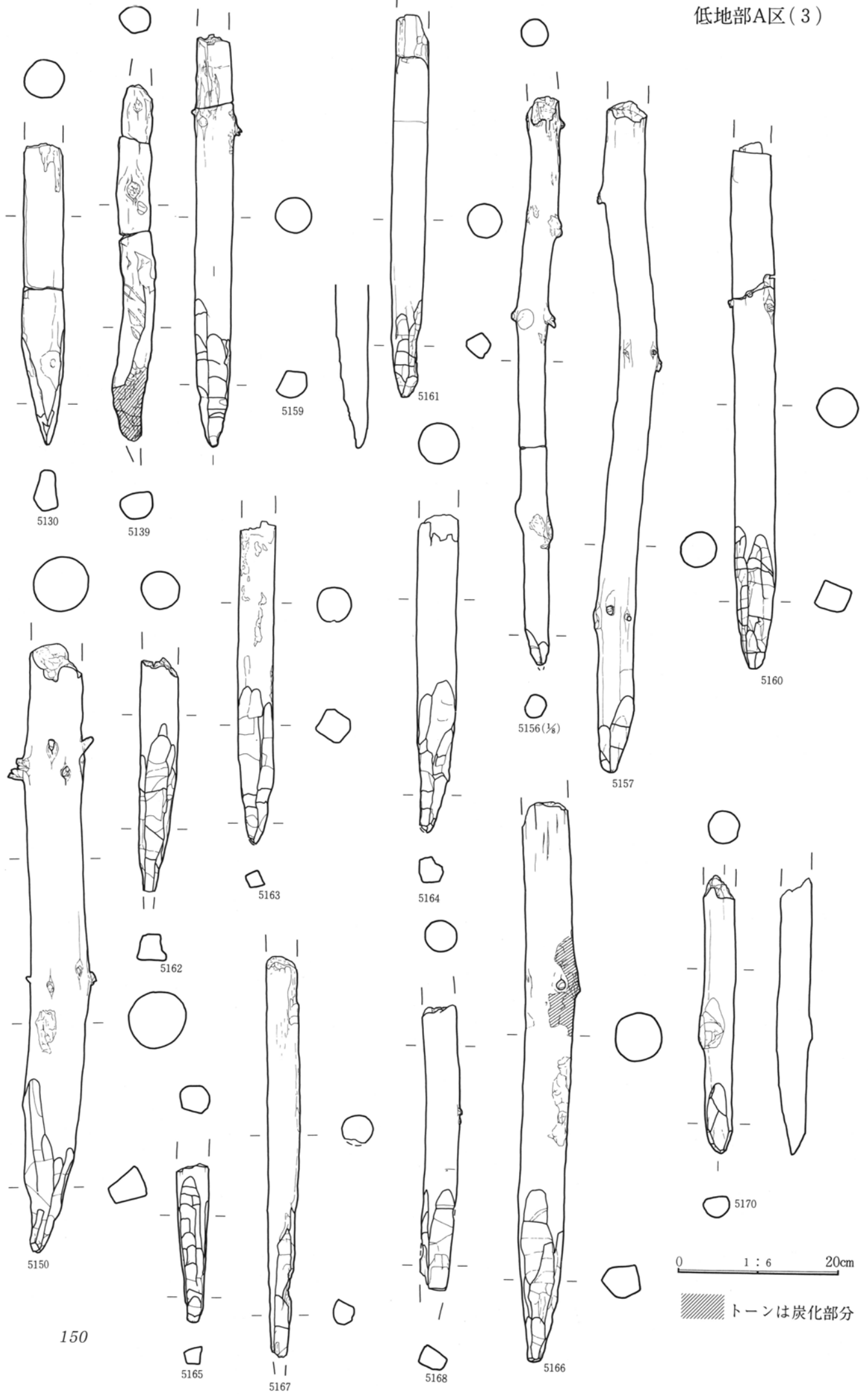
【備考】自然木の出土傾向を見ると、明らかに南西から北東へ向かうものと、南東から北西へ向かうものの二つの流路が確認できる。断面から明らかのように101号の続きである前者の流路は、後者より新しい。土器類の出土状況からは、前者は弥生・古墳時代のものである可能性があり、断面に見られるこの部分での2時期の流路は、その中での変化だろう。

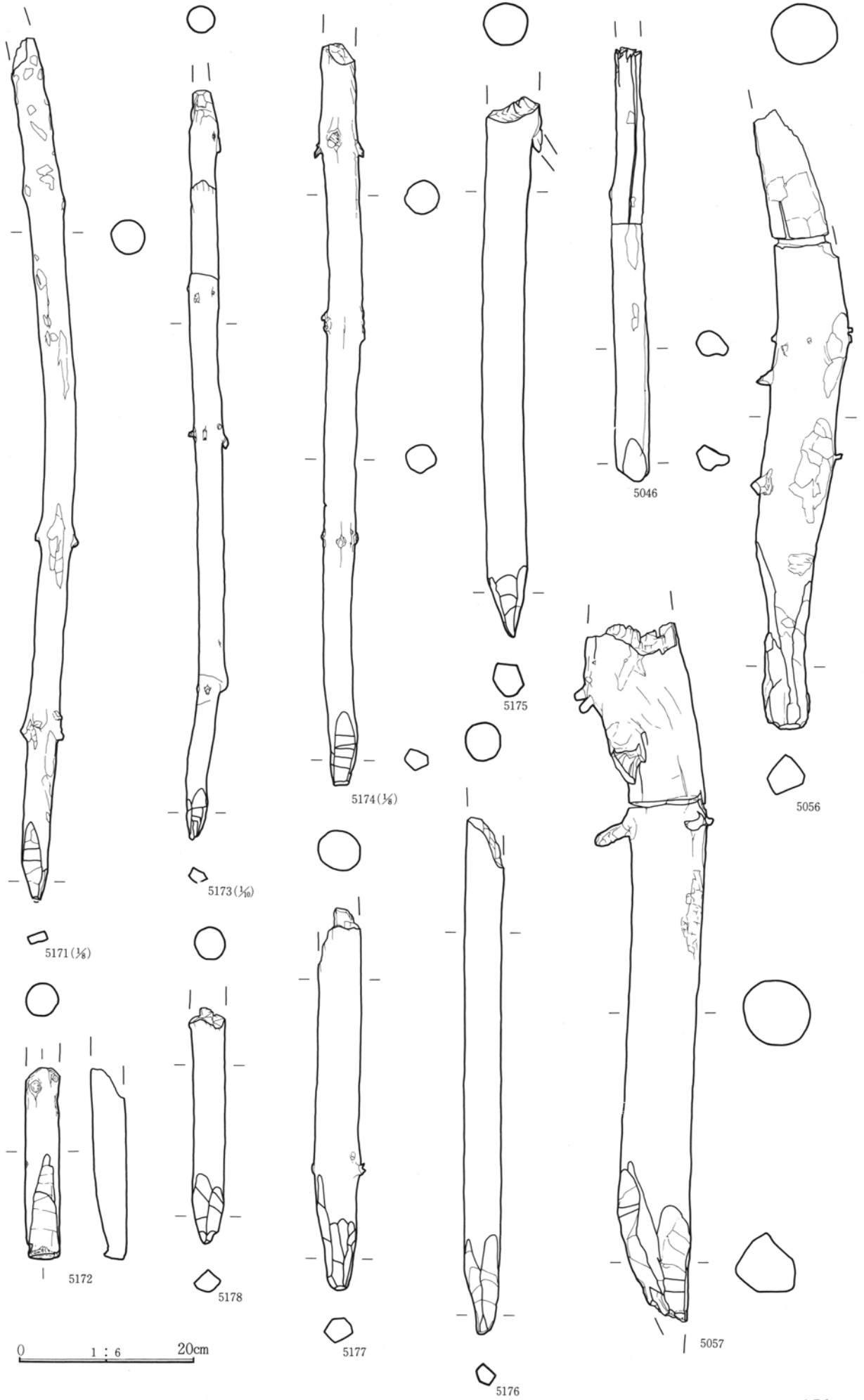
以上のように本地区では、杭を主体とする木器が多く出土したが、全体の傾向では、その大部分は南西側の101号に続いて、流路を横断していた杭列である。



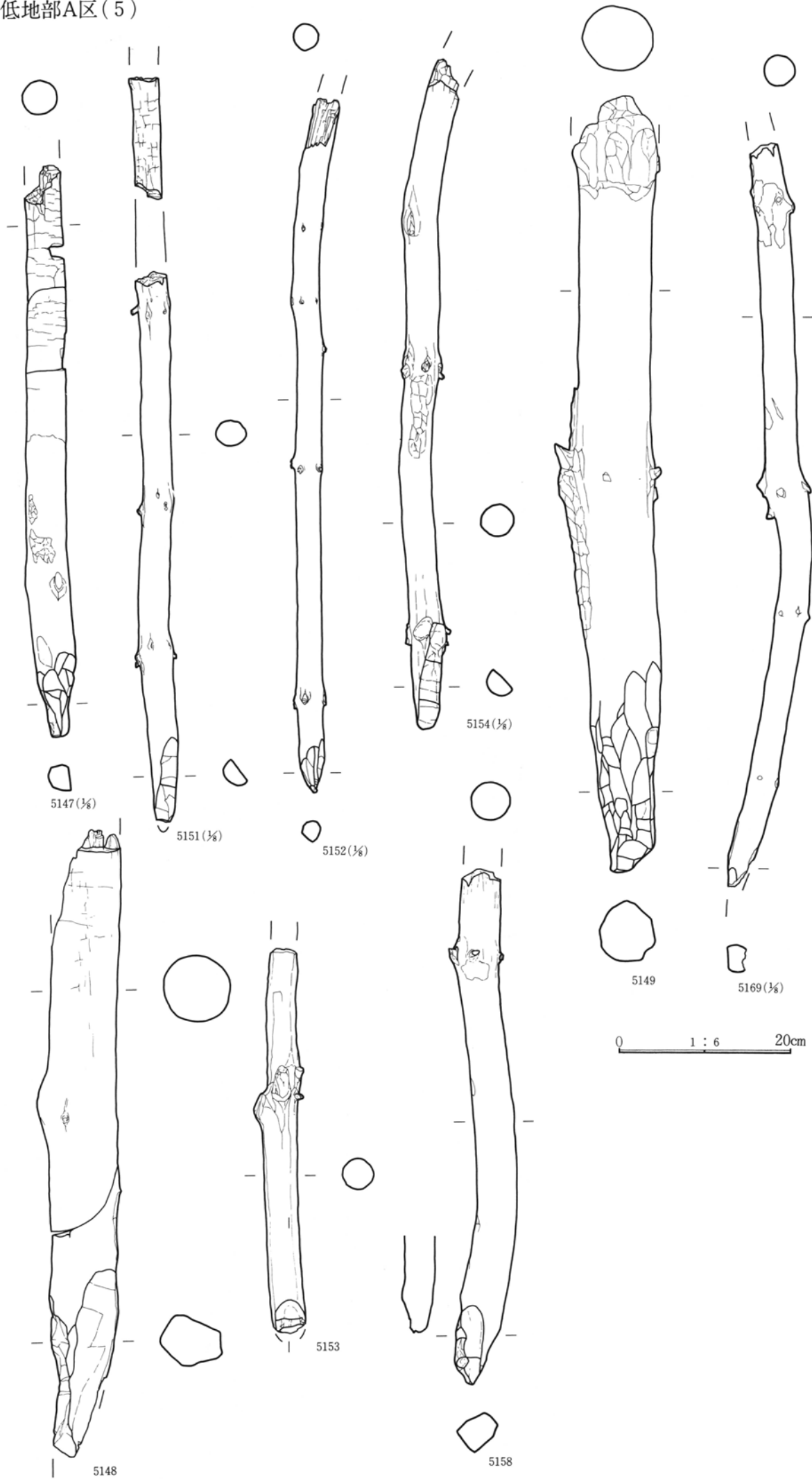
低地部A区(2)

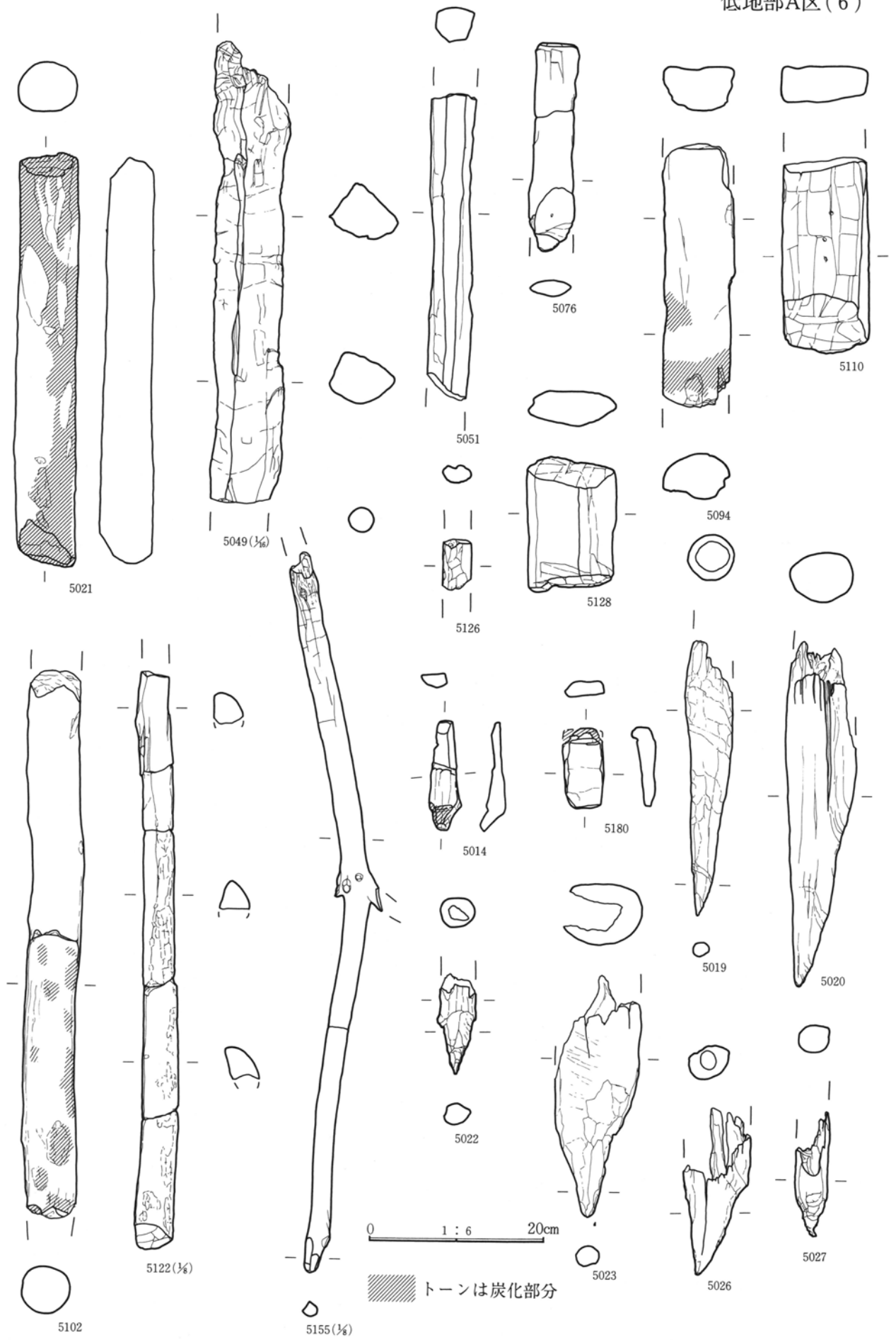




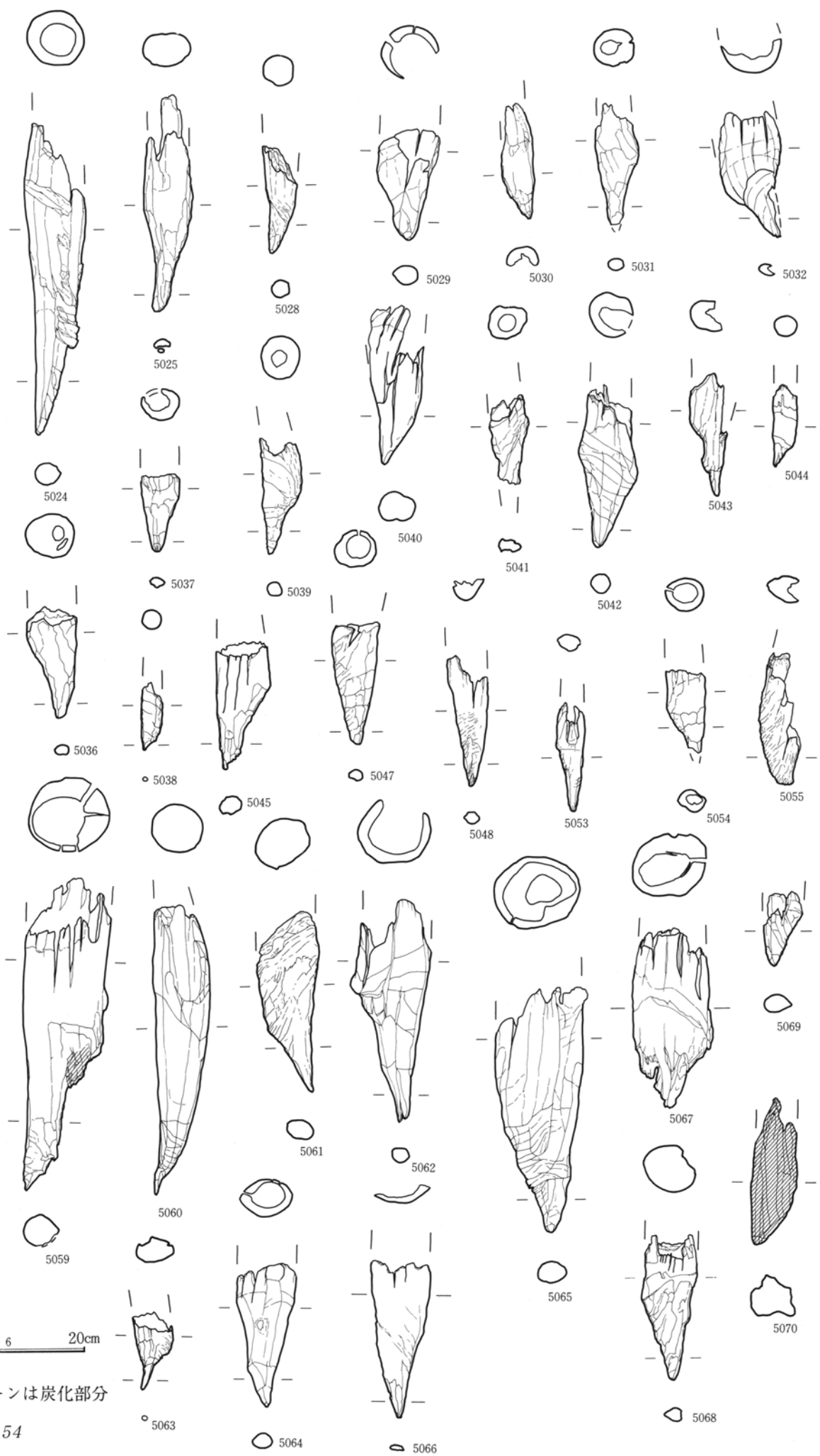


低地部A区(5)



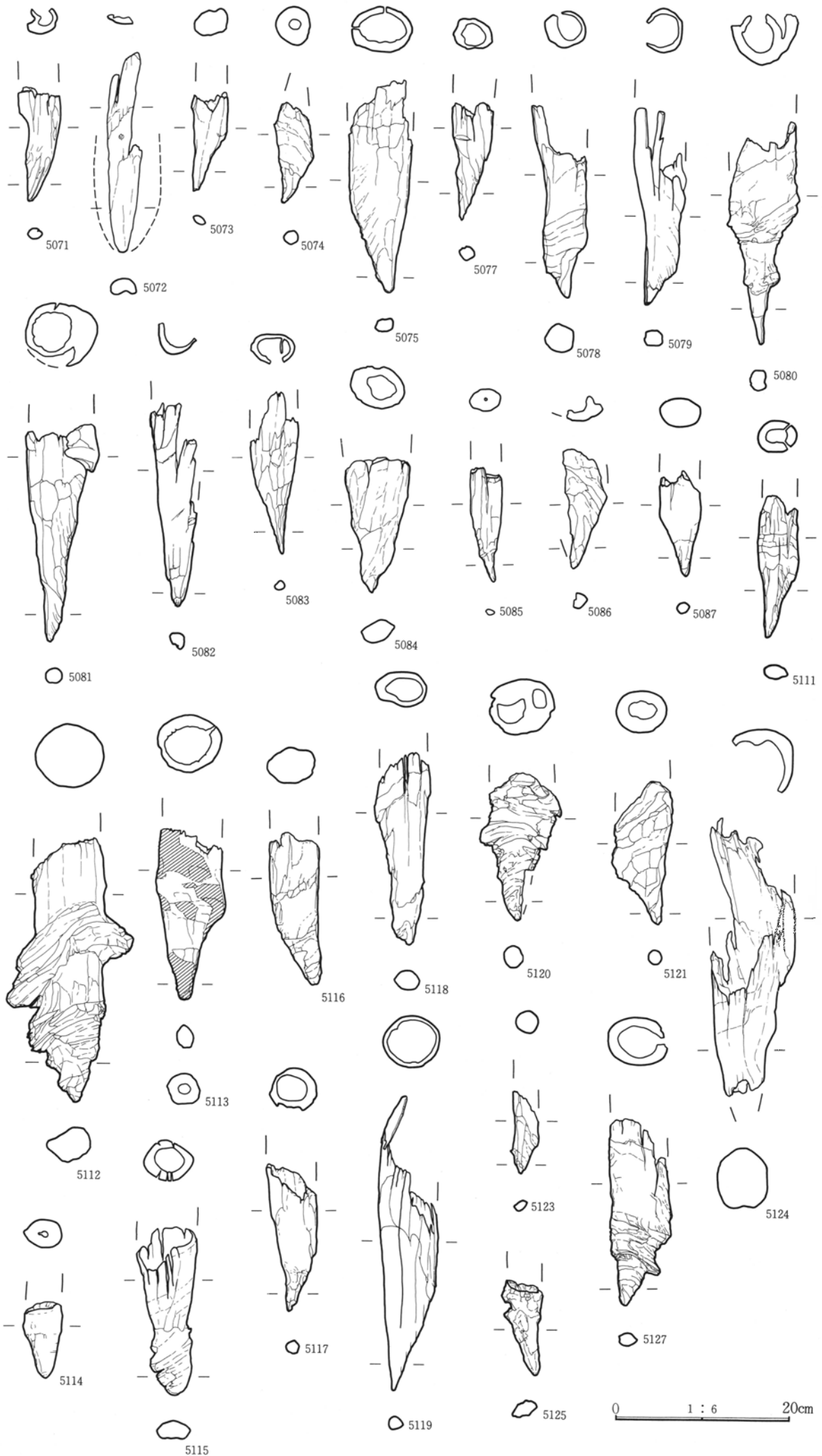


低地部A区(7)

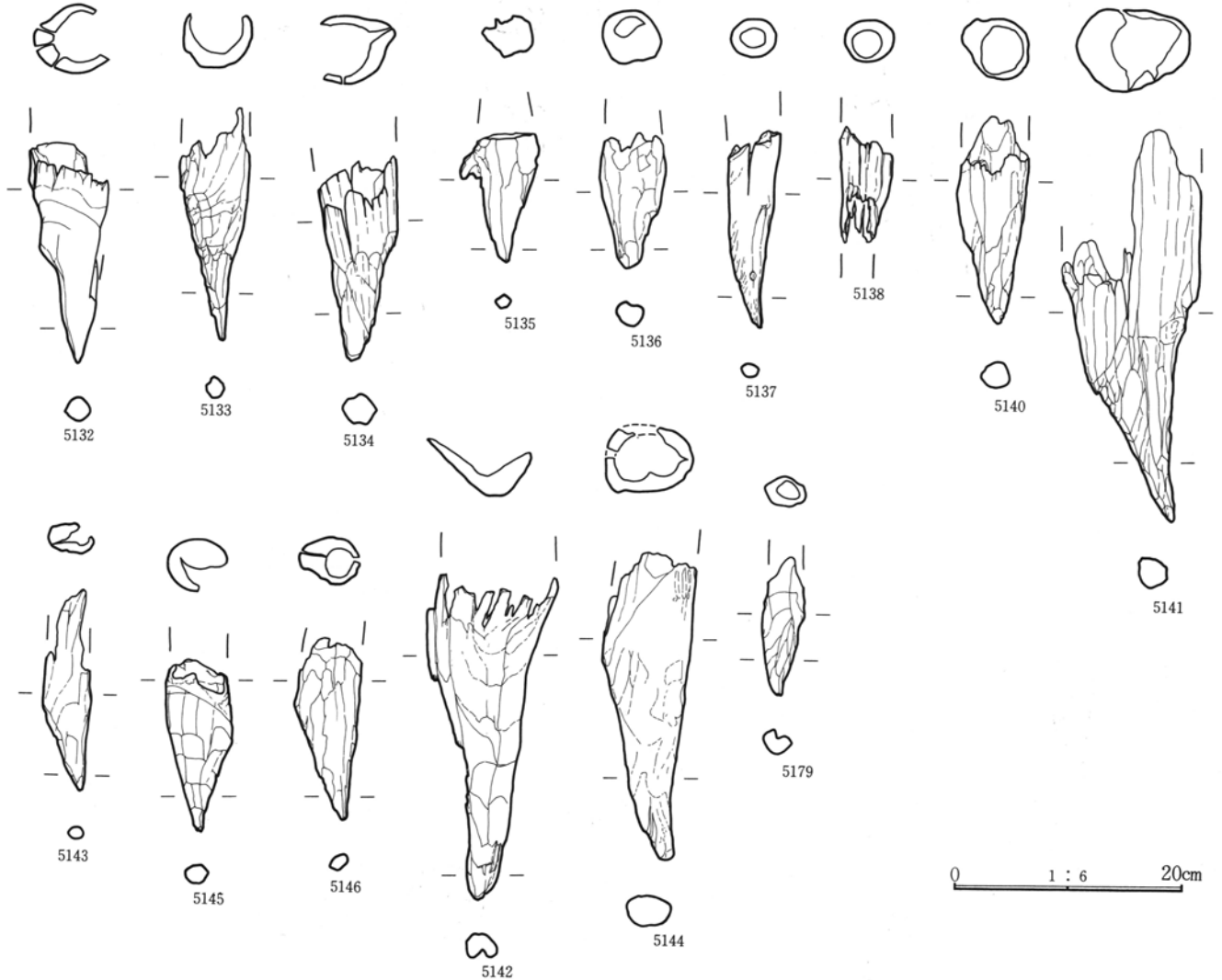


0 1 : 6 20cm

トーンは炭化部分



低地部A区(9)



B区出土遺物 【図p.157~160 PL.117~119】

【概要】 A区から三途川の現流路をはさんだ南側。101号の延長は検出できなかった。

【土層】 1黄褐粒子粗締強灰粘土ローム粒痕小礫中多含 2黒褐締強ローム粒小礫鉄分含 3暗灰黄粘土締強砂鉄分含 4灰オリーブ砂大小礫混 5黒褐シルト木質礫含 6黄褐粒子粗木質砂多含 7黒褐粘質締強木片多含 8褐灰粘質締弱木腐植土多含 9黄灰粘土木片多含 10黒褐シルト砂粒木質多含 11灰オリーブ粘土礫砂多含 12鈍い黄橙シルト小礫粘土含 13黒褐粘質木質粘土礫大多含 14緑灰粘土礫中木片多含 15暗オリーブ灰粘土小礫中多含 16緑灰粘土粒子細木片多含 17オリーブ灰粘土小礫中多木片小含 18灰粘土礫大木片多含 19黒褐粘土粘性弱礫大多含 20灰オリーブ粘土 21黄灰締無礫大砂粒中少含 22黒褐粘質木質多亜炭状 23暗褐粘土粘性固木質混 24黒褐粘質木質多亜炭状 25灰シルト粒子粗粘性弱 26黄灰砂礫大木片少含 27黄灰砂締無礫大木片混

少なくともそれぞれ木片を含む2回の流路が確認できる。

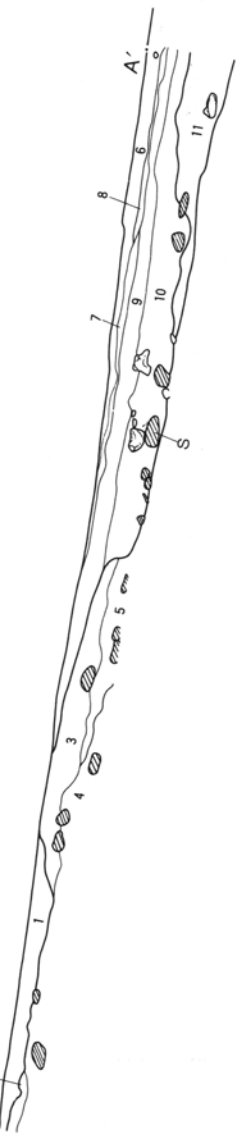
【土器類】 古代土師器鉄鉢(0625)・古墳時代土師器碗坏(0624,28)・同甕類(0619,31)・縄文鉢類(0614,29,43,44,46,50)が見られた。古墳時代土師器は、上層流路よりさらに上で検出した。

【その他】 上層流路以上で打製石斧(硬質泥岩2198,99)・削器(硬質泥岩2196,97)を検出し、下層流路相当で打製石斧(硬質泥岩2184,86 変輝緑岩2185)が出土した。

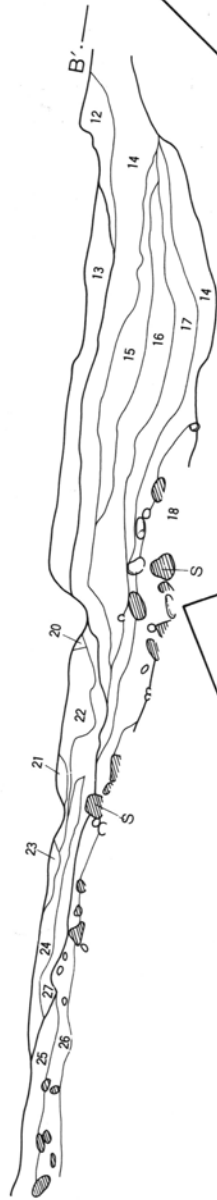
【木器類】 木器は杭(アカガシ亜属5228)と棒材(エノキ属5220 カエデ属5227 ケヤキ5199)が少量見られただけである。ケヤキ棒材は太く(径16cm)、杭の一部ではない。モミ属の杭状木瘤(5181~98,5200~19,21~26)は多い。

【備考】 本地区は、A区に隣接するにもかかわらず、木器類の出土が極端に少なくなった。ここでの2回の流路変遷が、A区の変遷とどのように関係するかは判然とはしない。ただし、ここで弥生土器の出土がほとんど見られないことは興味深い。

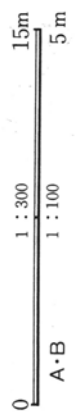
L=155.10m

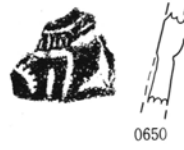
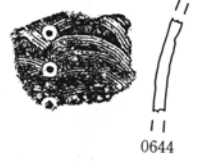
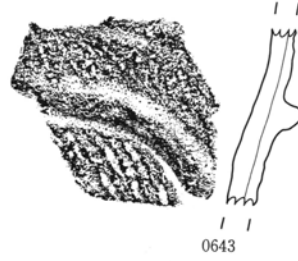
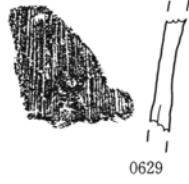
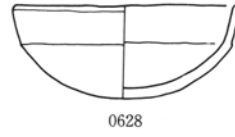
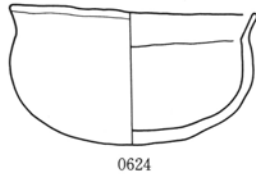
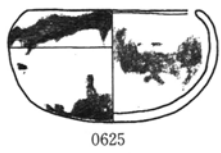


L=156.30m

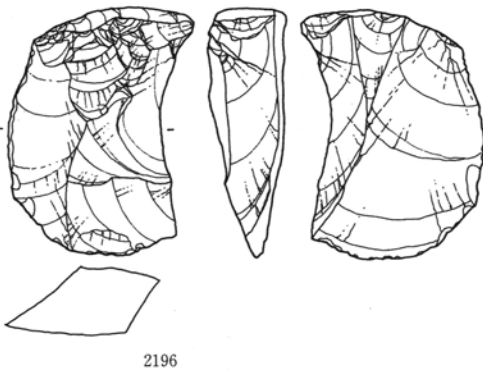
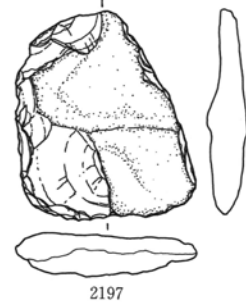
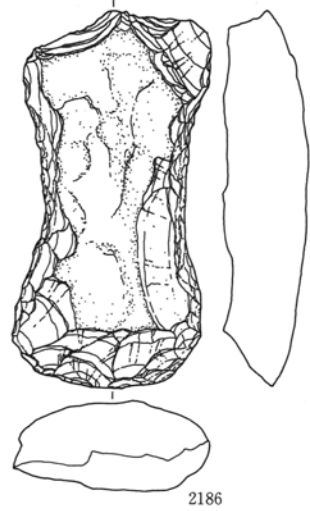
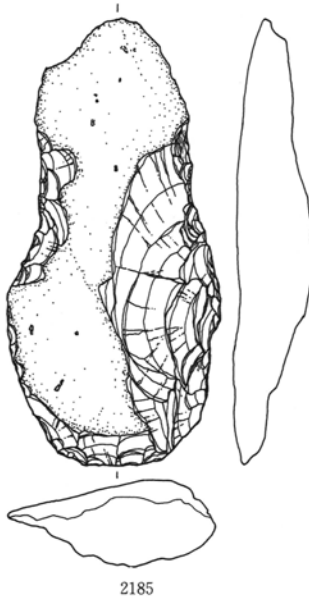
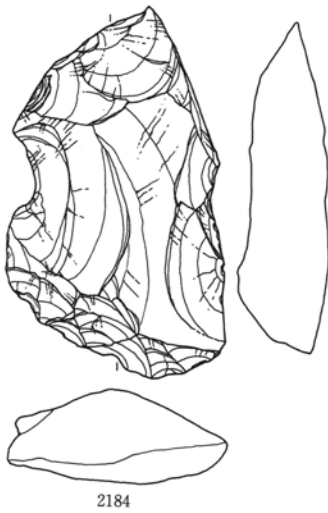
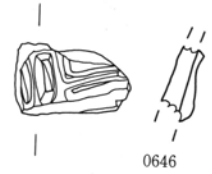


- 杭状木瘤
- 角杭
- ▲ その他木器
- 土器
- △ 石器・黒曜石

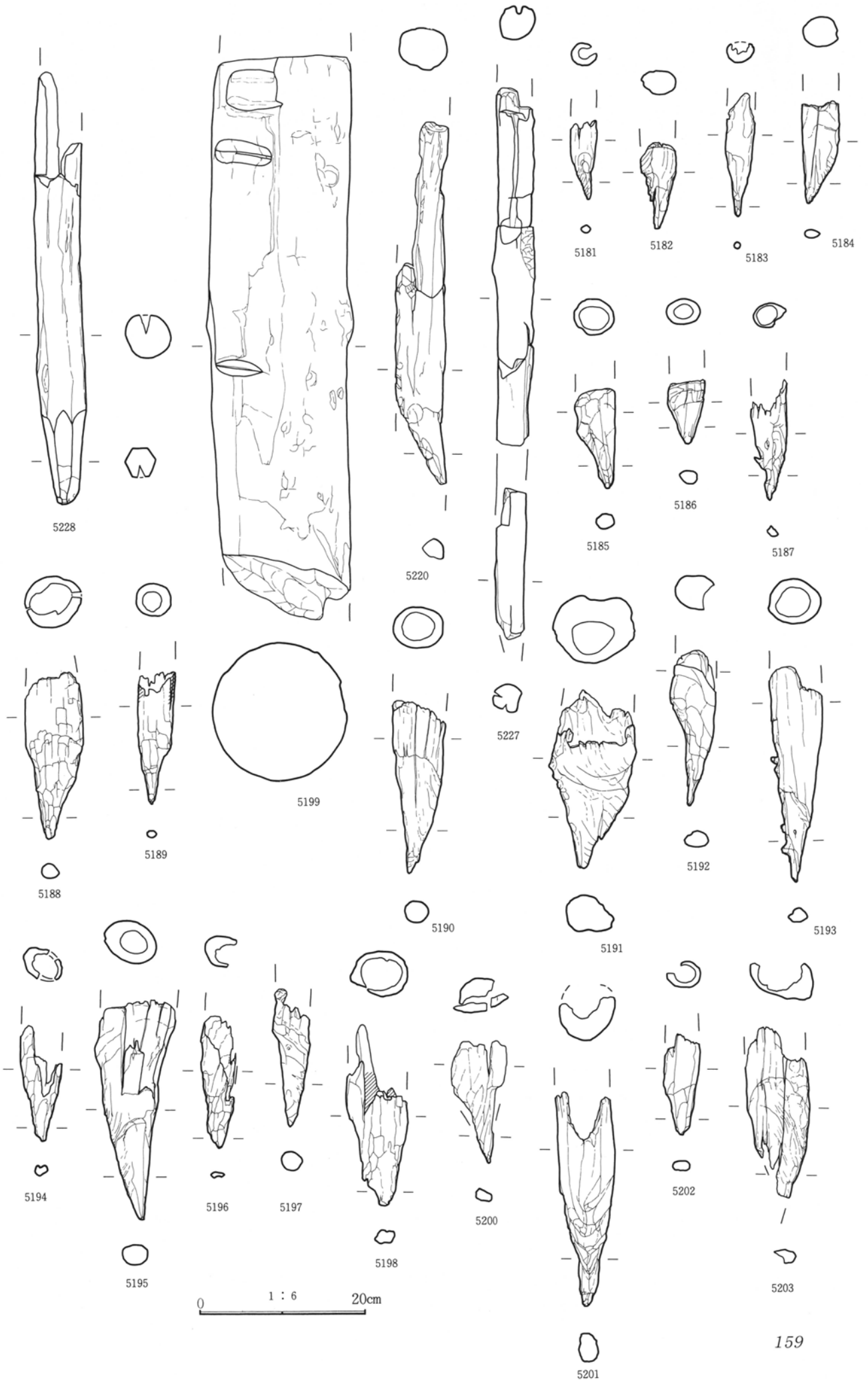


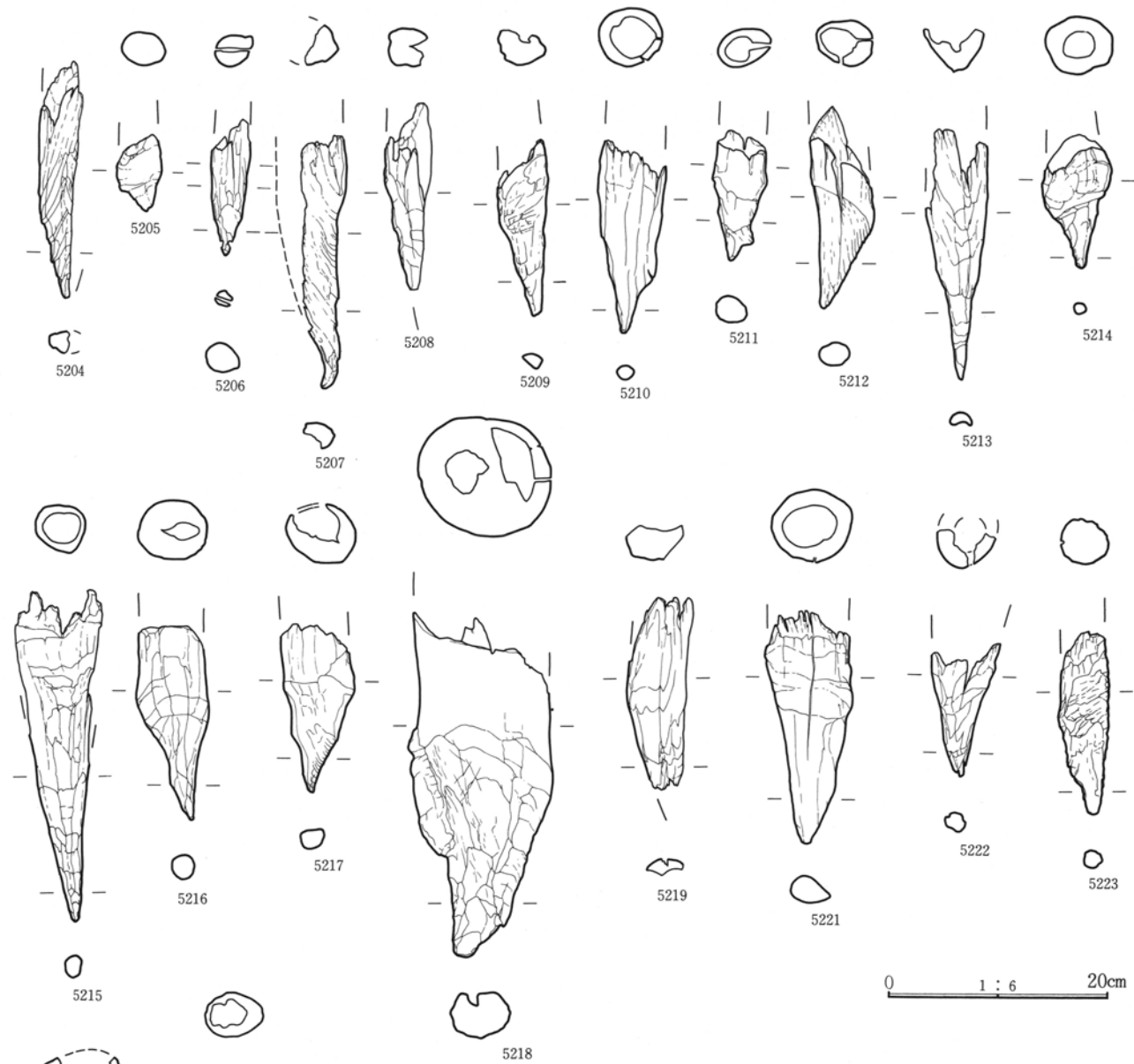


0 1 : 4 10cm



0 1 : 3 10cm





C 1 区出土遺物 【図p.161,162 PL.120】

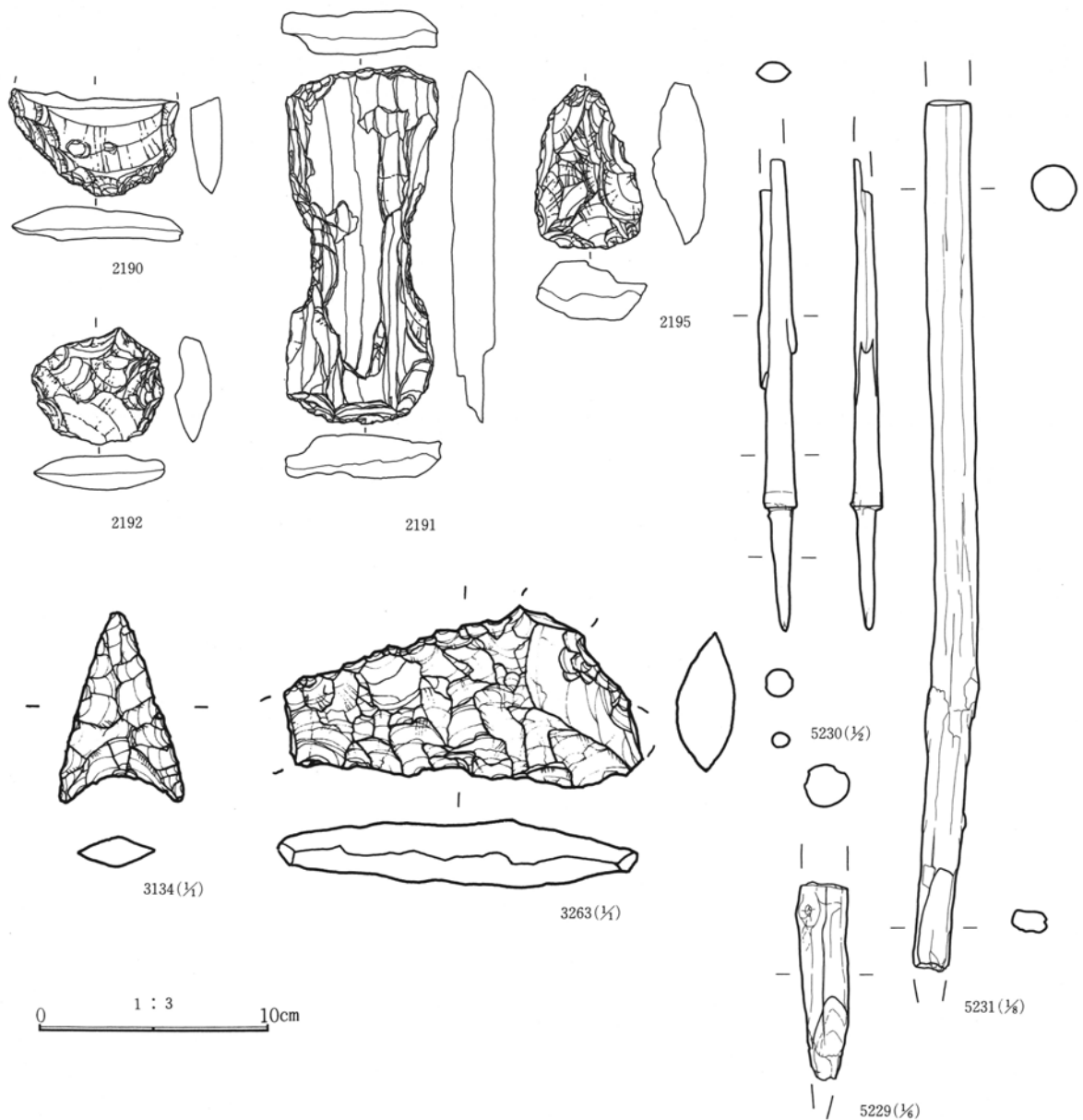
【概要】右岸側最南端の調査区で、B区からは80m離れる。北東端で木製ヤスが出土したため、さらに範囲を外側に拡張した。

【土層】1鈍い黄褐粘質 2褐粘質 3暗褐粘質浅間B軽石小混 4黒褐粘質 5黒褐砂質B軽石多含 6黄灰粘土シルト粒混 7灰黄褐粘土B軽石凝集合 8黒砂質B軽石小含透水 9灰黄褐軽石 10黒粘土 11黄灰粘質C軽石シルト混 12暗オリーブ褐シルト 13黄灰粘土シルト粒多含 14黒褐粘質C軽石小全体含 15鈍い黄橙粘質二次堆積ローム 16褐粘質鉄分凝集 17鈍い黄橙粘質灰白軽石小多含 18鈍い黄褐砂質灰白軽石小混 19黒粘土 20黒褐砂質軽石小混 21黒粘土 22黒褐砂質 23黒粘土 24暗褐粒子粗 25褐シルト鉄分凝集 26灰褐粘質B軽石小混 27黄灰粘質炭化木小混 28黒褐粘質木片多含 29暗灰黄砂木片多含 30黒褐粘質木片多含 31オリーブ黒礫中含ヤス石鏝出土 32黒粘土 33黒褐砂質C軽石多含 34黒粘土 35暗褐粘質 36鈍い黄橙粘質ローム二次堆積 37明黄褐粘質ローム二次堆積 38黄褐砂質鉄砂凝集 39鈍い黄橙粘質ローム二次堆積 40黒褐粘土 41鈍い黄橙砂質 42黒褐粘土 43黒粘土 44黒褐粘土C軽石含 45黒粘土 46黒褐砂質C軽石小含 47黒褐粘質C軽石小混 48灰黄褐粘質C軽石中多含 49黒粘質C軽石中混 50黒褐砂質C軽石凝集 51オリーブ灰粘土小礫混 52緑灰粘土礫大少含

【石器類】打製石斧(硬質泥岩2190,92,95 雲母石英片岩2191)、石匙(チャート3263)・打製石鏝(赤色珪質岩3134)・赤色頁岩剥片を検出した。(p.162へ続く)

2 低地の遺構と遺物



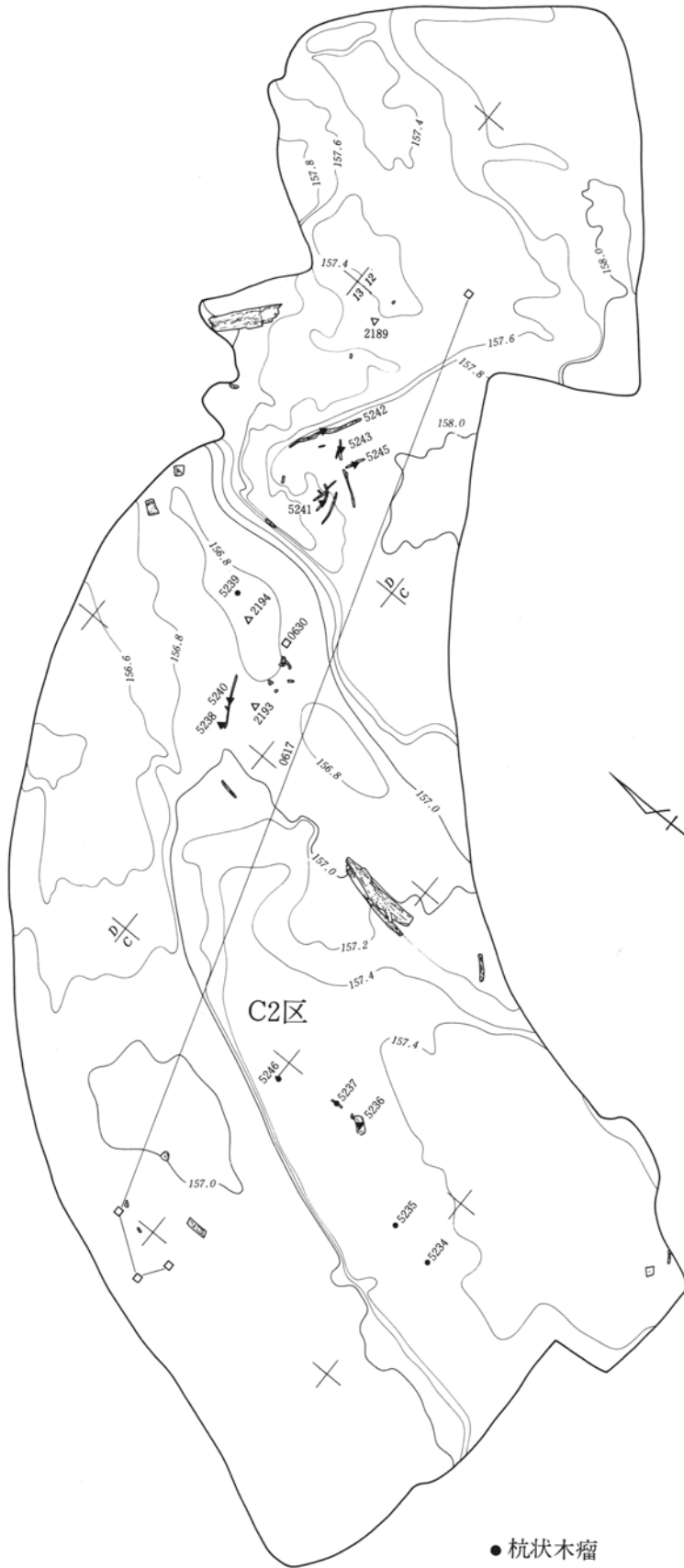


(p.160より)

【木器類】木製ヤス(モミ属5230)が北東側拡張部分境界で出土した。他に杭(コクサギ5229)と杭末製品(モミ属5231)が見られる。ヤスは着柄部と刃部が別れ、刃部両側の非対称位置に逆刺^{かぶり}があって先端部が欠けている。流木は一定程度見られた(図示せず)。

【備考】本地区では、遺物の検出量はかなり少量であったが、稀少な木製ヤスが現れた。流路は明らかに2時期あり、それぞれ浅間B軽石とC軽石が上層に堆積している。ヤスと石鏃3134が出土したのは、前者の部分の流木含有層の下(31層)の位置の礫間からだが、C軽石との上下関係はあまり明瞭ではない。ただ、C軽石層のはるか下層とすることはできないため、弥生時代と推定することはできる。

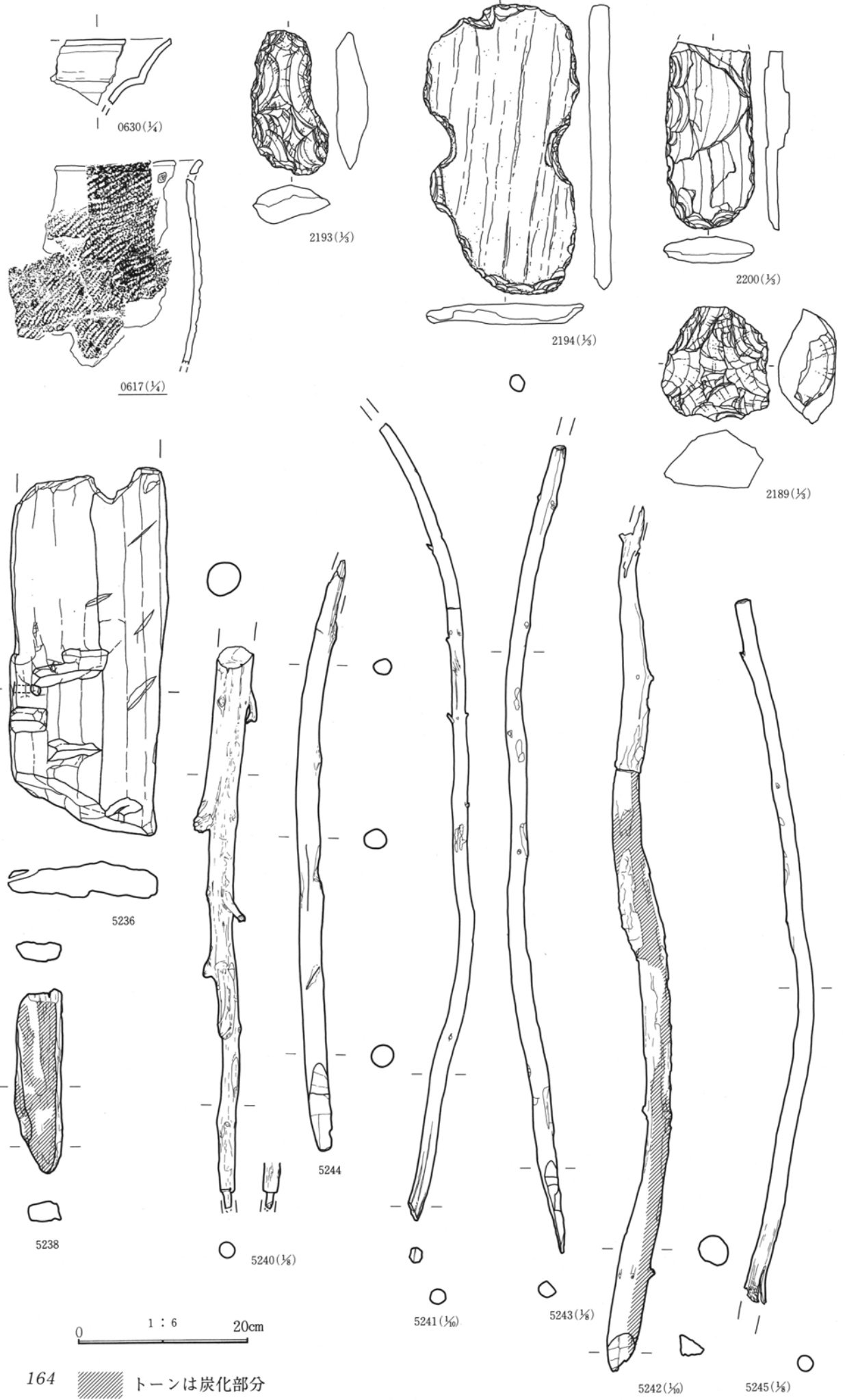
2 低地部の遺構と遺物




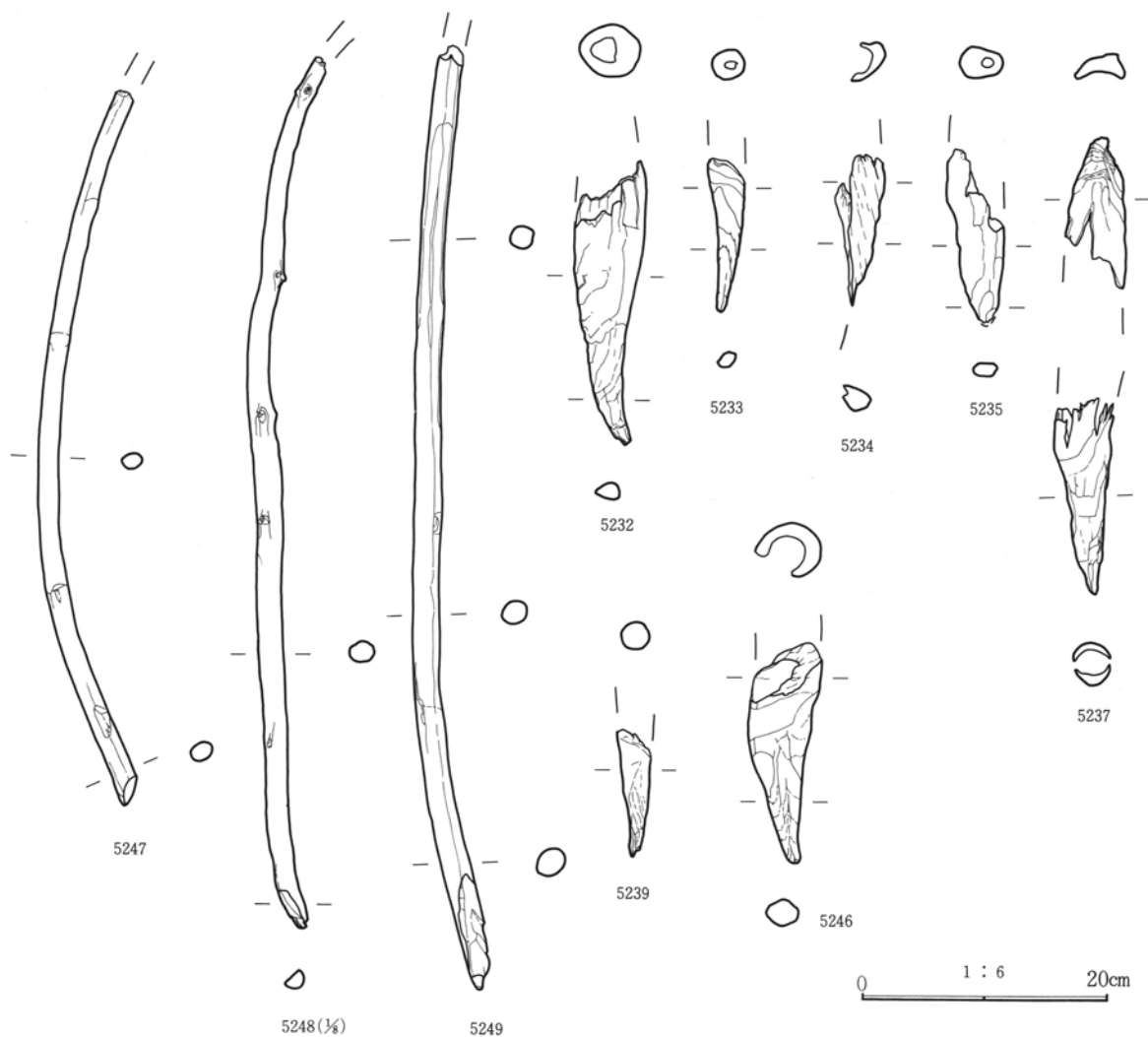
- 杭状木瘤
- ▲ その他木器
- 土器
- △ 石器・黒曜石

0 1 : 160 8 m

低地部C2区(1)



164  トーンは炭化部分



C 2 区出土遺物 【図p.163~165 PL.121,122】

【概要】 C1区の調査後、B区との中間の状況を把握するために調査を行った。

【土層】 不明。

【土器石器類】 古墳時代土師器壺(0630)と弥生中期甕(0617)が出土。後者の口縁下には円孔があり、紐状の繊維が残っていた。打製石斧(硬質泥岩2193 雲母石英片岩2194,2200)と石核(粗粒安山岩2189)も出土した。

【木器】 側面から孔が開けられた板材(アカガシ亜属5236 幅17cm)が見られた。他にカヤの自然の枝を切断した加工木(5238,5240~45,47~49)が多数出ている。自然物では、モミ属の杭状木瘤(5232~35,37,39,46)があった。

【備考】 本地区では、C1区で発見した木製ヤスと関係ある遺物を探すことを主な目的としたが、全体に遺物は希薄であった。



D区出土遺物 【図p.166~168 PL.123,124】

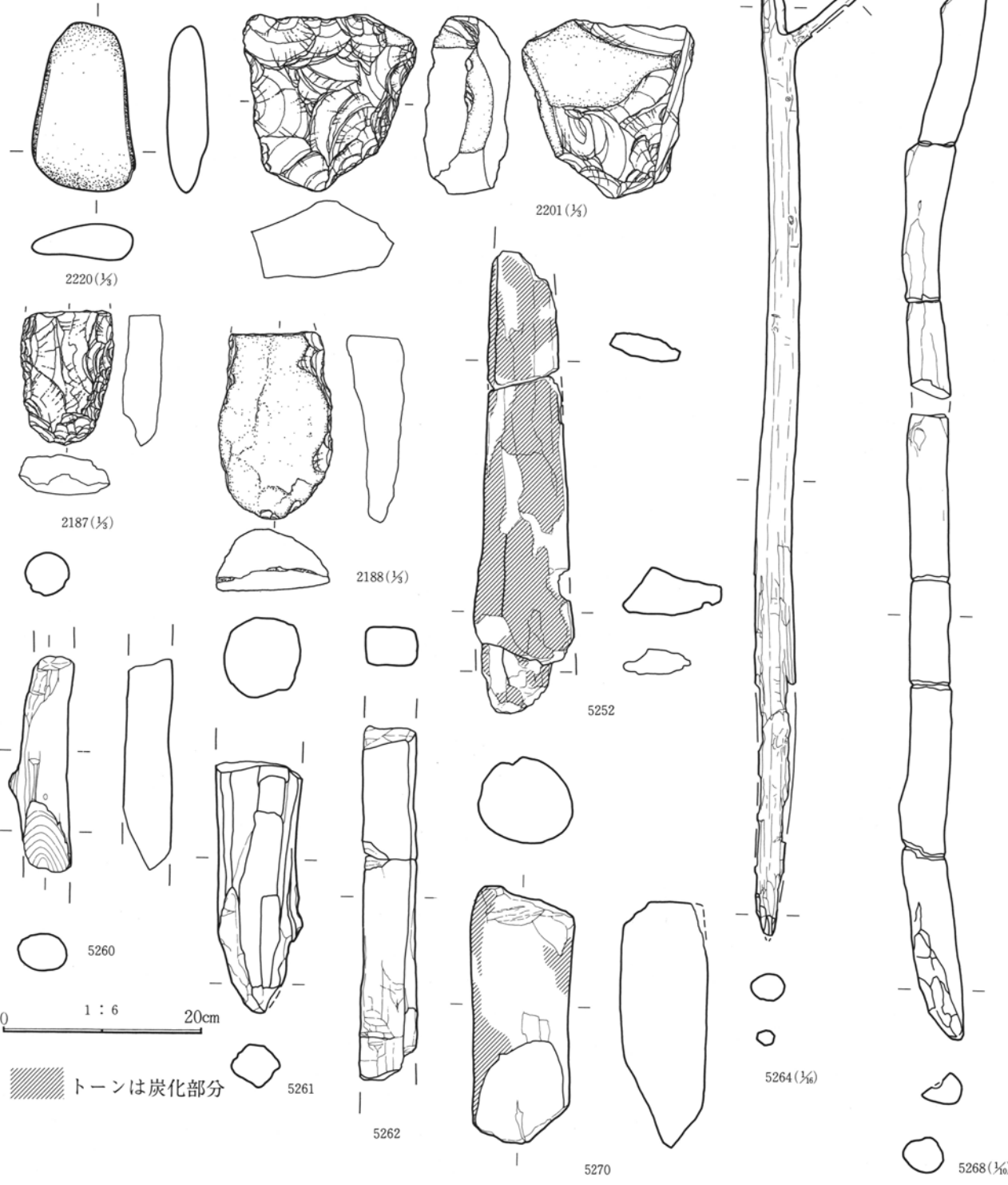
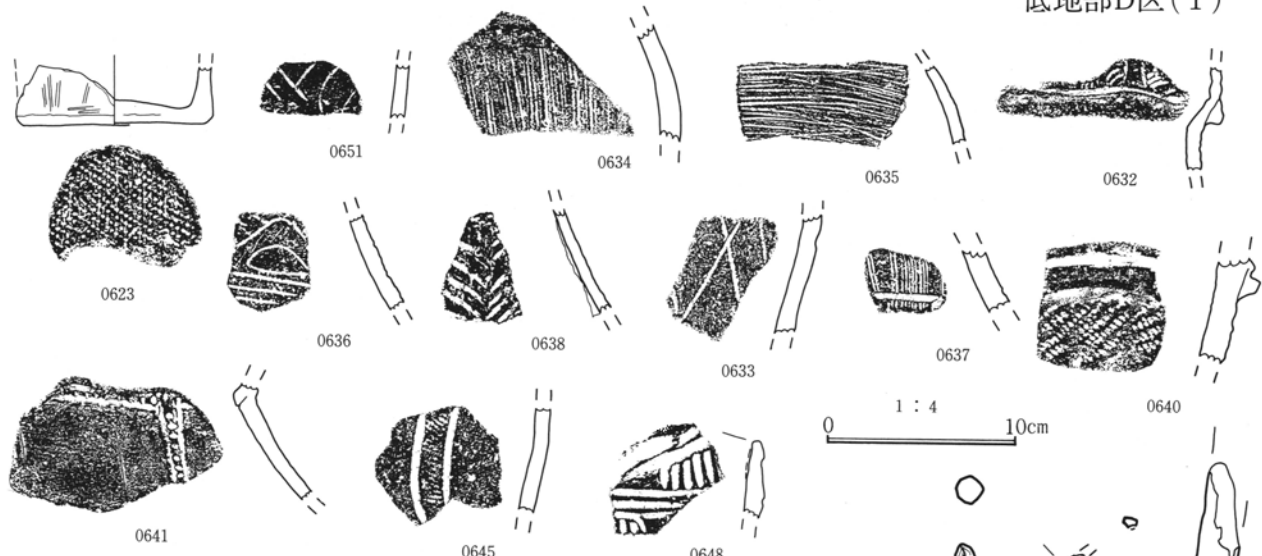
【概要】三途川左岸の最も北側の調査区。天引向原遺跡の直下の崖際である。中央で大きな倒木が出た。

【土層】1灰黄褐粘質耕作土 2鈍い黄褐粘質粘性強水田床 3灰黄褐粘質鉄分多含 4黒褐粘質粒子粗浅間B軽石小含 5黒粘土 6灰黄褐粘土 7黒褐粘質締弱木質砂粒少含 8鈍い黄褐砂質締弱種子木質粒混 9褐灰シルト締弱木質細含 10黄褐砂 11褐灰粘質締弱木質砂凝固含 12暗オリーブ灰粘土小礫中混流木多含 13暗緑灰砂礫 14黒褐粘質締弱木質分解土 15暗オリーブ灰砂礫

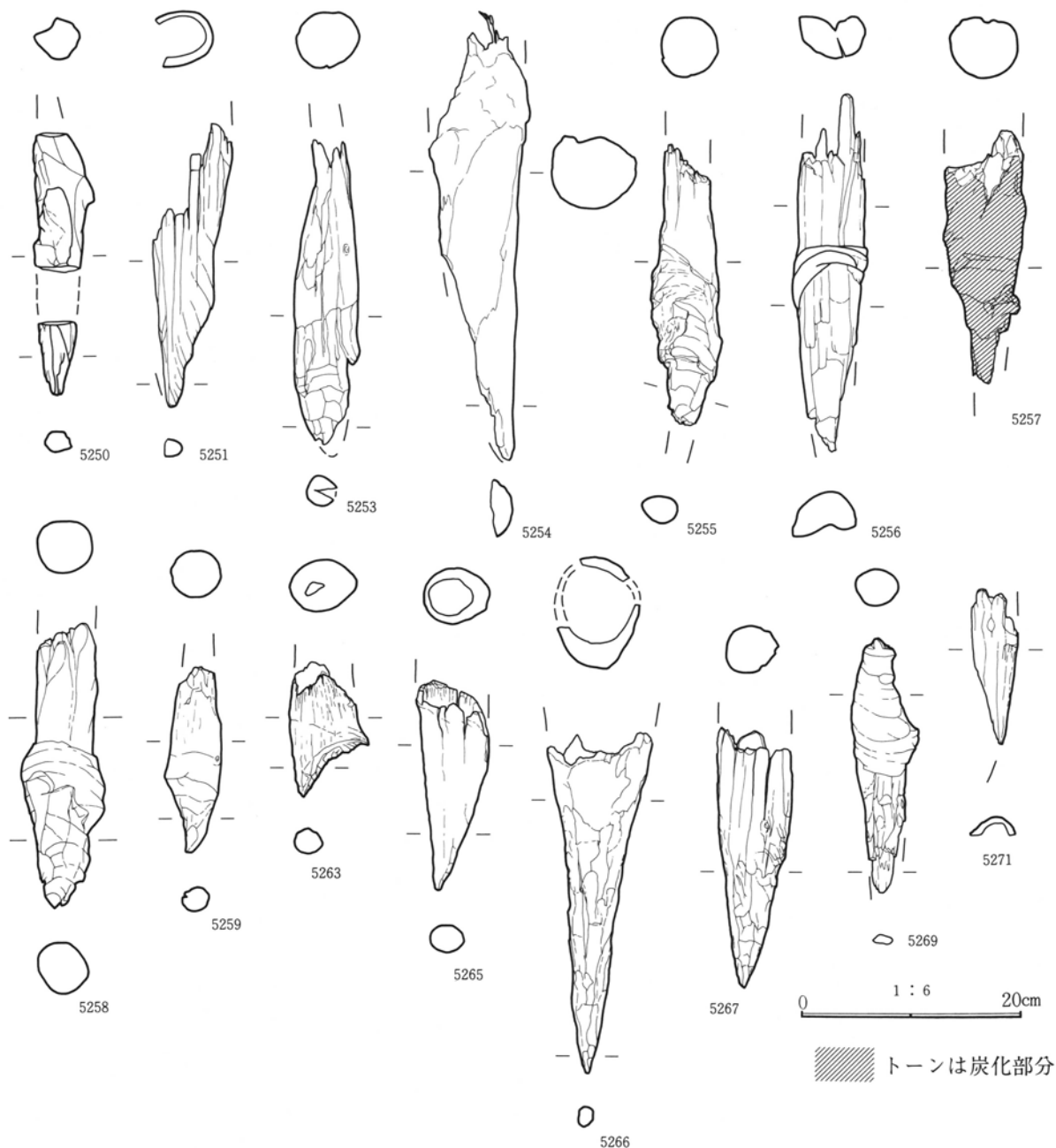
【土器石器類】弥生中期甕片(0623,34,35)・同壺片(0651,38)・同鉢片(0636)と縄文鉢片(0632,33,37,40,41,45,48)が見られた。石器では、石核(硬質泥岩2201)・打製石斧(黒色安山岩2187 変質安山岩2188)・磨り石(磨製石斧状=頁岩2220)が出土した。

【木器】杭(カエデ属5268 ケヤキ5261 アカガシ亜属5250 カヤ5264 ムクロジ5270)・角材(アカガシ亜属5262 トネリコ属5260)・棒材(アカガシ亜属5252)が見られ、モミ属の杭状木瘤(5251,53~59,63,65~67,69,71)も出ている。以上の中でカヤの杭未製品5264は、長大な枝(255cm)の先端のみを尖らせたものであり、カエデ属の杭もほぼ同様(長188cm以上)である。

【備考】本地区では上記以外に39点の自然木について樹種同定を行った結果、アカガシ亜属10点・アサダ1点・カエデ属4点・ケヤキ2点・コクサギ1点・トウヒ属8点・トチノキ2点・トネリコ属2点・ニレ属1点・ニワトコ1点・ムクノキ2点・ムクロジ3点・ムラサキシキブ属1点・ヤブツバキ1点であった(巨大倒木については遺憾ながらサンプルが行方不明だが、一部は甘楽町古代館で保存)。以上の中で南西側部分で集中的に検出されたトウヒ属は氷河期の針葉樹が現れたものと考えられる(第V章参照)。



低地部D区(2)



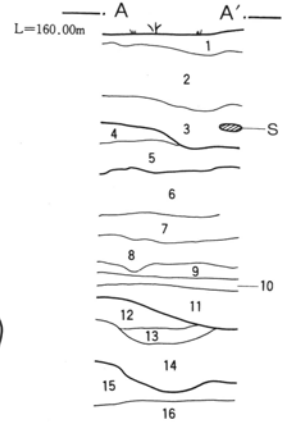
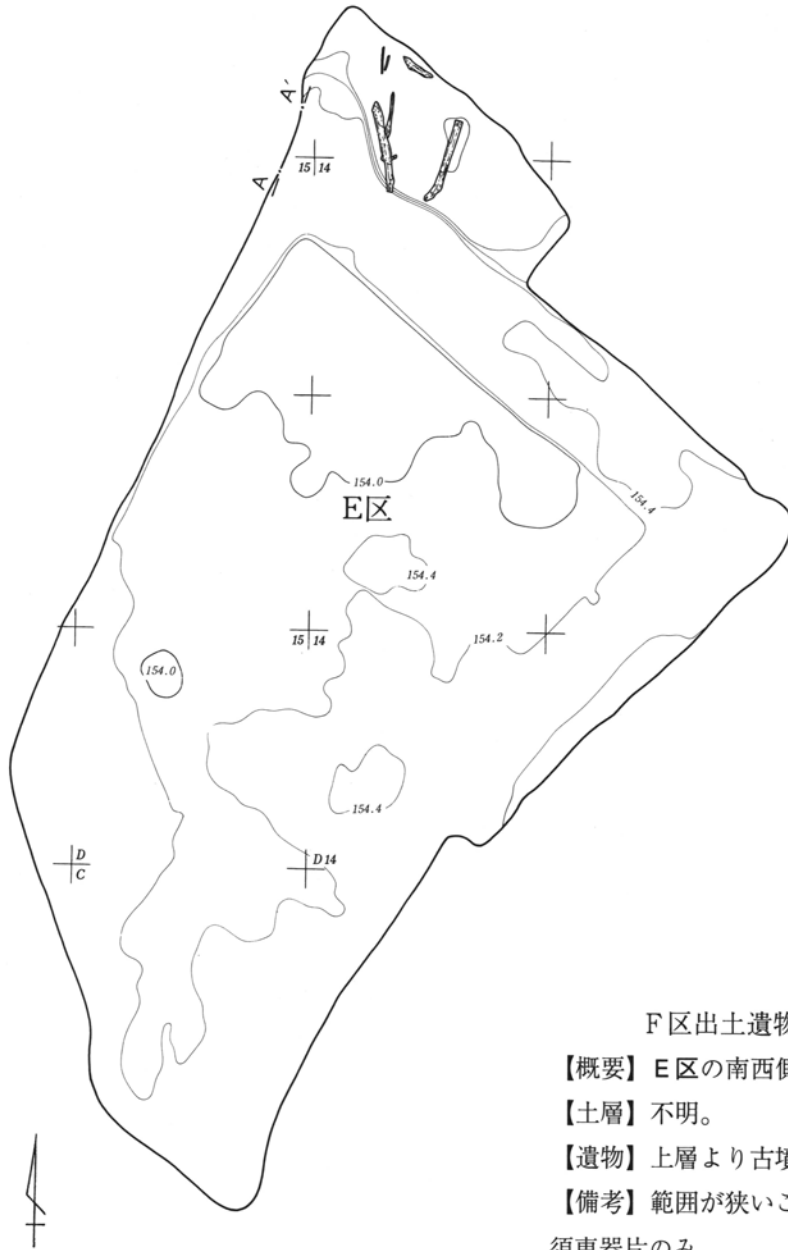
E区出土遺物 【図p.169】

【概要】 D区の南西側の調査区。

【土層】 1暗黄褐シルト砂礫大混ローム2次堆積土 2黒褐粘質粒子粗礫大混 3黒褐粘質2似礫大多浅間B軽石小混 4黄褐粘質シルト凝固粒大混 5黒褐粘質B軽石小多小礫大混 6灰黄褐粘質礫大多混 7黄褐粘土鉄分礫大少含 8鈍い黄褐シルト木質混 9黄褐シルト質土粒子粗締良微小砂粘質土互木質混 10黒褐粘土木質混 11黒粘質粒子粗小礫中木片混 12黒褐粘質11似礫少含 13黒褐粘質締弱木質多含 14暗灰黄砂木片礫多含 15暗緑灰砂質粒子粗 16暗緑灰粘土礫大混

【備考】 土層中には木片が見られたが、木器は全く検出しなかった。5点の自然木サンプル樹種の同定結果は、カヤ1点・トネリコ属2点・ムクノキ1点・モミ属1点である。

2 低地部の遺構と遺物



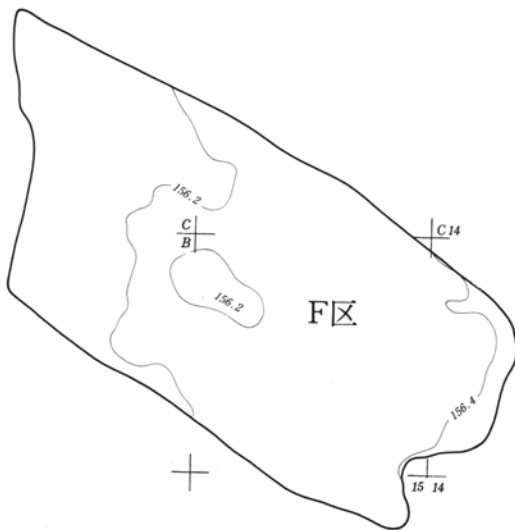
F区出土遺物 【図p.169 PL.125】

【概要】 E区の南西側の調査区。

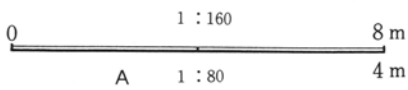
【土層】 不明。

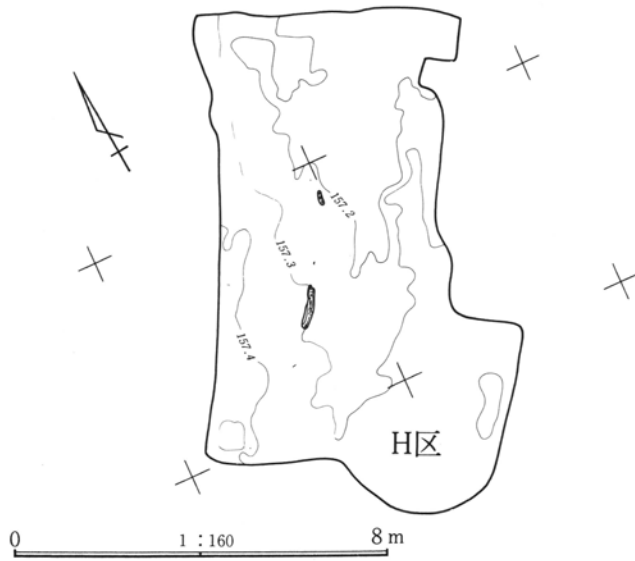
【遺物】 上層より古墳時代須恵器甕片(0652)が出土。

【備考】 範囲が狭いこともあるが、検出資料は僅かに須恵器片のみ。



0652(1/4)





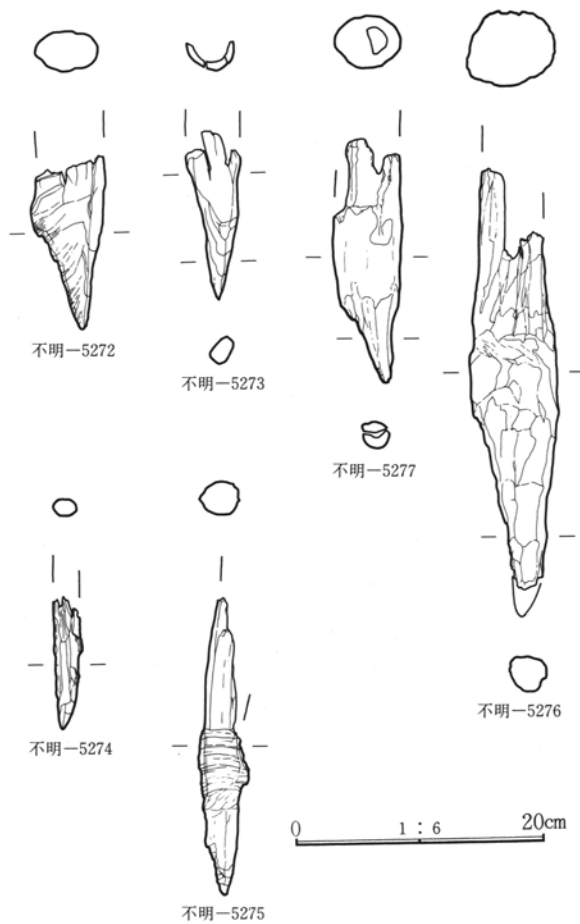
H区出土遺物 【図p.170 PL.125】

【概要】左岸最南西端の調査区。

【土層】不明。

【遺物】なし。

【備考】顕著な資料は全く取得できず。



出土地区不明遺物 【PL.125】

上記いずれかの調査区から出土した自然木の杭状木瘤が6点(5272~77)あった。

二 調 査 成 果

第Ⅲ章 遺物の特徴

1 縄文土器

原 雅信

発掘調査によって出土した縄文土器は約70点程であるが、ほとんどが遺構との関連をもたない破片資料であった。ここでは、その出土資料の概要について報告しておきたい。

ア 出土状態

調査によって得られた縄文土器は、いずれも同時期の遺構に伴う資料ではなく、表土、弥生時代住居、古墳および中・近世の遺構の埋没土中に混入して出土したものである。なお、縄文時代の遺構として数基の土坑にその可能性が考えられているが、これらの土器との関係は把握されていない。

土器の出土範囲は、台地部および低地部にわたるが、いずれも小破片であり、特に集中する部分はみとめられない。

その中では、低地部B区からの出土資料に器形のわかる土器が認められている(0614)。この資料は、水平口縁の深鉢で胴上部に4単位の橋状把手が付けられる大型の加曾利E4式土器である。文様は特に観察されない。この資料は、前記のように今回の出土した縄文土器のほとんどが破片資料であるなかで、特徴的な出土状態を示すものとして注目される。

まず、今回出土した縄文土器の時期をみてみよう。台地部および低地部出土の土器の時期は、前期の花積下層式土器、諸磯a式土器、諸磯b式土器、中期の加曾利E2式土器・加曾利E3式土器、後期の堀之内1式土器、堀之内2式土器、加曾利B2式土器がそれぞれ出土しているものの、加曾利E4式土器は低地部内にもみ検出されている。さらに、ほとんどの資料が小破片であるのに比べ、この土器は器形をとどめている。

これらのことは、この土器が台地上から転落、もしくは上流から流出したものではなく、出土地点付近での使用を考えることができるのではないだろうか。調査の際もこの資料のみまとまった個体であったことから、河川に関連する生活の痕跡を示す可能性を期待したが、接する台地部分には同時期の遺構は未検出であり、具体的な生活を促す情報は得られなかった。しかし、この河川が縄文時代にも流下していたことを物語る資料として理解しておきたい。

時期は異なるが、この河川からは木製のヤスおよび大量の木の実などが出土していることは、漁労ないし植物食に伴うアク抜きなどの利用が想定できる。今回の調査区内には、縄文時代の集落は含まれなかったが、近接地域の調査によっては同期の集落が明らかになる可能性が高いといえる。特に、河川との関連には具体的な生活を明らかにする上でも注目する必要があるだろう。

イ 出土土器

出土した縄文土器は、前期、中期、後期の各期の資料が含まれるが、0614以外は小破片であり、散発的に検出されている。ここでは、これら出土資料の紹介としておきたい。

前期の土器

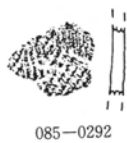
この時期の資料としては、0039・0292・0417・0662等がある。いずれも花積下層式土器であろう。縄文片であるが、RL、LRが用いられ回転方位は横位とみられるが、胴下半部では尖底のためか、方位が不規則

縄文土器分類図

1. 前期の土器



001-0039



085-0292



098-0417



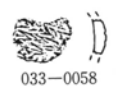
F5G-0662

花積下層式土器



低地部B区-0644

諸磯a式土器



033-0058



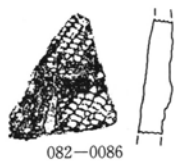
083-0188

諸磯b式土器

2. 中期の土器



033-0061



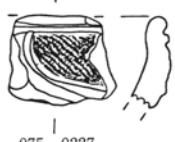
082-0086



022-0131



037-0155



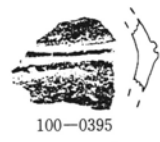
075-0227



071-0351



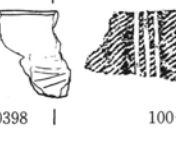
071-0352



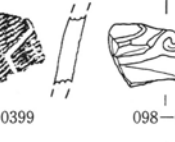
100-0395



100-0398



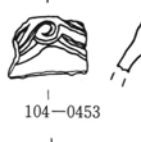
100-0399



098-0416



112-0515



104-0453



134-0468



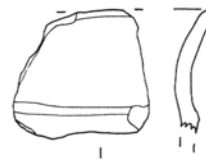
低地部D区-0640



030-0592



低地部B区-0614



低地部A区-0627



低地部B区-0643

加曾利E 4 式土器



075-0229



098-0414

加曾利E 2・3 式土器



G2G-0660

3. 後期の土器



001-0032



低地部D区-0645



低地部A区-0647



041-0110

堀之内 2 式土器



100-0397

加曾利B 1 式土器



F2G-0659

堀之内 1 式土器



022-0150



134-0467



F2G-0661

加曾利B 2 式土器

となっている。胎土中には繊維が含まれる。0662が低地部、他は台地部から出土している。

0644は、諸磯 a 式土器。櫛歯状施文具による肋骨文の交点に円形文が垂下する。低地部からの出土。0058・0188は、諸磯 b 式土器。台地からの出土。

中期の土器

加曾利 E 2・3 式土器、および 4 式土器が出土している。台地部からは、0061・0086・0131・0155・0227・0229・0351・0352・0395・0398・0399・0414・0416・0453・0468・0515・0592・0640・0660などのように加曾利 E 2・3 式土器が認められ、低地部からは、0614・0627・0643などのように加曾利 E 4 式土器が出土している。

後期の土器

台地部および低地部から各時期の資料が散発的に検出されている。

出土資料を概観すると、0032・0645・0647・0659などの堀之内 1 式土器、0110などの堀之内 2 式土器、0397などの加曾利 B 1 式土器、0150・0467・0661などの加曾利 B 2 式土器が認められる。

2 石器・石製品

麻生敏隆

天引狐崎遺跡からは、縄文時代から近世までの時期の遺構が検出されているが、弥生時代の竪穴住居跡や古墳時代の方形周溝墓を主体としている。遺跡から出土した石器と石製品の大部分については、検出されている遺構の時期からみて、弥生時代後期から古墳時代前期を中心とすると考えられる。

その種類をみてみると、打製石鏃・磨製石鏃・磨製石包丁・打製石包丁・石錐・石匙・搔器・削器・楔形石器・磨製石斧・打製石斧・石鎌・石剣・紡錘車・垂飾・管玉・白玉・多孔石・くぼみ石・砥石・磨り石・石皿・礫器・石核・剥片石器・原石・硯・五輪塔などがあげられる。

ここでは、分類した器種の個々の概要について記述するとともに、鎭川流域の他の遺跡と比較することとする。

打製石鏃 総数で36点が出土している。資料の形状から従来の分類である凹基無茎（Ⅰ形態）・平基無茎（Ⅱ形態）・有茎（Ⅲ形態）の三つの形態を用いることとする。

Ⅰ形態 中茎を持たず、基部に抉入があり、脚部が明確に作り出されている形状のものを指す資料で、点数は最も多く20点である。石材は、黒曜石11点、チャート6点、赤色珪質岩2点、不明1点であり、黒曜石の占有率が高い。脚部を欠損した資料は8点である。

Ⅱ形態 中茎を持たず、基部が直線的、あるいは返し部分がわずかに内外湾する資料で、いわゆる三角鏃や円基鏃と呼ばれる形態である。点数は3点であり、石材は黒曜石1点、チャート2点である。安中市大下原遺跡では、この形態の石材がすべてチャートである。

Ⅲ形態 中茎をもち、基部が直線的、あるいは返し部分が内湾している資料で、点数は13点である。そのうちの7点は弥生時代竪穴住居跡の埋没土中であり、このことから弥生時代の所産であるといえる。また、中茎部分を欠損する資料は5点である。石材は黒曜石が11点、チャート1点、珪質凝灰岩1点である。

これらの石材のうち、鎭川流域に展開する縄文時代から弥生時代の遺跡での石器に用いられる黒曜石やチャートなどは、小型で細かな押圧剝離を施す打製石鏃や石錐、石匙などの特定の石器の製作に適した石材であり、原産地も本遺跡からは離れた距離に位置していることから、搬入石材（A類石材）と呼称している。特に、打製石鏃には黒曜石が主体的に利用される。その大きさでは、黒曜石製に比べてチャート製が大型の傾向が認められる。また、赤色珪質岩は、磯貝基一氏の指摘する鎭川上流域に分布する新第三紀火山堆積物中の赤色チャートのことでもある。

打製石鏃の一部の実測図には、黒曜石の水和層測定のための分析試料をサンプリングした痕跡が、そのまま実測されている。

磨製石鏃 弥生時代を代表する石器であり、竪穴住居跡の071号遺構から1点だけ出土している。穿孔が施されていることから完成品であったと思われるものの、先端部と基部を欠損する。石材は珪質準片岩である。この石材は、鎭川流域での磨製石鏃に利用される特徴的な石材である。特に、甘楽町白倉下原遺跡や笹遺跡などで、竪穴住居内で集中的に製作されている。

磨製石包丁 磨製石鏃と同様に弥生時代を代表する石器であり、弥生時代の堅穴住居の108号遺構から1点だけ出土している。紐部の穿孔が施されていることから完成品であったと思われるものの、刃部を欠損しており、一つの紐部と背部の一部が残存するだけである。

打製石包丁 大型の剝片を素材とする2点が出土している。石材は輝緑凝灰岩と珪質準片岩である。

石錐（ドリル） 典型的な形状の資料が2点出土している。形態は共に断面が菱形に近い大型の細身の棒状の資料である。古墳時代の方形周溝墓である022号遺構から出土した1点は摘みがなく、石材は珪質頁岩製である。もう1点は中世の道路跡である033号遺構から出土した。摘み部分が欠損しているものの、左右対称な角状の特徴的な摘みをもつチャート製である。

石匙 機能的には削器と同様の用途に用いられるものだが、摘み部分が作出されているという定型化された石器ということで、個別に分類されるものである。資料の形状から縦型（Ⅰ形態）と横型（Ⅱ形態）の二種に大別されるが、本遺跡で出土しているのはⅡ形態のみである。

Ⅱ形態も、押圧剝離により摘み部が明確に作り出されたA類と、直接剝離により簡単な摘み部が作り出されたB類に細分される。A類は1点で、摘み部分が基部の中央からやや片側に位置する。欠損状態をみても、刃部部分の両先端と摘部分を欠損する。B類は6点で、摘み部が欠損している資料が3点である。石材は、すべてチャートである。

削器（スクレイパー） 剝片を素材とし、素材剝片自体の形状を著しく変えることなく、その周縁や側縁の部分に調整加工を施し、刃部を作り出した資料である。可能性がある資料も含めて、総数で9点出土している。大部分は、不定形、あるいは横長の剝片を素材としており、剝離も類似することから、打製石斧などの製作段階で作られられた剝片を利用した可能性も考えられる。

石材は、9点すべてが硬質泥岩である。このことから、打製石斧などと石材を共用する資料であることが理解され、それらの製作工程と密接な関係があることを推測させる。

楔形石器（ピエス・エスキーユ） 2点出土している。石材は、黒曜石とチャートの各1点である。

磨製石斧 2点出土している。1点は断面が楕円形の太型蛤刃（Ⅱ類）の頭部部分で、弥生時代後期の堅穴住居である105号遺構から出土している。石材は変輝緑岩である。もう1点も、Ⅱ類の欠損部分と考えられる資料で、弥生時代後期の堅穴住居である082号遺構から出土している。石材は蛇紋岩である。

打製石斧 可能性がある資料も含めて、総数81点と石器の中で最も数多く出土している。形態については従来から知られている短冊形（Ⅰ形態）、撥形（Ⅱ形態）、分銅形（Ⅲ形態）の三種の形状による分類を用いることとする。

Ⅰ形態 両側の側縁が直線的でほぼ平行なもので、いわゆる短冊形である。だが実際には、刃部が頭部よりも僅かに幅広い資料もその範疇に含めることとする。総数は最も多く、欠損品も含めて32点である。

石材は、硬質泥岩が22点と圧倒的に多く、粗粒安山岩4点、雲母石英片岩3点、珪質頁岩と黒色安山岩、変玄武岩が各1点である。

Ⅱ形態 その形状からさらに二つに細分することとする。

A類は、両側の側縁は直線的だが、刃部幅が頭部幅よりも広いもので、いわゆる撥形である。だが実際には、側縁が僅かに内・外湾する資料もその範疇に含めることとする。総数は欠損品も含めて24点を数える。石材は、硬質泥岩14点、変質安山岩3点、変玄武岩2点、細粒安山岩

第Ⅲ章 遺物の特徴

と粗粒安山岩、黒色安山岩、珪質頁岩、緑色片岩が各1点である。

B類は、大型で頭部が細く刃部が大きく広がる資料や、同じく大型で有肩石斧と呼称されるような形状の資料であり、弥生時代の石鍬と想定される。点数は欠損品も含めて10点である。石材は、硬質泥岩3点、変質安山岩と粗粒安山岩、雲母石英片岩が各2点と、変輝緑岩1点である。

Ⅲ形態 両側縁が装着部分である中央部で内側にくびれ、刃部及び頭部が外側に張り出すもので、いわゆる分銅形である。点数は11点である。この形態は、縄文時代中期から出現し、後期に数多くみられる資料である。石材は、硬質泥岩6点、雲母石英片岩2点、変質安山岩と黒色片岩、珪質頁岩が各1点である。

欠損のために分類不可能な4点の資料の石材は、硬質泥岩3点、粗粒安山岩各1点である。

石斧に認められる使用の痕跡としては、装着痕や刃部の使用痕がいくつかの資料に認められる。これらの痕跡では資料の中央部（基部）の両面や両側縁に装着痕が認められるが、特に剝離面境の稜部分にすれが見られることが多い。また、刃部の使用痕も両面に平行な何条もの線状の擦痕や、剝離面境の稜部分がすれてはつきりしないなどの観察結果が得られている。

欠損品は47点と多く、率として約58%を占める。頭部を欠損する資料が最も多く、頭部と刃部を共に欠損する資料もみられる。また、欠損した部分を再生したと考えられる資料が数点存在する。これはリダクションとも呼ばれ、旧石器時代の石斧にも認められるものである。

石材に多く用いられるのは、硬質泥岩と安山岩類、それに片岩類である。特に、打製石鍬などの小型の石器に黒曜石などの搬入石材が多用されるのに対して、打製石斧や削器などの比較的大型で剝離を施す石器に多用される硬質泥岩や加工が容易な片岩類など、本遺跡周辺の近い距離で入手可能な石材を、在地系石材（B類）と呼称している。

打製石斧の素材としては、従来から言われている様に、比較的大きく残されている素材時の剝離面から、その大部分が20～30cm程の原礫を半割、ないしは数枚に分割した大型の板状剝片を素材として用いたことが想定される。このことは、片面の一部に礫面や分割面が残存する資料が多く存在することからも、間違いないと考えられる。

石材の多くを占める硬質泥岩は、その産出地については、大部分が新第三紀海成層最下部の下仁田層中であり、主に西牧川から下仁田で鑄川に合流して下流に転石として分布していくことが解明されている。本遺跡の位置が、合流点下流の丘陵上であるから、硬質泥岩（頁岩）の産出地、及び転礫として分布する流域に近接しているという、地理的環境からくる結果とも言える。

また、中高瀬観音山遺跡の発掘調査報告書でも記述したように、各遺跡の石材の鑑定を本事業団では主に飯島静男氏に依頼して、石材名称の一元化を図りつつある。だが、鑄川流域の石材については磯貝基一氏も分析・研究（1993・1994）しており、飯島氏の分類する硬質泥岩や頁岩について、磯貝氏は考古学での一般的な慣習からまとめて頁岩と総称している。ここで、同意語とした前記の中高瀬観音山での報告文の訂正をすることとする。

石鍬 弥生時代後期の堅穴住居である032号遺構から2点出土しているが、接合するために、同一個体である。石材は珪質準片岩である。

石剣 弥生時代後期の堅穴住居である091号遺構と112号遺構から2点出土している。あるいは、磨製石鍬などの未成品の可能性もある。石材は珪質準片岩である。

加工痕・使用痕ある剥片 多数出土している剥片の中に、剥片自体の周縁や側縁の部分をそのまま刃部として使用することにより使用痕が残されたり、僅かな調整加工を加えたものが存在することから、それらを加工痕・使用痕ある剥片と呼称することとする。その大部分は搔・削器的なものとしての用途が考えられる資料が多い。

石材は、黒曜石5点、チャート2点、珪質頁岩1点である。

くぼみ石(凹石) 総数2点出土している。1点は偏平な礫の片面にくぼみ一つ残存する資料であり、石材は牛伏砂岩である。もう1点は大型の礫の片面にくぼみ一つ残存する資料であり、擦痕が多数認められ、欠損している。石材は砂岩である。あるいは多孔石の可能性もある。

多孔石 礫の片面か、あるいは両面のほぼ中心部に、くぼみが多数残存する資料であり、5点出土している。他の遺跡での事例から、くぼみ石が小型の偏平な円礫や楕円礫、あるいは棒状礫を選択しているのに対して、多孔石は大型の偏平な楕円礫や棒状礫を選択している違いがある。すべて欠損している。石材は、緑色片岩2点、砂岩と黒色片岩、雲母石英片岩が各1点である。これらはこの鎭川地域で比較的入手しやすい大型の石材であり、くぼみをつけやすい岩石であるのかも知れない。

敲石 一端が平らな面をもつ資料が2点出土している。形状はいわゆるスタンプ形石器に類似している。石材は粗粒安山岩と変質安山岩の各1点である。

砥石 総数18点である。形態からA類とB類に細分した。

A類 14点出土している。大小の礫の両面に多数の彫りの深い線状痕が認められる資料である。鉄製品などの研ぎに使用した可能性がある。石材は、鎭川の下流域で利用される第三紀牛伏層から産出する赤褐色の砂岩(通称は牛伏砂岩)が10点と最も多い。砂岩2点、流紋岩1点、黒色片岩1点である。この種は鎭川流域の遺跡に特徴的に認められる。

B類 形状も四面の研ぎ面を作り出した定型な資料で、4点出土している。そのうちの3点は、鎭川の上流の南牧村砥沢から産出される砥沢石である。櫛歯タガネ痕を残す資料が2点認められる。もう1点は、粗粒安山岩である。両端を欠損した資料が2点ある。

磨り石 大型から小型の玉礫や偏平な楕円礫、あるいは棒状礫の片面に磨り痕が認められる資料であり、砥石との分類作業にやや悩む器種でもある。点数は77点と多く出土している。他の石器からの転用や共用される場合もある。特に、大型の偏平な楕円礫の資料は、台石の可能性も考えられる。また、欠損資料が33点と多く、約43%を占める。

石材は、雲母石英片岩20点と牛伏砂岩19点が最も多く、黒色片岩12点、緑色片岩9点、粗粒安山岩5点、砂岩4点、硬質泥岩と流紋岩、黒色安山岩、変質安山岩、珪質頁岩、変輝緑岩、珪質準片岩、不明が各1点であり、多様な石材が用いられている。

石核 総数で10点出土している。残されている剥離面から、作り出された剥片の形状は横長や不定形を呈している。大きさから、小型の黒曜石5点、チャート1点と、大型の礫の周囲から求心に向かって剥片剥離を施すことにより円盤状を呈する硬質泥岩2点、粗粒安山岩2点に細分される。

硬質泥岩や黒曜石については、原石から石核、剥片、それに製作された石器と、すべてがそろっていることから、本遺跡内で剥片剥離作業が実施されていたと理解される。

垂飾 古墳時代後期の古墳である001号遺構から1点出土している。石材は変質蛇紋岩である。表裏両面からの穿孔を施している資料である。

勾玉 古墳時代後期の古墳の075号遺構から1点出土している。表裏両面からの穿孔を施している。石

第Ⅲ章 遺物の特徴

材は不明である。

管玉 3点だが、1点は弥生時代後期の竪穴住居である074号遺構から出土している。1点は両側からの穿孔を施している資料であるが、約半分を欠損している。石材は珪質岩2点、滑石1点である。

臼玉 出土位置は不明であるが、1点出土している。石材は蛇紋岩である。

紡錘車 破片の可能性のある資料も含めて5点出土しているが、欠損品が4点もあり、両側からの穿孔を施している完形品は1点のみである。石材は砂岩2点、牛伏砂岩1点、不明2点で、やはり加工しやすい石質の岩石が選ばれているのがわかる。

五輪塔 緑色片岩製の空風輪であり、ほぼ半分を欠損している。

不明石製品 牛伏砂岩製の栓と、石材不明の当て具?が出土している。



3134

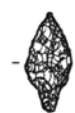
I

打製石鎌



3106

II



3098

III



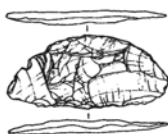
3110

磨製石鎌



2128

磨製石包丁



2120

打製石包丁

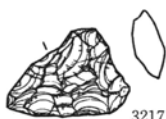


3135



3136

石錐



3217

II B

石匙



3263

II A

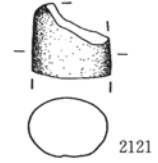
2 石器・石製品



削器



楔形石器



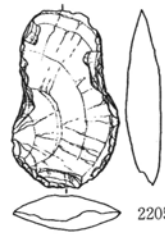
磨製石斧



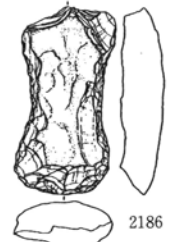
I
打製石斧



II



2205



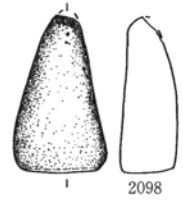
2186



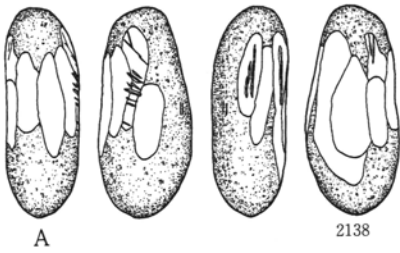
石鎌



石剣



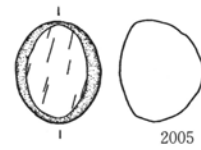
敲石



砥石



B



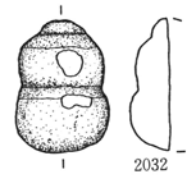
磨り石



石核



硯



五輪塔

3 弥生時代中後期土器

ア 後期

本遺跡で検出した竪穴住居35軒の中の34軒が、この時期のものである。各竪穴の下層出土の土器を検討してみると、次のように組成を見ることができる(次頁図参照)。

A 1期

等間隔止め簾状文・内傾口縁・肩部を持つ甕、中位に最大径を持つ壺などを基本的な指標とする。

器種	甕	小型甕	台付甕	壺	広口壺	小型鉢	有孔鉢	鉢	高坏	ミニチュア	匙	土製品
026号				○						○		
027号				○								
032号	○	○		○	○	○	○			○		勾玉
036号	○			○								
037号			○	○					○			
038号	○											
069号	○			○								
071号	○	○		○		○			○			
074号	○		○									
082号	○	○										
083号	○			○		○						
091号		○		○								
099号	○			○		○		○				
112号				○								
131号				○					○			
133号	○	○	○			○			○			

B 2期

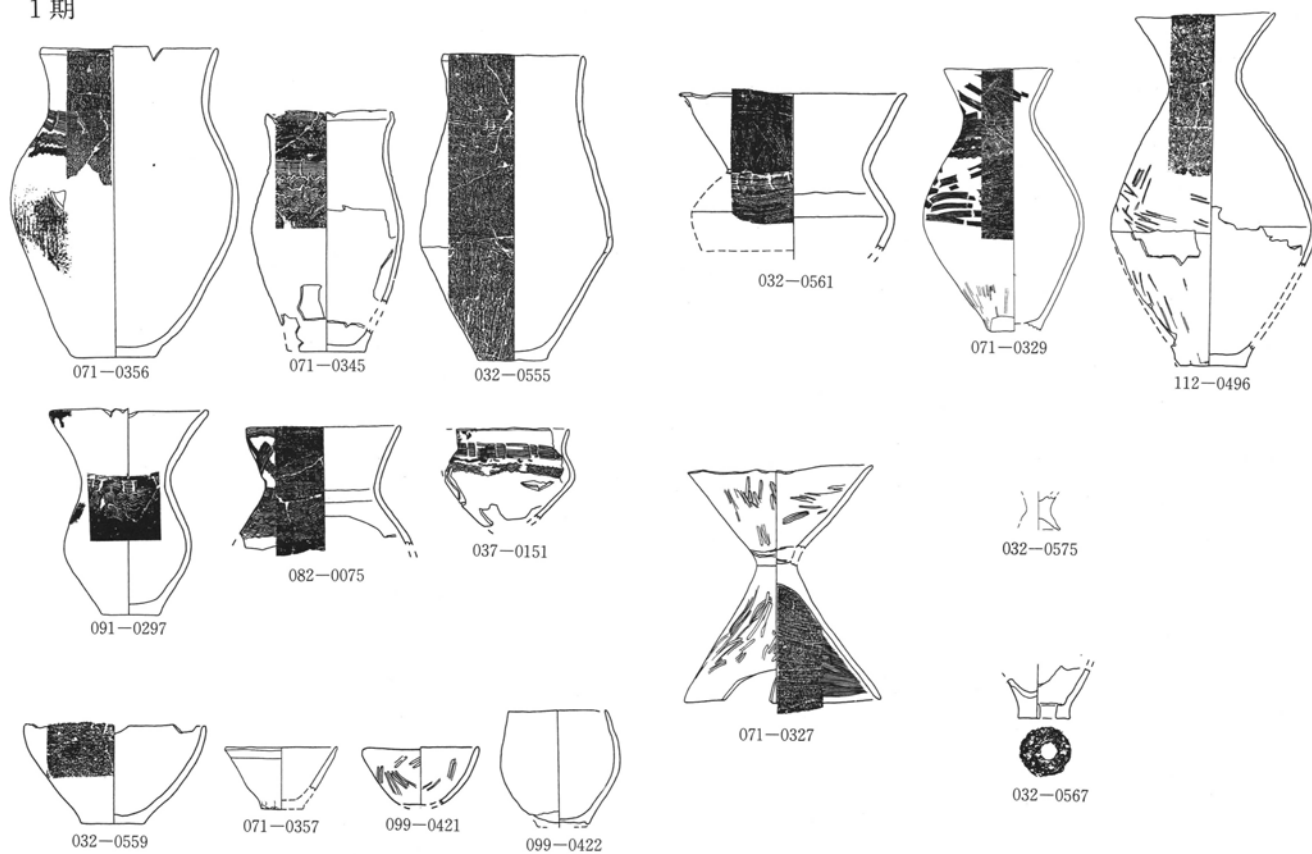
2連止め簾状文・外傾口縁の甕、下位に最大径を持つ大型壺などを基本的な指標とする。

器種	甕	小型甕	台付甕	壺	広口壺	小型鉢	有孔鉢	鉢	高坏	ミニチュア	匙	土製品
030号	○	○		○		○						
039号									○			
040号		○		○		○						
070号				○		○			○	○	○	勾玉
087号	○		○	○		○			○			
098号	○			○					○			
100号	○	○	○	○					○			
104号	○			○								
105号				○		○						紡錘車
106号	○	○							○			
107号				○		○					○	
108号	○			○								
113号	○			○								
134号	○	○	○			○			○			
135号		○		○					○	○		

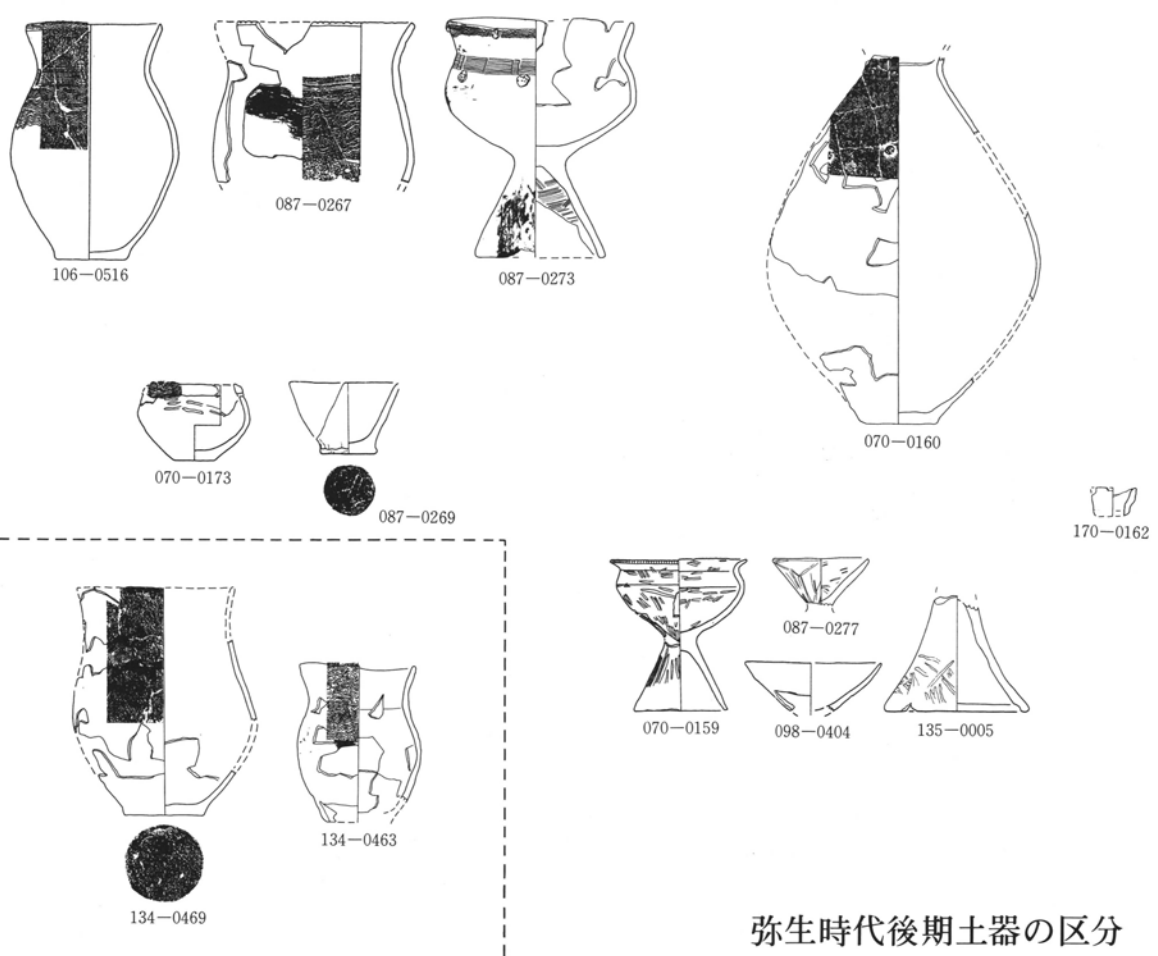
なお、134号には、口縁頸部に波状文を施文する甕が見られる。これは、他の竪穴には見られないもので、一般にはより後出するタイプと考えられているが、ここでは2期の標準的な甕と共伴しているため、同時期中での例外的な状態としておく。

以上全体を概観すると、数種の甕と大型を中心とする壺が基本的な器種であり、これに小型鉢と高坏が続いている。1期から2期への変化は、高坏の出土割合が増え、甕の種類が単純化するなどの傾向が見られる

1 期



2 期



弥生時代後期土器の区分

第三章 遺物の特徴

程度でそれほど、極端な変化は感じられない。

これらは、後期中葉内での二時期の変化と言える。西に5キロ離れた中高瀬観音山遺跡との比較では、同遺跡1期までが本遺跡1期、同遺跡2～4期が本遺跡2期とすることができる。なお、本遺跡1期の開始は、中高瀬観音山1期より古いと思われる。また天引川対岸の長根安坪遺跡（東0.9km）の後期集落の土器もほぼ同様の時期のものだが、本遺跡では例外的な口縁頸部波状文甕の混入はやや多い。

イ 中期

今回の調査で検出した弥生中期の土器片はその大部分を掲載したが、前葉49点・前葉の可能性の強いもの39点・中葉26点・後葉2点となり、重量別の出土状態は次頁図に示した。

台地上のほとんどでむらなく出土している。明確な遺構は、北端の3基のフラスコ状土坑034・055・056号だが、分布は決してこの部分にのみ集中してはいない。低地部のD区・C2区でも見られるため、本遺跡で中期の生活が存在したことは確かである。

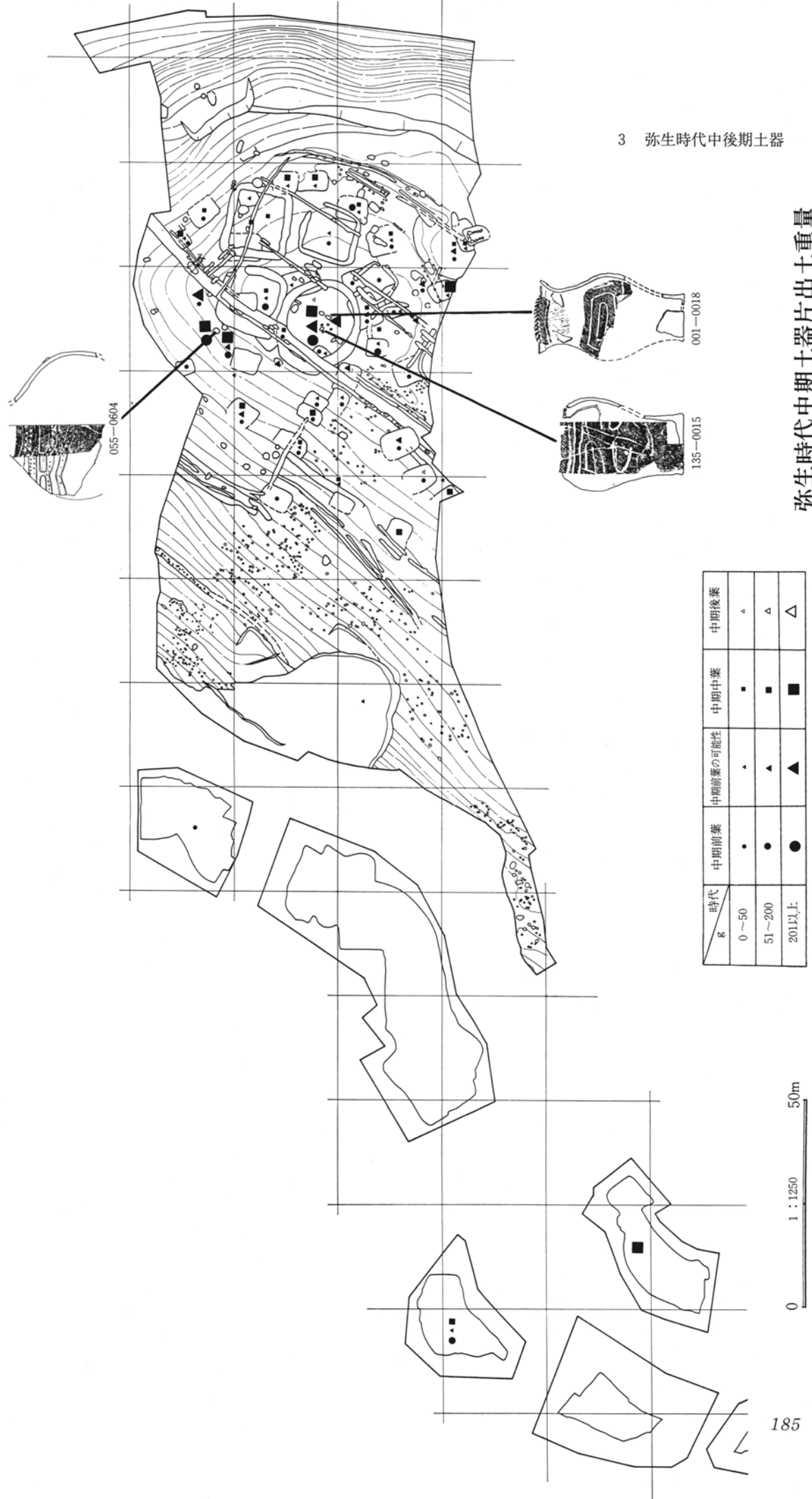
設楽博巳氏のご教示による分類は、次の通りである。

時期	施文方法	器形	点数	段階と分布域	類例
前葉	沈線帯文	壺	16	初頭～前葉の北関東 古段階 東関東	沖Ⅱ 神保富士塚
	竹管文	壺	3		
	磨消縄文	壺か鉢	2		
	縄文・磨消縄文	広口壺	2		
	縄文地条線文	甕	8		
	帯縄文・磨消縄文	甕	6		
	条痕文地波状文		5		
	細密条痕文		5		
	重四角文	鉢	1		
	鋸歯状沈線文	鉢	1		
	前葉?	沈線三角連繫文	壺		
粗条痕文		底部	10		
人字磨消縄文		鉢	1		
磨消縄文		壺・鉢	3		
重四角文・コ字文		鉢	6		
中葉	縄文帯・翼状口縁隆起帯	壺	3	池上式 栗林式系統 池上式 池上式 南御山Ⅱ式系統 野沢Ⅱあるいは貉式	
	沈線区画列点文	細頸壺	8		
	縄文・波状沈線文	壺	5		
	条痕文	甕	2		
	カナムグラ文	甕	4		
		甕・壺	3		
	壺	1			
後葉			2	東関東・南東北系統	

以上のように、破片点数では前葉のものがかなり多い。しかし、上記3土坑に見られるものは中葉のものであり、残存率も中葉のものが量的にも大である。なお、前葉の土器は、天引川を越えた吉井町の神保富士塚遺跡や神保植松遺跡、さらに藤岡市の沖Ⅱ遺跡でも多く発見されている。

参考 群埋文.1993『神保富士塚遺跡』 1995『中高瀬観音山遺跡』 1996『神保植松遺跡』
藤岡市教育委員会.1986『沖Ⅱ遺跡』

3 弥生時代中後期土器



弥生時代中期土器片出土重量

4 弥生時代金属器

今回の調査で検出した弥生時代の金属器は、下図に示した通りである。

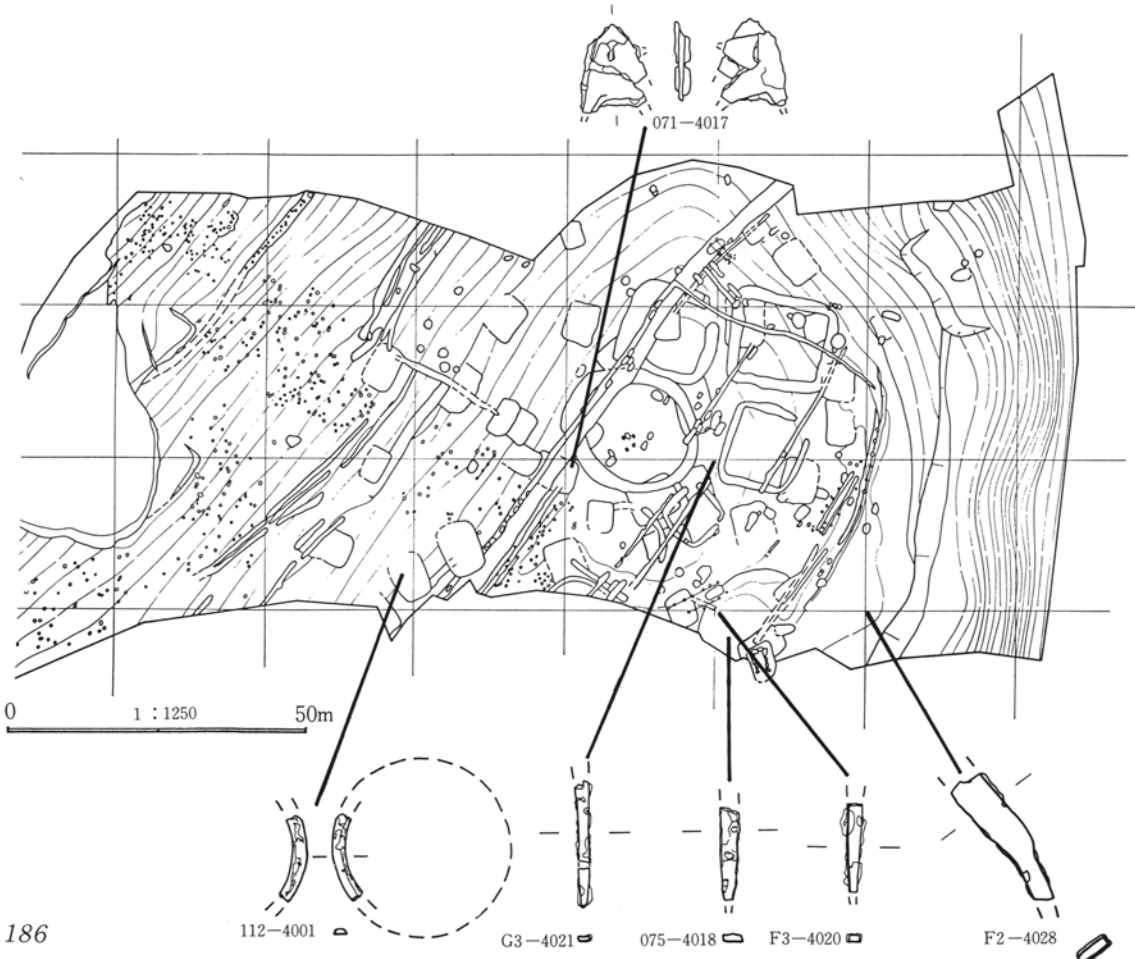
番号	材質	器形	残存部分	出土位置	層位	時期
4001	銅	釧	1/6	112号	下層	後期中葉
4017	鉄	鎌	2本溶着	071号	上層	後期中葉?
4018	鉄	鎌	茎部	075号	上層	
4020	鉄	鎌	茎部	F-3G		
4021	鉄	鎌	茎部	G-3G		
4028	鉄	鎌?	柄部側	F-2G		

銅釧（第Ⅴ章参照）以外は、鉄鎌が4点（5本）と鉄鎌？1点である。形状として確実なものは、銅釧と2本溶着した071号出土の鉄鎌であり、それ以外の器形と時代認定は必ずしも確定する資料が十分ではない。

銅釧は、台形断面で水平方向がより長い形状である。この点はこれまで上野地方の代表例とされてきた有馬遺跡（渋川市）礫床墓出土例とは異なる。材質にも差があることが化学分析により判明した（第Ⅴ章参照）。

071号出土の鉄鎌は、有茎のものと無茎のものが溶着している。有茎のものは全体が鋭角三角形と思われ、無茎のものは五角形に近い。ただし、併せた重量は1.9gしかない。前者は中高瀬観音山遺跡（富岡市）出土の4021に近く、後者は三後沢遺跡（利根郡月夜野町）出土のものに似ている。なお、第Ⅱ章に記したように中高瀬観音山168号遺構出土の未報告鉄鎌(4019)を掲載した（136頁）。同遺跡出土弥生時代鉄鎌は、合計10点となる。また本遺跡の壱棺墓031号と似た土器が出土した和田遺跡（富岡市）5号住では、上層から有茎鋭角三角形の鉄鎌（3.0×2.8cm 2.6g）が見られ、中高瀬観音山4021と似ている。

参考 群埋文.1990.『有馬遺跡Ⅱ』 同.1995『中高瀬観音山遺跡』 富岡市教委.1994『和田遺跡』



5 埴輪

ア 種類

古墳001号とその重複遺構から多数の埴輪片が出土した。その中で報告した形象埴輪は、次の通りである。

家		0700,0713,0245
人物	男子	0694,0695
	巫女	0691,0706
	人物	0692,0693,0699,0715
馬		0705,0707,0717
武器	太刀	0708,0709,0712
	剣	0711
	楯	0701,0702,0703,0704
	靱	0696,0697,0698
	鞆	0716,0718
器材		0685,0686,0687,0688,0710,0720
不明		0088

近隣の形象埴輪出土古墳の組成は、次の通りである。

	家	男子	女子	馬	太刀	楯	靱	鞆
口明塚2号	○	○	○	○	○	○	○	
下條1号	○	○	○	○		○	○	
下條2号	○	○	○	○	○	○	○	○

001号出土の埴輪は、以上全ての種類を含んでいる。だが、残念ながら上記報告したものの各種類ごとの個数を確認するほどには至っていない。以上の3墳の埴輪を分析した右島和夫の分類によれば、3期（6世紀後半～6世紀末葉ないし7世紀初頭）にあてはまる。しかし、石塚久則が指摘するように器材形埴輪の中には、5世紀代の特徴を持つもの(0688)も含まれている。

円筒埴輪の小片は多数見られたが、報告したものは次の通りである。

001号出土	通常形ほぼ完存(0689)	朝顔形頂部(0714)
その他出土	朝顔形頂部(0690)	下部(0247) タガ部(0246)

イ 出土状態

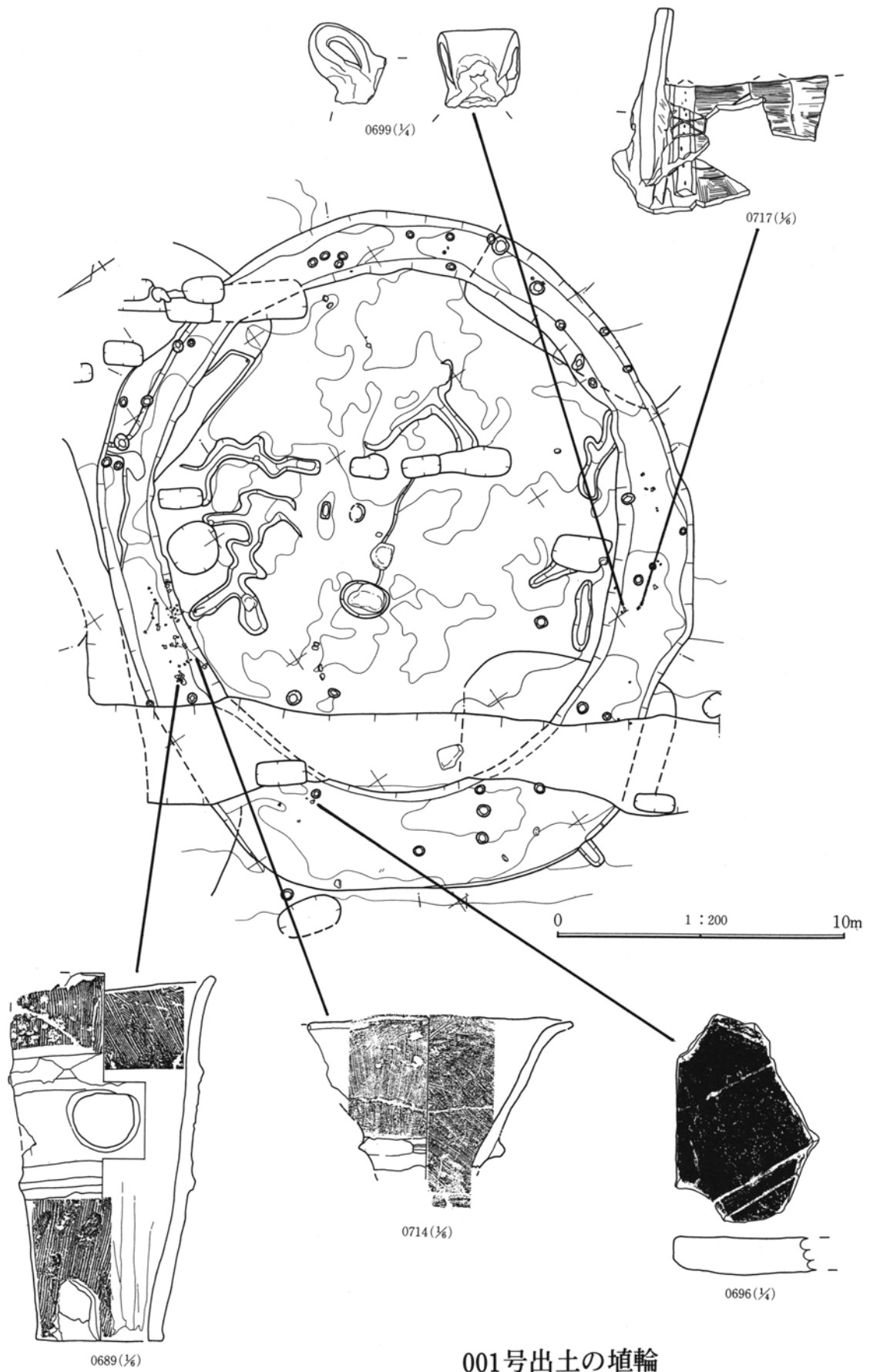
001号出土のもので、出土位置が記録できたものは多くなく、次頁図に記した通りである。

原位置に近いと思われるものは、南西側で人物頭部(0699)と馬鞍(0717)、北西側で靱(0696)があり、北側では円筒埴輪(0689,0714)が残っていた。また、西側で重なる道路跡033号の埋土中には、楯(0701)・器材(0685,0687,0720)が、南西側の土坑136号埋土中には形状不明片(0088)が見られた。当然、その両遺構出土のものは原位置とは考えられない。

残念ながら、以上の資料から当初の配列を復元することはできなかった。また上記5世紀代の器材形埴輪片は033号の上層からの出土である。今回の調査範囲外に、そのような埴輪を並べた別の古墳があったことを示している。また円筒埴輪は、古墳075号に重なる土坑142号から0247が、竪穴143号から0246が出土しているが、075号そのものには、埴輪樹立の痕跡はなかった。0690は西斜面下部の地震跡129号で検出した。

参考

群埋文.1992『神保下條遺跡』



001号出土の埴輪

6 木製ヤスと土杭

ア 木製ヤス

低地部C1区よりモミ属の木製ヤス(5230)が出土した(162頁)。弥生時代と推定されるこのヤスは、先端部が欠損し、両側に逆刺を持つ刃部下半と円錐状の着柄部が残っている(残存全長14cm 残存刃部長10cm 最大幅1cm)。両側で少しずれた位置に付けられた逆刺より上の刃部は、稜を持つ楕円形断面になっている。欠損部側の残存幅から考えると、刃部全体はまだ倍程度(推定全長約25cm)は延びていただろう。とすれば、逆刺も少なくともさらに1対は存在した可能性が高い。また残存部分には、投擲時に柄部との着脱ができるような孔は全く見られない。

両側に複数の逆刺を持つ木製のヤスは、弥生前期の佐賀県菜畑遺跡で出土例がある(残存長21cm 次頁図1)。両側交互に3個の逆刺があり、着柄部と刃部の境界はあまり顕著ではない。本例のような円錐状の着柄部は、弥生後期の長崎県原の辻遺跡出土の鯨骨製品に見られる(推定全長18cm 次頁図2)。これは着柄部の長さも本例と同じ4cmである。和田晴吾によれば、両側に複数の逆刺を持つヤスは、北部九州・伊勢湾岸・三浦半島に集中する。また淡水では、滋賀県大中の湖南遺跡で見られる。さらに古墳時代になると完全に鉄器化するとされる。

神奈川県池子遺跡群では、両側に1対の逆刺を持つ骨角製品が出ている。これは、着柄部と刃部の差が明瞭だが、刃部際に孔の見られるモリである。伊勢湾岸では、愛知県朝日遺跡などには、本例に似た形状のヤスは管見では確認できない。

形状が異なる木製の利器(報告では鎌とする)は、上野地方では次の2点が知られている。^{みしろかいのたに}三室間ノ谷遺跡(佐波郡東村)では古墳時代の谷からモミ属の利器(推定長18cm 次頁図3)が見られる。これは、逆刺が先端部のみに左右対称位置にあり、着柄部は本例に形状が似るが、全長は10cmと長く推定されている。一方、古墳時代後期の豪族居館跡として有名な三ツ寺I遺跡(群馬郡群馬町)からは、左右非対称位置に逆刺のある利器片(現存長8cm 次頁図4)が見られる。逆刺の状態は本例に似ている。

以上をまとめれば、本例は北部九州弥生時代のヤスに形状が似ていることが、指摘できる。

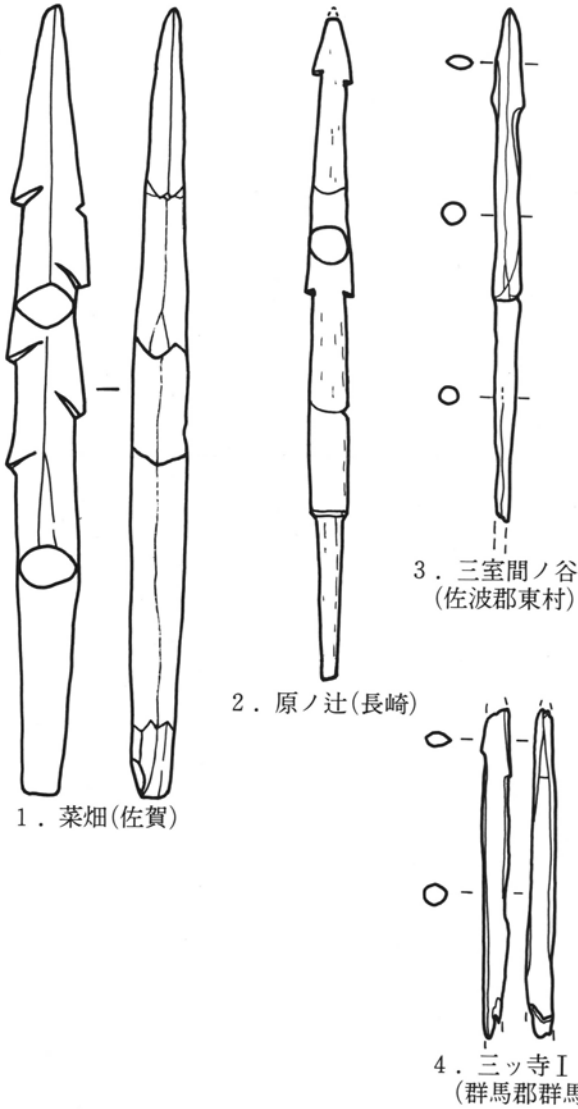
イ 木杭と木器樹種

検出した木杭は、未製品も含め101号遺構より23点、A区その他より56点で、総数79点を数える。これらの樹種は、次の通りである。

		アカマツ	アカガシ 亜属	クリ	ヤツバキ	トチノキ	ニワトコ	マツ属	その他	合計
101号	杭	7	2	1	1				2	13
	杭未製品	1	3	1		2	2	1		10
その他	杭	23	4		3			1	9	40
	杭未製品	10	1					1	4	16
合計		41	10	2	4	2	2	3	15	79

以上のように全体の6割ほどがアカマツを使用している。101号遺構の場合、少しアカガシ亜属が増えていいる。未製品とは先端の加工が一面のみのものを指すが、101号の未製品はアカマツがほとんどない。しかし、アカマツは周辺に自生していた可能性は薄く(第V章参照)、量的に最も多い先端を多面加工した杭は、その用材を他所に求めていたことが分かる。

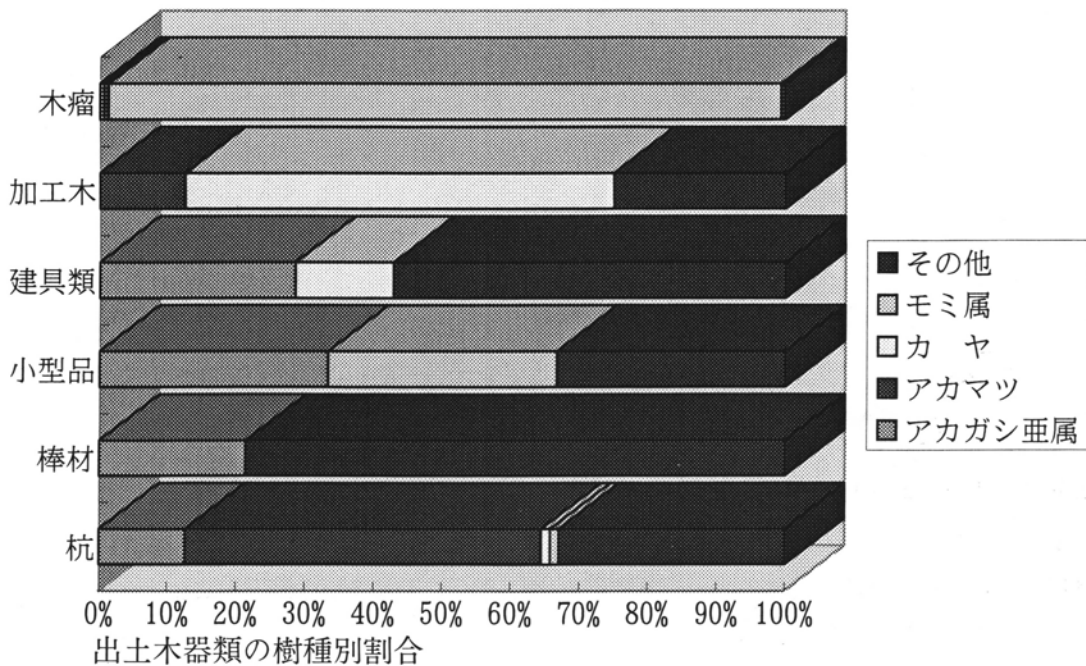
第三章 遺物の特徴



なお、調査時に「丸杭」として人工物と判断した杭状木瘤は、全報告木器類の6割近い合計157点(A区86点・B区44点・C2区7点・D区14点・不明6点)を数え、その98%がモミ属である。モミ属は、この他に低地部からの検出はほとんどないが、この杭状木瘤が自然物であれば、周辺に多く見られたことが考えられる。ヤス以外にモミ属を材としたものは非常に少ないが(小型品は割合は多いが、1点のみ)、参考資料として樹種同定した自然木の6%がモミ属であり、台地部の火災竪穴098号からもモミ属の炭化材が出土していることが、それを裏付けている。カヤは加工木の62%を占めるが、自然木の1%で周辺に自生していた。

参考

- 愛知県埋蔵文化財センター.1992『朝日遺跡Ⅲ』
- かながわ考古学財団.1995『甕の池子の歴史』
- 久保禎子1996『伊勢湾周辺における弥生時代の鹿角製固定鉋頭について』『物質文化』60
- 群埋文.1991『上淵名裏神谷遺跡・三室間ノ谷遺跡』
- 和田晴吾.1985『モリ・ヤス』『弥生文化の研究』5、雄山閣



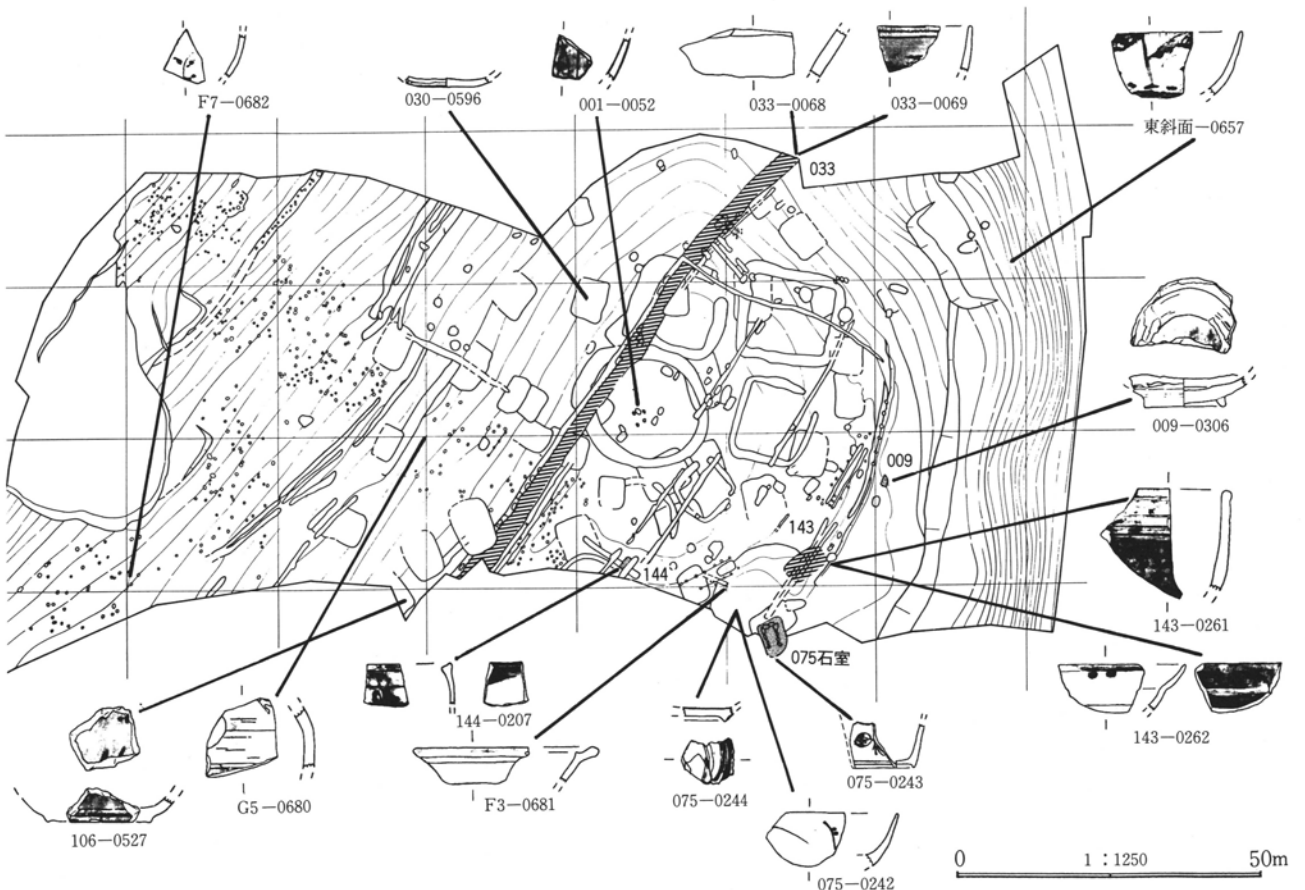
7 陶磁器

本遺跡で出土した陶磁器は、次の通りである。

時代 種類	古代				中世				近世							
	形態				供膳		調度		調理		供膳		調度		灯火	
					磁器		陶器		磁器		陶器					
舶載陶磁					0052											
国産陶磁	0680		0244		0261		0068		0243 0242 0682 0657		0262 0681 0306 0527 0069		0207		0596	

以上の出土種類を見ると、近世の供膳形態が個数的に多いが、これは比較的可搬なものであり一般的な範囲を特に越えるものではない。むしろ点数は少ないが、中世の調理形態と舶載の供膳形態が存在することが注目される。特に前者は、居住遺構との関連で考えるのが妥当である。

出土遺構と近い時代と考えられる（いずれも上層出土）のは、道路跡033号遺構からの常滑系焼締陶器コネ鉢片（0068）・肥前陶胎染付碗片（0069）、堅穴143号からの瀬戸美濃天目釉鉢片（0262）・同釉段皿片（0261）、土坑009号の瀬戸美濃志野釉皿片（0306）、土坑144号からの瀬戸美濃飴釉香炉片（0207）である。また古墳001号出土の竜泉窯青磁鎗蓮弁文碗片（0052）は、重複する033号からの混入であり、古墳075号石室からの肥前染付猪口片（0243）は、この石室の開口の時期18世紀後半を示している。



第Ⅳ章 遺構の特徴

1 弥生時代の集落変遷

前章で検討した土器の下層での出土状況、及び重複と遺構配置より竪穴住居を主体とする集落の変遷は、次のように考えることができる。

規模	時期 立地	1期	2期	4期	合計	備考
小型 10～ 20m ²	西斜面	0	1	0	1	
	台地上	0	1	0	1	
	東斜面	3	0	0	3	
	計	3	2	0	5	
中型 21～ 40m ²	西斜面	3	5	0	8	
	台地上	4	4	1	9	
	東斜面	2	1	0	3	
	計	9	10	1	20	
大型 41～ 60m ²	西斜面	2	0	0	2	
	台地上	5	3	0	8	
	東斜面	0	0	0	0	
	計	7	3	0	10	
合計		19	15	1	35	
火災数		3(7)	2(9)	0	5(16)	()は含推定
火災率%		16(37)	13(60)	0	14(46)	()は含推定

1期（弥生後期中葉） 全体に分布する合計19軒の竪穴の集落が生まれた。比較的東斜面側に分布が濃い。等高線に平行する方向に主軸を持つものが多く、規模は台地上に広場状の空間をもって展開する大型のもの割合が高い。鉄鍬2点と共に、他に有茎石鍬などの石鍬がある。銅釧ももたらされている。確実な火災率は15%強である。台地上西端で等高線に直交して重複する2軒の竪穴があるが、これは火災を受けたものの再建と考えられる。そのため、これら全体が同時存在していたわけではない。

2期（弥生後期中葉） 分布の中心が西斜面側によった状態で合計15軒の竪穴集落が継続する。広場状の空間は南西側に移る。台地上とその周辺のもの、やや西に寄った南北方向に主軸を持つものが大半を占め、前期に比べ大型の割合が減る。西斜面では、テラスを築いた計画的な竪穴築造の痕跡が見られるが、途中で中断した状態である。鍬類の出土は前期と同様だが、石包丁や紡錘車類の所有も増える。火災率は、確実なものはほぼ変化ないが、可能性のあるものを加えると前代の倍近くになる。

3期（弥生後期後葉後半～古墳前期前葉） この時期には、居住が全く認められない。

4期（古墳前期中葉） 僅かに台地上に正方形に近い形態の1軒の中型竪穴が見られるのみ。

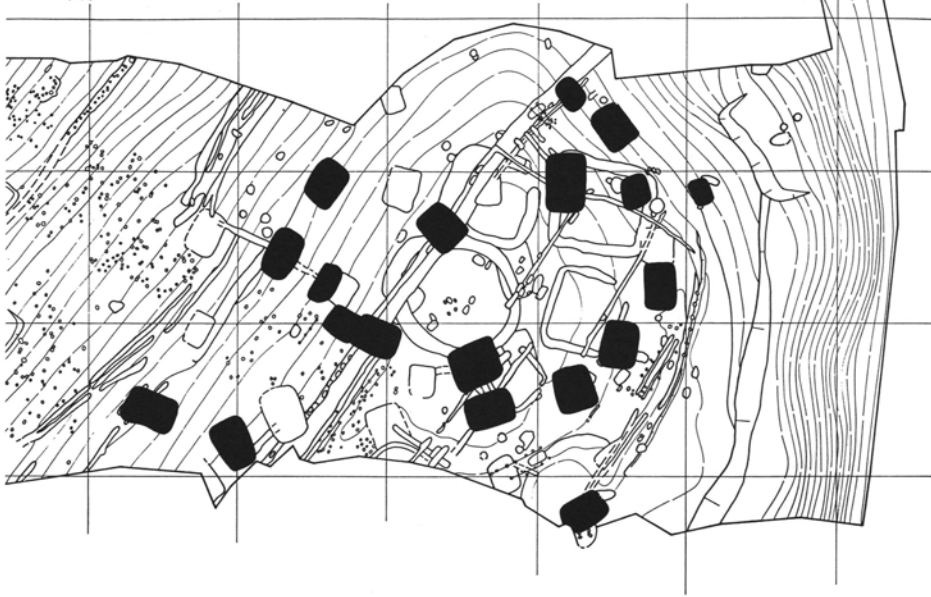
以上をまとめれば、本遺跡での竪穴住居集落は、弥生後期中葉のみの期間に突然一定の規模を持って出現し、比較的短期間栄えた後に急速に消滅したことになる。古墳時代前期にほんの少数再生する。

なお、1・2期の竪穴は一部重複が見られるように、それぞれ全てが同時期に存在したわけではない。ただし、資料的にはこれ以上の時期細分は難しい。また隅丸長方形の形状を示すものが全体の半数程度であり、さらに6本支柱穴を持った構造のものが小型以外で比較的多く見られる。

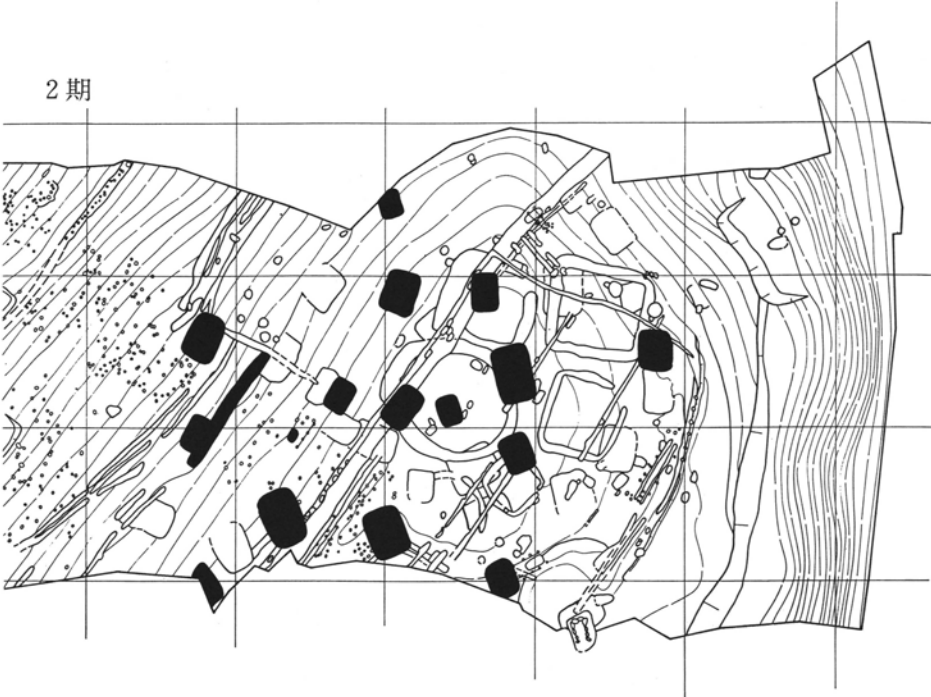
注

確実な火災とは炭化材の残存するものであり、推定火災とは埋土下層に焼土を含んだり、炉以外の床面に焼土の散るものである。

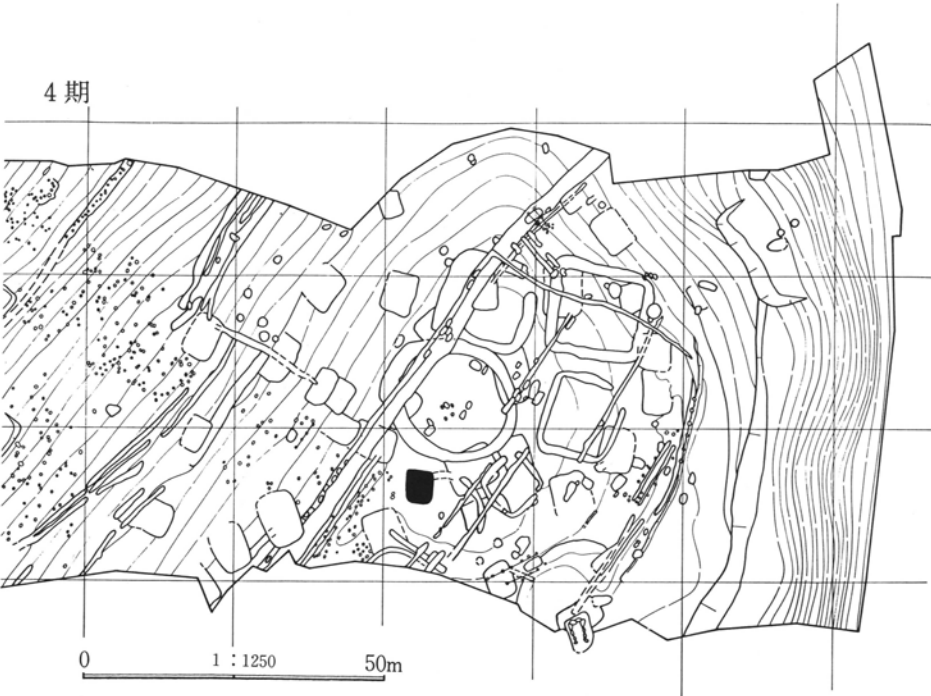
1 期



2 期



4 期



0 1 : 1250 50m

2 弥生から古墳の墓制

ア 弥生時代後期 1基の壺棺墓(031号)と2基の円形周溝墓(096・097号)がある。壺棺墓は、台地上北東端にあり、後期中葉の堅穴と近接した位置にある。一方、円形周溝墓は台地上南西側に連なっており、後期中葉の堅穴群の上に築かれるが、古墳前期の堅穴に一部が壊されている。

両者の墓制の間には大きな差があり、壺棺墓は古墳前期の方形周溝墓築造時には全く意識されていなかったが、円形周溝墓群は一部が堅穴に壊されたとは言え、その後の方形周溝墓はこれらを避けて作っている。

031号の壺棺そのものは、類例のない器形だが、やや似たものが僅かに西約10キロ離れた富岡市丹生の和田遺跡の5号住居跡(土器以外に鉄鏃共伴)で出土している。口縁外面に突帯がある点が異なるが、撫で肩の器形と外面が無文で研磨している(厳密にはコバメ調整)点と、大きさ(口径22 最大径35cm)に類似がある。報告では古墳時代初頭とするが、共伴遺物は樽及び赤井戸系の土器で明確な古墳時代の土器は見られない。そのため、031号の壺棺と和田の5号住を同時期とすれば、弥生後期後葉と考えるのが妥当だろう。

一方、円形周溝墓は古墳前期より古く、壺棺墓と併存していた可能性も考えられる。残念ながら、墓制の差及び立地の別については、明確な理由を語る材料がない。

イ 古墳時代前期 次の4基の方形周溝墓がある。南西側の前代の円形周溝墓に続く形で、台地先端に向かって連なっている。

いづれも主体部は全く不明。立地状態から考えると他と比べ主軸を等高線に平行していない022号は、明らかに不安定な位置のため、最も後出するものだろう。内部面積は、大きく3段階(大022号162m²・中041,067号110~128m²・小077号50m²)に分かれる。077号は円形周溝墓096号に接しており、077号築造時に096号のマウンドが残っていた可能性が高い。だが、この096号は、古墳前期堅穴089号に一部壊されている。

方形周溝墓群の時期を特定する遺物はほとんどないが、僅かに041号の溝上層から2個の土師器小型土付甕(0112,13)が出ており、それは096号及びその北の土坑136号出土のものと同類である。そのため、方形周溝墓群と堅穴096号・土坑136号は基本的に同じ古墳時代前期の遺構とすることができる。ただし円形周溝墓との関係から、先行する3基は堅穴096号より古い可能性がある。またこの堅穴・土坑との関係は判然とはしない。

ウ 古墳時代後期 2基の古墳がある。方形周溝墓群内の台地上で検出した001号は、長軸を南東に向けた楕円形に近い形状(16×18m)で、多くの埴輪を伴っている。主体部は横穴式石室の可能性はある。一方、東斜面上の075号は、長軸が南南東で、多角形状の葺石を用いた山寄せ型横穴式石室墳である。埴輪はない。

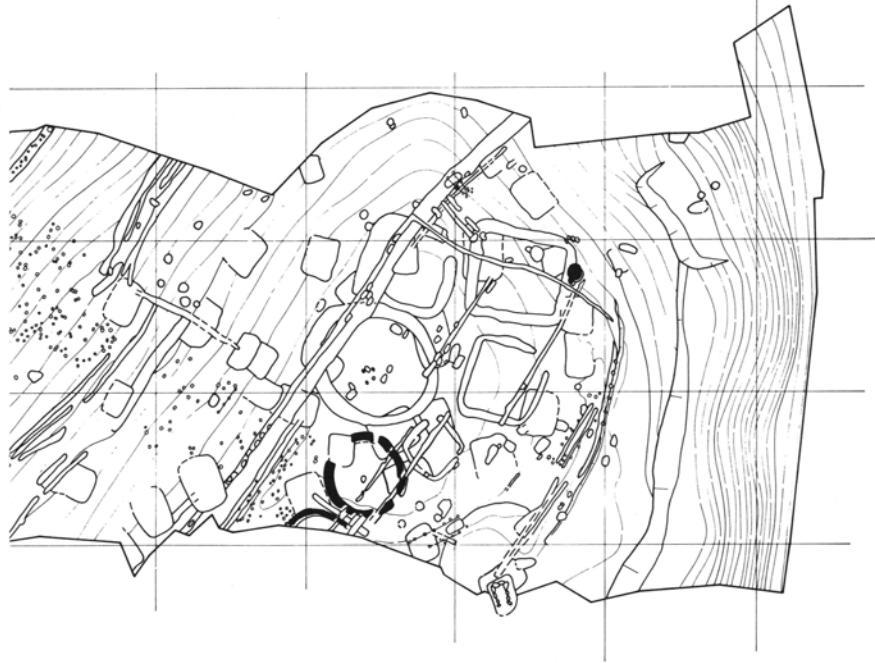
001号の立地は、明らかに方形周溝墓群を意識している。築造時にはそれらのマウンドが残っていた現れであり、また台地上の限られた空間に掘で囲まれたものを築くとの意識が強い。埴輪の状況より6世紀後半代の時期と考えられる。

075号は、南南東側の平地部から見上げられた景観を意識しての立地である。葺石もその意味が強く、平面的な多角形はあまり積極的な役割がないだろう。また開口部の方向には、2.3km離れて石材供給地の天引山が望見できる。石室構造より7世紀初頭前後の築造と思われる。

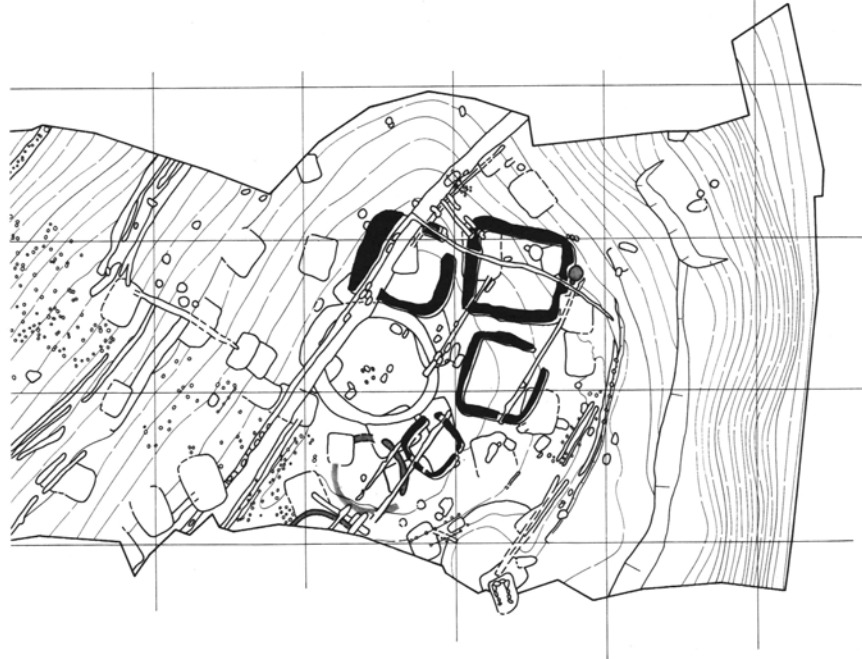
両者は、『上毛古墳総覧』(昭和10年)には記されていないが、近世後半には開口していた075号については『上野国郡村誌』(明治10年代)には存在が見える。001号の形状は、東に400m離れた天引口明塚遺跡1号墳に似ている。

参考 和田山遺跡調査会.1994 『和田遺跡』、富岡市教育委員会
群埋文.1992 『神保下條遺跡』 同.1996 『長根安坪遺跡』

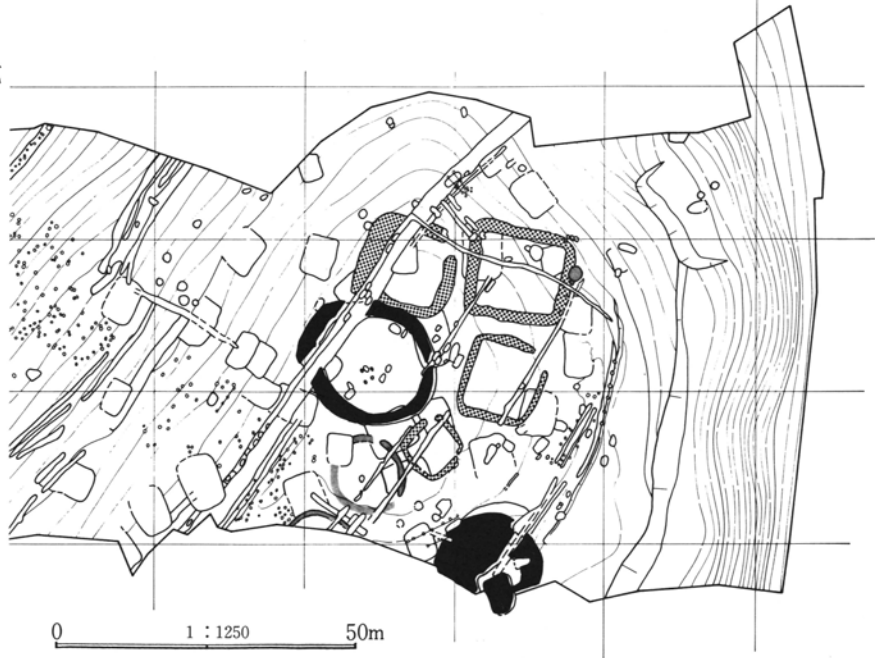
弥生時代



古墳時代
(前期)



古墳時代
(後期)



弥生時代 ■
古墳時代 (前期) ▨

0 1 : 1250 50m

3 ヤナ状構造物

低地部A区で検出した構造物101号遺構(141頁)は、旧河川の流路に対して直交する方向に4本の横材(長2m以上)を杭で固定し、その間を流路に平行に短い棒材を掛けている。また、そこから少なくとも右岸に向かって杭列が延びている。下流側に少し離れて2カ所に見えるやや短めの構造物材は、杭が少ないことから、4本の横材のある場所から流された可能性が考えられる。

この出土状況から構造物の性格は、1)堰(いわゆる「しがらみ」)・2)橋・3)ヤナがまず想定できる。

1)は、流路に対して直交して乱雑に杭を打ち、そこに任意の大きさの横材をかける形のものである。弥生時代の池子遺跡群(神奈川県逗子市)や古墳時代の下田遺跡(新田郡新田町)の例に見られるように、杭と横材の配置は不規則である。

2)は、本格的な橋脚を持つ場合は、何らかの形でその痕跡が検出されるはずである。また簡単な丸木橋のような橋脚を持たない場合は、流路を横断する本体の渡河部分が見られねばならない。

3)は、流路全体に対して魚の通過可能流路を制限する部分と、魚を捕獲する部分よりなる。朝日遺跡(愛知県清洲町)の弥生後期溝(自然の谷と接続)で検出されたものがある(次頁図1)。狭い断面U字形の溝(底幅3m弱)に杭と網代のある部分そして杭の上に簀の子の残っていた部分の二つが7mほどの間隔で見えられている。人工の溝(環濠)に設置されたため、流路制限施設は見られない。

以上の各施設の特徴を考えると、本例は固定された4本以上の流路直交横材が漁獲部分で、それに続く杭列が流路制限部分と見ることができ、3)のヤナの可能性が最も大きい。横材部分では、朝日遺跡のような網代や簀の子は検出しなかったが、これは堰とするにはかなり企画的であり、またそうであるにもかかわらず橋脚痕や渡河構造が確認できないことが、ヤナ想定の根拠である。

朝日遺跡以外のヤナ遺構の存在は管見では不明だが、『石山寺縁起』(14世紀前半成立)に描かれた宇治川に設けられたヤナの図がある(次頁図2)。上流に向かってV字形に杭列を配置し、中央の漁獲部分に簀の子を斜めに設置している。簀の子は横幅が人が二人ほど座れるほどの幅で、長さはその倍程度あり、小屋組がなされている。長方形板状の簀の子は上下両面に横材が組まれているようで、下面の横材の下に支え用の杭列があるようである。

この『石山寺縁起』のヤナの構造を本例と比べると、漁獲部分を区切る流路に平行な杭列はない。あくまで流路に直交する数段の横材を杭で支える構造である。そのため、長方形板状の簀の子の設置は考えにくく、単に横材の間に部分的に棒材を用いながら細い枝状のものを並べた粗い網代の設置が考えられる(推定復元図 次頁図3)。

なお、三途川の水源地は、調査地点から僅か1km程度の距離しかなく、『石山寺縁起』に描かれた宇治川のような水量は全く考えられない。しかし、調査では想像を越えた量の流木を検出しており、雨季の水量がある程度あったことは確かである。また杭の作成には、わざわざ周辺には自生していないアカマツを探して作っている。ヤナであるなら、それなりの漁獲量があったことは間違いない。

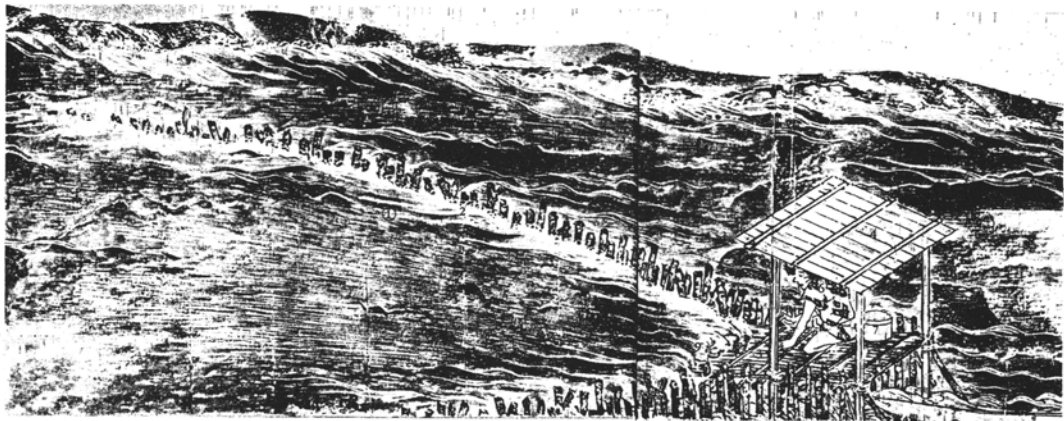
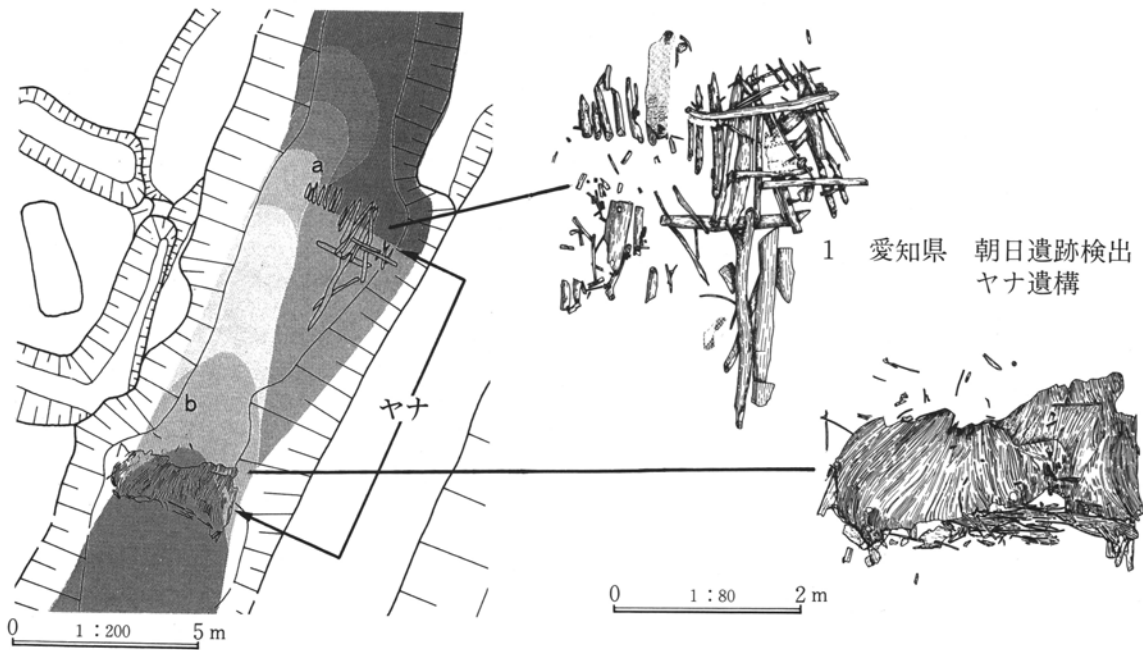
参考

愛知県埋蔵文化財センター.1991『朝日遺跡I』

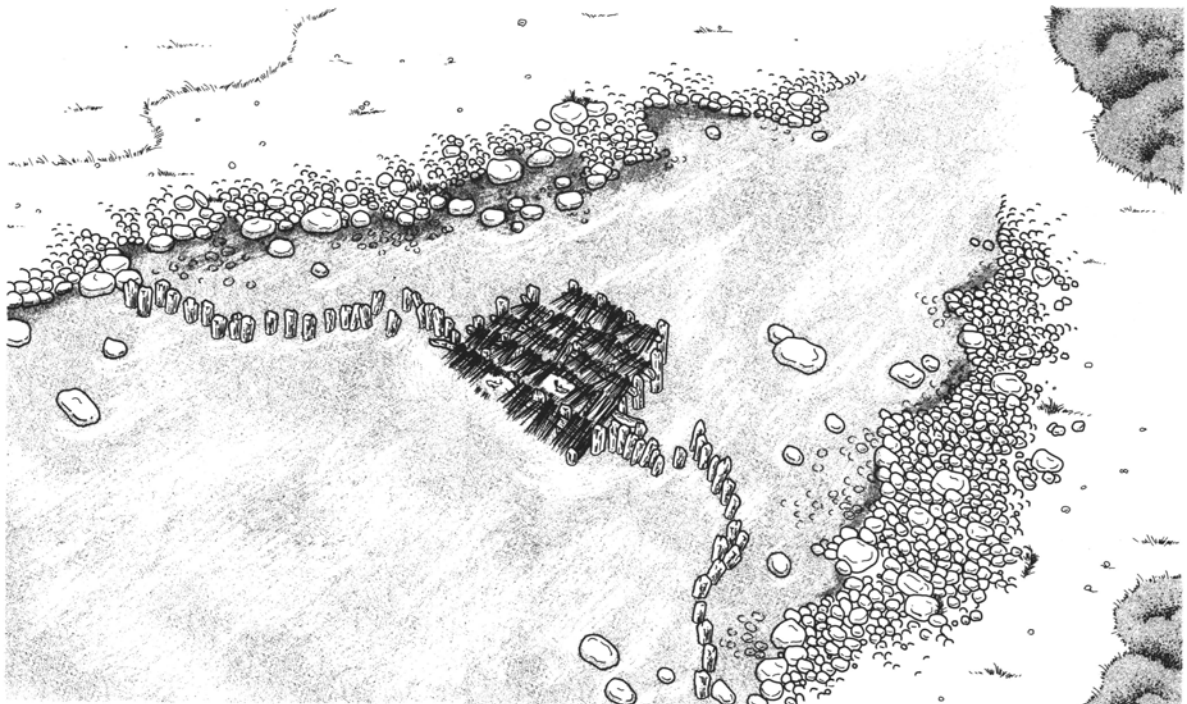
神奈川県考古学財団.1995『甕の池子の歴史』

渋沢敬三.1984『絵巻物による日本常民生活絵引 3』

鈴木充・武部健一.1996『日本の美術362 橋』、至文堂



2 石山寺縁起絵巻に描かれたヤナ



3 101号遺構推定復元図

4 中世の道路遺構

台地部中央を北北東-南南西方向に走る道路033号は、台地を深く削りだして築かれた切り通し状の大きな道（上幅3m下幅2m深さ0.8m）である。既述のように現在の農道にまで続くこの道の開削の時期については、直接決定する資料は見いだせなかった。ただ、重複する古墳001号で検出された竜泉窯青磁碗片（0052）は、13世紀後半～14世紀前半頃と考えることができるため、033号の上限は少なくともその時期より新しいことはないと思われる。

この道路の造成はかなり大規模なものであり、それを必要とする理由が何であったかを考えてみたい。

現在知られている周辺の中世遺跡には、次のものがある。

- **城郭** 【倉内城】（南500m）堀・土塁跡残存。小幡氏の倉内弾正（16世紀中葉）の居館とされる。内部に下記笠塔婆がある。
 - 【仁井屋城】（北700m）【麻場城】（北西900m）堀・土塁残存。両者で別城一郭を形成。小幡氏同族の白倉氏居城（16世紀中葉）。
 - 【大類屋敷】（北西1.3km）残存不良。大類氏居館跡（16世紀中葉）。
 - 【天引城】（南南東2.4km）旭岳（448m）の山頂部。堀など残存。甘尾若狭守の築城（16世紀）。
- **石造物** 【倉内笠塔婆】（南500m）2基。正安1（1299）年銘と嘉暦1（1326）年銘。倉内城内に残る。後者の所在地は弾正塚と呼ばれる。
 - 【中宿笠塔婆】（南東600m）4基。いずれも正安4（1302）年銘。
 - 【小川大日板碑】（西北西1.8km）仁治3（1242）年銘の長大なもの（高3.5m）。金剛界五仏表示。伝鎌倉街道の橋石に転用されていた。
- **その他** 【伝鎌倉街道】（北800m）仁井屋城・麻場城・大類屋敷のすぐ北側を走り小川大日板碑がある。
 - 【白倉神社】（南南西5km）熊倉山系の一峰（666m付近）を神体とする天狗信仰地。『神道集』（14世紀成立）に「白鞍大明神」として伝説が残る。
- **文献** 「上野国額部庄内小幡・白倉・新屋郷」文応1（1260）年

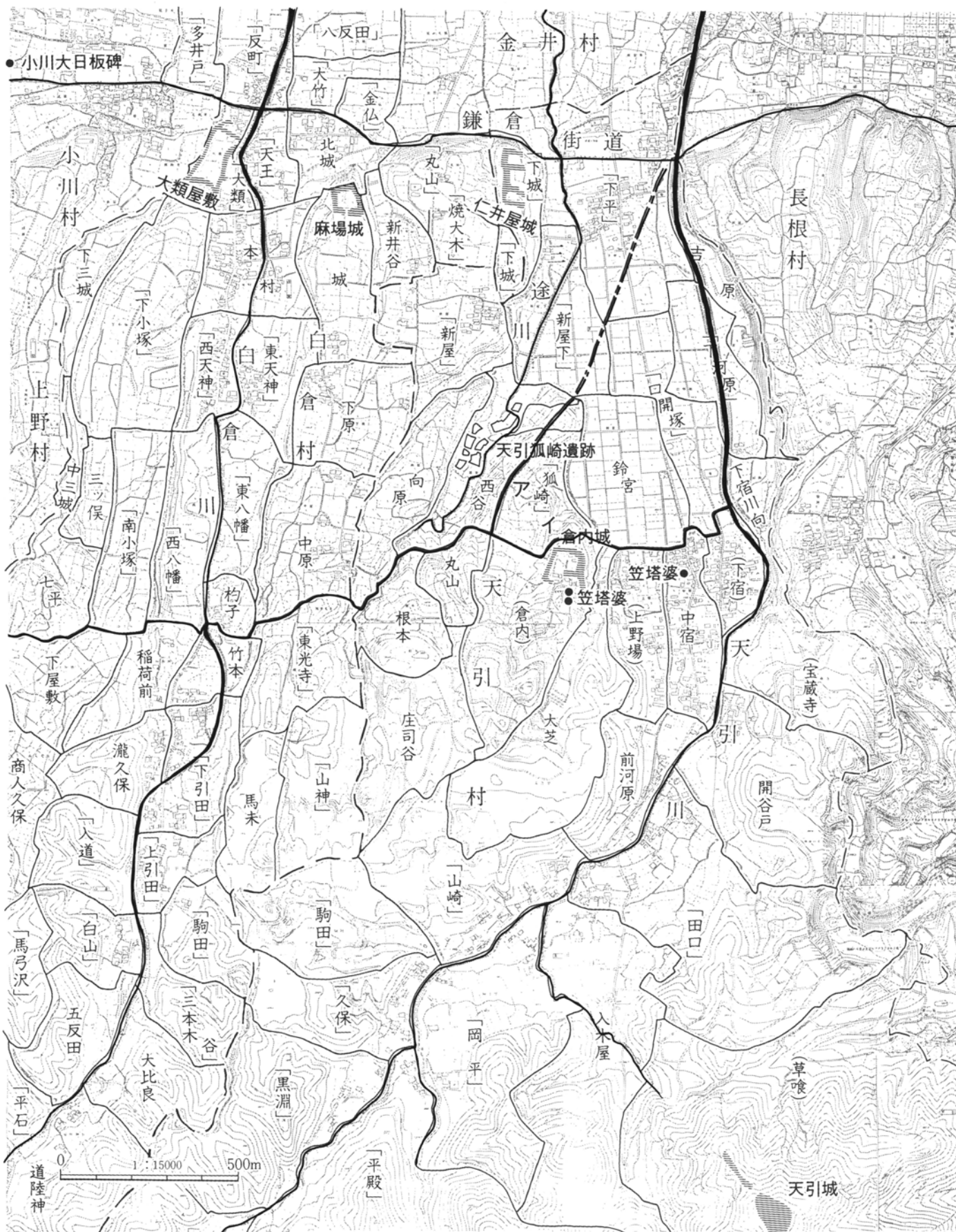
調査地の周辺でこの道路は、台地の走向に併せて中央を走り、それが字狐崎と西谷の境界になっている。倉内城は山城である天引城を除く城館の中では、唯一伝鎌倉街道に沿わない位置にある。だが、倉内城と東の中宿に残る笠塔婆の存在は、少なくとも13世紀末には周辺に一定の経済力を持った集団が存在したことを示している。

以上より推定すれば、倉内城の北側に少なくとも西に向かう伝鎌倉街道と平行する東西走向の道路（次頁図イ）があり、本調査で検出した道路は、伝鎌倉街道の天引川渡河点からこの南側の道路に向かう道（ア）と考えたい。また、この道路の開削は、白倉神社を目指した方向を意識した可能性が高い。

この南側の道路を西に向かえば、約3kmで中世に甘楽郡最大の勢力であった小幡氏の本拠小幡に至る。倉内城居住者は小幡氏の同族とされていることなどから、小幡氏の勢力拡大の中で開設された道路ではないだろうか。小幡氏の存在は13世紀後半には確認されており、上記のような本道路の年代と一致している。

参考

- 甘楽町.1975『新屋村—その史話と名物』、同.1979『甘楽町史』
- 群馬県教育委員会.1988『群馬県の中世城館跡』
- 群馬県文化事業振興会.1983『上野郡村誌9甘楽郡(2)』



「」寛永14年 天引村・臼倉村御繩打田畑 旧天引村・臼倉村の小字と中世遺跡
 水帳に残る字名

() 享保11年 天引村林改帳に残る字名

字名は『上野国群村誌』(明治初年)による

5 黒曜石類と遺物埋没課程

本遺跡では、中高瀬観音山遺跡と同様に、黒曜石及びチャートなどの石鏃を中心とする小型石器類・剥片の遺構内からの出土が多かった。重量別の出土分布は図に記した通りである。その遺構層位別土器類との関係は次の通りである（括弧内は報告遺物の混入土器類重量百分比。報告遺物は混入遺物を重視して選択したため全出土量よりは高率の傾向となる）。

10グラム以上出土

近世地震跡129号上(100) 古墳001号下(61)
 弥生堅穴040号上(0)・069号下(3)・071号下(1)
 ・100号上(50)下(1)・112号下(1)
 ・土坑095号下(0)

20グラム以上出土

近世溝068号上(0)・002号上(100) 古墳075号下(73)・方形周溝墓041号上(69)
 弥生堅穴032号下(0)・071号上(30)・082号上(100)・083号上(100)・087号上(22)・099号上(100)・107号上(0)・108号下(1)・131号上(41)・133号上(13) 弥生土坑085号上(56)

50グラム以上出土

中世道路033号上(69)下(100)・古墳001号上(17)・075号上(49)・方形周溝墓022号上(100)
 弥生堅穴098号上(84)

100グラム以上出土

近世 溝042号下(0)

弥生堅穴以外の出土遺構の大半は、本来生活遺物の少ない溝や古墳などの大型の遺構で混入率も高いため、自然な混入だろう。弥生堅穴下層出土の場合、071号は上層でより多いため混入と思われるが、他は土器の混入率も低く同時代の可能性が高い。100号からは黒曜石有茎石鏃(3094)が出ている。石鏃出土と混入率の関係は、次の通りである。

有茎石鏃出土 026号下(0)上(47)・083号上(100)・090号上(100)・098号下(2)上(84)・100号下(1)・133号下(3)上(13)

無茎石鏃出土 030号下(7)・070号上(45)・071号下(1)・088号下(100)・089号上(100)・100号上(50)・104号上(100)・107号上(0)・113号下(0)

混入率の高いものと低いもの両者があるようで、有茎石鏃は比較的混入率が低い。

種類	黒曜石	チャート
g		
0~10	●	▲
11~50	●	▲
51以上	●	▲

第 V 章 分析成果

1 黒曜石分析

鈴木正男（立教大学一般教育部） 戸村健児（立教大学原子力研究所）

A はじめに

天引狐崎遺跡97点、北西ノ久保遺跡（長野県佐久市）71点、および中高瀬観音山遺跡（群馬県富岡市）121点、総計289点の黒曜石について黒曜石分析を行った。その結果をここに報告する。

黒曜石分析は黒曜石の産地推定と水和層年代測定からなる。即ち考古学的黒曜石の多様な属性のうち二つ、運搬あるいは交易による移動の方向と距離（空間系）とそれが行われた年代（時間系）を同時に明らかにする。

遺跡出土黒曜石の原産地は、熱中性子放射化分析と判別分析法(Suzuki & Tomura, 1983; Suzuki et.al. 1984 a, b)によって推定した。黒曜石の産地の判別には、日本全国30箇所を越える黒曜石原産地のそれぞれ100点の測定値に基づき、多変量解析プログラム DISCRIM (SAS)を用いた。

また、年代は黒曜石水和層年代測定法によって測定し、水和速度は前橋における補正值0.88を用いた。

B 黒曜石分析結果

以下に、それぞれの遺跡出土黒曜石の分析結果をまとめて示し、個々のデータについては後述した。

〔天引狐崎〕

	計	HOSHIGAT	WADATOGE
2,400±250	13	13	0
3,900±250	68	61	7
5,300±400	10	10	0
離散値 6,700	1	1	0
8,200±100	3	1	2
離散値 9,200	1	0	1
離散値 10,900	1	0	1
計	97	86	11

〔北西ノ久保〕

	計	HOSHIGAT	YATUSGAT	不明
測定不能	2	0	1	1
2,000±150	3	3	0	0
3,150±100	4	4	0	0
3,750±200	34	34	0	0
4,650±250	16	16	0	0
5,850±350	10	10	0	0
10,900±150	2	2	0	0
計	71	69	1	1

〔中高瀬観音山〕

	計	HOSHIGAT	OMEGURA	WADATOGE
1,850±300	10	3	0	7
3,250±150	6	2	0	4
離散値 3,750	1	0	0	1
離散値 4,300	1	1	0	0
離散値 4,900	1	1	0	0
5,650±200	27	17	2	10
6,950±400	15	6	5	9
7,900±200	26	17	0	7
8,950±200	24	2	0	17
9,850±100	4	2	0	2
10,950±100	4	0	0	4
離散値 12,450	1	1	0	0
離散値 13,800	1	1	0	0
計	121	53	7	61

参考文献

- Suzuki, M. 1973: Chronology of prehistoric human activity in Kanto, Japan-Part I. J. Fac. Sci., Univ. Tokyo, Sec. V (Anthropology), Vol. IV, 241-318.
- Suzuki, M. and Tomura, K. 1983: Basic data for identifying the geologic source of archaeological obsidian by activation analysis and discriminant analysis. St. Paul's Review of Science, 4, 99-110.
- Suzuki, M., Kanayama, Y., Aoki, Y., and Tomura, K. 1984a: Intrasite obsidian analysis of the Hashimoto site, Sagami-hara-shi, Kanagawa-ken, Japan. St. Paul's Review of Science, 4, 121-129.
- Suzuki, M., Kanayama, Y., Ono, A., Tsurumaru, T., Oda, S., and Tomura, K. 1984b: Obsidian analysis: 1974-1984. St. Paul's Review of Science, 4, 131-140.

天引狐崎遺跡

遺物番号	Sm	U	Th	Hf	Sc	Fe	La	水和	原産地	年代	遺構	層位	形状
3001	6.05	4.10	10.70	3.58	2.97	0.46	18.70	6.10	HOSHIGAT	8,200	026	上	剝片
3002	8.98	10.50	33.70	4.50	5.84	0.57	26.20	5.20	WADATOGE	3,900	026	上	剝片
3003	6.70	4.10	12.20	3.62	3.47	0.42	19.90	4.20	HOSHIGAT	3,900	026	上	剝片
3004	6.67	3.50	12.00	3.96	3.76	0.52	19.40	4.10	HOSHIGAT	3,900	026	上	剝片
3005	6.19	4.10	11.90	3.67	3.29	0.40	18.60	4.10	HOSHIGAT	3,900	026	上	剝片
3006	6.15	4.00	11.20	4.29	3.33	0.46	17.40	4.30	HOSHIGAT	3,900	026	上	剝片
3007	5.25	2.90	9.90	3.35	2.80	0.43	15.40	3.90	HOSHIGAT	3,900	026	上	剝片
3008	9.88	11.40	34.10	4.60	6.44	0.56	28.50	8.70	WADATOGE	10,900	030	上	剝片
3009	6.33	3.40	12.40	4.45	3.50	0.47	18.80	4.30	HOSHIGAT	3,900	030	下	剝片
3010	6.06	3.70	11.40	4.35	3.24	0.38	18.10	4.20	HOSHIGAT	3,900	030	No.46	剝片
3011	6.03	3.70	11.10	3.88	3.08	0.44	16.70	5.10	HOSHIGAT	5,300	032	不明	剝片
3012	6.49	4.50	11.90	3.56	3.50	0.44	19.00	4.30	HOSHIGAT	3,900	032	不明	剝片
3013	6.64	3.20	12.10	4.26	3.61	0.43	18.80	4.30	HOSHIGAT	3,900	032	不明	剝片
3014	6.48	4.20	11.70	4.38	3.31	0.57	19.60	4.20	HOSHIGAT	3,900	032	床下	剝片
3015	8.38	9.40	32.70	5.43	5.68	0.56	27.30	5.10	WADATOGE	3,900	040	上	剝片
3016	6.68	5.10	12.40	3.94	3.15	0.62	20.70	4.20	HOSHIGAT	3,900	070	No.13	剝片
3017	6.43	3.90	12.10	3.54	3.59	0.59	19.20	4.10	HOSHIGAT	3,900	070	No.46	剝片
3018	6.52	3.80	11.80	4.15	3.24	0.47	17.90	3.50	HOSHIGAT	2,400	070	No.51	剝片
3019	6.08	4.00	11.00	3.66	3.26	0.53	18.00	4.20	HOSHIGAT	3,900	070	No.75	剝片
3020	6.23	3.40	12.00	3.95	3.32	0.37	17.70	4.30	HOSHIGAT	3,900	070	No.80	剝片
3021	6.35	4.40	11.60	4.36	3.30	0.49	19.90	4.10	HOSHIGAT	3,900	070	No.120	剝片
3022	6.44	3.10	12.10	3.57	3.32	0.49	19.10	3.90	HOSHIGAT	3,900	070	No.125	剝片
3023	6.34	4.10	12.70	3.27	3.28	0.55	20.10	3.20	HOSHIGAT	2,400	070	No.140	剝片
3024	8.85	10.40	33.70	6.04	6.01	0.59	25.40	5.20	WADATOGE	3,900	070	No.149	剝片
3025	6.63	3.40	12.90	3.67	3.67	0.47	20.10	3.40	HOSHIGAT	2,400	070	No.151	剝片
3026	6.31	4.20	11.30	3.50	3.29	0.44	19.30	3.50	HOSHIGAT	2,400	071	上	剝片
3027	6.67	3.80	11.20	3.72	3.20	0.40	19.20	4.10	HOSHIGAT	3,900	071	上	剝片
3028	6.42	3.50	11.20	3.93	3.37	0.45	18.40	4.20	HOSHIGAT	3,900	071	上	剝片
3029	6.27	3.50	11.70	3.87	3.37	0.43	18.40	3.20	HOSHIGAT	2,400	071	No.59	剝片
3030	6.49	3.50	12.00	4.03	3.35	0.47	20.20	5.10	HOSHIGAT	5,300	071	No.104	剝片
3031	5.62	2.80	10.40	4.19	2.95	0.46	15.80	4.20	HOSHIGAT	3,900	071	No.116	剝片
3032	5.22	2.90	9.50	2.57	2.91	0.44	15.70	3.40	HOSHIGAT	2,400	071	No.116	剝片
3033	6.42	3.00	10.30	2.82	2.79	0.45	15.30	4.10	HOSHIGAT	3,900	071	上	剝片
3034	6.50	3.70	11.50	4.96	3.41	0.51	18.30	3.50	HOSHIGAT	2,400	074	No.46	剝片
3035	6.61	5.20	12.20	4.96	3.53	0.47	19.30	3.90	HOSHIGAT	3,900	074	No.74	剝片
3036	6.10	3.50	11.90	3.76	3.21	0.53	18.40	4.20	HOSHIGAT	3,900	081	No.7	剝片
3037	6.21	4.20	12.00	3.50	3.41	0.55	18.50	4.20	HOSHIGAT	3,900	081	No.7	剝片
3038	6.55	4.10	13.30	4.39	3.46	0.56	19.60	4.10	HOSHIGAT	3,900	081	No.23	剝片
3039	6.50	4.30	12.60	3.94	3.49	0.54	19.50	3.10	HOSHIGAT	2,400	082	下	剝片
3040	6.33	4.30	12.00	3.73	3.39	0.57	18.40	4.00	HOSHIGAT	3,900	082	上	剝片
3041	8.32	10.20	34.10	4.72	5.52	0.85	25.90	5.00	WADATOGE	3,900	083	No.3	剝片
3042	6.26	4.20	12.10	3.75	3.47	0.46	19.70	4.50	HOSHIGAT	3,900	083	No.3	剝片
3043	6.59	3.90	12.50	3.55	3.55	0.59	18.80	4.30	HOSHIGAT	3,900	083	上	剝片
3044	8.21	9.40	32.00	5.28	5.54	0.57	34.60	5.30	WADATOGE	3,900	087	No.1	剝片
3045	8.01	8.00	31.50	4.56	5.41	0.61	33.30	7.50	WADATOGE	8,200	088	No.6	石鏃
3046	8.29	4.50	12.60	3.87	3.35	0.47	19.80	4.60	HOSHIGAT	5,300	088	上	剝片
3047	6.36	3.60	12.60	4.28	3.43	0.48	19.30	4.20	HOSHIGAT	3,900	088	上	剝片
3048	6.10	3.80	11.60	3.68	3.27	0.51	18.90	4.30	HOSHIGAT	3,900	088	上	剝片
3049	6.29	3.40	12.20	3.99	3.32	0.59	19.50	4.90	HOSHIGAT	5,300	088	上	剝片
3050	5.76	3.50	10.70	3.73	3.09	0.44	17.90	4.70	HOSHIGAT	5,300	088	上	剝片
3051	6.44	4.50	11.90	4.17	3.42	0.58	19.20	5.10	HOSHIGAT	5,300	089	上	剝片
3052	6.83	3.90	13.10	4.47	3.55	0.50	21.30	3.30	HOSHIGAT	2,400	089	上	剝片
3053	5.85	3.60	11.10	3.45	3.21	0.51	18.10	4.20	HOSHIGAT	3,900	089	上	剝片
3054	6.51	4.20	12.40	3.62	3.49	0.51	21.20	4.20	HOSHIGAT	3,900	089	上	加工剝片
3055	9.23	11.50	33.70	5.47	6.51	0.55	28.20	5.30	WADATOGE	3,900	089	上	石鏃
3056	6.37	4.20	11.80	3.72	3.38	0.56	19.90	3.50	HOSHIGAT	2,400	091	上	剝片
3057	5.89	3.80	10.80	4.15	3.26	0.51	17.60	4.10	HOSHIGAT	3,900	098	上	剝片
3058	6.29	3.60	12.00	3.62	3.36	0.50	19.10	4.30	HOSHIGAT	3,900	098	上	剝片
3059	6.58	3.80	13.20	4.13	3.51	0.54	20.20	3.10	HOSHIGAT	2,400	098	上	剝片
3060	6.26	4.10	11.30	3.76	3.37	0.44	19.50	4.30	HOSHIGAT	3,900	098	上	石鏃
3061	6.33	4.00	11.80	3.13	3.29	0.63	19.60	4.20	HOSHIGAT	3,900	098	No.44	剝片
3062	6.70	4.10	12.40	3.97	3.55	0.60	19.80	3.10	HOSHIGAT	2,400	099	No.6	剝片
3063	6.32	4.20	12.10	3.59	3.36	0.50	18.40	4.70	HOSHIGAT	5,300	099	No.20	剝片
3064	6.24	3.70	11.70	3.96	3.26	0.57	19.40	3.90	HOSHIGAT	3,900	099	No.21	剝片
3065	6.23	4.10	11.80	4.42	3.26	0.51	19.80	4.40	HOSHIGAT	3,900	099	No.36	剝片

第V章 分析成果

遺物番号	Sm	U	Th	Hf	Sc	Fe	La	水和	原産地	年代	遺構	層位	形状
3066	6.46	3.90	12.60	4.09	3.56	0.55	19.60	4.00	HOSHIGAT	3,900	099	No.38	剥片
3067	6.59	3.20	12.40	4.43	3.72	0.55	20.50	4.10	HOSHIGAT	3,900	099	No.64	剥片
3068	6.57	3.90	13.00	3.92	3.37	0.41	20.60	4.30	HOSHIGAT	3,900	099	No.65	剥片
3069	6.43	4.50	12.40	3.38	3.40	0.52	20.10	4.20	HOSHIGAT	3,900	100	No.45	剥片
3070	6.36	4.60	11.50	4.22	3.46	0.51	21.60	4.90	HOSHIGAT	5,300	100	No.60	剥片
3071	5.91	3.30	11.50	2.92	2.96	0.44	18.50	4.30	HOSHIGAT	3,900	100	No.60	剥片
3072	5.78	3.00	10.60	3.46	2.98	0.38	17.90	4.10	HOSHIGAT	3,900	100	No.69	剥片
3073	6.62	4.30	12.00	3.21	3.16	0.62	19.10	4.10	HOSHIGAT	3,900	100	No.69	剥片
3074	7.06	3.40	13.40	4.90	3.30	0.57	19.80	3.90	HOSHIGAT	3,900	131	No.6	剥片
3075	6.48	3.90	11.90	2.59	3.49	0.52	18.10	3.10	HOSHIGAT	2,400	131	No.12	剥片
3076	6.39	3.30	11.50	3.23	3.26	0.55	19.40	4.40	HOSHIGAT	3,900	133	下	剥片
3077	6.66	3.50	12.50	3.20	3.32	0.51	17.90	4.20	HOSHIGAT	3,900	133	下	剥片
3078	6.30	2.60	11.70	3.61	3.03	0.49	18.90	4.30	HOSHIGAT	3,900	133	下	剥片
3079	6.49	3.60	11.30	3.76	3.17	0.51	18.00	4.20	HOSHIGAT	3,900	133	上	剥片
3080	9.21	7.70	31.90	4.16	5.79	0.55	27.90	5.20	WADATOGE	3,900	133	上	剥片
3081	6.51	3.60	12.00	2.96	3.35	0.46	19.30	4.20	HOSHIGAT	3,900	133	上	剥片
3082	6.67	4.80	12.80	2.65	3.17	0.45	18.20	4.30	HOSHIGAT	3,900	133	上	剥片
3083	6.61	4.00	12.00	3.43	3.27	0.59	20.00	5.00	HOSHIGAT	5,300	133	上	剥片
3084	5.74	3.20	10.60	3.32	2.97	0.42	18.50	4.80	HOSHIGAT	5,300	133	上	剥片
3085	6.66	3.60	13.10	3.66	3.24	0.53	18.40	3.90	HOSHIGAT	3,900	133	上	剥片
3086	6.04	2.50	10.70	3.16	3.05	0.46	18.40	5.50	HOSHIGAT	6,700	133	上	剥片
3087	7.36	3.90	13.60	3.87	3.44	0.49	20.10	4.20	HOSHIGAT	3,900	133	上	剥片
3088	6.25	3.30	11.90	3.48	3.10	0.53	19.50	4.30	HOSHIGAT	3,900	133	上	剥片
3089	6.85	3.60	13.60	3.80	3.39	0.58	21.30	4.20	HOSHIGAT	3,900	133	上	剥片
3090	7.14	2.40	13.30	2.13	3.32	0.46	25.90	4.30	HOSHIGAT	3,900	133	上	有茎石鏃 剥片
3091	2.89	1.30	4.00	0.98	1.15	0.22	10.50	4.20	HOSHIGAT	3,900	133	下	剥片
3092	9.97	9.20	34.60	5.22	6.04	0.37	30.70	7.60	WADATOGE	8,200	071	No.69	
3093	6.46	3.80	12.40	3.39	3.23	0.45	17.70	4.20	HOSHIGAT	3,900	083	No.4	
3094	6.89	3.00	12.20	4.86	3.17	0.56	17.60	4.30	HOSHIGAT	3,900	100	No.9	
3095	6.14	2.80	11.10	3.82	3.13	0.48	18.40	4.20	HOSHIGAT	3,900	083	不明	
3096	5.55	3.00	11.00	3.29	3.05	0.45	18.30	4.20	HOSHIGAT	3,900	032	No.165	
3097	9.22	7.90	32.30	4.28	5.79	0.50	28.50	8.00	WADATOGE	9,200	旧河川	No.620	

北西ノ久保遺跡

No.	Sm	U	Th	Hf	Sc	Fe	La	水和	原産地	年代
001	5.76	3.00	10.90	3.74	3.11	0.58	18.00	3.10	HOSHIGAT	3,750
002	6.03	3.50	11.60	3.51	3.10	0.49	17.80	3.00	HOSHIGAT	3,150
003	5.87	3.50	11.20	3.38	3.15	0.47	17.70	3.50	HOSHIGAT	4,650
004	5.57	3.50	10.90	3.26	3.03	0.46	16.70	4.00	HOSHIGAT	5,850
005	5.93	3.50	11.30	3.41	3.10	0.46	17.90	3.10	HOSHIGAT	3,750
006	6.87	3.50	11.30	3.28	3.18	0.48	18.10	3.40	HOSHIGAT	3,750
007	5.55	3.50	10.80	3.20	2.49	0.40	15.60	3.20	HOSHIGAT	3,750
008	6.18	3.90	11.90	3.26	3.42	0.46	19.10	2.36	HOSHIGAT	2,000
009	6.00	3.00	11.90	3.05	3.40	0.46	18.60	2.99	HOSHIGAT	3,150
010	6.34	2.70	11.60	3.69	3.41	0.56	19.60	3.70	HOSHIGAT	4,650
011	5.78	2.60	10.60	2.79	3.22	0.56	16.60	3.54	HOSHIGAT	4,650
012	5.82	3.40	10.80	3.54	3.19	0.47	15.80	2.28	HOSHIGAT	2,000
013	5.88	3.30	11.70	3.22	3.32	0.40	15.50	2.52	HOSHIGAT	2,000
014	5.92	3.80	11.40	3.01	3.30	0.49	15.10	3.78	HOSHIGAT	4,650
015	5.86	3.10	11.20	2.81	3.17	0.46	16.60	2.99	HOSHIGAT	3,150
016	5.93	3.60	11.20	3.23	3.21	0.48	18.40	4.25	HOSHIGAT	5,850
017	5.62	3.20	11.60	3.06	3.09	0.51	17.80	5.51	HOSHIGAT	10,900
018	5.88	3.30	11.20	3.07	3.08	0.47	15.70	3.46	HOSHIGAT	4,650
019	5.80	3.10	11.50	3.44	3.14	0.47	16.10	3.23	HOSHIGAT	3,750
020	5.68	3.00	11.00	3.51	3.00	0.49	16.90	5.59	HOSHIGAT	10,900
021	6.22	3.40	12.10	3.60	3.45	0.48	18.70	3.23	HOSHIGAT	3,750
022	5.85	3.30	12.30	2.67	3.43	0.49	18.70	3.15	HOSHIGAT	3,750
023	5.87	2.80	11.70	3.37	3.30	0.44	17.50	3.78	HOSHIGAT	4,850
024	6.19	3.60	12.40	4.01	3.53	0.49	17.60	3.70	HOSHIGAT	4,650
025	5.74	3.50	10.80	3.24	3.35	0.53	16.70	3.62	HOSHIGAT	4,650
026	5.90	3.30	11.60	3.22	3.39	0.41	18.00	3.62	HOSHIGAT	4,650
027	5.77	3.80	11.20	3.47	3.33	0.46	16.50	4.25	HOSHIGAT	5,850
028	6.04	2.90	10.50	3.55	3.23	0.62	16.10	3.94	HOSHIGAT	5,850
029	5.85	3.20	11.70	3.49	3.18	0.44	16.90	3.23	HOSHIGAT	3,750
030	6.05	3.60	12.30	3.29	3.22	0.41	17.00	4.09	HOSHIGAT	5,850
031	5.89	3.60	11.20	3.09	3.11	0.58	17.20	3.23	HOSHIGAT	3,750
032	5.56	3.80	10.80	2.87	3.02	0.41	16.20	3.94	HOSHIGAT	5,850
033	5.88	4.10	11.00	3.96	3.26	0.47	19.50	3.31	HOSHIGAT	3,750
034	6.60	3.80	10.90	3.14	3.05	0.46	18.00	3.31	HOSHIGAT	3,750
035	5.79	3.20	11.30	3.99	3.14	0.47	18.70	4.01	HOSHIGAT	5,850
036	5.68	4.00	11.20	3.71	3.04	0.48	17.80	3.46	HOSHIGAT	4,650
037	5.71	2.90	11.00	3.34	3.15	0.43	18.90	3.62	HOSHIGAT	4,650
038	6.04	4.10	11.20	4.11	3.38	0.51	18.70	3.38	HOSHIGAT	3,750
039	5.70	4.00	10.70	3.26	3.17	0.47	16.40	3.94	HOSHIGAT	5,850
040	5.52	4.30	10.80	2.77	3.02	0.46	16.70	4.01	HOSHIGAT	5,850
041	5.45	4.20	10.30	2.87	3.01	0.47	18.40	3.31	HOSHIGAT	3,750
042	4.88	2.80	9.00	3.83	2.27	0.70	29.30		YATSUGAT	

1 黒曜石分析

No.	Sm	U	Th	Hf	Sc	Fe	La	水和	原産地	年代
043	5.79	4.60	10.60	2.84	3.22	0.43	16.50	3.31	HOSHIGAT	3,750
044	6.18	4.30	13.10	3.77	3.36	0.48	18.90	2.91	HOSHIGAT	3,150
045	5.55	3.20	10.80	2.92	3.15	0.44	17.70	3.70	HOSHIGAT	4,650
046	5.86	5.00	11.60	3.32	3.03	0.46	18.00	3.54	HOSHIGAT	4,650
047	5.57	3.60	10.60	3.02	3.09	0.48	17.30	3.23	HOSHIGAT	3,750
048	5.32	3.60	10.50	3.21	3.05	0.44	17.50	3.31	HOSHIGAT	3,750
049	5.51	3.70	11.00	3.18	3.12	0.48	18.50	3.54	HOSHIGAT	4,650
050	5.96	3.70	11.60	3.27	3.30	0.46	18.60	3.70	HOSHIGAT	4,650
051	2.91	0.00	2.60	2.03	29.80	5.05	11.60		HOSHIGAT	
052	5.47	4.40	11.00	2.97	3.07	0.45	18.00	3.23	HOSHIGAT	3,750
053	5.84	3.60	11.30	4.38	3.25	0.39	17.70	3.23	HOSHIGAT	3,750
054	8.60	4.10	10.60	3.45	3.06	0.44	16.00	3.23	HOSHIGAT	3,750
055	5.85	3.60	10.60	3.27	3.22	0.46	17.80	3.31	HOSHIGAT	3,750
056	5.87	4.00	10.70	3.43	3.26	0.48	18.80	3.38	HOSHIGAT	3,750
057	5.62	3.80	11.10	3.54	3.19	0.47	16.80	3.23	HOSHIGAT	3,750
058	5.51	3.00	10.90	3.10	3.04	0.45	17.30	4.25	HOSHIGAT	5,850
059	5.96	3.10	11.30	3.28	3.21	0.48	17.50	3.23	HOSHIGAT	3,750
060	5.54	3.60	10.60	3.28	3.01	0.41	17.20	3.38	HOSHIGAT	3,750
061	5.49	3.50	10.70	3.31	3.00	0.45	17.10	3.31	HOSHIGAT	3,750
062	5.47	3.50	10.90	3.25	3.00	0.41	17.00	3.31	HOSHIGAT	3,750
063	5.38	3.10	10.30	2.84	2.84	0.48	16.10	3.23	HOSHIGAT	3,750
064	5.54	3.50	10.90	3.16	2.94	0.46	17.60	3.16	HOSHIGAT	3,750
065	5.76	3.50	11.10	3.21	3.08	0.43	17.00	3.31	HOSHIGAT	3,750
066	5.67	3.30	11.40	3.55	3.03	0.49	18.90	3.23	HOSHIGAT	3,750
067	5.50	3.30	10.90	3.35	2.99	0.43	17.20	3.15	HOSHIGAT	3,750
068	6.68	3.50	10.40	3.44	2.94	0.47	15.60	3.31	HOSHIGAT	3,750
069	5.50	2.50	10.70	3.15	2.97	0.42	17.30	3.62	HOSHIGAT	4,650
070	5.50	3.20	10.70	3.39	3.08	0.42	17.60	3.31	HOSHIGAT	3,750
071	5.56	3.10	10.60	3.14	3.02	0.44	16.70	3.31	HOSHIGAT	3,750

中高瀬観音山遺跡

No.	Sm	U	Th	Hf	Sc	Fe	La	水和	原産地	年代	遺構	層位	形状
001	7.88	8.1	31.0	4.62	5.01	0.65	30.6	5.1	WADATOGE	3,750	014	下	剥片
002	7.62	8.1	30.1	4.58	4.88	0.61	30.0	7.4	WADATOGE	7,900	014	下	剥片
003	8.92	9.5	33.0	4.91	5.93	0.57	25.9	7.9	WADATOGE	8,950	014	下	剥片
004	8.83	9.5	32.5	4.84	5.88	0.51	25.8	7.9	WADATOGE	8,950	015	下	剥片
005	8.98	10.2	33.6	6.28	6.03	0.55	25.6	7.5	WADATOGE	7,900	080	下	剥片
006	8.96	10.1	32.8	4.73	5.98	0.54	25.5	6.3	WADATOGE	5,650	001	床下	剥片
007	6.17	3.8	12.3	3.67	3.35	0.61	18.5	5.9	HOSHIGAT	7,900	001	上	剥片
008	6.10	3.7	12.4	3.62	3.23	0.52	18.7	5.9	HOSHIGAT	7,900	015	下	剥片
009	6.32	4.1	12.5	4.23	3.41	0.58	18.2	5.9	HOSHIGAT	7,900	048	下	剥片
010	5.71	3.6	11.3	3.34	3.22	0.49	16.8	5.9	HOSHIGAT	7,900	048	下	剥片
011	8.45	9.1	33.2	4.85	5.27	0.66	31.4	6.7	WADATOGE	6,950	047	下	剥片
012	8.87	9.5	32.7	4.66	5.55	0.55	25.1	6.7	WADATOGE	8,950	070	床下	剥片
013	5.78	3.9	11.7	3.46	3.14	0.55	16.8	3.8	HOSHIGAT	3,250	080	下	剥片
014	6.12	3.6	12.3	3.30	3.32	0.53	18.4	2.8	HOSHIGAT	1,850	080	下	剥片
015	5.89	3.9	11.9	3.20	3.25	0.47	19.3	3.7	HOSHIGAT	3,250	080	下	剥片
016	6.56	6.1	24.4	3.98	4.07	0.66	29.7	6.3	OMEGURA	8,950	119	下	剥片
017	8.95	9.4	32.3	5.07	6.09	0.53	25.7	4.0	WADATOGE	1,850	145	下	剥片
018	8.70	9.5	32.4	4.45	5.78	0.55	24.9	6.3	WADATOGE	5,650	014	上	剥片
019	6.57	6.6	25.4	4.06	4.20	0.57	27.2	6.3	WADATOGE	5,650	014	上	剥片
020	8.18	9.3	30.9	4.32	5.58	0.44	24.1	8.0	WADATOGE	8,950	014	上	剥片
021	5.80	3.7	11.8	3.68	3.22	0.53	17.5	7.5	HOSHIGAT	12,450	014	上	剥片
022	8.43	9.0	30.4	4.54	5.76	0.55	23.3	7.5	WADATOGE	7,950	014	上	剥片
023	5.90	3.9	11.6	3.64	3.24	0.50	17.6	6.5	HOSHIGAT	8,950	014	上	剥片
024	5.95	4.4	12.2	3.37	3.17	0.48	17.2	5.9	HOSHIGAT	7,900	014	上	剥片
025	8.63	9.5	32.1	4.85	5.84	0.56	25.8	7.9	WADATOGE	8,950	014	上	剥片
026	8.87	10.6	32.5	4.61	5.91	0.59	25.5	3.5	WADATOGE	1,850	080	上	剥片
027	5.86	4.0	12.3	3.48	3.23	0.53	17.5	5.0	HOSHIGAT	5,650	080	上	剥片
028	5.81	3.6	11.9	3.45	3.31	0.51	17.6	7.9	HOSHIGAT	13,800	080	上	剥片
029	7.37	7.9	28.5	4.44	4.46	0.60	29.8	6.2	WADATOGE	5,650	080	上	剥片
030	6.06	4.0	12.0	3.67	3.30	0.51	18.8	5.1	HOSHIGAT	5,650	080	上	剥片
031	5.97	4.4	10.9	3.43	3.05	0.48	17.5	6.1	HOSHIGAT	7,900	080	上	剥片
032	6.74	4.1	11.5	3.73	3.12	0.57	18.5	5.1	HOSHIGAT	5,650	080	上	剥片
033	9.98	11.7	32.9	5.78	6.10	0.56	27.3	4.9	WADATOGE	3,250	080	上	剥片
034	8.46	9.7	29.8	5.51	5.66	0.57	24.2	7.9	WADATOGE	8,950	003	上	剥片
035	7.76	10.3	30.7	5.45	5.83	0.50	23.7	7.9	WADATOGE	8,950	015	上	剥片
036	6.32	4.1	12.0	3.95	3.19	0.56	19.2	6.6	HOSHIGAT	9,850	015	上	剥片
037	5.85	4.2	10.9	3.10	2.88	0.47	17.4	6.1	HOSHIGAT	7,900	015	上	剥片
038	7.69	9.4	30.7	4.59	5.56	0.57	24.3	8.7	WADATOGE	10,950	015	上	剥片
039	5.97	4.5	11.8	3.00	3.08	0.46	18.8	5.7	HOSHIGAT	6,950	015	上	剥片
040	6.57	9.0	29.0	4.50	4.59	0.49	27.9	7.8	WADATOGE	8,950	015	上	剥片
041	7.72	8.3	28.6	4.35	5.47	0.49	22.9	7.8	WADATOGE	3,250	G		剥片
042	5.55	3.5	10.4	3.35	3.00	0.44	15.8	6.1	HOSHIGAT	7,900	G		剥片
043	5.57	4.0	18.0	4.09	3.35	0.61	27.8	6.4	OMEGURA	8,950	G		剥片
044	5.43	3.3	10.3	3.24	2.86	0.45	15.7	5.1	HOSHIGAT	5,650	G		剥片
045	5.40	3.4	10.5	3.27	2.97	0.46	16.6	5.0	HOSHIGAT	5,650	G		剥片

第V章 分析成果

No.	Sm	U	Th	Hf	Sc	Fe	La	水和	原産地	年代	遺構	層位	形状
046	3.99	2.8	11.1	3.30	3.09	0.54	11.5	5.9	HOSHIGAT	7,900	G		剥片
047	8.09	8.9	29.3	4.36	5.69	0.55	24.2	7.5	WADATOGE	7,900	G		剥片
048	5.56	3.5	10.8	3.25	3.02	0.49	16.7	6.0	HOSHIGAT	7,900	G		剥片
049	5.25	3.3	9.8	3.23	2.91	0.44	15.7	6.5	HOSHIGAT	8,950	G		剥片
050	7.44	8.0	27.2	3.93	5.17	0.47	23.4	7.9	WADATOGE	8,950	G		剥片
051	11.90	10.4	39.0	6.42	7.08	0.55	27.7	6.4	WADATOGE	5,650	G		剥片
052	9.51	12.9	34.7	5.20	6.56	0.55	25.5	8.7	WADATOGE	10,950	G		剥片
053	7.86	5.6	14.6	4.10	3.70	0.61	21.4	5.8	HOSHIGAT	6,950	G		剥片
054	9.06	10.5	33.6	4.69	6.10	0.65	26.2	6.7	WADATOGE	6,950	G		剥片
055	6.59	4.6	13.1	3.72	3.38	0.54	19.9	5.8	HOSHIGAT	6,950	G		剥片
056	9.84	10.9	32.8	4.86	5.91	0.51	26.4	7.5	WADATOGE	7,900	G		剥片
057	10.40	13.1	36.8	5.78	6.28	0.53	26.4	7.9	WADATOGE	8,950	G		剥片
058	7.55	5.2	13.3	4.08	3.63	0.53	18.8	5.9	HOSHIGAT	7,900	G		剥片
059	9.77	12.5	33.5	4.23	6.14	0.53	26.0	7.8	WADATOGE	8,950	G		剥片
060	6.73	4.3	12.2	3.48	3.27	0.52	18.2	5.7	HOSHIGAT	6,950	G		剥片
061	5.85	4.5	12.6	3.27	3.39	0.58	18.7	4.4	HOSHIGAT	4,300	G		剥片
062	7.35	7.8	25.8	4.91	4.38	0.70	31.2	7.9	WADATOGE	8,950	070	床下	剥片
063	11.10	13.0	36.4	6.21	5.58	0.64	28.7	4.0	WADATOGE	1,850	(072)	下	剥片
064	6.34	4.4	11.9	3.47	3.28	0.51	18.2	5.1	HOSHIGAT	5,650	(072)	下	剥片
065	7.99	9.8	29.8	4.78	5.58	0.55	23.3	3.3	WADATOGE	1,850	(072)	下	剥片
066	8.16	11.1	31.8	5.02	5.60	0.48	25.3	8.7	WADATOGE	10,950	(072)	下	剥片
067	9.28	12.1	33.9	6.02	5.92	0.65	31.0	7.9	WADATOGE	8,950	(072)	下	剥片
068	7.21	6.8	25.0	5.16	4.07	0.76	30.9	6.1	OMEGURA	7,900	G		剥片
069	5.90	4.5	12.5	3.98	3.21	0.51	19.1	4.9	HOSHIGAT	5,650	056	上	剥片
070	7.40	4.2	13.2	4.09	3.70	0.51	19.8	6.1	HOSHIGAT	7,900	056	上	剥片
071	6.56	4.1	12.2	3.72	3.31	0.49	17.3	6.1	HOSHIGAT	7,900	056	上	剥片
072	6.20	4.3	11.6	3.27	3.30	0.46	18.2	4.9	HOSHIGAT	5,650	056	上	剥片
073	8.43	11.5	31.2	5.23	5.61	0.57	26.1	6.3	WADATOGE	5,650	056	上	剥片
074	7.42	4.5	13.4	3.64	3.63	0.45	19.0	5.1	HOSHIGAT	5,650	056	上	剥片
075	9.19	12.7	32.9	4.82	5.07	0.50	25.8	6.3	WADATOGE	6,560	056	上	剥片
076	8.39	9.2	32.7	5.17	5.55	0.67	33.8	7.9	WADATOGE	8,950	056	上	剥片
077	5.80	3.6	11.0	3.29	3.04	0.45	18.2	5.7	HOSHIGAT	6,950	056	上	剥片
078	6.62	4.2	12.6	3.38	3.29	0.54	17.8	2.7	HOSHIGAT	1,850	056	上	剥片
079	6.61	4.4	12.0	3.72	3.34	0.51	20.4	4.9	HOSHIGAT	5,650	056	上	剥片
080	6.17	4.8	12.1	3.52	3.27	0.50	19.9	5.0	HOSHIGAT	5,650	056	上	剥片
081	5.74	3.4	10.5	3.22	3.12	0.50	18.0	5.1	HOSHIGAT	5,650	069	下	剥片
082	6.10	5.5	18.4	4.37	3.39	0.65	31.3	6.2	OMEGURA	8,950	069	下	剥片
083	6.40	4.1	11.6	3.59	3.29	0.55	17.8	5.9	HOSHIGAT	7,950	069	下	剥片
084	6.39	4.4	12.2	3.36	3.27	0.48	18.7	5.8	HOSHIGAT	6,950	069	下	剥片
085	8.66	9.8	31.6	4.78	5.86	0.51	26.8	6.7	WADATOGE	6,950	069	下	剥片
086	9.09	9.2	32.9	4.69	5.13	0.57	26.5	3.3	WADATOGE	1,850	069	下	剥片
087	8.63	10.4	31.1	4.68	5.88	0.53	28.7	4.7	WADATOGE	3,250	069	下	剥片
088	7.97	8.4	29.7	4.69	5.35	0.51	25.9	6.1	WADATOGE	5,650	069	床下	剥片
089	9.04	10.5	32.1	5.01	5.95	0.54	27.9	7.9	WADATOGE	8,950	069	床下	剥片
090	8.00	8.0	29.8	4.71	5.46	0.52	25.9	8.8	WADATOGE	10,950	095	上	剥片
091	7.69	8.6	28.1	4.15	5.29	0.50	28.4	6.7	WADATOGE	6,950	095	上	剥片
092	7.93	8.5	29.6	7.40	5.47	0.51	25.5	3.5	WADATOGE	1,850	095	下	剥片
093	5.85	3.5	11.0	2.96	3.20	0.49	18.7	5.9	HOSHIGAT	7,900	141	下	剥片
094	8.07	9.1	29.9	4.58	5.61	0.49	26.6	6.3	WADATOGE	5,650	141	下	剥片
095	7.94	9.3	29.9	4.32	5.49	0.48	25.7	6.8	WADATOGE	6,950	141	下	剥片
096	8.59	10.0	31.5	4.39	6.02	0.48	26.7	7.9	WADATOGE	8,950	141	下	剥片
097	6.34	6.5	23.3	4.36	4.04	0.61	29.8	6.3	OMEGURA	8,950	141	上	剥片
098	5.93	3.4	11.1	3.42	3.14	0.51	18.2	2.8	HOSHIGAT	1,850	141	上	剥片
099	8.25	9.0	30.2	4.14	5.77	0.54	26.4	4.8	WADATOGE	3,250	141	上	剥片
100	6.43	6.4	23.6	4.29	4.04	0.58	30.7	5.9	OMEGURA	7,900	141	上	剥片
101	8.02	9.1	28.2	5.10	4.90	0.39	28.0	7.4	WADATOGE	7,900	014	3005	鏝
102	5.77	3.6	10.4	3.31	3.00	0.55	17.2	6.7	HOSHIGAT	9,850	046	3015	鏝
103	8.29	10.1	29.6	4.90	5.55	0.49	25.4	8.3	WADATOGE	9,850	050	3024	鏝
104	5.82	3.8	10.1	3.28	2.94	0.44	16.1	4.7	HOSHIGAT	4,900	155	3115	鏝
105	8.61	10.1	31.2	4.68	5.62	0.53	26.3	7.4	WADATOGE	7,900	200	3135	鏝
106	5.69	3.2	10.9	3.60	3.01	0.50	17.5	5.0	HOSHIGAT	5,600	080	3079	鏝
107	8.43	7.8	31.0	5.13	5.61	0.41	24.6	8.3	WADATOGE	9,800	014	3006	鏝
108	5.77	3.9	11.3	3.41	2.96	0.42	18.3	4.9	HOSHIGAT	5,650	063	3051	鏝
109	5.26	3.1	9.6	3.08	2.91	0.50	17.2	5.9	HOSHIGAT	7,900	067	3052	鏝
110	5.72	4.2	10.8	3.31	3.02	0.59	18.0	5.9	HOSHIGAT	7,900	056	3032	鏝
111	8.03	9.1	30.1	4.94	5.44	0.49	24.1	4.0	WADATOGE	1,850	(072)	3163	鏝
112	8.16	10.3	30.2	5.00	5.48	0.60	24.8	6.3	WADATOGE	5,650	B-7G	3184	鏝
113	7.05	2.3	13.0	3.11	3.37	0.54	18.9	5.1	HOSHIGAT	5,650	158	下	剥片
114	5.77	3.3	10.4	3.30	2.94	0.53	18.9	5.1	HOSHIGAT	5,650	158	下	剥片
115	8.82	7.9	30.3	3.23	5.60	0.50	26.7	7.1	WADATOGE	6,950	158	下	剥片
116	7.18	5.5	23.6	4.66	3.96	0.71	31.2	6.2	OMEGURA	8,950	158	下	剥片
117	8.49	7.9	29.9	4.68	5.64	0.68	26.9	7.1	WADATOGE	6,950	158	下	剥片
118	4.46	4.3	15.6	2.72	3.04	0.29	13.1	5.2	HOSHIGAT	5,650	160	下	剥片
119	9.01	8.6	32.5	3.93	5.70	0.53	25.0	7.9	WADATOGE	8,950	160	下	剥片
120	9.45	8.4	32.6	5.85	5.74	0.55	30.0	7.9	WADATOGE	8,950	160	下	剥片
121	9.19	8.7	31.9	4.80	6.09	0.46	27.1	6.9	WADATOGE	6,950	160	下	剥片

G : グリッド 層位中の斜体字は遺物番号

2 群馬県から出土した弥生時代青銅器の自然科学的研究

—群馬県高崎市新保遺跡出土の巴形銅器、甘楽郡甘楽町天引狐崎遺跡出土の銅釧、
渋川市有馬遺跡出土の銅鏃・銅釧に関して—

平尾良光・榎本淳子（東京国立文化財研究所保存科学部化学研究室）

A はじめに

（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団の坂井隆氏から、同県高崎市新保遺跡出土の巴形銅器片1点、甘楽郡甘楽町天引狐崎遺跡出土銅釧片1点、渋川市有馬遺跡出土銅鏃1点および銅釧の4個体が錆で繋がった1資料、計4点について、自然科学的手法による調査の依頼があった。本調査は当研究室における「弥生時代青銅器の自然科学的研究」の一環として、十分に研究協力する価値があった。自然科学的な方法として、これら銅製資料の化学組成を測定すること、および材料となった青銅の産地を推定することを試みた。これらの結果を今までに測定された資料に関する結果と比較して、本資料の共通性や特殊性を理解しようとした。そして北関東地域に広がった弥生時代青銅器に関して自然科学的な情報を加えることにより、考古学的な意義の解明をより一歩進めることを試みた。

B 分析法

銅製資料の化学組成の測定には蛍光X線分析法を利用した。これは資料の一部を採取せずにそのままを機器のなかに置き、X線を当てるだけで分析できるからである〔文献1〕。

青銅生産地の推定には鉛同位体比法を利用した。この方法のためには資料に含まれている鉛の同位体比を測定する必要がある。この測定のために同位体比を非常に正確に測定できる表面電離型質量分析計を利用することとした。資料に発生している錆を微量ではあるが採取して、鉛を化学的に分離し、同位体比を測定した〔文献2〕。

B・1 蛍光X線分析法

B.1.1] 化学組成は資料の材質を意味する。たとえば一般的な金属の場合、金色に輝いていても金であるのか、真鍮（銅と亜鉛の合金）でできているのかで、考古学的な意義は大きく異なる。銀色に輝いていても銀であるのか、青銅あるいは鉄であるのかで考察内容は異なる。銅の合金である青銅はスズ濃度が低ければ（スズが約5%程度）いわゆる銅色をしており、銅に近い強度を示す。スズ濃度が15～20%では金色に近く、強靱な金属となる。さらにスズ濃度が25～35%ともなると銀白色の金属光沢を示し、強度もステンレス鋼より硬くなるが、半面もろさ（割れやすさ）も出てくる。

古代においてどのような性格の金属がなぜ利用され、それぞれの合金がどのような目的で利用されていたかは考古学における技術の流れを明らかにする上で重要である。また、古代金属は金属精錬の方法が現代とは異なり、不純物として幾つかの元素が含まれていることが多い。特別な元素が含まれている場合などには金属の原料となった鉱石を産出した場所あるいは精錬場所（技術）の特徴を示す可能性がある。それ故、資料に含まれる主要および微量の元素組成は金属の性質の違いあるいは歴史的な意義を示すので、文化財資料の自然科学的な調査にとって最も基本的な要素の一つである。

第V章 分析成果

B.1.2] 化学組成の測定には資料を非破壊で分析できる蛍光X線分析法を用いた〔文献1〕。蛍光X線法による化学組成の測定はフィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置PW1404LSで行なった。機器の使用条件はスカンジウム管球を用い、60kV・50mAで一次X線を発生させて資料に照射した。資料から発生する二次X線は元素毎に波長が異なるため、フッ化リチウムの結晶でX線を角度毎に分散させ、シンチレーションカウンターおよびガスフローカウンターで分散角度におけるX線強度を測定した。この方法では元素の種類にも依存するが、通常の方法で0.1%濃度程度までの元素組成が測定できる。本測定では放出されるX線の角度が 2θ 値で10度から60度までを約25分かけて走査した。その後、スペクトル図を書き出し、自動検索・定量システムによる元素判定および濃度の半定量を行なった。

B・2 質量分析法

B.2.1] 鉛同位体比法による青銅原料の産地推定

産地推定のために鉛同位体比法を利用した〔文献3〕。一般的に鉛の同位体比は鉛鉱山の岩体が違えばそれぞれの鉱山毎に異なった値となることが知られており、産地によって特徴的な値を示すということが今までの研究でわかっている。そこで、鉛鉱山の違いが鉛同位体比に現れるならば、文化財資料に含まれる鉛の同位体比の違いは材料の産地を示すと考えられる。弥生時代の青銅器には鉛が主成分として5~20%含まれている。これは鉱山から産出された鉛を加えたと理解できるので、まさに鉛鉱山の歴史を含んだ鉛ということができる。一方鉛同位体比の測定に用いられる鉛量は測定器（質量分析計）の感度が非常に良いため、1マイクログラム（1gの百万分の1）があれば十分である。試料となる鉛は青銅の金属部分でも鍍部分でも、その同位体比は変わらないと示されているので、資料からは鍍の微量を採取するだけで十分である。それ故考古学的資料をほとんど損なうこと無く測定が出来るので、この方法を本資料の原料産地の推定に利用した。資料から鍍の一部を採取し、鉛を化学的に分離し、表面電離型質量分析計で同位体比を測定した〔文献2〕。

B.2.2] 鉛同位体比の測定

資料から採取した微量（約5mg）の鍍を鉛同位体比測定用の試料とした。鍍試料を石英製のピーカーに入れ、硝酸を加えて加熱、溶解した。この溶液を白金電極を用いて2Vで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解して回収した。0.4 μ gの鉛をリン酸-シリカゲル法で、レニウムフィラメント上に載せ、VG社製の全自動表面電離型質量分析計Sector-Jに装着した。分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を1200℃に設定して鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した標準鉛NBS-SRM-981で規格化し、測定値とした〔文献2〕。

C 資料の記載

- ・群馬県高崎市新保遺跡から出土した巴形銅器片が1点。これは写真1と2で示される。巴形銅器の羽の部分だけである。この部分がペンダントか何かに再利用されたと推定される。
- ・群馬県甘楽郡甘楽町天引狐崎遺跡から出土した銅釧片が1点。写真5と6で示される。全体像はわからないが、裏・表がはっきりしている。わりあいに細いが丸い感じが残る。
- ・群馬県渋川市有馬遺跡から出土した銅鏃が1点と銅釧が4個体。銅鏃はふつうの形、大きさと厚い感じである。鍍びてはいるが80%以上残存している。銅釧は4個の環が鍍で重なった状態で出土し、そのまま現状

となっている。写真9と10および13で示される。4つの釧は幅広で薄く、かなり良く似た作りである。

これら写真の中に示されるように、資料の○印で示される部分に関して、蛍光X線分析を行ない、□印で示される部分の鏽を採取して鉛同位体比を測定した。

D 結果

D・1 蛍光X線分析

D.1.1] 蛍光X線分析の結果

蛍光X線分析法では、測定部表面から約10マイクロメートルまでの深さの化学元素組成に関する情報が得られる。それ故、表面に鏽などがあればその影響を受けやすく、化学組成は必ずしも本体金属部分を反映しない場合がある。そこで定性的な結果を次にまとめた。

資料の測定部分を写真3・4、7・8、11・12、14・15で示し、測定された蛍光X線スペクトル図を図1、2、3、4のa、bで示した。図の横軸は資料から発生したX線が波長の違いによって分散された角度であり、縦軸はX線の強度、即ち元素の量である。資料中の元素から放出されたX線は元素毎に異なった角度に分散されるので、特定の波長は特定の元素を意味する。それ故、スペクトル図に現れたピークはその位置（角度）が元素を意味し、縦軸の高さが元素の量である。図のaは全体の様子であり、図のbは縦軸を拡大し、小さなピークを見ることができるようにしてある。

D.1.2] 蛍光X線分析の所見

各資料についての所見は以下のとおりである。

巴形銅器片：主成分は銅、スズ、鉛であり、少量の鉄のほか、微量のアンチモン、銀、ヒ素を含んでいる。

銅 釧 片：主成分はスズ、銅、鉛であり、微量の銀、ヒ素、鉄を含んでいる。

銅 鏝：主成分は銅、スズ、鉛であり、少量の鉄のほか、微量のアンチモン、銀、ヒ素を含んでいる。

銅 釧：主成分は銅、スズ、鉛であり、微量のアンチモン、銀、ヒ素、鉄を含んでいる。なお、他の3つの釧もほとんど変わらないため、スペクトル図および説明を省略した。

これら各元素のX線強度を表2でまとめた。測定結果からこれらの銅製品の主成分は銅、スズ、鉛であると判断される。合金組成からすると弥生時代に用いられた青銅として矛盾はない。どの資料も見かけ上、スズが大きく見えるが、これは風化の進行で銅が選択的に溶出し、スズが残った結果と推定される。色が灰色で普通の青銅器と違って見えるのはスズが多いためであろう。同様な状態の鏽を持つ弥生時代の資料も多く、鏽の上からの表面分析のみで化学組成を定量的に判断することは難しい。鉛のピークははっきりしているので、主成分の一つである。それ故、鉛同位体比分析には十分の鉛が含まれていることがわかったので、鏽の一部分を少量採取し、鉛同位体比分析に供した。いずれの資料も鉄を少量含んでいる。鉄は埋蔵環境から流入して増加する可能性が大きい元素であり、製作当初の情報をそのまま反映しているかどうか問題がある。それ故、今回は測定されたことを指摘するだけとする。銀は古代青銅製品に銅に付随する不純物元素の一つとして微量に含まれてくる成分で、一般的に見られることが多い。アンチモンはときどき含まれることがある元素である。これは鉱山の違いを意味するかも知れないし、精錬過程の違いを意味するかも知れない。古代青銅中に含まれるこれらの微量元素を注目しておくとならば何らかの指標となるかも知れない。今回の試料では巴形銅器片・銅鏝・銅釧（有馬遺跡）にはアンチモンが微量含まれ、天引狐崎遺跡の銅釧片には含まれてい

なかった。材料産地の違いを示している可能性がある。

D・2 鉛同位体比の分析

D.2.1] 鉛同位体比の測定結果

測定された鉛同位体比の値を表3で示した。試料中には鉛量が十分あり、鉛の化学分離・同位体比測定を十分に行うことができた。これらの値を今までに得られている資料の値と比較して、原料産地を推定するために鉛同位体比の図で示した。

図5は縦軸が $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ の値、横軸が $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ の値である。この図を仮にA式図と呼ぶこととする。この図で鉛同位体比に関して今までに得られている結果を模式的に表わし、今回の結果をこのなかにプロットした〔文献4～7〕。東アジア地域においてAは中国前漢鏡が主として分布する領域であり、後の結果からすると華北産の鉛である。Bは中国後漢鏡および三国時代の銅鏡が分布する領域であり、華南産の鉛と推定される。Cは現代の日本産の大部分の主要鉛鉱石が入る領域である。Dは朝鮮半島南部産の多鈕細文鏡と細形銅剣が分布するラインを示すことが判っている。また“a”は弥生時代の後期銅鐸が集中する特別な鉛を意味する領域である。この図の中に、本測定で得られた各資料の値を「●」で示した。

鉛の同位体比にはもう一つの表現の方法があるので、図6で表わした。この図では縦軸が $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値、横軸が $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値である。この図をB式図と呼ぶこととする。この図の中で、A' B' C' D'はA式図に準じて中国華北、華南、日本、朝鮮半島産の鉛領域を表わす。各試料の値を「●」で図中に表した。それぞれの点はA式図と同様な位置関係に分布した。

今までの測定で青銅材料あるいは製品の産地は次のように大まかに分類される。即ち、弥生時代の前期後半から出現する初期の青銅製品はDおよびD'で示される領域に位置する。即ち、朝鮮半島産であるか、あるいは朝鮮半島産の材料を利用して日本で製造された。その後、AおよびA'領域で示されるかなり広い範囲すなわち中国華北の複数の産地と思われる材料で作られた青銅が利用されるようになる。弥生時代後期後半には華北の中でも一カ所と推定される材料、即ちa領域で示される範囲が変わる。弥生時代の資料は銅鏡以外でB領域に含まれることは極めて少ない。

D.2.2] 鉛同位体比分析の所見

今回測定された資料が示す鉛同位体比の値が持つ意義について、考察する。

- 1) 新保遺跡から出土した巴型銅器片は見かけ上A式図でも、B式図でも、A領域とB領域の間に位置した。これは今までに測定した弥生時代の試料、約2000の中でほとんど見かけない位置である。それでもこのようなAとB領域の中間に位置する試料として今までに2例ある。その一つは大分県の別府遺跡の朝鮮式小銅鐸〔文献8〕である。もう一つは福岡県出土の銅釧〔文献9のNo.175〕である。両方の位置は必ずしも一致せず、お互い独立であると推定される。かえって図7で示されるように、福岡県出土の銅釧が今回測定された巴型銅器片に良く一致している。この位置に来る試料は注意しなければならないが、別府遺跡の資料に関してはこのような鉛同位体比の値を持つ材料を推定しなければならないとも判断される。

今回の巴型銅器片と福岡県の銅釧とは3種類の考え方ができる。即ち、その一つはこのような材料を示す鉛鉱山があった。二つ目はA領域の材料（華北産の鉛：弥生時代後期の材料）とB領域の材料（華南産の鉛：例えば銅鏡材料）とが混じった。第三にA領域の材料とD領域の材料（朝鮮

半島産の鉛：例えば弥生時代前期末からの材料)が混じったことが挙げられる。今のところ、どの可能性が高いかは判断し兼ねるが、これからの問題として、混合の可能性を注意しなければならないだろう。

巴型銅器は過去に1点鉛同位体比を測定してある。これは図7の中で、大分県雄城台遺跡出土の巴型銅器〔文献10〕と示されている。これは“a”領域に近いところに位置している。それ故、後期銅鐸と似た材料と言える。雄城台遺跡出土の巴型銅器は巴型銅器の中での編年ではかなり古い形式と判断されており、より新しい系統と考えられる群馬県出土のこの巴型銅器とどのような関係があるのかこれからの判断としたい。雄城台遺跡から出土した巴型銅器の化学組成は図8で示される蛍光X線スペクトルとなった。即ち、今回測定した巴型銅器資料と化学組成はほとんど一致していると判断できる。

- 2) 天引狐崎遺跡から出土した銅釧片はA式図でもB式図でも朝鮮半島産の材料領域に含まれることが示された。蛍光X線法による材料の化学組成からは他の資料とはそれほど大きく異なっているとも思えないが、アンチモンが見えないこと、スズが非常に多いことは特徴的である。これは鑄化のときに、銅が流出し、スズが残る環境だったかも知れない。この資料が朝鮮半島産の材料を利用していることは資料の年代が問題となる。即ち、朝鮮半島産の材料は弥生時代前期後半から中期初頭と理解されている。

しかしながら、この遺跡の年代は弥生時代後期と推定されているので、なぜこのような資料がここにあるのかを説明しなければならない。例えば、流通経路をどのように考えるか、あるいは伝世などの経緯をどのように想定するかということが必要となってくる。つまりこの資料にとって最も矛盾なく説明できる理由を見つけることが今後の問題である。

少なくとも弥生時代後期の遺跡から朝鮮半島産の材料で作られた資料が出現したのは関東地方で初めてである。類例とすると東海地方の浜松市の伊場遺跡から出土した釣針がある〔文献11〕。伊場遺跡は弥生時代後期の遺跡と推定されており、出土した釣針は朝鮮半島産の鉛同位体比を示した。今回の例と類似である。それ故、類例がないわけではないが、今後、考慮しなければならない資料である。

- 3) 有馬遺跡から出土した銅鏃はAおよびA'領域、それもa領域にはほぼ含まれる所に位置した。“a”領域は近畿・三遠式銅鐸、小銅鐸、広形銅矛などが集中する“規格化された材料”と推定される。それ故この銅鏃資料は典型的な弥生時代後期後半の材料を用いた資料である。有馬遺跡が弥生時代後期の年代を示すということから、当時作られた資料であると理解できる。
- 4) 有馬遺跡から出土した4個の銅釧はAおよびA'領域に含まれ、a領域の近くに位置した。この資料は発掘当初から4個の釧が鑄で連結しており、そのままになっている。製作技法は4個ともほとんど同じと見ることができる。それ故、材料と製造が同一であるかどうか確かめてみる必要があった。そこで、4個の資料から鑄を独立に採取し、鉛同位体比を測定したわけであるが、結果として、4個の銅釧は同一材料で作られていた。弥生時代後期後半の材料と同一であることは時代設定においても問題のないことが分った。それ故、これら4個の銅釧が同一時期に製作された可能性は極めて高い。

第V章 分析成果

引用文献

- (1) 平尾良光、榎本淳子：銅製品の科学的研究；『斑鳩 藤ノ木古墳 第二・第三次調査報告書』“分析と技術篇” 27-39(1995)／奈良県橿原考古学研究所
- (2) 平尾良光、馬淵久夫：表面電離型固体質量分析計 VG-Sector の規格化について；保存科学 28,17-24(1989)
- (3) 平尾良光：古代日本の青銅器；M. A. C.サイエンス 4, 22-33(1990)／Material Analysis Company
- (4) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究；MUSEUM No.370, 4-10(1982a)
- (5) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比から見た銅鐸の原料；考古学雑誌 68,42(1982b)
- (6) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究(二)；MUSEUM No.382,16-26(1983)
- (7) 馬淵久夫、平尾良光：東アジア鉛鉱石の鉛同位体比—青銅器との関連を中心に—；考古学雑誌 73,199-210(1987)
- (8) 別府遺跡の朝鮮式小銅鐸は1983年に報告されているが、質量分析計が変わったので、本資料と同一の機器で測定した値の方が比較しやすいと考え、1995年に再測定した。今回は再測定値を用いて考察した。
馬淵久夫、平尾良光：宇佐市別府出土朝鮮式小銅鐸の鉛同位体比；古文化談叢12, 153-157 (1983)
- (9) 馬淵久夫、平尾良光：福岡県出土青銅器の鉛同位体比；考古学雑誌75, 385-404 (1990)
- (10) 鈴木浩子：鉛同位体比法による弥生時代青銅器の産地推定；東京学芸大学情報環境科学課程 文化財科学専攻 卒業論文 (1995)
- (11) 平尾良光、馬淵久夫：「東海地方で出土した弥生時代および古墳時代青銅器の科学的調査」；『都田地区発掘調査報告書(下巻)』浜松市・浜松市教育委員会・(財)浜松市文化協会編 590-620(1990)

表1 本研究に提供された資料の記載

資料1 (東文研受入番号95011-A)

資料名	巴形銅器片1点
遺跡名	新保遺跡
遺跡所在地	群馬県高崎市
発掘地点	169号住居関連2号遺物集積
資料の特徴	巴形銅器の一部分の羽あるいは突起のみ。端に穴が2個所空けてあり、ペンダントなどに利用した可能性がある。薄く平らであることから巴形銅器の中でもふつうに見られる形であり、それほど大きなものではない。
推定年代	弥生時代後期；土器の形式から
参考文献	『新保遺跡Ⅱ 弥生・古墳時代集落編』群馬県教育委員会(1988)

資料2 (東文研受入番号95011-C)

資料名	銅釧片1点
遺跡名	天引狐崎遺跡
遺跡所在地	群馬県甘楽郡甘楽町天引
発掘地点	112号遺構(竪穴住居)
資料の特徴	釧と推定される銅片。小さな断片であるため、細かい所は分からない。細いが割合に丸い感じ。
推定年代	弥生時代後期；土器の形式から
参考文献	本書

資料3 (東文研受入番号95011-B、95011-D)

資料名	銅鏃1点と銅釧4個体
遺跡名	有馬遺跡
遺跡所在地	群馬県渋川市
発掘地点	7号墓
資料の特徴	銅鏃：見かけ上、ふつうの銅鏃である。特別な形ではない。ただかなり腐食が進んでいるので、細部は失われている。 釧：4つの個体が錆びてつながっている。幅広で薄い。4個体ともほとんどよく似た作りである。同一場所・同一時期の製作と推定されるが、材料面から特別な特徴が示されれば、考古学的に重要なこととなるかも知れない。
推定年代	弥生時代後期；土器の形式から
参考文献	『有馬遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団(1990)

表2 本資料に関して蛍光X線分析法で測定された元素のX線強度比 ※1

資料名 (FL※2)	アンチモン (13.5)	スズ (14.0)	銀 (16.0)	鉛※3 (28.3)	ヒ素※3 (角度※4) (34.0)	水銀 (35.9)	金 (36.9)	亜鉛 (41.8)	銅 (45.0)	ニッケル (48.7)	鉄 (57.5)	銅強度 (cps※5)
新保 巴形銅器片 (FL425)	+	170	1.7	15	+	-	-	-	100	+	4.2	3300
天引 銅釧 (FL427)	-	1500	24	110	+	-	-	-	100	-	+	420
有馬 銅鏃 (FL426)	+	69	3.3	22	2.2	-	-	-	100	-	9.6	4500
有馬 銅釧 (FL624)	2	36	1.7	25	2	-	-	-	100	-	2	5300
参考資料— 大分市雄城台遺跡出土 巴形銅器 (FL340)	+	390	4.4	32	10	-	-	-	100	-	3.8	1600

※1) 数値は角度45.0度における銅のX線強度を100としたときの各元素の強度比

※2) FLは当研究室の蛍光X線測定番号

※3) 鉛のピークはスズの影響を、ヒ素のピークは鉛の影響を補正した値

※4) 2θで表わされた各元素の励起X線の位置

※5) cps: 1秒間に測定されたX線の数(放射線数/秒)

表3 測定された資料の鉛同位体比

資料名 (CP番号)	$\frac{206\text{Pb}}{204\text{Pb}}$	$\frac{207\text{Pb}}{204\text{Pb}}$	$\frac{208\text{Pb}}{204\text{Pb}}$	$\frac{207\text{Pb}}{206\text{Pb}}$	$\frac{208\text{Pb}}{206\text{Pb}}$
新保 巴形銅器片(CP830)	17.929	15.578	38.492	0.8689	2.1470
天引狐崎 銅 釧(CP831)	18.873	15.721	39.441	0.8330	2.0898
有馬銅鏃(CP829)	17.758	15.552	38.422	0.8758	2.1637
有馬銅釧4-1(CP825)	17.758	15.566	38.468	0.8766	2.1663
有馬銅釧4-2(CP826)	17.750	15.556	38.426	0.8764	2.1649
有馬銅釧4-3(CP827)	17.746	15.542	38.397	0.8758	2.1637
有馬銅釧4-4(CP828)	17.768	15.558	38.438	0.8756	2.1633
誤差範囲	±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006
*1 参考資料 大分県雄城台遺跡 出土巴型銅器	17.758	15.550	38.427	0.8757	2.1640
*2 参考資料 大分県別府遺跡 出土朝鮮式小銅鐸	17.897	15.583	38.357	0.8707	2.1432

*1: 参考資料は未発表; 当研究室から大分県教育委員会(小林氏)へ報告済

*2: 参考資料は未発表[文献9]; 同一資料は[文献8]で示されている。

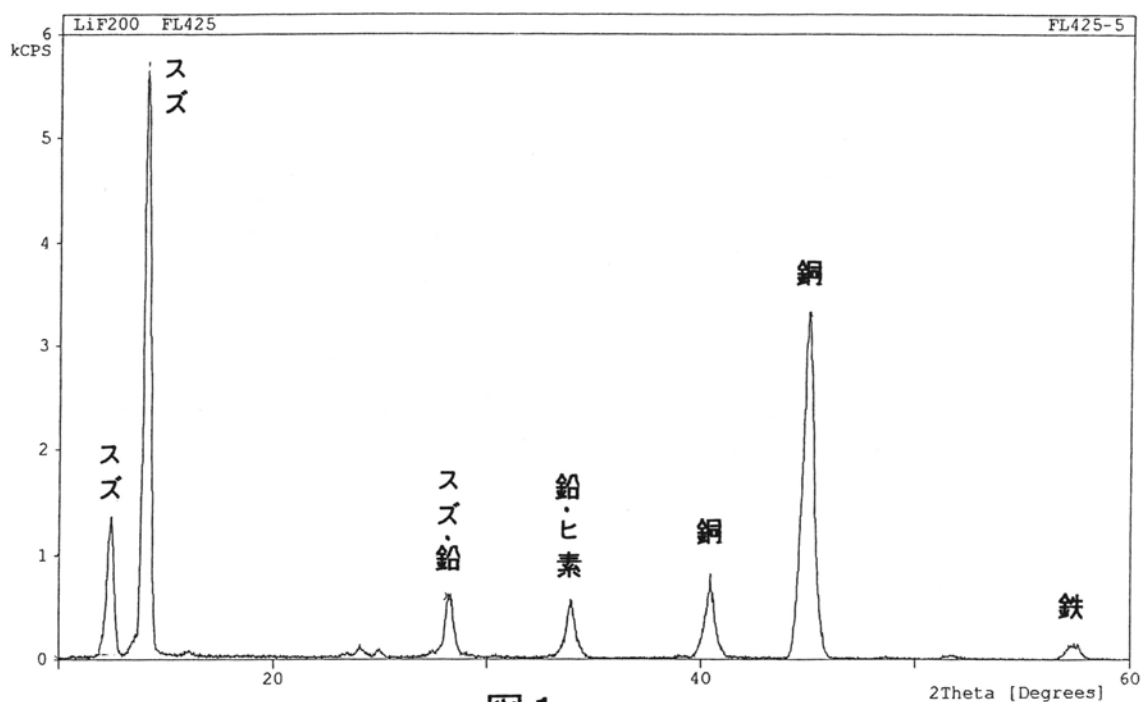


図1 - a

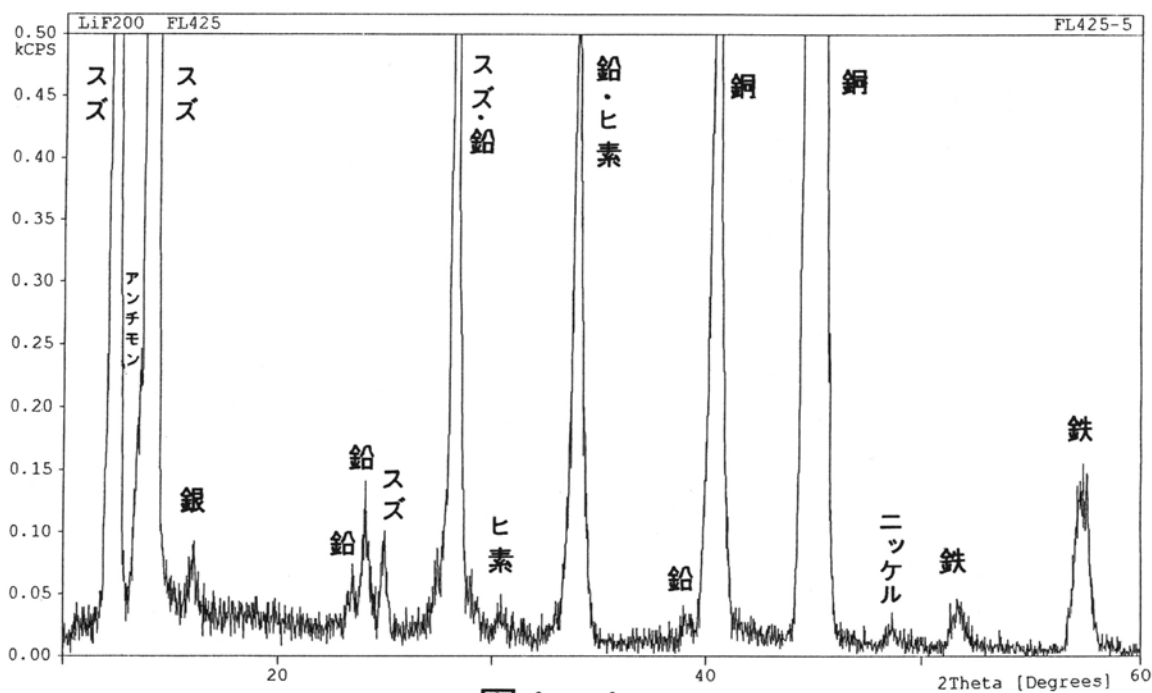


図1 - b

図1 新保遺跡出土巴形銅器片の蛍光X線スペクトル図

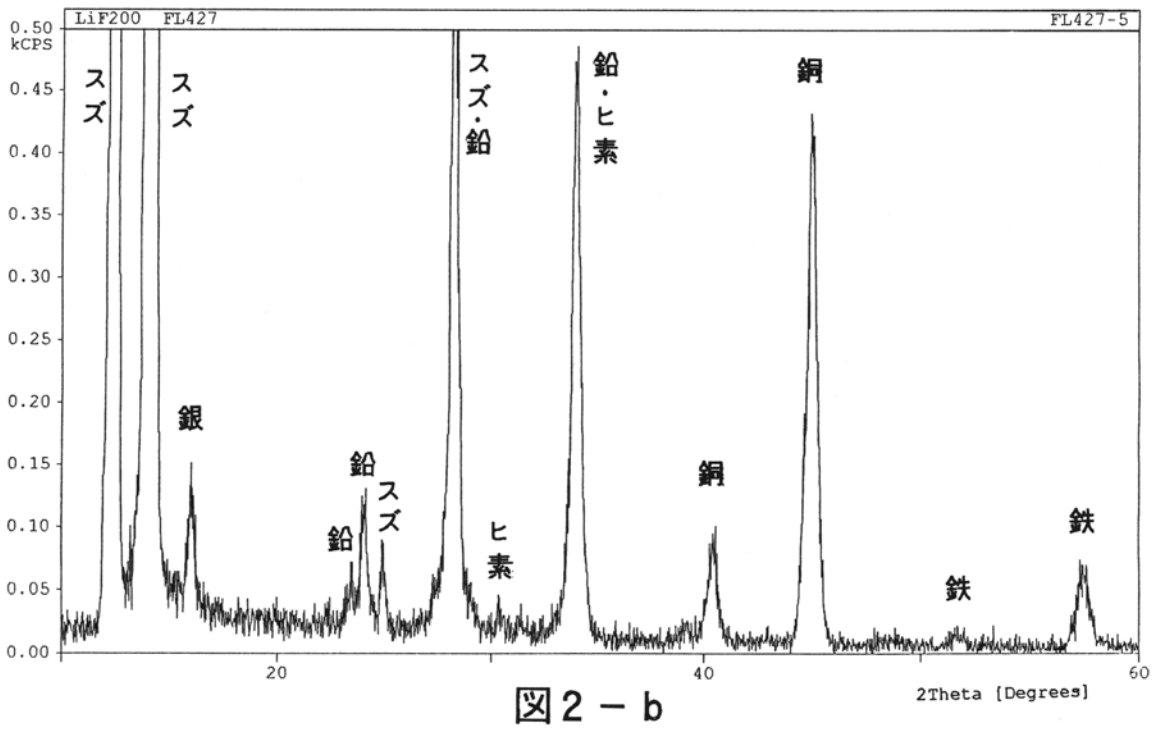
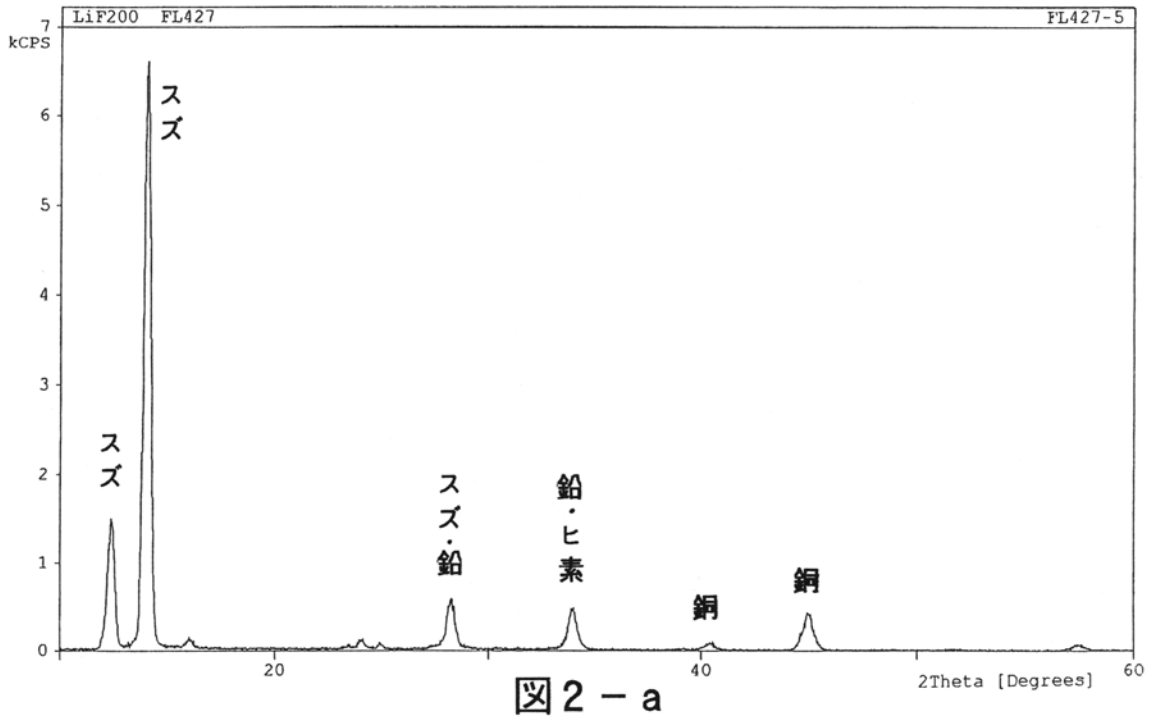


図2 天引狐崎遺跡出土銅釧片の蛍光X線スペクトル図

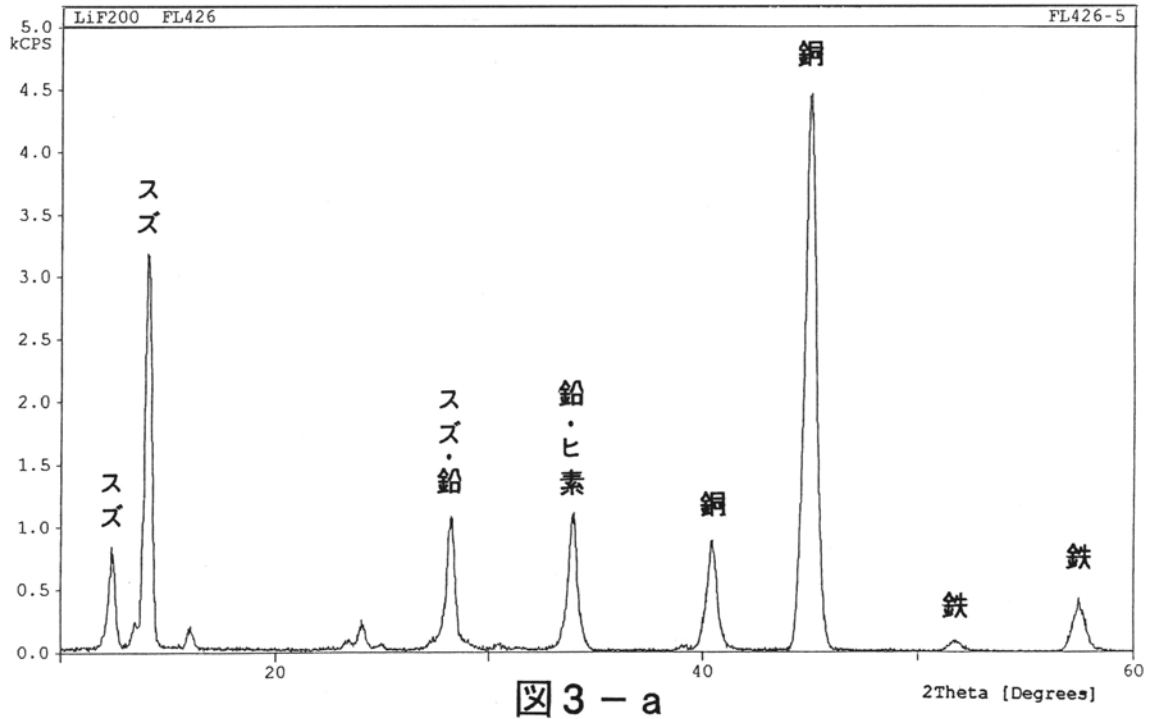


図 3 - a

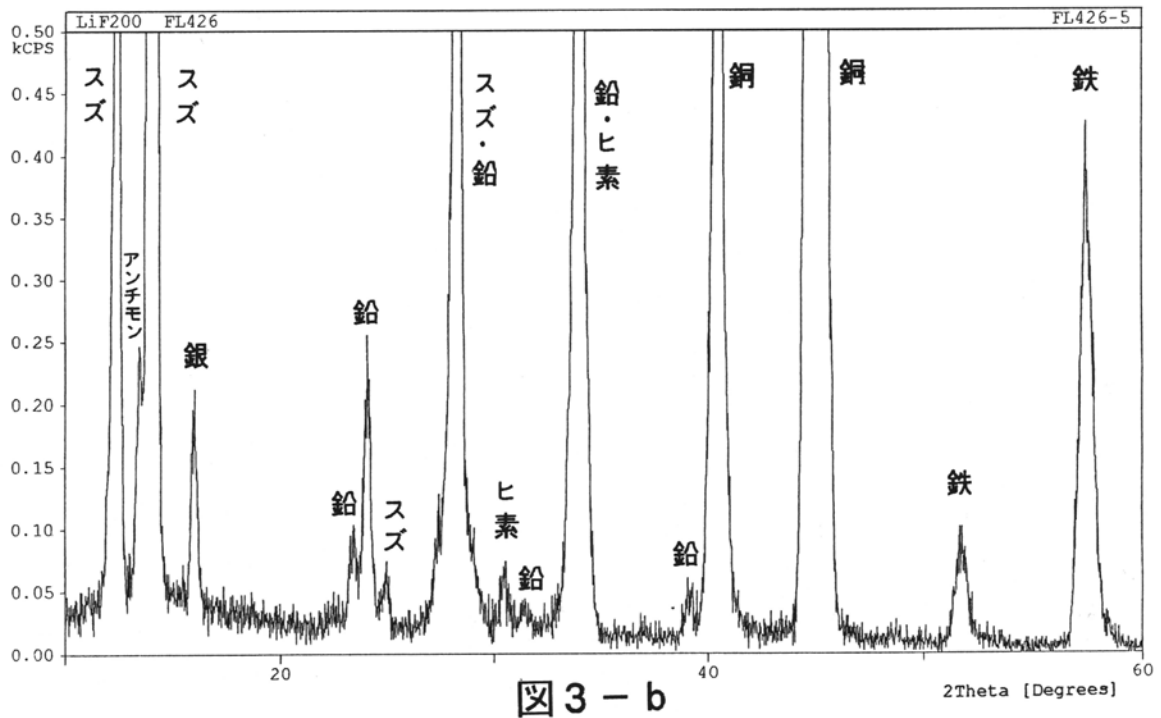


図 3 - b

図 3 有馬遺跡出土銅鍍の蛍光X線スペクトル図